静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第176集

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市－1

2007

中日本高速道路株式会社 横浜支社

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第176集

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市－1

２００７

中日本高速道路株式会社 横浜支社

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

第二東名高速道路は約170kmにわたって静岡県内を東西につらぬく形で建設が予定されている。本書は、その建設に伴い実施された、静岡市葵区小瀬戸・飯間に所在する小瀬戸遺跡と栗ヶ沢遺跡の発掘調査報告書である。

静岡市域では、周知の遺跡である内牧城跡や庵原城跡においても第二東名高速道路建設に伴う発掘調査が行われ、別に報告がなされる予定である。本書で報告されている小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡は、今回の調査で新たに発見された縄文時代～中世の遺跡である。静岡市域の中でも、藁科川中流域の遺跡は、そのほとんどが土器片の出土が報じられているにすぎず、本格的な発掘調査により遺跡の内容が明確となったのは、この小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡が初めてである。

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡が所在する藁科川中流域は、沖積地においては藁科川とその支流による堆積物が厚く、遺跡のあり方が判然としない地域であった。また、丘陵部においては縄文時代の遺跡が散在する地域でもある。このような、遺跡を明確に把握し難い要素を含む地域における調査成果は、今後の調査・研究の進展につながる資料を提供したことになるだろう。山間部の道を介して志太平野や川根地域との交通もできる場所ということもあり、静岡市域のみならず、周辺地域との関わりのなかで今回の調査の成果が活かされることを期待するものである。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたって、中日本高速道路株式会社横浜支社、静岡市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げる。最後に、現地調査、資料整理に関わった調査研究員、作業員諸氏にも感謝の意を表する次第である。

平成19年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　齋　藤　　忠

例　言

1．本書は、静岡市葵区域における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総論と、静岡県静岡市葵区小瀬戸に所在する小瀬戸遺跡及び同小瀬戸・飯間に所在する栗ヶ沢遺跡の発掘調査報告書である。

2．第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位で実施している。静岡市域では本書が第１冊目であるため「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　静岡市－１」とした。

3．調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、静岡市教育委員会社会教育課（現静岡市文化スポーツ部文化財課）の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4．現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第１章に明記した。

⑴　小瀬戸遺跡

確認調査：平成11年４月～７月　青木　修

本 調 査：平成14年２月～平成16年３月　川上　努、大畑　要、三井文洋、増田充弘

資料整理・報告書作成：平成16年４月～平成17年３月　川上　努

平成17年４月～平成18年３月　河合　修、鈴木淑子（７月～）

平成18年４月～平成19年３月　河合　修、鈴木淑子

⑵　栗ヶ沢遺跡

確認調査：平成13年５月～８月　大畑　要、大林　元

平成14年11月～12月　川上　努

本 調 査：平成13年４月～12月　大畑　要、大林　元

資料整理・報告書作成：平成16年４月～平成17年３月　川上　努

平成17年４月～平成18年３月　河合　修、鈴木淑子（７月～）

平成18年４月～平成19年３月　河合　修、鈴木淑子

5．本書の執筆は第１章第１節を及川　司が、第２章第４節、第５節２・４・６・８・10、第４章１・２を澁谷昌彦が、第１章第１節２の一部（古墳時代）、第２章第５節11の一部（銭貨、石器・石製品）を鈴木淑子が、他を河合が行った。

6．調査における協力者等は、文末に記載した。

7．国産陶器については井上喜久男氏（愛知県陶磁資料館）、藤沢良祐氏（愛知学院大学）に、貿易陶磁については小野正敏氏（国立歴史民俗博物館）に指導いただいた。

8．現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。

9．本書で使用した遺物写真図版は、すべて当研究所写真室が撮影した。

10．脆弱遺物の取り上げ及び保存処理、木製品の樹種同定は、当研究所保存処理室が実施した。

11．調査の概要は、当研究所の出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

12．本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

13．発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1．座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2．本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

例）SF16（SF：遺構の種別　16：遺跡内の遺構種類別通し番号）

SB：竪穴住居跡　　SH：掘立柱建物跡　　SD：溝状遺構　　SF：土坑

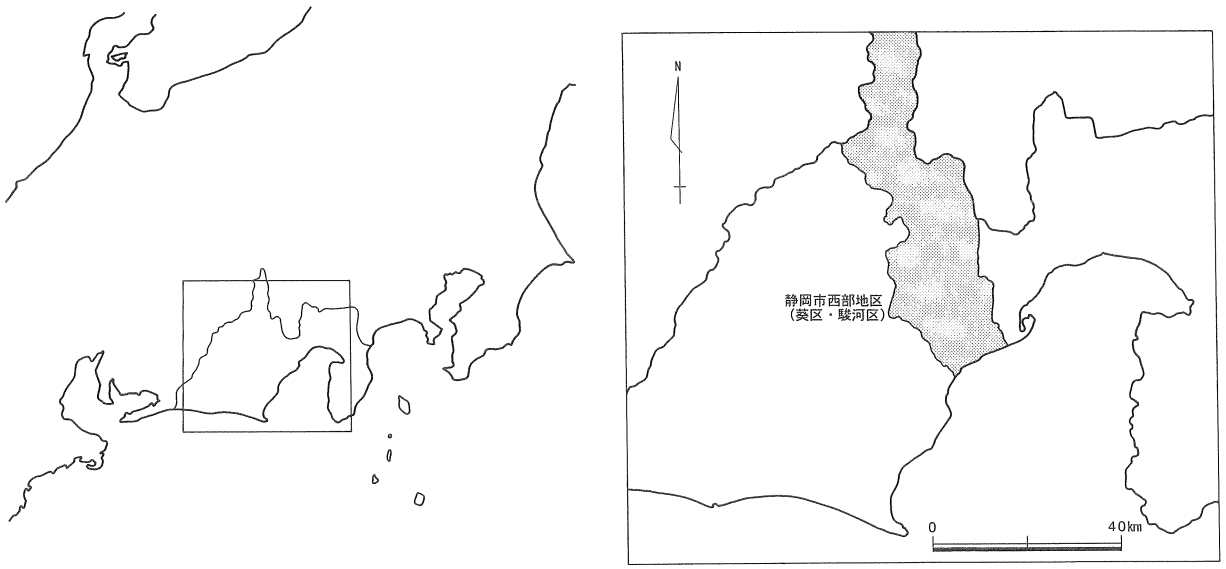
SP：SB外の小穴　　P：SB内のピット

3．遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。

4．遺物番号は、種類ごとに通し番号を付している。

5．本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1992）を使用した。

6．本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。



目　次

序／例言／凡例／目次

第１章　総　論 …… 1
第１節　静岡市西部地区の位置と環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　歴史的環境 …… 2
第２節　調査に至る経緯 …… 9
第３節　確認調査 …… 11
1　調査の体制 …… 11
2　確認調査の方法と経過 …… 11
3　各地点の概要 …… 13
第４節　本調査 …… 18
1　本調査の方法と経過 …… 18
2　本調査の概要 …… 18
第５節　資料整理 …… 19
1　資料整理の体制 …… 19
2　資料整理の方法と経過 …… 20

第２章　小瀬戸遺跡　（第二東名No.73－３地点） …… 21
第１節　位置と環境 …… 21
1　位置と地理的環境 …… 21
2　歴史的環境と調査歴 …… 21
第２節　調査の方法と経過 …… 22
1　発掘調査の方法 …… 22
2　発掘調査の経過 …… 23
3　資料整理の方法と経過 …… 25
第３節　概　要 …… 25
1　地　形 …… 25
2　土　層 …… 25
3　遺構・遺物の概要 …… 27
第４節　下層遺構と出土遺物 …… 27
1　下層遺構 …… 29
2　下層遺構出土の遺物 …… 49
第５節　上層遺構と出土遺物 …… 65
1　Ａ区水田 …… 65
2　Ａ区水田面出土の遺物 …… 75
3　Ｂ区水田 …… 77

4　B区水田面出土の遺物 …… 82
5　C区水田 …… 82
6　C区水田面出土の遺物 …… 85
7　D区水田 …… 85
8　D区水田面出土の遺物 …… 87
9　E区水田 …… 88
10　E区水田面出土の遺物 …… 97
11　その他の遺物 …… 102

第３章　栗ヶ沢遺跡　（第二東名No.74－２地点） …… 152
第１節　位置と環境 …… 152
1　位置と地理的環境 …… 152
2　歴史的環境と調査歴 …… 152
第２節　調査の方法と経過 …… 152
1　発掘調査の方法と経過 …… 152
2　資料整理の方法と経過 …… 153
第３節　概　要 …… 154
1　地形と土層 …… 154
2　遺構・遺物の概要 …… 154
第４節　遺構と遺物 …… 154
1　A区の遺構と出土遺物 …… 154
2　B区の遺構と出土遺物 …… 156
3　C区の遺構と出土遺物 …… 158
4　D－１区の遺構と出土遺物 …… 158
5　D－２区の遺構 …… 162

第４章　まとめ …… 163
1　E区下層遺構の性格と年代 …… 163
2　E区下層遺構出土遺物について …… 164
3　戦国時代の水田遺構 …… 166
4　丘陵部の縄文時代遺構 …… 166

写真図版

抄　録

挿図目次

総　論

第１図　静岡市南部の地質 …… 1
第２図　静岡市南部の地形と地名 …… 2
第３図　周辺の遺跡分布図 …… 7
第４図　第二東名の路線と対象地点 …… 12
第５図　各地点対象位置図１ …… 14
第６図　各地点対象位置図２ …… 16

小瀬戸遺跡

第７図　本調査の位置と周辺の遺跡 …… 21
第８図　調査区と周辺地形図 …… 23
第９図　グリッド配置図 …… 24
第10図　Ａ～Ｅ区土層相関図 …… 26
第11図　下層遺構全体図 …… 28
第12図　掘立柱建物ＳＨ１・３付近平面図 …… 29
第13図　掘立柱建物ＳＨ１平面・断面図１ …… 30
第14図　掘立柱建物ＳＨ１平面・断面図２ …… 31
第15図　掘立柱建物ＳＨ２・６付近平面図 …… 32
第16図　掘立柱建物ＳＨ４・５付近平面図 …… 33
第17図　掘立柱建物ＳＨ２平面・断面図 …… 34
第18図　掘立柱建物ＳＨ３平面・断面図 …… 35
第19図　掘立柱建物ＳＨ４平面・断面図１ …… 36
第20図　掘立柱建物ＳＨ４平面・断面図２ …… 37
第21図　掘立柱建物ＳＨ５平面・断面図 …… 38
第22図　掘立柱建物ＳＨ６平面・断面図 …… 39
第23図　道状遺構・土手状遺構等配置図 …… 41
第24図　土坑ＳＦ２平面・断面図 …… 43
第25図　土坑ＳＦ３平面・断面図 …… 44
第26図　小穴ＳＰ251平面・断面図 …… 46
第27図　小穴ＳＰ299平面・断面図 …… 47
第28図　掘立柱建物ＳＨ１付近遺物出土状況 … 48
第29図　掘立柱建物ＳＨ２付近遺物出土状況 … 49
第30図　掘立柱建物ＳＨ３～５付近遺物出土状況 … 50
第31図　道状遺構遺物出土状況 …… 51
第32図　Ｅ区遺構外出土遺物区分け図 …… 52
第33図　下層遺構流路・遊水池区分け図 …… 53
第34図　出土遺物実測図１（土器１） …… 56
第35図　出土遺物実測図２（土器２） …… 57
第36図　出土遺物実測図３（土器３） …… 58
第37図　出土遺物実測図４（土器４） …… 59
第38図　出土遺物実測図５（土器５） …… 60
第39図　出土遺物実測図６（土器６） …… 61
第40図　出土遺物実測図７（土器７） …… 62
第41図　出土遺物実測図８（土器８） …… 63
第42図　出土遺物実測図９（土器９） …… 64
第43図　上層遺構全体図 …… 66
第44図　遺構検出面の地形 …… 67
第45図　大畦畔位置図 …… 68
第46図　大畦畔と田面位置図 …… 69
第47図　等高線に直交する畦畔断面図１ …… 70
第48図　等高線に直交する畦畔断面図２ …… 71
第49図　Ａ区トレンチ土層柱状図 …… 72
第50図　Ａ区大畦畔に伴う杭列位置図１ …… 73
第51図　Ａ区杭列断面図 …… 74
第52図　Ａ区大畦畔に伴う杭列位置図２ …… 75
第53図　出土遺物実測図10（土器10） …… 76
第54図　Ｂ区トレンチ土層柱状図・断面図 … 78
第55図　Ｂ区大畦畔に伴う杭列位置図 …… 79
第56図　Ｂ区杭列断面図 …… 80
第57図　出土遺物実測図11（土器11） …… 81
第58図　Ｃ区トレンチ土層断面図 …… 83
第59図　Ｄ区トレンチ土層断面図 …… 86
第60図　Ｄ区大畦畔に伴う杭列位置図 …… 87
第61図　Ｄ・Ｅ区トレンチ土層断面図１ …… 89
第62図　Ｄ・Ｅ区トレンチ土層断面図２ …… 90
第63図　Ｅ区トレンチ土層断面図１ …… 92
第64図　Ｅ区トレンチ土層断面図２ …… 93
第65図　Ｅ区大畦畔に伴う杭列位置図 …… 95
第66図　出土遺物実測図12（土器12） …… 96
第67図　出土遺物実測図13（土器13） …… 98
第68図　出土遺物実測図14（土器14） …… 99
第69図　出土遺物実測図15（土器15） …… 101
第70図　出土遺物実測図16（土器16） …… 103
第71図　出土遺物実測図17（土器17） …… 104
第72図　出土遺物実測図18（木製品１） …… 105
第73図　出土遺物実測図19（木製品２） …… 106
第74図　出土遺物実測図20（木製品３） …… 107
第75図　出土遺物実測図21（木製品４） …… 108
第76図　出土遺物実測図22（木製品５） …… 109

第77図　出土遺物実測図23（金属製品１）　‥ 111
第78図　出土遺物実測図24（金属製品２）　‥ 112
第79図　銭貨拓影 …… 113
第80図　出土遺物実測図25（石器・石製品）　114
栗ヶ沢遺跡
第81図　周辺地形と各調査区 …… 153
第82図　Ａ区遺構分布図 …… 155
第83図　Ｂ・Ｃ区遺構分布図 …… 156
第84図　Ｂ区ＳＤ１土層断面図 …… 157
第85図　Ｄ－１区遺構分布図 …… 159
第86図　Ｄ－２区遺構分布図 …… 160
第87図　出土遺物実測図 …… 161

挿表目次

総　論
第１表　周辺遺跡一覧表 …… 6
第２表　静岡地区現地調査の体制 …… 10
第３表　調査実施期間 …… 17
第４表　静岡地区資料整理の体制 …… 20
小瀬戸遺跡
第５表　土器・陶磁器観察表 …… 116
第６表　木製品一覧表 …… 145
第７表　金属製品一覧表 …… 146
第８表　銭貨観察表 …… 147
第９表　石器・石製品一覧表 …… 147
第10表　掘立柱建物（SH）計測表 …… 147
第11表　溝（SD）計測表 …… 148
第12表　流路（SR）計測表 …… 148
第13表　土手状遺構計測表 …… 148
第14表　道状遺構計測表 …… 148
第15表　小穴（SP）計測表 …… 149
第16表　畦畔（SK）計測表 …… 151
栗ヶ沢遺跡
第17表　土器観察表 …… 162
第18表　石器・石製品一覧表 …… 162
第19表　金属製品一覧表 …… 162
第20表　銭貨観察表 …… 162

写真目次

総　論
写真１　本調査の状況（小瀬戸遺跡） …… 18
写真２　整理作業の状況 …… 20

写真図版目次

小瀬戸遺跡
図版１　小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡遠景（南より）
　　下層遺構全景
図版２　ＳＨ１・３、道状遺構２（西より）
　　ＳＨ２、SD16～22、道状遺構３（北西より）
図版３　ＳＨ４・５（西より）
　　ＳＨ６、SD21、道状遺構６（西より）
図版４　SD14（西より）
　　土手状遺構１・２、ＳＲ８（南東より）
図版５　SP251半截状況（南より）
　　SP299完掘状況
　　遺物出土状況（灰釉陶器）
　　遺物出土状況（灰釉陶器）
　　遺物出土状況（鉄鏃）
図版６　Ａ区水田面全景
　　ＳＫ１・４・５
図版７　ＳＫ２・３、ＳＤ１～３（西より）
　　ＳＲ９、ＳＤ４（南より）
図版８　ＳＫ８（西より）
　　杭列断面（北より）
図版９　Ｂ区水田面全景
　　SK10・11、SR4、SD５～７（東より）
図版10　SK10全景
　　SK10近景

図版11　SK10杭列断面
遺物出土状況（漆椀）
遺物出土状況（付札状木製品）
図版12　C区水田面全景
SK14・15（東より）
図版13　SK16、SR5
杭列断面（南東より）
図版14　D区水田面全景
SR 6、SK17（北より）
図版15　SK17、SD 8（東より）
E区水田面全景
図版16　E区南端部水田完掘状況（西より）
SR 7（西より）
図版17　E区北端部水田完掘状況（東より）
SF 1貯水穴、SD 9導水溝（南東より）
図版18　出土遺物１（土器１）
図版19　出土遺物２（貿易陶磁）
図版20　出土遺物３（土器２）
出土遺物４（土器３）
図版21　出土遺物５（土器４）
出土遺物６（土器５）
図版22　出土遺物７（土器６）
出土遺物８（土器７）
図版23　出土遺物９（土器８）
出土遺物10（土器９）
図版24　出土遺物11（土器10）
出土遺物12（土器11）
図版25　出土遺物13（土器12）
出土遺物14（土器13）
図版26　出土遺物15（土器14）
出土遺物16（土器15）
図版27　出土遺物17（土器16）
出土遺物18（土器17）
図版28　出土遺物19（土器18）
出土遺物20（土器19）
図版29　墨書土器
石器・石製品
図版30　木製品（付札状木製品・栓・箸・曲物）
図版31　木製品（漆椀・桶・板材）
図版32　木製品（板材）
図版33　木製品（板材・柱根）
図版34　金属製品（鉄鏃・釘・鉄砲玉・刀子）
図版35　金属製品（キセル・火打金・火箸・釘・こうがい・銭貨）
図版36　銭　貨
栗ヶ沢遺跡
図版37　SF 1・2（西より）
SX 1（西より）
図版38　SD 1遠景（西より）
SD 1近景（北より）
図版39　SD 2（東より）
SF 5（北西より）
図版40　出土土器
出土金属製品
出土石器

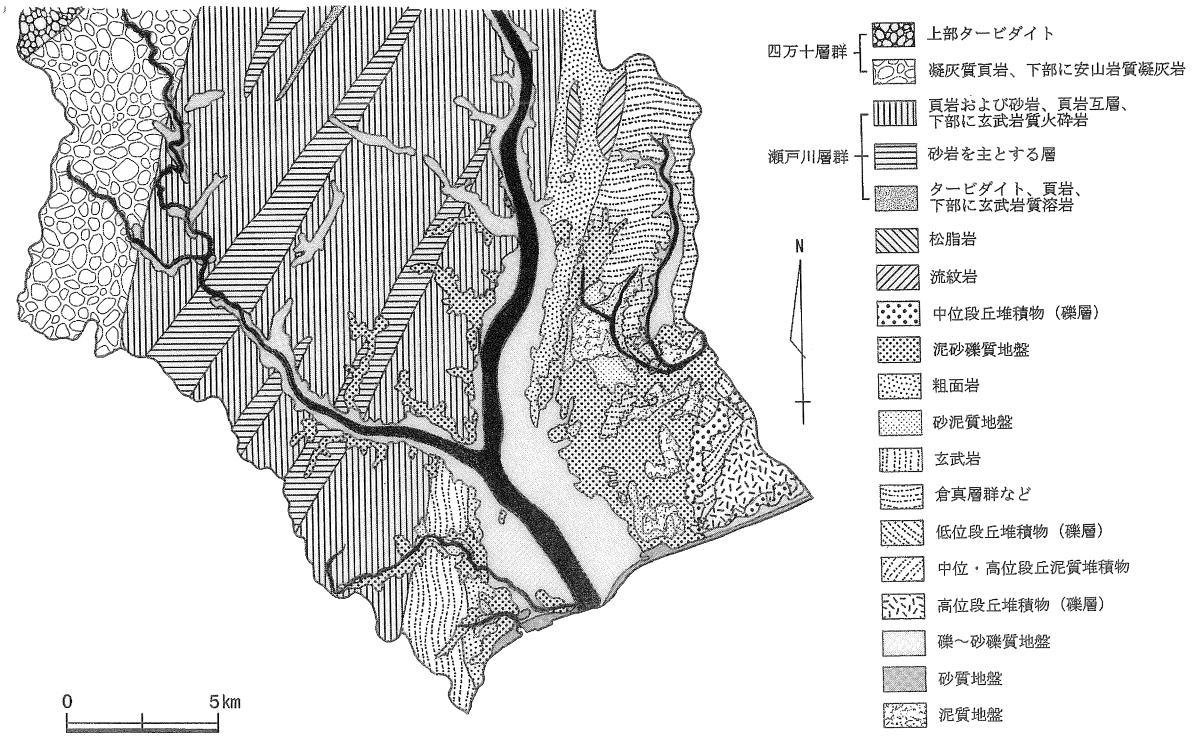
第１章　総　論

第１節　静岡市西部地区の位置と環境

１　地理的環境

静岡市西部地区（静岡市葵区・駿河区）は、静岡県のほぼ中央に位置する。この地域は、最北端を間ノ岳（3,189.3m）に代表される3,000m前後から2,000m台後半の急峻な山脈（赤石山脈）とし、最南端を安倍川・藁科川が形成した扇状地とする、南北におよそ100kmを測る広大な地域である。行政界としては、北側に長野県・山梨県、東に静岡市東部地区（静岡市清水区）、西に川根本町や川根町・藤枝市・岡部町、南に焼津市と接している。人口集中地区は市域の約5.4%にあたり、南部に広がる静岡平野に集中している。

丘陵部の、奥側にあたる笹山構造線以北の部分は、約１億年前に形成された中生界白亜系四万十層群に属する層で構成されている。北側は千枚岩質黒色頁岩、下部タービダイト・下部に玄武岩質溶岩を主体とし、南側では凝灰質頁岩・下部に安山岩質凝灰岩を主体とする。これらの層は破砕しやすく、河川に大量の土砂を供給する原因ともなっている。なお、藁科川の源流は、この地域の南側にある。平野部にほど近い部分は新第三系中新統と約5,000万年前に形成された古第三系瀬戸川層群に属する層で構成されており、安倍川東岸に走る十枚山構造線と糸魚川―静岡構造線によって、大きく三つの地域に分けることができる。十枚山構造線以西の丘陵は古第三系瀬戸川層群の頁岩および砂岩、頁岩互層、下部に玄武岩質火砕流に砂岩を主とする層が縞状に入る地域が南側に広くあり、北側を黒色頁岩で構成される。十枚山構造線と糸魚川―静岡構造線間は、新第三系中新統の粗面岩が主となり、北に行くにしたがって粗面岩や流紋岩から主として火山破屑物からなる層（御坂層群など）に変化する。安倍川の源流はこの地域にある。糸魚川―静岡構造線以東は、倉真層群や礫岩、砂岩、シルト岩、それらの互層（相良層群など）によって構成される。一方、安倍川下流西岸にある高草山山塊の南側は玄武岩からなり、駿河湾

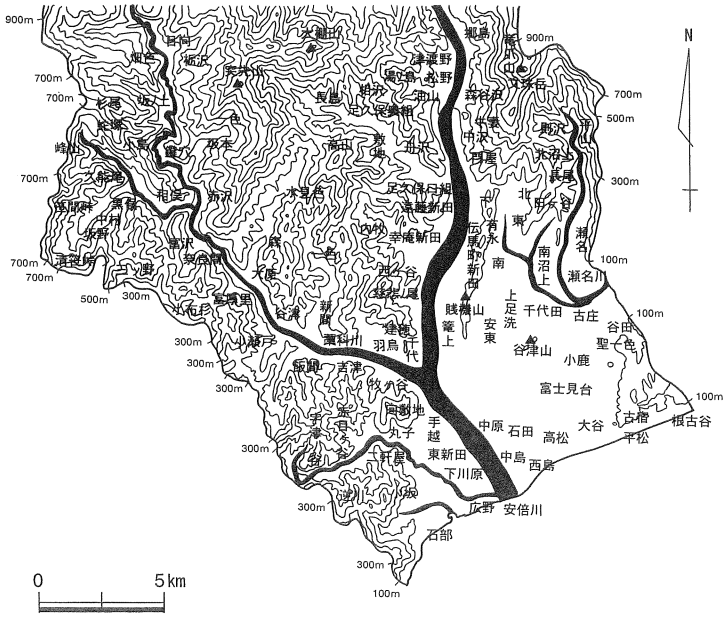


第１図　静岡市南部の地質（国土庁ほか『土地保全図』22より再トレース）

に面する部分には枕状溶岩が観察される。これらの地質で構成される丘陵は、平野部の周辺でも標高400m前後と比較的高く、小河川によって解析された谷を多く持つ複雑な地形を呈している。これら丘陵部の植生は、高山を除く地域ではヤブツバキ、ブナ、ミズナラ、クリ等の広葉樹林に、スギ、ヒノキなどの針葉樹の人工林とが交互に入り込み、さらに低位の斜面部を中心としてミカン、茶などの畑に利用されている。

平野部は安倍川と藁科川の合流点以南から、平野部に突出した賤機山を東に回りこむようなかたちで発達した扇状地である。これらの河川からもたらされた砂礫やシルトが厚さ100m以上にわたって堆積しているとされ、その扇頂部にあたる賤機山丘陵南麓付近の標高はおよそ28mを測る。安倍川の流路に平行する南向きにはおよそ0.4%の傾斜を持って下り、海岸線から0.5kmで標高５m程度となる。安倍川河口部から東側の海岸線には、安倍川から供給された砂礫が再堆積したと思われる砂堤が発達する地域がある。一方、これに直交する東向きでは0.3%程度とやや緩い傾斜となり、主に巴川の堆積による清水平野につながる。扇頂部の北東側、すなわち賤機山丘陵の東側は、丘陵に遮蔽されて安倍川・藁科川の堆積物が充分に行き届かなかった部分であり、擂鉢状に窪んで広く低湿地を形成している。その中心にあるのが巴川の源流ともなる浅畑沼である。これら平野部は、扇頂部や自然堤防上を中心に広く市街地化されている。後背湿地においても、農業振興地域以外の農地は次第に市街地の中に取り残されて維持が困難になり、徐々に宅地等に開発されている。

平野を形成した河川のひとつである安倍川は、静岡市街地から北へおよそ34km遡った梅ヶ島の奥にある安倍峠から発するサカリ川や、大谷崩から発する大谷川などを源流とする一級河川である。平野部での川幅は500～700mで、0.5～0.7%の勾配で南に流下する。中流域の平均水位は1.81mであり、多量の土砂を供給している。安倍川の最大の支流は、安倍川との合流点から北北西に24km遡った七ッ峰（標高1,533.2m）南側にある大間付近を源流とする一級河川藁科川である。川幅は200～300mで、中流域の平均水位は1.72mである。また、安倍川との合流点からおよそ２km上流の川原ほぼ中央には、『枕草子』にも記された県指定名勝木枯森が茂っている。この二つの河川は静岡市街地の北西側約2.5kmで合流し、南東向きに流れを変えておよそ６kmで駿河湾に至る。



第２図　静岡市南部の地形と地名（地名は主なもののみ抜粋）

2　歴史的環境

静岡市西部地区では縄文時代中期以降、遺跡が把握されるようになる。弥生時代中期までの遺跡は、主に丘陵尾根部～裾部に分布する。弥生時代後期以降は、沖積地の自然堤防上を中心に遺跡が把握されている。ここでは、静岡平野を含んだ概要を述べるとともに、小瀬戸遺跡の主体となる歴史時代に重点を置くこととする。

旧石器時代・縄文時代　静岡市西部の遺跡から旧石器時代の遺物が得られたという報告は、今のところ極めて乏しい。静岡・清水平野一円でも、現在

までに把握されている旧石器時代の遺跡は、有度丘陵上の北向き緩斜面上にある日本平遺跡、有度丘陵の西麓にある宮川遺跡、庵原地区の午王堂山古墳群・大乗寺遺跡など数例にとどまる。

縄文時代の遺跡についても、他地域に比べれば決して多くはない。調査が行われていない遺跡が多く、時期的な変遷を把握することは困難であるが、縄文時代全般を通じてみれば、その分布は①安倍川・藁科川流域、②浅畑沼周辺、③有度山麓の３箇所に分けることができる。

①の地域は、河岸段丘の発達が大井川ほど進んでいないために、ごく狭小な河岸段丘上や丘陵の尾根、丘陵裾部の緩斜面などを利用して小さな集落を営む傾向が窺える。最も山深い位置にあるのが中期の野田ノ段遺跡（静岡市葵区日向）であり、藁科川を南に臨む丘陵斜面にある。藁科川筋では中流域の遺跡が把握できておらず、これに最も近い位置でもおよそ13km下流の養源山遺跡（葵区小瀬戸）となる。この遺跡は西へは富士城（川根本町）を経て大井川流域へ、東へは本杉峠を越えて安倍川の支流伝いに交通が可能な場所にある。藁科川下流域にある養源山遺跡、羽鳥遺跡（葵区羽鳥）、吉津遺跡（同吉津）はおよそ３kmの範囲に分布する。この地域は、安倍川下流域の遺跡にも程近い。また、縄文時代遺跡が比較的密集する朝比奈川上流域（岡部町）とも、小瀬戸谷を遡った西又峠や飯間谷を遡った野田沢峠を介して比較的容易に交流することが可能な地域でもある。一方安倍川流域では、中流域に比較的広範囲に及ぶ別所平遺跡（葵区松野別所平）がある。北に近接する津渡野段遺跡（同津渡野）との関係も想定される。これよりおよそ４km下流にある八十岡遺跡（同足久保口組）は、安倍川の支流である足久保川を北に望む遺跡である。ここから東へ安倍川を渡河し、賤機山の付け根にあたる現在の桜峠付近を越えれば、浅畑沼一帯へ通じることができる位置にある。このように、安倍川・藁科川流域の縄文集落はいずれも、流域はもとより山間部ルートを介して近接地域と接することができる位置に営まれていることが特徴である。

②の地域は、静岡平野北側の丘陵裾部に集落が営まれる。ここは賤機山に阻まれることにより安倍川・藁科川の堆積作用が十分に及ばなかったことに起因する低湿地帯（浅畑沼）が広がっている。遺跡はこの低湿地帯の周囲に位置するため、相互の立地は水上交通も絡めた有機的なかかわりを持っていると考えられる。つまり、これらの集落に生活する人々の生業は、他の地域に比べれば淡水湖における漁労に偏重していたことが想定される。

③の地域は、有度山の緩斜面から山裾にかけて営まれる集落であり、静岡市西部では、最も縄文時代遺跡が発達している。これには、有度山の駿河湾に面する南側斜面は急に切り立ち、他では縄文時代遺跡が営まれ易いやや広めの緩斜面が頻繁に見られるといった地理的な有利性が働いている。小河川によって開析された谷に区切られた緩斜面は上下に比較的広いため、他の地域に比べれば広範囲に及ぶ遺跡が発達しやすい環境にある。この地域の遺跡は比較的古くから注目されてきた（静岡県1930、静岡市1930、大澤1935）。1984～88に発掘調査が実施された神明原・元宮川遺跡からは後～晩期の土器とともに、クスノキ製の丸木舟や櫂、ヤスが出土している。これは、活発に漁労を行っていたことを示すものであるが、集落自体が丘陵上～丘陵裾部から次第に自然堤防上に移ってきたことをも示唆しているのだろう。

弥生時代　弥生時代の遺跡は、安倍川・藁科川の中・上流域には分布が把握できない特徴があり、出現期である中期の遺跡は丘陵部に位置しながら、沖積地上にも分布し始める傾向がある。中期前半の遺跡がみられるのは安倍川下流域西岸にある丘陵上で、セイゾウ山遺跡（駿河区丸子）がよく知られている。この遺跡は1938年に行われた調査によって内容が確認されたものである（安本1939）。出土した条痕文系土器を「縄紋式文化を持った土臺に彌生式文化の接觸を受けた民族によって焼成された土器」と位置づけ、この一群を「丸子式」としている。中期後半に至ると、体部上半から口縁部にかけて縄文を施す壷や、新たな器種としての高坏を伴う「有東式」が平野部の遺跡に出現する。この標識となる有東遺跡（駿河区有東）は登呂遺跡の北北東に位置する遺跡で、丘陵上にあるセイゾウ山遺跡より格段に広く、

沖積地上への本格的な進出を窺わせる遺跡である。この様な傾向は、巴川製紙工場内遺跡（駿河区用宗巴町）や駿府城内遺跡（葵区駿府公園ほか）瀬名遺跡（葵区瀬名）、川合遺跡（同川合）等にもみられ、沖積地、特に自然堤防上が居住に適するようになったという自然的な変化、水田を積極的に用いる生業的な転化が、彼等に住まい方の転換を求めていった結果と捉えられる。

弥生時代後期に至ると、専ら自然堤防上に遺跡が分布するので、沖積地上に集落を営む傾向は定着したものと思われる。生産域である水田と、住居のある居住域が連続して検出されている遺跡で代表的なものは登呂遺跡（駿河区登呂）である。この遺跡は承知のとおり、戦時中に行われた軍需工場の造成によった発見され、戦後の弥生時代研究の嚆矢となった遺跡であり、現在は特別史跡として保存・活用が図られている。この他、豊田遺跡、小黒遺跡、有明遺跡、汐入遺跡など、静岡平野南部の広範囲に遺跡があらわれる。

古墳時代　古墳時代の遺跡は、人々の埋葬施設である古墳が平野を取り囲む丘陵部に盛んに造られる。一方で、それらを造り、葬られた人々が暮らす集落も依然として沖積地上を主体に営まれている。

静岡平野と東隣の清水平野（以後「静清平野」という。）では、古墳時代前期より神明山１号墳（全長71m）・午王堂山３号墳（全長81m）・三池平古墳（全長79m）など庵原川・巴川流域に前方後円墳や前方後方墳が造られ始めた。一方４世紀後半、谷津山山頂に静清平野で最大の前方後円墳である谷津山１号墳（全長110m）が築かれている。これらの立地から、この時期に中央政権とつながりをもち静清平野を治めていた有力者は、当初庵原川・巴川流域に勢力基盤があったことが窺える。

古墳時代中期後半には、古墳群の盟主墳として小型前方後円墳が複数の地域に造られたことから、勢力が小地域に分散して存在するようになったことがわかる。５世紀末頃の前方後円墳としては、有度山北麓に西の原１号墳（全長45.8m）、巴川上流の瀬名丘陵上に瀬名５号墳（全長30m）がある。瀬名５号墳を含む瀬名古墳群は後期まで継続する。これらとほぼ同時期に、安倍川西岸・藁科川流域の尾根上にも古墳が造られ始めた。

安倍川西岸の丘陵上には、５世紀末～６世紀に宗小路１号墳（全長37m）・猿郷１号墳（全長55m）・徳願寺山１号墳（全長36m）が築造された。いずれも、二段築成の小型前方後円墳で、小規模古墳群の中の盟主墳であると考えられる。このうち猿郷１号墳と徳願寺山１号墳には、静清平野のこれまでの古墳では採用されていなかった埴輪（円筒埴輪・形象埴輪）が配置されていたところに特徴がある。また、６世紀中頃には有力者を示す墳形として方墳が造られるようになる。佐渡山２号墳は、横穴式石室を持つ方墳で畿内との関係を示す古墳である。埴輪・方墳など静清平野の他地域には見られなかった文化が採用された安倍川西岸地域には、中央政権と関係が深い新しい技術者集団の流入または移入があったという推測ができる。５世紀後半～６世紀にかけて、寒冷期で河川氾濫が激化していた安倍川流域では砂礫の堆積が進み、可耕地が拡大したといわれている。安倍川西岸に新たに広がった平地は、庵原川・巴川流域の旧勢力の影響が薄く、新文化を取り入れて発展した新興地域と考えられ、有力古墳の被葬者も旧勢力とは別系列の首長であったと推測される。

このような状況から、古墳中期後半～後期前半にかけては、静清全域が政治的・文化的には均一に統一されてはおらず、それぞれの小地域が独立してそれぞれの文化圏を形成していた、という姿が浮かび上がってくる。つまり、静清全域を階層的に支配する盟主は存在せず、各小勢力が同列な位置づけでそれぞれの小地域を治めていたと考えられ、新興地域が直接王権に組み入れられていったことを示しているとも言えよう。その中にあって、６世紀中頃に造られた賤機山３号墳は、その規模と大和政権の上流階級に匹敵する内容の副葬品を有することから、静清地方を越える政治的権力を持った被葬者を考えることができ、大和朝廷による地方の直接支配を示唆する。

古墳時代後期後半になると、下層階級まで古墳を造営するようになり、群集墳が爆発的に増加する。

丘陵の尾根上のみならず丘陵奥地まで小規模古墳が密集して分布するようになる。これらの群集墳は、いくつかの地域ごとに分けられる。東久佐奈岐古墳群（庵原川流域）・三滝ケ谷古墳群（巴川流域）・谷田古墳群（有度山北麓域）・小鹿古墳群（有度山西麓域）・平城古墳群（安倍川西岸域）などが代表的である。安倍川西岸域の群集墳は千代古墳群・羽鳥古墳群・牧ヶ谷古墳群など、安倍川や藁科川に面した丘陵の突端や谷上、または小支谷の開口する部分に造られている。また、丸子の東海道筋に面した丘陵上には大鉾古墳群や稲荷神社古墳群などが、用宗海岸沿いの丘陵上には石部古墳群などが営まれている。なお、安倍川中流域右岸には半兵衛奥古墳・西ヶ谷古墳のように、群集墳を構成せず単独で築かれる後期古墳が複数存在し、他地域とはちがったあり方を感じさせる。

さて、これらの古墳を築造した人々の集落に関しては、現時点では不明な点が多い。人々は、安倍川や巴川によって形成された自然堤防上に住居を営み、水田を経営する生活を弥生時代から続けていた。断続的に古墳時代全般に渡って続く集落（駿府城内遺跡・川合遺跡・鷹ノ道遺跡・神明原元宮川遺跡など）と、弥生後期から継続し古墳前期で廃絶してしまう集落（豊田遺跡・登呂遺跡・上ノ山遺跡など）、古墳後期になって開始される集落とが知られているが、中期の様相ははっきりしていない。集落の立地が洪水などの災害による自然環境の変化に大きく左右されめまぐるしく変わっていたのであろうと推測される。なお、古墳後期の有力な集落が、後の官衙遺跡へと発展していったと考えられる。

奈良・平安時代　奈良・平安時代の遺跡も、やはり沖積地上に営まれる傾向がある。古代の静岡平野には、安倍郡と有度郡が所在する。これらは曲金北遺跡で検出された古代の東海道を境とするため、平野部の北部地域が安倍郡域に、南部地域が有度郡域に含まれる。

駿河国の政治の中心をなす国衙の比定地は、安倍川の扇状地の最高所付近に位置する駿府城内遺跡と、これより北西へ500mほど隔てた静岡高校校地内遺跡（葵区長谷町）がある。前者からは、特に遺跡の南東側で古代の遺物を多く出土する地域が認められており興味深い。後者ではまとまった資料が得られていないため、状況は明らかでない。

安倍郡衙に関連すると考えられる遺跡は内荒遺跡・宮下遺跡・川合遺跡である。これらは静岡平野と清水平野の接点付近の川合丘陵と長尾川に挟まれた一帯にあり、古代においてはここが平野部の中でもっとも安定していた地域のひとつであったことが窺える。最も古く位置づけられるものは川合遺跡八反田地区であり、掘立柱建物群とともに人名墨書のある土師器やものさしが出土している。内荒遺跡からは、溝と柵列によって囲まれた掘立柱建物群が検出されている。ここからは9世紀前半の助宗窯（藤枝市）産の須恵器や、尾張産の灰釉陶器が多量に出土している。これらには「建」・「岡」・「主」・「川万呂」などの墨書が多く残されている。また、「造大神印」銅印や銙帯金具が注目される。宮下遺跡は内荒遺跡の東側に接する遺跡である。ここからは小規模な掘立柱建物や内荒遺跡で検出されたものに類する溝をもつ掘立柱建物が検出されている。遺物は、内荒遺跡とほぼ同時期である9世紀前半代から見られるが、10世紀代までが主体となるため、内荒遺跡よりもやや新しい段階まで利用されていたことがわかる。また、墨書も頻繁に見られる。

有度郡衙に関連すると考えられる遺跡は、安倍川の自然堤防上に位置するケイセイ遺跡（駿河区中田三丁目）である。真北を指向する掘立柱建物や礎石建物、柵列が検出され、8世紀中頃～10世紀代の遺物が出土している。注目されるのは9世紀代前半の尾張産の灰釉陶器や洛北産の緑釉陶器、「有厨」墨書のある土師器の坏である。神明原・元宮川遺跡（駿河区大谷）では、同時期の祭祀遺構が検出されている。

古代の交通の要衝をなす駅は横田駅が知られており、地名からも谷津山西麓の地域に比定されるが、その実態は明らかでない。これからおよそ1㎞東にある曲金B遺跡（駿河区曲金一丁目）からは、建物跡や井戸が検出され、瓦が出土していることからも、横田駅に関する遺跡であると考えられている。

駿河国分寺として有力視されるのは片山廃寺（駿河区大谷）である。東名高速道路の建設に先立って

発掘調査が実施され、８世紀後半から10世紀前半の、一辺二町を測る寺域の中に配置される金堂・講堂・僧房など主要な施設が明らかになっている。ここに瓦を供給するために作られたのが宮川瓦窯である。これら一群の遺跡は、国指定史跡となって保存されている。

以上のような、地域支配の要となる部分については、徐々にその内容が把握されつつある。一方で、一般民衆が暮らした集落は余り目だっていない。このころすでに安定していた安倍川の自然堤防上に集落は営まれていたと考えられる。

中世　12世紀以降、東遠江～西駿河地域でも山茶椀生産が活発に行われて静岡市域にも盛んに搬入される。この普遍的に出土する山茶椀が、11世紀代よりも遺跡の存在を格段に把握しやすくしている。

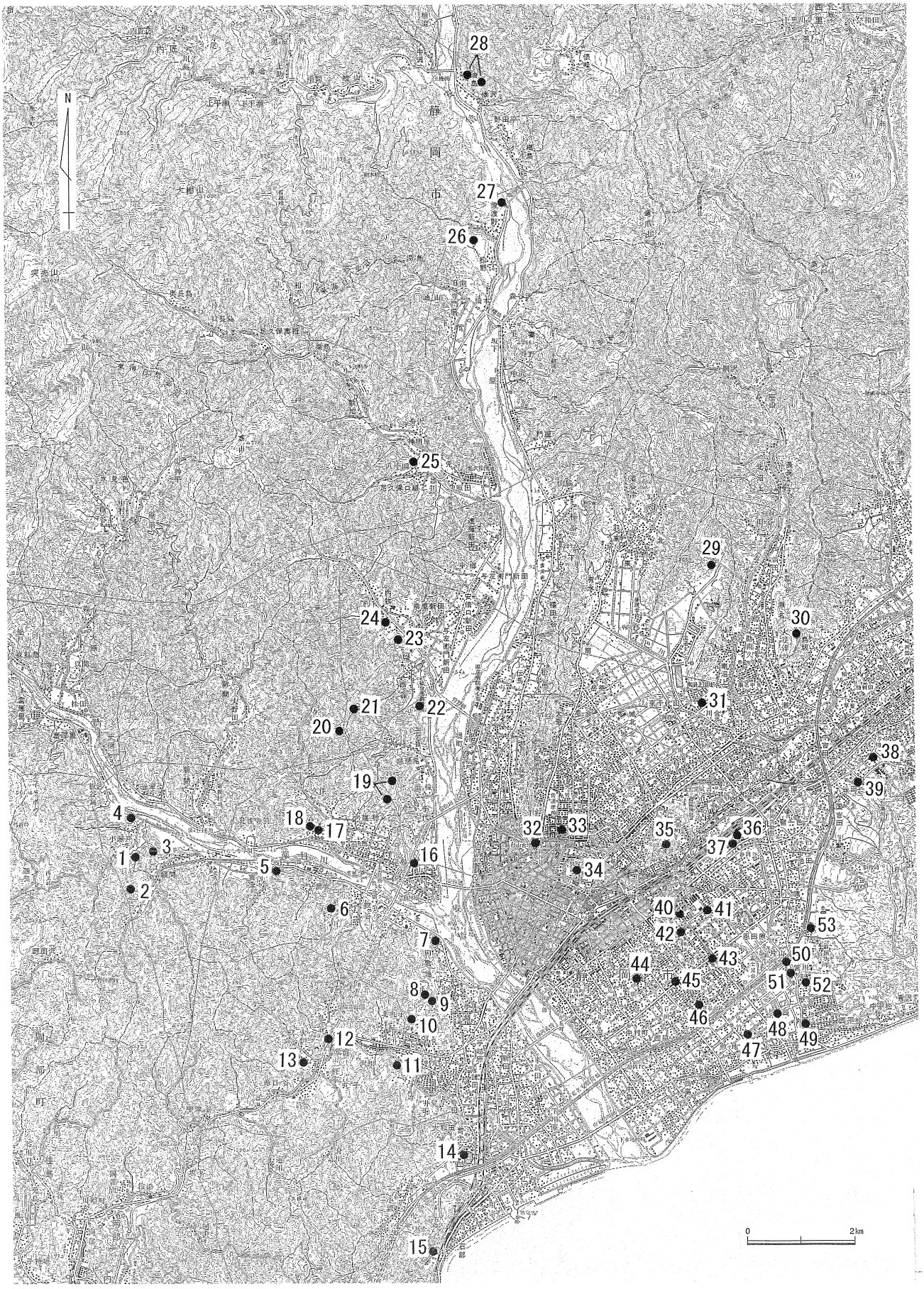
一方、東遠江～西駿河地域での山茶椀生産が終焉する13世紀末ごろを境に出土遺物量が激減するため、14～15世紀前半代を遺跡として明らかにすることは、いまだ模索されている段階である。したがって現在では、人々の動きの多くを文献の成果に求めざるを得ない。

南北朝期には北朝方の今川範国が守護となり、駿府に入ったものとされている。当時南朝勢力は、今川方から「安倍御敵」と呼ばれた狩野氏が、安倍川・藁科川流域の山間部を拠点として活動していた。狩野氏は伊豆狩野氏の一流であり、建武新政時には貞長が武者所に勤番している。建武３年（1336)、南北朝に分裂し騒乱状態になるに際して駿河に戻った貞長は、以後南朝勢力の一角を担うことになる。

狩野氏の拠点は、従来から安倍城であるといわれてきた。沼館愛三は、安倍川と藁科川に挟まれた丘陵部の最高所でもある標高435.4mに築かれた本城を中心に、尾根伝いの久住砦・羽鳥砦・千代砦・内牧城を含む城砦群を、狩野氏が築いた安倍城と解釈している（沼館1933)。小和田哲男は、狩野氏が駿河の南朝方の拠点としてこのような広大な城砦群を持って今川と対峙し得たのは、大覚寺統に伝領された服部荘を基盤として後醍醐天皇が孫にあたる興良親王を派遣したことを要因に位置付けている（小和田1981)。現在、城の遺構は本城や久住砦において観察することができるが、数段の曲輪、尾根を遮断する堀切で構成され部分的に石積みを持つことから、今見る遺構は室町時代～戦国初頭に改修されたものと考えられる。このように現在では南北朝期の城の構造を知ることは極めて困難であるが、比較的高所でなおかつ尾根を伝って広域にわたる連絡が可能な要害地形を「城」としていたことが想像される。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	時　代	種　別	番号	遺　跡　名	時　代	種　別
1	小瀬戸遺跡(№73－３地点)	古代・中近世	集落	29	三滝ヶ谷古墳群	古墳後期	古墳
2	栗ヶ沢遺跡(№74－２地点)	縄文	集落	30	瀬名５号墳	古墳中期	古墳
3	小瀬戸城(向山砦)	中世	城館		瀬名古墳群	古墳	古墳
4	養源山遺跡	縄文	散布地	31	川合遺跡	弥生～近世	集落・墓
5	吉津遺跡	縄文	散布地		内荒遺跡	古代	官衙
6	牧ヶ谷古墳群	古墳後期	古墳		宮下遺跡	古代	集落
7	猿郷１号墳	古墳中・後期	古墳	32	賤機山３号墳	古墳後期	古墳
8	平城古墳群	古墳後期	古墳	33	静岡高校校地内遺跡	弥生	集落
9	徳願寺山１号墳	古墳中・後期	古墳	34	駿府城内遺跡	弥生～古代	集落
10	宗小路１号墳	古墳後期	古墳	35	谷津山１号墳	古墳前期	古墳
11	セイゾウ山遺跡	弥生中期	散布地	36	曲金北遺跡	弥生中～古代	水田・道路
12	稲荷神社古墳群	古墳後期	古墳	37	曲金Ｂ遺跡	古墳・古代	集落・官衙
13	大鉾古墳群	古墳後期	古墳	38	西の原１号墳	古墳	古墳
14	巴川製紙工場内遺跡	弥生中期	散布地	39	谷田古墳群	古墳後期	古墳
15	石部古墳群	古墳後期	古墳	40	小黒遺跡	弥生末・古墳初	集落・水田
16	千代古墳群	古墳後期	古墳	41	豊田遺跡	弥生・古墳	集落・水田
17	羽鳥遺跡	縄文	散布地	42	有明遺跡	弥生後期	集落
18	羽鳥古墳群	古墳後期	古墳	43	有東遺跡	弥生	集落
19	羽鳥砦	中世	城館	44	ケイセイ遺跡	古代	集落
20	久住砦	中世	城館	45	鷹の道遺跡	弥生・古墳	集落
21	安倍城	中世	城館	46	登呂遺跡	弥生後・古墳	集落・水田
22	西ヶ谷古墳	古墳後期	古墳	47	汐入遺跡	弥生・古墳・中世	集落
23	半兵衛奥古墳	古墳後期	古墳	48	神明原・元宮川遺跡	縄文～中世	集落・祭祀
24	内牧城	中世	城館	49	上ノ山遺跡	縄文～古墳	集落・墓
	城山古墳	古墳	古墳	50	片山廃寺	古代	寺院
25	八十岡遺跡	縄文	散布地	51	宮川遺跡	旧石器～古代	散布地・集落
26	別所平遺跡	縄文	散布地	52	宮川瓦窯	古代	古窯
27	津渡野段遺跡	縄文	散布地	53	小鹿古墳群	古墳後期	古墳
28	湯島城	中世	城館				



第３図　周辺の遺跡分布図

松井助宗らを率いた今川範国が安倍城を攻撃したのは暦応元年（1339）10月のことであるが、狩野氏は宗良親王が駿河入りしたといわれる興国元年（1340）にはまだ勢力を維持していた。しかし、延文３年（1358）には「安部凶徒蜂起」に際して兵糧料所として預かっていた有度郡中田保・西嶋郷を今川範氏が伊豆走湯山へ返付していることからも（『静岡県史』資料編６―591　以下『県史』○―○○と略す）、宗良親王が信濃国へ退去した興国２年以降、今川氏の攻勢によって延文年間初頭までに南朝勢力としての狩野氏はほぼ制圧されていたとみられる。

南北朝期に整えられたとされる城砦群は、更に西側の藁科川西岸域から上流部にかけて築かれている。西岸域にある城は小瀬戸城である。この城の西側谷部には小瀬戸集落があり、興良親王の御所が所在したという「ゴショノ谷」という地名が存在する。この谷から南西に向かう県道静岡・朝比奈・藤枝線は、志太平野へ抜けるための旧来からの間道である。この道は標高231ｍの西又峠を越えて西又川沿いに、鎌倉御家人の流れを汲む朝比奈氏の本拠地である殿（岡部町殿）へ通じる。この道程と小瀬戸周辺は朝比奈氏にとっても縁が深い。小瀬戸城のちょうど藁科川対岸にあたる新間には、朝比奈氏の菩提寺のひとつである見性寺があり、現在は廃しているが、小瀬戸にも同じく西福寺があった。また、天文12年（1543）には藁科荘内富士雅楽助跡が朝比奈又八郎に安堵されている（『県史』７―1654）。後年まで今川氏の重臣として活躍する朝比奈氏がいつから小瀬戸周辺に影響を及ばせたかは確かでないが、このルートを今川方が掌握することによって、志太平野の南朝方拠点である大津城への連絡路を遮断し、南朝方の各拠点を孤立させることになったと考えられる。このことは、観応３年（1352）に今川範氏が大津城の佐竹兵庫入道らを攻め落とし（『県史』６―513）、翌年にあたる文和２年には藁科川を遡って土岐氏の篭る土岐山城攻めを行うといった一連の軍事行動からも察せられる。つまり一連の軍事行動までには、小瀬戸を含む藁科川流域の南朝勢力が完全に排除されて、今川勢の自由な往来が可能になっていたと考えざるを得ないのである。

土岐山城攻めの際に今川勢がまず取り掛かったのは、藁科川上流部日向にある萩多和城である。そのまま藁科川の支流である黒俣川を遡り、土岐山城の一の木戸と称された護応土城に攻め上った場合、退路を絶たれる恐れがあったのであろう。２月11日に萩多和城、13日に護応土城を落として、18日から土岐山城攻めが開始される。25日には土岐山城を陥落させ（『県史』６―520・521）、これによって藁科川伝いに南朝勢力が駿府に至る恐れを一掃したのである。

後の永享５年（1433）９月３日、安倍城からおよそ12㎞安倍川を遡った場所にある湯島城が攻略されている（『県史』６―1826）。ここには今川範政没後におこった永享の内訌に際し、今川範忠の家督相続を不服とする三浦・進藤・興津・富士氏らとともに蜂起した狩野氏が、同年７月以来の転戦の末立て篭もっていた。したがって、14世紀後半以降、狩野氏は今川氏に恭順し、安倍山を領する一国人として命脈を保っていたことになる。しかしこの内訌の後、安倍山は幕府直轄領となり足利義教の御判御教書によって義忠に預けおかれる（『県史』６―1845）。なお、戦国期にここからさらに西へ、安倍川の支流である中河内川を４㎞ほど遡った落合を拠点とする狩野氏は、今川氏に追われた狩野氏の末裔である。

戦国時代の静岡平野の中心は、今川氏の館を中心とした駿府である。この頃にはすでに、現代に踏襲される町割りの基礎は出来上がっており、おおむね近世駿府城二ノ丸の範囲に主要な機能がまとまっていたものと考えている。当時の繁栄を伝える史料は多くはない。15世紀代では、永享４年（1432）に将軍足利義教の富士遊覧を迎えた今川範政が、御座所である「富士御覧の亭」を新築したことが知られている（『富士御覧日記』）。しかしおよそ半世紀後、今川義忠の戦死を発端とした文明の内訌によって駿府は一旦焼け落ち、長享元年（1487）に当主となった氏親が、館とともに改修したとされる（『宇津山記』）。享禄３年（1530）３月３日の『実隆公記』に記された「駿河府中二千余間回禄」（『県史』７―1064）という火災の記事は、氏親からその嫡子氏輝の代にかけて駿府が急速に発展していったことを垣間見せるものである。

第２節　調査に至る経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年１月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成３年９月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成４年２月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成４年５月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成４年８月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて県教育委員会は、平成４年９月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成５年３月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あて回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518㎡となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成５年11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成６年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759㎡となっている。

平成７年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成６年２月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第１回の協議が平成７年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成８年７月１日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成８年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成８年９月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成８年９月25日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成８年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo.94地点、浜北市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成９年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地の確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成９年１月31日付けで建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成９年12月25日付けで施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成６年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年９月２日付けで日本道路公団静岡建設局長より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年９月25日付けで再踏査の依頼をするとともに、10月２日には踏査の実施に関する打合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付けで県教育長から日本道路公団静岡建設局長あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734㎡であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年３月５日付けで協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査の事業量の増大に㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

第２表　静岡地区現地調査の体制

			平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
所長			齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠
副所長			池谷和三		山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫
総務部	常務理事兼総務部長		三村田昌昭	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫
	次長								鎌田英巳	鎌田英巳
	総務課長		初鹿野英治	杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳
	担当	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸
		総務係長	後藤　稔	田中雅代	田中雅代	田中雅代	山本広子	山本広子	山本広子	佐藤美奈子
		会計係長	杉田　智	杉田　智	大石真二	大橋　薫	大橋　薫	大橋　薫	野島尚紀	野島尚紀
		副主任				鈴木秀幸	鈴木秀幸			
		主事			鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博	
調査研究部	部長		石垣英夫	石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平
	次長		栗野克己		佐野五十三	及川　司	栗野克巳 及川　司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫
	次長心得			佐野五十三						
	担当課長		栗野克己	足立順司	及川　司	及川　司	及川　司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫
	工区主任									
	主任調査研究員		足立順司	飯塚晴夫	飯塚晴夫					
	調査研究員		宮崎　覚 篠宮晋士 伊藤裕啓 河合　修 福手絵里	河合　修 川上　努	川上　努	川上　努	川上　努	川上　努	川上　努	川上　努
	保存処理室長						西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二

こうした経過の中で、静岡市西部地区における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、確認調査の対象をNo.67～75地点の９地点に、本調査の対象をNo.69地点（キョウダイヤト遺跡）、No.70地点（キョウダイヤト遺跡・内牧城跡・城山古墳）、No.72地点（小瀬戸城跡）、No.73―1～3地点（小瀬戸遺跡）、No.74―１地点（小瀬戸城跡）、No.74－２地点（栗ヶ沢遺跡）、No.75地点（番匠カイト遺跡）及び代替地（有東遺跡）の８地点とした。本調査の実施については、72・73－１・73－３の一部・74－１・75地点を静岡市教育委員会が担当し、他を㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が受け持った。作業の着手は用地買収が進んで、一部調査実施が可能となった平成９年度以降となった。

第３節　確認調査

１　調査の体制

静岡市西部地区の確認調査及び本調査は平成９～15年度に実施しており、その体制は第２表のとおりである。この体制は、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて設定した静岡工区（静岡市・藤枝市・島田市）のうちの静岡市西部地区で実施したものである。

静岡市西部地区の担当は、確認調査段階では静岡市駿河区緑が丘町に所在する中原整理事務所を、本調査段階では各現地事務所を拠点として各現地調査を実施している。

２　確認調査の方法と経過

⑴　位置と現況

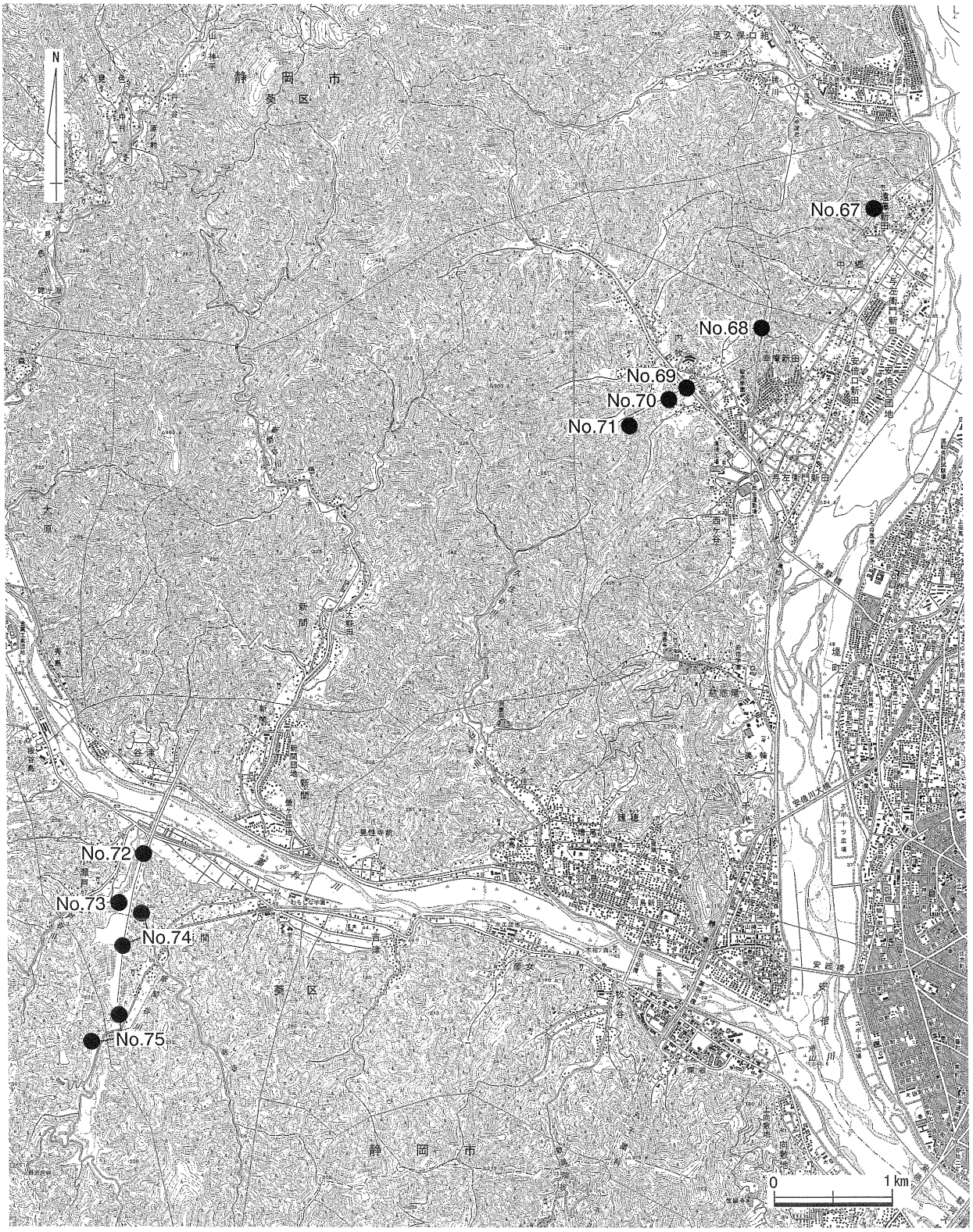
第二東名の路線は、静岡・清水平野の北縁にある丘陵部を東西に横断する。静岡市西部地区での路線はおよそ29kmを測る。なお、計画ではトンネル９箇所、インターチェンジ１箇所、パーキングエリア１箇所が計画されている。路線の多くは丘陵部をトンネルで通過するものであり、河川によって開析された部分では高架橋で谷を横断することとなる。

路線内の丘陵地の現況は、多くが杉・桧の植林や竹林、茶畑として利用される。土採りによって大きく改変されている丘陵は見当たらない。したがって、各丘陵の地形は、ほぼ本来の形状が残されているとみられる。一方、平野部・谷平野においては、道路や建築物・宅地によって開発されている部分もあるものの、水田や畑に利用されている部分が比較的多い。

⑵　対象地点の選定

第二東名路線範囲において、静岡県教育委員会および静岡市教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。その後においても、路線範囲の変更や側道等といった本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡の所在の再確認等によって、対象地点の範囲の変更や新たな対象地点の追加も同様に行われた。最終的に、静岡市西部地区では９ヶ所の対象地点（No.67～75地点）及び代替地１箇所の計10ヶ所が選定された。

10ヵ所の対象地点の内、３地点（No.70・72地点、代替地）は既に周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、周知の遺跡）を含んだ場所、その他は周知の遺跡を含まないが、遺跡の存否を含めて確認調査は行う必要があるとされた場所である。周知の遺跡を含むNo.70地点は、丘陵上に南北朝期の山城（内牧城跡）及び古墳（城山古墳）の存在が知られていた場所である。丘陵は安倍川と藁科川の間にある山塊から派生した小さな尾根で、急峻な地形を備えることから、斜面部を含めて全面に遺跡が及ぶ可能性が高いことから、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。同じくNo.72地点は、丘陵上に戦国期の山城（小瀬戸城



第４図　第二東名の路線と対象地点

跡）の存在が知られていた場所である。対象となったのは、城域の最高所から北へ派生する痩せ尾根であるが、曲輪とも考えられる複数の平坦地が観察されていたことから、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。代替地は、安倍川が形成した自然堤防上にあり、弥生時代中期～古墳時代前期の遺跡である有東遺跡の範囲内にある。現地表面から１ｍ弱下位で遺構面に到達するため、遺跡の保全が図られな

いと判断され、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。

⑶　調査の方法

確認調査の開始にあたっては、まず駐車場・作業員棟設置等の準備と並行して、対象地点の位置と範囲を確認した。調査区は、対象地点の多くが丘陵上であることから、トレンチを基本とし、把握の難しい場合はその周囲を拡張した。また、遺跡の有無とともにその範囲を把握するため、調査区を対象範囲の全域にわたるように設定することに努めたが、急斜面部においては、作業の安全上を考慮してやむなく調査区の設定を避けた部分もある。調査区の掘削は、No.69地点、No.73地点や代替地、70地点、74地点と75地点の一部以外は、重機が入らない場所であったので、表土から人力で行った。

土層については、特に遺物や遺構を発見した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、記録した。ただし、丘陵上では表土や流土・崩落土層直下が遺構面となる場合が多く、遺構の有無確認の方に重点を置いて調査を行った。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるか、根痕や撹乱・自然地形等であるか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げるか、遺構全体を把握できるように部分的に調査区を拡張して判断に努めた。

出土遺物については、基本的には位置と層位を確認・記録した後に取り上げたが、遺構内でまとまって出土した遺物など遺構の性格をあらわすものについては、本調査をすることを前提として、出土位置に残したままとした。以上の方法によって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらに発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図面は、全体図は1/100、土層断面もしくは柱状図は1/20を基本とし、必要と判断した遺構図等は1/20もしくは1/10で作成した。なお、測量基準杭は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭を使用し、その国土座標をもって作成した。また、条件を満たす基準杭がなかった場合は、任意に基準杭を設定して記録作業を実施した。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して35㎜判カラーネガを用い、必要に応じて、35㎜判や６×７判のモノクロも使用した。

調査区の埋め戻しについては、各地点あるいはその部分の事情に合わせて行った。

⑷　調査の経過

各地点の確認調査は、実施できる条件がそろい、要請のあった順に実施した。よって、地点順に確認調査を実施してはいない。また、同一地点内でも部分的に数度に分けて確認調査を実施せざるを得ない場所もあった。その場合は、「No.73地点その１」等として実施することとした。

各地点の調査期間は、第３表のとおりである。それぞれに示した期間内において、先述の調査の方法に従って確認調査を実施し、遺跡の有無と範囲を把握した後、調査を終了している。

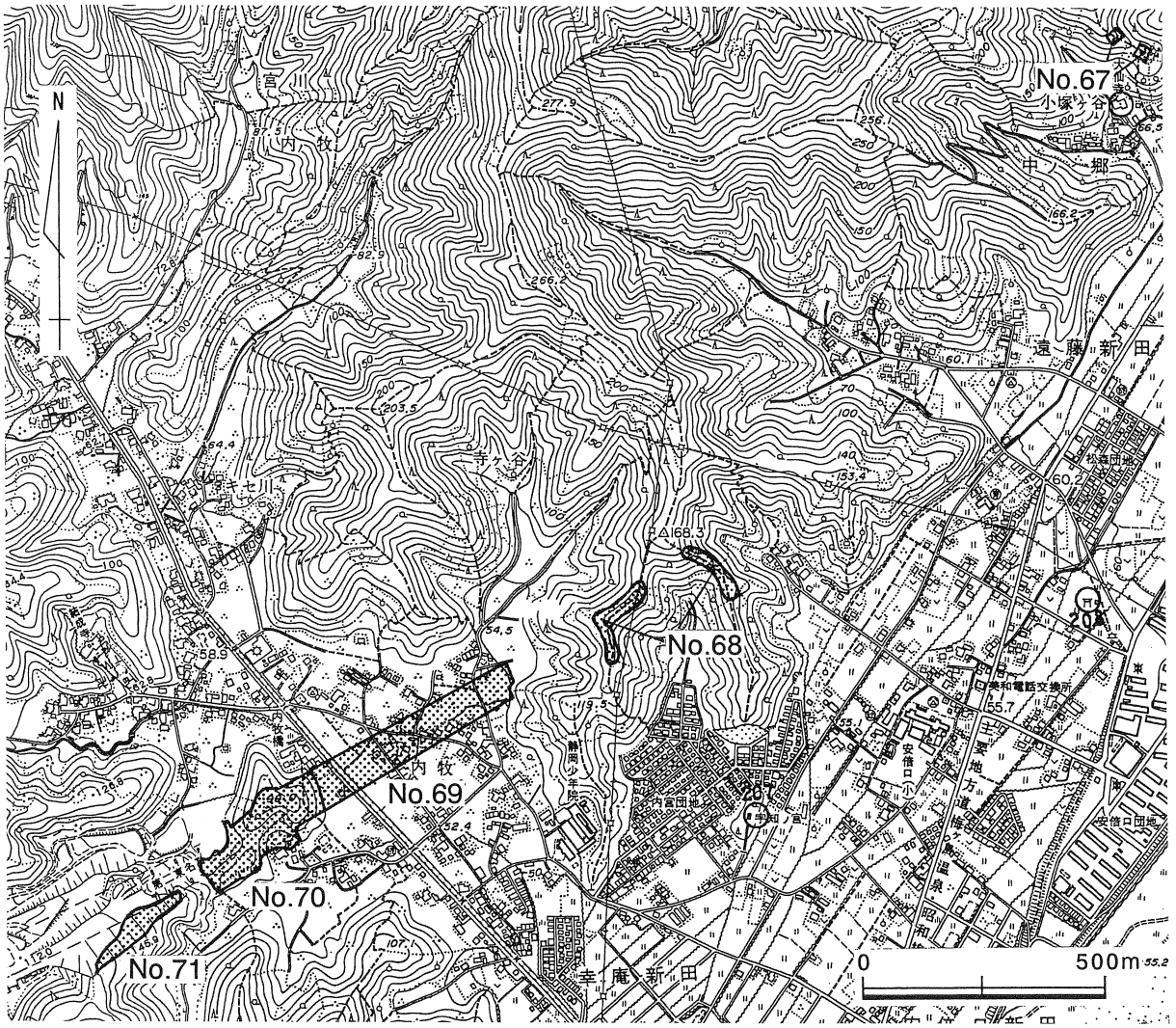
3　各地点の概要

⑴　No.67地点

位置・立地と現況　静岡市葵区遠藤新田に位置する。標高120～150ｍの南へ張り出した尾根上であり、茶畑・杉の植林に利用され、部分的に雑木林が残存していた。茶畑や植林に際して若干畝状に改変されている部分もあったが、現況では大きな地形の変化は認められなかった。

対象地に近接して古墳が確認されており、対象地内にも墳丘と思われる高まりや、石室の石材の可能性を感じさせる礫の散布がみられる箇所があったため、古墳が存在する可能性を想定した。

調査方法と確認状況　墳丘と思われる高まりや、礫の散布域を中心にトレンチによる調査を人力で行った。表土は厚さ10cm前後で、その下位に厚さ50～70cmの礫の混じる黄褐色土、さらに赤褐色～黄褐色の



第５図　各地点対象位置図１

基盤層を確認した。墳丘と思われた高まりの頂部付近で同一個体である須恵器の甕体部片２片が出土したが、遺構は検出されなかった。

結果　本地点対象範囲内において、遺跡が残存しているという根拠は得られなかった。

⑵　No.68地点

位置・立地と現況　静岡市葵区幸庵新田に位置する。標高140～150ｍの南へ張り出した尾根上であり、茶畑や杉の植林に利用され、部分的に雑木林が残存していた。茶畑や杉の植林に際して若干畝状に改変されている部分もあったが、現況では大きな地形の変化は認められなかった。

対象地内には、堀切状のくぼみや平坦部がみられたため、山城に関わる遺構の存在を想定した。また、近接地域には、尾根上に古墳がのる例がみられるため、古墳の存在も考慮した。

調査方法と確認状況　堀切状のくぼみや平坦部を中心にトレンチによる調査を人力で行った。表土は厚さ20～30cm程度で、その下位に厚さ15～120cmの角礫の混じる褐色土、さらに基盤層である岩盤を確認した。堀切状のくぼみは地すべりの跡であり、平坦部も自然地形であることが把握された。

結果　遺物の出土はなく、遺構も発見されなかったため、本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

⑶　No.69地点

位置・立地と現況　静岡市葵区内牧に位置する。標高54ｍ前後の内牧川による沖積地で、水田・畑・宅

地に利用されていた。堆積土が厚いため、地表面からは遺跡の存在は把握できなかった。

調査方法と確認状況　橋脚が築かれる位置を中心に、４～５m四方のグリッドを複数個所設定して、主に重機を用いて掘削を行った。内牧川左岸一帯は、いずれの箇所からも砂利・砂・シルトの互層が確認され、内牧川の氾濫原が広がっていることが把握された。内牧川右岸でも、現地表面からおよそ２mにわたって内牧川による堆積物が確認されたが、この下位にある黄褐色～暗褐色粘土層において奈良時代の遺構および当該時期の須恵器・土師器が検出された。

結果　内牧川左岸地域では、遺物の出土もなく、遺構も確認されなかった。右岸地域では遺物包含層および遺構の存在が認められ、遺跡が存在していることを確認した。現在この遺跡をキョウダイヤト遺跡としている。

⑷　No.70地点

位置・立地と現況　静岡市葵区内牧に位置する。標高99.1mを頂部とする城山とその西側尾根からなる丘陵部、南側の谷によって構成される。丘陵部は多くが茶畑に利用されていたが、部分的に雑木林や竹林となる。茶畑に利用されていた部分には、古墳に用いられていたものと思われる石材や古タイヤを積み重ねて土留めとした段が一面に造成され、かなり地形が変化していることが知られた。また、谷の奥（北西側）では、大規模な地すべりによって形成されたとみられる高さ約２mのほぼ垂直な崖面が認められた。対象地内では、地表面で明確な遺構を把握することはできなかったが、丘陵頂部を中心に内牧城跡が、頂部から南東に突出する尾根先端に城山古墳が存在することが判明していた。

調査方法と確認状況　内牧城の機能が城山の急峻な地形に集約されていると理解し、城山一帯の詳細な地形測量を実施し、全体像を把握することとした。沼館愛三が記録した見取り図（沼館1933）では、丘陵上を中心に山城が築かれ、南側尾根末端に古墳が存在することが把握された。また、畑の土留めに用いられている石材についても、石室から引き出されたものであることが地元民からの聴き取りで判明した。

結果　丘陵上を中心に、内牧城跡が存在することが確認された。また、南側尾根末端に横穴式石室を持つ古墳１基（城山古墳）の存在が確認された。

⑸　No.71地点

位置・立地と現況　静岡市葵区内牧に位置する。標高165m付近を頂点とする北東向きの尾根であり、頂部の一部と北向き斜面が茶畑であったほか、多くの部分が杉の植林に利用されていた。頂点付近には幅20m、長さ60mほどのやや平坦な部分があるが、北東向きに下がるに従って徐々に狭くなり、標高120m付近では幅３m程度の痩せ尾根となる。調査対象地は、内牧城と尾根続きであるため、山城に関する遺構の存在を想定して調査を実施した。

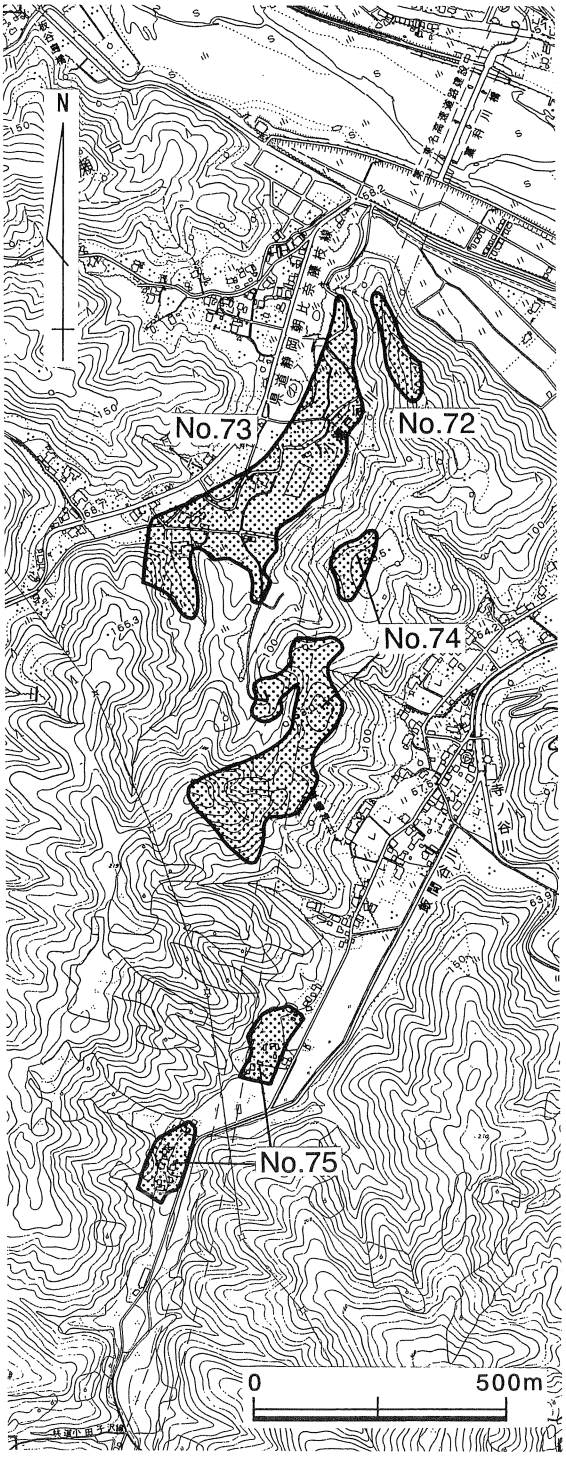
調査方法と確認状況　等高線に直交・平行する位置に幅１mのトレンチを13本設定し、すべて人力で調査を実施した。厚さ５～20cmの表土下に、褐色～黄褐色シルト（厚さ10～30cm）、地山に起因する礫を多く含む橙色シルト（厚さ30cm）の順で堆積し、この下に岩盤が検出されている。

結果　いずれのトレンチからも遺構・遺物は検出されなかったため、本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

⑹　No.72地点

位置・立地と現況　静岡市葵区小瀬戸に位置する。小瀬戸城から北側へ延びる、標高150m付近から99mに至る尾根であり、主に茶畑と杉の植林に利用されていた。標高151m付近に、尾根を遮断する幅10m前後の堀切が東西方向に掘られていることが現況地形で観察されていた。尾根は部分的に小さな平坦部を持つ３～５mの痩せ尾根であり、小瀬戸城の曲輪が存在することを想定して調査を実施した。

調査方法と確認状況　尾根上に、およそ220mにわたってトレンチを設定し、人力で掘削した。その結果、尾根の至るところから、現在の山道とは異なる位置にある道状の遺構が検出された。また、平坦面から



第６図　各地点対象位置図２

は炭を多く含む土坑が２基検出された。

結果　検出された遺構は表土から掘りこまれたものではないので、小瀬戸城の時期に遡る可能性が想定された。なお、この地点の確認調査・本調査については、静岡市教育委員会が担当している。

(7)　No.73地点

位置・立地と現況　静岡市葵区小瀬戸に位置する。小瀬戸谷川が開析した標高59～72ｍの谷部にある。付近は主に山沿いが宅地に、谷の中心部が水田や畑といった耕作地に利用されていた。谷は小瀬戸谷川や安倍川による堆積が厚く、現況地盤では遺跡の存在は把握できなかった。しかし、「ゴショノ谷」や「門内」という南朝に関わりのあると考えられる地名や集落の機能を示す地名が散在することからも、中世集落の存在が想定された。

調査方法と確認状況　調査対象地全域にわたって３～５ｍ四方のテストピットや幅２ｍのトレンチを設定し、重機と人力を併用して掘削した。その結果、谷の奥側の一角に古代に遡る集落が検出された。その他の部分には、全域に渡って中世～近世の集落と水田が検出された。

結果　調査対象地のほぼ全域から中世～近世の遺跡が確認された。なお、この地点の確認調査については、静岡市教育委員会と当研究所が地域を区切って分担し、本調査は73―３地点を当研究所が、他を静岡市が分担し実施している。

(8)　No.74地点

位置・立地と現況　静岡市葵区小瀬戸・飯間に位置する、小瀬戸城本曲輪から南西方向に続く尾根上を中心とした部分である。この地点は広範囲に及ぶため、地形の変化点によって74―１・２・３地点の３ヵ所に分割して調査を実施している。74―１・２地点にあたる丘陵部は標高115～169ｍで、尾根や斜面の多くは杉の植林や竹林、茶畑に利用されていた。74―３地点は74―２地点東側の谷沿にある平坦面で、標高90～97ｍを測る。この地点は宅地等に利用されていた。いずれの地点でも小瀬戸城に関する遺構の存在を想定して調査を実施した。

調査方法と確認状況　74―１地点では、等高線に概ね直交・平行する８ヶ所のトレンチを人力で掘削した。その結果、焼土を含む土坑や溝、縄文時代の石斧が検出されている。74―２地点でも等高線に直交・平行する位置に30本のトレンチを設定し人力で掘削した。地点の中程にある尾根上において現況地形で観察されていた尾根に平行する方向の幅の広い溝は、掻き揚げられた土が両側に盛られ、深さは２ｍに及ぶことが判明した。また、尾根の平坦部を中心に、複数の土坑や溝が検出されている。74―３地点に

第３表　調査実施期間

遺 跡 名	地点(内容)	面積(㎡)	平成９年度												平成10年度												平成11年度												平成12年度					
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
—	67(確認)	35																																										
—	68(確認)	340																																										
キョウダイヤト遺跡	69(確認)	942																																										
	69(本調査)	169																																									
内牧城跡・キョウダイヤト遺跡・城山古墳	70(確認)																																										
	70(本調査)	4,872																																									
—	71(確認)																																										
小瀬戸遺跡	73(確認)	1,347																																										
	73-3(本調査)																																										
栗ヶ沢遺跡	74(確認)																																										
	74-2(確認)																																										
有東遺跡	(本調査)	662																																									

遺 跡 名	地点(内容)	面積(㎡)	平成12年度						平成13年度												平成14年度												平成15年度											
			10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
—	67(確認)																																										
—	68(確認)																																										
キョウダイヤト遺跡	69(確認)																																										
	69(本調査)																																										
内牧城跡・キョウダイヤト遺跡・城山古墳	70(確認)																																										
	70(本調査)																																										
—	71(確認)																																										
小瀬戸遺跡	73(確認)																																										
	73-3(本調査)	21,163																																									
栗ヶ沢遺跡	74-2(確認)	200																																									
	74-2(本調査)	7,352																																									
有東遺跡	(本調査)																																										

ついては、等間隔に８ヶ所のトレンチを設定し、重機を用いて掘削した。近現代の造成が激しく、遺構・遺物は確認されていない。

結果　74－１・２地点では、縄文時代と中世以降の遺跡が確認された。74－３地点では遺構・遺物は検出されなかったため、本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。なお、この地点の確認調査の多くは、静岡市教育委員会が担当し、本調査は74－１地点を静岡市、74－２地点を当研究所で分担し実施している。

⑼　No.75地点

位置・立地と現況　静岡市葵区飯間、飯間谷川左岸に位置する。西側の丘陵裾部から飯間谷川に近い低地部にかけて西から東へ傾斜する地形であり、現在は安定した丘陵裾部を宅地等の居住域に、低地部を水田や畑に利用している。調査地点は２ヶ所に分かれ、下流側をＡ区、上流側をＢ区とした。

調査方法と確認状況　Ａ区・Ｂ区ともにトレンチを設定し、人力・重機で掘削した。Ａ区の丘陵裾部からは土坑や小穴が、低地部からは水田が検出されている。Ｂ区では遺構・遺物は検出されず、丘陵裾部

を中心にみられる平坦面は現代の造成によるものと把握された。

結果　A区では、戦国時代にあたる遺跡が存在することが把握された。B区では遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。なお、この地点の確認調査・本調査については、静岡市教育委員会が担当している。

第4節　本調査

1　本調査の方法と経過

本調査を実施した対象地点とその範囲は、前節で述べた確認調査の結果に基づいて静岡県教育委員会から示されたものである。なお、本調査を実施した対象地点および対応する遺跡名は、No.69地点キョウダイヤト遺跡、No.70地点キョウダイヤト遺跡・内牧城跡・城山古墳、No.72地点小瀬戸城跡、No.73—1～3地点小瀬戸遺跡、No.74—1地点小瀬戸城跡、No.74—2地点栗ヶ沢遺跡、No.75地点番匠カイト遺跡及び有東遺跡の8箇所であり、No.72・73—1・73—3・74—1・75地点の調査を静岡市が、他を当研究所が実施した。

本調査の実施においては、調査範囲及び調査に必要な諸用地（作業員棟・駐車場用地等）が確保できたこと、立木伐採・除去等の調査環境が整うこと、調査を行う体制が整うことといった条件がそろい、要請のあった順に開始することとなった。したがって、西から東、東から西へといったような整理された順序で調査を実施することはできなかった。

調査の方法は、第3節で述べた調査体制の中である程度の統一を図った。しかし、詳細においては各調査で異なるため、各遺跡の調査方法と経過については、各遺跡の報告で述べることとする。

2　本調査の概要

静岡市西部地区の調査結果の概要は以下のとおりである。ここでは時代ごとに発見された遺構・遺物を概観してみたい。

縄文時代　縄文時代の遺構は、栗ヶ沢遺跡（No.74—2地点）で検出されている。前述のとおり、藁科川沿いには小規模な縄文時代遺跡が点在しており、今回の発見もこの類型と捉えられる。栗ヶ沢遺跡では、山間部の尾根上、あるいは鞍部の比較的平坦面が発達した部分に生活の痕跡が集中していることが特徴である。遺構は土坑や小穴であり、竪穴住居は明確でない。近接する養源山遺跡は山裾にあり、栗ヶ沢遺跡とは立地を異にする。現在では資料が少なく明確にできないが、時期によって生業や居住する環境が変わっているのであれ

写真1　本調査の状況（小瀬戸遺跡）

ば興味深い。

弥生時代～古墳時代　弥生時代の遺構は、有東遺跡で検出されている。中期のものと考えらえる掘立柱建物４棟以上、土坑、溝、小穴等が検出され、同時期の土器、石器・石製品、木製品が多量に出土している。調査面積は狭かったものの、遺跡の中心域の一角であった可能性が高い。

古墳時代については、城山古墳（№70地点）が調査されている。この古墳は、丘陵の南向き斜面に単独で築かれる、横穴式石室を主体部とする古墳である。石室の側壁は二抱え大程度の割り石で積まれ、床には部分的に拳大前後の円礫が敷かれていた。遺物は盗掘等によってほとんど残されていなかったが、玄室の全面から出土した須恵器の坏身から７世紀後半～末頃の年代が知られる。このような、丘陵端部に単独で築かれる古墳は安倍川中流域右岸に複数あり、他の地域に普遍的に見られる群集墳とは異なったあり方を感じさせる。

古代　古代の資料はキョウダイヤト遺跡（№69・70地点）、内牧城跡（№70地点）で検出されている。キョウダイヤト遺跡からは広い範囲にわたって奈良～平安時代初頭の遺構が検出されている。北側に内牧城がのる丘陵を控えた谷部からは、須恵器の浄瓶や土師器の甕が埋め込まれた土坑が検出されている。この丘陵の表層は破砕した岩石からなっているため、谷を埋める堆積物は極めて崩れやすいものである。谷に面した部分に施設を設けるに際して、土砂崩れ等を予防し、施設を保護するための地鎮の意味が込められているものと考えられる。また、この丘陵と内牧川との間にも同時期の遺構が展開している。奈良時代～平安時代初頭には、この地域の中心的な施設が一帯に営まれていたことを窺わせる発見となった。また、小瀬戸遺跡（№73－３地点）から検出された平安時代の掘立柱建物群は、灰釉陶器や緑釉陶器を伴っており、周辺の中心的な施設であった可能性を窺わせる。

中世以降　内牧城跡（№70地点）は、南北朝期に南朝方の山城として整備されたものといわれる。調査の結果、城に伴う明瞭な遺構は確認されなかったが、周囲の急峻な地形は要害性を示すものとして大いに評価できるだろう。戦国期の遺構は、小瀬戸遺跡で水田が検出されている。度重なる水害を乗り越えて耕作を行っていた様子が把握されている。

第５節　資料整理

１　資料整理の体制

本事業では、第２節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は継続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかった。

現地調査・基礎整理を工区・地区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したため多くの資料整理が必要となってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施するのは物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区や地区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することとなった。

静岡市西部地区の資料整理は、平成15年度末時点で現地調査が全て終了できたため、平成16年度から部分的に開始した。現在（平成19年３月時点）、資料整理は中原整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、金属製遺物のクリーニングおよび木製品等の保存処理は当研究所保存処理室での実施を基本としている。

静岡市西部地区の資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに関わる資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は下の第４表のとおりであるが、他にも多くの者が参加している。

第４表　静岡地区資料整理の体制

			平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
所長			齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠
副所長			山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫		
総務部	常務理事兼総務部長		粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫
	次長				鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎
	総務課長		本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎
	担当	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	
		総務係長	山本広子	山本広子	山本広子	佐藤美奈子	佐藤美奈子	佐藤美奈子
		会計係長	大橋　薫	大橋　薫	野島尚紀	野島尚紀	野島尚紀	
		副主任	鈴木秀幸			中鉢京子		
		主事		鈴木秋博	鈴木秋博			
		事務員					調所由美	
調査研究部	部長		佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久	石川素久
	次長		栗野克巳 及川　司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	中嶋郁夫	稲葉保幸 及川　司
	担当課長		及川　司	篠原修二	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司
	工区主任		加藤理文					
	調査係長							河合　修
	主任調査研究員						河合　修	
	調査研究員		川上　努	川上　努	川上　努	川上　努	鈴木淑子	鈴木淑子
	副主任							中鉢京子
	事務員							調所由美

２　資料整理の方法と経過

現地調査・資料整理とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成していくこととなった。したがって各地区の最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめた本章（総論）を掲載することとした。

以上により、静岡市西部地区における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本書を「静岡市－１」として、総論と小瀬戸遺跡、栗ヶ沢遺跡の報告を掲載し、続く「静岡市－２」に有東遺跡、「静岡市－３」残る静岡市西部地区の遺跡（キョウダイヤト遺跡・内牧城跡・城山古墳）を、そして「静岡市－４」に静岡市東部地区（静岡市清水区）の総論とNo.66地点庵原城跡を掲載することとした。

資料整理の作業についてであるが、前述した資料整理の体制同様、現在資料整理継続中のために一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関わる資料整理の方法と経過は各遺跡の報告中に記すこととする。小瀬戸遺跡の資料整理および報告書作成作業については第２章第２節に、栗ヶ沢遺跡の資料整理および報告書作成作業については第３章第２節に記している。

写真２　整理作業の状況

第２章　小瀬戸遺跡（第二東名No.73－３地点）

第１節　位置と環境

１　位置と地理的環境

小瀬戸遺跡は、静岡県静岡市葵区小瀬戸の、標高58～80m程度の北向きに開く谷地形上に位置する。この谷（以下、「小瀬戸谷」と表記する。）は、小瀬戸谷川によって開析されたものであり、谷を埋める土砂も谷の入口付近は藁科川の影響を受けるが、他は小瀬戸谷川とその小さな支流がもたらしたものが主体となる。谷は、小瀬戸城がのる丘陵の張り出しによって入り口が狭められているが、半ばあたりでは幅が300m近くになる。奥行きは1.5km程度であるが、半ばから奥側にかけて100～50mに著しく幅を減じる。藁科川の流域には、このような小河川によって開析された谷がいくつもみられる。

谷には、岡部・藤枝方面と連絡する県道静岡朝比奈藤枝線が通っている。谷を400mほど入った場所左側には、独立した小丘陵があるが、本来は西側の丘陵と尾根でつながっていたものであり、この県道が建設されるに際して掘り割られて現状の姿となっている。

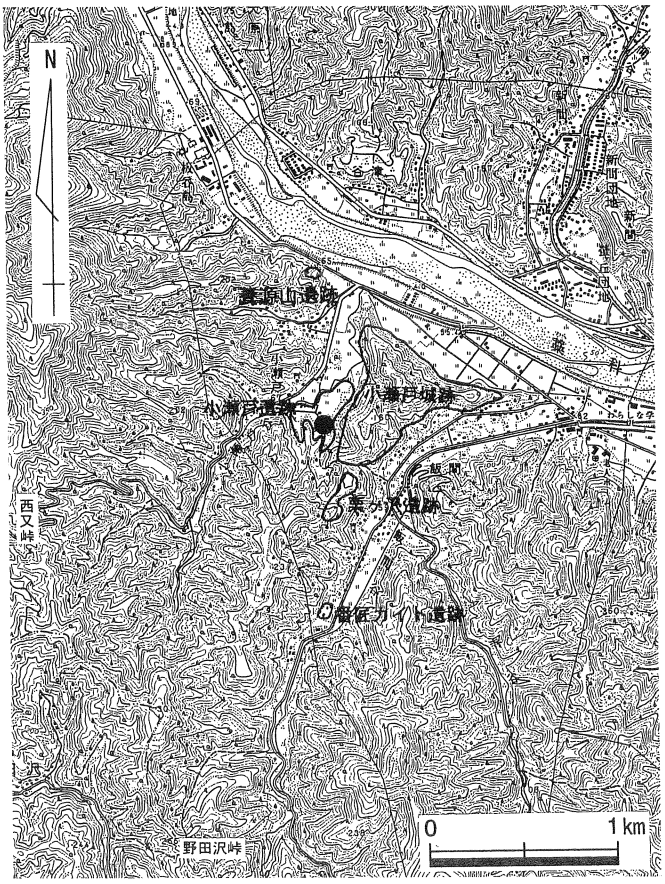
谷を流下する小瀬戸谷川は、周囲から流入する澄んだ沢水によって流量も豊富である。第二東名をはじめとした開発が進む中にあっても、ハヤなどが群れる景色がみられることには安堵させられる。

２　歴史的環境と調査歴

小瀬戸遺跡は、第二東名事業に伴って把握された新発見の遺跡である。したがって本事業に着手する以前の調査歴は皆無である。現在集落域となっている丘陵裾部は、小瀬戸谷川や安倍川の水害を避けうる場所であり、集落域として永らく使われてきたことは想像に難しくないが、埋蔵文化財包蔵地として把握されていないため、考古学的手法では探求が及んでいない。

小瀬戸谷入り口の西側丘陵には、縄文時代の養源山遺跡がある。第１章でも触れたように、藁科川流域には同様の小規模な縄文遺跡が分布している。養源山遺跡の内容は不確かであるが、藁科川上流部から大井川流域へ、小瀬戸谷から岡部・藤枝方面へと縄文時代遺跡が多くみられる地域へ抜けることが可能な地域にあるだけに、この立地は興味深い。

遺跡の東側に突き出た丘陵の末端部には、小瀬戸城が築かれている。この城は、安倍城の一支城として位置付けられているが、築城年代等定かでない部分が多く、実態はよく分



第７図　本調査の位置と周辺の遺跡

からない。ただし、本曲輪東側に二重の堀切が築かれるところをみると、恐らく今川氏の退去後にあたる元亀・天正年間に武田氏などの手によって改修されているのであろう。

小瀬戸谷には、南朝に関わるとされる小字や一定の機能を示す小字が認められる。現在の県道によって開削された小さな尾根の張り出し部（天神森と呼ばれる）内側は「門内」と呼ばれ、谷の内側からみた空間の限界を示すものと理解でき、興味深い。この奥側には興良親王の御所があったといわれる「ゴショノ谷」があり、その周辺に「右エ門屋敷」、「常進屋敷」、「居廻り」などの小字がある。ちなみに、今回の調査区は「右エ門屋敷」、「居廻り」の付近にあたる。

また、小瀬戸谷西側の丘陵部には、駿府城築城に伴う石切場が残されている。

第２節　調査の方法と経過

１　発掘調査の方法

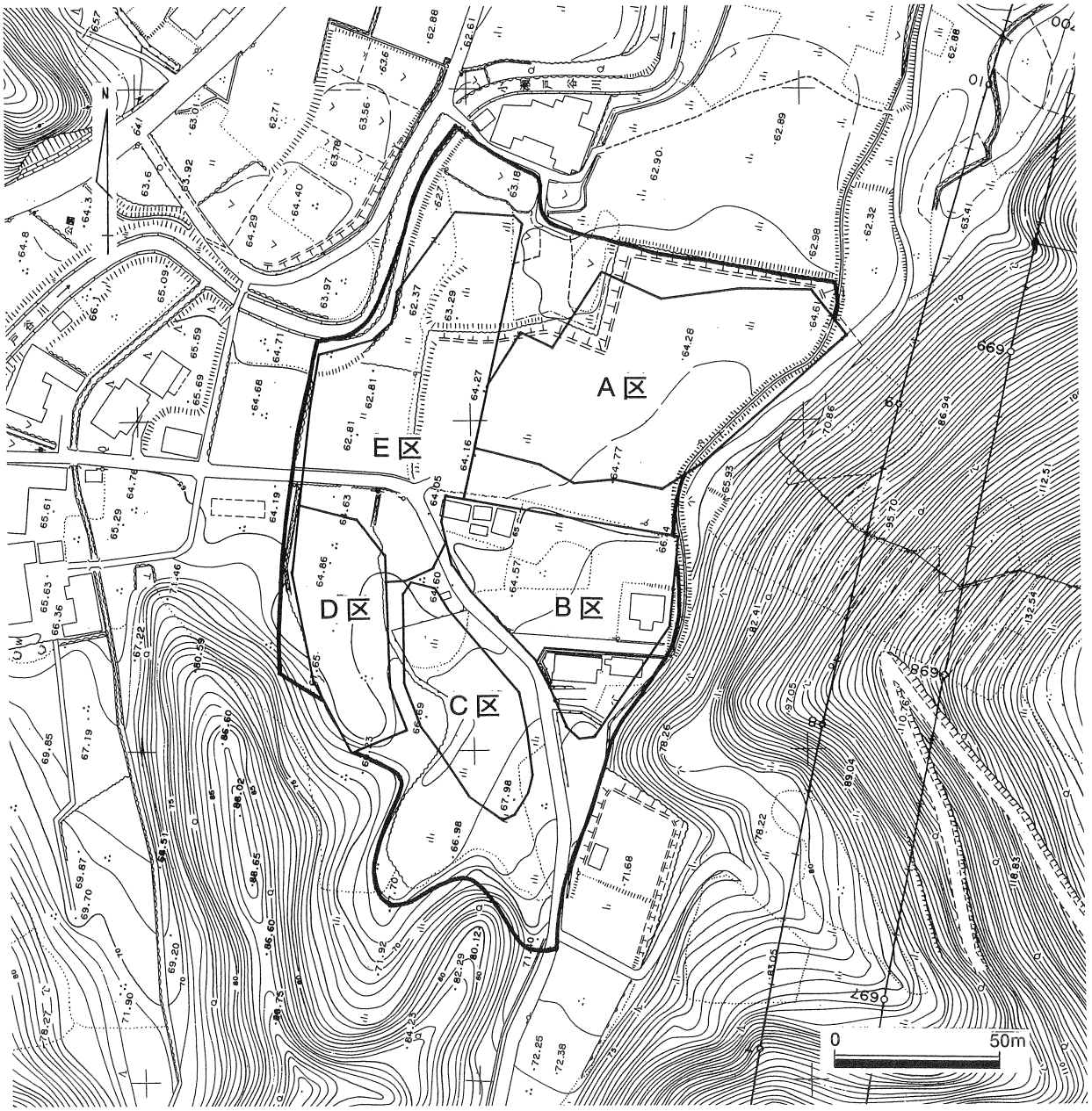
本調査に先立って、平成11年４月26日から７月22日までに、調査対象範囲の北側に対して試掘・確認調査を実施した。開発対象となる範囲を河川や地物・地形によってＡ～Ｅ地区（本調査の地区分けとは異なる。）に区分した上、基本的には15～20ｍ間隔で設定した３～５ｍ四方のグリッドによって、Ａ地区で23箇所、Ｃ地区で18箇所の掘削を実施した。掘削は重機による表土及び耕作土の掘削後、人力により精査をおこなった。その結果、戦国期を中心とする中世の水田の存在が把握され、部分的に古代まで遡る遺物・遺構の存在が確認された。なお、Ｂ・Ｄ・Ｅ地区については、静岡市教育委員会が試掘・確認調査を実施している。

調査の記録は、掘削作業と併行して実測と写真撮影をおこなった。実測は主にトータルステーションを使用し、トレンチ設定図、遺構検出状況図、土層断面図を図化した。写真撮影は35㎜判のカラーネガを使用した。

本調査段階では、試掘・確認調査の成果も加味し、調査対象地を73―１～３地点の三つに区分し直した。当研究所は対象地半ば付近に位置する73―３地点を分担し、本調査を実施した。本調査においては、重機を用いて耕作土等を除去した後、国土座標に乗った10ｍメッシュのグリッドを設定した。グリッド杭の打設は業務委託により、グリッド間隔と同様に実施した。グリッド番号は、南北方向に北からＡ～Ｆとし、東西方向は西から１～９とした。更に、地物の事情や工程の関係から地区内をＡ～Ｄの４つの調査区に分割し、平成14年度にＡ～Ｄ区、15年度にＥ区の調査を実施した。

包含層及び遺構の掘削はすべて人力によって実施した。排土は場内に仮置きし、調査終了後各調査区ごとに埋め戻した。遺構番号は調査の進展に合わせて、各調査区ごとに基本的には北から南へ随時付けていった。ただし、追加して実施した精査によって検出されたものについては、発見時で最も若い番号を付けて整理した。また、本来ひとつの遺構を構成する掘立柱建物などは、柱穴個々の遺構番号と別に、アルファベットと数字によって構成される記号（SH１など）を別に冠した。遺構内の出土遺物については、元位置にあると思われるものは1/10～20の縮尺で出土状況を図化して取り上げ、混入したと思われるものについては、遺構ごとに取り上げた。また、遺構外出土遺物は、グリッドごとに取り上げた。

測量はトータルステーションを使用し、遺構全体図は空中写真測量をおこなった。写真撮影は６×７判のモノクロと35㎜判のカラーネガ、モノクロ、カラーリバーサルを使用し、全景写真は空中写真撮影を委託により実施した。



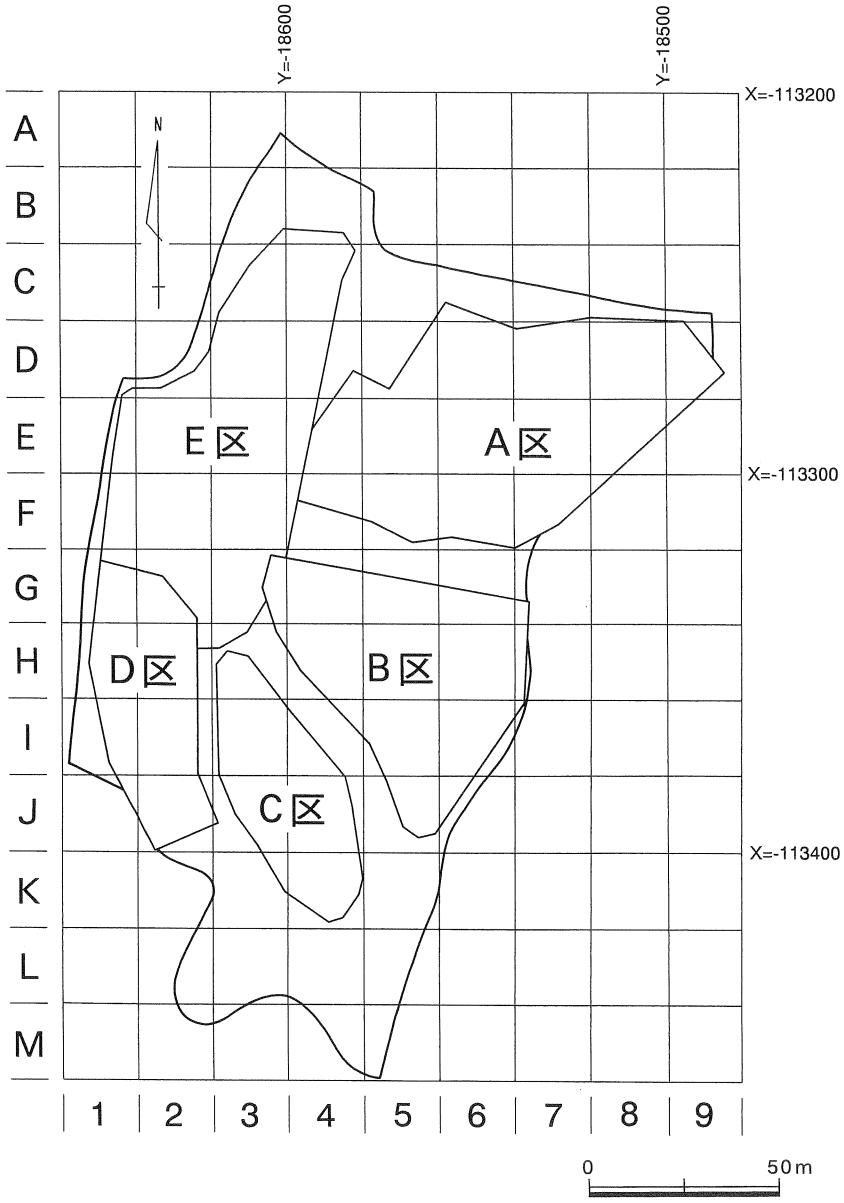
第８図　調査区と周辺地形図

２　発掘調査の経過

本調査は、平成14年５月13日から平成16年２月27日までのおよそ１年９ヶ月にわたって実施した。各調査区の調査経過は次のとおりである。

Ａ区　平成14年５月13日から重機を用いて表土除去を実施した。７月８日、表土除去終了に合わせて場内に排土用のベルトコンベアーを搬入して、人力掘削を開始した。同月18日から上層の遺構検出作業を始め、遺構の全体像を把握した後に遺構掘削を実施して９月５日に終了した。この後、写真撮影のため調査区内外の全体清掃を開始し、同月12日に写真測量の撮影を行った。翌日には調査に際して設置した配電施設等撤去し、10月30日までに埋め戻しを実施して調査を終了した。

Ｂ区　Ａ区の表土除去が終了した７月８日から重機を用いて表土除去を開始した。９月11日から遺構検出面の排水設備を整え、18日から排土用のベルトコンベアーを搬入して、人力掘削を開始した。上層遺



第９図　グリッド配置図

構の掘削は検出できた部分から随時開始し、11月21日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始し、同月29日に撮影を行った。翌日から12月17日まで実測を要する部分の解体に着手した。19日に場内の機材を撤去して、埋め戻しに移行した。

Ｃ区　Ｂ区の人力掘削が後半に差し掛かった10月30日から重機を用いて表土除去を開始した。12月12日から遺構検出面の排水設備を整え、週明けの16日から排土用のベルトコンベアーを搬入して、人力掘削を開始した。上層遺構の掘削は検出できた部分から随時開始し、平成15年２月５日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始し、同月７日に撮影を行った。翌日からは、18日まで実測を要する部分の解体に着手した。20日に場内の機材を撤去して、埋め戻しに移行した。

Ｄ区　Ｃ区の表土除去が終了した後の12月13日から重機を用いて表土除去を開始した。平成15年２月５日に遺構検出面の排水設備を整えて、翌日から排土用のベルトコンベアーを搬入して、人力掘削を開始した。上層遺構の掘削は検出できた部分から随時開始し、平成15年３月13日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始して、撮影を行った。翌日からは、18日まで実測を要する部分の解体に着手した。３月18日に場内の機材を撤去して、埋め戻しに移行した。

Ｅ区　Ｅ区の重機掘削に先立って、Ｄ区の調査が終了した翌週にあたる３月24日から月末にかけて、調査区内に存在した土側溝の付替えを実施した。表土除去は、年度明けの４月７日から開始した。重機作業と並行して５月22日以降、表土が除去された部分から上層遺構の人力による遺構検出作業を開始した。７月３日、降雨による冠水・隣接する工事法面の崩落・調査地区への土砂の流入等があり、翌日から18日までを復旧に要した。７月22日、本格的に調査再開し、10月24日までに終了した。この後、写真測量のため、調査区内外の全体清掃を開始し、30日までに撮影を行った。翌週からは、下層遺構（集落）の広がりを把握するために試掘坑を８箇所で掘削し、11月17日から下層遺構の乗る整地層を北側から検出

し始めた。平成16年１月５日から、検出された遺構の掘削を本格的に開始し２月12日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始し、19日に撮影を行った。翌日からは、下位の遺構を探したが検出されず、整地層を除去しながら場内の機材を撤去して、３月１日以降に埋め戻しへ移行した。

3　資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業（出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測、写真整理、図面整理・修正、各種台帳作成等）は、小瀬戸遺跡の現地調査終了後、他の現地調査と並行して実施した。

平成15年度末の時点で静岡工区静岡地区の現地調査がほぼ終了したことから、平成16年度から静岡工区藤枝地区の一部を除いた静岡工区の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要としていた複数の遺跡の中で、小瀬戸遺跡は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。遺構図・遺物実測図の修正・編集・トレース、遺物の写真撮影、報告の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は６×７判のモノクロ及びカラーポジを用いた。

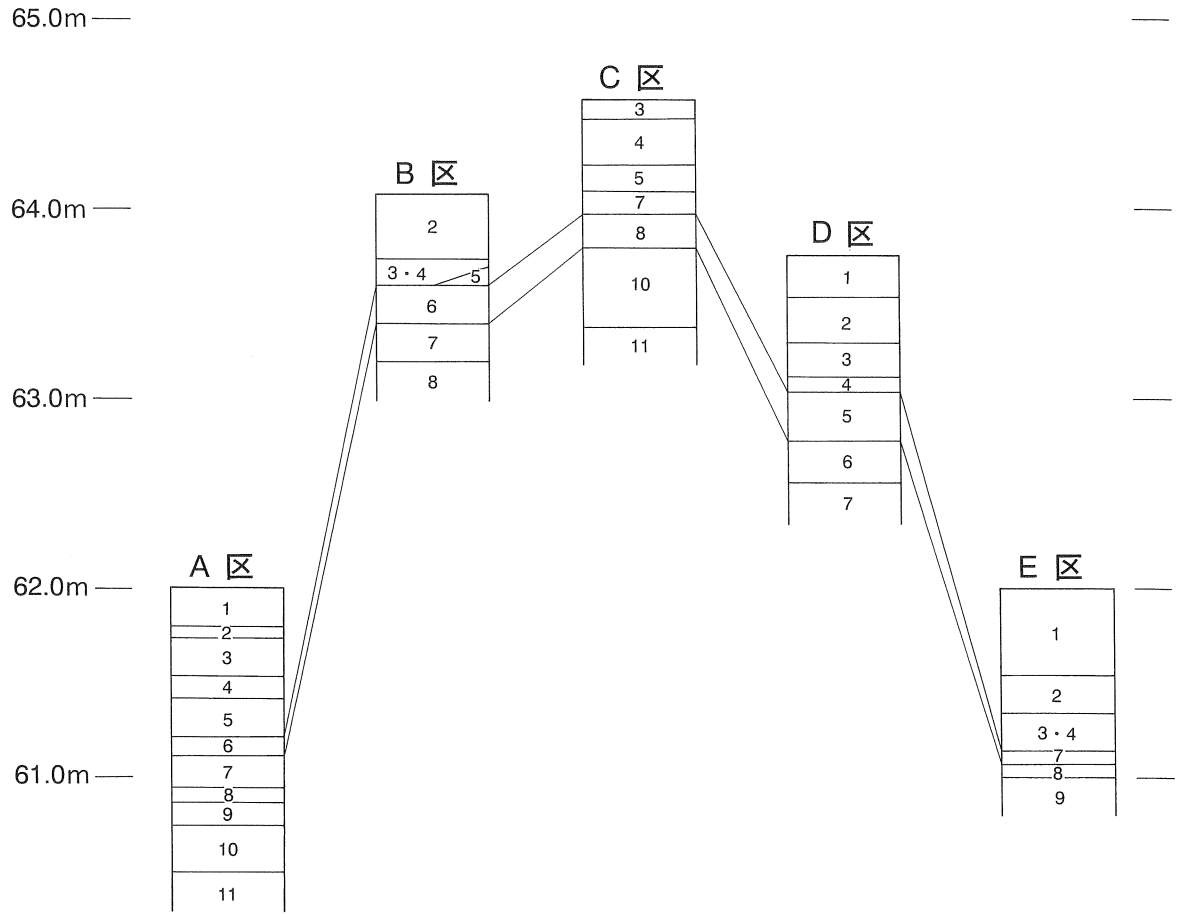
第3節　概　　要

1　地　形

小瀬戸遺跡が営まれている谷底平野は、幅50～300m、奥行き1.5kmで北へ平均２％前後で下る。両側を150～200mほどの丘陵に挟まれるため、日照時間は平野部に比べ制限される。谷底平野は主に藁科川や小瀬戸谷川によってもたらされた砂礫層を基盤としており、上位には水性堆積によるシルトや粘土がラミナを伴い堆積する。従来からの集落は、谷の西側の山裾に沿って営まれている。この傾向は、水害を受けにくい、より安定した地域に居住域を求めたことに起因すると思われる。藁科川の川入や小瀬戸谷川の氾濫によって谷が冠水した場合、谷の入り口が小瀬戸城の乗る丘陵や「門内」に接する小丘陵によって狭められているために、速やかな排水が促されない傾向にある。今回の一連の調査によって随所で確認された水性堆積は、河川の氾濫に伴ってしばらく湿地となり、排水後耕地として再開発されるというサイクルが幾度となく繰り返されていたことを物語っている。

2　土　層

遺跡は谷の奥にあたる南側から、谷の入り口がある北側へと徐々に傾斜した地形である。谷の埋土は、前述のように比較的蛇行しながら流れる小瀬戸谷川や、藁科川の影響も受けた水性堆積によるものである。砂礫層の間に数層のラミナを伴うシルト・粘土層を挟む傾向がいずれの地点からも窺えることからも、この地域が周期的な水害を被っていたことが知られる。第10図は、各地点で検出された水田耕作土を基軸に相関関係を示したものである。水田耕作土に用いられる土の質や、その上下に位置する土層の関係、それぞれの層厚が地点ごとに異なっていることはまさにこのことを示しているのだろう。



第10図　A～E区土層相関図

A区の土層（第49図）　A区は、南から北に向かって下がり、東西はほぼ水平な堆積が見られる。丘陵裾部に近いａにおいては、砂礫層（11層）及びこの下に位置する粘土と砂礫の互層が比較的浅いところから出現するのに対し、ｃより北側では出現しない。つまり、元来この場所は北から南方向に急激に落ち込んでいたことが判明する。東西方向に関しては、ｆ～ｊにおいては概ね６層下位に厚さ10～40cmの粘土と砂礫の互層が堆積する。この部分でも急激な落ち込みを示すａ－ｄラインに対して砂礫層（11層）の落ち込みがみられる。つまり、調査区のほぼ中央に北から南に向けて元来窪んでいた部分があったことが判明する。この窪みは永く微地形として残され、さらに後年に河川の侵入が起こったことにより一時湿地化して、上位の粘土と砂礫の互層を部分的に残す結果となったのだろう。上位の粘土と砂礫の互層より上に堆積する１層～６層は粘土を主体とする層位で、５～25cm程度の厚さをもち灰色～褐色を呈する。このなかで最下位にあたる６層で戦国時代～近世の水田を検出している。一方、上位の粘土と砂礫の互層より下に堆積する粘土層は白色を呈するものがある（８層）。この変化は上位の粘土と砂礫の互層に含まれる地下水の影響であろう。

B区の土層（第54図）　B区においては南から北へ下る土層が確認されている。基盤となるのは青灰色砂礫層（８層）であり、この時点でみられる傾斜がほぼ現在まで踏襲されている。この上位は粘土層を主体とするが、ラミナを含む粘土層（６層）や砂礫層（５層）を含んでいるため、河川の侵入と湿地化が起こった時期がみとめられる。主に耕作土ととされる部分は炭酸鉄（管鉄）が入る３～４層である。この層は南側では比較的安定しているが、低位にあたる北側では漸移的に同化する。戦国時代～近世の水田は６層上で検出している。

C区の土層（第58図）　C区においても、南から北へ徐々に下る土層が把握されている。基盤となる

砂礫層（12層）は上位にラミナが入る粘土層（10・11層）を伴い、河川の侵入による湿地化がおこっていることが判明する。10層上には再び部分的に砂やラミナが入る砂礫層（９層）が堆積する。この９層の上位にあたる土層はある程度安定していたものと考えられ、炭酸鉄（管鉄）を含む５・７・８層などが水田耕作土として利用された層位である。戦国時代～近世の水田は、Ａ－Ａ′断面８層上で検出している。

Ｄ区の土層（第59図）　Ｄ区は、Ｂ・Ｃ区に比べればさほどでもないが、やはり北へ向かって若干下る土層が確認されている。ここでも基盤となるのは砂礫層であり（Ａ－Ａ′断面５層、Ｂ－Ｂ′断面７層）、その上位に粘土層が堆積する。しかしＢ－Ｂ′断面の位置では、これら粘土層の上位に砂礫層と薄い砂層が堆積するため、ある時期に川入りして荒地となっていることが判る。戦国時代～近世の水田はＢ－Ｂ′断面５層上で検出している。

Ｅ区の土層（第63・64図）　Ｅ区も、他の調査区と同様に北へ向かってやや下る土層を確認している。Ａ－Ａ′断面の基盤となるのは砂礫層（９層）である。この上には粘土層が堆積するが、中位と上位に更に砂礫層が堆積するなど、他の地点に比べ河川の影響が大きかったことが知られる。また、不整合がみられる２・４・７層も粘土でありながら水性堆積によるものと考えられる。このように、Ｅ区においては耕作域が小瀬戸谷川の氾濫によって、頻繁に利用不可能になっていたことが判明する。戦国時代～近世の水田は７層上で検出している。また、下位に古代～中世前期（９～11世紀）の集落が営まれている。これはＡ－Ａ′断面の８層、Ｂ－Ｂ′断面の７層上にあり、これらの層位は山裾から切り出されて敷かれた整地層であると考えた。

３　遺構・遺物の概要

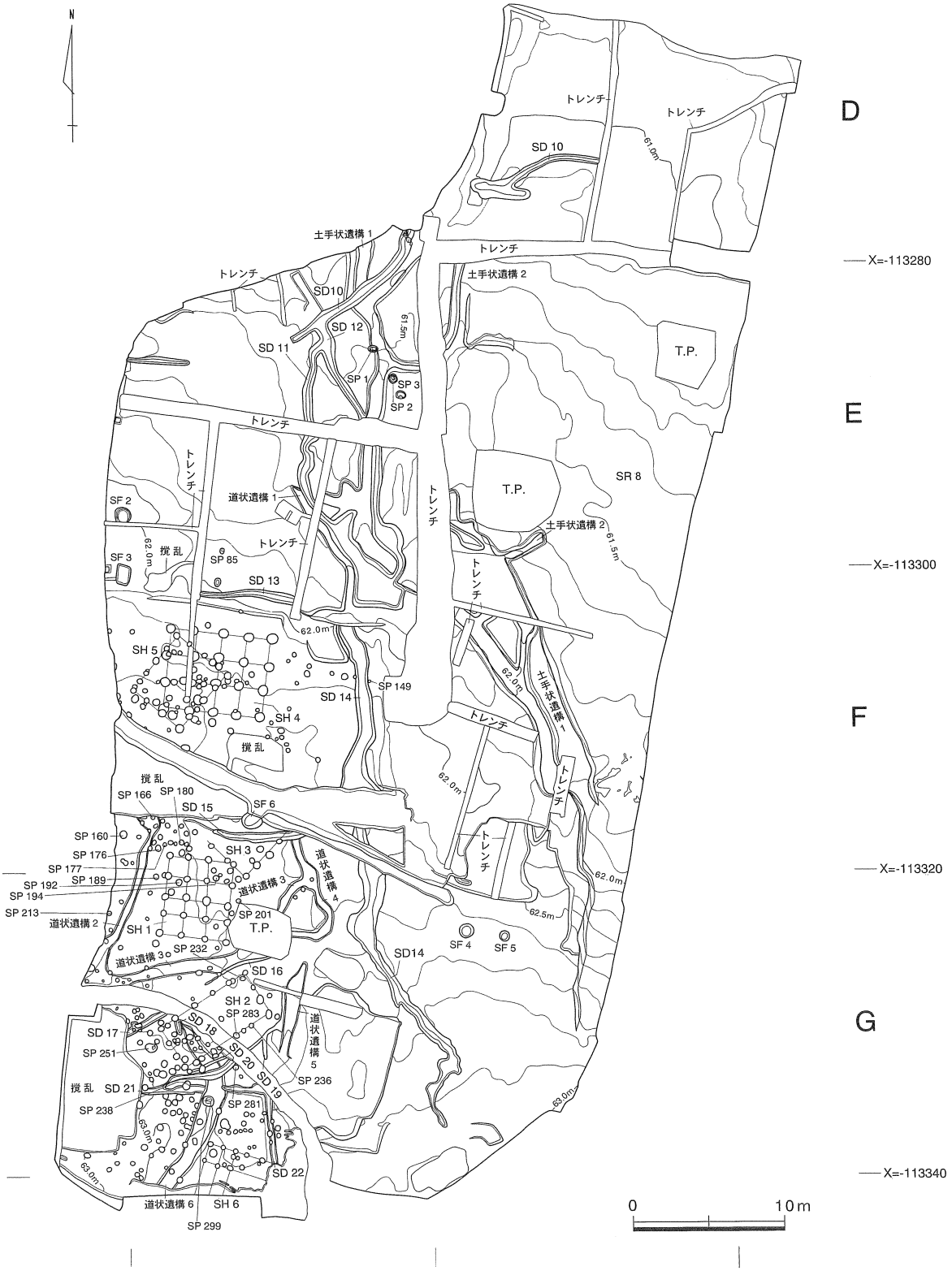
遺構は、戦国期（16世紀）～近世の水田（上層遺構）、平安時代（９～12世紀）の集落（下層遺構）が検出されている。このうち、平安時代の集落はＥ区にのみ存在し、他では検出されていない。

戦国期～近世の水田は、調査を実施したすべての調査区から検出された。水田面は標高65.6～60.4mの間にあり、南から北へ３％程度の勾配を持って下る（第44・47・48図）。Ａ・Ｂ・Ｄ区は東側に広がる丘陵の影響を受け、上位の等高線が丘陵方向に流れる傾向がある。水田の区画である畦畔は等高線に沿う方向にある。東西・南北方向を基幹とし、山際では東よりに振れてくる。水田の作土は粘土が主体となるが、水性の堆積土がいたるところに見られ、耕作・氾濫による川成・開拓のサイクルが幾度となく繰り返されてきたことが知られる。遺物は主に古瀬戸後期Ⅳ新段階から19世紀代までの瀬戸美濃製品・志戸呂製品が出土している。擂鉢、碗皿類など一般的な生活雑器が主体である。

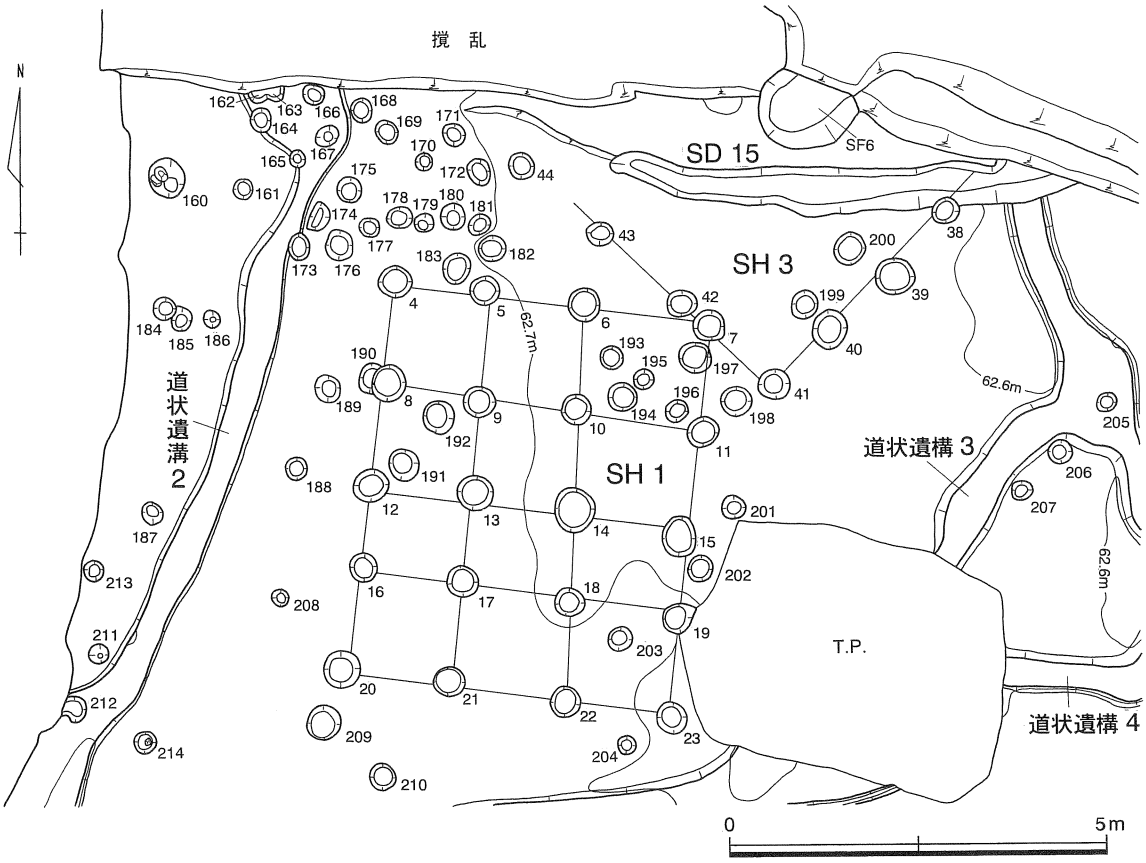
古代～中世前期の集落は、Ｅ区の下層から検出されている。南北方向に近似した総柱の掘立柱建物が古く、側柱の掘立柱建物がより新しい時期にあたる。これらは整地層とみられる層位の上位に築かれており、東側の流路との間に土手状の盛り上がりをしつらえるなど、出水への対策を施している。遺物は、整地層の上面や柱穴から緑釉陶器、灰釉陶器、山茶碗などが出土している。

第４節　下層遺構と出土遺物

小瀬戸遺跡の遺構面は、大きく上下２面からなる。上層遺構は江戸時代までの水田跡や畦などで、Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区に広がっていた。Ｅ区はさらに下部に灰色の整地層が有り、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出された。この部分とその周辺から陶器片などの遺物が出土している。他のＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区は江戸時代までの水田跡や畦などを検出したが、Ｅ区で検出した最下部灰色



第11図　下層遺構全体図



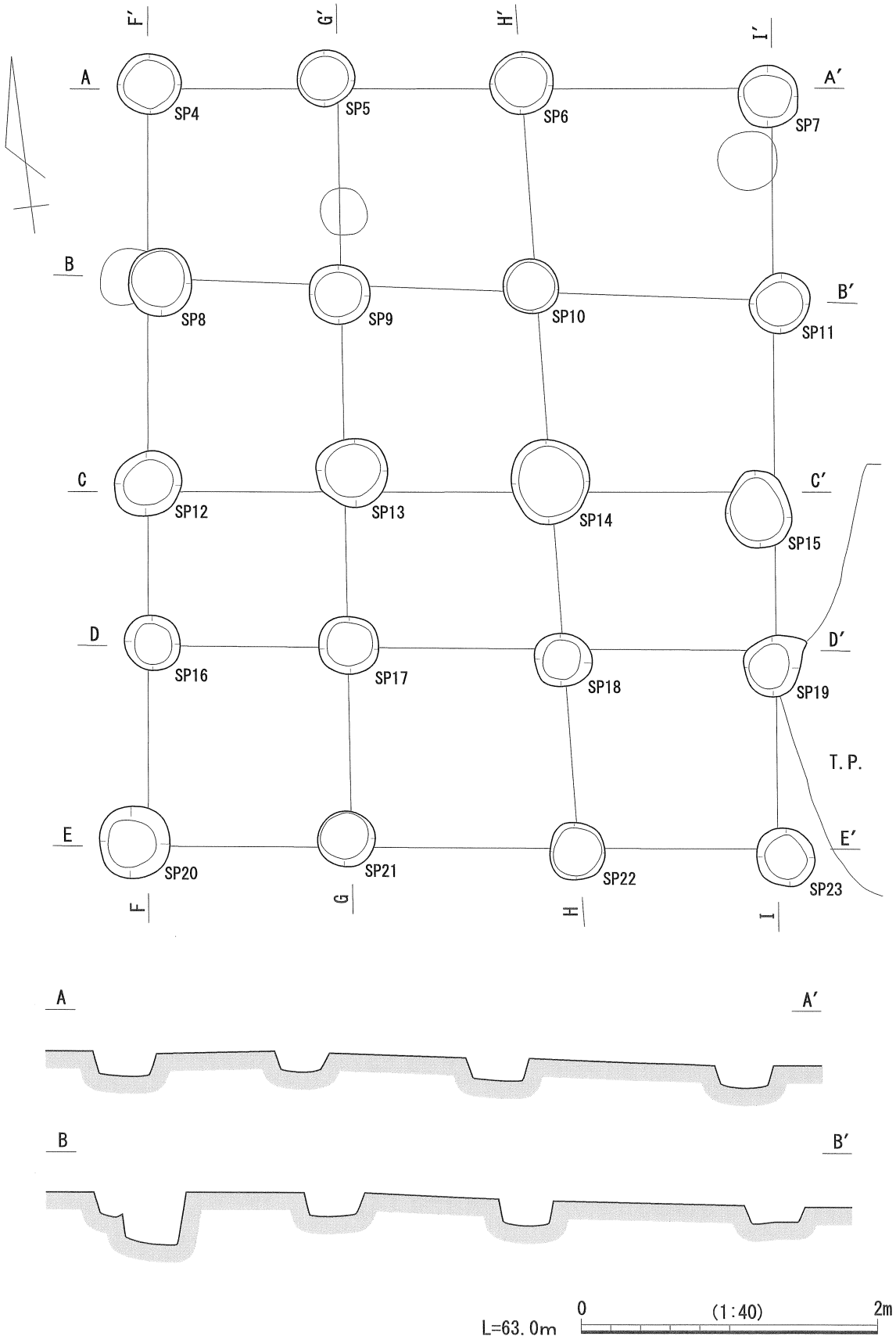
第12図　掘立柱建物SH１・３付近平面図

粘土層の整地は無かった。こうした状況で出土遺物を整理するにあたり、まず、Ｅ区出土遺物を「Ｅ区遺構外出土遺物区分け図」（第32図）に示したように分けて、遺構・地点・層位・年代ごとに出土陶器や土器を図示した。ことにＥ区は最下部で遺構を検出しており、これに伴って出土した陶器の製作年代を考慮して図示している。さらに、その周辺から出土した遺構に伴わない遺物も区分けして図示した。したがって、下層部Ｅ区出土陶器は、掘立柱遺構SH１・SH２・SH３・SH４・SH５出土陶器や土器、道状遺構１・２・４・５・６出土陶器や土器、溝状遺構SD11・SD12・SD13・SD14・SD15・SD17・SD21出土陶器や土器などの順序で図示している。

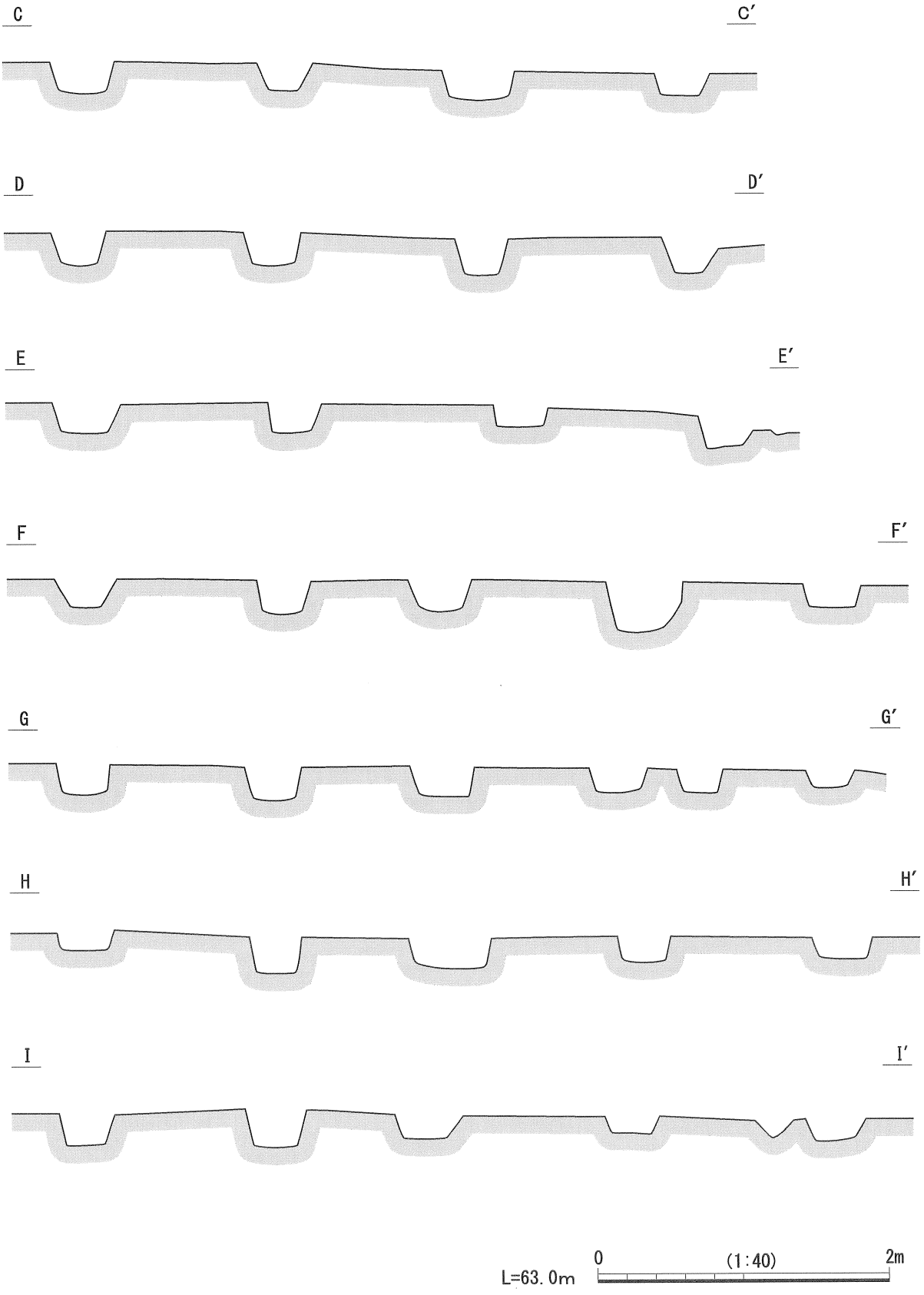
１　下層遺構

(1)　掘立柱建物跡（SH）

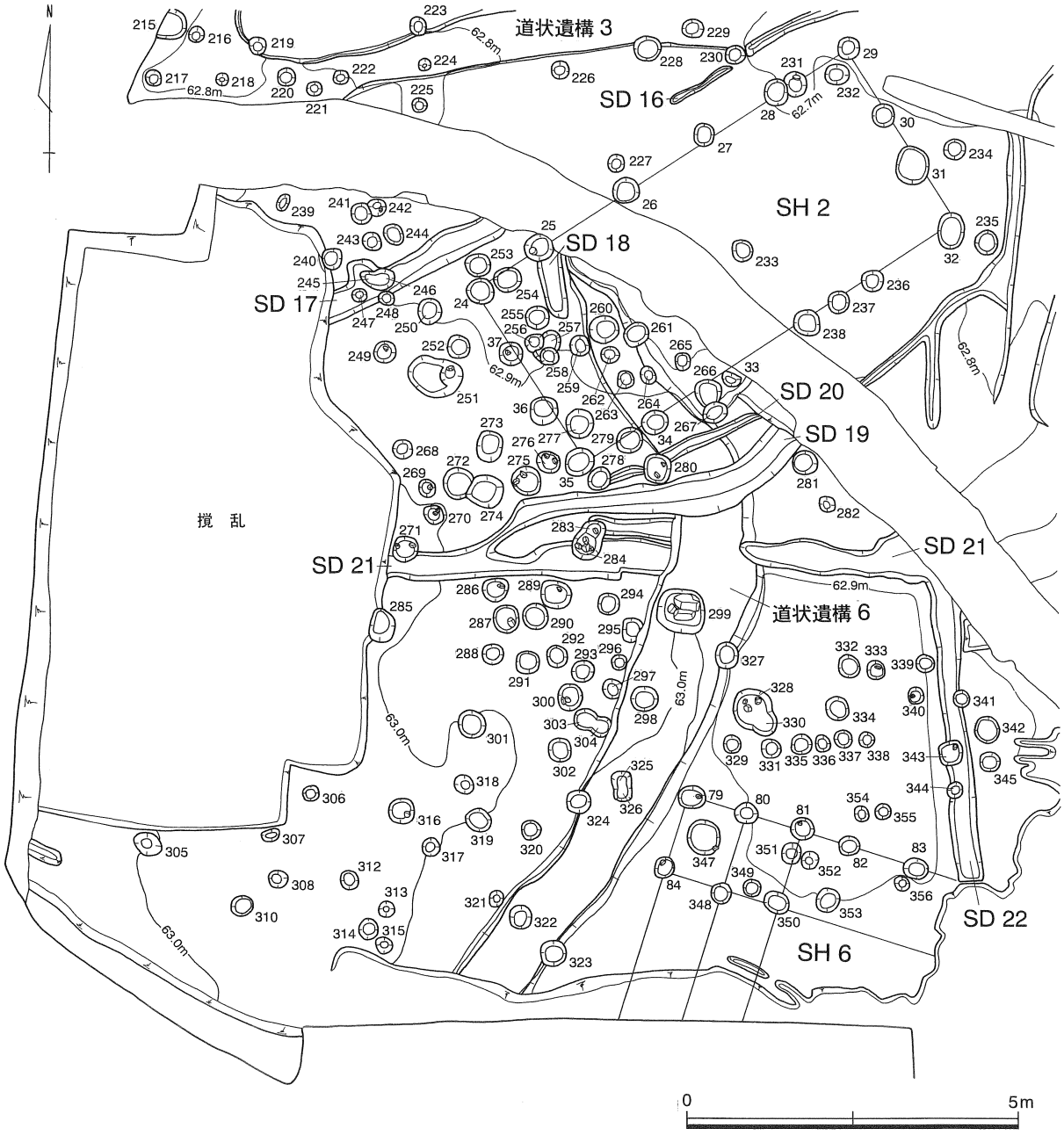
SH１（第11～14・28図・図版２）　ＳＨ１はＥ区Ｇ２・Ｆ２グリッドに位置する。平面形が長方形を呈する総柱建物であり、建物の方向はＮ－７°－Ｅである。規模は桁行４間（6.5m）、梁行３間（4.4m）で面積は21.82㎡である。柱穴の平面形状は円形がほとんどで、楕円形もあり、深さは平均0.2mであった。底面は標高62.6mから62.7mである。出土遺物は（１～19）で、８世紀から９世紀の遠江系土師器の甕（１・７）、Ｋ－14号窯式併行にあたる猿投窯生産の灰釉長頸瓶（８・９）、Ｋ－90号窯式併行にあたる猿投窯生産の灰釉陶器の碗（10）、東遠系の灰釉陶器碗（11）、糸切り碗（16・17）、Ｏ－53号窯式併行の助宗窯生産の碗（12）、同時期の長頸瓶（15）などが出土している。この建物の時期は９世紀後半から10世紀初頭と考えられる。



第13図　掘立柱建物SH１平面・断面図１



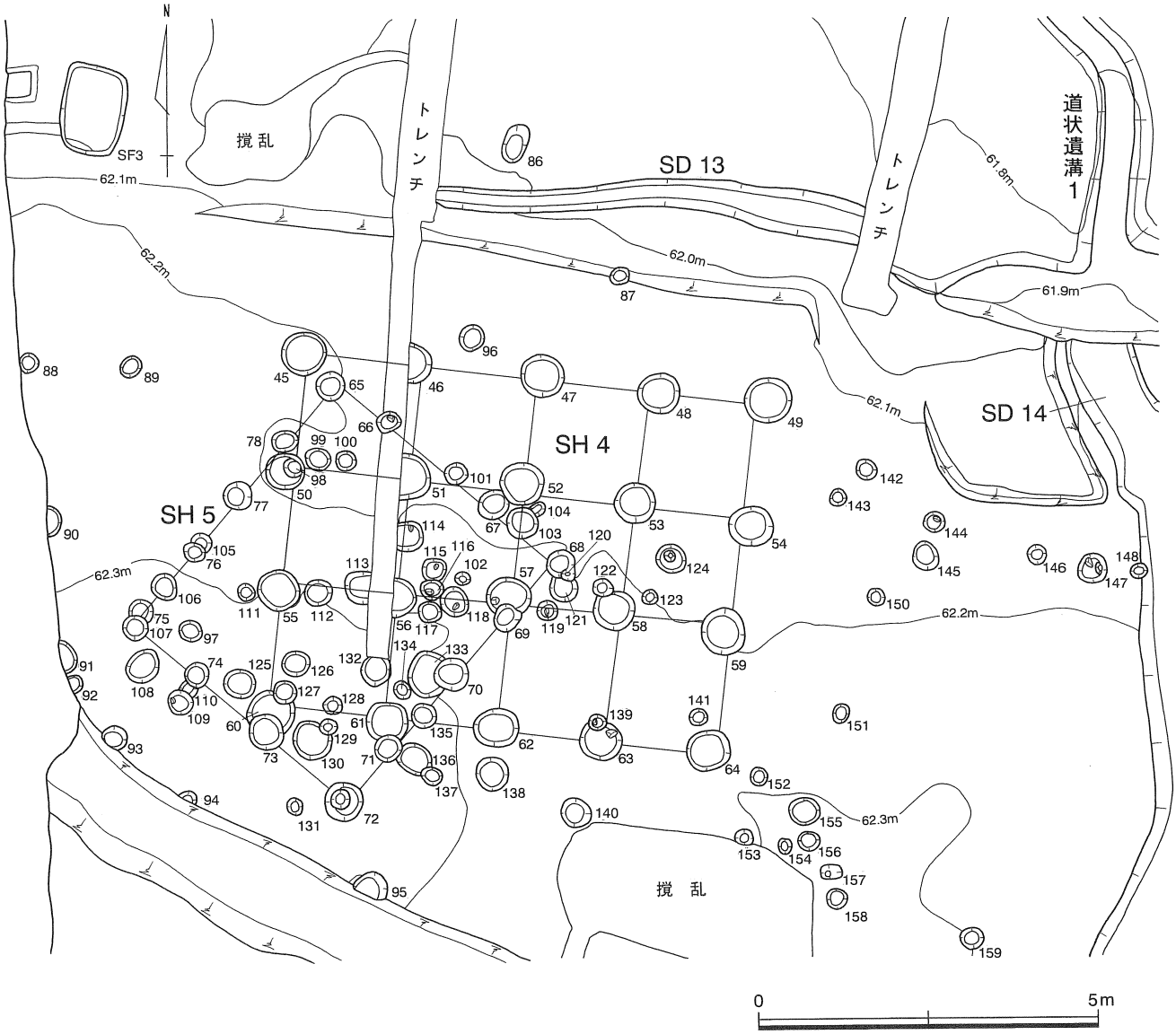
第14図　掘立柱建物SH１平面・断面図２



第15図　掘立柱建物SH２・６付近平面図

SH２（第15・17図・図版２）　SH２はＥ区Ｇ２・Ｆ２グリッドに位置する。平面形が長方形を呈する掘立柱による側柱建物であり、建物の方向はＮ－57°－Ｅである。規模は桁行５間（6.65m）、梁行３間（2.95m）で面積19.6㎡を測る。柱穴の平面形状は円形が多く、不定形と楕円形もあり、深さは平均0.256mであった。底面の標高は62.7mから62.9mである。出土遺物は（20～31）で、遠江系の土師器の甕（20）、助宗窯生産のＫ－90号窯式併行の灰釉陶器碗（23・24）、Ｏ－53号窯式併行の糸切り碗（25～27・29・30）、同時期の灰釉陶器の碗（28）、Ⅰ－２期の小碗（31）などが出土している。この建物の時期は12世紀前半と考えられる。

SH３（第12・18図・図版２）　SH３はＥ区Ｇ２・Ｆ２グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し北側が撹乱を受けた掘立柱による側柱建物であり、建物の方向はＮ－44°－Ｅである。建物の規模は桁行3.2m、梁行3.3m、柱穴の形状はすべて円形で、深さは平均0.175mであった。底面の標高が62.6mである。出



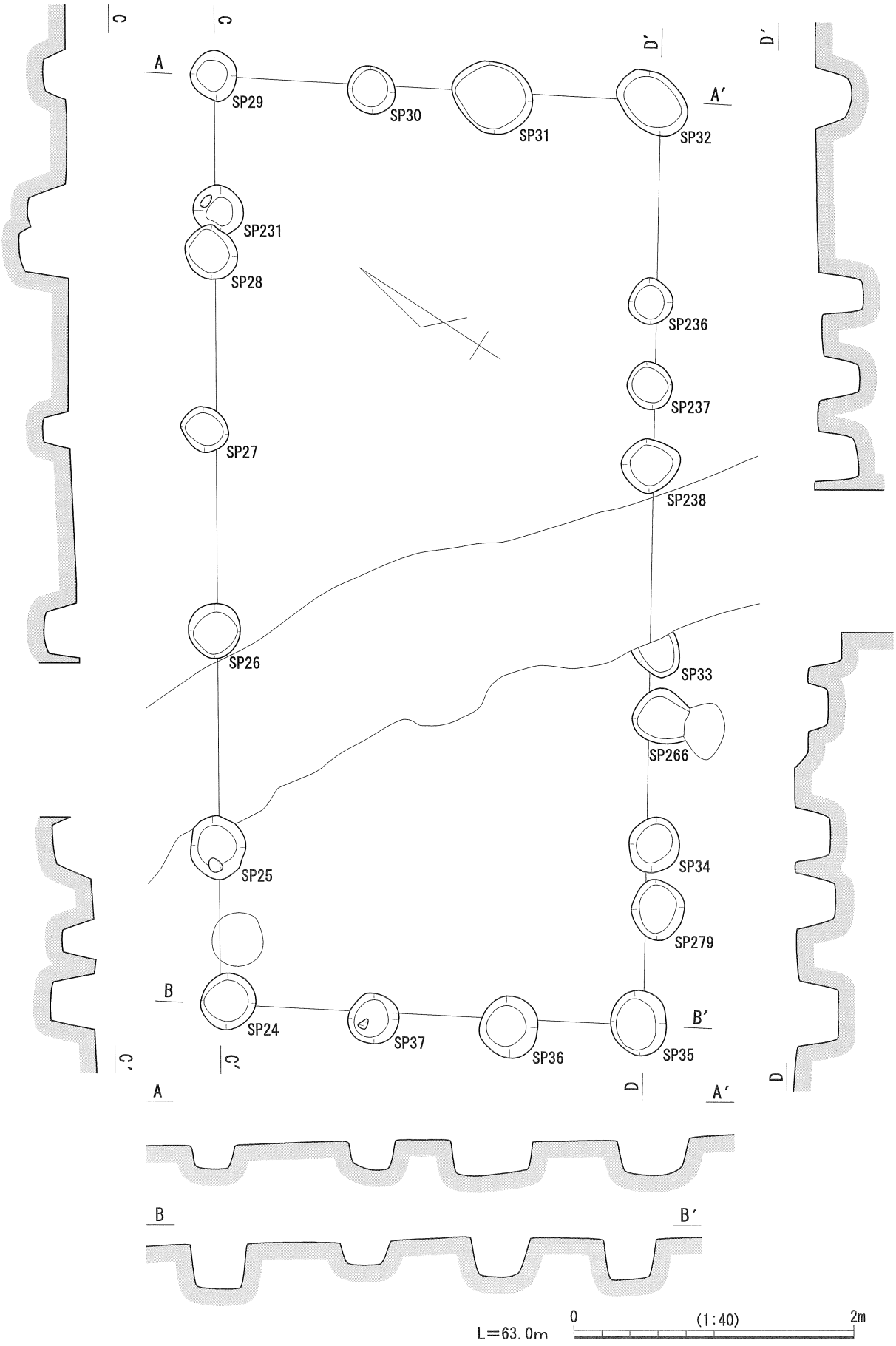
第16図　掘立柱建物SH４・５付近平面図

土遺物は清郷甕（34）、Ｏ－53号窯式併行の碗（35）、山茶碗（36）が出土している。この建物の時期は12世紀後半と考えられる。

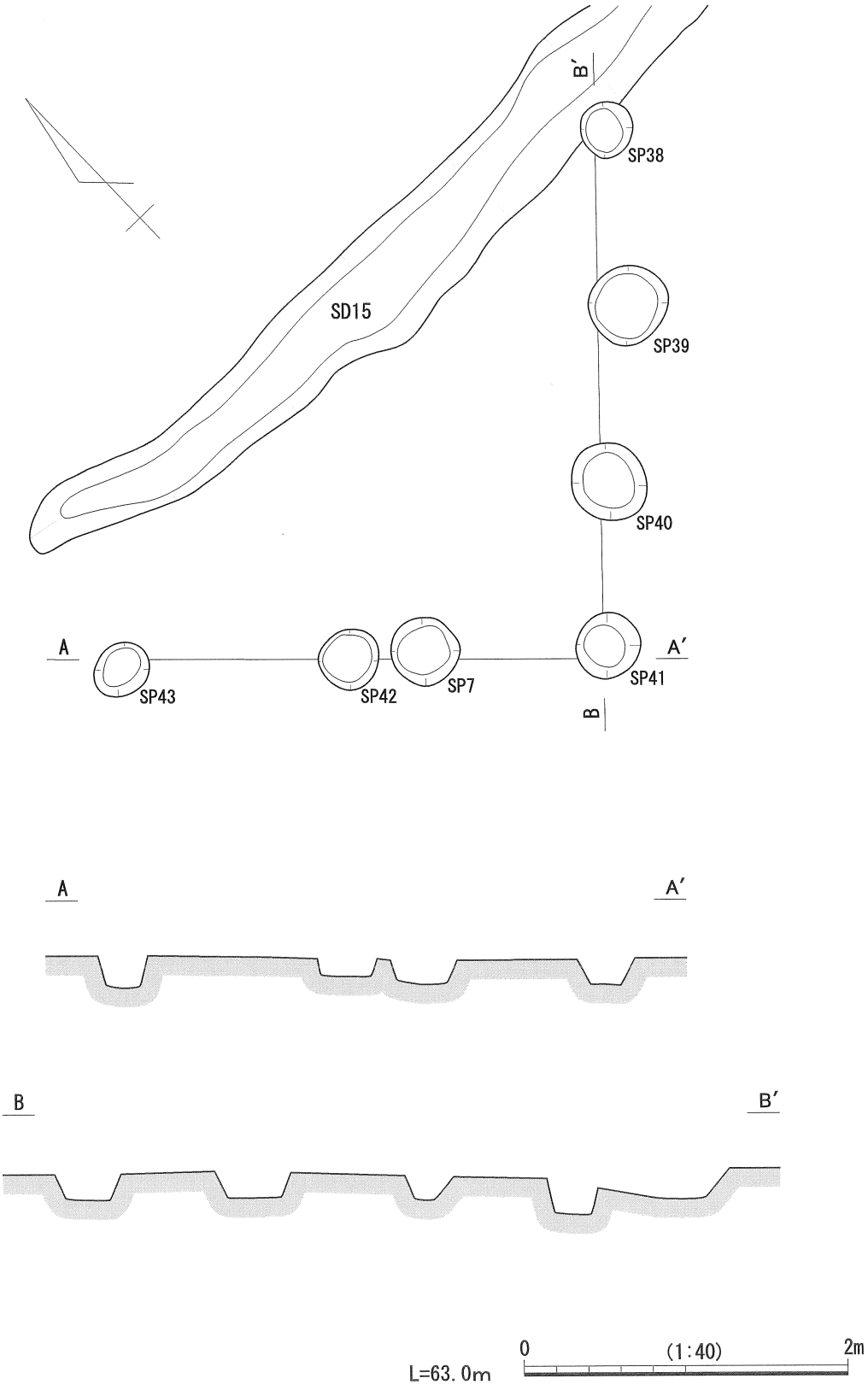
SH４（第16・19・20図・図版３）　ＳＨ４はＥ区のＧ２グリッドに位置する。平面形は方形を呈する掘立柱による総柱建物であり、建物の方向はＮ－７°－Ｅである。規模は桁行４間（6.8m）、梁行３間（5.8m）で、面積は39.44㎡である。柱穴の平面形状は円形がほとんどであり、不定形もある。柱穴の深さの平均は0.2mであった。出土遺物は９世紀の土師器の碗（37・39）、糸切り碗（38）が出土している。この建物の年代は、ＳＨ１と同様な構造となるため９世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

SH５（第16・21図・図版３）　ＳＨ５はＥ区のＦ２グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する掘立柱による側柱建物であり、建物の方向はＮ－40°－Ｅである。規模は桁行５間（4.3m）、梁行４間（4.15m）で、面積は17.8㎡である。柱穴の平面形は円形・隅丸方形・不定形である。出土遺物は助宗窯生産のＫ－90号窯式併行の碗（41）が出土している。この建物の年代は柱穴の切り合いから、ＳＨ４より後出するものであり、建物構造から12世紀後半と考えられる。

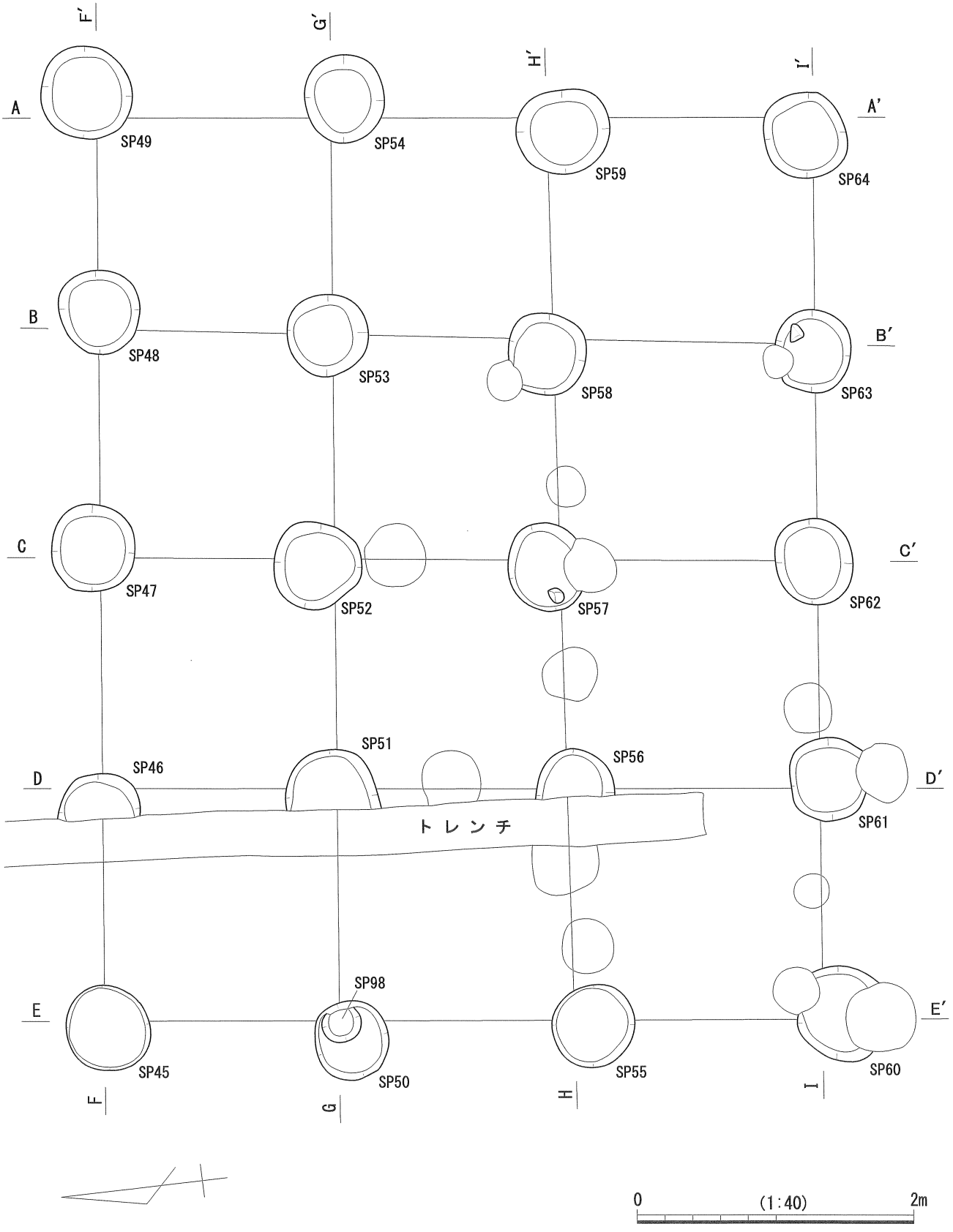
SH６（第15・22図・図版３）　ＳＨ６はＥ区のＧ２グリッドに位置し、平面形は長方形を呈すると思わ



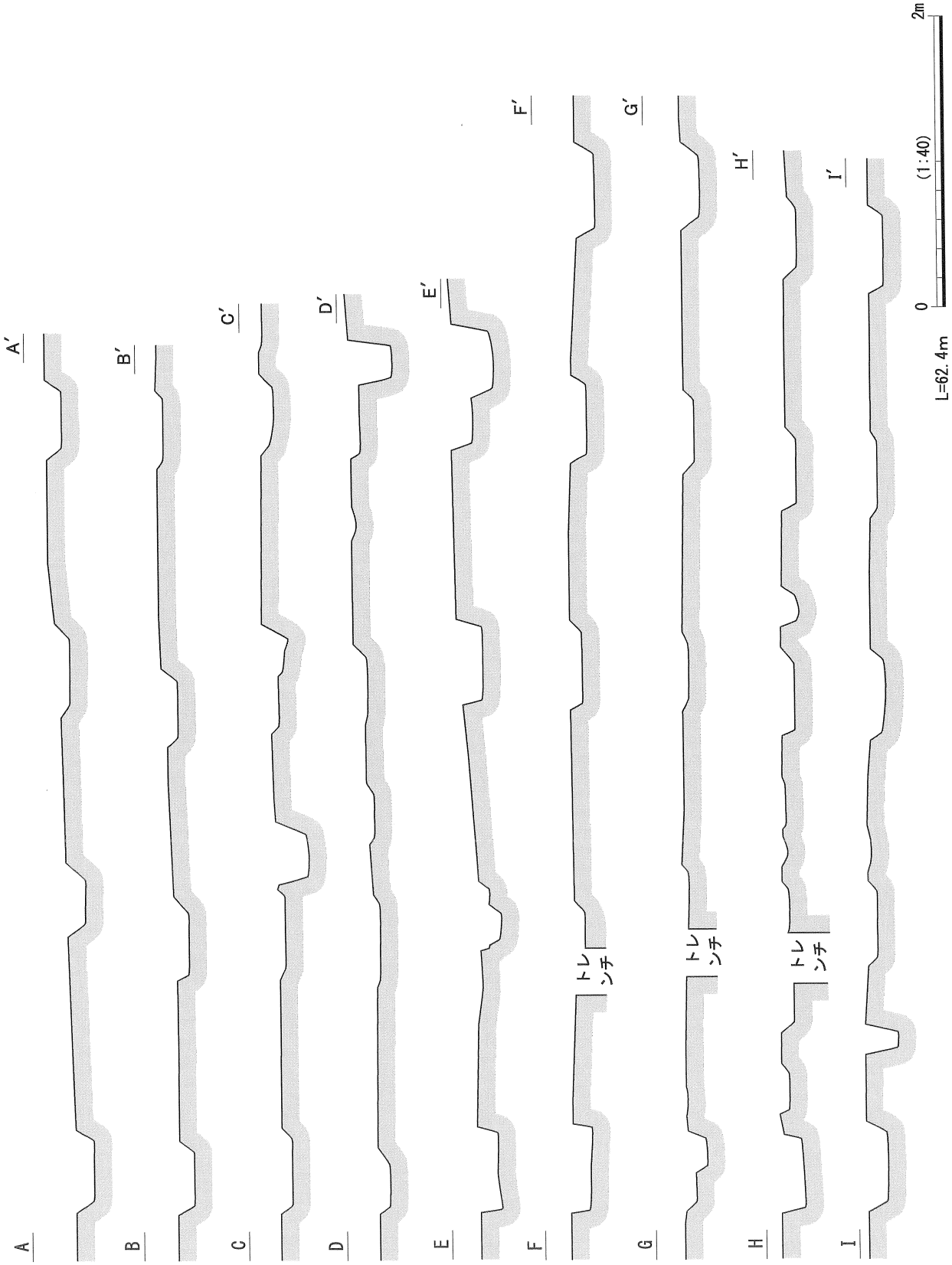
第17図　掘立柱建物SH２平面・断面図



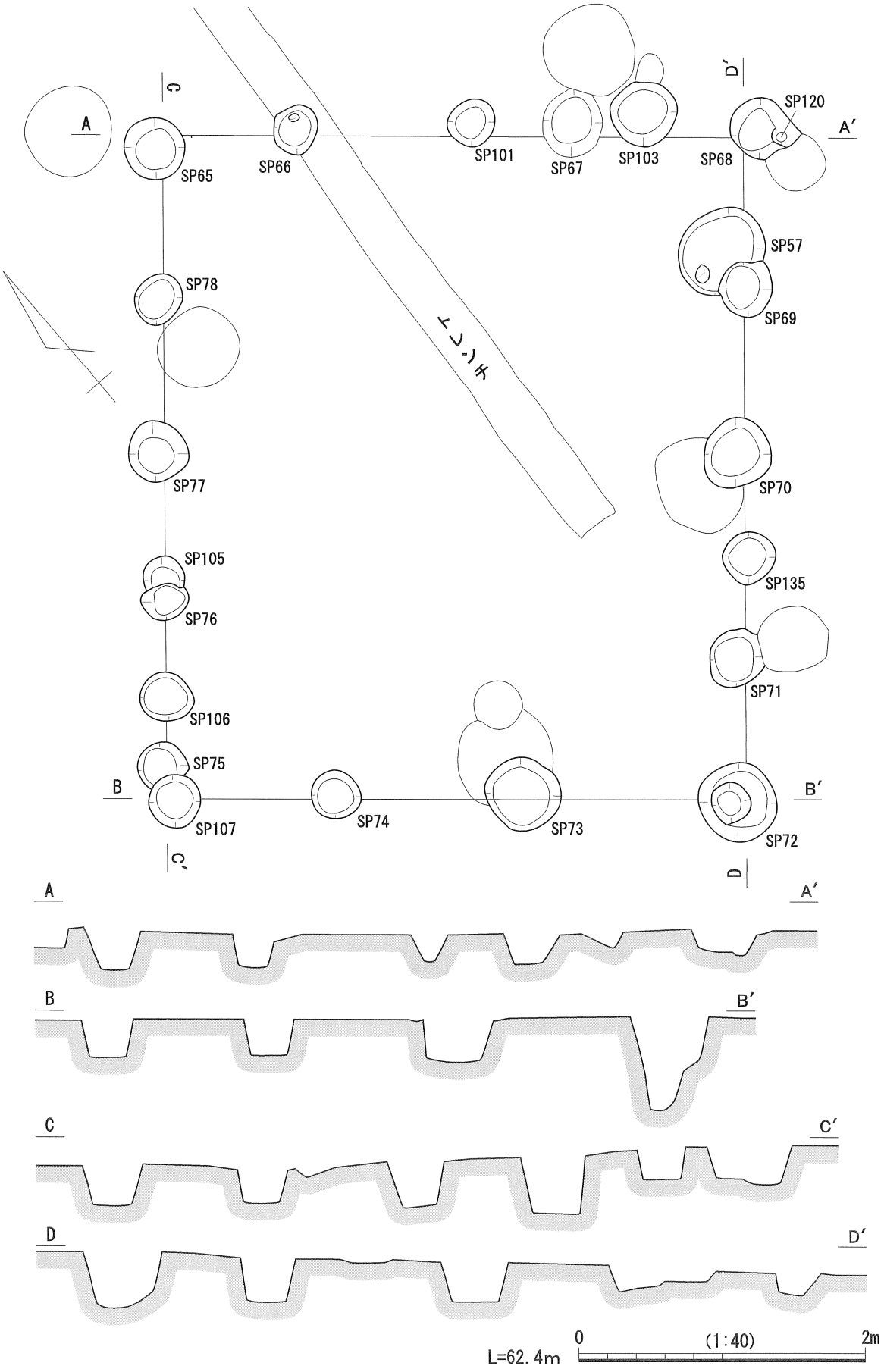
第18図　掘立柱建物SH３平面・断面図



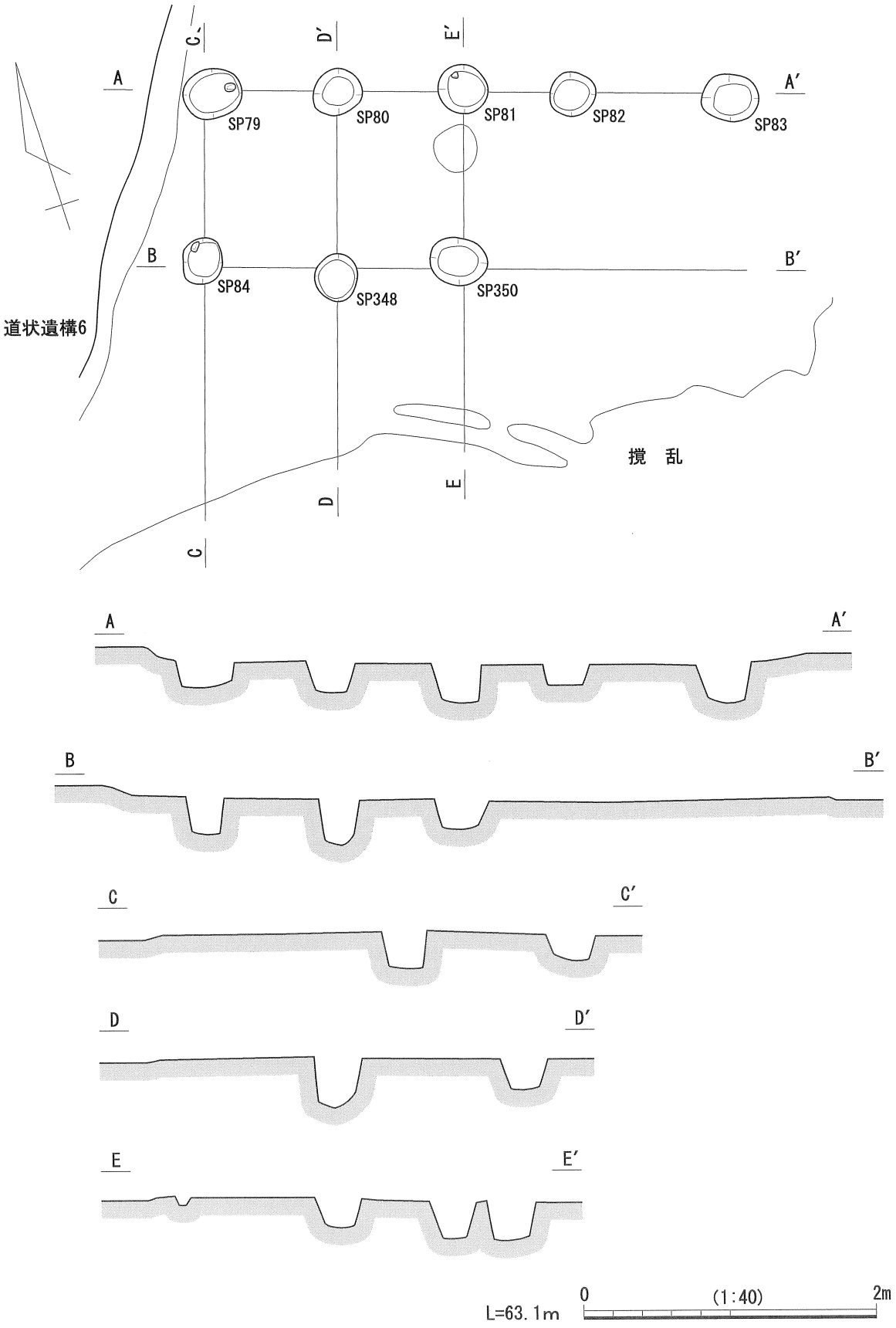
第19図　掘立柱建物SH４平面・断面図１



第20図　掘立柱建物SH４平面・断面図２



第21図　掘立柱建物SH５平面・断面図



第22図　掘立柱建物SH６平面・断面図

れる。掘立柱による総柱建物の可能性もあるが明らかでない。建物の方向は、N－111°－Eであり、北西方向に４間以上、南西方向に２間以上と思われる。発掘区の南西から南東にかけて撹乱されていたので規模などは不明である。柱穴の平面形状は円形・楕円形・不定形であり、深さは平均0.225mである。出土遺物は無かった。この建物は不明な点が多いが、構造などにより10世紀代の建物と思われる。

⑵　道状遺構

道状遺構１（第11・23図）　道状遺構１はＥ区のほぼ中央にあり逆Ｔ字状に交差している。一方はＥ２・Ｆ２グリッドにあり、長さ12.2m、幅約0.6mから1.2mで方位がN－17°－WからN－43°－Wとなる。もう一方はＦ２グリッドにあり、長さ5.5m、幅0.7mから1.3m、N－22°－EからN－71°－Eとなる。この遺構からは９世紀中葉の須恵器（42)、K－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器の碗（24・103・144)、助宗窯生産で同時期の灰釉陶器の皿（43)、13世紀中頃の山茶碗（165)、小碗（44）が出土した。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は時期不明であるが13世紀中頃と思われる。

道状遺構２（第23・31図・図版２）　道状遺構２はＥ区Ｇ２・Ｈ２グリッドにある。道状遺構２から道状遺構４はセットをなすものである。道状遺構２は長さ12m、幅0.3mから1.2mである。Ｅ区にあるＳＨ１の西側の一方を囲むように作られている。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。Ｅ区南西の隅で道状遺構３とＶ字状に合流する。この遺構から古墳時代のものと思われる土師器の坏（45)、土師器の甕（46)、９世紀前半の蓋（47)、K－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器の碗（48)、11世紀後半の灰釉陶器の輪花小碗（51)、12世紀前半の山茶碗（52)、12世紀代で中国越州窯系の白磁菊花紋合子蓋の一部（53）が出土している。出土遺物（51～53）は新しい時期の混入品である。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は９世紀後半から10世紀初頭と思われる。

道状遺構３（第23・31図・図版２）　道状遺構３はＥ区Ｇ２グリッドにあり、ＳＨ１の南側と東側を囲むように作られて道状遺構２と合流し、道状遺構４とも合流する。長さは18.5m、幅0.4mから0.9mで方向がN－76°－EからN－45°－Eへ、さらにN－7°－Eへとなる。この遺構からは出土遺物が無かった。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。土層などからこの遺構の年代は９世紀後半から10世紀初頭と思われる。

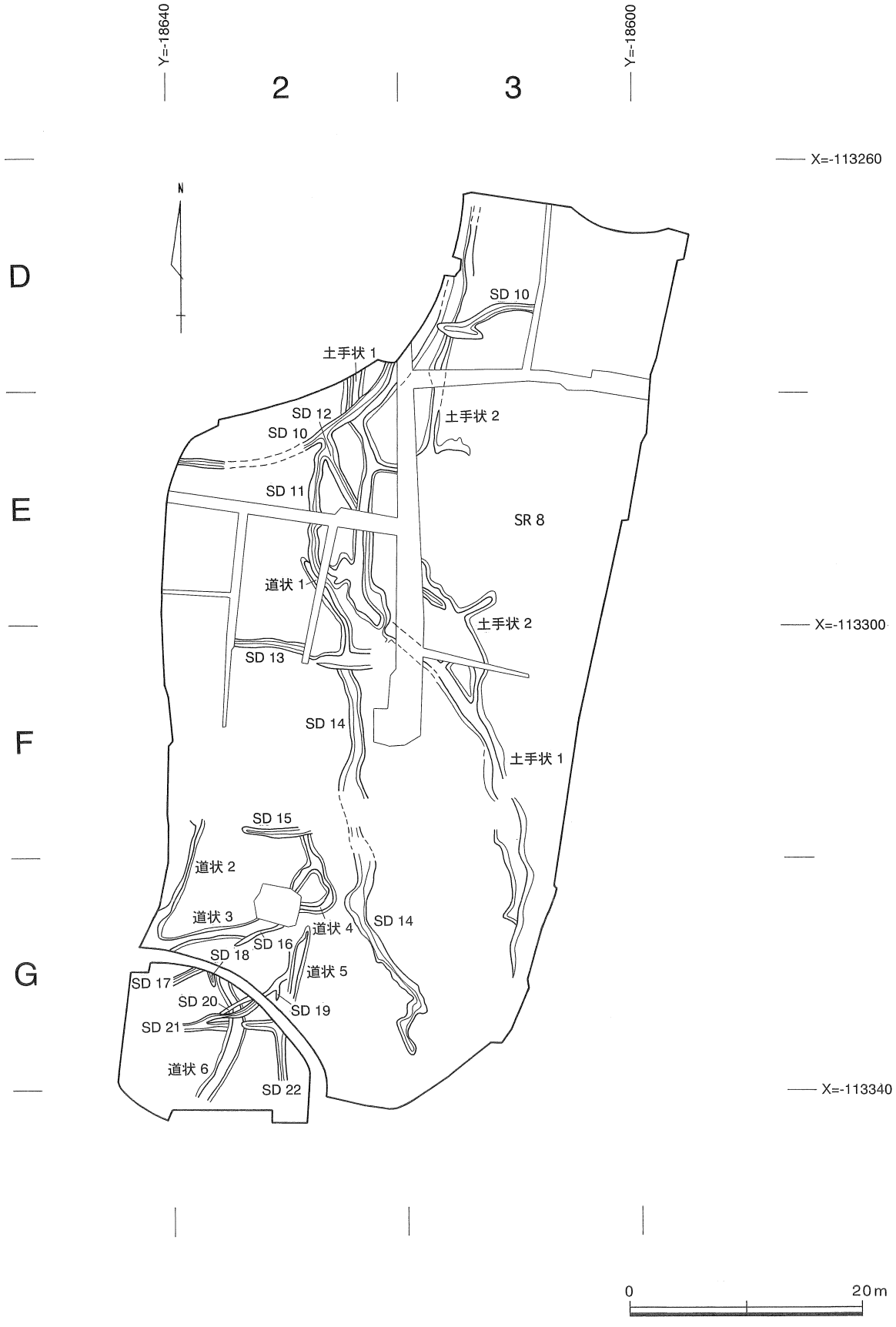
道状遺構４（第23図）　道状遺構４はＥ区Ｇ２グリッドにあり、道状遺構３につながっている。長さ6.2m、幅0.4mから0.8m、方向がN－68°－EからN－32°－Wであった。この遺構から10世紀初頭のO－53号窯式併行の長頸瓶（15)、12世紀末の山茶碗（54）が出土した。出土遺物（54）は新しい時期の混入品である。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は９世紀後半から10世紀初頭と思われる。

道状遺構５（第23図）　道状遺構５はＥ区Ｇ２グリットにありＳＨ２の東に作られている。長さ6.5m、幅は0.5mから0.9mである。方向はN－23°－EからN－2°－Eである。出土遺物は10世紀初頭で助宗窯生産の灰釉陶器の皿（55）が出土している。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は不明であるが９世紀後半から10世紀初頭の可能性があると思われる。

道状遺構６（第23図・図版３）　道状遺構６はＥ区Ｇ２グリッドにあり、ＳＨ２を切っており、SD19、SD20により切られている。長さ10.3m、幅0.6mから1.3mである。方向はN－34°－EからN－43°－Wである。出土遺物は９世紀前半でK－14号窯式併行の灰釉陶器の長頸瓶（56)、糸切り碗（25）が出土している。土層は灰色シルトで風化礫を含んでいた。この遺構の年代はＳＨ２の柱穴に切られていることから、12世紀前半以前と思われる。

⑶　溝状遺構（SD）

SD10（第11・23図・図版１）　SD10はＥ区の北側に位置する。調査区北西から北東部にかけて弓なりに屈折しながら延びる。Ｅ２・Ｄ２グリッドで長さ10.8m、幅0.5mから0.9m、深さ0.11m、N－2°－Eの方向に延び、Ｄ３グリッドで長さ4.1m、幅0.9mから1.3m、深さ0.12m、N－101°－Eの方向に延び



第23図　道状遺構・土手状遺構等配置図

る。さらにＤ３グリッドで長さ3.5m、幅0.4mから0.5m、深さ0.3m、Ｎ－58°－Ｅの方向に延び、同グリッドで長さ3.1m、幅0.5m、深さ0.11mでＮ－96°－Ｅの方向に延びている。溝状遺構の北東部に0.4mから0.18mの角礫を積んだ堰状の遺構があり、流路の水量を調節したと思われる。この遺構は出土遺物が無かった。この遺構の年代は12世紀から13世紀と思われる。

SD11（第11・23図・図版１）　SD11はＥ区のＥ２グリッドに位置する。長さ11.3m、幅0.4mから0.9m、深さ0.1mであり、方向はＮ－５°－Ｅである。一部に土手状遺構と道状遺構に挟まれた不定形の窪みがあり、広い部分で３m、狭い部分で1.2m、深さ0.1mから0.2mであった。SD11はここから屈折して北側に延びてSD12と交差し、さらにSD10と合流する。この遺構からは、８世紀から９世紀で遠江系の土師器の甕（57）、９世紀前半の土師器の坏（58）、Ｋ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器の碗（141）、同時期の灰釉陶器の長頸瓶（147）、Ｏ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の灰釉陶器の碗（59）、同時期の灰釉陶器の皿（155）、13世紀で中国の白磁の四耳壺（170）が出土している。この遺構の年代は12世紀から13世紀と思われる。

SD12（第11・23図・図版１）　SD12はＥ区のほぼ中央から北西方向に屈折しながら延び、SD11と交差してSD10と合流する。グリッドはＥ２・Ｆ２で長さ17.5m、幅0.4mから1.7m、深さ0.09mで方向はＮ－28°－ＥからＮ－12°－Wへ、さらにＮ－28°－Wであった。断面形は皿状を呈する。この遺構から９世紀後半の土師器の坏（60）、13世紀の小碗（168）が出土している。この遺構の年代は12世紀から13世紀と思われる。

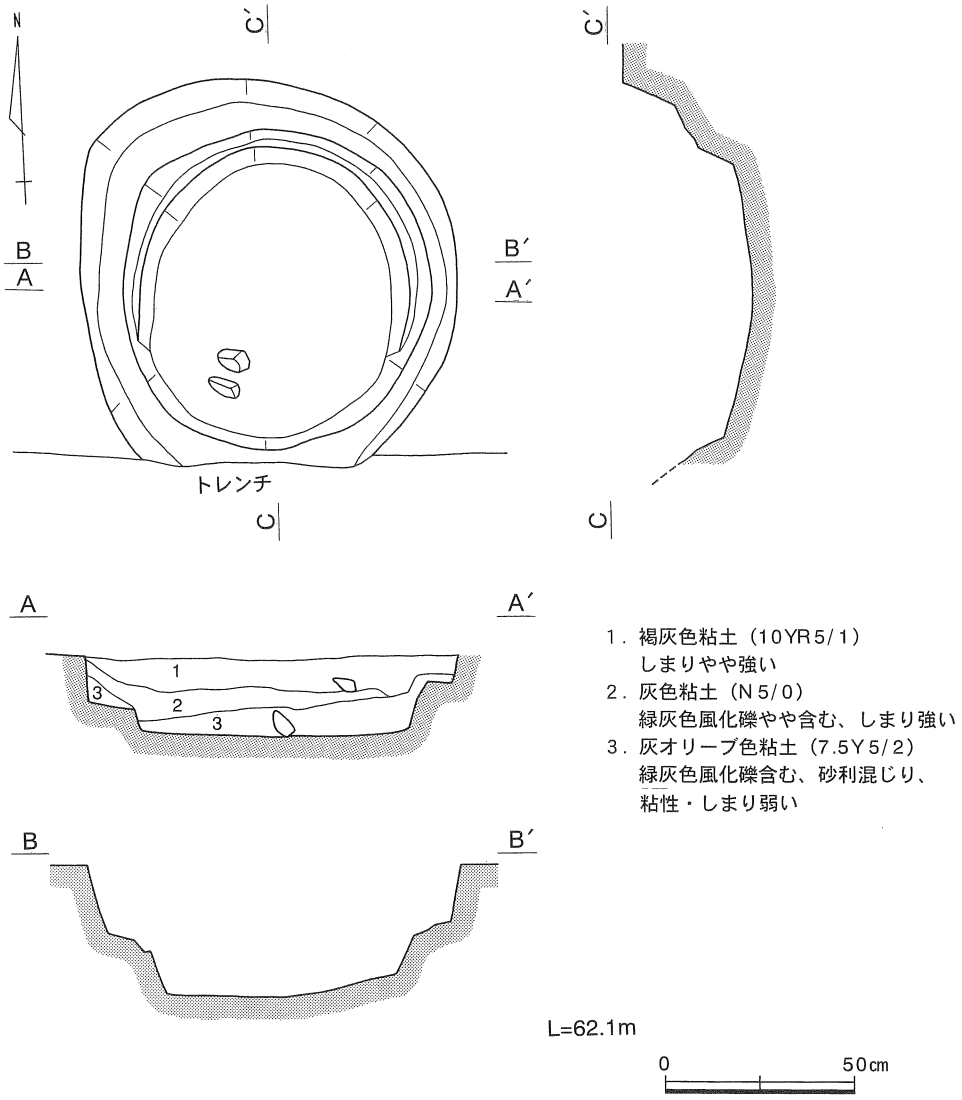
SD13（第11・23図・図版１）　SD13はＥ区中央のＦ２グリッドに位置している。長さ6.9m、幅0.4mから0.7m、深さ0.08mから0.1mで方向はＮ－49°－Ｅであった。断面形は皿状を呈する。この遺構からは、８世紀から９世紀の土師器（61）、Ｋ－14号窯式にあたる９世紀前半の灰釉陶器の長頸瓶（62）、助宗窯生産でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器碗（41）の一部、助宗窯生産でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の灰釉陶器の碗（64）、東遠系で同時期の灰釉陶器の碗（63）が出土した。この遺構の年代は東端でSD11と接続することから12世紀から13世紀と思われる。

SD14（第11・23図・図版１）　SD14はＥ区の南側から屈折しながら北側に延びる。途中で撹乱を受けている。グリッドはＦ２・Ｇ２・Ｇ３にまたがり、長さ35.4m、幅0.3mから2.7m、深さ0.16mで、方向はＮ－26°－ＥからＮ－37°－Wとなり、さらにＮ－２°－Wとなる。断面形は皿状を呈する。この遺構からはＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器の碗（65・193）が出土した。この遺構の年代はSD11の延長上に位置することから12世紀から13世紀と思われる。

SD15（第11・23図・図版１）　SD15はＥ区の中央部より南西に位置し、SH３を切って東西に延びる。Ｅ２グリッドにあり長さは6.2m、幅0.4mから0.6m、深さ0.12mから0.2m、方向がＮ－91°－Ｅである。溝の東側は撹乱を受けているがSD14と交差していたと思われる。SH３を切っており、SP38に一部切られている。この溝からは糸切り碗（66）が出土している。この遺構の年代は12世紀後半以降と思われる。

SD16（第11・23図・図版１）　SD16・SD17・SD19・SD20はSH２を囲むようにつくられている。SD16はＥ区の南西に位置し、道状遺構３に沿うように検出されSH２の北東から北西に延びている。グリッドはＧ２にあり長さ4.7m、幅0.12mから0.22m、深さ0.04mから0.06m、方向がＮ－67°－Ｅである。この溝はSP230に一部切られている。この溝からは遺物の出土が無かった。この遺構の年代はSH２と関係すると考えられるため、12世紀前半のものと思われる。

SD17（第11・23図・図版１）　SD17はＥ区の南西Ｇ２グリッドにありSH２の北西に位置する。この溝状遺構の北西部と南東部は撹乱されており不明である。長さ3.1m、幅0.5m、深さ0.04m、方位がＮ－61°－Ｅであり、SP245からSP248に切られている。SD17からは土師器の蓋（67）が出土した。この遺構



第24図　土坑SF２平面・断面図

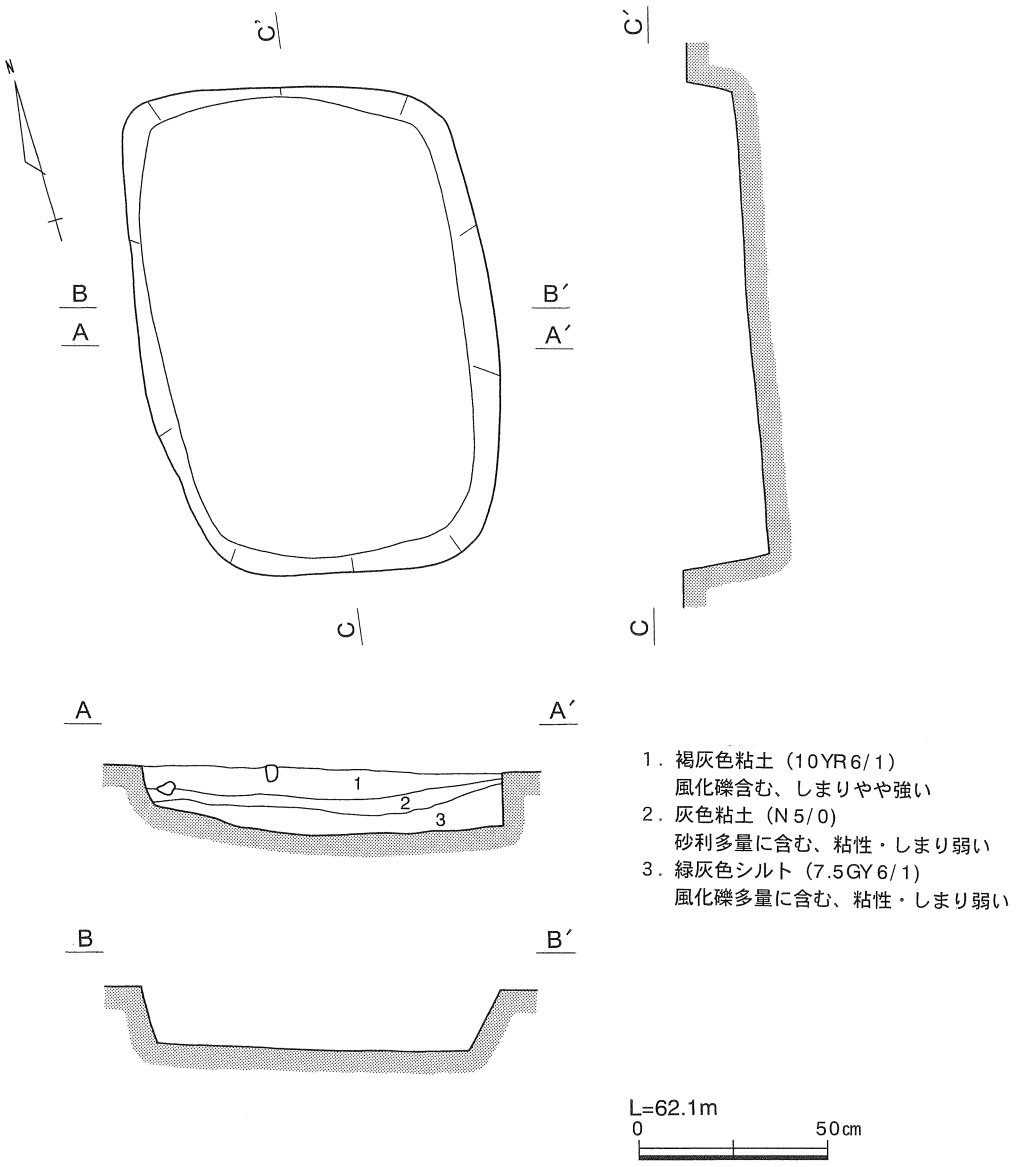
はSH２に伴うと考えられるため、年代は12世紀前半と思われる。

SD18（第15・23図・図版１）　SD18はＥ区の南西にありSH２を切っている。この溝状遺構はＧ２グリッドにあり長さ１m、幅0.4m、深さ0.05m、方向がＮ－10°－Ｗである。SD18はSP25に切られている。この遺構からは遺物の出土が無かった。この遺構の年代は12世紀前半以降と思われる。

SD19（第15・23図・図版１）　SD19はＥ区の南西部に位置し、SH２の南東から南西を包むように屈折しながら延び、途中南側に分かれる。この遺構はＧ２グリッドにあり大きく二方向に分かれている。一方長さ9.3m、幅0.3mから0.6m、方向がＮ－63°－Ｅで、もう一方は長さ1.5m、幅0.3mから0.6m、方向がＮ－１°－Ｗで、深さ0.05mから0.08mである。断面形は逆台形であった。この遺構からは遺物の出土が無かった。この遺構の年代はSD16と同様に12世紀前半と思われる。

SD20（第15・23図・図版１）　SD20はＥ区の南西に位置し、溝の南部が撹乱を受けSP278、SP280に切られている。この溝状遺構はＧ２グリッドにあり長さ2.5m、幅0.1mから0.2m、深さ0.03mであり、方向がＮ－66°－Ｅであった。出土遺物は無かったが遺構の年代はSD16同様12世紀前半と思われる。

SD21（第15・23図・図版１）　SD21はＥ区の南西に位置し東西方向に延び、ほぼ中央部に道状遺構６が通る。SD21の西側は撹乱を受けており、東側も上層遺構発掘時の排水溝により撹乱されている。この溝状遺構はグリッドＧ２にあり、道状遺構６の西側は長さ8.2m、幅0.3mから0.6m、方向がＮ－82°－Ｅ



第25図　土坑SF３平面・断面図

であり、道状遺構６の東側は長さ6.6m、幅0.3mから0.6m、方向がN－89°－Eで深さが0.03mから0.05mである。この遺構からの出土遺物は、助宗窯生産でK－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器の碗（68）、糸切り碗（70）が出土しているが、SD19と接続するため、この遺構の年代は12世紀前半であると思われる。

SD22（第15・23図・図版１）　SD22はE区の南西隅にあり南北方向に延びている。北側は上層遺構発掘調査時の排水溝で撹乱されているが、SD21と交差するものと思われる。SP341、343、344により切られている。G２グリッドにあり長さ4.7m、幅0.3mから0.5mで方向N－４°－W、断面形が台形状である。このSD22からは遺物の出土が無かった。この溝の年代はSD21と接続するため12世紀前半と思われる。

(4)　流路・旧河川（SR）

SR８（第11・23図・図版４）　SR８はE区の南東から北東にかけて流れる旧河川で、左岸が土手状遺構１と土手状遺構２になる。この河川の右岸は発掘区外となり川幅の全容を明確にすることはできなかった。SR８はD３・D４・E３・F３グリッドにかかっており、長さ55m、発掘区内で幅20m、方向がN－7°－EからN－24°－Wであった。土層はシルト層で一部に礫が混入していた。標高は上流部で62.7m、下流部で60.7mであった。この旧河川は山側やその谷部からの湧水や降雨を下流に流し、E区の南東か

ら北東へ向かって流れていたと思われる。SR８の南東部の土手状遺構１では、これに接するように直径約３ｍの楠の大木の根を検出した。この根元付近から助宗窯生産で９世紀前半の須恵器の坏蓋（217）、土師器の坏（222）、土師器の碗（220）が出土した。SR８からの出土遺物は、８世紀から９世紀の土師器の台付甕（221）、９世紀前半の助宗窯生産の須恵器坏身（223）、９世紀前半の須恵器の坏身（218）、須恵器の坏身（219）、Ｋ－14号窯式併行にあたる９世紀前半の灰釉陶器広口瓶の一部（14）、Ｏ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の糸切り碗（227～229・231・232）、12世紀前半の山茶碗（233～235）、13世紀後半の小碗（237）が出土した。土手状遺構１と同２は、SR８による水害からSH１～SH６などの建物を守るべく造られたとも考えられ、SR８はたびたび氾濫した可能性がある。SR８は９世紀頃から12世紀頃まで流れていたと思われる。

⑸　土坑（SF）

SF２（第11・24図・図版１）　SF２はＥ区中間の西側隅から検出された。表面は楕円形で三重の構造となる。外側は東西1.08m、南北1.13m、深さ0.18m、中間が東西0.87m、南北0.88m、深さ0.07m、底面が東西0.75m、南北0.76m、深さ0.16mであり、覆土の灰色粘土層から13世紀前半の古瀬戸の四耳壺（127）と礫２個が検出された。13世紀前半の土坑と考えたい。

SF３（第11・25図・図版１）　SF３はＥ区の中間西側隅Ｅ１・Ｅ２グリッドから検出された。平面形は隅丸方形の土坑で、東西0.95m、南北1.28m、深さ0.16mである。この土坑の覆土の礫混灰色粘土層より、15世紀後半の志戸呂焼の錆釉擂鉢（323）が出土した。15世紀後半以降の土坑と思われる。

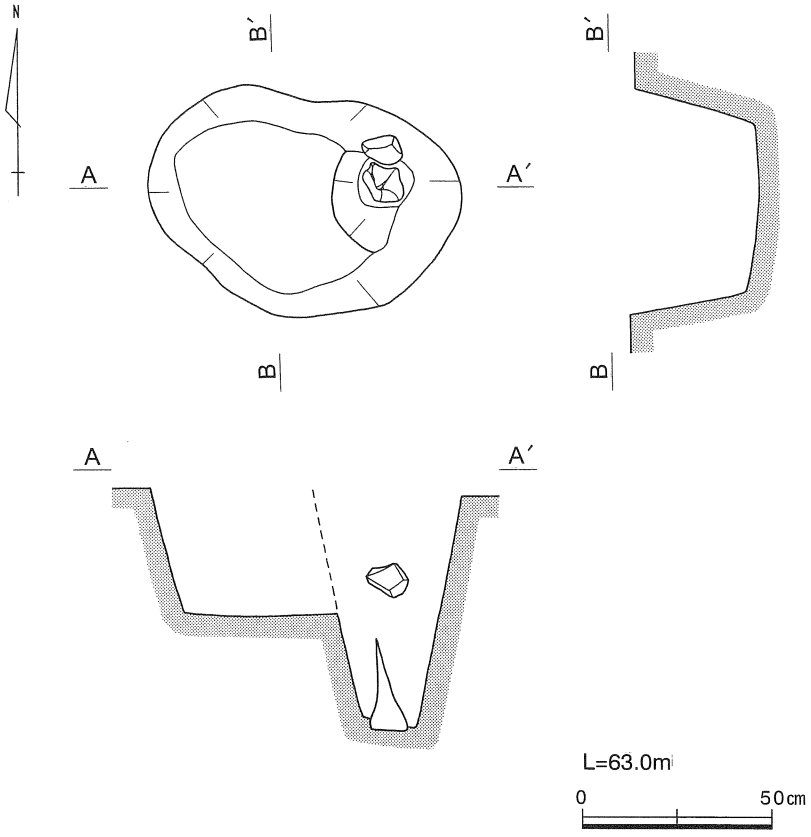
SF４（第11図・図版１）　SF４はＥ区の南東側Ｇ３グリッドより検出された。平面形が円形で底部も円形である。この土坑は覆土の黒色粘土層から13世紀中頃の山茶碗（165）が出土した。掘り抜き井戸の可能性もある。山茶碗の出土から13世紀中頃の遺構と考えられる。

SF５（第11図・図版１）　SF５はＥ区Ｇ３グリッドにありSF４から東側に1.7m離れた位置にある。平面形は円形に近く東西0.64m、南北0.64m、深さ0.5mであり、掘り抜き井戸の可能性がある。時代は不明である。

SF６（第11・12図・図版１）　SF６はＥ区の中心よりやや南西部Ｆ２グリッドにある。平面が楕円形の土坑であったと思われるが北側が撹乱されていた。規模は東西1.31m、南北は残存している箇所で1.03m、深さ0.36mであった。覆土の灰色粘土層より猿投窯生産でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器碗の一部（10）、10世紀から11世紀の清郷甕（96）が出土し、掘削土中から18世紀の伊万里焼の染付茶碗（98）が出土した。出土品から18世紀の遺構と考えられる。

⑹　土手状遺構

土手状遺構１（第11・23図・図版４）　土手状遺構１はＥ区のＤ２・Ｅ２・Ｆ２・Ｆ３・Ｇ３グリッドとＥ２・Ｄ２・Ｄ３グリッドにある。この遺構は南東部隅から屈折しながら北東方向に向かって延び、途中で土手状遺構２と枝分かれする。土手状遺構１は分岐点から北西に直線的に延び、しばらくSD12に沿うように北側に延びる。さらに途中で枝分かれするが、一部がSD10に沿って北東に延びている。この土手状遺構のＤ２・Ｅ２・Ｆ２・Ｆ３・Ｇ３グリッドにかかる部分は、長さ56.0m、幅0.36mから2.1m、高さ0.12mから0.2m、方向がＮ－12°－WからＮ－40°－Wとなり、さらにＮ－４°－Wとなる。また、Ｅ２・Ｄ２・Ｄ３・Ｅ３・Ｆ３グリッドにかかる部分は、長さ15.0m、幅0.7mから1.5m、高さ0.03mから0.1m、方向がＮ－35°－Ｅである。この土手状遺構１は調査時に上部を削りすぎた。この遺構はSR８とSD10の水害より、SH１からSH６の建物群を守るための堤防状遺構と考えられる。出土遺物は８世紀から９世紀の遠江系土師器の甕（183・188）、８世紀から９世紀の土師器の甕（137・182・189）、土師器の甕（187）、９世紀前半の助宗窯の須恵器（175）、Ｋ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器の碗（194）、同時期の灰釉陶器長頸瓶の一部（140）、Ｏ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の灰釉陶器



第26図　小穴SP251平面・断面図

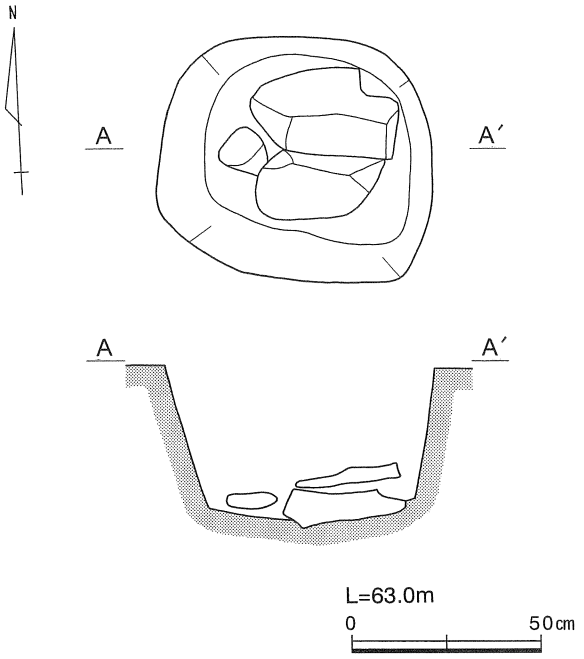
の長頸瓶（117）、同時期の灰釉陶器の皿（150）、同時期の灰釉陶器の碗（12・13・201・225）、糸切り碗（163）、12世紀の中国越州窯系の白磁菊花紋合子蓋の一部（53）が出土した。出土遺物（53）は新しい時期の混入品である。SH１などが存在した10世紀初頭には土手状遺構１が作られていたと思われる。

土手状遺構２（第11・23図・図版４）　土手状遺構２はＥ区Ｄ３・Ｅ３・Ｆ３グリッドにあり、土手状遺構１の中間から枝分かれして屈折しながら北側に延びており、SD10に切られている。この土手状遺構２も調査時に上部を削りすぎている。この遺構は、長さ44m、幅0.8mから1.5m、高さ0.03mから0.23mであり、方向がＮ－27°－Ｗから Ｎ－11°－Ｅであった。東側に流れるSR８の堤防的な機能を持っていたと思われる。土手状遺構１と土手状遺構２が枝状に分かれた部分から土手が二重構造になり、流水の激しい流れを受けていたと思われる。また、北側はSD10により土手状遺構が一部切られているが、土手状遺構１、土手状遺構２により水の流れを受け止め、堤防的な役目をしていたと思われる。さらに、堤防の出し状に東方向と北東方向に突き出ている部分がある。このうち、北東方向の出し状遺構は長さ５m、幅0.9m残存する。東方向の出し状遺構は長さ6.2m、幅1.15m残存した。この土手状遺構は暗灰色粘土層であった。土手状遺構２も土手状遺構と同様にSR８の水害から建物群を守る機能があったと思われる。出土遺物はＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器長頸瓶の一部（140）、Ｏ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の灰釉陶器碗の一部（151）、同時期の灰釉陶器の碗（224）が出土した。10世紀初頭には土手状遺構２も築かれていたと思われる。

(7)　小穴（SP）

SP１・SP２・SP３（第11図・図版１）　SP１からSP３はＥ区のＥ２グリッドにある。SP１とSP２は土手状遺構１が北側に延び枝分かれする箇所にあり、土手状遺構１を挟むように存在する。SP１より南東に９m離れてSP２が検出された。SP２からさらに南東に3.1m離れてSP３が検出された。SP１からSP３までほぼ直線的に並ぶ。これらの小穴にはそれぞれ根石がある。SP１は平面形が楕円形で東西0.59m、南北0.47m、深さ0.27m、小穴内に根石を使用していた。SP２は平面形が楕円形で東西0.54m、南北0.6m、深さ0.16mで方形の根石を使用していた。SP３は楕円形で東西0.61m、南北0.48m、深さ0.35mで根石が使用されていた。このSP１・SP２・SP３の性格と年代は不明であるが、根石が検出されているので、柱状のものが立っていた可能性がある。

SP160（第11・12図・図版１）　SP160はＥ区Ｆ１・Ｆ２グリッドにあり、道状遺構２の西側に位置する。



第27図　小穴SP299平面・断面図

平面形は円形で東西0.47m、南北0.52m、深さ0.44m、小穴の中に比較的大型の根石があり、覆土の灰色粘土層の中から土師器（82）が出土している。

SP166（第11・12図・図版１）　SP166はＥ区Ｆ２グリッドに位置し道状遺構２を切っている。平面形は円形で東西0.29m、南北0.29m、深さ0.24mで覆土の黒色粘土層の中より、助宗窯生産でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器の長頸瓶（49）が出土している。

SP176（第11・12図・図版２）　SP176はＥ区Ｆ２グリッドにあり道状遺構２から東方に0.2m離れた位置にある。平面形は楕円形で東西0.36m、南北0.44m、深さ0.23mで覆土の灰色粘土層より糸切り碗（92）が出土している。

SP177（第11・12図・図版２）　SP177はＥ区Ｆ２グリッドのSH３付近に位置し、平面形は円形で東西0.28m、南北0.26m、深さ0.23mで覆土の灰色粘土層より、10世紀から11世紀の清郷甕（34）が出土している。

SP180（第11・12図・図版２）　SP180はＥ区Ｆ２グリッドにありSH１の北側に位置し、平面形は円形で東西0.33m、南北0.35m、深さ0.25mで覆土の灰色粘土層より弥生土器（33）が出土している。

SP189（第11・12図・図版２）　SP189はＥ区Ｇ２グリッドにありSH１のSP８から西側へ0.42m離れた場所に位置し、平面形は円形で東西0.34m、南北0.36m、深さ0.18mで、灰色粘土層より13世紀前半の山茶碗（18）が出土している。

SP192（第11・12図・図版２）　SP192はＥ区Ｇ２グリッドにありSH１の中にある。平面形は円形で東西0.42m、南北0.44m、深さ0.24mで覆土の灰色粘土層より土師器の甕（５）が出土している。

SP194（第11・12図・図版２）　SP194はＥ区Ｇ２グリッドのSH１の中にある。平面形は円形で東西0.39m、南北0.39m、深さ0.11mで覆土の灰色粘土層より土師器の壺（３）が出土している。

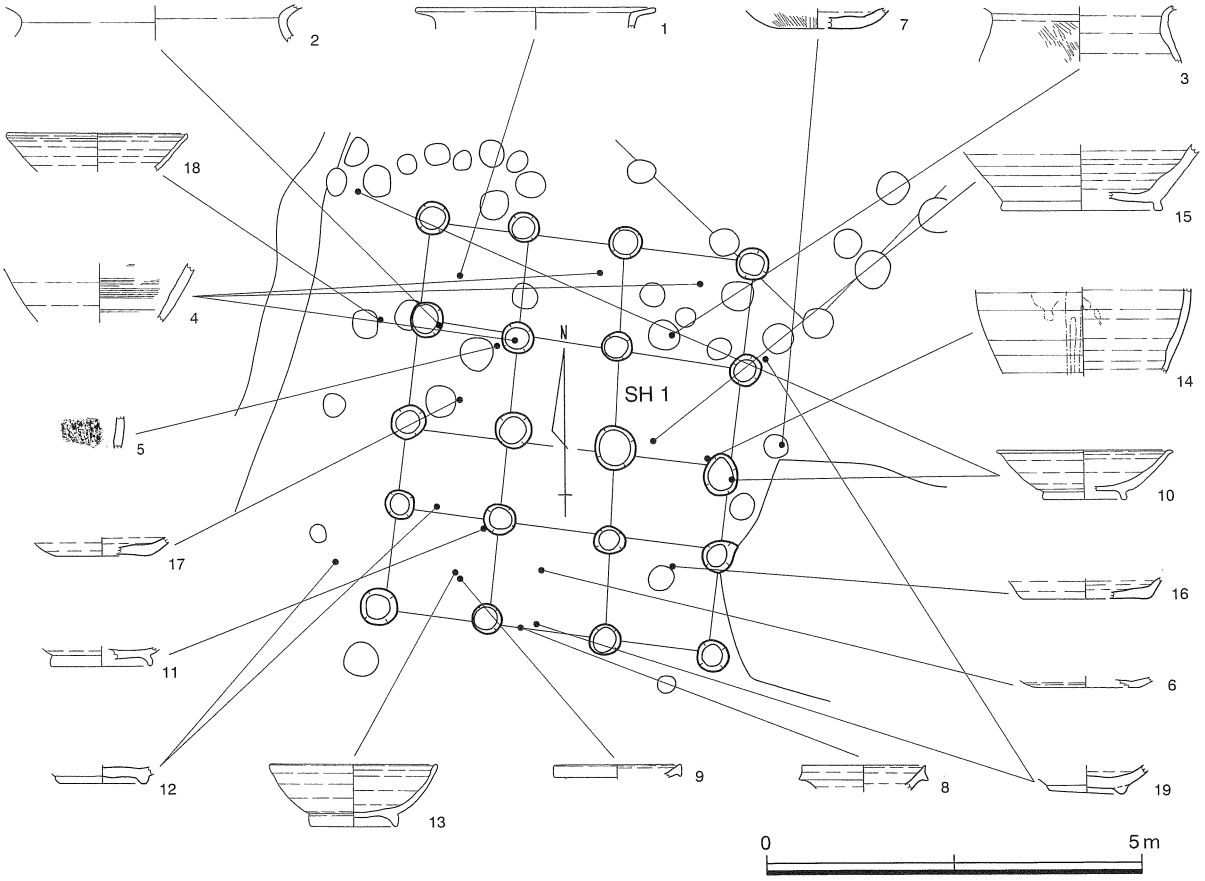
SP201（第11・12図・図版２）　SP201はＥ区Ｇ２グリッドのSH１の東側にある。平面形は円形で東西0.29m、南北0.3m、深さ0.21mであった。覆土の灰色粘土層より８世紀から９世紀の遠江系甕の底部（７）が出土している。

SP213（第11・12図・図版１）　SP213はＥ区Ｇ１グリッドにあり、道状遺構２の西側に位置する。平面形は円形で東西0.27m、南北0.28m、深さ0.26mであった。この小穴の覆土黒色粘土層より、土師器の甕（46）が出土している。

SP232（第11・15図・図版２）　SP232はＥ区Ｇ２グリッドにあり、SH２のSP29より南西に0.1m離れて位置する。平面形は円形で東西0.38m、南北0.32m、深さ0.13mであった。糸切り碗（30）が出土している。

SP236（第11・15図・図版２）　SP236はＥ区Ｇ２グリッドにあり、SH２の中に位置する。平面形は円形で東西0.31m、南北0.31m、深さ0.32mで覆土の灰色粘土層直上より、助宗窯生産でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器碗（24）の一部が出土している。

SP238（第11・15図・図版２）　SP238はＥ区Ｇ２グリッドにありSH２の中に位置する。平面形は方形



第28図　掘立柱建物SH１付近遺物出土状況

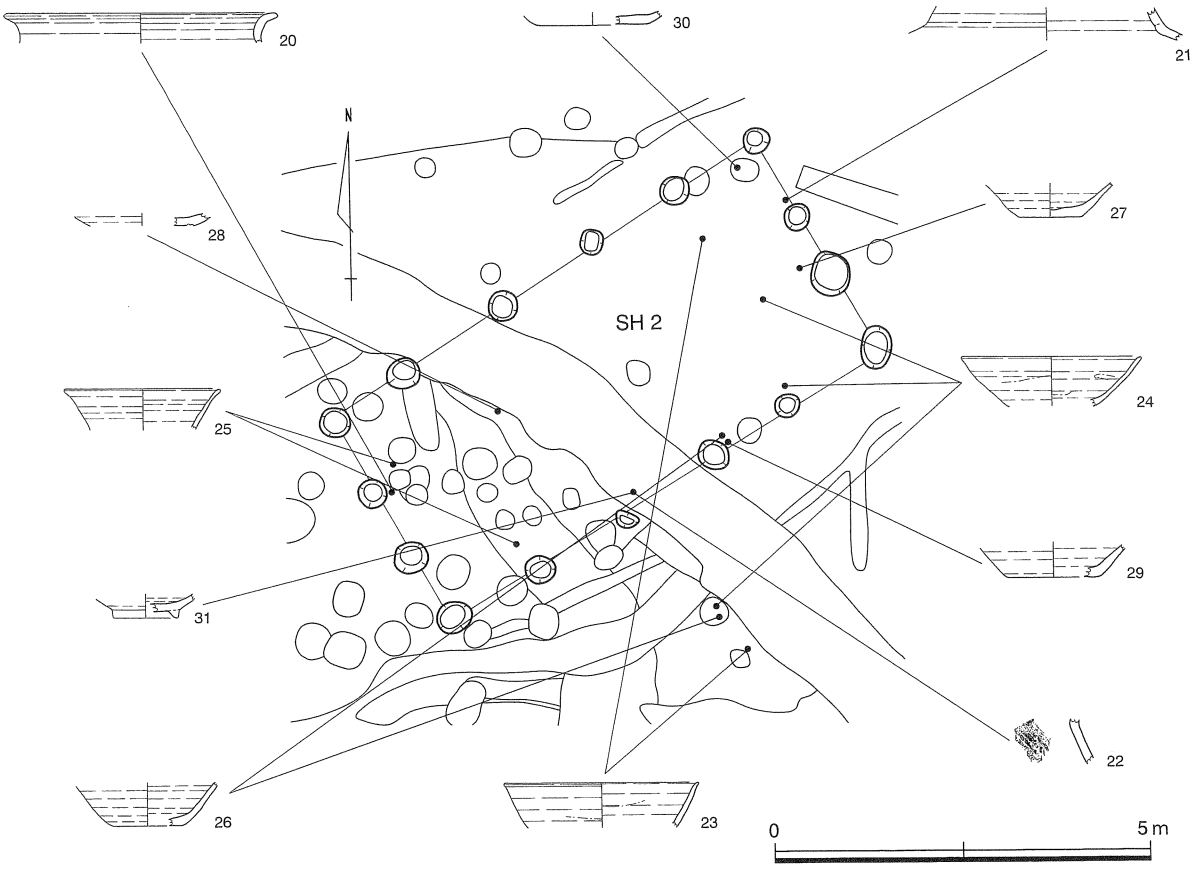
で東西0.38m、南北0.38m、深さ0.31mであった。東遠系でO－53号窯式併行の10世紀初頭の糸切り碗（29）が出土している。

SP251（第11・15・26図・図版２・５）　SP251はSH２から南西に0.3m離れて検出された。平面形は不定形で比較的大形の小穴で、東西0.83m、南北0.58m、深さ0.33mである。それを切って東西0.17m、南北0.23m、深さ0.61mの不定形の小穴が検出され、この小穴から柱根が検出された。この柱根の年代はSH２に近接するため、12世紀前半と考えられる。

SP281（第11・15図・図版２）　SP281はＥ区Ｇ２グリッドのSD19の付近にある。平面形は不定形で東西0.38m、南北0.38m、深さ0.31mである。SP281の覆土灰色粘土層直上から、助宗窯生産でK－90号窯式併行にあたる９世紀後半の灰釉陶器碗（24）の一部と、O－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の糸切り碗（26）の一部が出土した。

SP283・284（第11・15図・図版２）　SP283はＥ区Ｇ２グリッドにありSP284に切られている。SP283の平面形は不定形で東西0.36m、南北残存径0.26m、深さ0.18mである。また、SP284は根石があり、平面形が方形で東西0.39m、南北0.43m、深さ0.22mである。SP283の覆土中より糸切り碗の一部（70）が出土している。

SP299（第11・15・27図・図版３・５）　SP299はＥ区Ｇ２グリッドにあり道状遺構６を切っている。平面形は方形であり、東西0.72m、南北0.65m、深さ0.42mで、小穴内に角礫が根石として検出された。この小穴の年代は道状遺構６より新しいと思われる。



第29図　掘立柱建物SH２付近遺物出土状況

２　下層遺構出土の遺物

(1)　掘立柱建物出土の遺物

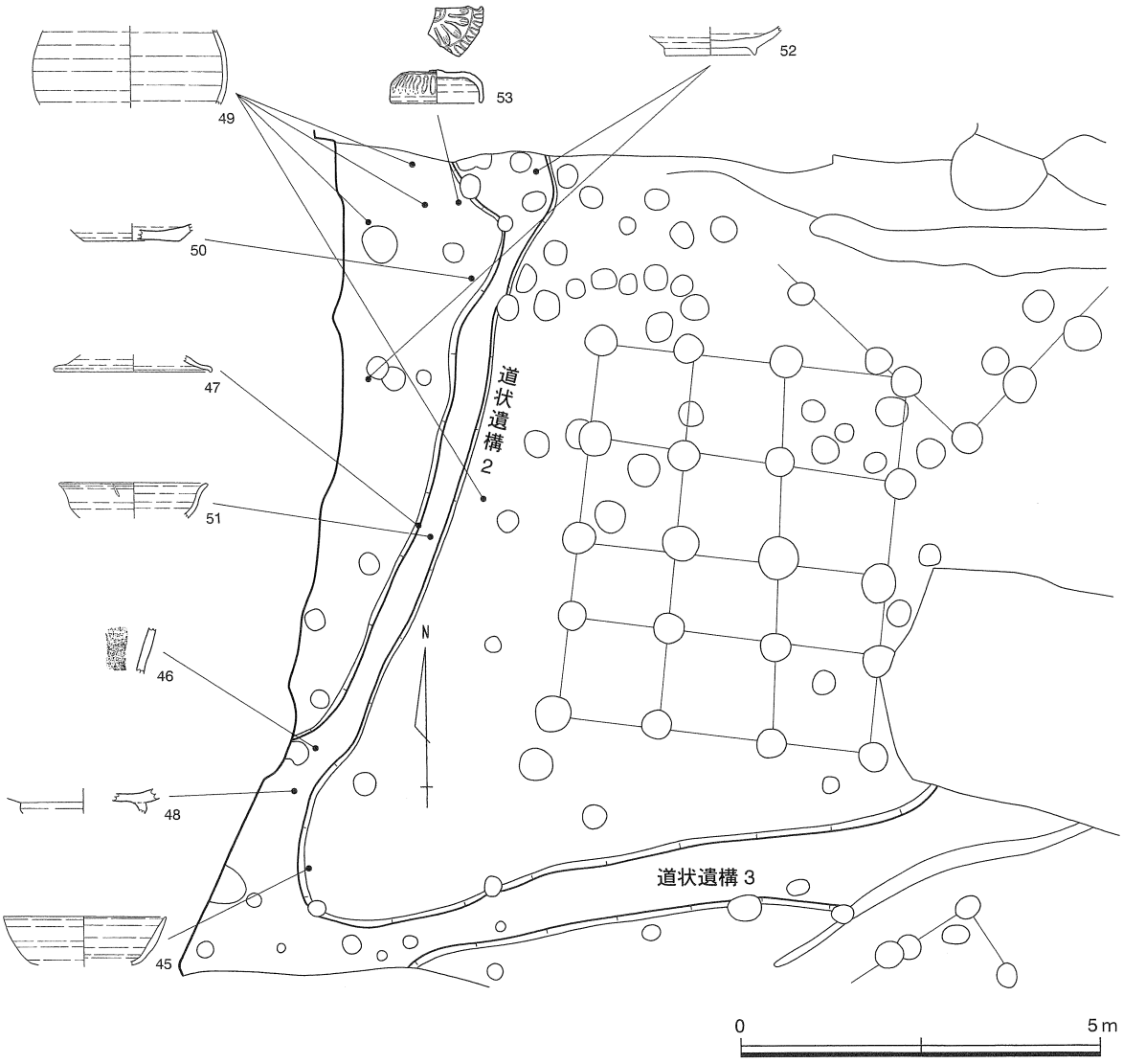
SH１出土遺物（第28・34図・図版２・20）　（１）はＦ２グリッドにあるSH１の整地層から出土しており、遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。（２）はＧ２グリッドにあるSH１の柱穴のSP８より出土した遠江系の土師器の台付甕で８世紀から９世紀の製品である。（４）はＦ２・Ｇ２グリッドにあるSH１の柱跡のSP９より出土した湖西産の須恵器の瓶で８世紀から９世紀の製品と思われる。（６）はＧ２グリッドより出土した土師器の坏である。（８）はＧ２グリッドより出土した猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でＫ―14号窯式併行にあたる９世紀前半の製品である。（９）は同時期でＧ２グリッド灰色粘土層より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。(10) はＦ２・Ｇ２グリッドより出土した猿投窯生産の灰釉陶器の碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。SP15とSF６からの出土品と接合した。(11) は同時期でＧ２グリッドより出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(12) は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品であり、土手状遺構１からの出土品と接合した。(13) は同時期でＥ２・Ｇ２グリッドより出土した旗指古窯生産の灰釉陶器の碗である。土手状遺構１からの出土品と接合した。(14) はＥ２・Ｆ３・Ｇ２グリッド灰色粘土層より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の広口瓶でＫ―14号窯式併行にあたる９世紀前半の製品である。SH１のSP11、SH３のSP39、SR８からの出土品と接合した。(15) はＧ２グリッドの灰色粘土層より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。道状遺構４からの出土品と接合した。(16) はＧ２グリッドより出土した東遠系の糸切り碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後

第30図　掘立柱建物SH３～５付近遺物出土状況

半の製品である。(17) はＧ２グリッドより出土した東遠系の糸切り碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(19) はＧ２・Ｆ２グリッドより出土した東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。

SH２出土遺物（第29・35図・図版２・20）　(20) はＧ２グリッド灰色粘土層（整地層）より出土した遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。(21) はＧ２グリッドより出土した土師器の甕でSH２のSP30の風化礫混灰色粘土層から出土している。(22) はＧ２グリッドより出土した土師器の甕で、SH２のSP33灰色粘土層から出土している。(23) はＧ２グリッドの灰色粘土層より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。(24) は同時期でＥ２・Ｆ２・Ｇ２グリッドより出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗である。SP236、SP281、道状遺構１からの出土品と接合した。(25) はＧ２グリッドより出土した東遠系の糸切り碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。SH２と道状遺構６からの出土品と接合した。(27) は同時期でＧ２グリッドより出土した東遠系の糸切り碗である。(28) は同時期でＧ２グリッドから出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(31) はＧ２・Ｆ２グリッドから出土した東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。(32) は伊万里焼の染付の筒形鉢で筆筒の可能性がある。18世紀の製品で上層部から混入した遺物と考えられる。

SH３出土遺物（第30・35図・図版２・20）　(35) はＧ２グリッドSH３のSP41より出土した東遠系の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(36) はＦ２グリッドSH３のSP39より出土した東遠系の山茶碗で12世紀後半の製品である。



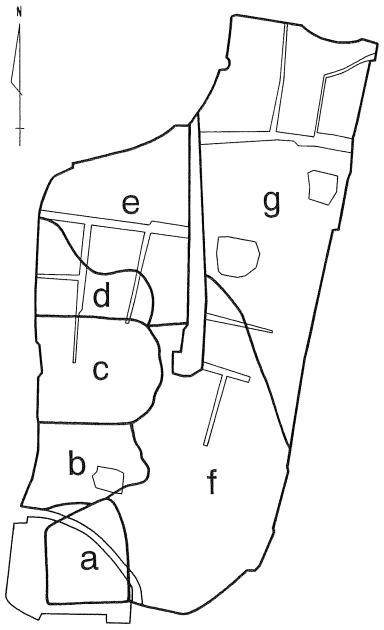
第31図　道状遺構遺物出土状況

SH４出土遺物（第30・35図・図版３・20）　(37) はＦ２グリッドSH４のSP50より出土した土師器の碗でＫ－14号窯式からＫ－90号窯式前半にあたる９世紀前半から９世紀後半の製品と思われる。(38) はＦ２グリッドSH４から出土した糸切り碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品と思われる。(39) はＦ２グリッドSH４出土の土師器の碗でＫ－14号窯式からＫ－90号窯式にあたる９世紀前半から９世紀後半の製品と思われる。(40) はＥ２・Ｆ２グリッドのSH４にあるSP51より出土しており、瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で登窯５期か登窯６期にあたる18世紀前半の製品で、上部層からの混入品である。

SH５出土遺物（第30・35図・図版３・20）　(41) はＦ２グリッドのSH５より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ－90号窯式にあたる９世紀後半の製品である。SH５とSD13の出土品が同一個体である。また、SH６からは遺物が出土していない。

(2)　道状遺構出土の遺物

道状遺構１出土遺物（第23・33・35・36図・図版１・20・21）　(24) はＥ２グリッド道状遺構１より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品と思われる。この製品はSH２、SP236、SP281からの出土品と接合した。(42) はＥ２グリッド道状遺構１より出土した東遠系の須恵器で９世紀中葉の製品と思われる。(43) はＥ２グリッドの道状遺構１より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の皿でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。(44) はＥ２グリッドの道状遺構



第32図　Ｅ区遺構外出土遺物区分け図

１より出土した東遠系の小碗である。

道状遺構２出土遺物（第31・36図・図版２・21）（45）はＧ１グリッドの道状遺構２より出土した土師器の坏で古墳時代の可能性がある。（47）はＧ２グリッドの道状遺構２より出土した須恵器の坏蓋で９世紀前半の製品である。（48）はＧ１グリッドの道状遺構２より出土した東遠系の灰釉陶器の碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。（50）はＦ２グリッドの道状遺構２付近より出土した東遠系の糸切り碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品と思われる。（51）は道状遺構２付近より出土している東遠系の灰釉陶器の輪花小碗で11世紀後半の製品である。（52）は道状遺構２より出土している東遠系の山茶碗で12世紀前半の製品である。（53）は道状遺構２付近より出土している中国越州窯系の白磁菊花紋合子の蓋で12世紀の製品である。この資料は土手状遺構１からの出土品と接合した。道状遺構３からは遺物が出土しなかった。

道状遺構４出土遺物（第23・33・34・36図・図版１・20・21）（15）は道状遺構４より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。SH１からの出土品と接合した。（54）は道状遺構４より出土した東遠系の高台付山茶碗で12世紀末の製品である。

道状遺構５出土遺物（第23・33・36図・図版１・21）　（55）は道状遺構５より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の皿でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

道状遺構６出土遺物（第23・33図・図版３・21）　（56）は道状遺構６より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でＫ―14号窯式併行にあたる９世紀前半の製品である。

⑶　溝状遺構（SD）出土の遺物

SD11出土遺物（第33図・図版１・21）　（57）は遠江系の土師器甕の口縁部で８世紀から９世紀の製品である。（58）は土師器の坏で９世紀前半の製品と思われる。（59）は東遠系の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

SD12出土遺物（第33図・図版１・21）　（60）は土師器の坏で９世紀後半の製品と思われる。

SD13出土遺物（第33図・図版１・21）　（61）は土師器で８世紀から９世紀の製品である。（62）は猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でＫ―14号窯式併行にあたる９世紀前半の製品である。（63）は東遠系の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（64）は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器の碗である。

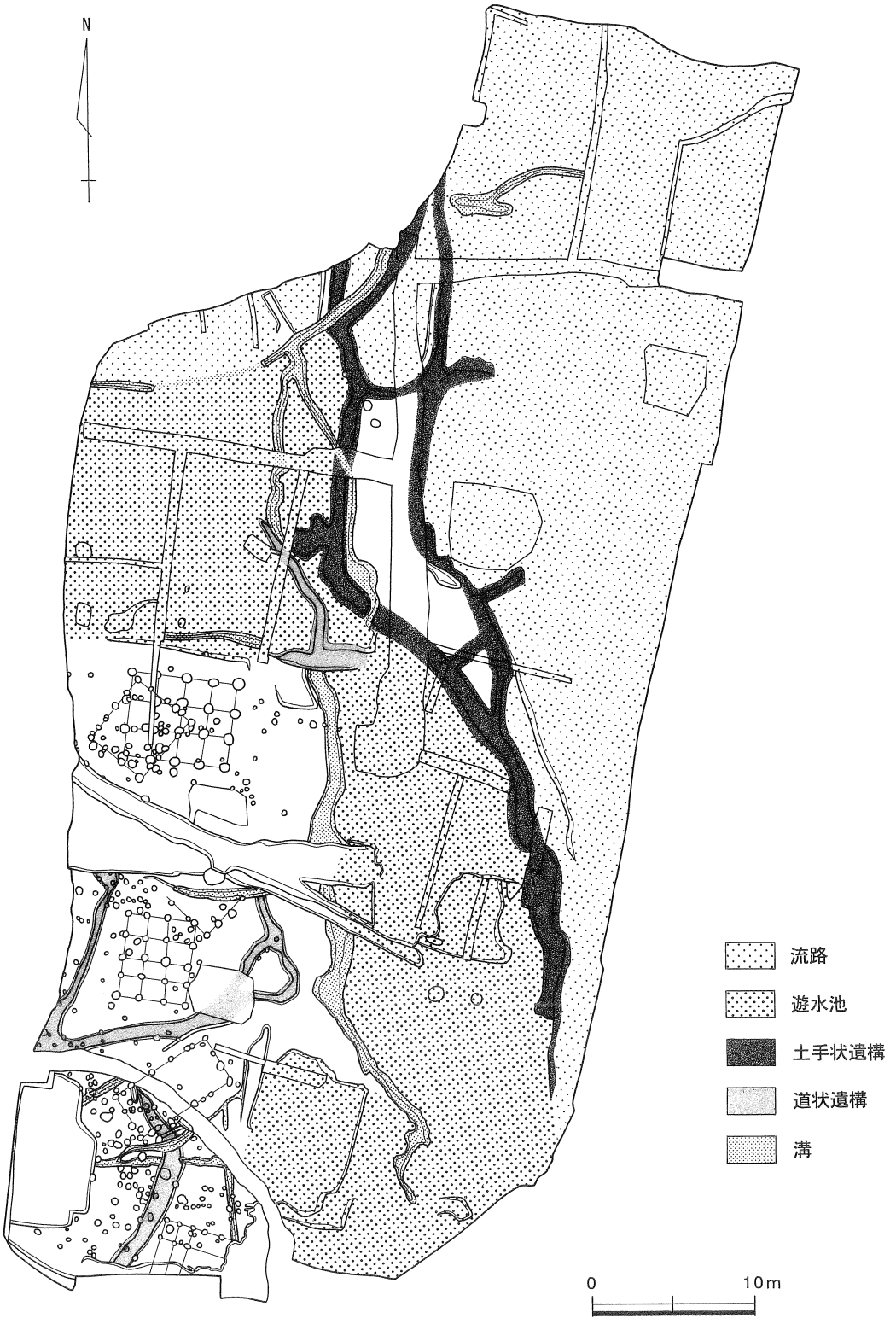
SD14出土遺物（第33図・図版４・21）　（65）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。

SD15出土遺物（第33図・図版１・21）　（66）は東遠系の糸切り碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

SD17出土遺物（第33図・図版２・21）　（67）は土師器の蓋である。

SD20出土遺物（第33図・図版２・21）　（68）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。（69）は東遠系の灰釉陶器の輪花碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

SD21出土遺物（第33図・図版３・21）　（70）は東遠系の糸切り碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。



第33図　下層遺構流路・遊水池区分け図

⑷　Ｅ区ａ地点出土遺物（第32図・図版21）

（71）は土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。（72）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（73）は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器碗である。（74・75）は同時期の東遠系の糸切り碗である。（76）は東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。

⑸　**Ｅ区ｂ地点出土遺物**（第32・37・38図・図版21・22）

（77）は須恵器の坏蓋で７世紀中葉の製品である。（78～81）は遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。（82）は土師器の甕の底部でSP160から出土している。（83）は助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でＫ－14号窯式併行にあたる９世紀前半の製品である。（84）は東遠系の灰釉陶器の碗でＫ－14号窯式からＫ－90号窯式にあたる９世紀前半から９世紀後半の製品である。（85）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。（86）は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。（87）は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。（88）は同時期で東遠系の灰釉陶器の長頸瓶である。（89）は東遠系の灰釉陶器の碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（90）は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器碗である。（91）は東遠系の灰釉陶器長頸瓶でＯ－53号窯式にあたる10世紀初頭の製品である。（92）はSP176より出土した東遠系の糸切り碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（93）は同時期で東遠系の糸切り碗である。（94）は同時期で東遠系の糸切り碗である。（95）は同時期で東遠系の糸切り碗である。（96）はSF６出土の清郷甕で10世紀から11世紀の製品である。（97）は東遠系の高台付きの山茶碗で13世紀中葉の製品である。（98）はSF６から出土した伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。（99）は伊万里焼の白磁の碗で19世紀前半の製品である。（100）は伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。

⑹　**Ｅ区ｃ地点出土遺物**（第31・32図・図版22・29）

（101）は助宗窯生産の須恵器の坏身で８世紀から９世紀の製品である。（102）は助宗窯生産の灰釉陶器の輪花碗でＫ－90号窯式にあたる９世紀後半の製品である。（103）は道状遺構１より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。（104）は東遠系の灰釉陶器の碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（105）は瀬戸焼の灰釉の小皿で窖窯10期にあたる14世紀後半の製品である。（106）は土手状遺構１より出土した志戸呂焼の鉄釉の徳利で16世紀後半の製品である。

⑺　**Ｅ区ｄ地点出土遺物**（第32・38・39図・図版22）

（107）は遠江系の土師器の甕である。（108）は遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。（109）は須恵器の坏蓋で８世紀代の製品である。（110）は猿投窯生産の原始灰釉陶器の長頸瓶でＯ－10号窯式併行にあたる８世紀末から９世紀初頭の製品である。（111）は猿投窯生産の緑釉陶器の稜碗で９世紀代の製品である。（112）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。（113）は同時期で東遠系の灰釉陶器の長頸瓶である。（114）は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。（115）は同時期で猿投窯生産の長頸瓶である。（116）は道状遺構１より出土した東遠系の長頸瓶でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（117）は同時期で土手状遺構１より出土した東遠系の長頸瓶である。（118）は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。（119～121）は同時期で東遠系の糸切り碗である。（122）は東遠系の山茶碗で12世紀前半の製品である。（123）は旗指窯生産の灰釉陶器の碗で11世紀末の製品である。（124・125）は東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。（126）は東遠系の小皿と思われる。（127）はSF２より出土した古瀬戸の灰釉の四耳壺で窖窯４期（古瀬戸前Ⅱ期）にあたる13世紀前半の製品である。（128）は中国元代景徳鎮窯の白磁梅瓶で13世紀の製品である。

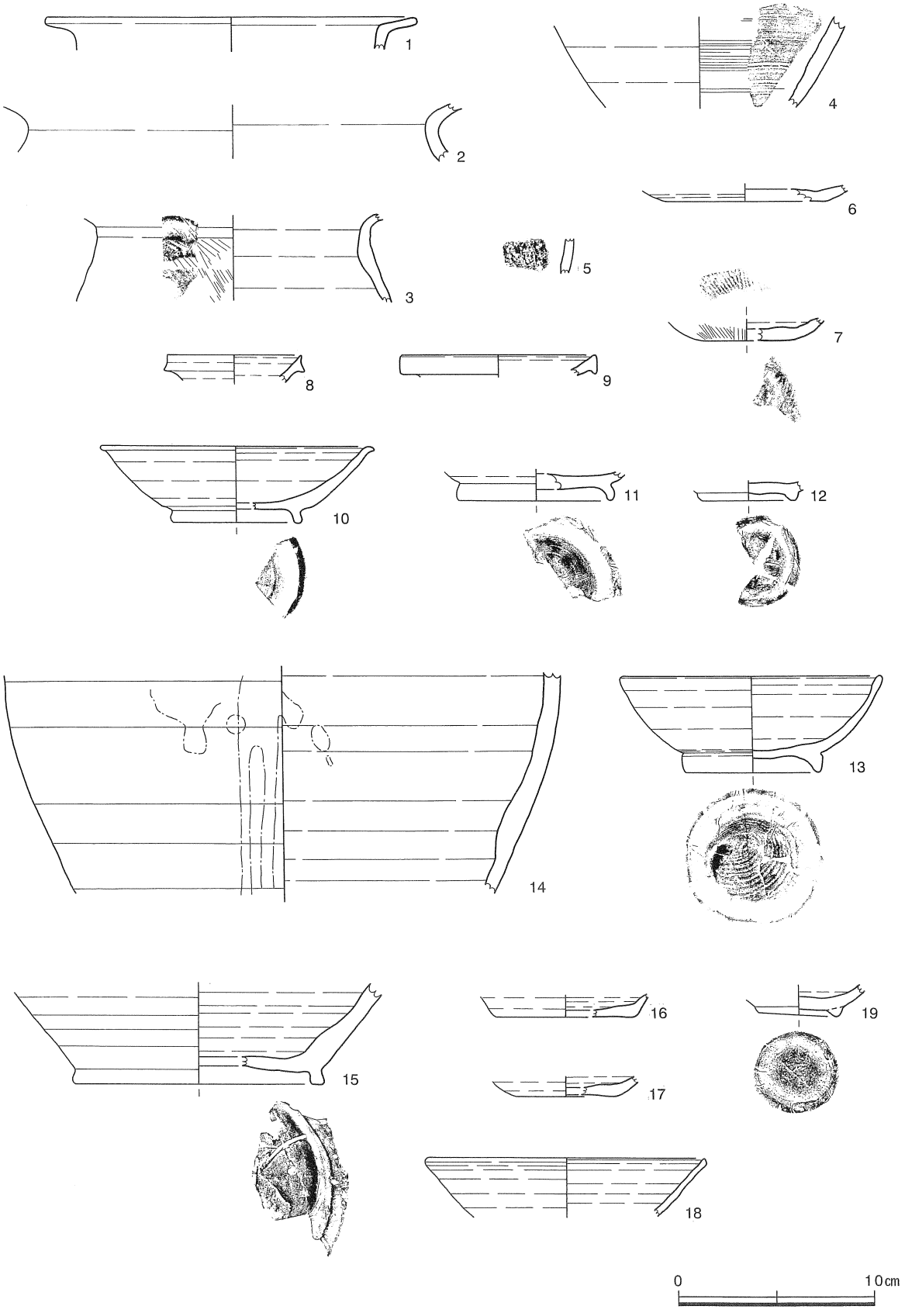
⑻　**Ｅ区ｅ地点出土遺物**（第32・39・40図・図版18・19・22・23・29）

（129）は古墳時代の土師器壺の底部である。（130）は助宗窯生産の須恵器の坏身で８世紀前半の製品である。（131）は須恵器の坏身で８世紀末の製品である。（132）は土師器の坏で奈良時代の製品である。（133）は駿東坏で８世紀から９世紀の製品である。（134）は遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。（135）は土師器の甕の底部付近である。（136）は土師器の坏で奈良時代の製品である。（137）は土手状遺構１より出土した遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。（138）は遠江系の

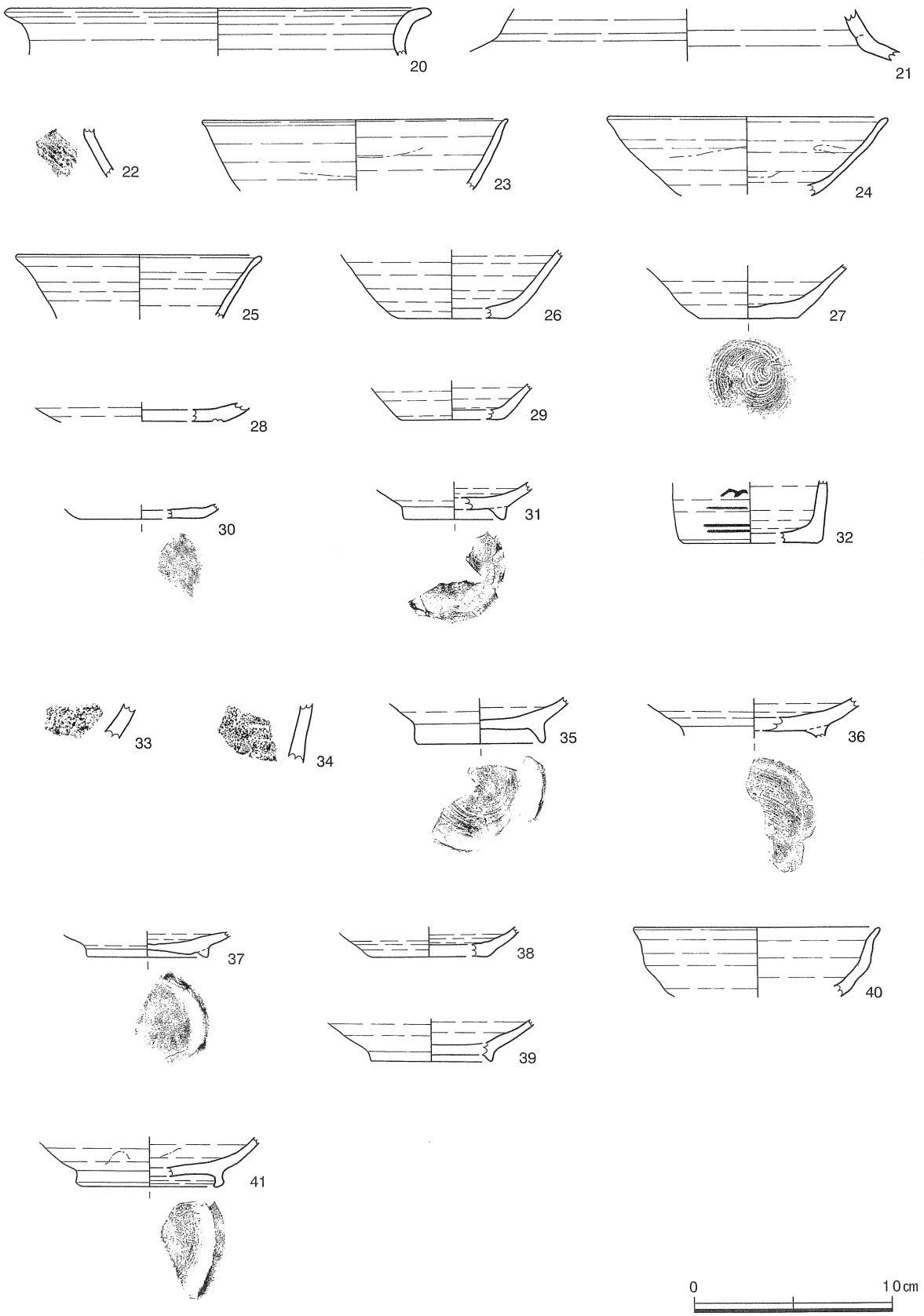
Ｓ字甕で８世紀から９世紀の製品である。(139) は遠江系の土師器の甕で頸部に接合痕があり８世紀から９世紀の製品である。(140) は土手状遺構１と土手状遺構２より出土した東遠系の灰釉陶器の長頸瓶でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。(141) は同時期のSD11より出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(142) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(143) は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器の碗である。(144) は同時期で道状遺構１より出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(145) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(146) は同時期で東遠系の灰釉陶器の長頸瓶である。(147) は同時期でSD11より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。(148) は同時期で東遠系の長頸瓶の把手である。(149) は同時期で猿投窯生産の緑釉陶器の碗である。(150) は東遠系の灰釉陶器の皿でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(151) は同時期で土手状遺構２と道状遺構１から出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(152) は猿投窯生産の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式にあたる10世紀初頭の製品である。(153・154) は東遠系の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(155) は同時期で東遠系の灰釉陶器の皿である。(156) は同時期でSD11から出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。外面に墨書があるが判読不明である。(157～162) は同時期で東遠系の糸切り碗である。(163) は土手状遺構１より出土した東遠系の糸切り碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。(164) は東遠系の糸切り碗でＯ―53号窯式併行の10世紀初頭の製品である。体部外面に墨書が施されているが判読不明である。(165) はSF ４と道状遺構１より出土した東遠系の山茶碗で13世紀中頃の製品である。(166) は東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。(167) は東遠系の山茶碗で12世紀後半の製品である。(168) はSD12より出土した東遠系の小碗で13世紀の製品である。(169) は中国南宋の白磁の小皿で12世紀の製品である。(170) はSD11より出土した中国南宋の白磁の四耳壺で13世紀の製品である。(171) は土手状遺構１より出土した常滑焼の甕で13世紀から14世紀の製品である。(172) は土手状遺構１より出土した志野焼の鉄釉の小皿で後期Ⅳ古併行にあたる15世紀中葉の製品である。

⑼　Ｅ区ｆ地点出土遺物（第32・41・42図・図版23・24・29）

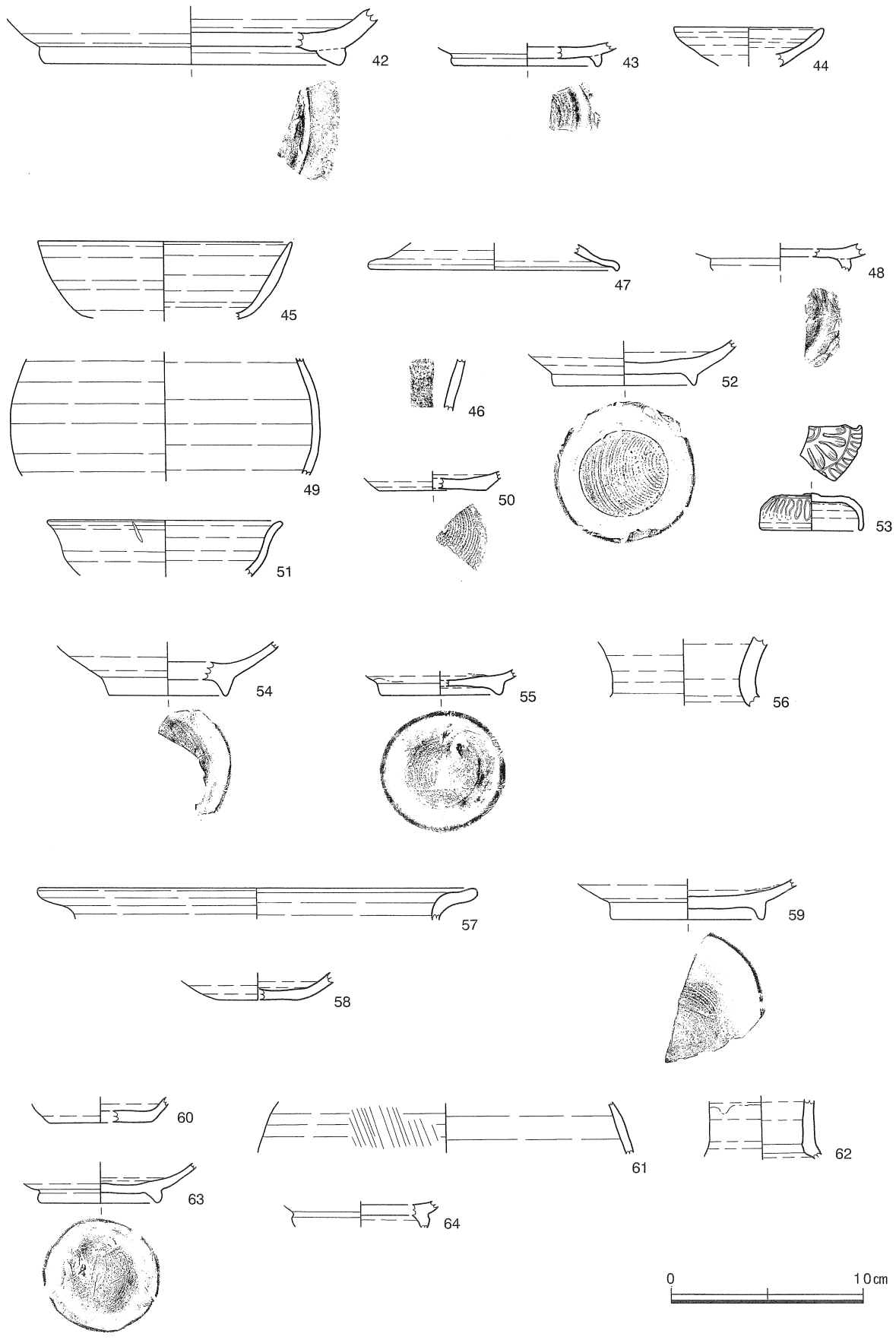
(173) は助宗窯生産の須恵器の坏蓋で９世紀前半の製品である。(174) は助宗窯生産の須恵器の坏身で９世紀前半の製品である。(175) は土手状遺構１から出土した助宗窯生産の須恵器の坏身で９世紀前半の製品である。(176) は助宗窯生産の須恵器の坏身で９世紀前半の製品である。(177) は土師器の坏である。(178) は土師器の甕である。(179・180) は土師器の坏である。(181) は土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。(182) は土手状遺構１より出土した土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。(183) は土手状遺構１より出土した遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。(184～186) は遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。(187) は土手状遺構１より出土した土師器の甕である。(188) は土手状遺構１より出土した遠江系の土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。(189) は土手状遺構１より出土した土師器の甕で８世紀から９世紀の製品である。(190) は土師器の小形甕で８世紀から９世紀の製品である。(191) は東遠系の灰釉陶器の碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。(192) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(193) は同時期でSD14より出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(194) は同時期の土手状遺構１より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の碗である。(195) は同時期で猿投窯生産の灰釉陶器の碗である。(196) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(197) は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。高台部を転用硯に使用した可能性がある。(198) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗であり高台部が欠損している。(199・200) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(201) は同時期で土手状遺構１より出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(202) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(203) は同時期の東遠系の糸切り碗である。(204) は東遠系の糸切り碗でＫ―90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。(205・206) は東遠系の糸切り碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。



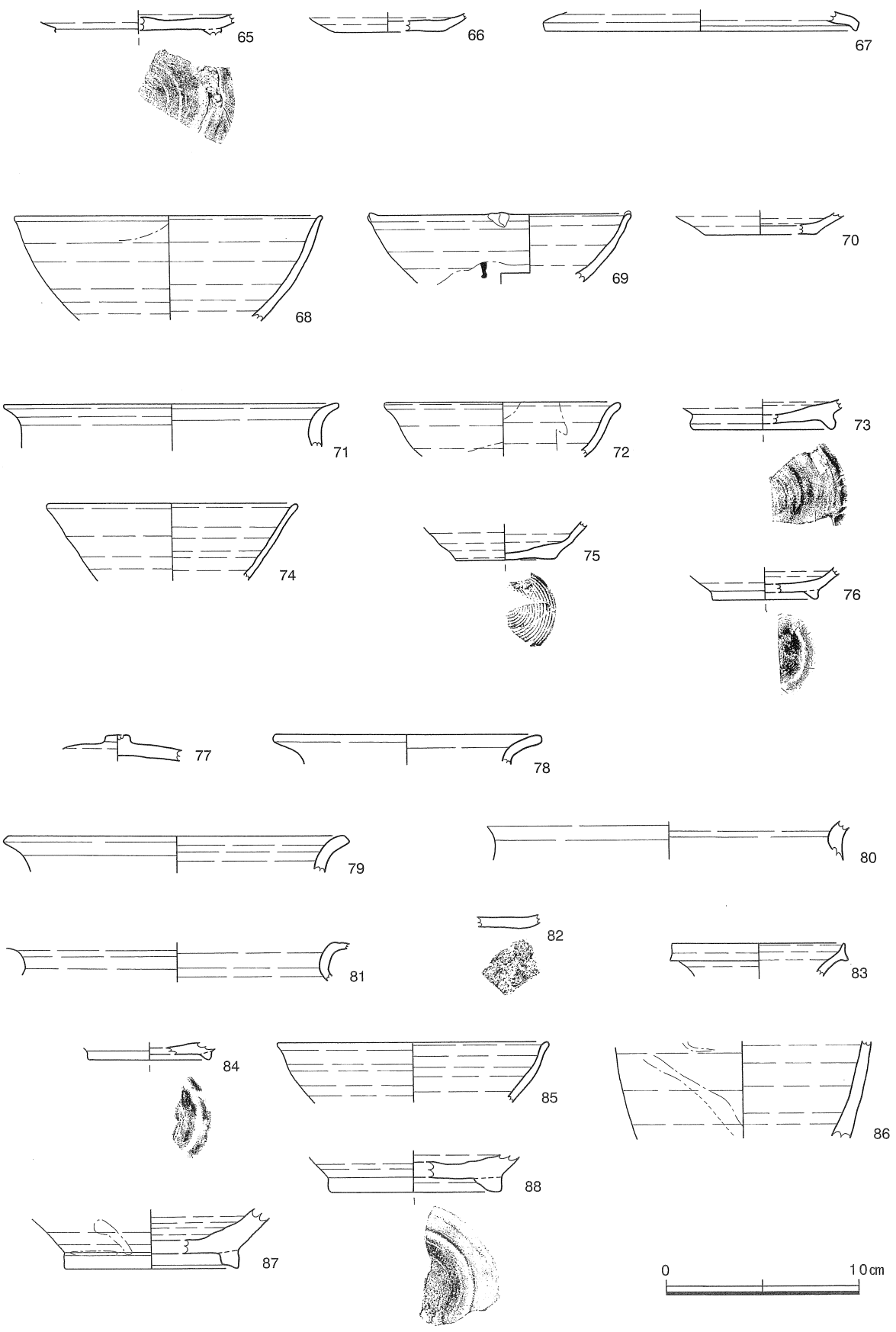
第34図　出土遺物実測図１（土器１）



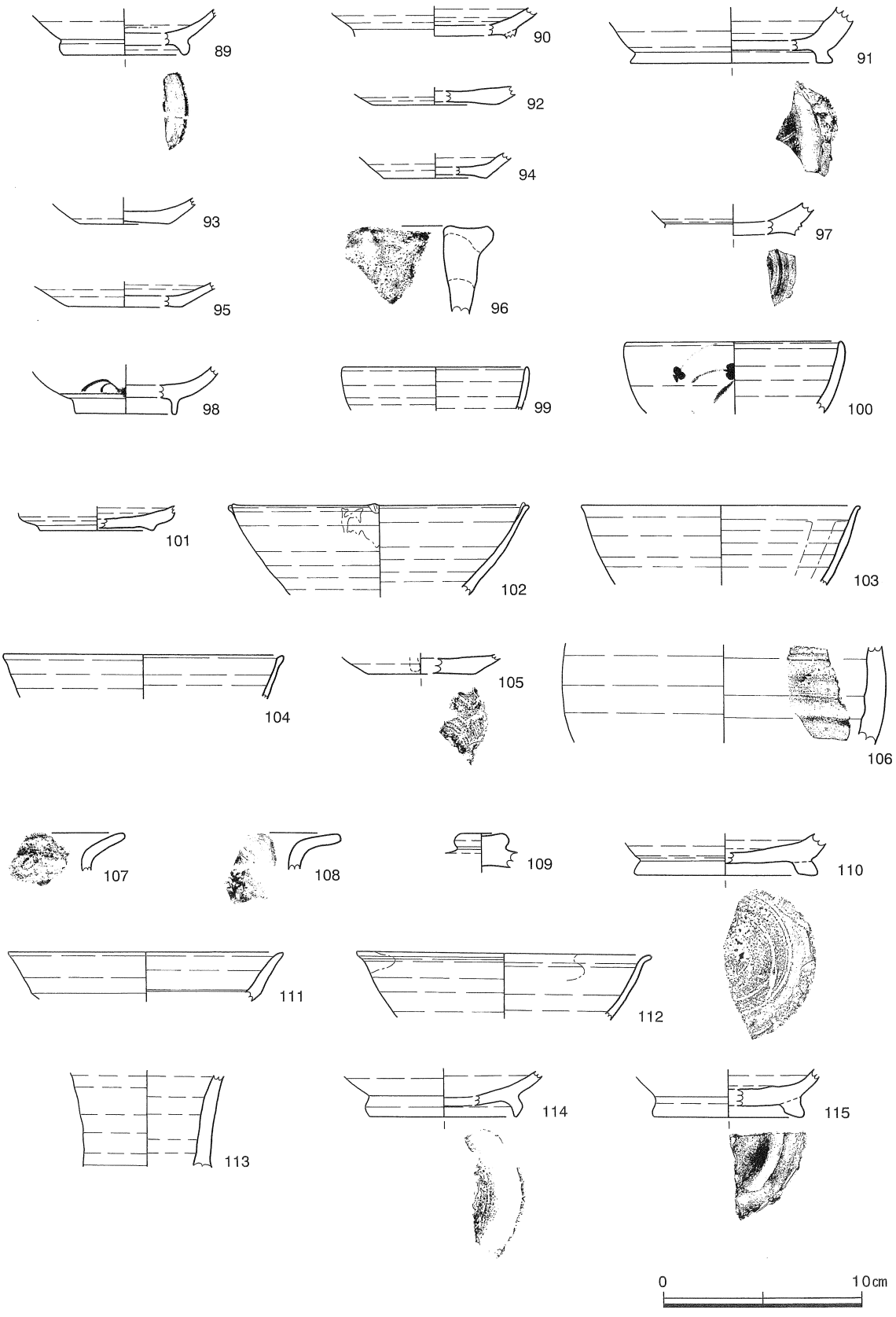
第35図　出土遺物実測図２（土器２）



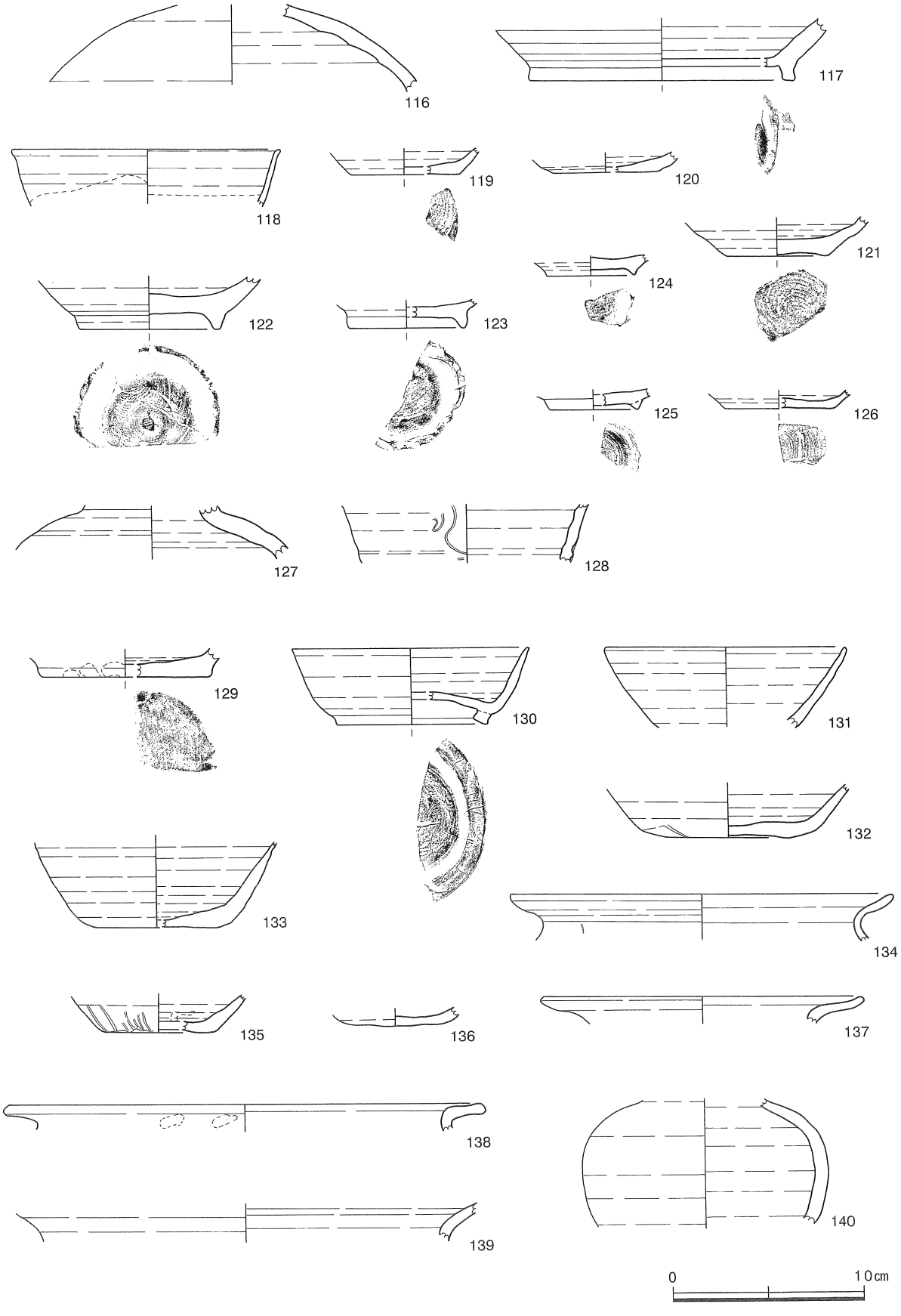
第36図　出土遺物実測図３（土器３）



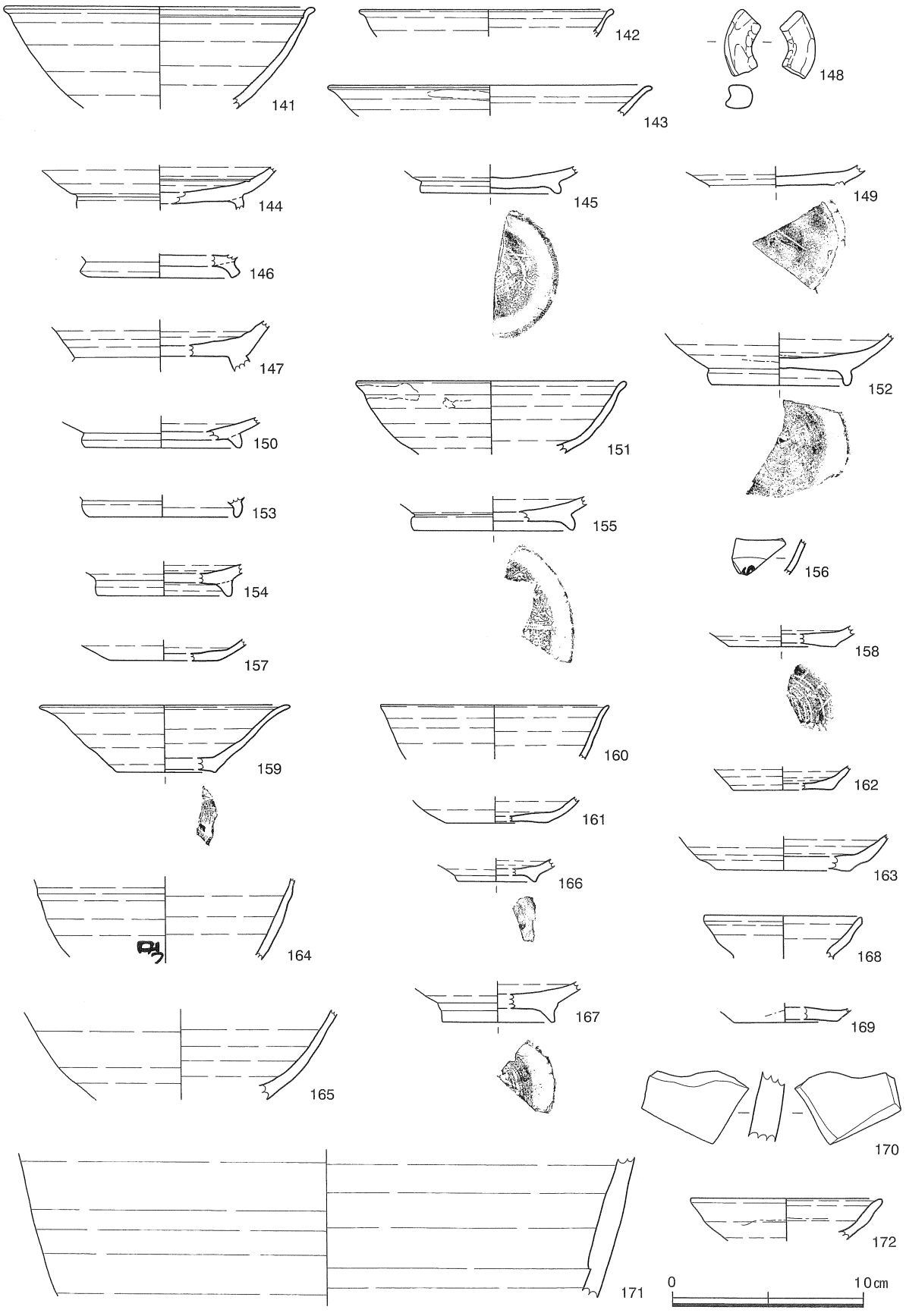
第37図　出土遺物実測図４（土器４）



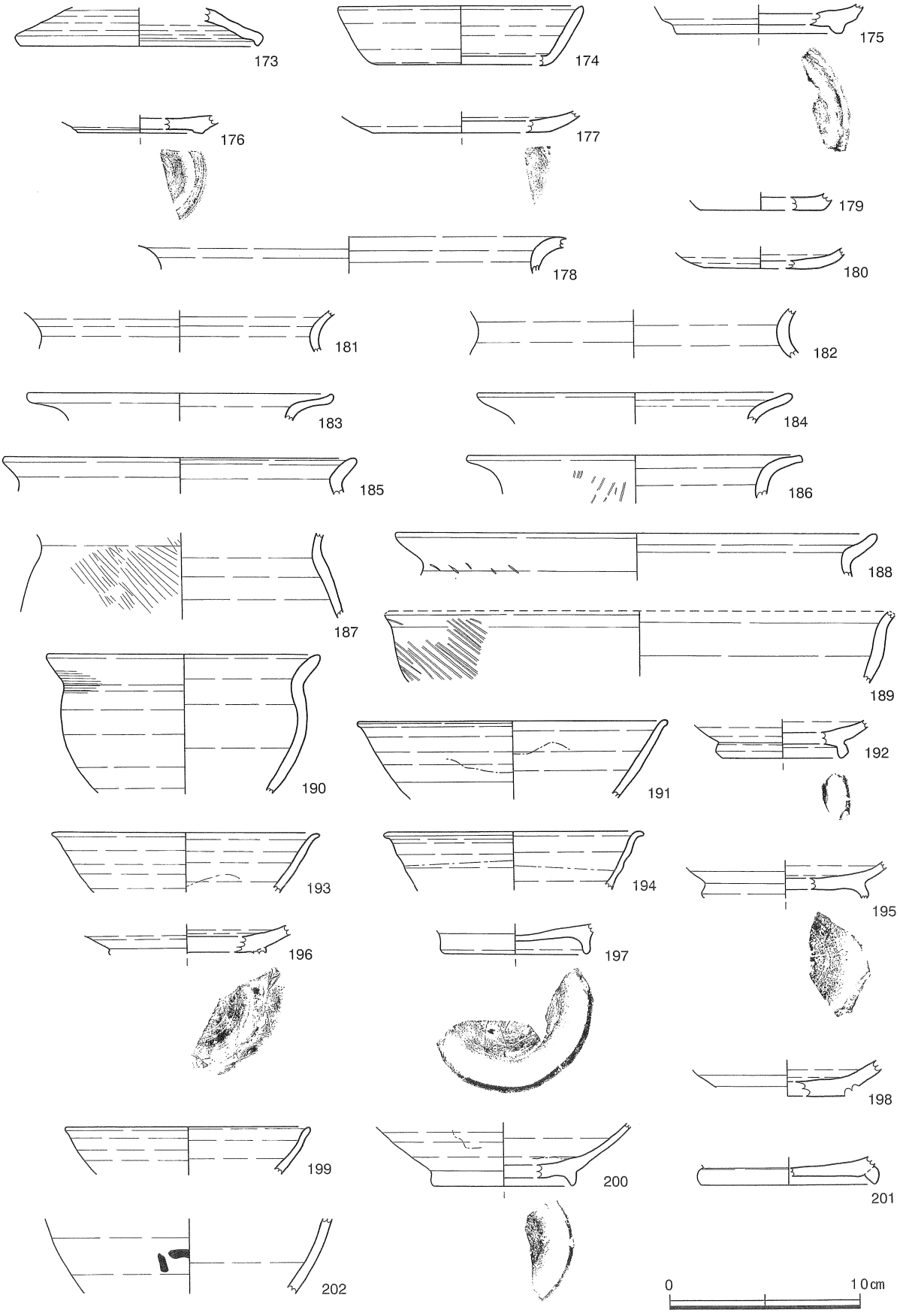
第38図　出土遺物実測図５（土器５）



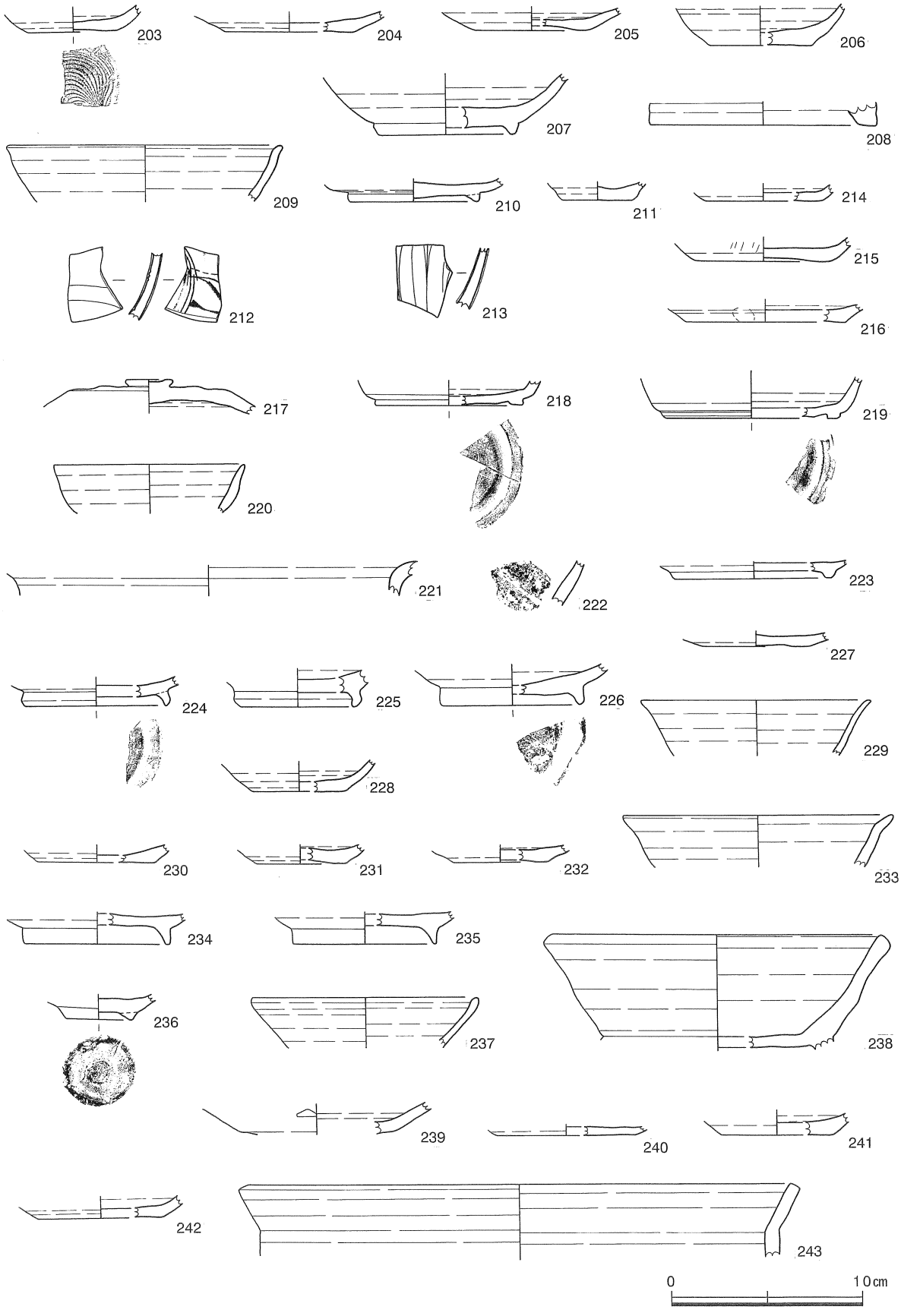
第39図　出土遺物実測図６（土器６）



第40図　出土遺物実測図７（土器７）



第41図　出土遺物実測図８（土器８）



第42図　出土遺物実測図９（土器９）

（207）は東遠系の山茶碗で13世紀中葉の製品である。（208）は東遠系の片口鉢で13世紀初頭の製品である。（209）は東遠系の山茶碗で12世紀の製品である。（210）は東遠系の山茶碗である。（211）は東遠系の小皿で13世紀後半の製品である。（212）は中国龍泉窯系の青磁の碗で12世紀から13世紀の製品である。（213）は中国の青磁蓮弁紋碗で13世紀中頃の製品である。（214～216）はかわらけである。

⑽　Ｅ区ｇ地点出土遺物（第32・42図・図版18・24）

（217）はSR８より出土した助宗窯生産の須恵器の坏蓋で９世紀前半の製品である。（218）はSR８より出土した助宗窯生産の須恵器の坏身で９世紀前半の製品である。（219）はSR８より出土した須恵器の坏身である。（220）はSR８より出土した土師器の碗である。（221）はSR８より出土した遠江系の土師器の台付甕で８世紀から９世紀の製品である。（222）はSR８より出土した土師器の坏である。（223）はSR８より出土した助宗窯生産の須恵器の坏身で９世紀前半の製品である。（224）は土手状遺構２より出土した東遠系の灰釉陶器の碗でＯ－53号窯式にあたる10世紀初頭の製品である。（225）は土手状遺構１より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（226）は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。（227～229・231・232）は同時期でSR８より出土した東遠系の糸切り碗である。（230）は同時期の東遠系の糸切り碗である。（233～235）はSR８より出土した東遠系の山茶碗で12世紀前半の製品である。（236）はSR８より出土した東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。（237）はSR８出土の東遠系の小碗で13世紀後半の製品である。（238）は渥美窯生産の山茶碗で13世紀後半の製品である。（239～241）はSR８から出土したかわらけで15世紀代の製品であり、（239）の体部外面には炭化物が付着している。（242）はかわらけで15世紀代の製品である。（243）はSR８より出土した内耳鍋であり15世紀後半から16世紀前半の製品である。

第５節　上層遺構と出土遺物

１　Ａ区水田

Ａ区水田は、標高62.4～60.8m付近に営まれる（第44図）。等高線は南から北方向に下るほぼ東西方向を呈するが、61.6m付近から上位は東側の丘陵裾部の影響を受けて東北東方向に変化する。

⑴　畦畔（第45図）

水田の畦畔はほぼ等高線に平行・直交する方向に造られている。基幹となる大畦畔はSK１～９である。板材と丸材の杭を用いた施設は東西方向の畦畔の北面に集中する傾向があり、SK５以外の南北方向には余りみられない。より下位にあたる田面に、上位の水田が流出しないよう図られているのだろう。また、特に東西方向の大畦畔毎に、上下で大きな段差が生まれている。大畦畔を整えることで、従来の南から北に向かう斜面をより平坦にすることを意図している（第47図）。

SK１　Ｄ７・８グリッドで検出された東西方向の畦畔である。水田面である灰色粘土層上に、田面の粘土を掻き揚げて形作る。幅は上端で0.3～0.5ｍを測り、南側・北側田面との比高差は３㎝前後である。北側の縁辺には板材を横に渡し、太さ５～８㎝の丸材の杭を打ちこんで押さえとしている（第51図）。

SK２・４　Ｄ６～Ｅ７グリッドで検出された同一延長上に位置する東西方向の畦畔である。幅は上端で0.2～1.2ｍを測り、SK４では屈曲が強く細い。特にSK４の南側を主体に複数列の杭が打たれる（第50図）。

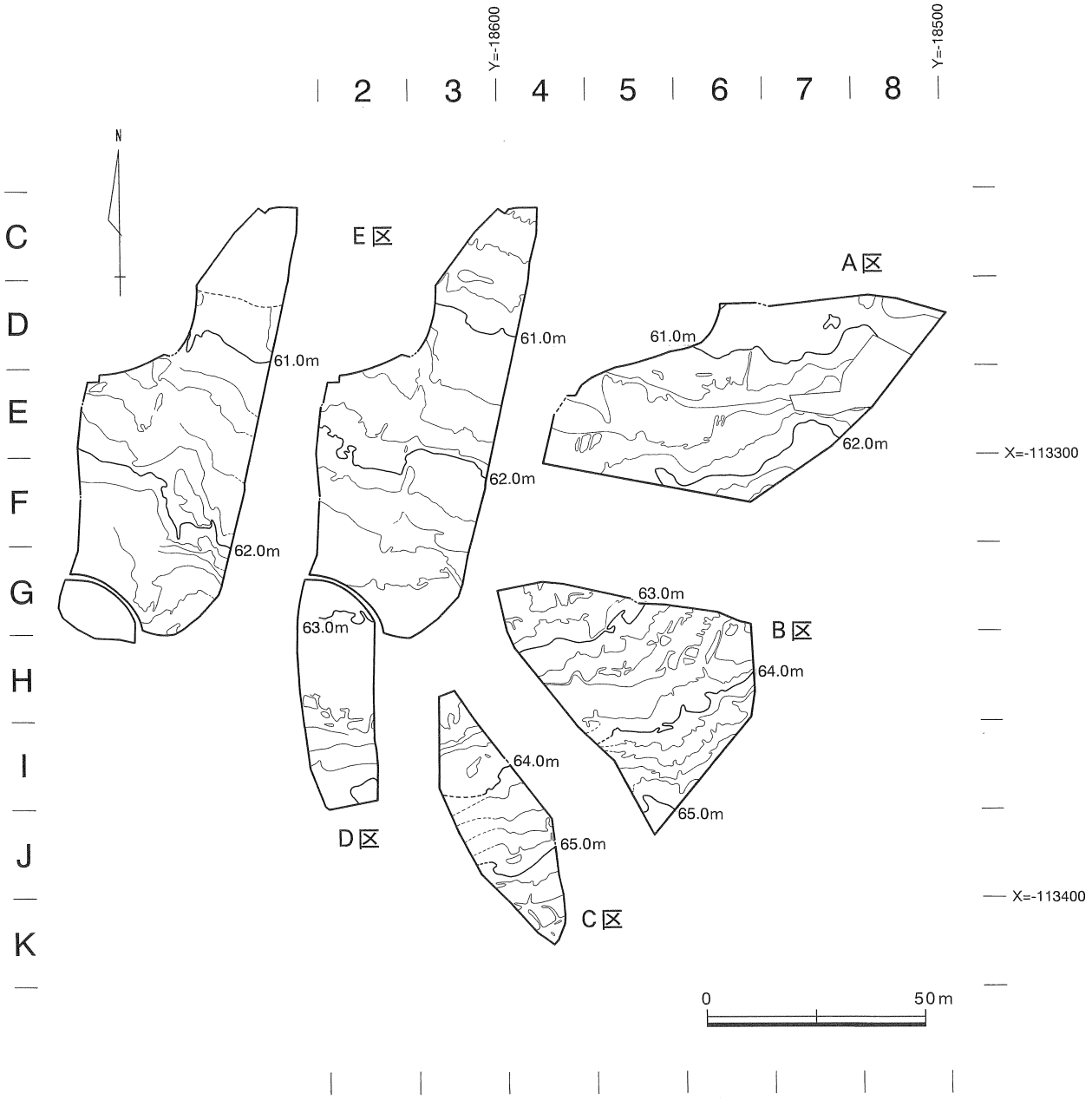
SK３　Ｄ・Ｅ６グリッドで検出された南北方向の畦畔である。幅は上端で1.0～1.2ｍを測る。

SK５　Ｄ７・８、Ｅ７グリッドで検出された南西－北東方向の畦畔である。東側が確認調査トレンチによって失われている。北西側田面との比高差は10～12㎝程度である。西側から接するSK４との取り付き

第43図　上層遺構全体図

部分を主体に、畦畔の西面に杭が打ちこまれる。これより北側へ離れた位置に３本の杭が検出されており、南側はSK６方向に杭を打ちこみ、微弱ながらも畦畔の西面に保護を施している（第50図）。

SK６　Ｅ７グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.4～2.0mを測り、北側田面との比高差は８～11cmである。幅が著しく太くなる部分は、南側田面と畦畔との差が明らかでない。恐らく放棄される前後に流出していたものとみられる。丸材の杭列は幅１～２m間に少なくとも２条が打ちこ

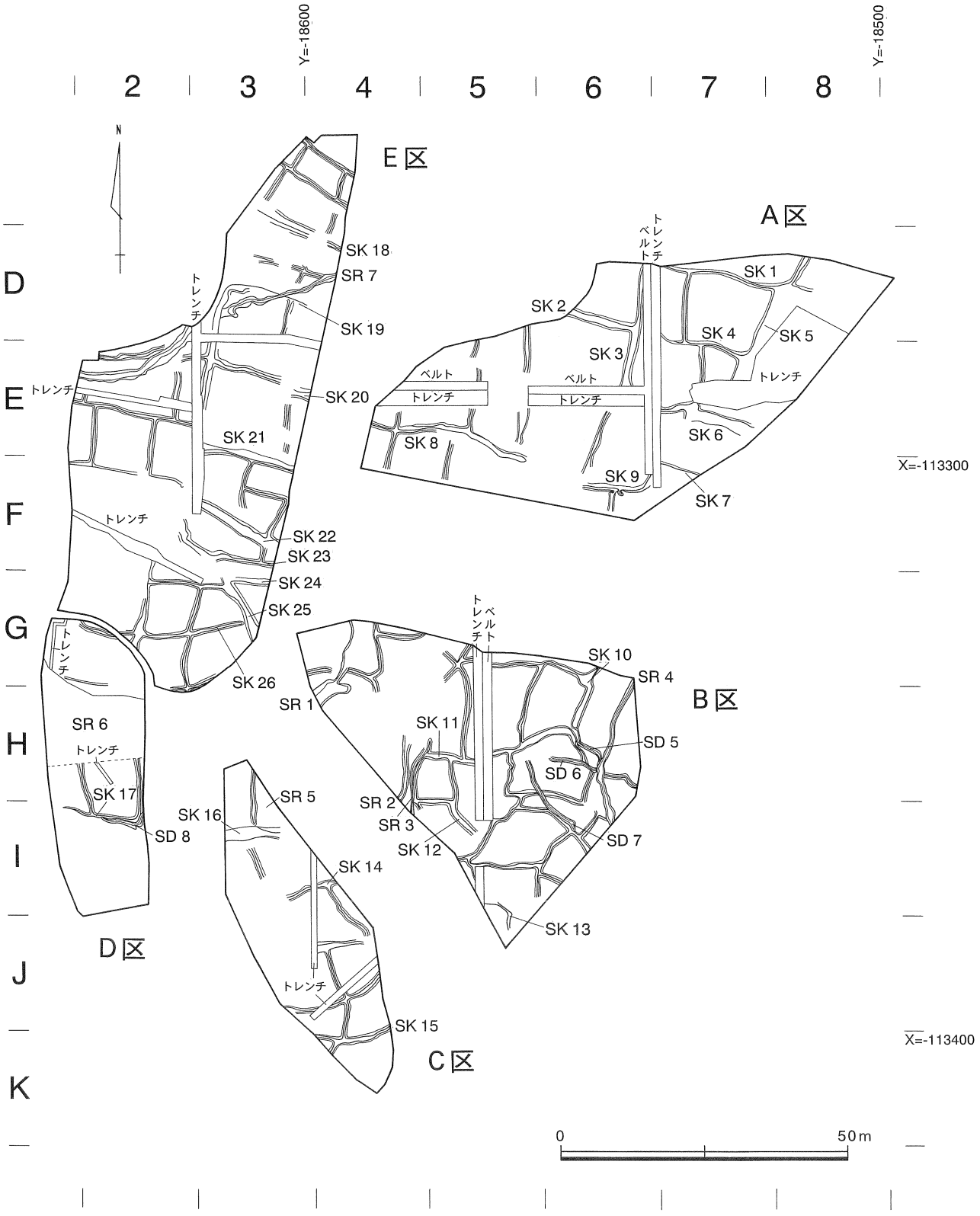


第44図　遺構検出面の地形

まれている。一条は畦畔の内側部分にある。もう一条は外側（北側）部分にあり、内側部分よりも密である。この密な部分は、下位（南側）の田面に対して段をつくって下がる部分にあたり、上位（南側）の田面をより水平に、下位の水田への流出がないように、より強固に保護されていることが窺える（第50図）。

SK７　Ｆ７グリッドで検出された東西方向の畦畔である。調査時には、北側田面に対する比高差２cm前後の段差として認識された。南側には少なくとも２列の丸材による杭列が打ちこまれており、これらの間を移動していることが察せられる。ここからSK６方向（南北方向）にも杭列が施されている。

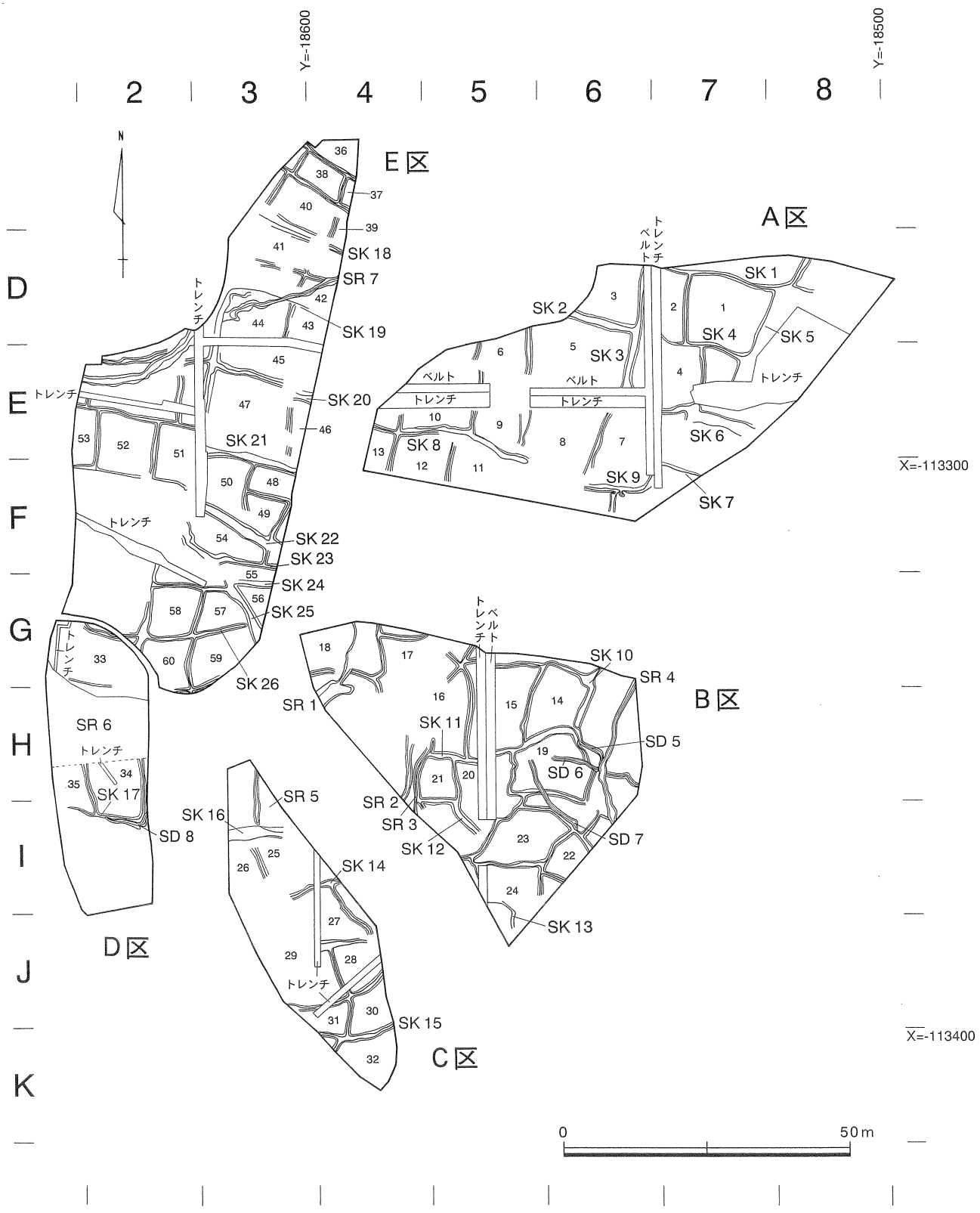
SK８　Ｅ４～６、Ｆ５グリッドで検出された東西方向の畦畔である。半ばほどでやや南側に膨らんでいる。幅は上端で0.2～1.2mを測り、北側田面との比高差は５～10cm、南側田面とは４～８cm程度である。丸材の杭は１m前後の幅で打ちこまれる（第52図）。南への落ちの肩部以下に杭が多くみとめられることは、この幅の北側にあたる部分が元来の畦畔北面であり、脆弱になった部分あるいは流出した部分を南



第45図　大畦畔位置図

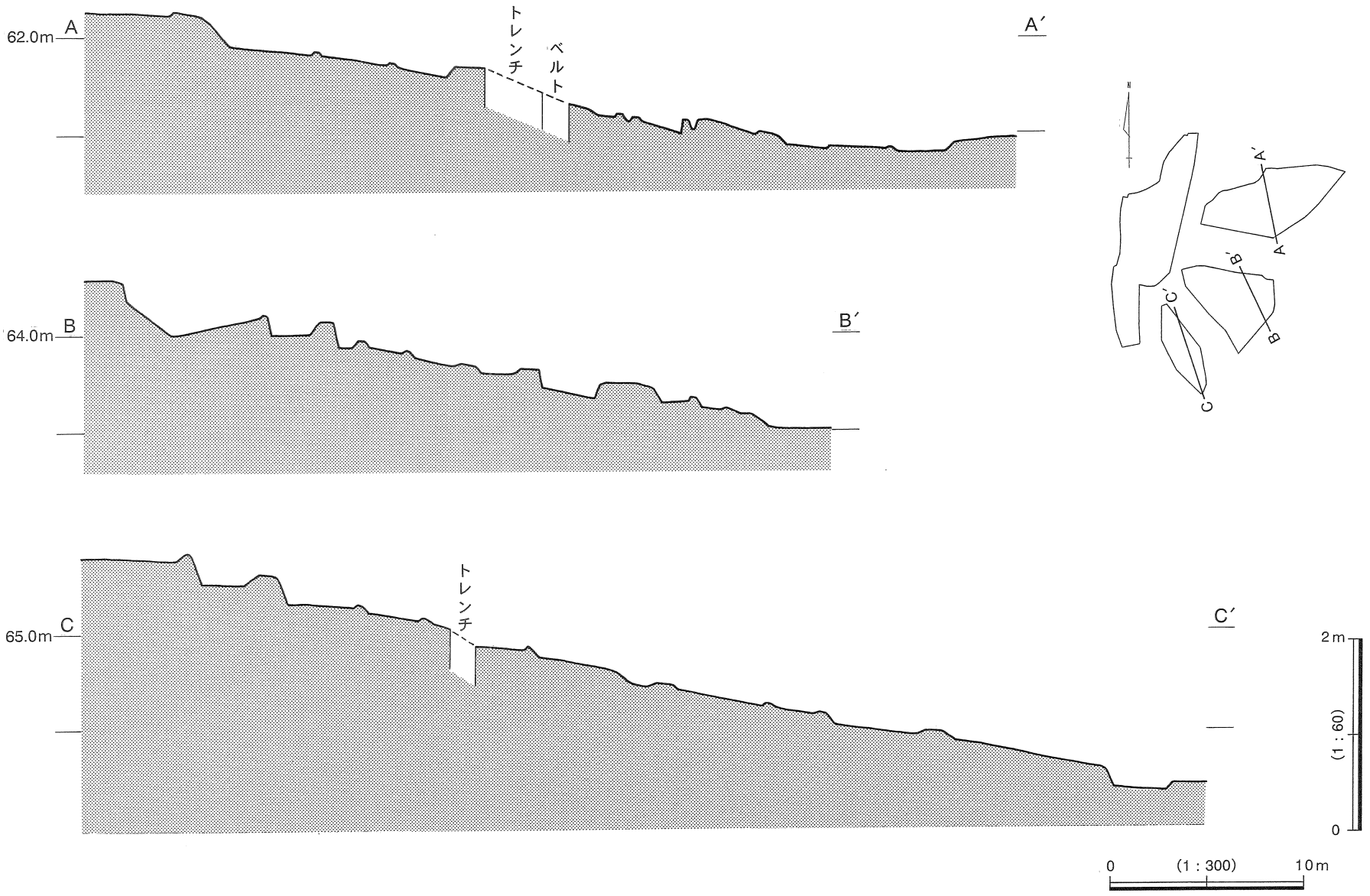
側へさげて補修していったことを示しているのだろう。

SK９　Ｆ６グリッドで検出された東西方向の畦畔である。東端で北東方向に折れていることは、山裾に平行する方向の畦畔に連結していたことを示している。幅は上端で0.4m前後を測り、北側田面との比高差は20cm、南側田面とは２cm程度である。この畦畔に伴う丸材を用いた杭列は、畦畔の幅に散らばって

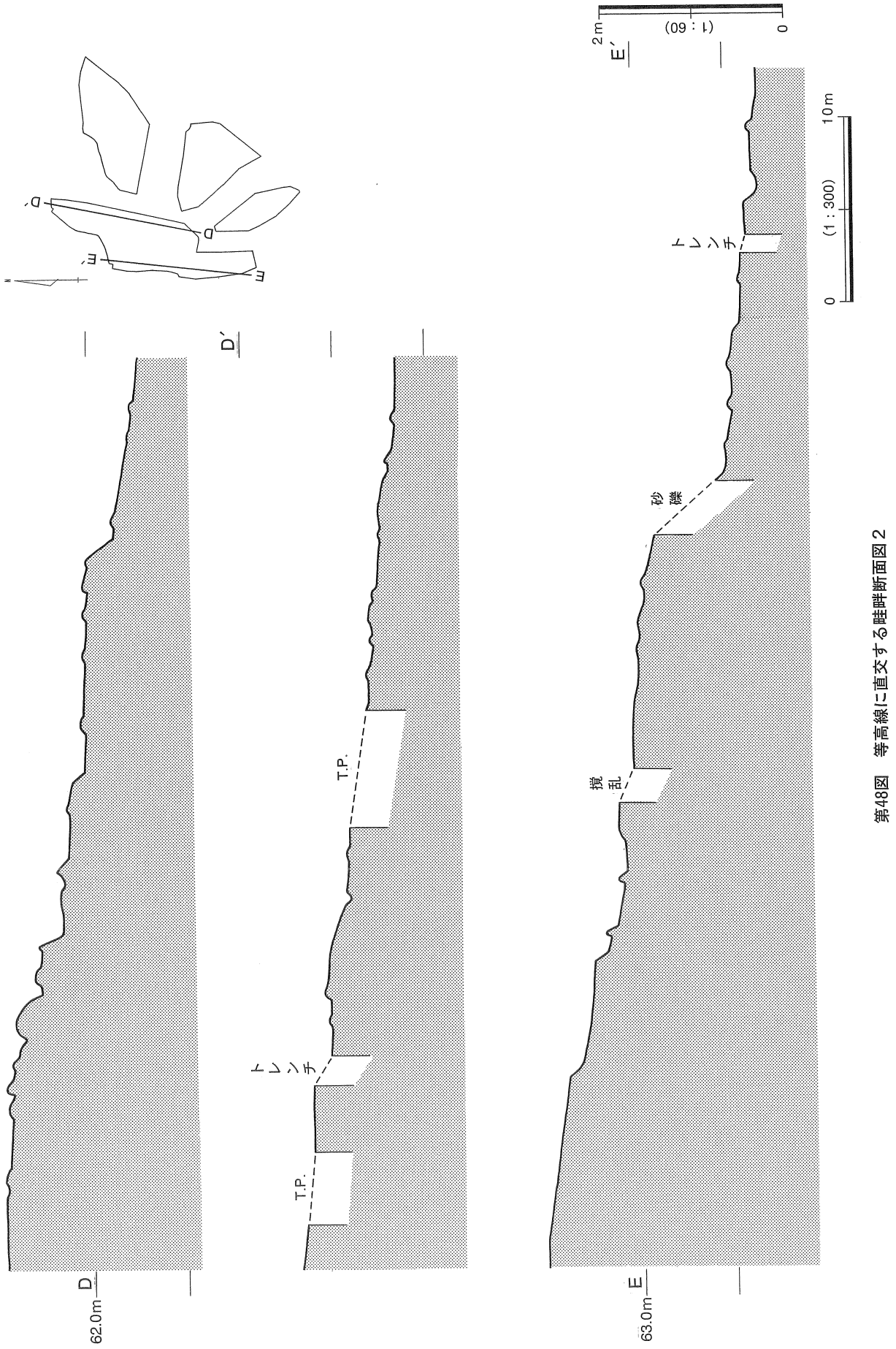


第46図　大畦畔と田面位置図

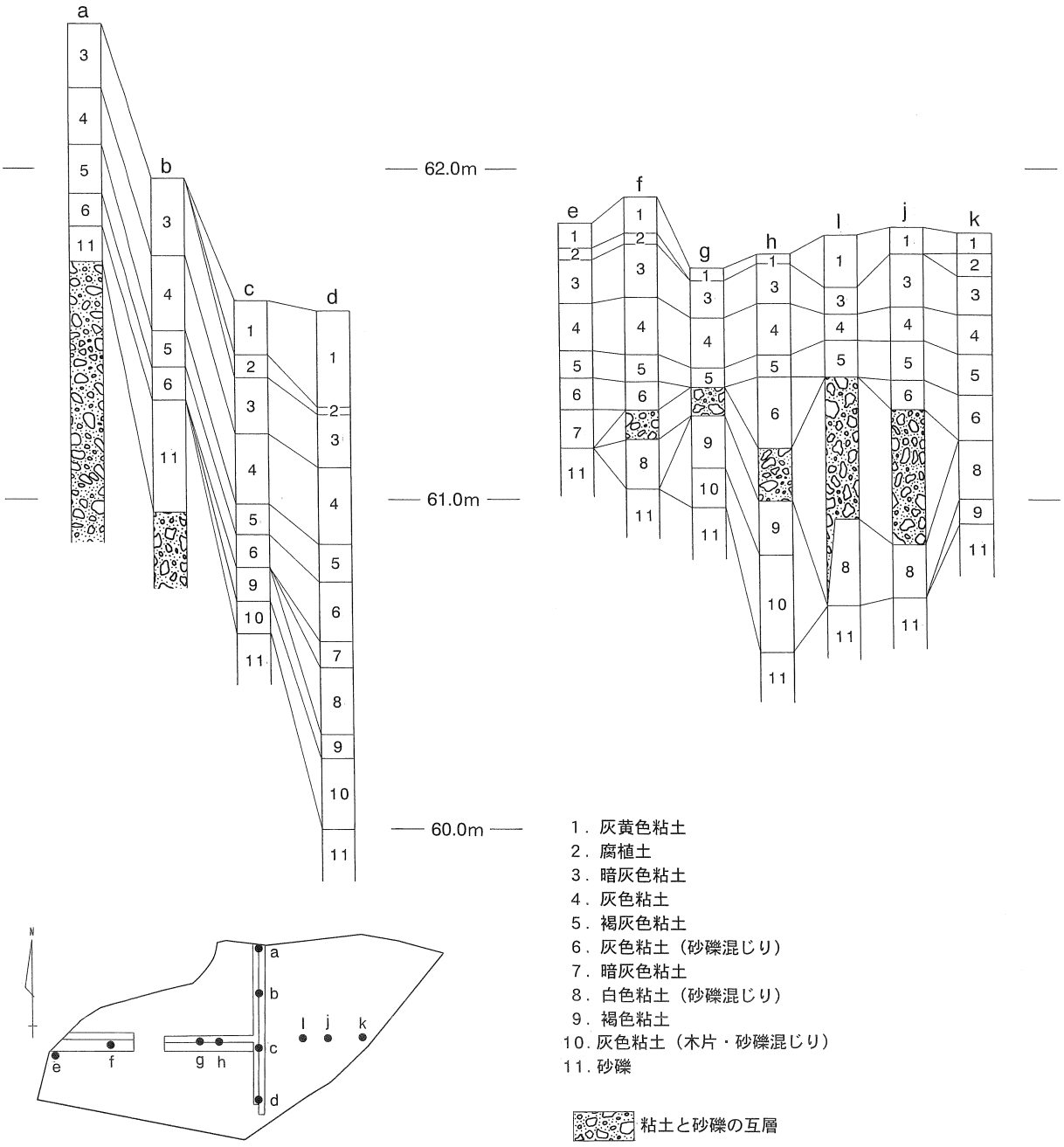
検出されている。この幅の中で幾度となく盛り直されていることを示唆している。また、畦畔が検出されなかった東側にも杭列が検出されていることは、元来まっすぐであったものを、ある時期に北東方向へ曲げたことを示している（第52図）。また、北側から南側の田面へ水を廻すための水口と考えられる施設が付随している。これは、畦畔の一部を切っており、内側に水が渦巻いたことによって削り取られた



第47図　等高線に直交する畦畔断面図１



第48図　等高線に直交する畦畔断面図２



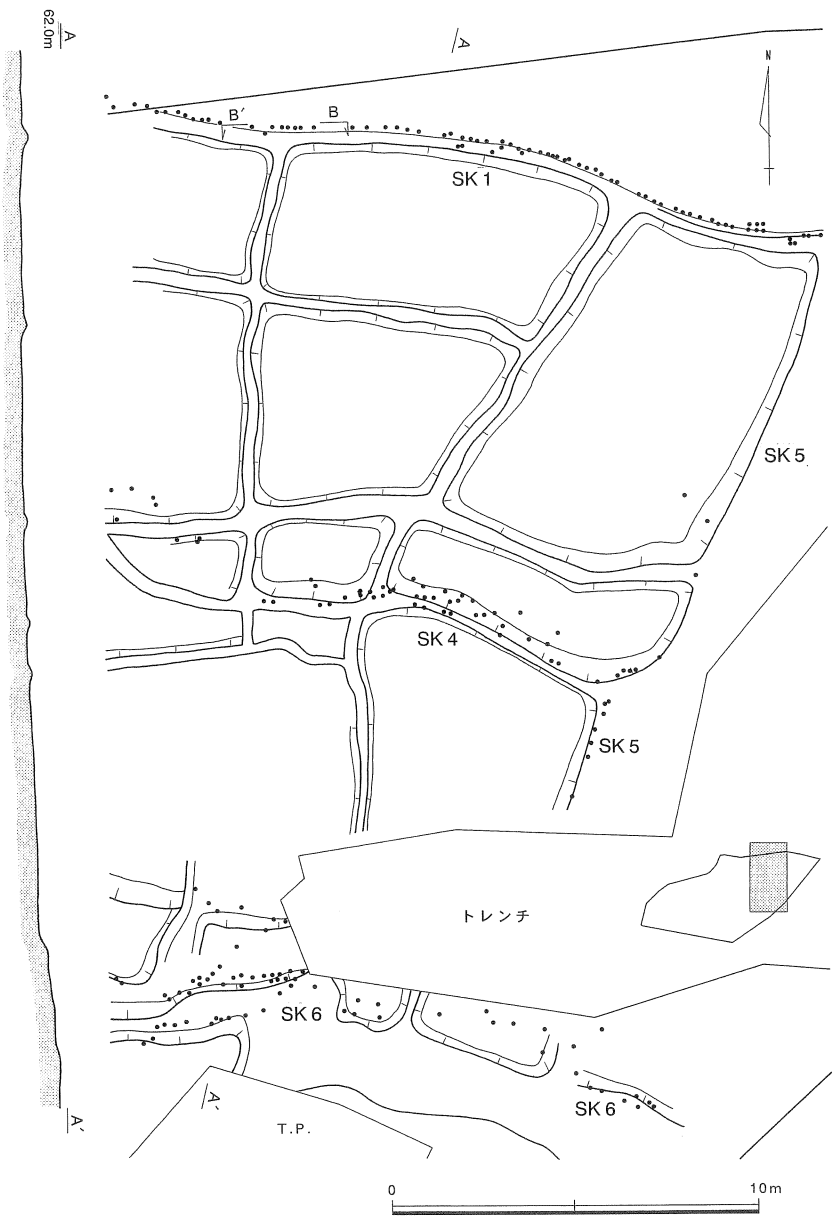
第49図　A区トレンチ土層柱状図

小さな窪みが形成されている。また、畦畔の東側・西側の一部が不明確となっている。特に西側は砂利によって覆われていたことから、洪水によって削り取られていることが窺える。

⑵　小畦畔による小区画（第43・46図）

10～20mおきに現れる大畦畔の内部は、畦畔（小畦畔）によって更に細かく区切られている。これらは、木材を用いて保護されている大畦畔とは異なり、すべて周囲の土を掻き揚げて盛り上げることで造られている。小畦畔による小区画は、北へ下る斜面地へ均等に水を張るための工夫であったり、小さなものについては、苗代を育てるための区画であったりと、いくつかの意図が感じられる。A区においては、大畦畔による区画（田面）13枚に、このような小畦畔が検出されている。

田面１　田面１の内側は、小畦畔によって５ヶ所の小区画に分けられている。SK５に沿う部分が最も大



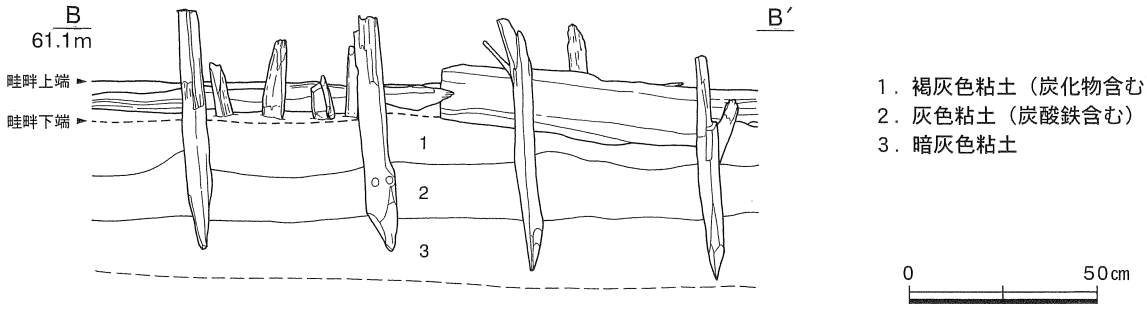
第50図　Ａ区大畦畔に伴う杭列位置図１

きく東西5.4～７m、南北9.2～9.6mの規模を持つ。この西側は、ほぼ中央に東西方向の小畦畔を造って、二つの区画に分けられている。北側がやや広く東西7.8～９m、南北4.4m、南側が東西５～７m、南北５～5.4mの規模がある。一方、これら三つの区画の南側にはSK４に沿う幅の狭い小区画がある。東側が東西８m、南北2.2～３m、西側が東西3.4m、南北2.2mと、特に後者は一坪にも満たない。

田面２　田面２の内側は、隣接する田面１の小畦畔が西に伸びて内部を３ヶ所の小区画に分けている。西側の一部にトレンチが穿たれているため、東西幅は定かでないが、南北幅は田面１とほぼ同様である。最も南側の小区画は、SK４が次第に北側へ曲がってくるため、三角形状を呈する。東西幅は3.4mである。

田面３　田面３の内側は、隣接する田面２の小畦畔が西に伸び、南北方向の小畦畔２条によって少なくとも６ヶ所の小区画に分けられる。南北の大畦畔に沿う二つの小区画は、北側が南北3.4～3.8m、東西3.3～3.9m、南側が南北4.5m、東西４～4.3mで、いずれも南西隅が一部水口状に途切れている。これらの西に接する小区画は、西縁の小畦畔が北東一南西方向に傾くため、変則的な矩形を呈する。北側は東西２～４m、南北８mと長細く北側に水口状の途切れがみられる。南側は東西４m～12m以上、南北３～9.8mと台形状である。さらにこの西側に南北４～６mの小区画が二つ存在する。

田面４　田面４の内側は、７ヶ所の小区画に分けられる。南北方向のトレンチ以西に東西方向の小畦畔が複数みられる。これらはトレンチ以東につながらないので、トレンチ部分に南北方向の小畦畔が存在した可能性が高い。最も大きな区画は東側にあり、南側の一部をSK６に接している。東西13～14m以上、南北12～16mの規模があるが、中央部に南北方向の小畦畔の残欠がみられるため、本来は東西に二分されていたものと思われる。この南側にはSK６に沿って、用水をもたらすと想定される小さな溝が取りつ



第51図　A区杭列断面図

いている。

田面５　田面５の内側は、10ヶ所の小区画に分けられる。大畦畔SK２に沿う部分に比較的大きな区画がみられる。SK２と３のコーナー部分にある小区画は東西方向が5.7mと長く、南北方向は2.6～3.4mとなる。西側の小畦畔の中程は水口が造られているため途切れている。ここから幅40cm、深さ６～10cmの溝が、南側の小畦畔に沿うようにL字形に掘られている。この溝は、南北方向のほぼ同一規模の溝に繋がることから、南側からもたらされた水を等しく田面に供給する用を成すものと考えられる。最も大きな小区画は田面５の中央北側にあり、北側を大畦畔SK２に接する。南北方向6.6m、東西方向5.9mの規模がある。この南側や南西側の小区画は、東西方向の小畦畔によって区切られて、このほぼ半分の広さとなる。

田面６　田面６の内側は、３ヶ所の小区画に分けられるが、北側が調査区外となるため、本来はこの倍程度と見込まれる。南側の撹乱沿いにある小区画は東西方向に７mと長い。この北側の小区画は、この幅を南北方向の小畦畔によって区切った南北に長い区画となる。

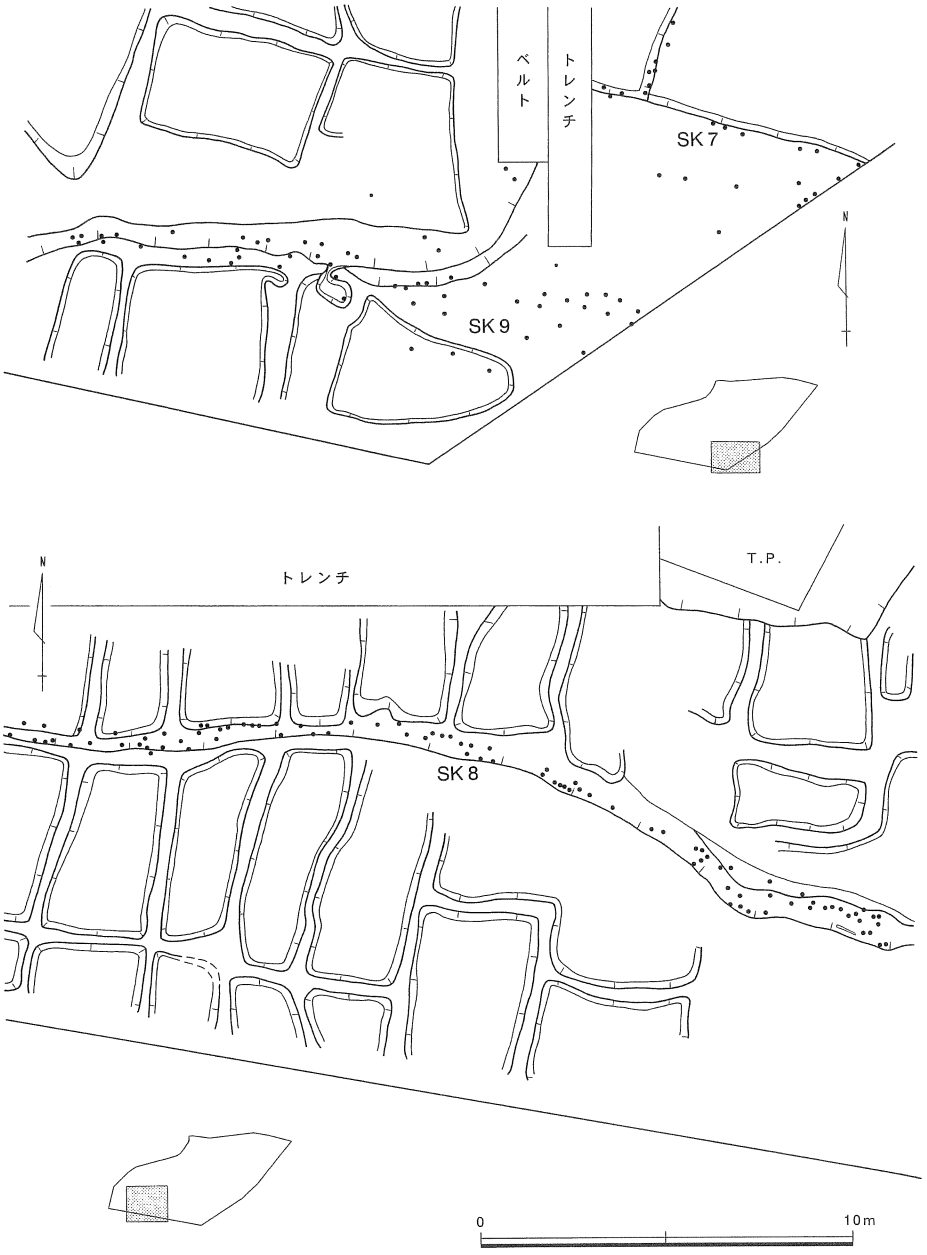
田面７　田面７の内側は、南北方向トレンチの西側で６ヶ所の小区画に分けられる。いずれも正方形に近く、碁盤の目状に並ぶ。最も小さな区画は北東側にあり、南北方向に4.3m、東西方向に2.1～2.9mとなる。最も大きな区画は南西側にあり、南北方向に2.9m、東西方向に4.5mである。また、南隣の田面北縁には、田面７へ水を廻すための水口が開いている。底が窪む部分は、落ちてゆく水が渦巻いた跡であろう。

田面８　田面８の内側は、４ヶ所の小区画に分けられる。大畦畔SK３に沿う位置には、田面５から伸びるほぼ南北方向の小畦畔に規制される最大幅2.8m、奥行きおよそ７mの三角形状の小区画がある。この西側には東西方向に5.5mの小区画があるが、やや南に偏った位置に、小畦畔に平行する幅10cm、深さ７cm程度の小さな溝が掘られている。最も西側の大畦畔沿いには、幅3.9mの小区画がある。この、後二者を区切る小畦畔は上端幅が30cm程度のもので、北側の田面５にも延びている。

田面９　田面９の内側は、５ヶ所程度の小区画に分けられるが、北側はテストピット等によって抜かれているために判然としない。南側の三つの小区画は、大畦畔の幅のほぼ中央を南北の小畦畔で区切り、さらに東側を田面８から延びる東西方向の小畦畔で二分している。この東西方向の小畦畔は、さらに西に延びる様子が伺えるので、西側の小区画も東側と同様に二分されていた可能性がある。東側の小区画は、東西３m前後で南北は1.5～3.2mの規模がある。

田面10　田面10の内側は、南北方向の小畦畔によって５ヶ所の小区画に分けられている。北側をトレンチによって抜かれているため、南北方向の側は判然としないが、東西幅1.2～2.4m程度で短冊状になるものと思われる。

田面11　田面11の内側は、３ヶ所の小区画に分けられる。大畦畔SK８に沿う北側の小区画は東西方向に7.2m、南北方向に5.4mの規模がある。南を区切る小畦畔がクランク状に曲がるため、本来はこの位置



第52図　Ａ区大畦畔に伴う杭列位置図２

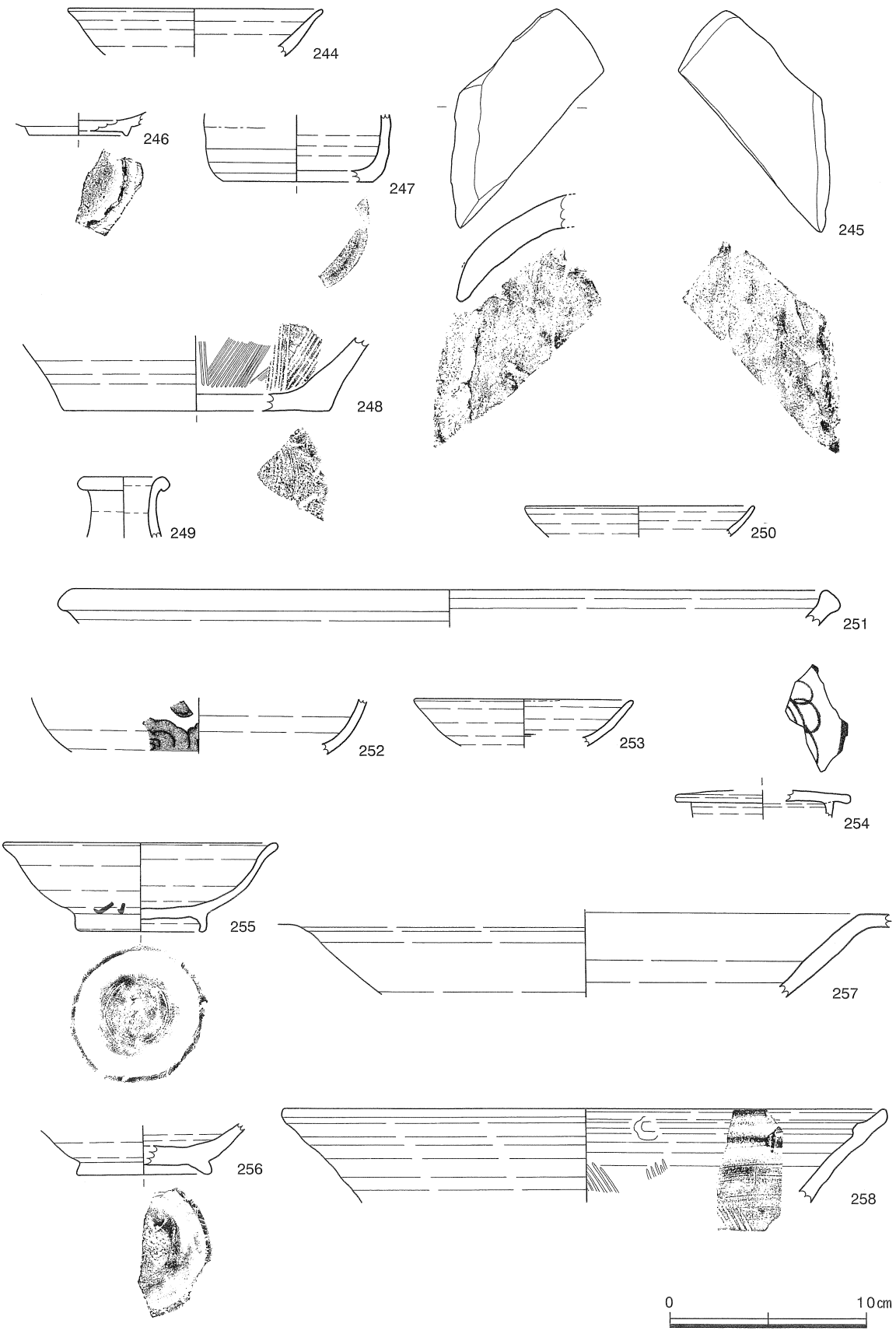
で東西に二分されていた可能性がある。南側の二つの区画は、東側が幅4.1m、西側が３ｍ前後の規模がある。南北方向の規模は、調査区境にかかり判然としない。

田面12　田面12の内側は、８ヶ所程度の小区画に分かれるものと思われる。北側の小区画はいずれも短冊状で、幅1.7～2.5、長さ4.7～6.5mの規模がある。南側は調査区境にかかり判然としない。

田面13　田面13の内側は２ヶ所以上の小区画に分かれている。いずれも調査区境にかかり、規模は判然としない。東西方向の小畦畔が田面12のものと同一位置にあるため、田面12に類した短冊状の小区画である可能性がある。

２　Ａ区水田面出土の遺物

Ａ区水田面出土の土器・陶磁器（第53図・図版24）　（244）は土師器の坏で10世紀から11世紀の製品である。（245）は東遠系の鎌倉時代の丸瓦で表面の凸面が無文になり、凹面に指頭痕が付く。一枚作り（型作り）と思われ表面と内面に細砂を多く含んでいる。（246）は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の小皿で17世紀前半の製品である。（247）は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉小壺で17世紀前半の製品である。（248）は三ツ沢窯生産の志戸呂焼の錆釉擂鉢で15世紀後半の製品である。（249）は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の徳利で17世紀前半の製品である。（250）は肥前焼の青緑釉の皿で17世紀前半の製品である。（251）は瀬戸焼の錆釉擂鉢で19世紀前半の製品である。（252）は伊万里焼の染付の碗で19世紀前半の製品である。（253）は伊万里焼の染付の皿で19世紀前半の製品である。（254）は産地不明の鉄絵の土瓶蓋で19世紀前



第53図　出土遺物実測図10(土器10)

半の製品である。

３　Ｂ区水田

Ｂ区水田は、標高65～62.5m付近に営まれる（第44図）。等高線は南東から北西方向に擂鉢状に下るが、調査区北東側は東側の丘陵裾部の影響を受けて標高64～63.5m付近でやや平坦な面をつくる。

⑴　畦畔（第45図）

水田の畦畔は基本的には等高線にほぼ平行・直交する方向に造られるが、調査区の東側や北西側に行くにしたがって崩れてゆく傾向がある。これはそれぞれの位置にある貯水池状の窪みや自然流路などの影響によるものであろう。基幹となる大畦畔はSK10～13である。板材と丸材の杭を用いた施設はSK10と11・12の一部にみられるだけで、他はいずれも耕作土を盛り上げたのみである。SK10の施設は、流路SR４によって田面が侵食されないように計らっているものと思われる

SK10　Ｇ・Ｈ６グリッドで検出された南北方向の畦畔である。水田面上に、田面の粘土を掻き揚げて形作る。幅は上端で0.7～1.0ｍを測り、東側田面との比高差は９㎝前後である。西側の縁辺には板材を横に渡し、太さ15～45㎝の丸材の杭を打ちこんで押さえとしている。これらは最大で幅2.5ｍにわたり、複数列に及ぶ（第55・56図）。西から東側へ次第に田面を拡張していったものと思われる。なお、この杭列はSK10の南端で西に90度折れて、SK11上におよそ３ｍ続いている。

SK11　Ｈ４～６グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.5～1.2ｍを測り、北側田面との比高差は11～17㎝、南側田面とは３～７㎝である。杭による補強がみられるのはSK10とつながる部分、南北ベルトと交差する付近の２ヶ所である。前者は丸材の杭を用いて幅およそ１ｍにわたって施されている。３～４列に及ぶものと思われるが、杭が混在するために分離は難しい。後者は畔の内側と外側に集まる傾向がある。集中しているのはこの部分だけなので、水口などによる侵食から畦畔を保護する目的であった可能性もある。なお、杭列はSK11の西側延長上からも検出されている。この部分は貯水池状施設の内側にあたる。畦畔と田面が整えられていた部分を、ある時期に改変しているのであろう。

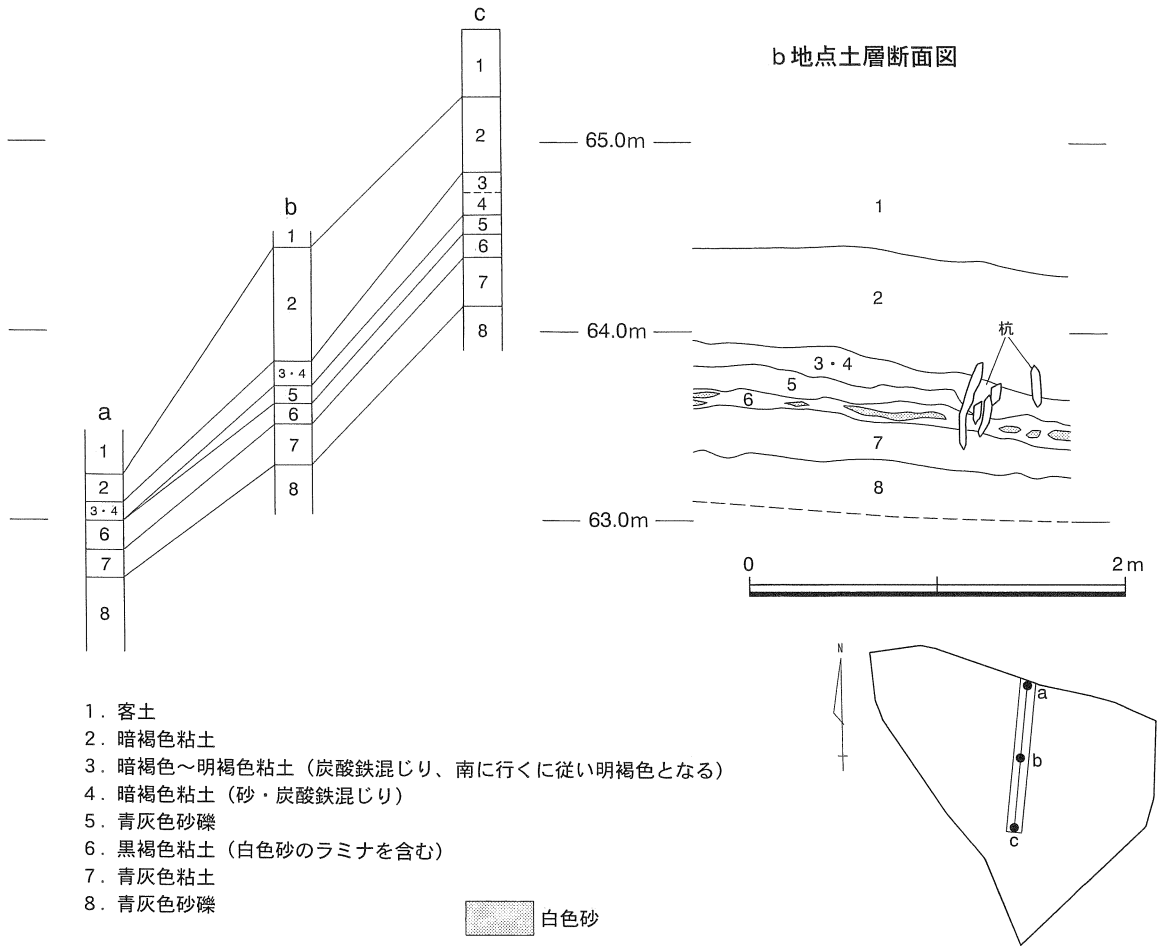
SK12　Ｈ・Ｉ５グリッドで検出された南北方向の畦畔である。北端でSK11と連結している。幅は上端で0.2～0.7ｍを測り、東側水田との比高差は３～９㎝、西側田面とは３～７㎝である。杭による補強がみられるのはSK11との連結部と南端付近である。前者は４～５本程度によるもので、脆弱な連結部を補っているものと思われる。後者は10本弱が打ちこまれる。SK12が南東よりに屈曲する付近を保護するものと思われる。

SK13　Ｉ・Ｊ５グリッドで検出された北西―南東方向の畦畔である。半ばほどで南向きにおよそ60度折れる。幅は上端で50㎝前後である。この周囲に田面は検出されておらず北側・南側ともに畦畔上面から最大で30㎝ほどの窪みとなる。杭による補強は比較的南面に手厚く施される。

⑵　小畦畔による小区画（第46図）

大畦畔の内部はＡ区と同様に、畦畔（小畦畔）によって更に細かく区切られている。これらは、木材を用いて保護されている大畦畔とは異なり、すべて周囲の土を掻き揚げて盛り上げることで造られている。Ｂ区においては、大畦畔による区画（田面）11枚に、このような小畦畔が検出されている。大畦畔自体が地形の制約によって蛇行しているせいか、Ａ区でみられるように同一延長上に小畦畔が造られる傾向はここでは乏しい。

田面14　大畦畔SK11が北側へ曲がってくる部分にあたるため、田面は台形様の矩形を呈し、内側は小畦畔によって13ヶ所の小区画に分けられている。東西方向に３列、南北方向に３～５列あり、中央列の北側と２番目が東西方向に長く、西列の北よりと東列の南よりに南北方向に長い区画が造られる。このう



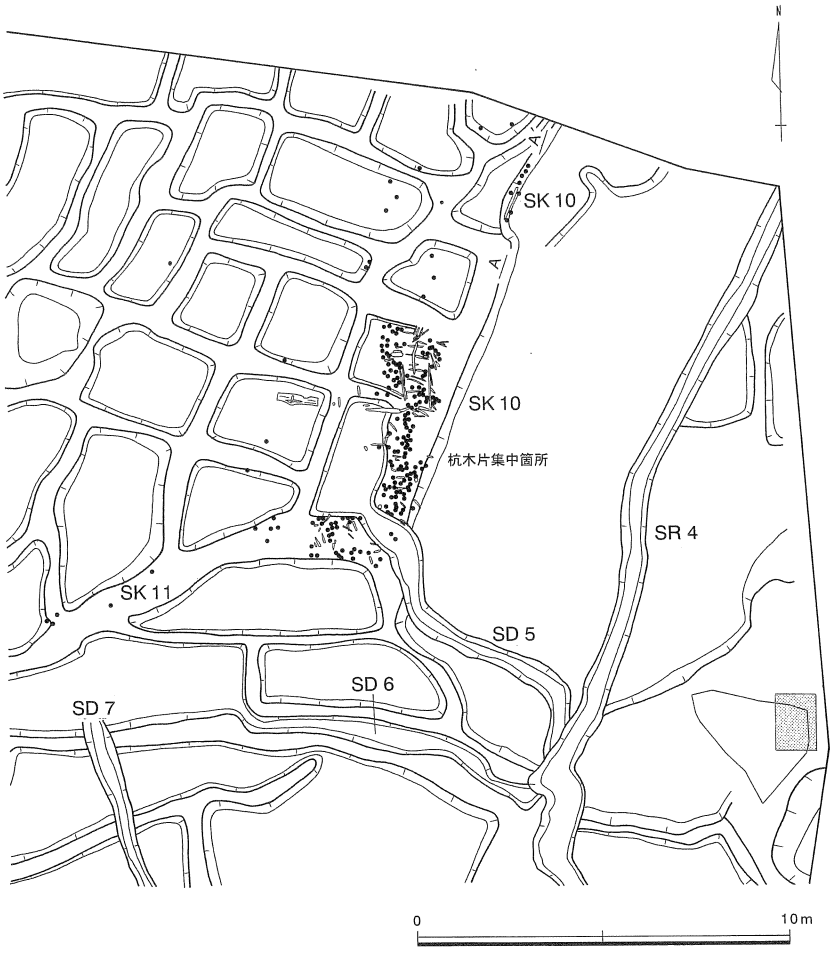
第54図　B区トレンチ土層柱状図・断面図

ち最も小さな区画は西列の北よりにあり、東西幅1.3m、南北幅2.7mを測る。最も大きな区画は西列の南側で東西幅３m、南北幅５mである。また、流路SR４から分岐した溝が南東隅に取りついている。流路から直接水を引き入れる施設であろうか。

田面15　大畦畔SK11の影響による南北に長い矩形を呈し、内部は12程度の小区画に分けられている。北側には南北に長く、幅1.2～２m、長さ4.2～4.8mの短冊状の小区画が並ぶ。南側は東西に長い幅1.1～2.8m、長さ３m以上の区画がならんで造られる。

田面16　貯水池状施設の北東のほとりにあり、内部を５ヶ所の小区画に分ける。最も北側を大畦畔との都合で底辺4.5m、高さ4.4mほどの三角形状に造る。この南側の区画は長方形であり、南北幅３～４m、東西幅4.5～6.3mを測る。中程の区画は南北の小畦畔で更に二分され、南北２～2.6m、東西1.9m以上の小区画をあえて造り出している。

田面17　貯水池状施設の北側のほとりにあり、内部を７ヶ所程度の小区画に分ける。東よりの一部に掘られたテストピットによって、ほぼ半数の規模が不確かとなっている。最も大きな小区画はテストピット北側にあり、東西幅９m、南北幅６m程度となる。最も小さな小区画は２m四方ほどである。このように、この田面の小区画は大小の差が極めて大きい。なお、田面南東側に小畦畔の一部が幅30cm程切れている部分がある。ここは、流路SR２・３の延長上にあたる。流路から供給された水を取りこむ水口と思われる。



第55図　Ｂ区大畦畔に伴う杭列位置図

田面18　貯水池状施設の北西のほとりにあり、南側から東側にかけては水回しに供されたと思われる溝によって区切られる。この溝に沿う部分は不整形な小区画となるが、内側は南北幅2.3～3.1m、東西幅0.9～1.5mの短冊状や台形状となる。これら小区画を縫うように幅0.5～１m、深さ２～４cmのＬ字型の溝が掘られている。貯水池状施設から水を引き入れるための施設であろうか。

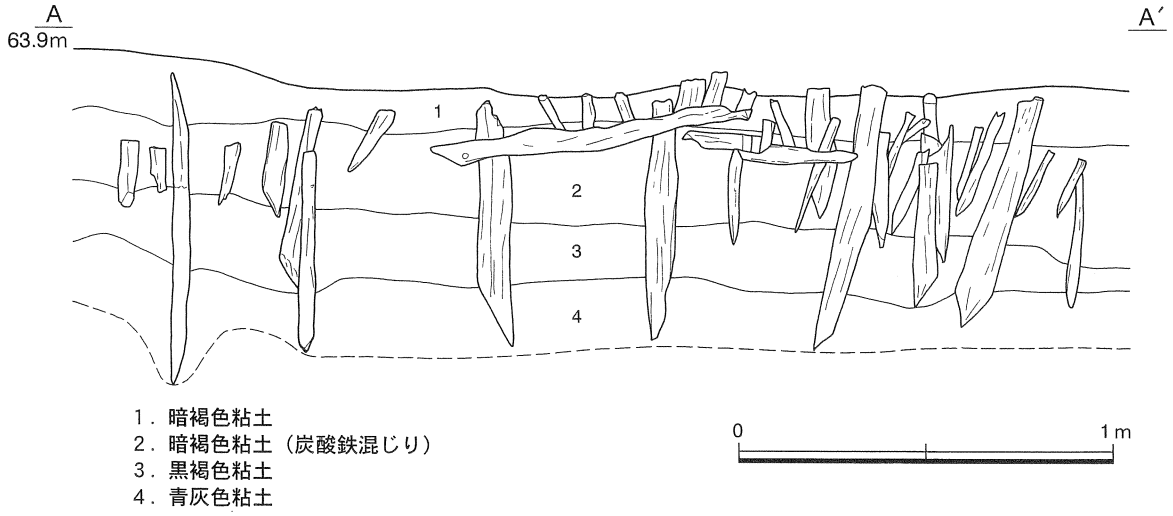
田面19　田面14の南側にある矩形の田面で、内部は６ヶ所の小区画に分けられる。最も大きな区画は南東隅にあり東西幅7.2m、南北幅3.2～5.4mを測る。この西側にある三角形状の小区画を境する小畦畔は、水回しを配慮したように北側で一部が途切れている。この北側には南北幅1.5～2.2m、東西幅4.9～6.9mの台形状の小区画が３つある。このうち南西側の一つには、小畦畔間に造られた幅50cm・深さ５cm前後の小さな溝が流路SR ４から接続している。流路から直接水を引き入れる施設であろうか。

田面20　南側に張り出す矩形の田面であり、大畦畔SK12沿いに５ヶ所程度の小区画が観察される。南北トレンチによって判然としない状況であるが、南北幅1.5～2.6m、東西幅2.7m以上の短冊状の区画が連続していたものと思われる。

田面21　貯水池状施設に注ぐ流路SR ２・３に接する位置にある正方形状の田面である。内部は６ヶ所の小区画に分けられている。東列は田面20の小区画に類似した短冊状であるが、西列の３つは南北幅1.8～3.1m、東西幅1.6～2.1mで正方形の近いものが含まれる。西列北端の小区画は、北西隅が水口状に幅50cm程度空いている。SR ３を介して貯水池状施設へ水を抜くための配慮であろう。

田面22　調査区南東壁際にある正方形状になると思われる田面である。内部は６ヶ所程度の小区画に分けられる。いずれも正方形状であり、南北幅1.5～3.1、東西幅2.2～３mの規模がある。東側の列は調査区境にかかり、規模は明らかでない。

田面23　田面22の西側にある平行四辺形状の田面である。内部は12ヶ所の小区画に分けられる。中央やや北側を東西に分ける小畦畔によって大きく二分され、北側には不整形な小区画が。南側には長方形状の小区画が配置される。北側の中央には東西幅5.6m、南北幅2.4mの長方形状の小区画がある。この西～東は北側の大畦畔に規制される形でＳ字状やＬ字状の小区画となる。南側の小区画は主に長方形状で、



第56図　B区杭列断面図

相互が縦横にモザイク状に配置される。これらは幅1.2～2.7m、長さ２～3.5mと大小がある。

田面24　調査区の最も南側で検出された矩形の田面である。内部は５ヶ所程度の小区画に分けられる。北側は南北幅２m前後の小区画が東西に並ぶ。最も西側の小区画はほぼ中央を東西方向の小畦畔で二分する。これらの南側は最大で10cmほどの窪みとなるが、その落ち際に杭が十数本打設される。この窪みの南端には大畦畔SK13があり、やはり杭による補強がみられる。この窪み自体が、貯水池状施設のような役割を持っていたことも考慮される。

⑶　流路・溝（第43図）

B区で検出された流路はSR１～４である。このうちSR１～３は調査区の西よりにある。その末端は貯水池状施設に至っているため、水田の運営に供するように人為的に引きこまれていると理解される。SR４は調査区の東側にある。更に東側の山裾に平行する位置にあることから、山際を流れる小河川のひとつであったと考えられる。溝SD５・６は流路SR４に絡む位置にあり、いずれも東から西へ掘られている。水田に水を供給するためのものと考えられるが、SD7については畦畔を切っているため、SR４の氾濫に伴ってできた水道である可能性が高い。

SR１　G・H４グリッドで検出された貯水池状施設の西端にある南西一北東方向の流路である。幅は最大で３m、およそ６mの長さが検出されている。北側にある田面18とは13cm程の比高差がある。SR１の先端部近くからは、北側の水田に水を廻すための幅0.8～１m、深さ10cm前後の溝が北東に掘られている。

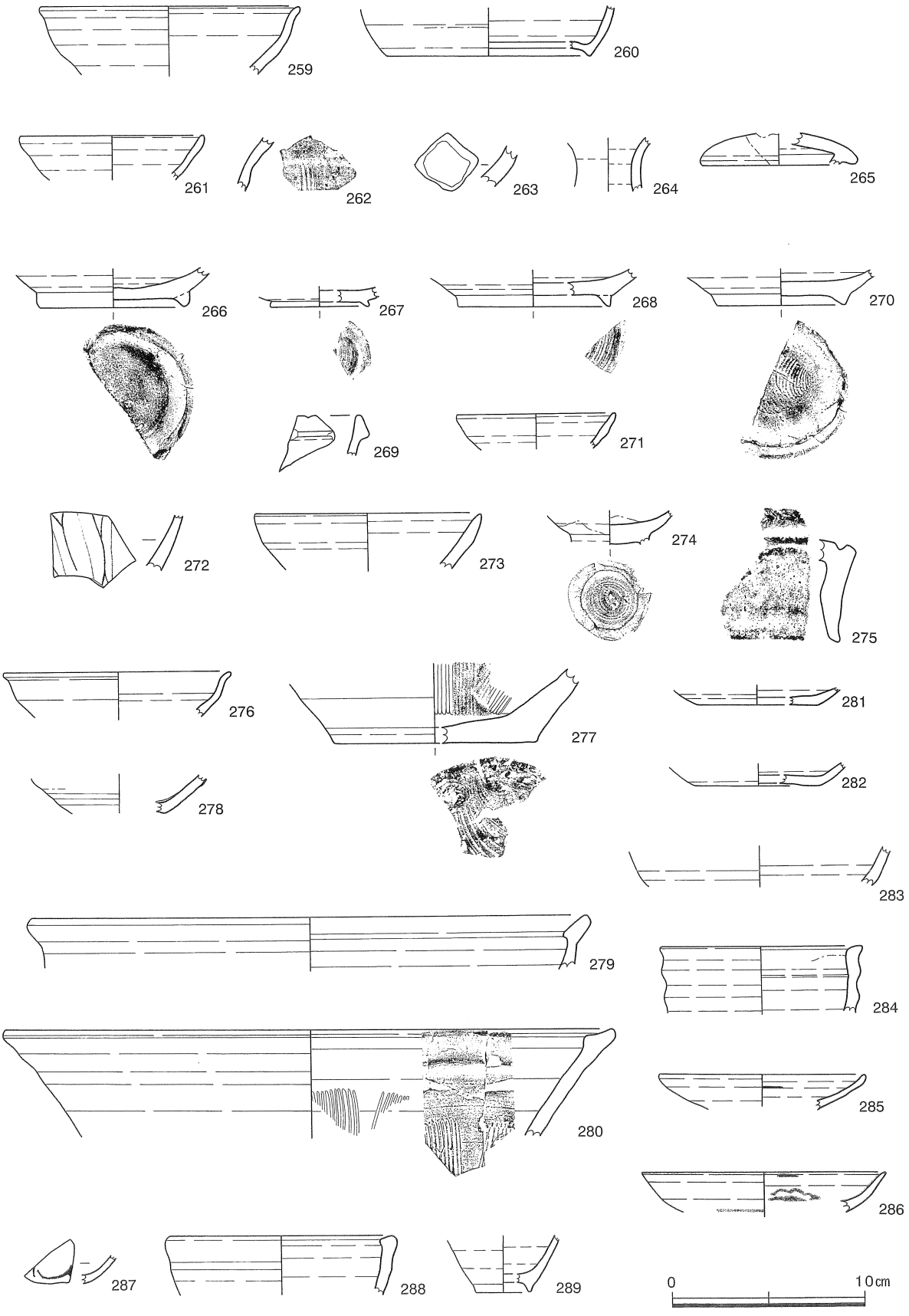
SR２　H４グリッドで検出された貯水池状施設へ南から至る南北方向の流路である。幅は70cm前後、深さは16～43cmで北へゆくにしたがって徐々に深くなる。

SR３　H４・５、I４グリッドで検出された貯水池状施設へ南から至る南北方向の流路であり、SR2の東側に平行する。幅は40～70cm、深さは８～15cmで北へゆくにしたがってやや深くなる。

SR４　G～I６グリッドで検出された南北方向の流路である。幅は0.6～1.1cm、深さは18～40cmを測り、南半で幅が広く比較的深い。全体的には３％程度の勾配で緩やかに北へ流下する。

SD５　H６グリッドで検出された南東一北西の溝である。幅は60cm前後、深さは７～23cmで北西側に下る。田面14の南東隅に取り付いていることから、流路から田面に水を引くための溝と考えられる。

SD６　H６グリッドで検出された東西方向の溝である。幅は0.6～１m、深さは７cm前後で西側に下る。田面19の内側に引き込まれていることから、SD５と同様、流路から田面に水を引くための溝と考えられる。



第57図　出土遺物実測図11（土器11）

SD 7　Ｉ６～Ｈ５グリッドで検出された南東―北西の溝である。幅は0.5～1.1m、深さは７～29㎝で北西側に下る。北西側にいくにしたがって細く、浅くなる傾向がある。田面19の畦畔を切る位置にあり、流路と連結していない。SR ４の氾濫に伴ってできた水道である可能性が高い。

⑷　貯水池状施設（第43図）

Ｇ～Ｉ４グリッドで検出された、流路の末端が取りつく空閑地である。東西におよそ20m、南北に15mの不定形を呈する。東側のSR ２・３が取り付く部分は、西側に南北から幅0.5～１mの土手が張り出すことにより楕円形に仕切られている。この部分にはSR ２・３からもたらされた水が優先的に溜り、北側に開いた水口から田面17に供給されていたものと考えられる。一方西端にはSR １が取りついているが、この先端近くにはSR ２・３とは異なって北東向きの溝が連結していることからも、SR １によってもたらされた水は優先的に溝を介して北側の田面に流されていたものと思われる。また、この施設の底面は特に掘り込まれておらず比較的平らであるうえ、北側の田面との比高差も最大で５㎝程度である。したがって、この施設は流路から溢れ出た水が薄く溜まる程度の容量しかなく、積極的に水を溜め置くことはできない。田面に落とす水を滞水させることによって温め、更により下位の田面へ効率よく水を再分配するための調整機能を有していたものと考えられる。

4　Ｂ区水田面出土の遺物

Ｂ区水田面出土の土器・陶磁器（第53・57図・図版18・24・25）　（255）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＯ―53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品で墨書陶器であるが、書かれた文字は不明である。（256）は渥美窯生産の山茶碗で12世紀前半の製品である。（257）は瀬戸焼の折縁深皿で14世紀後半の製品である。（258）は三ツ沢窯生産の志戸呂焼の錆釉擂鉢で15世紀後半の製品である。（259）は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で大窯４前にあたる16世紀末の製品である。（260）は産地不明の灰釉を施した急須で19世紀前半の製品である。

5　Ｃ区水田

Ｃ区水田は、標高65.8～63.1m付近に営まれる。等高線は南南東から北北西方向に下るが、調査区北端の貯水池状施設付近は標高63.2mあたりでやや平坦な面をつくる。

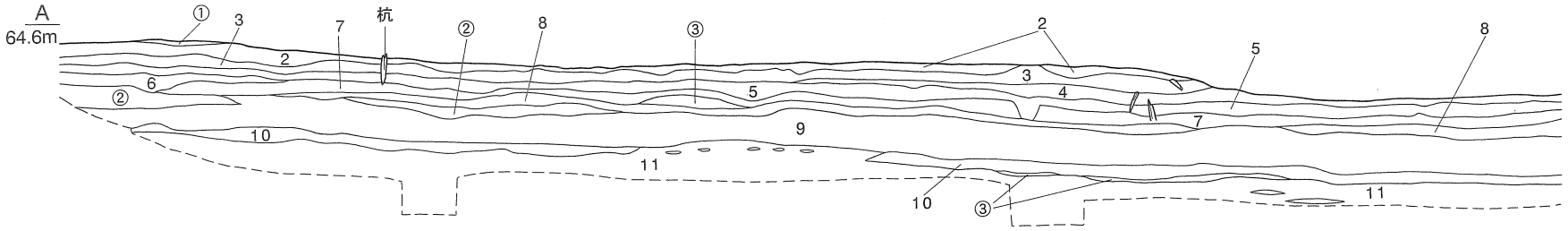
⑴　畦畔（第45図）

水田の畦畔は基本的には等高線にほぼ平行・直交する方向に造られるが、調査区の南側に行くにしたがって崩れてゆく傾向がある。これは調査区の南に位置する山裾の形状が影響しているのであろう。基幹となる大畦畔はSK14～16である。主に丸材の杭を用いた施設はそれぞれに施されるが、特にSK16に著しく、部分的に石積みを伴っている。流路SR ５を安定させるための計らいであろう。

SK14　Ｉ３～４グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.25～0.9mを測り、南側田面との比高差は10～12㎝、北側は１～４㎝である。畦畔を安定させるために打ちこまれた杭は比較的まばらで、１m前後の間隔をもつ。検出されていないが、これらの間に横木を渡していたことも想定される。

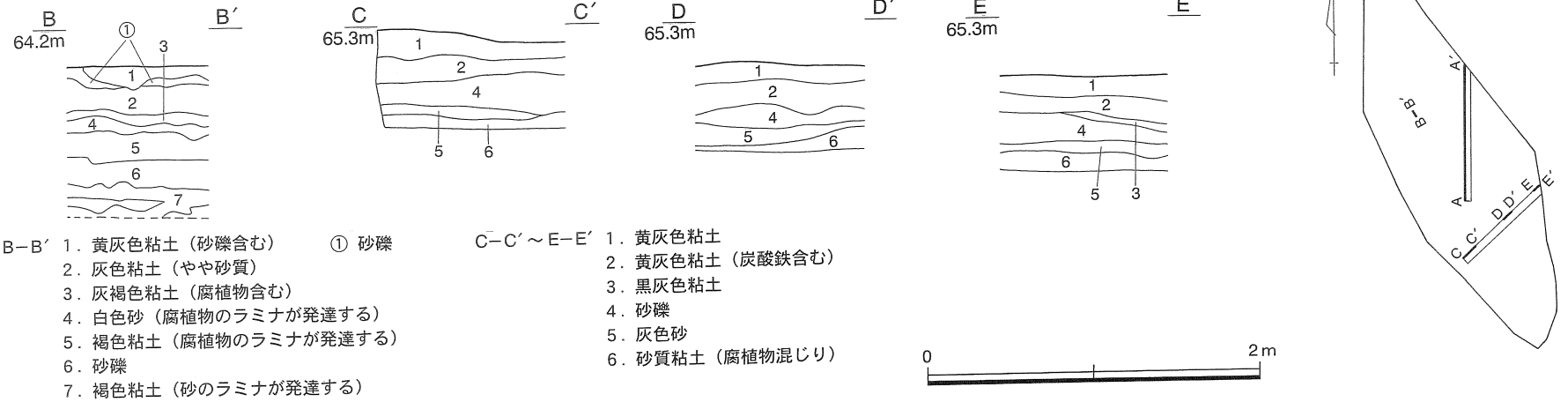
SK15　Ｊ４～Ｋ３・４グリッドで検出された東西方向の畦畔である。東にいくにしたがってやや北側に曲がる。幅は上端で0.2～0.5mを測り、南側田面との比高差は４～12㎝、北側は１～６㎝である。打ちこまれた杭は西端部に集中している。10～70㎝間隔で打ち込まれるもので、横木はみられない。水口などの施設を補強しているものと思われるが、調査区境にかかり判然としない。

SK16　Ｉ３グリッドで検出された東西方向の畦畔である。南側田面と北側の貯水池状施設の間に段状に



1．灰色シルト
2．灰色シルト（白色の斑点混じり）
3．黄灰色粘土
4．黄灰色シルト（白色の斑点混じり）
5．黄灰色粘土（炭酸鉄混じり）
6．灰色粘土（白色の斑点混じり）
7．灰色粘土（白色砂質粘土・礫混じり、北に行くに従い炭酸鉄混じる）
8．暗灰色粘土（北側は炭酸鉄混じり）
9．砂礫
10．灰褐色粘土（腐植物のラミナが入る）
11．灰色粘土（粘性強く、腐植物・白色粘土のラミナが発達する）
12．砂礫

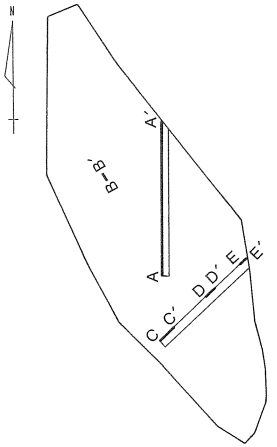
① 灰色シルト
② 灰色粘土
③ 砂礫
④ 暗黄灰色粘土（炭酸鉄・腐植物混じり）
⑤ 砂（腐植物のラミナが発達する）



B−B′ 1．黄灰色粘土（砂礫含む）
2．灰色粘土（やや砂質）
3．灰褐色粘土（腐植物含む）
4．白色砂（腐植物のラミナが発達する）
5．褐色粘土（腐植物のラミナが発達する）
6．砂礫
7．褐色粘土（砂のラミナが発達する）

① 砂礫

C−C′～E−E′ 1．黄灰色粘土
2．黄灰色粘土（炭酸鉄含む）
3．黒灰色粘土
4．砂礫
5．灰色砂
6．砂質粘土（腐植物混じり）



第58図　C区トレンチ土層断面図

造られており、幅は平坦面で30～60cmを測る。杭は段の上端、すなわち田面25・26の北端部分と段の北縁に打ちこまれる。東半分は畦畔自体の平坦面が失われ判然としないが、杭列が継続するため、やや南向きに角度を変えながら延びていたことが窺える。これら杭列には、部分的に人頭大の礫を用いた石積みが伴っている（図版13）。このSK16に直交し北へ伸びる上端幅20～50cmを測る土手状の高まりにも、東面を主体に0.3～１m間隔で杭が打ちこまれる。相互の間は80cmほど空いており、ここにも集中して杭が打ちこまれる。貯水池状施設から東側へ水を廻す水口であったと思われる。

⑵　小畦畔による小区画（第46図）

大畦畔の内部はA・B区と同様に、土を掻き揚げて盛り上げることで造られた畦畔（小畦畔）によって更に細かく区切られている。C区においては、大畦畔による区画（田面）９枚に、このような小畦畔が検出されている。B区と同様、大畦畔自体が地形の制約によって蛇行しているせいか、A区でみられるように同一延長上に小畦畔が造られる傾向はここでも乏しい。

田面25　大畦畔SK16の東側で北縁が接する部分にあたり、田面は台形を呈する。内側は小畦畔によって７ヶ所の小区画に分けられている。正方形状の小区画も含まれるが、三角形状が比較的多く、相互がモザイク状に組み合っている。長方形状の区画は田面の中ほどにあり、南北幅2.2～2.4m、東西幅2.5～３mの規模がある。三角形状の区画は田面の南側にあり、底辺８m、高さ5.5mである。

田面26　田面25の西側に接し、北縁を大畦畔SK16とする。内部は小畦畔によって６ヶ所以上の小区画に分けられている。SK16に接する小区画は正方形状を呈する。一部の小畦畔が失われているが、2.2m四方程度の規模となる。この南側には南北幅2.1～４m、東西幅1.2～1.6mと南北に長い短冊状の小区画が並ぶ。南端は東西に長い区画がみられるが、調査範囲外となり規模は定かでない。

田面27　調査区のほぼ中央東よりにある正方形状の田面である。内部は４ヶ所以上の小区画に分けられている。大畦畔SK14に接する最も北側の小区画は、南を境する小畦畔が円弧状になるため、南北の最大幅2.4m、東西幅6.7mの唇のような形状をなす。この南側には、南北幅4.4m、東西幅7.6m以上と長方形状の最も大きな区画がある。南端の区画は２つとも不定形であり、東側で南北幅4.4m、東西幅7.2m、西側で南北幅1.6m、東西幅6.3m以上の規模がある。

田面28　田面27の南に接する台形状の田面である。内部は４ヶ所以上の小区画に分けられている。北側東よりの区画は南北幅３m、東西幅4.4mと東西に長く、北側西よりの区画は東西幅が2.6m程度と南北にやや長い。南側西よりの区画は５m四方の正方形状であり、この田面のなかで最も大きい。東側の小畦畔が北よりで不明確となるため、この部分に水口が存在する可能性が感じられる。これらの東側の小区画は調査区境にかかり、規模は判然としない。

田面29　田面28の西に接する。西側は調査範囲外となるため全面の検出はできなかったが、正方形状になるものと思われる。内部は５ヶ所以上の小区画に分けられている。北側の小区画は広く、南北幅3.9m、東西幅７m以上の長方形状になると思われる。この南東側の小区画は台形状で、南北幅5.3m、東西の最大幅3.4mの規模がある。南西側の小区画は、中央に南北幅3.6m、東西幅６m以上の不定形の部分があり、更に南北に小畦畔で区切られたごく小さな部分を伴っている。この部分は幅が１mに満たない。耕作に用いたと考えるにはいささか難がある。

田面30　田面28の南に接する。東側は調査範囲外となるため全面の検出はできなかったが、菱形状になるものと思われる。北西側の小区画は不定形で、南北の最大幅３m、東西の最大幅4.5mを測る。この東に接する小区画は東側が調査区境にかかるため規模は明らかでないが、同様な雰囲気であると考えられる。これらの北を境する上端幅0.2～0.5mの大畦畔は、北面に杭による補強を施している。一方、南側の小畦畔にも北面に杭による補強がみられるが、この範囲は北西側の小区画に面する部分に限られる。南西側の小区画は、南北幅3.8m、東西幅2.4～5.5mを測る台形状を呈する。南縁を大畦畔SK15に接して

いる。

田面31　田面30の西にあり、南縁を大畦畔SK15に接している。内部は２ヶ所以上の小区画に分けられている。東側は南北の最大幅6.5m、東西の最大幅５ｍを測る不定形を呈する。西側の小区画は、調査区境にかかるため規模は明らかでない。南に接するSK15には杭が密集して打ちこまれる部分があるため、より上位の水田からこの位置に水を廻す水口が開いていた可能性を感じさせる。

田面32　調査区の最も南側に位置する。田面の形状は、二方が調査区境にかかるため明らかでない。内部は６ヶ所以上の小区画に分けられる。いずれも不定形を呈する。規模が判る小区画はSK15に接する部分にあり、南北の最大幅５ｍ、東西の最大幅5.2mを測る。耕作土中から有孔板材（50）が出土している。

⑶　流路（第43・45図）

Ｃ区で検出された流路はSR5である。貯水池状施設に接する位置にあるため、田面から集まった水をやや大きな流れとして下位に落とす機能があると考えられる。

SR５　貯水池状施設の東端にある南北方向の流路である。幅は４ｍ以上になると考えられ、貯水池状施設の南東隅にある底面に幅0.7m、深さ２～６㎝の細長い窪みを伴う水口から溢れ出た水は、水口の東に接する浅い窪みに集まった上で、SR５に流れ出ることになる。この流路の延長上にあたるＥ区には同様な流路は検出されていない。西向きに曲がってＢ区SR１に至る可能性が感じられる。

⑷　貯水池状施設（第43図）

調査区の北端にあたるＩ３グリッドで検出された大畦畔SK16と土手状の高まりによって囲まれた長方形状の空閑地である。検出された範囲では南北約16m、東西５ｍの規模がある。底面は平らであるため意図的に掘り窪められたものとは考えられない。底面と大畦畔や土手の高まりの上端との比高差は最大で16㎝であるため、Ｂ区の貯水池状遺構と同様に東側の田面や流路から集まった水を薄く滞水させ、温めて再分配するためのものと考えられる。

６　Ｃ区水田面出土の遺物

Ｃ区水田面出土の土器・陶磁器（第57図・図版19・25）　（261）は東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。（262）は瀬戸焼の錆釉擂鉢で後期Ⅳか大窯１期の15世紀末の製品である。（263）は瀬戸焼灰釉盤で登窯８期から後で18世紀末の製品である。（264）は肥前焼の白磁の花瓶で19世紀前半の製品である。（265）は土瓶の蓋で登窯８期か登窯９期にあたる18世紀後半から19世紀前半の製品である。

７　Ｄ区水田

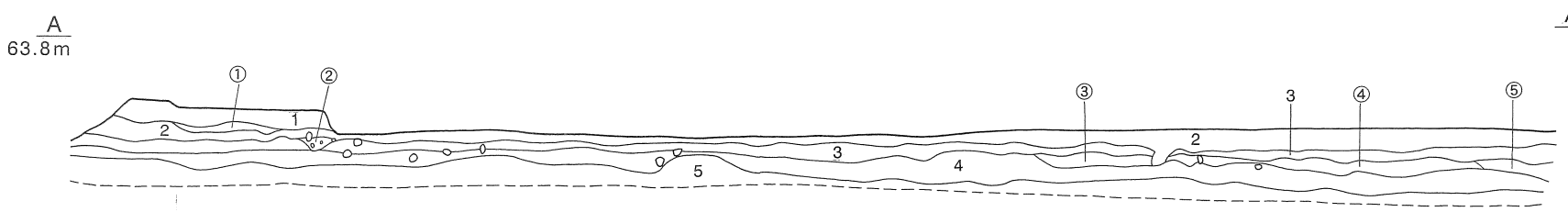
Ｄ区水田は、標高64.3～62.9m付近に営まれる。等高線は南から北方向に下るが、調査区中央やや北よりでは氾濫による砂礫が流入して田面を押し流しており、標高63m付近で平坦面を形成している。

⑴　畦畔

水田の畦畔は基本的には等高線にほぼ平行・直交する方向に造られる傾向がある。基幹となる大畦畔は南よりにあるSK17である。

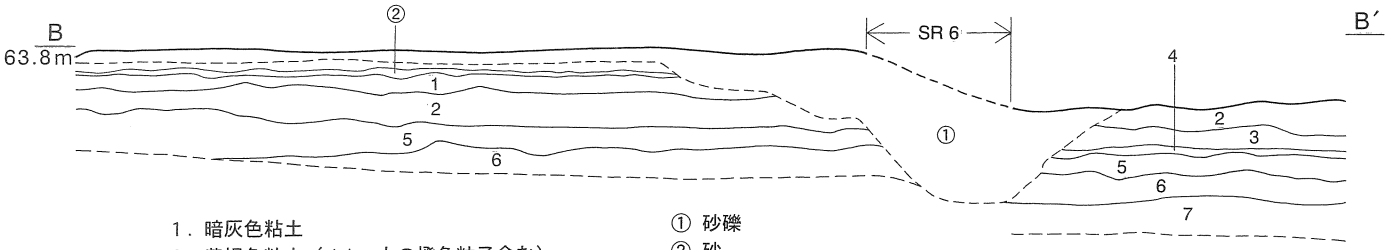
SK17　Ｉ１～２グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.3～0.8mを測り、南側田面との比高差は３～17㎝である。北側には平行する段が複数検出されたが、明確な田面は把握できない。

杭による補強は北面を中心に丸材の杭を用いて0.3～1.7m間隔に行われる（第60図）。この面は溝SD８に接する部分であるので、水による流出を防止する目的が感じられる。



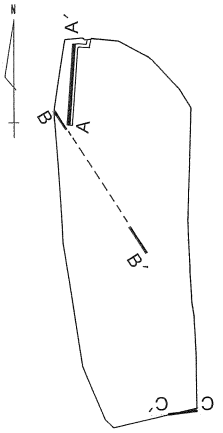
1．黄褐色粘土（φ1㎜大の粒子含む）
2．褐色粘土（粘性強い）
3．灰色粘土（粘性強い）
4．灰褐色粘土（やや砂質、風化礫含む）
5．砂礫

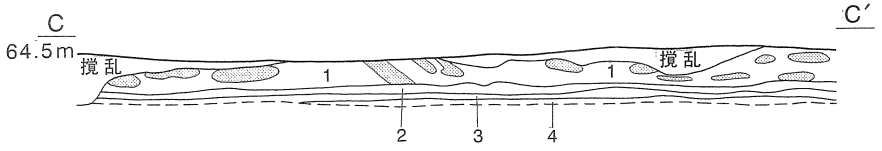
① 暗褐色粘土
② 灰色粘土（粘性強く、φ2～4㎝大の風化礫含む）
③ 褐灰色シルト
④ 灰色粘土
⑤ 灰褐色粘土（やや砂質、風化礫含む）



1．暗灰色粘土
2．黄褐色粘土（φ1㎜大の橙色粒子含む）
3．灰色粘土（φ1㎜大の白色・黒色粒子含む）
4．暗灰色粘土（φ1㎜大の白色・黒色粒子含む）
5．白色粘土（粘性強く、φ2～3㎜大の風化礫含む）
6．青灰色粘土（砂礫混じり）
7．砂礫

① 砂礫
② 砂



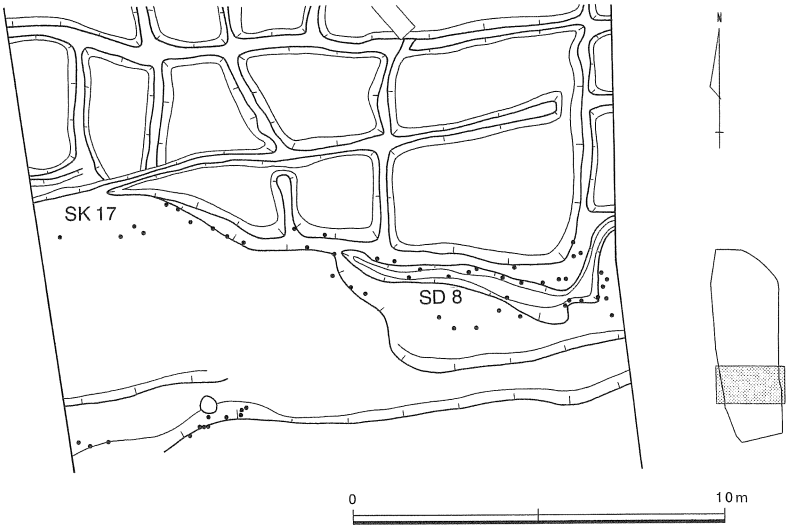


1．暗褐色粘土（炭化ブロック含む）
2．明褐色粘土（φ1～3㎜大の白色粒子含む）
3．褐色粘土（やや砂質、炭化物含む、φ5～10㎝大の礫含む）
4．灰色粘土（砂礫混じり）

炭化ブロック

0　2m

第59図　D区トレンチ土層断面図



第60図　Ｄ区大畦畔に伴う杭列位置図

⑵　小畦畔による小区画

他の調査区と同様に、大畦畔の内部は土を掻き揚げて盛り上げることで造られた畦畔（小畦畔）によって更に細かく区切られている。Ｄ区においては、大畦畔による区画（田面）３枚に、このような小畦畔が検出されている。それぞれは長方形状を呈し、Ｂ区やＣ区南東側に比べて整った印象を受ける（第46図）。

田面33　調査区の北端にある東西に長い長方形状の田面である。内部は11ヶ所以上の小区画に分かれている。北よりには不定形の小区画が多い。一方南よりには、東西幅3.1～4.2m、南北幅1.7～2.7mの長方形の区画が格子目状につながる。

田面34　南端で大畦畔SK17に接する正方形状の田面である。北端はSR６によってもたらされた砂礫の侵入を受け、流失している。南よりは東西方向の小畦畔によって東西幅2.3～5.2m、南北幅2.4～3.7mを測る正方形～長方形状を呈する４ヶ所の区画に分けられる。このうち北東側小区画の南東隅と南西側小区画の北西隅北側には、水口とみられる小畦畔の途切れが観察される。北よりは南北幅3.6m、東西幅9.5mの比較的大きな長方形状区画に見えるが、南側の小畦畔より半円状の小畦畔が北東側へ分岐しているため、更に二分される可能性がある。

田面35　田面34の西にあり、南端で大畦畔SK17に接する。北側は洪水による砂礫の侵入により、西側は調査区境にあたるため田面の形状は定かでない。内部は５ヵ所以上の小区画に分かれている。大畦畔沿いには南北幅3.2～3.9m、東西幅1.3m前後の長方形状の小区画が連続して営まれる。

⑶　流路・溝（第43・45図）

Ｄ区で検出された流路はSR６、溝はSD８である。山裾を西側から廻って来た水に対処するものと思われる。

SD８　調査区の南側であるＩ２グリッドで検出された東西方向の溝である。大畦畔SK17の南側に平行しており、幅0.4～１m、深さ５～25cmの規模がある。この溝の南縁には0.25～１mの間隔で杭が打たれており、SK17南縁にある杭列とともに溝の範囲を区切っている。

SR６　調査区の中央から北よりの地域には、幅11～13mにわたって厚く砂礫をもたらしたSR６が東西方向に流入している。この砂礫は西側からの急激な氾濫によってもたらされたと考えられ、水田面を削り流してしまっている。この砂礫は、しかし、隣接するＣ区に同様な砂礫が認められないので、Ｈ３グリッド付近で止まっており、谷中を貫流するものではないと考えられる。

8　Ｄ区水田面出土の遺物

Ｄ区水田面出土の土器・陶磁器（第57図・図版19・25）　（266）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（267）は東遠系の小碗で12世紀中葉の製品である。（268）は東遠系の山茶碗で12世紀後半から13世紀初頭の製品である。（269）は中国白磁碗で12世紀の製品であ

る。(270) は東遠系の山茶碗で13世紀初頭から13世紀中葉の製品である。(271) は東遠系の小皿で13世紀の製品である。(272) は中国青磁の蓮弁紋碗で13世紀中頃から14世紀前半の製品である。(273) は古瀬戸の鉄錆天目茶碗で後期Ⅲにあたる15世紀前半の製品である。(274) は中国白磁小皿で15世紀前半の製品である。(275) は常滑焼の甕で15世紀前半の中野編年９型式の製品である。(276) は美濃黄天目茶碗で登窯１期か登窯２期に併行する17世紀初頭の製品である。(277) は上志戸呂窯生産の鉄釉擂鉢で大窯４期にあたる16世紀末から17世紀初頭の製品である。(278) は美濃焼の鉄釉天目茶碗で登窯１期か登窯２期の17世紀前半の製品である。(279) は上志戸呂窯併行にあたる志戸呂焼の錆釉擂鉢で17世紀前半の製品である。(280) は上志戸呂窯併行にあたる志戸呂焼の錆釉擂鉢で16世紀末の製品である。(281～283) はかわらけで16世紀の製品と思われる。(285・286) は伊万里焼の染付皿で18世紀の製品である。(287) は伊万里焼の染付丸茶碗で18世紀の製品である。(288) は瀬戸焼の黄釉片口鉢で18世紀中葉の製品である。(289) は産地不明の白磁盃で19世紀前半の製品である。

9　E区水田

E区水田は、標高63.1～60.4m付近に営まれる。等高線は南から北方向に下るが、谷の中央部に近いため傾斜は比較的緩慢となる（第48図）。標高62.8～62.6m付近と61.0m前後で平坦面を形成している。

(1)　畦畔（第45図）

水田の畦畔は基本的には等高線にほぼ平行・直交する方向に造られる傾向がある。基幹となる大畦畔はSK18～26であり、SK18がA区で検出されたSK２と、SK19がSK６と、SK20がSK８と同一延長上になる可能性が高く、周辺の水田との連続性が窺える部分がある。

SK18　C・D３～D４グリッドで検出された北西一南東方向の畦畔である。位置関係からA区で検出されたSK２と同一延長上にある可能性が高い。杭等による補強はなされおらず、耕作土を掻き揚げることで形成される。幅は上端で30～60cmを測り、北側田面との間には６～16%の下り斜面を造る。北側田面との比高差は12～18cm、南側とは８cmとなる。

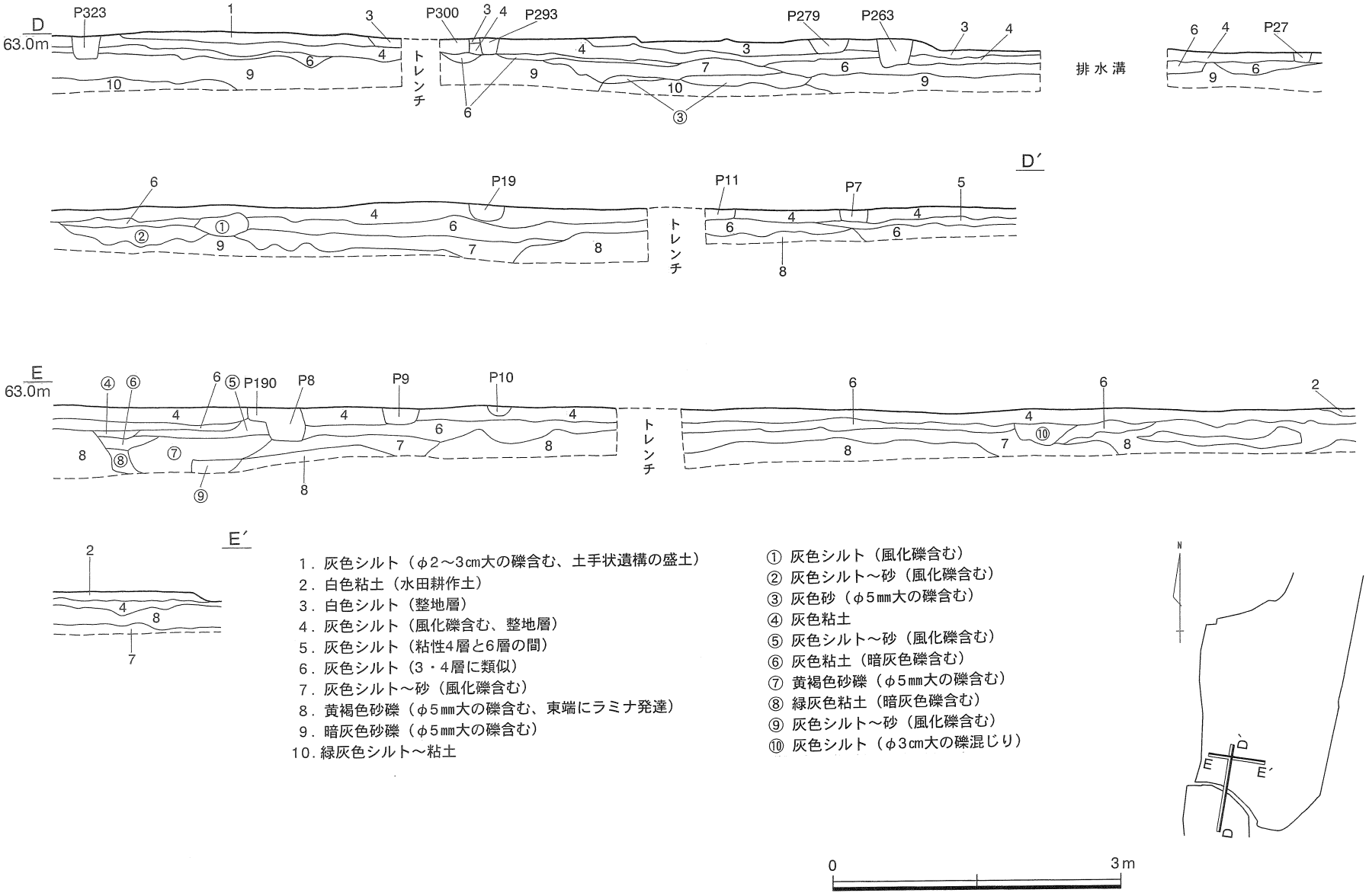
SK19　D３～４グリッドで検出された東西方向の畦畔である。位置関係からA区で検出されたSK６と同一延長上にある可能性が高い。東側は上端で20～40cmと幅が狭いが、西端部分では１m前後に広がる。西端で南側に折れてSK25につながるが、この部分の北側には直径20cm前後の自然礫が集められている。曲面の補強として用いられていたのかもしれない。

SK20　E２～３グリッドで検出された東西方向の畦畔であり、調査区の中ほどでSK25と交差する。位置関係からA区で検出されたSK８と同一延長上にある可能性が高い。幅は上端で30～50cmを測り、南側田面との比高差は10cm前後、北側とは１～６cmとなる。SK25との交点南西側には、直径20～30cmの自然礫が集められる。なお、この畦畔は調査区西壁から９～12.5mで流路SR７によって切られている。

SK21　E・F３グリッドで検出された東西方向の畦畔であり、調査区中ほどでSK25と直角に交わる。幅は上端で30～50cmを測り、南側水田との比高差は５～14cm、南側とは２cm前後となる。SK25との交点北東側には、補強のためと思われる直径10cm前後の礫が集められている。

SK22　F３グリッドで検出された北西一南東方向の畦畔である。２列との境付近でSK25と交差する。本来はより西側にあたる田面52～54の南縁付近に延びていたものと思われる。幅は上端で0.3～1.3mを測り、西へ行くにしたがって徐々に細くなる。北側の田面とは10cm前後の比高差があるが、南側の田面は畦畔上端より５cm前後高い位置にある。SK25と交差する部分には50cm前後の間隔に杭を打ちこみ、直径10cm前後の礫が集められている。

SK23　F３グリッドで検出された東西方向の畦畔である。２・３列境の東側でSK25と鋭角に交差する。

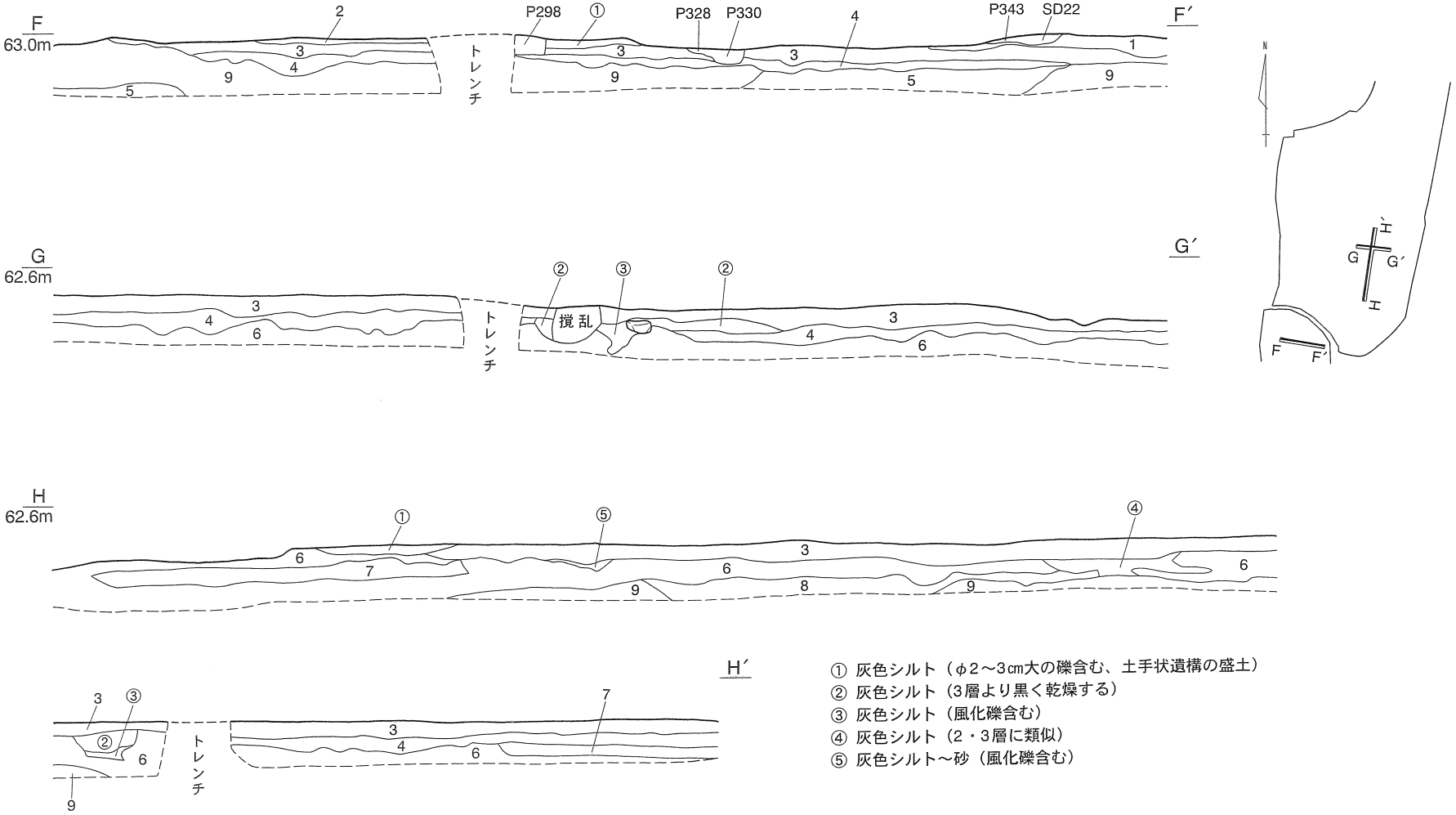


1．灰色シルト（φ2～3㎝大の礫含む、土手状遺構の盛土）
2．白色粘土（水田耕作土）
3．白色シルト（整地層）
4．灰色シルト（風化礫含む、整地層）
5．灰色シルト（粘性4層と6層の間）
6．灰色シルト（3・4層に類似）
7．灰色シルト～砂（風化礫含む）
8．黄褐色砂礫（φ5㎜大の礫含む、東端にラミナ発達）
9．暗灰色砂礫（φ5㎜大の礫含む）
10．緑灰色シルト～粘土

① 灰色シルト（風化礫含む）
② 灰色シルト～砂（風化礫含む）
③ 灰色砂（φ5㎜大の礫含む）
④ 灰色粘土
⑤ 灰色シルト～砂（風化礫含む）
⑥ 灰色粘土（暗灰色礫含む）
⑦ 黄褐色砂礫（φ5㎜大の礫含む）
⑧ 緑灰色粘土（暗灰色礫含む）
⑨ 灰色シルト～砂（風化礫含む）
⑩ 灰色シルト（φ3㎝大の礫混じり）

0　3m

第61図　D・E区トレンチ土層断面図1



① 灰色シルト（φ2～3㎝大の礫含む、土手状遺構の盛土）
② 灰色シルト（3層より黒く乾燥する）
③ 灰色シルト（風化礫含む）
④ 灰色シルト（2・3層に類似）
⑤ 灰色シルト～砂（風化礫含む）

1．褐色粘土
2．灰色シルト（風化礫混じり、整地層）
3．灰色シルト（風化礫含む、整地層）
4．灰色シルト（2・3層に類似）
5．灰色シルト～砂（風化礫含む）
6．黄褐色砂礫（φ5㎜大の礫含む）
7．暗灰色砂礫（φ5㎜大の礫含む）
8．灰色砂
9．緑灰色シルト

0　3m

第62図　D・E区トレンチ土層断面図2

幅は上端で20～80cmを測り、北側の田面との比高差は９～22cm、南側とは５～10cmとなる。畦畔の北縁には補強のための丸材を用いた杭が0.1～１m間隔に打たれ、特にSK25との交点より東へ6.5m付近まではより密に打たれる傾向がある。また、SK25との交点北縁には直径20cm前後の礫が集められている。

SK24　Ｇ３グリッドで検出された東西方向の畦畔である。調査区境より西へ７m付近でSK25と交差する。幅は上端で40cm前後を測り、北側田面との比高差は20cm前後、南側田面とは６cm前後となる。畦畔の北縁は５～50cm間隔で丸材の杭が打ち込まれ補強されている。特にSK25との交点から東へ３m程の範囲が著しい。この杭列には部分的に横木が渡され、その周囲に直径20cm程度の礫が集められている（第65図）。

SK25　Ｄ３～Ｇ３グリッドにかけて検出された畦畔である。南側のＧ３～Ｆ２グリッドでは北西―南東方向であるが、これ以北では南北方向に向きを変える。幅は上端で0.4～1.1mを測り、北西―南東方向の部分においては、北東側に12～26cm、南西側に12cm前後の比高差を生じているが、南北方向部分においては東側・西側ともに15cm前後と近似する箇所もみられるようになる。畦畔を補強する施設は、前述のとおり他の畦畔と交差する部分に手厚く施される。特に杭や横木のほかに礫を用いる手法は、Ａ～Ｄ区では用いられていないものである。

SK26　Ｇ２・３グリッドで検出された東西方向の畦畔である。東端はSK25との間に、水口と思われる60cm程の間隔を取っている。幅は上端で20～40cmを測り、北側田面との比高差は２～７cm、南側田面とは２～６cmとなる。Ｇ２グリッドで南北方向の畦畔と交差するが、ここからもまばらながら直径10cm前後の礫が複数検出されている。

⑵　小畦畔による小区画（第46図）

Ｅ区でも他の調査区と同様に、土を掻き揚げて盛り上げることで造られた畦畔（小畦畔）によって大畦畔の内部は更に細かく区切られている。Ｅ区においては、大畦畔による区画（田面）のほぼすべてにあたる27枚に、このような小畦畔が検出されている。小区画は正方形～長方形状を呈するものが多い。

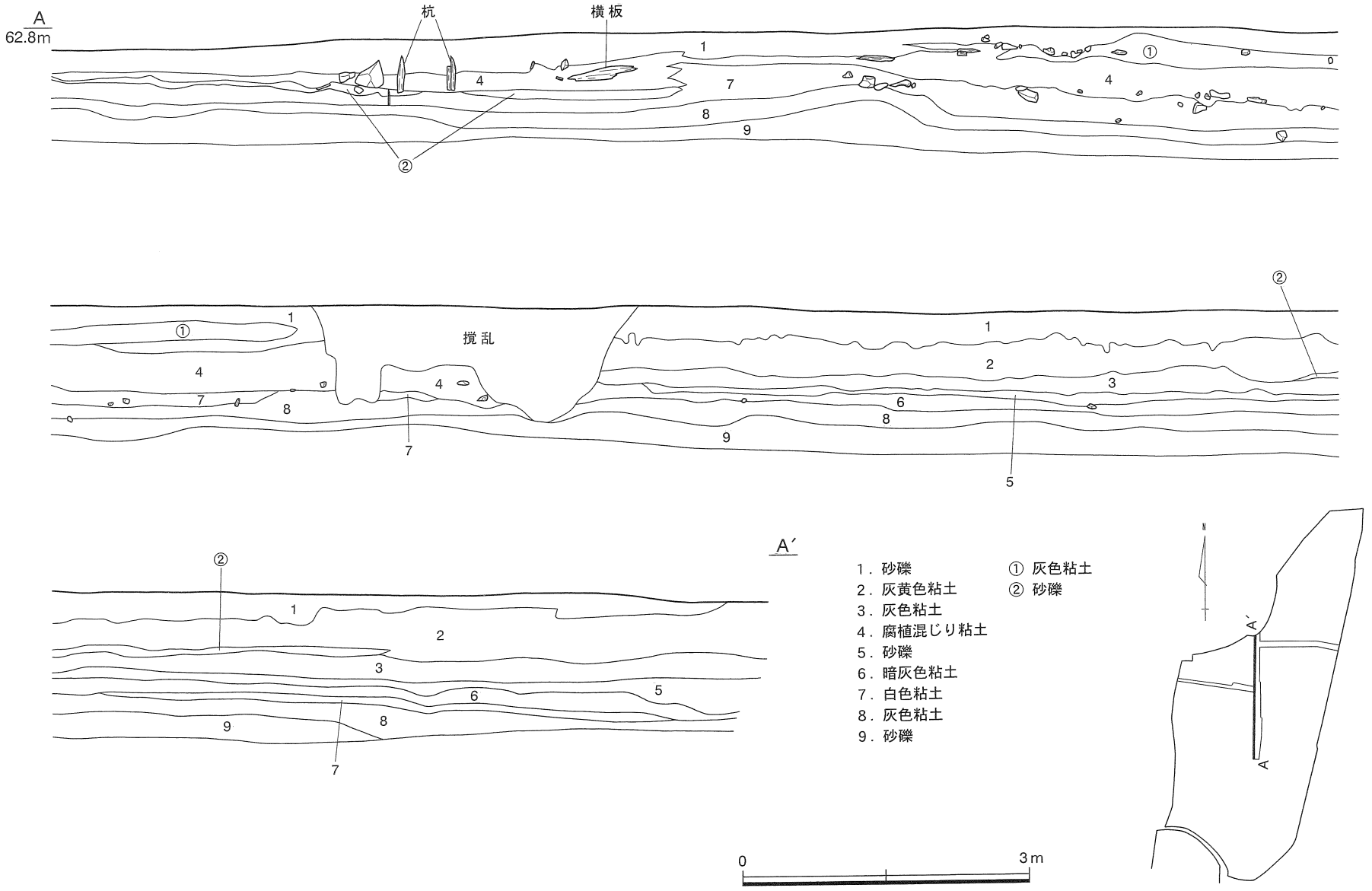
田面36　調査区の北端にある、北西―南東に長い長方形状になると思われる田面である。調査区境にかかるため北・東・西の境となる大畦畔は確定できない。内部は11ヶ所以上の小区画に分かれている。中央付近に１～1.8m四方の小区画があり、周囲に南北幅0.8～1.5m、東西幅3.5m前後の長方形状のものが配置される傾向がある。

田面37　田面36の南東側にある、北西―南東に長い長方形状になると思われる田面である。調査区境にかかるため東の境となる大畦畔は確定できないが、西にある田面38と同様な規模であろう。北側には南北幅１m程度、南側には南北幅3.5mの２ヶ所の小区画がみえる。

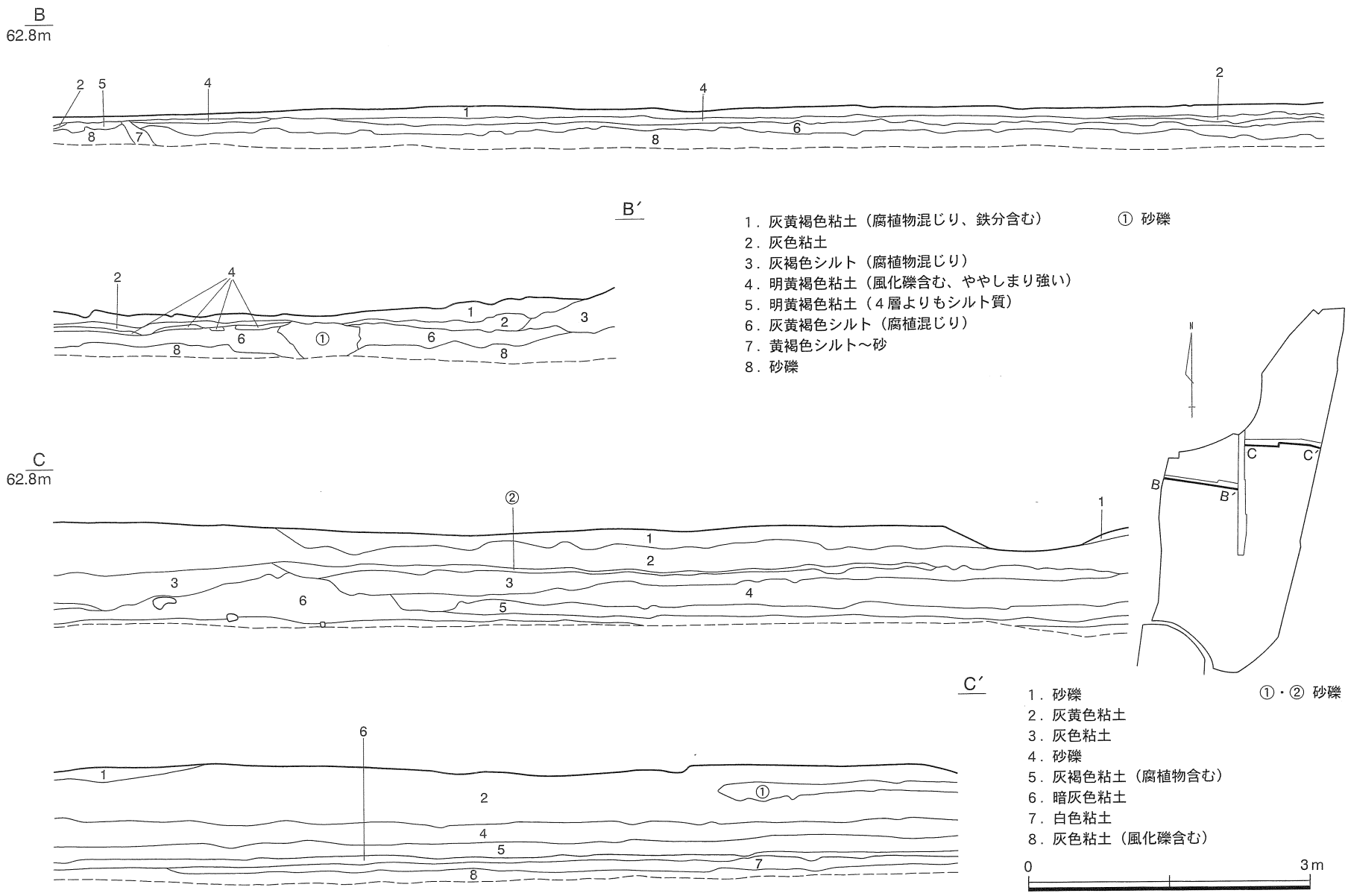
田面38　田面36の南側にある東西８～9.5m、南北５m前後となる北西―南東に長い長方形の田面である。内部は長方形や矩形の小区画９つに分かれている。小区画の規模は、最小が南北幅１m、東西幅1.6m、最大が南北幅２m、東西幅3.5mと一定ではなく、それぞれがモザイク状に組み合っている。南西側の隅には、長径１m、短径0.7m、深さ0.17mの貯水穴と思われる窪みSF１から、導水のためと思われる幅0.4m、長さ2.8m、深さ６cm前後の溝SD９が延びている。

田面39　田面37の南側にある。南側の境は大畦畔SK18となる。東へ延びる２ヶ所小区画が検出されているが、調査区境にかかり全体像は判然としない。恐らく、西側に連続する田面40に類するものであろう。

田面40　田面38の南側にある東西11m、南北６m程の、北西―南東に細長い長方形の田面である。南側は大畦畔SK18に接している。内部は長方形・正方形・三角形等の13ヶ所の小区画に分けられている。長方形の区画は田面の南西隅にみられ、南北幅2.2m、東西幅3.1mを測る。正方形の小区画は中央から西側に多く1.7～2.2mの規模がある。三角形や矩形の区画は田面の東側に偏っている。大畦畔の間隔等に変化がないにもかかわらず、東側に変則的な規模の小区画を配置するのは、何らかの特殊な事情があったのだろう。



第63図　E区トレンチ土層断面図1



第64図　E区トレンチ土層断面図２

田面41　大畦畔SK18南側の田面である。試掘坑等によって一部が抜かれているほか、西側で小区画が検出されていないなど、正確な規模は把握できない。内部は少なくとも６ヶ所以上の小区画に分けられている。東西に長い長方形状が主体であり、各々は南北幅1.2～2.2m、東西幅2.7～3.3mを測る。

田面42　大畦畔SK19の北側に接する田面である。５m四方の正方形の田面であるが、内部に直径1.3mの小区画をもつ不定形な張出しが南東側から延びている。

田面43　田面42の南側に位置し、北縁を大畦畔SK19に接する田面である。７m四方程度の規模があると思われるが、東側は調査区境にかかり、南側はトレンチによって判然としない。内部は12ヶ所以上の小区画に分けられている。いずれも南北幅1.3～1.5m、東西幅1.4～1.8mを測る正方形状であり、南側で比較的均等な規模となる。

田面44　田面43の西側にある南北幅８m、東西幅11m程度となる田面である。田面43との境をなす大畦畔際で南北幅2.5m前後の小区画が観察されるが、これより西側では不明瞭となる。田面の北側を斜めに横切るSR７によって田面が削られていることも考えられる。

田面45　南側を大畦畔SK20に、西側をSK25によって区切られる、東西幅が17m程の田面である。SK20に2.5～3.5m間隔で平行する小畦畔との間に４ヶ所の小区画が作られる。小区画の東西幅は２～４mを測る。

田面46　大畦畔SK20とSK21間の、最も東側で検出された田面である。南北幅は12m程であるが、東側が調査区境にかかるため東西の規模は明らかでない。内部は３ヶ所以上の正方形～長方形状の小区画に分けられる。南北幅は1.6～4.2mと一定しない。

田面47　田面46と大畦畔SK20・21・25との間に位置する、およそ14m四方の正方形状の田面である。内部は13ヶ所の小区画に分けられる。小区画の形状は長方形状を主体とするが、南北幅0.5～４m、東西幅1.4～6.5mと一定しない。また、北縁や南西側の小区画には、小区画内に突出する仕切り状の小畦畔が観察できたり、水口を介して小区画同士がＺ字状につながる部分もみられる。

田面48　大畦畔SK21とSK22間の最も西側にある長方形状の田面である。南北幅５m、東西幅７m以上の規模があり、内部は９ヶ所以上の小区画に分けられる。西側は東西幅4.3～4.6m、南北幅1.0～2.3mの長方形状の小区画が南北方向に連続している。この東側には1.4～1.7m四方の正方形状の小区画が並んでいる。

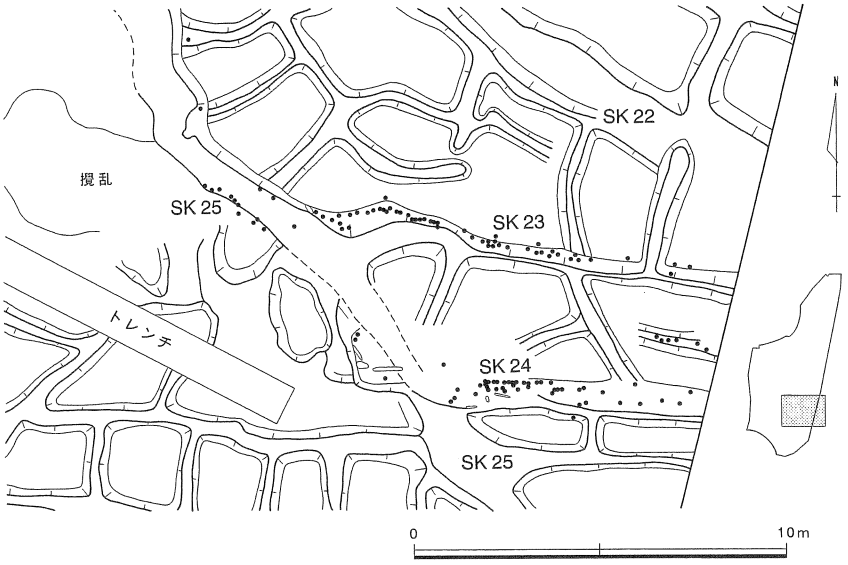
田面49　田面48の南側にある、7.5m四方の正方形状の田面である。内部は３ヶ所の小区画に分かれるが、規模は一定しない。南側の小区画の北西側にあたる小畦畔は一部が途切れている。田面50方向へ水を廻す水口であった可能性がある。

田面50　大畦畔SK21・22・25によって三方を囲まれる南北８～11m、東西９m程の田面である。内部は７ヶ所の小区画に分けられている。西側は矩形の小区画によって大きく２つに分けられるが、東側では不定形の小区画が多くなる。

田面51　東側を大畦畔SK25に、南側をSK23に接する南北11m、東西6.5mを測る長方形の田面である。内部は東西・南北に通る小畦畔によって、６ヶ所の小区画に分けられている。それぞれは南北2.3～3.3m、東西2.3～2.7mの規模があり、整然としている。

田面52　田面51の西側に位置する、およそ10m四方の田面である。内部は18ヶ所の小区画に分けられている。田面51に接する東側には、東西幅3.3～3.5m、南北幅２m前後の長方形状の小区画が南北方向に連続する。ここには、田面51からの水廻しに配慮したとみられる水口が、複数ヶ所に設けられている。中央付近から西側には、南北1.4～2.7m、東西1.7～2.4mを測る正方形状の小区画が、碁盤目状に配置される。この部分の南側にも、水口と思われる小畦畔が途切れる部分が複数観察される。

田面53　田面52の西側に連続する田面である。内部は田面52の中央より西側にみられる小区画に類似し



第65図　Ｅ区大畦畔に伴う杭列位置図

た、10ヶ所以上の小区画に分けられる。

田面54　大畦畔SK22とSK23・25によって挟まれた部分にあり、SK25が北へ緩やかにカーブするのに規制された半月状の不定形な田面となる。内部は10ヶ所の小区画に分けられている。SK25に接する部分は、幅1.9m前後、長さ３mの長方形状の小区画が連続するが、他の部分においては三角形や矩形の小区画となる。中央より東側では、小畦畔が部分的に途切れて水口を構成している。

田面55　大畦畔SK23・24・25に挟まれた南北幅３m、東西幅９m以上を測る長方形状の田面である。内部は５ヶ所以上の小区画に分けられている。それぞれの区画は三角形や矩形をなし、一定でない。田面の東側には、SK23と24に平行する杭によって補強された畦畔が検出されている。両者の漸移的なものである可能性もあろうが、検出された長さが２m程度であるため詳細は定かでない。

田面56　大畦畔SK24と25に囲まれた田面である。東側が調査区境にあたるため、田面の形状は明らかでない。内部は、幅1.0～2.2m、長さ3.3m以上の東西に細長い小区画５ヶ所以上に分かれている。

田面57　東縁を大畦畔SK25に接する、東西４～10m、南北７m前後を測る台形状の田面である。内部は９ヶ所の小区画に分けられている。SK25に接する部分は三角形～長方形状を呈し、南東隅には田面59からの水廻しに配慮したと思われる水口が開いている。西よりには南北２～2.5m、東西1.5～２mの正方形～長方形の小区画が碁盤目状に並ぶ。

田面58　田面57の西側に接する、９m四方の正方形を呈する田面である。内部は10ヶ所程度の小区画に分けられている。小区画は、基本的には田面57で検出されたものに類する規模である。

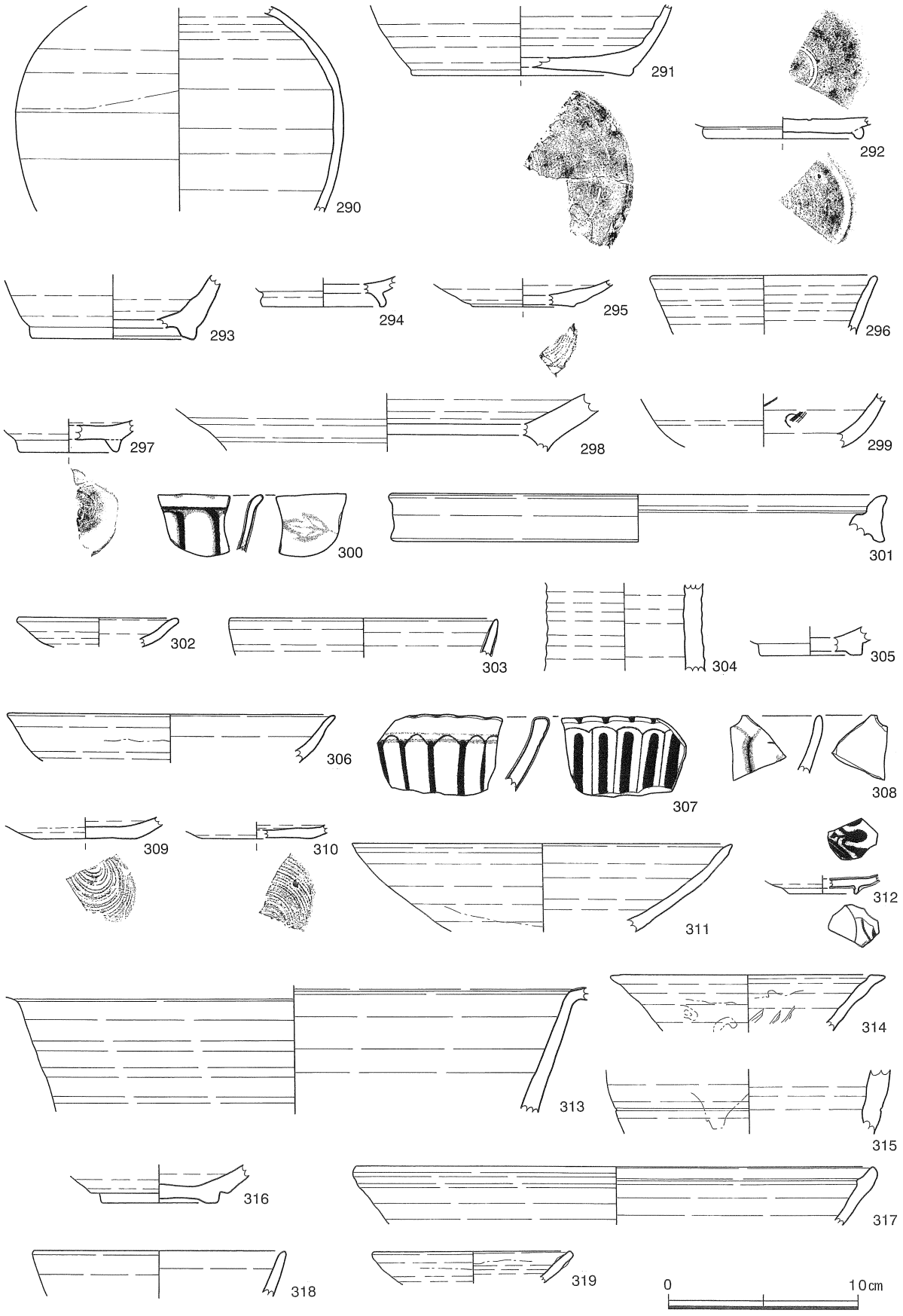
田面59　調査区の最南端にあたる田面の一つであり、東縁を大畦畔SK25に接する。内部は13ヶ所の小区画に分けられている。東側のSK25よりの部分は、南北2.2～3.7m、東西2.5mの比較的大きな区画となるが、西側部分ではこれを概ね半分にした長方形状の小さな区画が整然と並ぶようになる。

田面60　東を田面59に、西をＤ区の田面33に接する、東西８m、南北9.5mを測る長方形の田面である。内部は11ヶ所の小区画に分けられている。南東隅には最大幅１mの三角形状や、東西1.3m、南北1.5mを測る長方形状のごく小さな区画がみられる。内部の多くは東西1.8～2.9m、南北1.2～2.8mの長方形状を呈する。

⑶　流路・溝（第43図）

Ｅ区で検出された流路はSR７のみである。小瀬戸谷川から派生したものと思われる。

SR７　調査区の北よりにあたるＥ１～Ｄ４グリッドで検出された、南西―北東方向の流路である。田面の方向との相関性はなく大畦畔SK19・20・25等を切っているため、水田が整備された後に高位にあたる南西方向から流入したものと思われる。田面を覆う４層（Ａ―Ａ′断面）は耕作土（７層上半）を削り込み、上位に堆積する砂礫層（１層）とも不整合がみられることから、SR７の流入は多量の土砂とその後

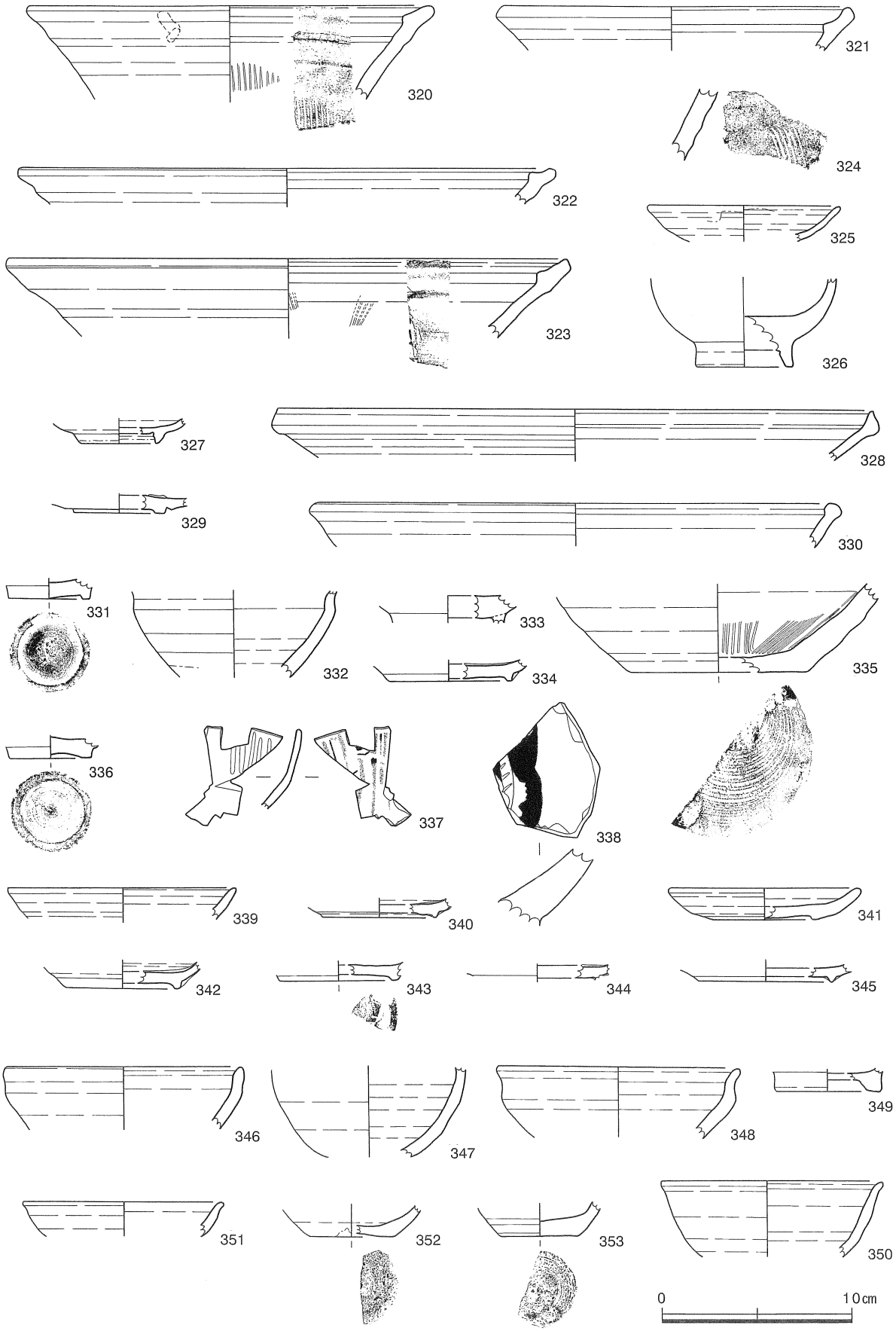


第66図　出土遺物実測図12(土器12)

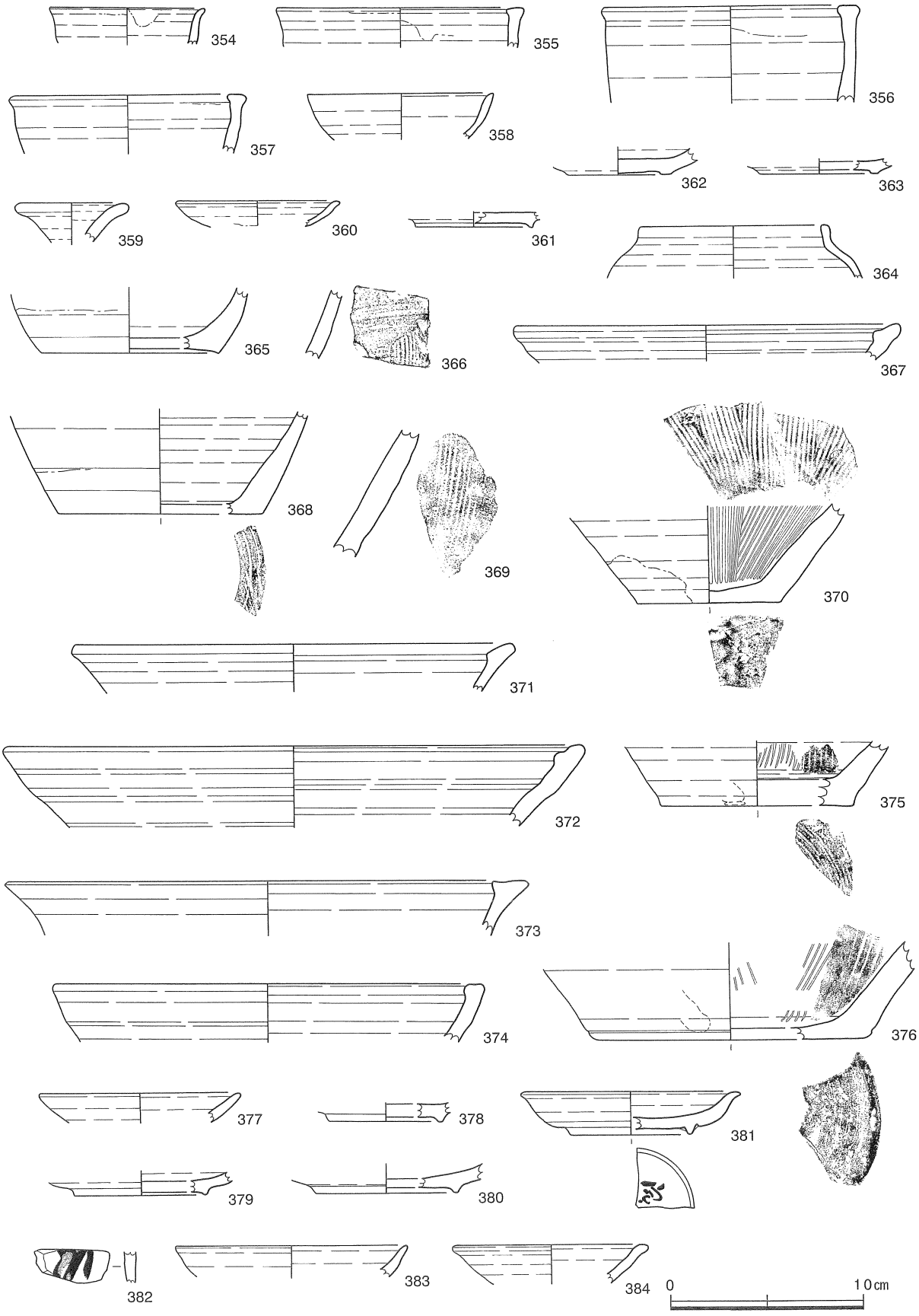
の湿地化をもたらして、戦国時代以来の水田を壊滅させたと考えられる。

10　Ｅ区水田面出土の遺物

Ｅ区水田面出土の土器・陶磁器（第57・66～70図・図版18・19・25～27））　（284）は志戸呂焼の鉄釉の香炉で17世紀前半の製品である。（290）は猿投窯生産の原始灰釉の長頸瓶でＯ－10号窯式併行にあたる８世紀末の製品である。（291）は猿投窯生産の灰釉陶器の手付瓶でＫ－90号窯式併行にあたる９世紀後半の製品である。（292）は東遠系の灰釉陶器の皿でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（293）は東遠系の灰釉陶器の長頸瓶でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（294）は東遠系の灰釉陶器の碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（295・296）は東遠系の糸切り碗でＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（297）は東遠系の小碗で12世紀中葉から12世紀後半の製品である。（298）は瀬戸焼の片口鉢で13世紀後半の製品である。（299）は中国の青磁茶碗でＡ－２類の12世紀から13世紀初頭の製品である。（300）は中国の青磁連弁紋折縁皿でＡ類の14世紀末から15世紀初頭の製品である。（301）は常滑焼の甕で６ａ型式の13世紀後半の製品である。（302）は東遠系の小皿で13世紀代の製品である。（303）は中国元代の青磁茶碗で14世紀の製品である。（304）は東南アジア生産の黒褐色釉の花瓶で17世紀の製品である。（305）は同安窯系の中国の青磁茶碗でＡ類の12世紀後半の製品である。（306）は瀬戸焼の灰釉平碗で後期Ⅳ古にあたる15世紀中葉の製品である。（307）は中国元代の青磁盤で14世紀末の製品である。（308）は中国の青磁蓮弁紋茶碗でＢ２類の14世紀末から15世紀初頭の製品である。（309）は瀬戸焼の縁釉小皿で後期ⅢかⅣ古にあたる15世紀前半の製品である。（310）は瀬戸焼の縁釉小皿で15世紀前半の製品である。（311）は瀬戸焼の灰釉の平碗で後期Ⅲにあたる15世紀前半の製品である。（312）は中国の染付小皿で15世紀中葉の製品である。（313）は古瀬戸の灰釉の柄付片口で中期ⅢかⅣにあたる14世紀中葉の製品である。（314）は瀬戸焼の灰釉の下し皿で後期Ⅱにあたる15世紀頃の製品である。（315）は瀬戸焼の鉄釉の壺か瓶で大窯か登窯の製品である。（316）は瀬戸焼の灰釉の平碗で後期Ⅳにあたる15世紀中葉から15世紀後半の製品である。（317）は瀬戸焼の卸目付き大皿で後期Ⅳ古にあたる15世紀中葉の製品である。（318）は中国の青磁茶碗で15世紀の製品である。（319）は瀬戸焼の縁釉小皿で後期Ⅳ新にあたる15世紀後半の製品である。（320～324）は三ツ沢窯生産の志戸呂焼の錆釉擂鉢で15世紀後半の製品である。（325）は三ツ沢窯生産の志戸呂焼の鉄釉小皿で15世紀後半の製品である。（326）は中国の青磁碗でＥ類の15世紀後半から16世紀前半の製品である。（327）は中国の白磁小皿で15世紀後半の製品である。（328）は瀬戸焼の錆釉擂鉢で後期Ⅳ新にあたる15世紀後半の製品である。（329）は古瀬戸の灰釉の腰折皿で後期Ⅳ新にあたる15世紀後半の製品である。（330）は瀬戸焼の錆釉擂鉢で後期Ⅳ新にあたる15世紀末の製品である。（331）は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で大窯１にあたる15世紀末から16世紀初頭の製品である。（332）は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で大窯１にあたる15世紀末から16世紀初頭の製品である。（333）は美濃焼の灰釉の丸碗で大窯１にあたる15世紀末から16世紀初頭の製品である。（334）は美濃焼の端反丸皿で大窯１期か大窯２期にあたる16世紀初頭から16世紀中葉の製品である。（335）は瀬戸焼の錆釉擂鉢で後期Ⅳ新にあたる15世紀末の製品である。（336）は古瀬戸の鉄釉天目茶碗の加工円板で後期Ⅳ古にあたる15世紀中葉の製品である。（337）は中国の白磁輪花皿で16世紀中葉の製品である。（338）は唐津焼の絵唐津鉢で16世紀後半の製品である。（339）は美濃焼の鉄釉の丸皿で大窯３期にあたる16世紀後半の製品である。（340）は美濃焼の灰釉の丸皿か端反皿で大窯１期か大窯２期にあたる16世紀後半の製品である。（341）は美濃焼の灰釉の丸皿で大窯４期にあたる16世紀末から17世紀初頭の製品である。（342・343）は美濃焼の灰釉の丸皿か端反皿で大窯１期か大窯２期にあたる16世紀後半の製品である。（344・345）は美濃焼の灰釉の丸皿で大窯２期か大窯３期にあたる16世

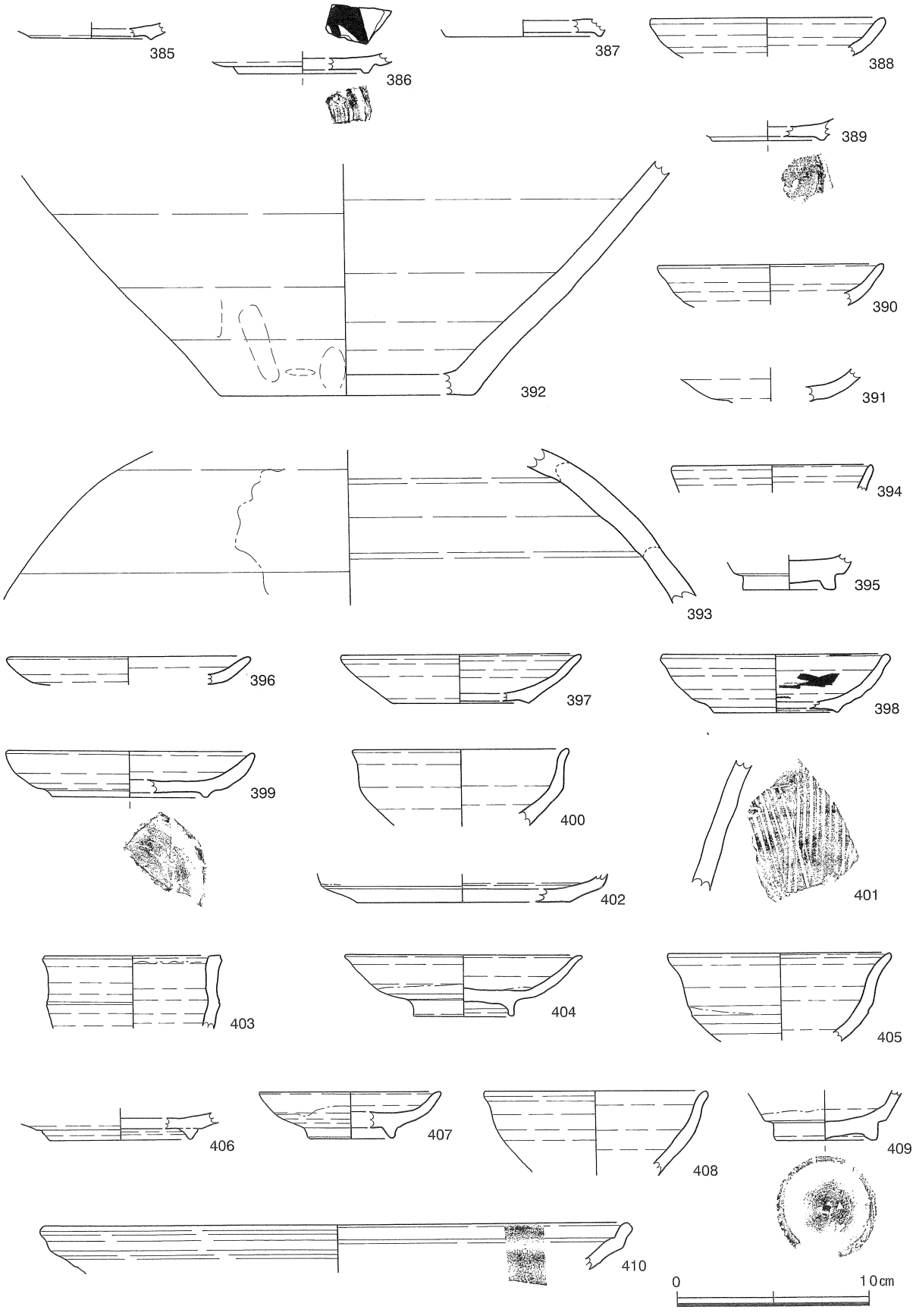


第67図　出土遺物実測図13(土器13)



第68図　出土遺物実測図14(土器14)

紀中葉から16世紀後半の製品である。(346) は志戸呂焼の鉄釉の天目茶碗で16世紀後半の製品である。(347～350) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉天目茶碗で16世紀後半の製品である。(351) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の灰釉中皿で16世紀後半の製品である。(352) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉茶入で16世紀後半の製品である。(353) は志戸呂焼の鉄釉の小壺か茶入で16世紀後半の製品である。(354) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉小杯で16世紀後半の製品である。(355～357) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉香炉で16世紀後半の製品である。(358) は志戸呂焼の鉄釉の小皿で16世紀後半の製品である。(359) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の徳利で16世紀後半の製品である。(360) は志戸呂焼の灰釉の小皿で16世紀後半の製品である。(361) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の灰釉中皿で16世紀後半の製品である。(362) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の口禿皿で16世紀後半の製品である。(363) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉内禿皿で16世紀後半の製品である。(364) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉小壺で16世紀後半の製品である。(365) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉壺で16世紀後半の製品である。(366) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の錆釉擂鉢で16世紀後半の製品である。(367) は志戸呂焼の擂鉢で16世紀後半の製品である。(368) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉壺で16世紀後半の製品である。(369) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の錆釉擂鉢で16世紀後半の製品である。(370) は志戸呂焼の錆釉擂鉢で16世紀後半の製品である。(371) は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の錆釉擂鉢で16世紀後半の製品である。(372・373) は志戸呂焼の錆釉擂鉢で16世紀後半の製品である。(374) は志戸呂焼の鉄釉鉢で16世紀後半の製品である。(375) は志戸呂焼の錆釉擂鉢で16世紀後半の製品である。(376) は志戸呂焼の錆釉擂鉢であり漆で接合されており火を受けている。鍋状に使用していることがわかる。(377～380) は志野焼の丸皿で登窯１期か登窯２期にあたる17世紀前半の製品である。(381) は灰釉の志野丸皿で連房１にあたる17世紀前半の製品で高台裏に墨書がある。(382) は志野焼の鉄絵小皿で登窯１期か登窯２期にあたる17世紀前半の製品である。(383～385) は志野焼の丸皿で登窯１期か登窯２期にあたる17世紀前半の製品である。(386) は志野焼の鉄釉の絵小皿で登窯１期か登窯２期にあたる17世紀前半の製品である。(387～390) は志野焼の丸皿で登窯１期か登窯２期の17世紀前半の製品である。(391) は志野焼の丸茶碗で登窯8期か登窯9期にあたる18世紀末から19世紀初頭の製品である。(392) は常滑焼の甕で16世紀の製品である。(393) は常滑焼の甕で16世紀の製品と思われる。(394) は美濃焼の総織部丸茶碗で登窯６期か登窯７期にあたる18世紀中葉の製品である。(395) は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯３期にあたる17世紀後半の製品である。(396) は志野焼の小皿で登窯１期か登窯２期にあたる17世紀前半の製品である。(397) は志野焼の丸皿で登窯１期の17世紀前半の製品である。(398) は志野焼の鉄絵皿で登窯１期の17世紀前半の製品である。(399) は志野焼の丸皿で登窯２期にあたる17世紀前半の遅い段階の製品である。(400) は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で登窯３期にあたる17世紀中葉の製品である。(401) は志戸呂焼の錆釉擂鉢で17世紀初頭の製品である。(402) は志戸呂焼の鉄釉の香炉で17世紀前半の製品である。(403) は志戸呂焼の鉄釉の香炉で17世紀前半の製品である。(404) は志戸呂焼の鉄釉の小皿で17世紀中葉の製品である。(405) は美濃焼の緑釉の端反碗で登窯１期の17世紀前半の製品である。(406・407) は美濃焼の灰釉の丸皿で登窯５期か登窯６期にあたる18世紀前半の製品である。(408) は瀬戸焼の鉄釉の端反碗で連房４か連房５にあたる17世紀後半から18世紀初頭の製品である。(409) は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で連房４にあたる17世紀後半の製品である。(410) は瀬戸焼の錆釉擂鉢で登窯６小期にあたる18世紀前葉の製品である。(411) は志戸呂焼の鉄釉の丸碗で17世紀前半の製品である。(412) は瀬戸焼の鉄釉の擂鉢で登窯２期にあたる17世紀第２小期の製品である。(413) は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯５期にあたる18世紀初頭の製品である。(414) は志戸呂焼の錆釉擂鉢で17世紀後半の製品である。(415) は美濃焼の黄瀬戸菊皿で登窯５期にあたる18世紀初頭の製品である。(416) は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯１期か登窯２期の17世紀前半の製品である。(417) は肥前焼の櫛目文皿で17世紀後半の製品である。(418) はかわらけで17世



第69図　出土遺物実測図15(土器15)

紀の製品と思われる。(419・420) は伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。(421) は伊万里焼の染付の壺で18世紀の製品である。(422) は伊万里焼の染付の小盃で18世紀後半の製品である。(423～427) は伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。(428) は瀬戸焼の腰錆茶碗で登窯７期か登窯８期にあたる18世紀後半の製品である。(429・430) は瀬戸焼の腰錆茶碗で登窯8期か登窯9期にあたる18世紀後半から19世紀前半の製品である。(431) は瀬戸焼の腰錆茶碗で登窯９期か登窯10期にあたる18世紀末から19世紀初頭の製品である。(432) は志戸呂焼の鉄釉の徳利で18世紀後半から19世紀前半の製品である。(433) は伊万里焼の染付の茶碗で19世紀初頭の製品である。(434) は呂宋釉の火入れで19世紀初頭の製品である。(435) は伊万里焼の染付の盃で19世紀前半の製品である。(436) は伊万里焼の染付の丸茶碗で19世紀前半の製品である。(437) は伊万里焼の染付の茶碗（小碗）で19世紀前半の製品である。(438) は瀬戸焼の錆釉擂鉢で19世紀前半の製品である。(439) は瀬戸焼の錆釉擂鉢で登窯8期にあたる18世紀後半の製品である。(440) は瀬戸焼の飴釉の片口鉢で登窯６期にあたる18世紀前半の遅い段階の製品である。(441) は瀬戸焼の鉄絵の鉢で登窯10期か登窯11期にあたる 19世紀前半の製品である。(442) は生産地不明の色絵の茶碗で19世紀前半の製品である。(443・444) は伊万里焼の染付の茶碗で19世紀前半の製品である。(445) は生産地不明の鉄絵の土瓶で19世紀前半の製品である。(446) は生産地不明の仏餉器で登窯8期か登窯9期にあたる18世紀後半から19世紀前半の製品である。(447) は生産地不明の染付の小盃で19世紀前半の製品である。(448) は生産地不明の染付の茶碗で19世紀前半の製品である。(449) は生産地不明の白磁の茶碗で19世紀前半の製品である。(450) は伊万里焼の染付の茶碗で19世紀後半の製品である。(451) は生産地不明の赤絵の仏餉器で19世紀後半の製品である。

11　その他の遺物

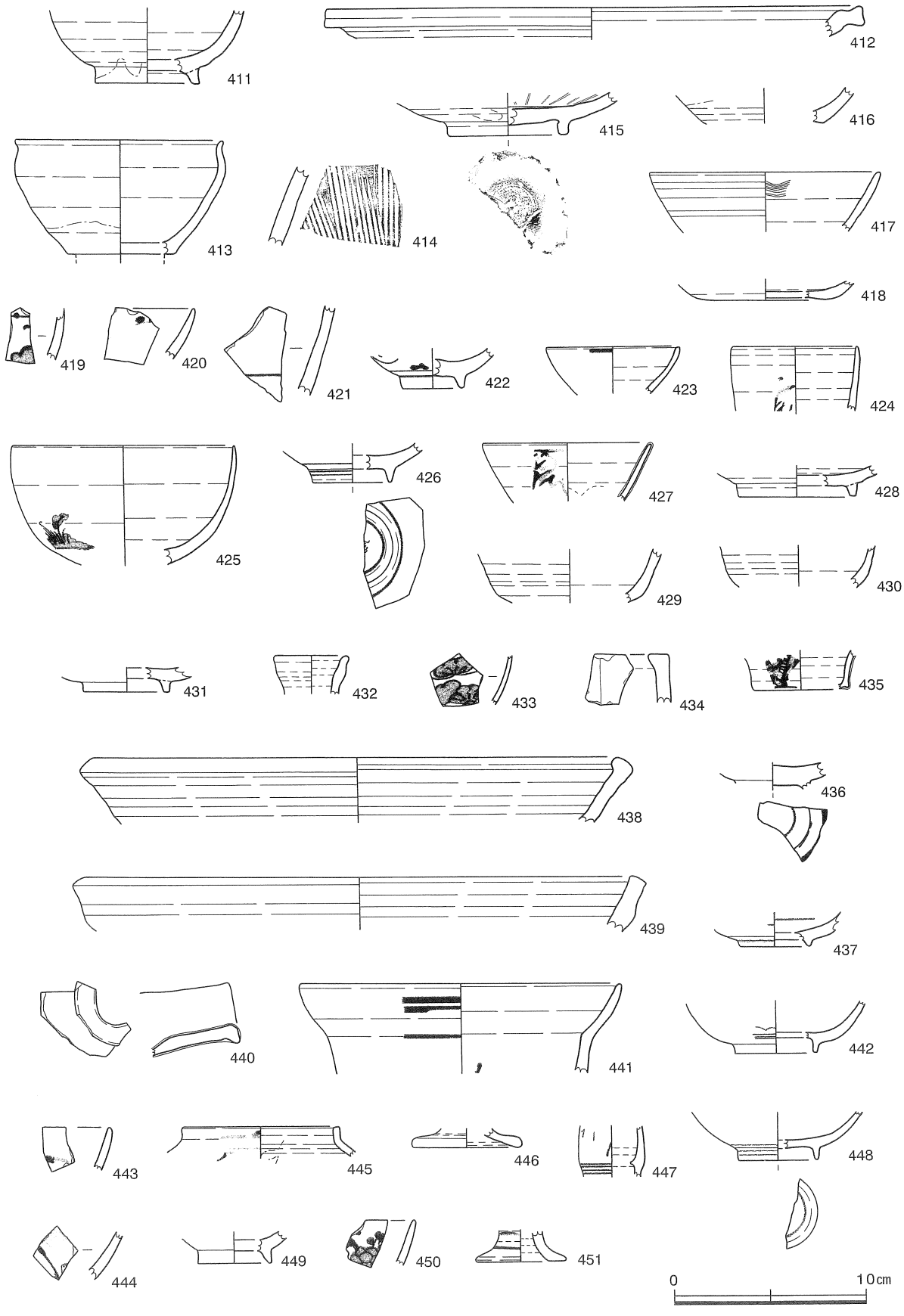
(1)　確認調査出土の遺物（第53・54・71図、図版24・28）

(452) は清郷甕で10世紀から11世紀の製品と思われる。出土地点は不明である。(453) は中国の白磁の小皿で15世紀後半の製品である。出土地点は不明である。(454) は美濃焼の志野菊皿で登窯１期にあたる16世紀末から17世紀初頭の製品である。出土地点は不明である。(455) は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で大窯４期前半にあたる16世紀末の製品であり、加工円板である。出土地点は不明である。(456) は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で大窯４期後半にあたる16世紀末の製品である。出土地点は不明である。(457) は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で登窯２期か登窯３小期にあたる17世紀中葉の製品である。出土地点は不明である。(458) は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯５期にあたる18世紀初頭の製品である。出土地点は不明である。(459) は瀬戸焼の長石釉の丸碗で18世紀後半から19世紀前半の製品である。出土地点は不明である。(460) は伊万里焼の染付の皿で18世紀の製品である。出土地点は不明である。(461) はＡ区より出土した尾張産の片口鉢で13世紀前半の製品である。(462) はＡ区３層より出土した東遠系の小皿で13世紀前半の製品である。(463) はＣ区より出土した伊万里焼と思われる長石釉染付呉須で19世紀前半の製品である。(464) はＣ区より出土した産地不明の染付茶碗で19世紀前半の製品である。(465) はＣ区より出土した産地不明の灯明受皿で19世紀前半の製品である。(466) はＣ区より出土した龍泉窯系青磁蓮弁紋碗で明時代15世紀の製品である。(467) は出土地点不明の土師器坏で８世紀から９世紀の製品である。

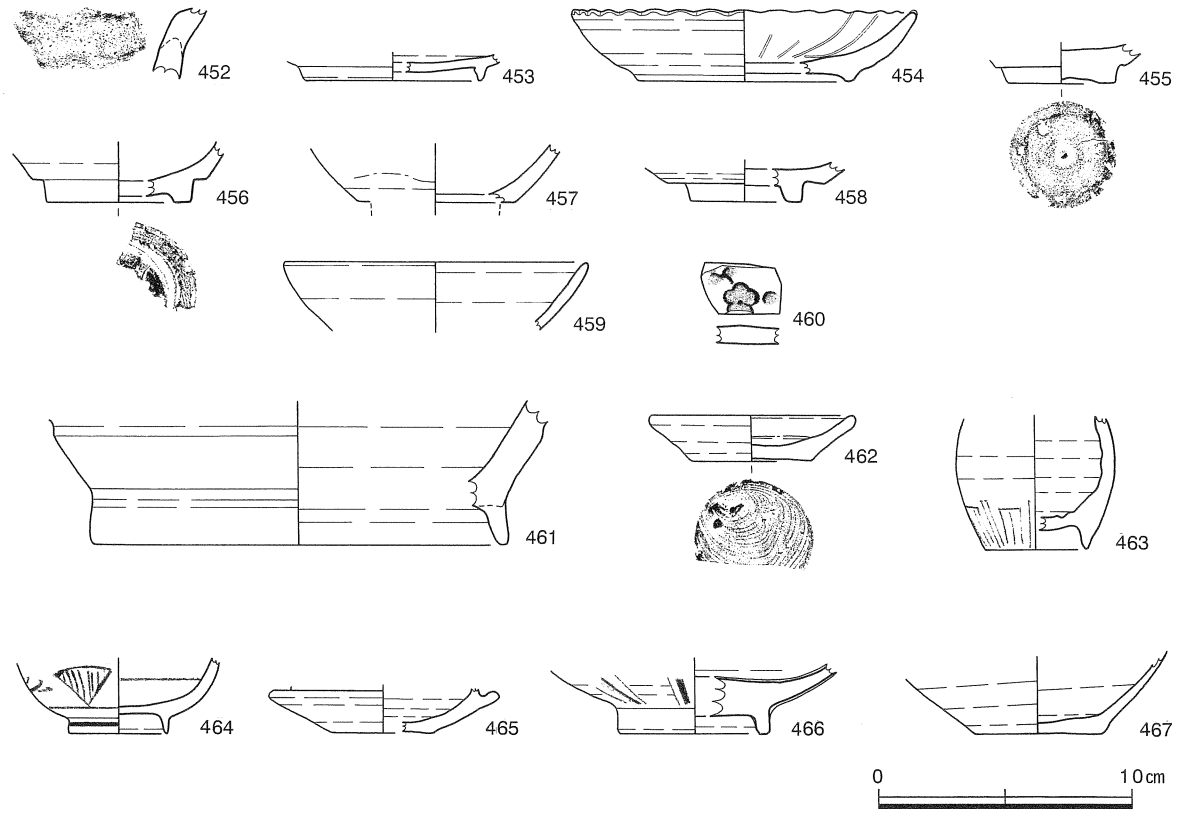
(2)　木製品

出土した木製品は52点である。木製品の半数ほどは日常生活で使用するような製品である。１点 (52) 以外は上層遺構である水田面からの出土であり、16世紀末以降のものである。

付札状木製品　細長い板目の板の一端を両側縁から削り込んで、頭部を作り出しているものである。(１)、



第70図　出土遺物実測図16(土器16)



第71図　出土遺物実測図17(土器17)

（３）は板状の形状であるが、（１）が板の幅そのままの頭部を有するのに対し（３）は幅を狭め尖頭状としている。（２）は頭部方向に細くなり尖頭状となり、先端は丸く箆のような形状をしている。いずれにも墨書はみとめられなかった。

栓　（４）は円錐台状を呈する。棒状の素材の側面を削りこんで作られている。桶の下部に用いられた栓であろうか。

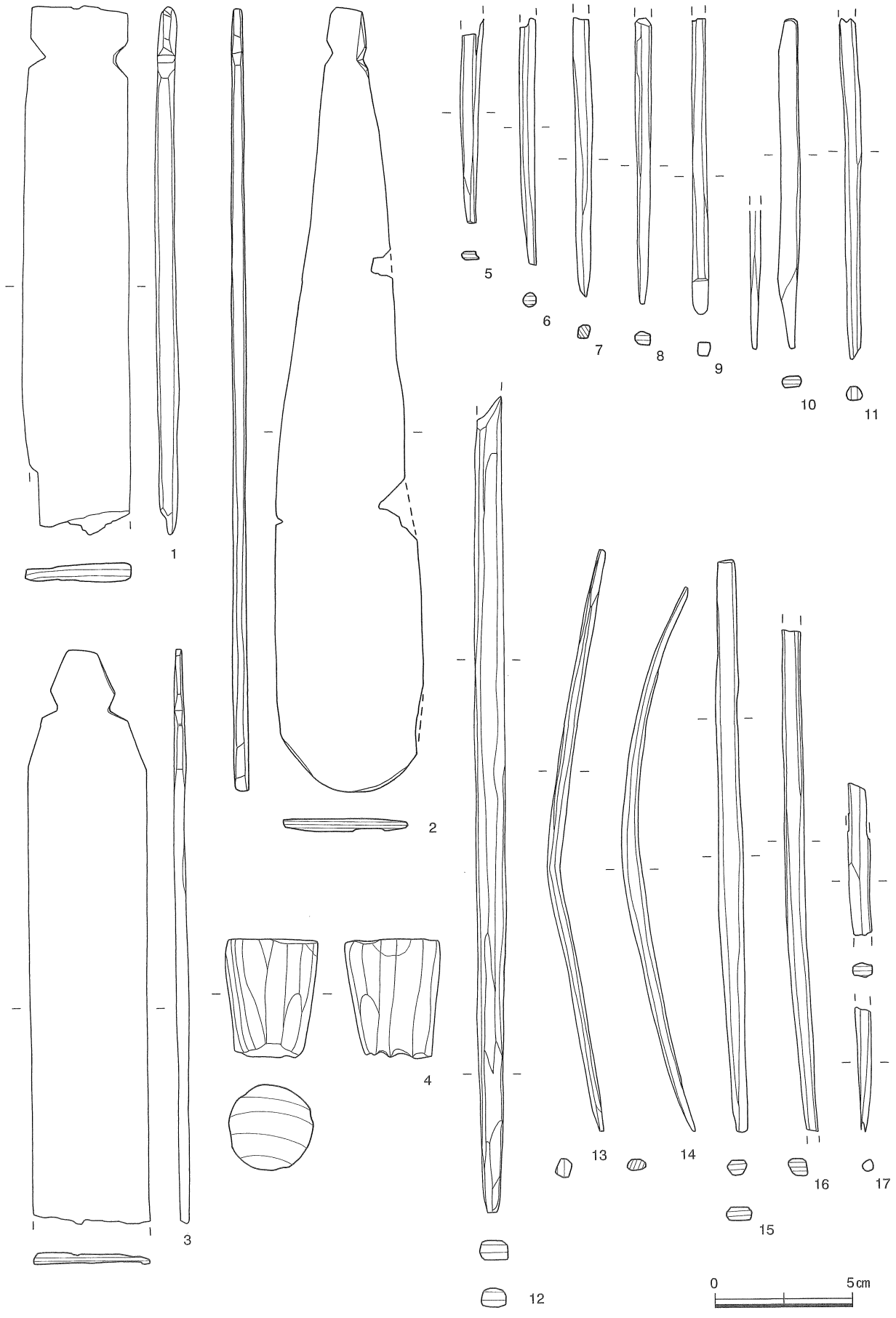
箸　（５～17）は棒状の木製品であり、先端をより細く削るなどした形状から箸であると判断した。(13・14）などのように細いものと、(12・15・16）のように太く長いものがある。断面形状は、細いものが正方形に、太いものが長方形状に整えられる傾向がある。太く長いものは菜箸のようなものがイメージされる。

漆椀　(18～23）は漆椀である。漆の塗り分けは、内面に朱・外面に黒、内外面ともに黒、内外面ともに朱の三種があるが、内面に朱・外面に黒の場合が多い。(18）は内面にわずかに黒漆が残っている。(19～22）は内面に朱漆が残っており、外面に黒漆が残っている。また（19～21）は外面に朱漆による文様が一部残存している。(23）は内外面ともに朱漆が残っている。皿である可能性がある。

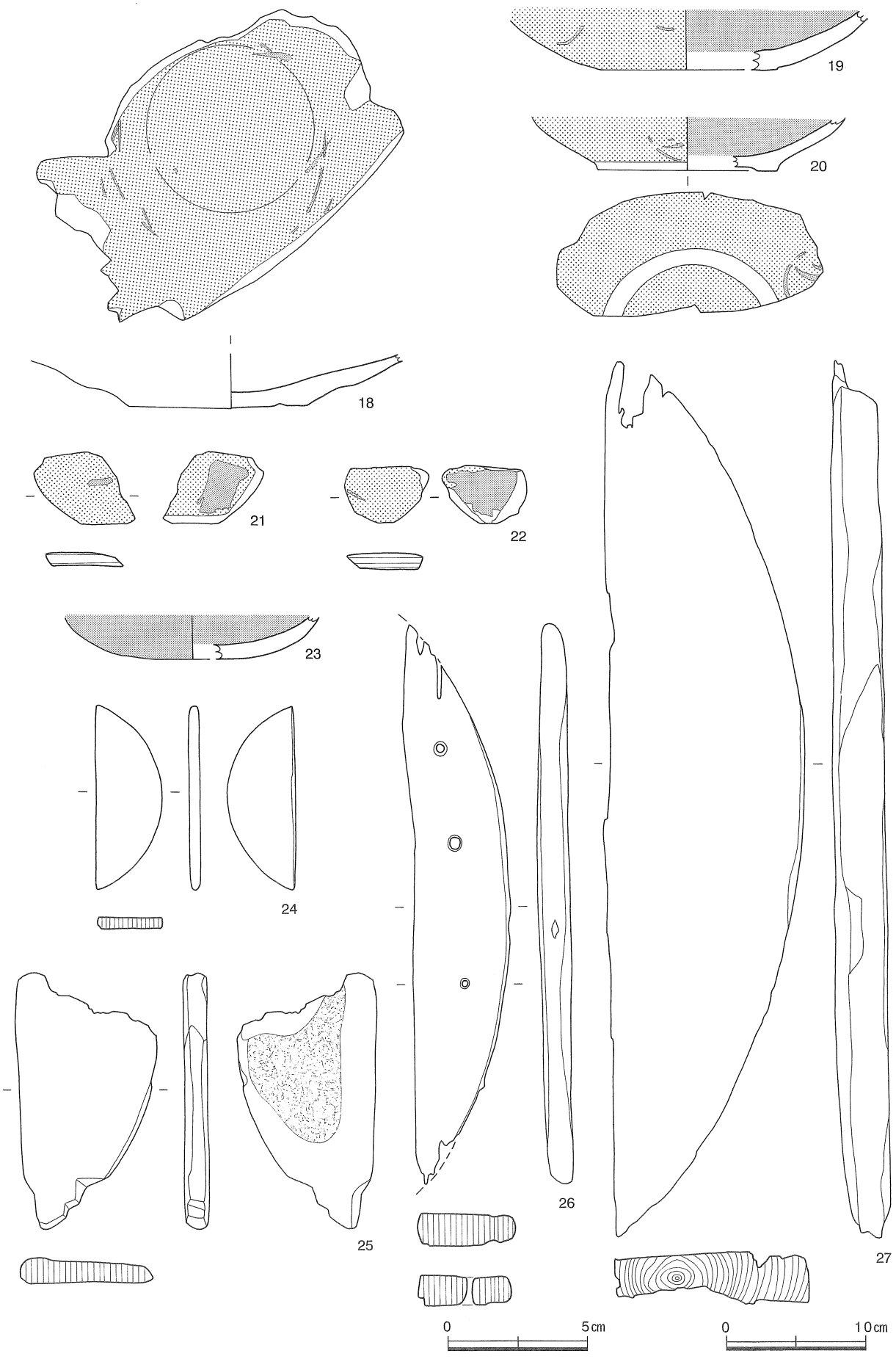
曲物　(24～26）は曲物の底板である。(24）は直径が７cm程度の小型のもので、柄杓の部材である可能性がある。(25・26）は１cm程度の厚さを持つ頑丈なもので直径も30cm程度になると考えられる。(25）は末端が削られたうえ、広くこげている。底板から転用されたうえ、最後は燃料として用いられたのだろうか。(26）は側面に側板を固定する木釘の痕跡と思われる穴が残っている。また、別のものへ転用された痕跡であろうか表裏を貫通する２～３cmの穴が３ヶ所あけられている。

桶　(27）は桶の底板である。板に加工された心持ち材を用いている。直径70cm程度になる大型のもので、組み合わせられた複数枚の、もっとも外側にあたる一枚である。

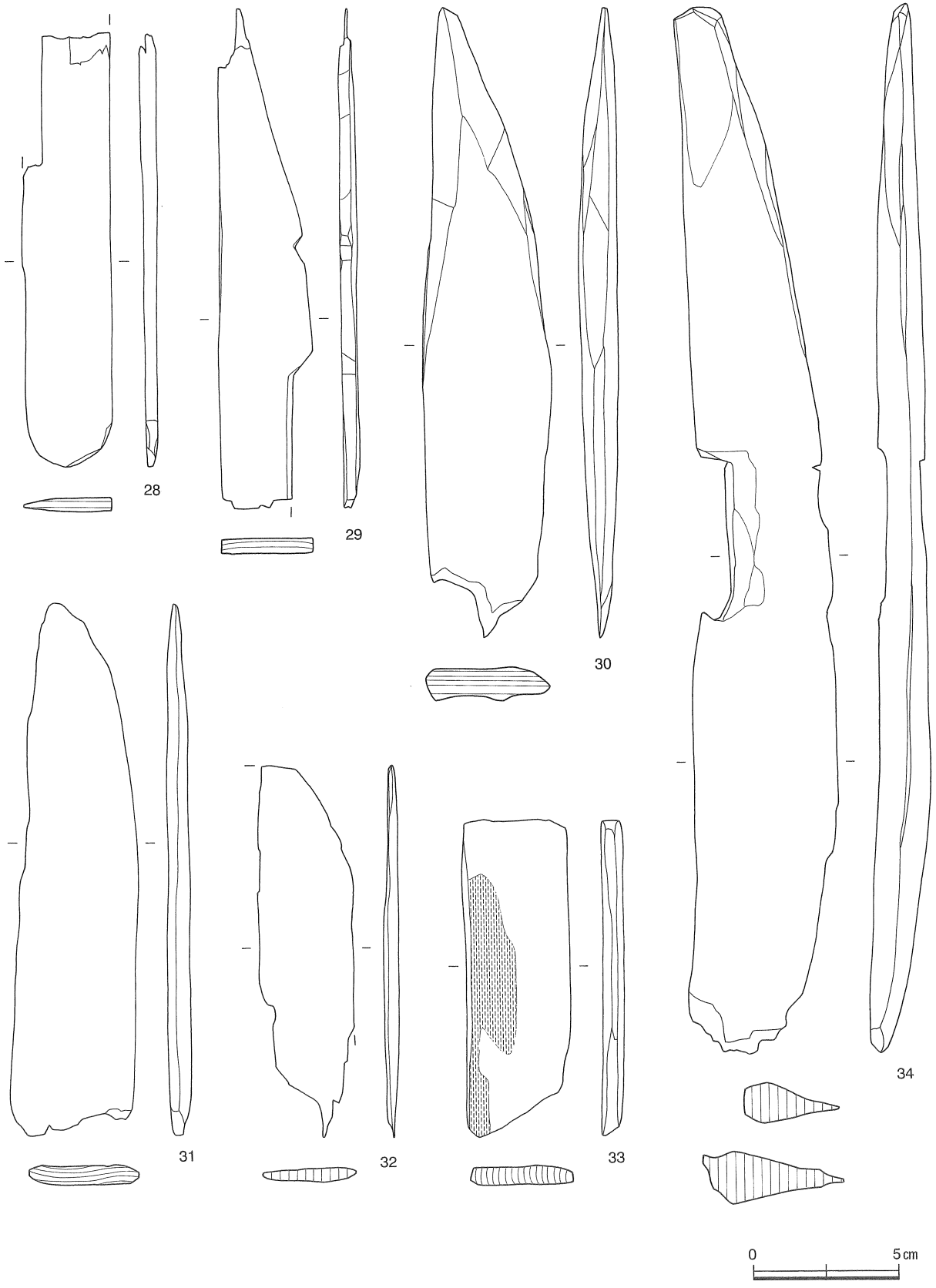
板材　用途が定かでないものには板状・棒状のものがある。(28～35・44～51）が板材、(36～43）は棒



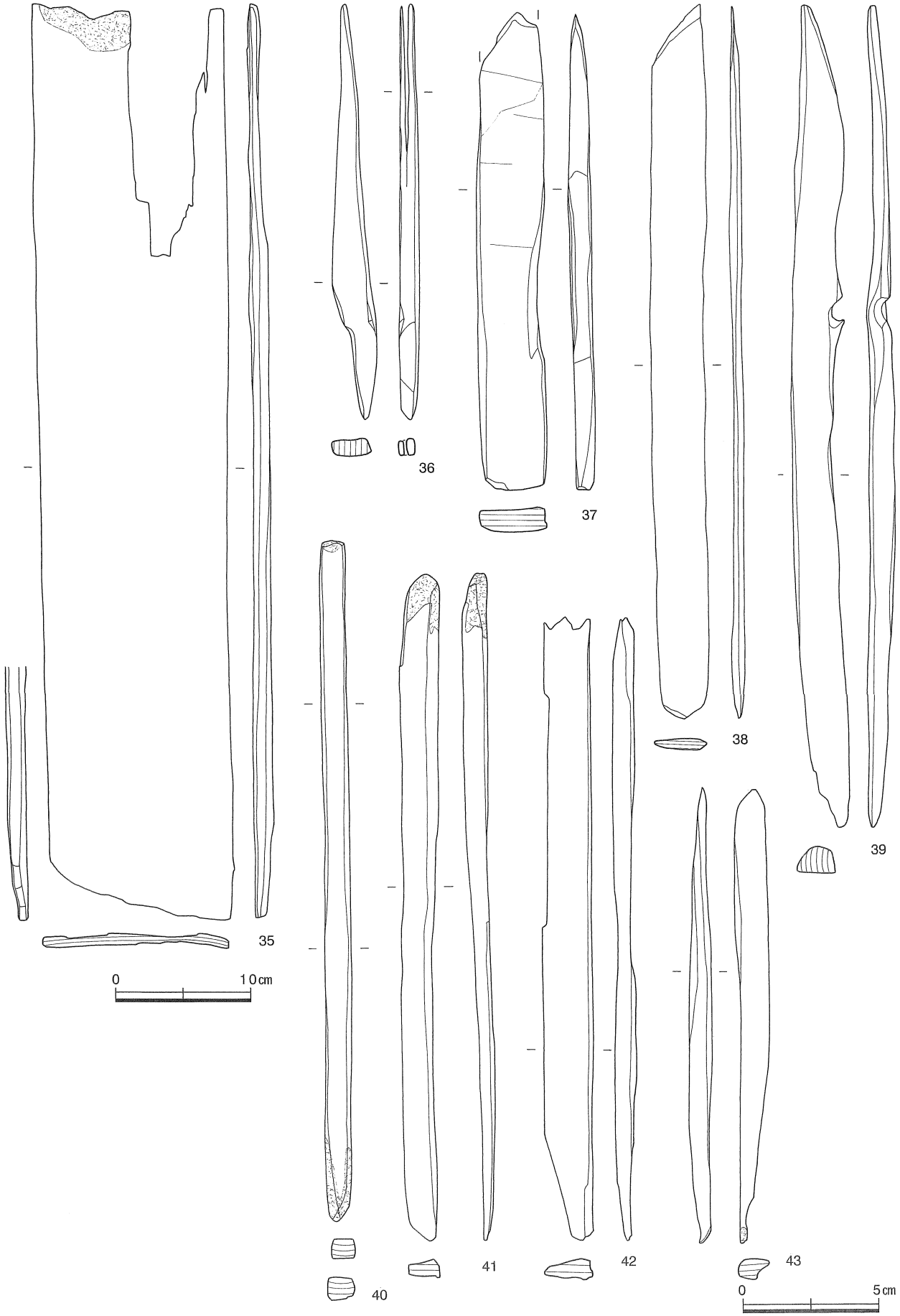
第72図　出土遺物実測図18(木製品１)



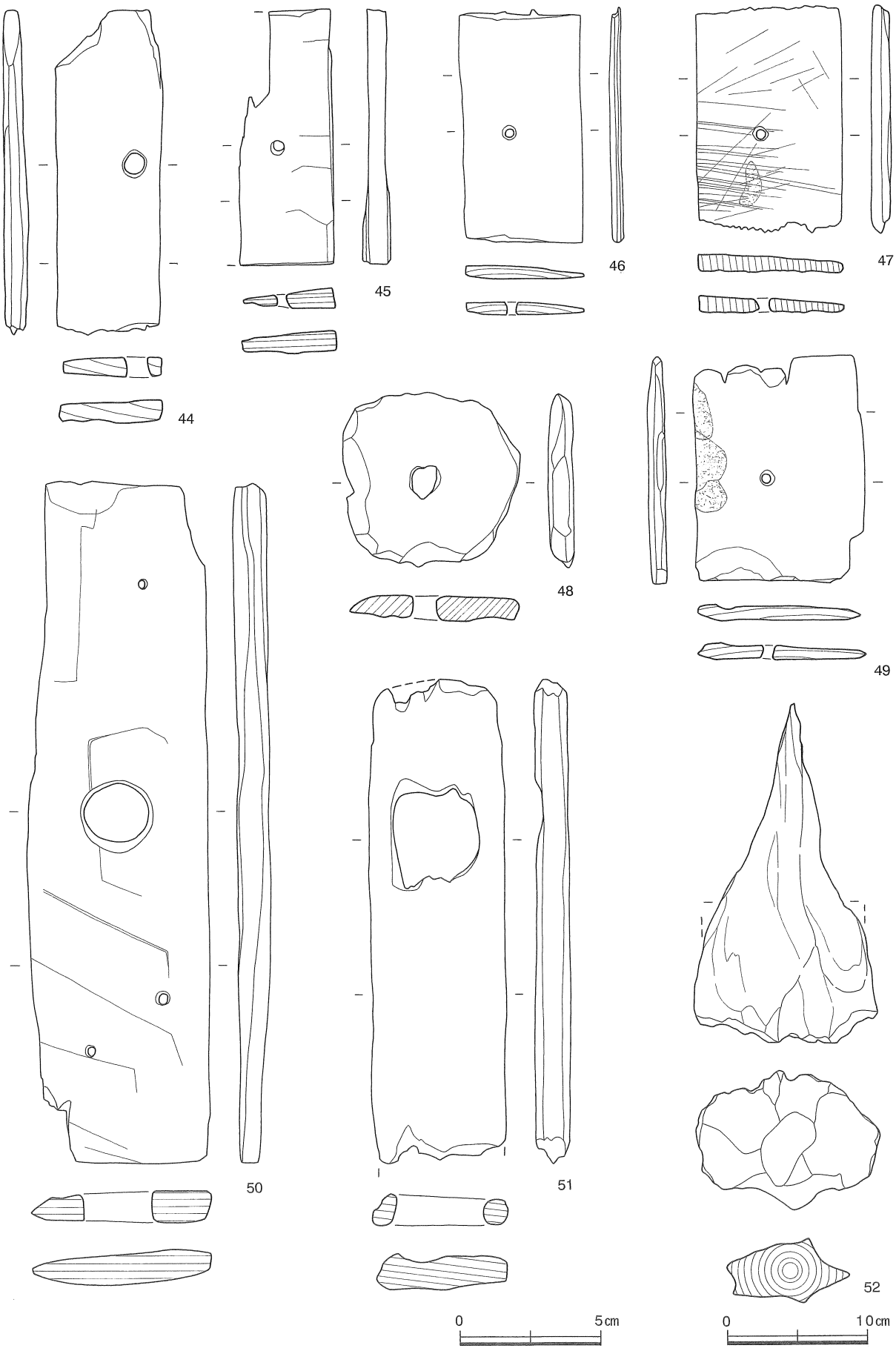
第73図　出土遺物実測図19(木製品２)



第74図　出土遺物実測図20(木製品３)



第75図　出土遺物実測図21（木製品４）



第76図　出土遺物実測図22（木製品５）

状板材である。板材の中には大きなものから割り取る、あるいは削り取られたもの（28～33）、何らかの部材の一部であるもの（34・44～51）がある。前者は建築材などが、畔の土留として手頃な大きさに再加工されて持ちこまれたものと思われる。後者は、その形自体が何らかの目的をもつものだろう。（34）は側縁にいくにしたがって薄くなる三日月状の板であるが、中央付近に長方形状の抉りがある。元来、中央に長方形の穴があけられた長楕円の部材であったものが、木目に沿って欠損していると考えられる。（44～47・49）は長方形～正方形の板材のほぼ中央に直径４～９㎝の穴を１ヶ所あけたものである。（48）は円形に削り出された板材の中央に直径1.0～1.2㎝前後の穴をあけるものである。これらの用途も判然としないが、木釘等を介して他の部材と連結していたのであろうか。（50・51）はやや大きく厚い長方形の板材に円形・矩形の穴をあけるものである。（50）には別に小孔３ヶ所あけられている。

棒状板材には、当初から棒状を指向したであろうもの（40）、箆状のもの（38）、板材から割り取られることによって棒状になったであろうもの（36・37・39・41～43）がある。

柱根　（52）は唯一下層遺構で出土されたもので、SP251から出土した柱根である。底部から８センチほどがしっかり粘土の中に埋まっており、痛みが少なくどっしりした感がある。

⑶　金属製品

銭貨を除いたその他の金属製品は56点出土した。大半がＥ区からの出土であることは、Ｅ区の東側に営まれている戦国期以降の集落（静岡市調査区）から混入したことを示しているのだろうか。

鏃　（１）は定角形の鉄鏃である。茎は半ばから先端にかけて欠損している。

釘　（２～８）は釘で、そのうち（２・４・６～８）は角釘である。（３）は基部両端が脚部となる合釘である。（５）は形状などから最近のものと思われる。

鉄砲玉　（10～33）は鉄砲玉である。直径は1.0～1.3㎝と若干の大小があるが、1.2㎝程度のものが比較的多い。重量は７～９ｇ台（概ね２匁～２匁半）が主体となる。

火箸　（34）は長さが概ね20㎝の金属棒であるため、火箸に類するものと判断した。

小柄・刀子　（35～37）は小柄あるいは刀子である。（35・36）は柄が残っているが先端部は欠損している。一方（37）は刃部のみの破片である。

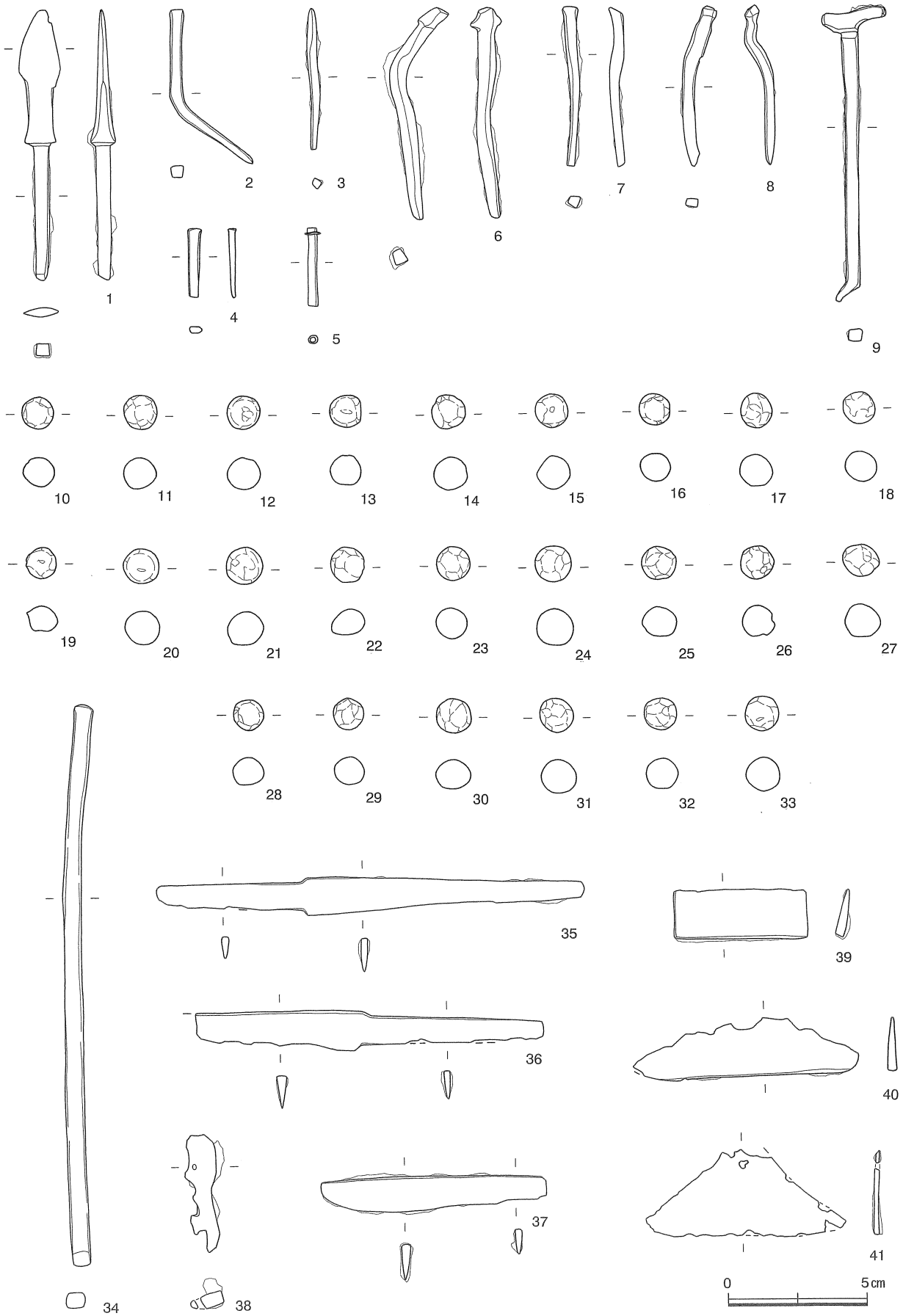
火打ち金　（39～41）は火打金である。短冊形のものと山形のものがある。（39）は短冊形をしている。（40）は山形をしており、頂上部に穴が開いている。（41）も山形であると思われる。木製の持ち手に挟み込んで使われる例がよく知られているが、（41）などは紐などを穴に通して携帯していたのであろうか。

キセル　（42～46）はキセルの雁首、（47～53）は吸口である。（42）は火皿窓があり、火皿補強帯が付く。脂返しの湾曲が大きく、肩付のところで折れていると思われる。（46）は火皿補助帯がつくが、肩付がはっきりとあるようには見えない。（42）よりやや後出するものだろう。（43～45）は（46）よりさらに後出するものである。（45）は金象嵌が施されている。同様に象嵌が施される吸口の（47）と対になると思われる。他の吸口はいずれも肩付がない。したがって、（42・46）あたりと対になるものはないことになる。

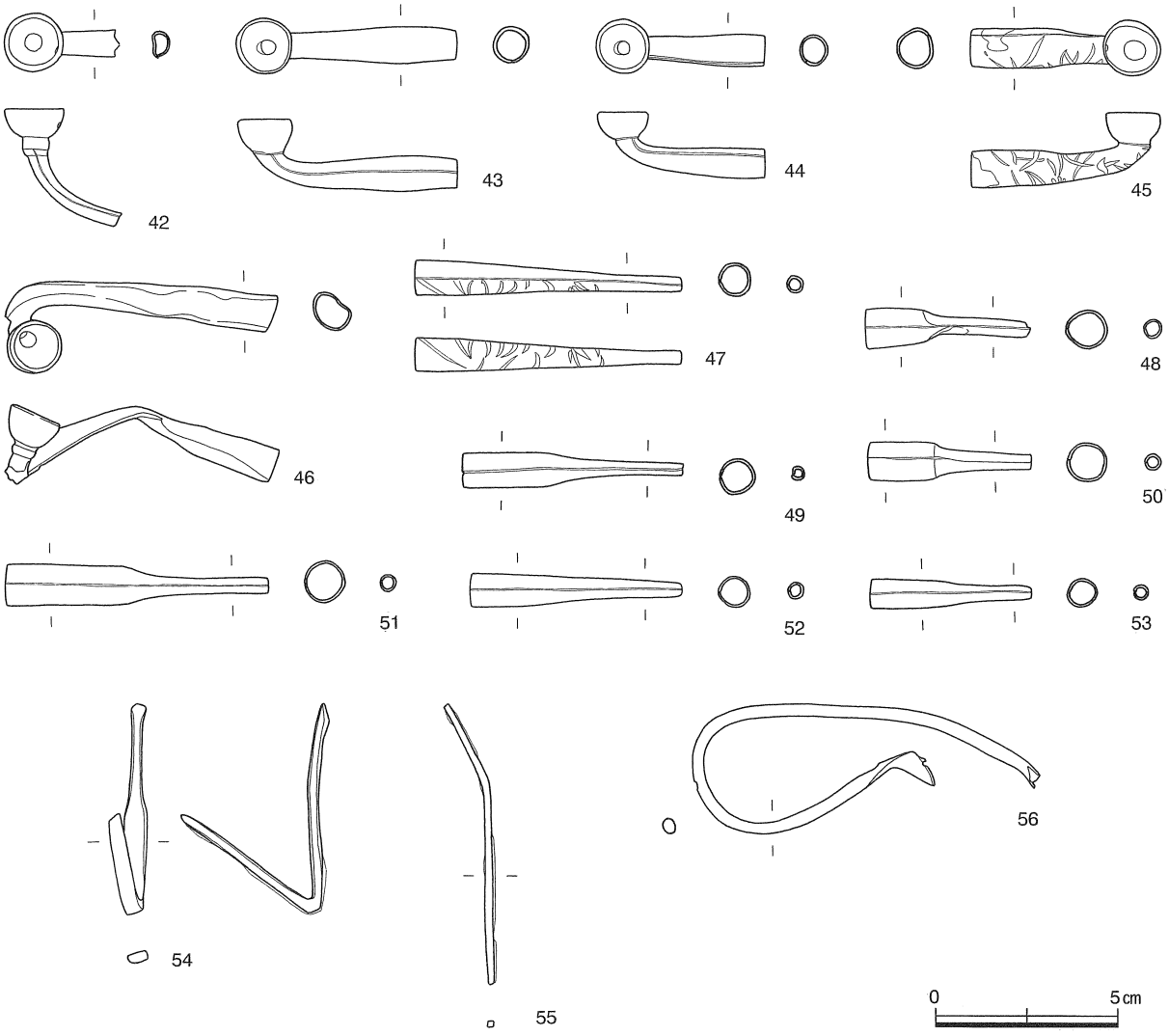
水田からキセルが出土する例は、静清バイパス関連の調査等でも恒常的にみられる。農村での喫煙は贅沢であるとして当時の法度によって規制されていることからも、農村部への喫煙風習はかなり浸透していたものと考えることができる。

こうがい　（54・55）は銅製の細い棒状のものであり、こうがいあるいはかんざしの一部と考えられる。

不明鉄製品　（９・38・56）は用途不明品である。（９）は基部断面が方形をしており、基部下端は尖っているが曲がっている。基部上端には半分に欠けたリング状の部品が付いている。（56）は土瓶などの弦と思われるが定かでない。



第77図　出土遺物実測図23(金属製品１)



第78図　出土遺物実測図24（金属製品２）

⑷　銭貨

出土した銭貨は26点であった。内訳は、唐銭１点・北宋銭12点・南宋銭１点・明銭１点・無文銭１点・寛永通寶10点である。出土状況から、いずれも遺失物や流れ込んできたものとみられる。

開元通寶（１）は鋳上がりが悪く字の彫りが浅い箇所があり、直径も小さく薄肉・背の輪幅も不均一のため、模鋳銭と思われる。

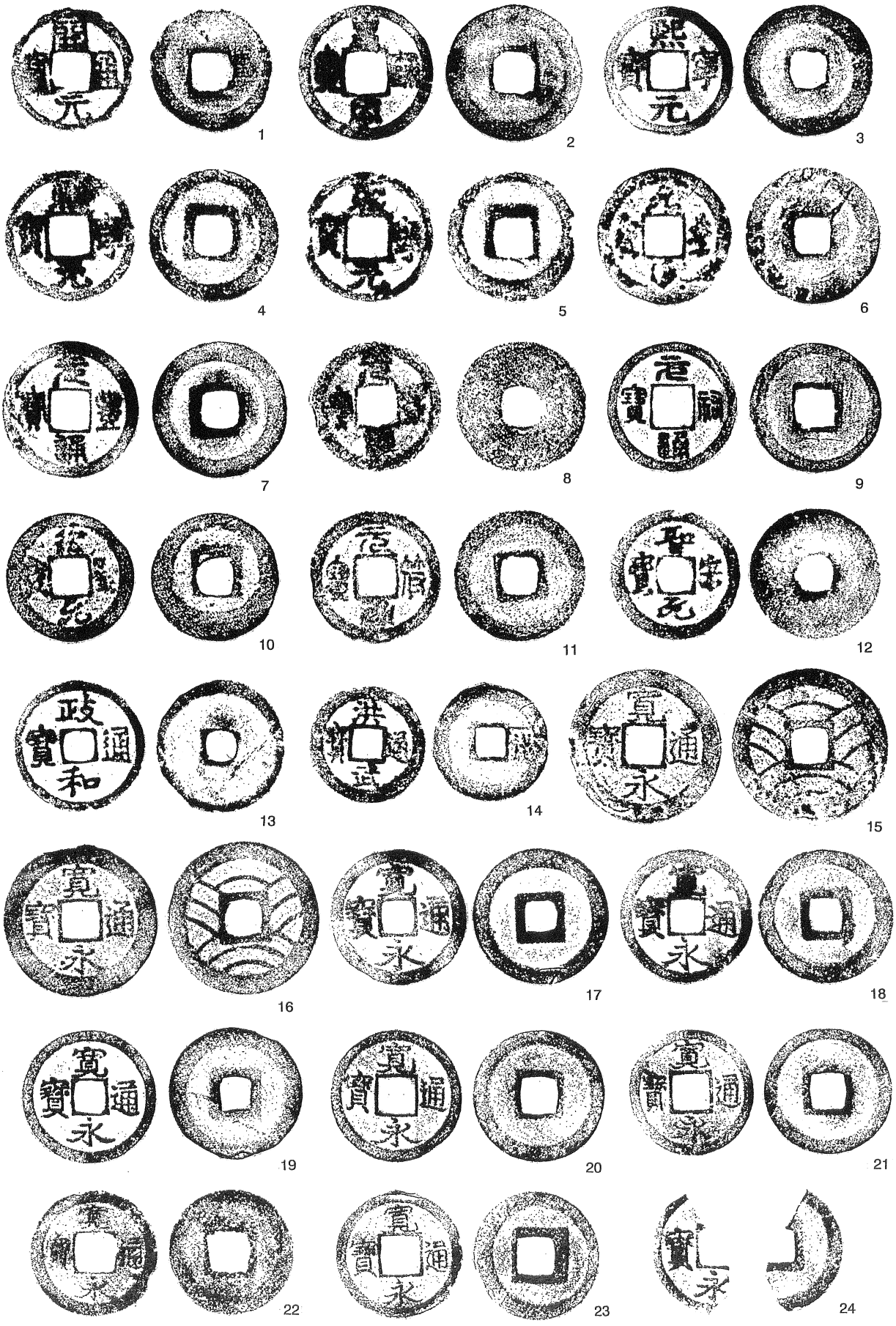
熙寧元寶（３）は穿の角２箇所に鋳バリが残り、面の郭の一部が削れている。直径がやや小さめのため、模鋳銭の可能性がある。

元豊通寶（８）は、畦上から出土した。背の輪と郭が不明瞭で、薄肉である。面の郭は明瞭だが穿が丸くなっており、模鋳銭とみられる。

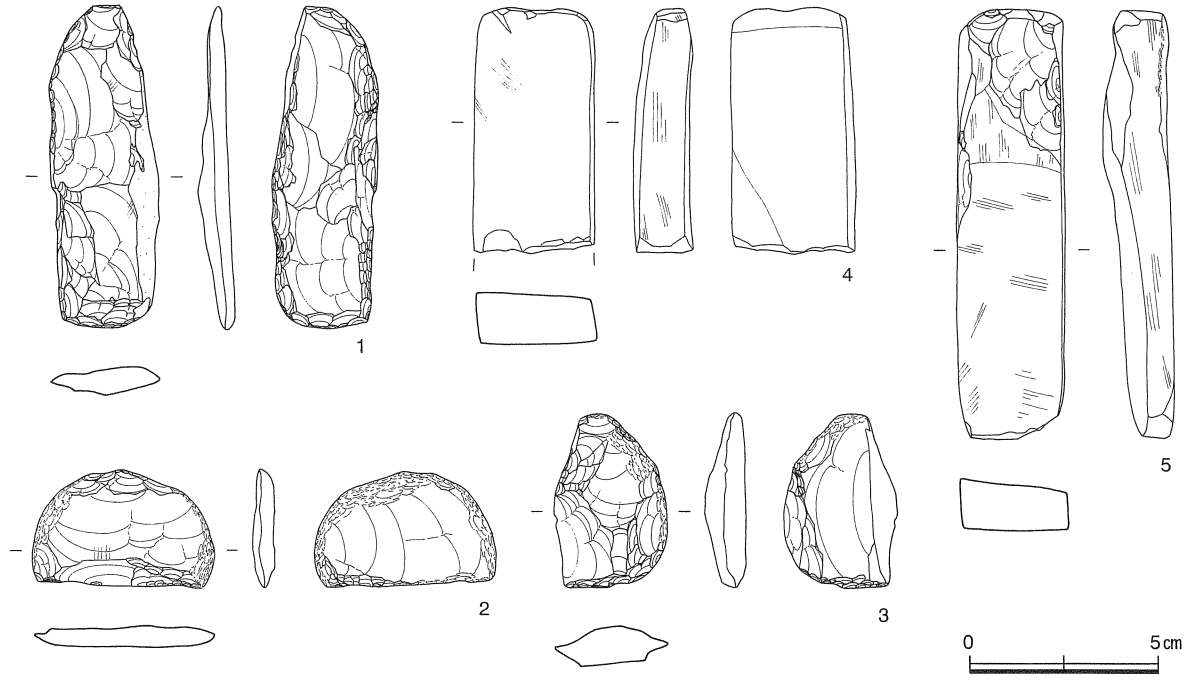
紹聖元寶（10）は、背の輪幅が不均一である。面の郭は比較的明瞭だが穿は丸みを帯びて鋳バリが残っている。

聖宋元寶（12）は、水田検出面から出土した。背の輪と郭が不鮮明な上、輪幅が不均一である。面の郭が削れ穿が丸くなっており、模鋳銭と思われる。

洪武通寶（14）は、背に「一銭」の文字が入っている。直径が21.3㎜と小さいが、字も郭も鮮明で肉厚なため、模鋳銭ではなく小型の本銭であると思われる。



第79図　銭貨拓影



第80図　出土遺物実測図25（石器・石製品）

（25）は、風化して残存状態が悪く図には掲載していないが、文字の配列から咸淳元寶（南宋・1265年初鋳）であると思われる。

無文銭は、水田面から出土した。大変薄く、直径19.0㎜の円形の中心に一辺８㎜の方孔がある。無文銭は、通貨の流通量不足を補うために、佐渡・石見銀山・堺・森大門・原川・高根城などで鋳造されていたことがわかっている。渡来銭から何度も鋳写を繰り返して鋳造されるうちに、小型・薄手化して銭文等が消滅してしまった銭である。東北地方などでは出土例も多く通用銭として民衆に広く認知されていたようであるが、県内の出土例はほとんどなく流通量はあまり多くはなかったとみられている。どこで鋳造されたものかは不明だが、16世紀後半のものと考えられる。

寛永通寶は、古寛永（17・18・19・24）・新寛永（20・21・22・23）・四文銭（15・16）が出土した。いずれも銅銭である。

古寛永（18）は、畦上から出土した。古寛永（17・19）と新寛永（21）は検出面から出土している。そのうち、（17）は背面に平研ぎの痕が見られる。新寛永（23）の背面にも平研ぎの痕がある。

出土した26点のうち、12点（1・3・4・5・7・10・8・13・18・20・21・22）は被熱している。被熱の具合から、いずれも、火災のような高温の火ではなく比較的低温の火を受けていると見られる。静岡市による西側隣接区の調査では、集落跡とともに中近世の火葬墓および火葬の跡が検出されているため、被熱した銭貨は、あるいは住居域または火葬場所等から流れ込んだものであるとも考えられる。

⑸　石器・石製品

石製品は５点出土している。縄文時代のものと思われる打製石器３点と、江戸時代の砥石２点である。縄文時代の打製石器については、同時代の遺構や土器が出土していないので、その出自は明確でない。ただし、小瀬戸谷の入り口にある養源山遺跡や第３章で報告する栗ヶ沢遺跡の事例からも明らかなように、近接する丘陵部には縄文時代の遺跡が点々と分布しているので、これらの生活の影響が低湿地まで及んでいたことは想像に難くない。

打製石斧　（１）はＤ区Ｇ２グリッドの掘削土中から出土した。表面の一側縁に原礫面を残すことから

も、手頃な円礫から割り取った剥片が素材になっていたことが分かる。調整は表裏に及んでいるが、全体的に側縁から大きく調整した後に刃部と縁辺を細かく作り出している。

スクレイパー　（２）はＥ区Ｅ２グリッドの畦上から出土した。折れた打製石斧の先端部を転用したものと思われ、折れ面の一部にも細かな調整を施している。（３）はＥ区Ｅ１グリッドの掘削土中から出土した。これも（２）と同様に打製石斧の折れた先端部を再加工したものと思われる。周囲を打ち欠いて刃部を作る。

砥石　（４）はＥ区Ｇ３グリッドの検出面から出土した。短冊形の持ち砥石で、下部は欠損している。表裏面・側面共に使用されている。裏面は、研ぎ減りにより砥面がやや波打っている。目の細かい仕上げ用の砥石である。（５）はＣ区Ｊ４グリッドの検出面から出土した。短冊形の持ち砥石である。表裏面・側面共に使用されている。表面及び裏面は研ぎ減りにより砥面が波打っている。（４）と同じく、仕上げ用として用いられたものであろう。いずれも、江戸時代の物であると思われる。

第５表　土器・陶磁器観察表

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
1	土師器 甕	Ⅲ類	遠江系	8～9C	E	F2	SH1　掘削土中 整地層	(18.8)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR8/4浅黄橙色	口縁部1/15強 体部一部
2	土師器 台付き 甕？	Ⅲ類	遠江系	8～9C	E	G2	SH1　SP8 灰色粘土層				胎土　1㎜以下の細砂、3㎜大の礫含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明　頸部径(20.8cm) 色調　10YR7/3にぶい黄橙色	体部一部
3	土師器 壺	Ⅲ類			E	G2	SH1　SP194 灰色粘土層				胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、外面ハケ目 色調　10YR8/3浅黄橙色	頸部1/12
4	須恵器 瓶		湖西	8～9C	E	F2　G2	SH1　SP9 掘削土中 検出面　風化礫 混灰色粘土層				胎土　1㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　外面ヘラ削り、内面に墨付着、櫛目有り、肩部と体下部接合点無し 色調　5Y6/1灰色　2.5Y6/1黄灰色	肩部1/7強 体下部1/10強
5	土師器 甕	Ⅲ類			E	G2	SH1　SP192 灰色粘土層				胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	体部一部
6	土師器 坏				E	G2	SH1 掘削土中		(8.2)		胎土　2㎜大の細砂、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　10YR6/3にぶい黄橙色	体部一部 底部1/14
7	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	G2	SH1付近 SP201 灰色粘土層		(4.6)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、底部外面ハケ目有り、内面整形痕有り 色調　10YR7/2にぶい黄橙色	底部1/4弱
8	灰釉陶器 長頸瓶	K-14 併行	猿投	9C前	E	G2	SH1 掘削土中	(6.8)			胎土　1㎜以下の白色粒子含む 焼成　良好 調整　全体に降灰釉付着 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉7.5Y5/2灰オリーブ色	口縁部1/13
9	灰釉陶器 長頸瓶	K-14 併行	猿投	9C前	E	G2	SH1 掘削土中 灰色粘土層	(10.0)			胎土　長石を含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　全体に降灰釉付着 色調　素地2.5Y8/1灰白色 釉7.5Y5/2灰オリーブ色	口縁部1/11
10	灰釉陶器 碗	K-90 併行	猿投	9C後	E	F2　G2	SH1　SP15 SF6　掘削土中 検出面 整地層	(13.7)	(6.5)	3.9	胎土　1㎜大の礫含む 焼成　良 調整　底部ヘラ削り後ナデ、内面降灰釉付着 色調　2.5Y8/1灰白色　釉5Y5/3灰オリーブ色	口縁部一部 体部～高台部1/5
11	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	G2	SH1 検出面		(7.6)		胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削りかナデ、内面釉付着 色調　素地断面5Y7/1灰白色 釉5Y6/3オリーブ黄色	体部一部 高台部1/5
12	灰釉陶器 碗	O-53 併行	助宗	10C初	E	F1　G2	SH1 土手状遺構1 掘削土中 検出面		4.6		胎土　4㎜大の礫含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明、底部糸切り後ナデ？、貼り付け高台、内面重ね焼き痕？ 色調　5Y6/2灰オリーブ色	体部一部 高台部2/3
13	灰釉陶器 碗	O-53 併行	旗指	10C初	E	E2　G2	SH1 土手状遺構1 掘削土中 整地層 灰色粘土層	(13.5)	6.8	4.9	胎土　2㎜大の長石含む 焼成　良 調整　底部糸切りヘラ削り後ナデ、外面下部ヘラ削り 色調　7.5Y7/1灰白色 釉(剥離？)2.5Y8/2灰白色	口縁部1/5 体部1/2 高台部完形
14	灰釉陶器 広口瓶	K-14 併行	猿投	9C前	E	E2　F3 G2 D3	SH1のSP11 SH3のSP39 SR8　灰色粘土層　整地層　検出面　直上層 黒色粘土層　掘削土中				胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面ヘラ削りか？、内外面釉がかかる 色調　素地5Y7/1灰白色 釉10Y4/2オリーブ灰色	胴部一部破損1/6
15	灰釉陶器 長頸瓶	O-53 併行	助宗	10C初	E	G2	SH1　整地層 掘削土中 灰色粘土層 道状遺構4		(12.4)		胎土　黒斑多少有り 焼成　良好 調整　外面と底部ヘラ削り、裏面にヘラ記号 残存貼り付け高台 色調　5Y7/1灰白色	体下部～高台部1/6

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
16	糸切り碗	K-90併行	東遠系	9C後	E	G2	SH1 検出面		(7.0)		胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　不良 調整　内外面摩耗の為不明 色調　2.5Y6/1黄灰色	体部わずかに残存 底部1/8
17	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	G2	SH1 掘削土中		(5.0)		胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　不良 調整　内外面摩耗の為不明 色調　2.5Y7/1灰白色	体部一部 底部1/5
18	山茶碗	Ⅲ-1	東遠系	13C前	E	G2　F2	SP189 整地層 灰色粘土層	(14.0)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　10Y6/1灰色	口縁部1/11 体部一部
19	小碗	I-2	金谷・島田	12C前	E	G2　F2	SH1 掘削土中		(4.1)		胎土　2㎜以下の白色粒子含む 焼成　良 調整　貼り付け高台、スノコ痕 色調　10Y7/1灰白色	体下部1/8 高台部完形
20	土師器甕		遠江系	8～9C	D	G2	SH2 掘削土中 (整地層)				胎土　6㎜大の礫、白色微細粒子含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	口頸部1/6
21	土師器甕				E	G2	SH2　SP30 風化礫混 灰色粘土層	(17.4)			胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR8/3浅黄橙色	口縁部1/10強
22	土師器甕				E	G2	SH2　SP33 灰色粘土層				胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 色調　内面7.5YR8/4浅黄橙色 外面10YR8/3浅黄橙色　断面N6/　暗灰色	頸部～体部一部
23	灰釉陶器碗	K-90併行	助宗	9C後	E	G2	SH2 検出面 灰色粘土層	(15.4)			胎土　3㎜大の礫、1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　内外面釉がかかる(つけがけしているが発色していない) 色調　素地5Y7/1灰白色　釉5Y7/2灰白色	口縁部～体部1/16
24	灰釉陶器碗	K-90併行	助宗	9C後	E	E2　F2 G2	SH2　SP236 SP281　検出面 掘削土中　整地層　灰色粘土層 (直上) 道状遺構1	(14.2)			胎土　緻密、1㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面灰釉ハケ塗り(発色していない？) 色調　素地7.5Y7/1灰白色　釉2.5Y5/1黄灰色	口縁部1/8
25	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	D E	G2	SH2 掘削土中 灰色粘土層 道状遺構6	(12.2)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　内面灰釉付着、外面灰釉ハケ塗り 色調　内面5Y6/1灰色　外面5Y8/1灰白色	口縁部1/6 体上部1/5
26	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	G2	SP281 整地層 灰色粘土層		(5.4)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　体部5Y8/1灰白色　底部6Y6/1灰色	体部1/4 底部1/3
27	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	G2	SH2 検出面		(4.8)		胎土　長石わずかに含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕 色調　5Y7/1灰白色	体部一部 底部7/8
28	灰釉陶器碗	O-53併行？	東遠系	10C初	D	G2	SH2 礫混灰色粘土層				胎土　緻密、1㎜以下の長石含む 焼成　良 調整　高台部欠損、内面重ね焼き痕？ 色調　2.5Y7/1灰白色　底内面5PB4/1暗青灰色	体部一部 底部1/5
29	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	G2	SH2　SP238 灰色粘土層		(5.2)		胎土　長石、4㎜大の礫含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y8/1灰白色	体部1/8 底部1/8
30	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	G2	SH2　SP232 整地層		(6.0)		胎土　1㎜以下の細砂含む、黒斑有り 焼成　不良 調整　摩耗の為不明 色調　5Y6/1灰色	底部1/5
31	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	G2　F2	SH2 整地層 検出面		(4.8)		胎土　1㎜以下の白色粒子含む、黒斑少量有り 焼成　良 調整　貼り付け高台 色調　N7/　灰白色　10YR2/1黒色	体下部1/4 高台部1/2
32	伊万里染付筒形鉢(筆筒)		伊万里	18C	E	G2	SH2 整地層直上 検出面 道状遺構2		(6.8)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面底部施釉無し、外面に染付、内面自然降灰釉付着 色調　5GY8/1灰白色　染付10BG4/1暗青灰色	体下部1/10 底部1/13

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
33	弥生土器？			弥生？	E	F2	SH3付近SP180 灰色粘土層				胎土　1～2㎜大の細砂、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　内面5YR6/8橙色 外面2.5Y4/6オリーブ褐色	体部一部
34	清郷甕			10～11C	E	F2	SH3付近SP177 灰色粘土層				胎土　長石、石英、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面沈線を横位に付けている 色調　内面10YR6/3にぶい黄橙色 外面7.5YR5/6明褐色	体部一部
35	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G2	SH3　SP41 検出面 整地層		(7.6)		胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　底部糸切り後一部ナデ 色調　2.5Y7/1灰白色	体下部わずかに残存 高台部1/3
36	山茶碗	Ⅱ	東遠系	12C後	E	F2	SH3　SP39 検出面		(7.0)		胎土　長石、2.5㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部糸切り後一部ナデ、高台部欠損、貼り付け高台 色調　内面N6/　灰色	体部一部 高台部2/3
37	土師器 碗	K-14 ～ K-90 前半		9C前 ～ 9C後	E	F2	SH4　SP50 整地層		(6.0)		胎土　1㎜以下の白色粒子をわずかに含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明、貼り付け高台 色調　内外面5Y8/1灰白色　底外面N6/　灰色	体下部1/8 高台部1/4
38	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	SH4 掘削土中 (整地層)		(6.0)		胎土　1㎜以下の白色、黒色粒子含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　5Y8/1灰白色	体下部1/8 高台部1/6
39	土師器 碗	K-14 ～ K-90 前半		9C前 ～ 9C後	E	F2	SH4 掘削土中 灰色粘土層		(6.0)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　5Y7/1灰白色	高台部1/8
40	瀬戸焼 鉄釉天目 茶碗	登5か 登6	瀬戸	18C前	E	E2　F2	SH4　SP51 掘削土中 整地層	(12.2)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面鉄釉がかかる、外面一部曜変 色調　素地5Y7/1灰白色　釉5Y2/1黒色	口縁部1/26 体上部1/7
41	灰釉陶器 碗	K-90	助宗	9C後	E	F2	SD13 SH5 整地層		(7.8)		胎土　緻密、長石含む 焼成　良 調整　内外面灰釉付着 色調　5Y6/1灰色	体下部わずかに残存 高台部1/3
42	須恵器	K-90 併行	東遠系	9C中	E	E2	掘削土中 道状遺構1		(15.4)		胎土　2㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、貼り付け高台 色調　2.5Y7/2灰黄色	体下部1/15 高台部1/8
43	灰釉陶器 皿	K-90 併行	助宗	9C後	E	E2	掘削土中 道状遺構1		(7.4)		胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　良 調整　貼り付け高台 色調　2.5Y7/1灰白色	体部一部 高台部1/8
44	小碗		東遠系		E	E2	灰色粘土層 道状遺構1	(7.8)			胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内面降灰釉付着 色調　N6/　灰色	口縁部1/8 体部一部
45	土師器 坏			古墳時代？	E	G1	掘削土中 道状遺構2	(13.2)			胎土　3㎜以下の礫、白色細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR8/4浅黄橙色	口縁部～体部1/7 体下部一部
46	土師器 甕				E	G1	SP213 黒色粘土層				胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　内面10YR6/3にぶい黄橙色 外面2.5Y7/3浅黄色	体部上半一部
47	須恵器 坏蓋			9C前	E	G2	掘削土中 道状遺構2	(13.0)			胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　N7/　灰白色	口縁部1/11 体部一部
48	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	G1	掘削土中 道状遺構2		(7.0)		胎土　長石含む 焼成　良 調整　貼り付け高台 色調　2.5Y8/2灰白色	体部一部 高台部1/3
49	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	助宗	9C後	E	F1　F2 G2	SP166 整地層 黒色粘土層				胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　外面灰釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉7.5Y5/3灰オリーブ色	胴部1/5

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
50	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	F2	道状遺構2付近 掘削土中		(5.6)		胎土　1㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り、炭化物付着 焼成　良 調整　底部糸切り痕 色調　N7/　灰白色	体部一部 底部1/4
51	灰釉陶器 輪花小碗		東遠系	11C後	E	G2	整地層 道状遺構2	(11.8)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　5Y7/1灰白色	口縁部1/12 体部一部
52	山茶碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	F1　F2	整地層 検出面 道状遺構2		7.3		胎土　微細の黒色・白色粒子含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台、スノコ状圧痕、内面重ね焼き痕 色調　7.5Y6/1灰色	体下部一部 高台部完形
53	白磁 菊花紋 合子蓋		中国 越州窯系	12C	E	F2　F3	土手状遺構1 道状遺構2付近 掘削土中 整地層	(5.4)		1.85	胎土　緻密 焼成　良好 調整　型造り 色調　素地7.5Y8/1灰白色　釉(濃)5GY6/1オリーブ灰色　釉(薄)5GY7/1明オリーブ灰色	天井部1/4 口縁部1/15 体下部1/5
54	山茶碗	Ⅱ-2 ～ Ⅲ-1	東遠系	12C末	E	G2	整地層 道状遺構4		(6.2)		胎土　微細～2㎜大の黒色粒子、1㎜以下の白色粒子含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台、スノコ状圧痕、内面重ね焼き痕、降灰釉剥離？ 色調　5GY6/1オリーブ灰色	体下部1/4 高台部1/3
55	灰釉陶器 皿	O-53併行	助宗	10C初	E	G2　F2	掘削土中 灰色粘土層 道状遺構5		6.1		胎土　5㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、内外面灰釉ハケ塗り(発色していない？剥離している？) 色調　5Y7/1灰白色	体下部わずかに残存 高台部完形
56	灰釉陶器 長頸瓶	K-14併行	猿投	9C前	D	G2	礫混灰色粘土層 道状遺構6				胎土　緻密、長石含む、わずかに黒斑有り 焼成　良好 調整　内面灰釉がかかる、外面灰釉剥落 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉10Y6/2オリーブ灰色	瓶の背部分1/5
57	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	E2	SD11 灰色粘土層	(22.6)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y8/2灰白色	口縁部1/16
58	土師器 坏？			9C前	E	E2	SD11 灰色粘土層		(4.2)		胎土　2㎜以下の細砂、白色粒子含む、黒斑多数有り 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　内面10YR6/3にぶい黄橙色 外面5YR5/4にぶい赤褐色	体下部1/6 底部1/4
59	灰釉陶器 碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	E2	SD11 灰色粘土層		(7.8)		胎土　緻密、長石含む 焼成　良好 調整　底部中心糸切り痕、周辺ヘラ削り？ナデ？内外面灰釉ハケ塗り 色調　素地5Y7/1灰白色　釉10Y5/2オリーブ灰色	体下部わずかに残存 高台部1/4
60	土師器 坏			9C後	E	E2	SD12 灰色粘土層		(5.2)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　7.5Y4/1灰色	底部1/3弱
61	土師器			8～9C	E	F2	SD13 灰色粘土層				胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　外面ハケ目　体部径(18.8cm) 色調　10YR8/3浅黄橙色	体部一部
62	灰釉陶器 長頸瓶	K-14併行	猿投	9C前	E	F2	SD13 掘削土中 整地層				胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　外面灰釉がかかる、上部一部に釉の無い部分あり 色調　素地5Y7/1灰白色　釉5Y5/2灰オリーブ色	頸部1/5
63	灰釉陶器 碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	F2	SD13 整地層		6.0		胎土　1㎜以下の長石、1㎜大の礫含む、わずかに黒斑有り 焼成　良 調整　底部糸切り痕、内面重ね焼き痕 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉(剥離？)7.5Y7/1灰白色	体下部1/3 高台部完形
64	灰釉陶器 碗	O-53併行	助宗	10C初	E	F2	SD13 整地層		(6.7)		胎土　1㎜大の細砂、長石含む 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　5Y7/1灰白色	高台部1/6

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
65	灰釉陶器 碗	K-90 併行	助宗	9C後	E	F2	SD14 掘削土中		(8.6)		胎土　緻密、1㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、貼り付け高台、高台部欠損、内面自然釉付着 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉10Y6/2オリーブ灰色	体下部1/8 底部1/4弱
66	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	SD15　溝中？ 灰色粘土層		(6.0)		胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　5Y7/1灰白色	体下部1/4 高台部1/2弱
67	土師器 蓋				D	G2	SD17　溝中 覆土中	(16.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　5YR7/3にぶい橙色	口縁部～体上半部1/16
68	灰釉陶器 碗	K-90 併行	助宗	9C後	E	G2	SD21 灰色粘土層 (整地層直上)	(16.0)			胎土　1～2㎜の長石、1.5㎜の細砂含む 焼成　良 調整　外面下半部ヘラ削り、内外面釉がかかる(つけがけしているが発色していない)、釉ハケ塗り 色調　素地2.5Y7/1灰白色　釉2.5Y7/2灰黄色	口縁部～体部1/12
69	灰釉陶器 輪花碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G2	灰色粘土層	(13.4)			胎土　3㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良 調整　外面に墨書？あり、内外面灰釉付着 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉5Y5/2　灰オリーブ色	口縁部1/10 体部上部1/5
70	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	D	G2	SD21　SP283 溝中 覆土中(整地層)		(6.0)		胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明 色調　5Y5/1灰白色	体下部1/8弱 高台部1/8
71	土師器 甕			8～9C	D	G2	検出面 整地層	(17.2)			胎土　長石、2.5㎜大の礫含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	口縁部1/15 体部一部
72	灰釉陶器 碗	O-53 併行	助宗	10C初	E	G2	検出面 風化礫混粘土層	(12.0)			胎土　長石、細砂、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる(つけがけ) 色調　5Y7/1灰白色	口縁部～体部1/11
73	灰釉陶器 碗	O-53 併行	助宗	10C初	E	G2	掘削土中		(6.5)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、貼り付け高台、内面降灰釉 色調　素地5Y7/1灰白色 釉10YR6/2オリーブ灰色	体下部～高台部1/6
74	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G2	掘削土中	(12.8)			胎土　細砂含む 焼成　良 調整　内外面ナデ 色調　5Y8/1灰白色	口縁部1/24
75	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G2	掘削土中		(5.0)		胎土　長石含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕 色調　5Y8/1灰白色	体部～底部1/3
76	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	D	G2	覆土中 暗灰色粘土層 SP？		(5.4)		胎土　白色粒子含む 焼成　良好 調整　貼り付け高台 色調　7.5Y7/1灰白色	体部一部 高台部1/4
77	須恵器 坏蓋			7C 中葉	E	G2	掘削土中				胎土　1㎜以下の長石、細砂含む 焼成　良 調整　外面ヘラ削り　摘み径(1.3cm) 色調　N7/　灰白色	摘み1/2 摘み周辺1/3
78	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F2	整地層	(13.6)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/3にぶい黄橙色	口縁部1/12 体部一部
79	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F2	掘削土中	(17.2)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/3にぶい黄橙色	口縁部1/14 体部一部
80	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F2	掘削土中	(17.6)			胎土　3㎜大の礫、1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明、口縁部欠損 色調　10YR8/4浅黄橙色	口縁部1/20 体部一部

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
81	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	G2	整地層 掘削土中	(16.0)			胎土　雲母、長石、細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y7/3浅黄色	口縁部1/15弱
82	土師器 甕の底部				E	F2	SP160 灰色粘土層				胎土　長石、2㎜大の細砂、3㎜大の礫含む 焼成　良 色調　外面7.5YR5/4にぶい褐色 内面10YR5/1褐灰色	底部一部
83	灰釉陶器 長頸瓶	K-14 併行	尾張	9C前	E	F2	掘削土中	(9.0)			胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内面釉少し残存 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉5Y5/3灰オリーブ色	口縁部1/8
84	灰釉陶器 碗	K-14～ K-90	東遠系	9C前 ～ 9C後	E	F1	整地層		(6.2)		胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良 調整　貼り付け高台 色調　5Y6/1灰色	体部一部 高台部1/4
85	灰釉陶器 碗	K-90 併行	尾張	9C後	E	F2	掘削土中	(13.8)			胎土　1㎜以下の細砂、2㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　内外面ナデ 色調　2.5Y7/1灰白色	口縁部1/22 体上部1/16
86	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	尾張	9C後	E	F2　G2	整地層 掘削土中				胎土　2㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　外面灰釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉7.5Y5/3灰オリーブ色	胴部のみ
87	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	尾張	9C後	E	G2　F2	灰色粘土層 掘削土中		(8.8)		胎土　2.5㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　底部糸切り後ナデ、貼り付け高台 色調　素地5Y7/1灰白色 釉7.5Y4/3暗オリーブ色	体下部1/10 高台部1/8
88	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F2	整地層		(8.6)		胎土　1㎜以下の白色粒子、2.5㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　底部一部ヘラ削り、貼り付け高台、内面降灰釉残存 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉5Y4/2灰オリーブ色	高台部1/4
89	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	掘削土中		(6.2)		胎土　長石含む 焼成　良好 調整　内面釉 色調　素地10YR7/1灰白色 釉10Y5/2オリーブ灰色	体部～高台部1/5
90	灰釉陶器 碗	O-53 併行	尾張	10C初	E	G2	掘削土中				胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　貼り付け高台欠損 色調　素地2.5U8/1灰白色	体下部1/9 高台部1/10
91	灰釉陶器 長頸瓶	O-53	東遠系	10C初	E	F2	掘削土中		(10.0)		胎土　緻密、3㎜大の白色礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面ヘラ削り？、貼り付け高台、高台部重ね焼き痕 色調　内面5Y7/1灰白色　外面5Y8/1灰白色	体下部1/7 高台部1/6
92	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	SP176 灰色粘土層		(6.2)		胎土　1㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良 調整　底部糸切り痕？、摩耗の為不明 色調　5Y6/1灰色	体部一部 底部1/4
93	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	掘削土中		(4.6)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕(摩耗している) 色調　5Y6/1灰色	体部一部 底部ほぼ1/2
94	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G2	整地層		(5.2)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　5Y8/2灰白色	体部一部 底部1/6
95	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	検出面		(6.0)		胎土　わずかに黒斑、2㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y7/2灰黄色	体部1/8 底部1/8
96	清郷甕			10～11C	E	F2	SF6 灰色粘土層				胎土　石英、長石を多量に含む 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　10YR6/3にぶい黄橙色	
97	山茶碗	Ⅲ-1	東遠系	13C中	E	F2	掘削土中		(6.4)		胎土　白色粒子含む 焼成　良好 調整　高台部欠損 色調　7.5Y7/1灰白色	体部～底部一部

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
98	伊万里 染付 茶碗		伊万里	18C	E	F2	SF6 掘削土中		(5.0)		胎土　緻密、長石含む 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　素地5Y8/1灰白色　釉10GY8/1明緑灰色 染付5B6/1青灰色	体部一部 高台部1/12
99	伊万里 白磁　碗		伊万里	19C前	E	F2	整地層	(9.2)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　10Y8/1灰色	口縁部～体部1/12
100	伊万里 染付 茶碗		伊万里	18C	E	F1	整地層直上	(10.8)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　外面2.5GY7/1明オリーブ灰色 釉(濃)5G4/1暗緑灰色 釉(薄)5B6/1青灰色	口縁部～体部 1/8強
101	須恵器 坏身		助宗	8～9C	E	E2　F2	灰色粘土層		(5.8)		胎土　1㎜以下の細砂、白色粒子含む、黒斑多数 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明、貼り付け高台 色調　5Y6/1灰色	体下部～高台部1/2
102	灰釉陶器 輪花碗	K-90	助宗	9C後	E	F2	掘削土中 灰色粘土層	(15.0)			胎土　2～2.5㎜大の長石、3㎜大の礫含む 焼成　良 調整　内外面にハケ塗りしているが発色せず 色調　素地5Y6/1灰色　釉5Y7/1灰白色	口縁部～体部1/12
103	灰釉陶器 碗	K-90 併行	助宗	9C後	E	F2	道状遺構1 掘削土中	(14.0)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内面灰釉付着、外面施釉不明 色調　素地2.5Y7/1灰白色　釉2.5Y7/4浅黄色	口縁部1/22 体部一部
104	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	直上層 (灰色粘土層)	(14.0)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面釉の発色が悪い 色調　5Y7/1灰白色	口縁部1/16 体部一部
105	(灰釉) 小皿	窖10	瀬戸	14C後	E	F2	整地層		(5.2)		胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕 色調　2.5Y7/1灰白色	体部一部 底部1/4
106	鉄釉徳利		志戸呂	16C後	E	E2　F2	土手状遺構1 整地層　掘削土中　灰色粘土層				胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　10YR6/3にぶい黄橙色 釉7.5YR4/2灰褐色	
107	土師器 甕		遠江系		E	E2	掘削土中				胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR7/6橙色	口縁部～体部一部
108	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	E2	灰色粘土層				胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y7/3浅黄色	口縁部～体部一部
109	須恵器 坏蓋			8C	E	F2	整地層				胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　良好 調整　内面回転ナデ、天井部ナデ、 摘み径2.8cm 色調　外面N6/　灰色　内面7.5Y7/1灰白	摘み完形 摘み周辺1/5
110	原始灰釉 長頸瓶	O-10 併行	猿投	8C末 ～ 9C初	E	E1	掘削土中		(9.2)		胎土　緻密、2㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　貼り付け高台、内面自然釉付着、三重圏線あり 色調　素地5Y7/1灰白色 釉7.5Y4/2灰オリーブ色	高台部1/4
111	緑釉陶器 稜碗	K-90 併行	猿投	9C後	E	E2	灰色粘土層 黄色粘土直上 (水田の一番下)	(12.9)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に緑釉がかかる 色調　2.5Y7/3浅黄色	口縁部1/18
112	灰釉陶器 碗	K-90 併行	助宗	9C後	E	E2	整地層	(14.8)			胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面灰釉ハケ塗り 色調　素地5Y7/1灰白色 釉10Y5/2オリーブ灰色	口縁部1/10
113	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F2　G2	掘削土中 灰色粘土層				胎土　細砂含む、黒斑多数有り 焼成　良好 調整　外面灰釉がかかる 色調　素地10Y8/1灰白色 釉10Y5/2オリーブ灰色	肩部1/3

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
114	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	E2　F2	掘削土中 灰色粘土層		(7.4)		胎土　長石含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削りかナデ、全面灰釉か 色調　素地2.5Y1/7灰白色 断面7.5Y6/2オリーブ色	体部一部 高台部1/4
115	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	猿投？	9C後	E	F2	整地層		(7.6)		胎土　1㎜以下の白色粒子含む、黒斑多数有り 焼成　良好 調整　底部糸切り、貼り付け高台、内面降灰釉 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉10Y6/3オリーブ灰色	体下部～高台部 1/5
116	灰釉陶器 長頸瓶	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	道状遺構1 灰色粘土層				胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　外面全体に灰釉がかかる 色調　素地5Y7/1灰白色 釉10Y5/2オリーブ灰色	体部1/12
117	灰釉陶器 長頸瓶	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	土手状遺構1 掘削土中		(14.0)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面ヘラ削り、貼り付け高台 色調　5Y7/1灰白色	体下部1/8 高台部1/16
118	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2　F2	掘削土中 検出面	(14.0)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面浸し塗り 色調　口縁部5Y7/1灰白色　体部2.5Y6/1黄灰色	口縁部1/19 体部一部
119	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	掘削土中	(5.6)			胎土　白色細砂含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕 色調　5Y8/1灰白色	体下部1/7 底部1/6
120	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	灰色粘土層 (粘性強い)		(5.4)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y7/2灰黄色	体部一部 底部1/5
121	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	灰色粘土層		(5.4)		胎土　1㎜以下の黒斑有り 焼成　不良 調整　底部糸切り痕、摩耗の為不明 色調　内面7.5Y7/1灰白色　外面10Y/1灰白色	体下部1/8 底部1/3
122	山茶碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	G2	掘削土中		7.2		胎土　2㎜大の長石含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕、内面重ね焼き痕、降灰釉 色調　素地N7/　灰白色　釉2.5Y6/3にぶい黄色	体部1/4 高台部1/2
123	灰釉陶器 碗		旗指	11C末	E	E2	検出面		(6.0)		胎土　微細～2㎜大の黒色粒子、1㎜以下の白色粒子含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台、内面重ね焼き痕、降灰釉付着 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉10Y4/2オリーブ灰色 断面7.5Y7/3にぶい橙色	体部一部 高台部1/2
124	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	E2	掘削土中		(4.6)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕 色調　2.5Y6/1黄灰色	体部わずかに残存 高台部1/6
125	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	F2	掘削土中		(4.6)		胎土　長石わずかに含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台、内面降灰釉 色調　N7/　灰白色	高台部1/3
126	小皿	Ⅲ-3	東遠系	13C後	E	F2	直上層		(5.6)		胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕 色調　N6/　灰色	底部1/4
127	灰釉 四耳壺	窖4 古瀬 戸前 Ⅱ		13C前	E	E1	SF2 灰色粘土層 やや砂質				胎土　4～8㎜大の礫、2㎜以下の白色粒子含む、わずかに黒斑あり 焼成　良好 調整　断面に灰釉が流れ込む、焼けヒビがある 色調　2.5Y7/1灰白色	体上部1/10
128	白磁 梅瓶		中国 景徳鎮	13C元	E	F2	掘削土中				胎土　緻密、わずかに黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる、外面凸帯片切り彫り 色調　内面5Y7/2灰白色 外面10GY7/1明緑灰色	一部破片1/12
129	土師器 壺			古墳	E	E2	掘削土中		(8.8)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部木葉痕、内外面指頭痕残存、摩耗の為不明 色調　7.5YR6/6橙色	底部1/4

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
130	須恵器 坏身	NW-32 併行	助宗	8C前	E	E2	検出面 灰色粘土層	(12.4)	(7.8)	3.9	胎土　2.5㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、焼き歪みあり、貼り付け高台 色調　内面N4/　暗灰色　外面N5/　灰色	口縁部～高台部1/2
131	須恵器 坏身			8C末	E	E2	掘削土中	(12.4)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面ロクロ整形 色調　7.5Y6/1灰色	口縁部～体部1/14
132	土師器 坏			奈良 時代	E	E2	灰色粘土層		(6.4)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　やや不良 調整　摩耗の為不明、底部に段差(ヘラ痕？)有り 色調　7.5YR7/4にぶい橙色	体部一部 底部1/2
133	陵東坏			8～9C	E	E2	青灰色砂混礫粘土		(6.5)		胎土　1㎜以下の細砂、白色微細粒子含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明、底部中心に窪みあり 色調　内面2.5YR6/8橙色 外面10YR5/4にぶい黄褐色	体下部1/7 底部1/2
134	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	E2	整地層	(20.0)			胎土　長石、雲母、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面に爪による圧痕か？、摩耗の為不明 色調　10Y7/4にぶい黄橙色	口縁部1/16 体部一部
135	土師器 甕				E	E2	灰色粘土層		(6.0)		胎土　白色粒子含む 焼成　良好 調整　内面指頭痕あり、外面櫛目あり 色調　2.5Y7/2灰黄色	体部1/7 底部1/5
136	土師器 坏			奈良 時代	E	E2	灰色粘土層		(4.8)		胎土　3㎜以下の礫、白色細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR6/6橙色	体下部1/7 底部1/4
137	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	E2	土手状遺構1 川の覆土	(16.8)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y7/4浅黄色	口縁部1/17 体部一部
138	土師器 S字甕？		遠江系	8～9C	E	E2		(24.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、指頭痕？あり 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	口縁部1/10 体部一部
139	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	E2	灰色粘土層				胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	口縁部1/27強 口唇部欠損
140	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	東遠系	9C後	E	D3　E3 E2	土手状遺構1,2 灰色粘土層				胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面全体に灰釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉10Y4/2オリーブ灰色	体部1/9
141	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	E2	SD11　トレンチ内掘削土中 検出面 整地層	(16.2)			胎土　緻密、2.5㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内面口縁部1㎜位のヘラによる一条の沈線有り、空気が入って一部膨らむ 色調　7.5Y7/1灰白色	口縁部～体部 1/8弱
142	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	E2	掘削土中	(12.8)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面ともハケ塗り？発色悪い 色調　7.5Y7/1灰白色	口縁部1/11 体部一部
143	灰釉陶器 碗	K-90 併行	助宗	9C後	E	E2	検出面	(16.4)			胎土　長石、4㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面灰釉ハケ塗り 色調　素地2.5Y6/1黄灰色 釉5Y5/2灰オリーブ色	口縁部1/9 体上部約1/9
144	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F2	道状遺構1 検出面		(8.7)		胎土　緻密、2㎜大の長石含む 焼成　良 調整　底部ヘラ削り、貼り付け高台、外面自然釉、内面重ね焼き痕、ヘラによる一条の沈線あり 色調　素地5Y7/1灰白色　釉5Y7/2灰白色	体下部～高台部1/5
145	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	E2	灰色粘土層		(7.0)		胎土　1㎜以下の長石含む、黒斑有り 焼成　良 調整　底部糸切り後ナデ 色調　2.5Y7/1灰白色	体下部一部 高台部1/2

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
146	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	東遠系	9C後	E	E2	掘削土中		(7.4)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む、わずかに黒斑有り 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、貼り付け高台 色調　2.5Y7/1灰白色	高台部1/8
147	灰釉陶器 長頸瓶	K-90 併行	助宗	9C後	E	E2	SD11 掘削土中				胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　高台部欠損、内面降灰釉付着、沈線あり 色調　素地2.5Y6/1黄灰色 釉7.5Y5/2灰オリーブ色	体下部1/8 高台部1/7
148	灰釉陶器 長頸瓶 把手	K-90 併行	東遠系	9C後	E	E2	掘削土中				胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　全体をナデている、一部に割れ有り 色調　5Y8/1灰白色	
149	緑釉陶器 碗	K-90 併行	猿投	9C後	E	E2	掘削土中 トレンチ内		(7.1)		胎土　緻密、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　高台部欠損 色調　素地2.5Y7/1灰白色 外面2.5GY5/1オリーブ灰色 釉10Y5/2オリーブ灰色	底部1/4
150	灰釉陶器 皿	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	土手状遺構1 川の覆土 灰色粘土層		(8.0)		胎土　白色粒子をわずかに含む 焼成　良好 調整　貼り付け高台、内面重ね焼き痕、釉付着 色調　2.5Y7/1灰白色 灰釉2.5GY6/1オリーブ灰色	体部一部 高台部1/5
151	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2　E3	水田面 掘削土中 土手状遺構2 道状遺構1	(13.8)			胎土　長石、3㎜大の礫含む、わずかに黒斑有り　焼成　良好 調整　内外面灰釉ハケ塗り？ 色調　素地5Y6/1灰色　釉10Y4/3暗オリーブ色	口縁部1/7 体上部1/5
152	灰釉陶器 碗	O-53	猿投	10C初	E	E2	灰色粘土層		(7.0)		胎土　緻密、1㎜以下の細砂含む、わずかに黒斑有り 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、内外面灰釉 色調　素地5Y7/1灰白色　釉10Y6/2オリーブ色	体部1/8 高台部1/5
153	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	灰色粘土層		(7.8)		胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　ナデている 色調　5Y7/1灰白色	高台部1/6
154	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	検出面		(7.0)		胎土　長石、2㎜以下の細砂含む 焼成　甘い、生焼け 調整　摩耗の為不明、貼り付け高台、高台接合部がくっきりと線状になっている 色調　7.5YR7/6橙色	高台部1/4弱
155	灰釉陶器 皿	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	SD11 灰色粘土層		(8.2)		胎土　3㎜大の礫、長石含む、黒斑少量有り 焼成　やや不良 調整　摩耗の為不明 色調　5Y6/1灰色	体部一部 高台部1/4
156	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	SD11 灰色粘土層				胎土　長石、白色粒子、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　墨書 色調　N7/　灰白色	体部一部
157	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	灰色粘土層		(5.7)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y8/1灰白色	底部1/3
158	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	検出面		(5.6)		胎土　長石含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕、干した時に付いた傷？ 色調　5Y7/1灰白色	体部一部 底部1/3
159	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	灰色粘土層 (炭混じり)	(13.1)	(5.2)	3.5	胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕 色調　5Y7/1灰白色	口縁部1/4 体部1/4 底部1/6
160	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	検出面	(11.8)			胎土　1㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　甘い 色調　5Y7/1灰白色	口縁部1/6 体部一部
161	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	検出面		(5.2)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　5Y8/3淡黄色	体部一部 底部1/4
162	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	検出面		(5.2)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　5Y6/1灰色	体部1/3 底部1/2

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
163	糸切り碗	K-90併行	東遠系	9C後	E	E2	土手状遺構1 灰色粘土層		(6.9)		胎土　2㎜以下の白色粒子多量に含む、黒斑多数有り 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　5Y7/1灰白色	体下部1/8 底部1/11
164	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	E2	灰色粘土層				胎土　1㎜以下の細砂、長石含む 焼成　甘い 調整　体部外面に墨書、文字不明 色調　2.5Y7/1灰白色	体部1/14
165	山茶碗	Ⅲ-1	東遠系	13C中	E	F2　G3	SF4 道状遺構1 黒色粘土層 掘削土中				胎土　3㎜大の礫、1㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内面自然降灰釉の付着痕 色調　7.5Y6/1灰色	体部1/8
166	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	E2	掘削土中		(4.0)		胎土　2㎜以下の白色粒子含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台、内面灰釉 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉7.5Y6/2灰オリーブ色	体下部1/12 高台部1/5
167	山茶碗	Ⅱ	東遠系	12C後	E	E2	掘削土中		(5.8)		胎土　微細の白色粒子含む 焼成　良 調整　底部糸切り後ナデ、貼り付け高台、高台部二段状になっている、内面重ね焼き痕 色調　外面5Y6/1灰色　内面7.5YR8/4浅黄橙色	体部一部 高台部1/3
168	小碗	Ⅲ	東遠系	13C	E	E2	SD12　検出面 風化礫混粘土層	(8.2)			胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面降灰釉付着 色調　N7/　灰白色	口縁部1/8 体部一部
169	中国白磁小皿	Ⅳ類？	中国	12C 南宋	E	E2	掘削土中		(5.4)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、外面ヘラ削り、内面全体と外面一部に青磁釉がかかる 色調　素地2.5Y8/1灰白色　内面10Y7/1灰白色	体部一部 底部1/6
170	中国白磁四耳壺		中国	13C 南宋	E	E2	SD11 掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　粘土の接合痕？あり 色調　10Y7/1灰白色	体部1/8弱
171	常滑焼甕		常滑	13C～14C	E	E2	土手状遺構1 灰色粘土層				胎土　長石、細砂、8㎜大の礫含む、礫多く含む 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　内面N5/　灰色　7.5YR5/2灰褐色	胴部一部
172	志野焼鉄釉小皿	後期Ⅳ古併行	美濃	15C中	E	D2	土手状遺構1 灰色粘土層	(10.0)			胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる 色調　素示7.5YR8/1灰白色　釉10Y1.7/1赤黒色	口縁部1/10
173	須恵器坏蓋	C-2併行	助宗	9C前	E	F3	掘削土中 灰色粘土層	(12.4)			胎土　2㎜大の長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　外面上部ヘラ削り、自然釉付着 色調　素地5Y7/1灰白色　釉5Y6/2灰オリーブ色	口縁部1/5 天井部1/4
174	須恵器坏身		助宗	9C前	E	F3	灰色粘土層	(12.7)	(8.6)		胎土　4㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　高台の有無不明 色調　7.5GY5/1緑灰色	口縁部～体部約1/18 底部わずかに残存
175	須恵器坏身		助宗	9C前	E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層		(8.6)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明 色調　7.5Y6/1灰色	体部一部 高台部1/4
176	須恵器坏身		助宗	9C前	E	F3	掘削土中		(6.6)		胎土　白色粒子含む 焼成　良好 調整　削り出し高台 色調　N4/　灰色	体部一部 高台部1/8
177	土師器坏				E	G3	掘削土中		(9.2)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部一部糸切り痕、摩耗の為不明 色調　5YR6/4にぶい橙色	底部1/9
178	土師器甕				E	F3					胎土　雲母、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　7.5YR6/4にぶい橙色	破片
179	土師器坏				E	G3	掘削土中		(6.4)		胎土　雲母、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、内面底部ハケ目あり 色調　10YR5/3にぶい黄褐色	体部一部 底部1/6

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
180	土師器 坏				E	G3	直上		(5.8)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR7/1にぶい橙色	底部1/6強
181	土師器 甕			8～9C	E	F3	掘削土中 礫混粘土層	(14.0)			胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR8/4浅黄橙色	口縁部1/10弱
182	土師器 甕			8～9C	E	F3	土手状遺構1				胎土　5㎜大の礫、2㎜以下の白色粒子含む 焼成　良 調整　外面一部摩耗の為不明 色調　外面5YR7/6橙色　内面7.5YR8/3浅黄橙色	頸部1/17
183	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F3	土手状遺構1 掘削土中	(16.0)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y7/3浅黄色	口縁部1/14 体部一部
184	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F2	掘削土中 (灰色粘土層)	(16.4)			胎土　長石、雲母、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	口縁部1/12強 体部一部
185	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F2	灰色粘土層 (粘性強い)	(18.4)			胎土　3㎜大の礫、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　10YR8/3浅黄橙色	口縁1/15 体部一部
186	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F3	掘削土中 (灰色粘土層)	(17.4)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面ハケ目？ 色調　2.5YR6/3にぶい黄色	口縁部一部 体部一部
187	土師器 甕				E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層				胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　外面ハケ目、内面炭化物と炭付着 色調　2.5Y8/2灰色	頸部1/7
188	土師器 甕		遠江系	8～9C	E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層	(25.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面に爪による圧痕か？、摩耗の為不明 色調　2.5Y8/3淡黄色	口縁部1/10 体部一部
189	土師器 甕			8～9C	E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層	(26.0)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、外面ハケ目有り、口縁部欠損 色調　2.5Y8/2灰白色	口縁部1/14 体部一部
190	土師器 小形甕			8～9C	E	F2	掘削土中	(14.4)			胎土　5㎜大の礫、1㎜以下の白色粒子含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、内面口縁部から体部にかけてスス付着 色調　内面5YR7/6橙色 外面7.5YR6/3にぶい褐色	口縁部～体部1/12
191	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	G2	整地層 暗灰色風化礫混粘土層 灰色粘土層	(16.0)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む、わずかに黒斑有り 焼成　良好 調整　内面釉がかかる(つけがけ)、外面釉付着痕残存 色調　素地2.57/1灰白色　釉5Y5/3灰オリーブ色	口縁部～体部1/17
192	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F2	撹乱		(6.2)		胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り後ナデ？外面ナデかヘラ削り 色調　5Y7/1灰白色	体部わずかに残存 高台部1/8
193	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	G2	SD14　掘削土中(整地層)	(14.0)			胎土　長石、4㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内面灰釉付着 色調　2.5Y7/3浅黄色	口縁部1/12 体部一部
194	灰釉陶器 碗	K-90 併行	猿投	9C後	E	G3	土手状遺構1 灰色粘土層	(13.0)			胎土　緻密、1㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　外面釉ハケ塗り？ 色調　素地2.5Y7/1　釉7.5Y5/3灰オリーブ色	口縁部1/8 体上部1/7
195	灰釉陶器 碗	K-90 併行	猿投	9C後	E	F3	検出面		(8.2)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　高台部先端破損、底部ヘラ削り一部ナデ、内面灰釉ハケ塗り、外面ヘラ削り 色調　素地2.5Y7/2灰黄色 釉5Y6/3オリーブ黄色	高台部約1/34

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
196	灰釉陶器 碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F3	検出面		(8.1)		胎土 長石、2㎜大の細砂含む 焼成 良 調整 底部ヘラ削り、貼り付け高台 色調 7.5Y7/1灰白色	体下部1/5 高台部1/5
197	灰釉陶器 碗	O-53 併行	助宗	10C初	E	G2	灰色粘土層		7.6		胎土 3～5㎜大の礫含む 焼成 良 調整 転用硯？、底部ヘラ削り後ナデ 色調 2.5Y7/1灰白色	高台部1/2
198	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	灰色粘土層		(6.0)		胎土 長石、1㎜以下の細砂含む 焼成 良好 調整 高台部欠損、底部ヘラ削り、内面降灰釉付着、外面ヘラ削り 色調 5Y7/1灰白色	体下部1/9 底部1/4
199	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G2	掘削土中 灰色粘土層	(12.7)			胎土 長石、細砂、2㎜大の細砂含む 焼成 良 調整 摩耗の為不明 色調 5Y7/1灰白色	口縁部～体上部1/9
200	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	検出面		(7.2)		胎土 緻密、1㎜大の細砂含む 焼成 良好 調整 底部糸切り後ナデ、内面重ね焼き痕 色調 素地10YR7/1灰白色 釉7.5Y5/2灰オリーブ色	体下部1/4 高台部1/3
201	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層		(9.6)		胎土 4㎜大の礫、白色粒子わずかに含む 焼成 良 調整 貼り付け高台、底部ヘラ削り 色調 2.5Y5/1黄灰色 断面2.5Y7/2灰黄色	体部一部 高台部1/4
202	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	掘削土中				胎土 2㎜大の細砂含む 焼成 良 調整 墨書 色調 2.5Y8/1灰白色	体部1/6
203	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G3	整地層		(4.4)		胎土 長石含む、黒斑有り 焼成 良好 調整 底部糸切り痕 色調 外面7.5Y6/1灰色 断面5YR6/3にぶい橙色	体部一部 底部ほぼ1/2
204	糸切り碗	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F3	灰色粘土層		(6.8)		胎土 1㎜以下の細砂、白色粒子含む 焼成 不良 調整 摩耗の為不明 色調 5Y7/1灰白色	体下部1/5 底部1/5
205	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	灰色粘土層		(6.0)		胎土 1㎜以下の長石、1㎜大の細砂含む 焼成 甘い 調整 摩耗の為不明、内面2本の溝あり 色調 7.5Y7/1灰白色	体下部～高台部1/4弱
206	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	掘削土中 砂礫混じり粘土層		(5.6)		胎土 1㎜以下の長石、1㎜大の細砂、4㎜大の礫含む 焼成 甘い 調整 摩耗の為不明 色調 N7/ 灰白色	体下部1/3 高台1/2
207	山茶碗	Ⅲ-2	東遠系	13C中	E	F3 G3	掘削土中 灰色粘土層		(6.8)		胎土 1㎜以下の黒色粒子、2～3㎜大の白色礫含む 焼成 良 調整 底部糸切り痕、貼り付け高台 色調 7.5Y6/1灰色	体下部～高台部1/7
208	片口鉢？		東遠系	13C初	E	G2	灰色粘土層		(11.8)		胎土 2㎜大の細砂含む 焼成 良好 調整 底部から高台部が外れる、高台部にワラ状圧痕 色調 10Y7/1灰白色	高台部1/4
209	山茶碗		東遠系	12C	E	G3	掘削土中	(14.0)			胎土 長石、3㎜大の礫含む 焼成 良好 調整 内外面ナデ 色調 10Y6/1灰色	口縁部1/9 体部一部
210	山茶碗		東遠系		E	F3	撹乱層		(6.4)		胎土 1㎜以下の白色粒子含む、黒斑有り、炭化物付着 焼成 良好 調整 底部糸切り痕、貼り付け高台 色調 5YR6/ 灰色	体部一部 高台部3/2
211	小皿		東遠系	13C後	E	G3	掘削土中		(3.7)		胎土 白色粒子、2㎜大の細砂含む 焼成 良好 調整 底部糸切り痕 色調 5GY6/1緑灰色	体部一部 底部ほぼ完形
212	青磁 碗	A2類	中国龍泉窯系	12C～13C	E	G3	掘削土中				胎土 緻密 焼成 良好 調整 劃花文 色調 2.5GY6/1オリーブ灰色	体部1/12弱

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
213	青磁 蓮弁紋碗		中国	13C中	E	G3	トレンチ内 砂利混じり粘土層				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面蓮弁文 色調　素地5Y7/1灰白色 青磁釉2.5GY7/1明オリーブ灰色	体部一部
214	かわらけ				E	E3	土手状遺構2 掘削土中		(6.0)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR6/6橙色	体部1/5強
215	かわらけ				E	G3	直上層		(7.0)		胎土　2㎜以下の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明、外面ハケ目あり 色調　5YR7/6橙色	体下部1/14 底部1/4
216	かわらけ				E	E3	土手状遺構2 掘削土中		(8.6)		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明、指頭痕あり 色調　7.5YR7/6橙色	体下部1/6 底部1/12
217	須恵器 坏蓋		助宗	9C前	E	F3	SR8 風化礫混粘土層				胎土　1㎜以下の長石含む、黒斑多数有り 焼成　良 調整　外面ヘラ削り　摘み径2.4cm 色調　N6/　灰色	摘み完形 天井部4/5 口縁部1/3
218	須恵器 坏身		助宗	9C前	E	D3　D4	SR8 灰色粘土層		(7.6)		胎土　白色粒子をわずかに含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、削り出し高台、外面ヘラ削り 色調　内面10YR6/2灰黄褐色　外面7.5Y6/1灰色 断面7.5YR6/4にぶい橙色	体部一部 高台部1/8
219	須恵器 坏身				E	D3	SR8　検出面		(9.0)		胎土　白色粒子をわずかに含む 焼成　良 調整　削り出し高台、外面ヘラ削り 色調　5Y6/1灰色	体部一部 高台部1/9
220	土師器 碗				E	F3	SR8	(9.8)			胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/2にぶい黄橙色	口縁部1/15弱
221	土師器 台付甕		遠江系	8～9C	E	E3	SR8　整地層				胎土　5㎜大の礫含む 焼成　良 調整　内外面ナデ 色調　2.5Y6/3にぶい黄色	口縁部1/17強 口唇部欠損
222	土師器 坏				E	F3	SR8				胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　10YR6/4にぶい黄橙色	体部一部破片
223	須恵器 坏身		助宗	9C前	E	E3	SR8　検出面		(8.2)		胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明 色調　内面5Y8/1灰白色　高台5Y6/1灰色	体部一部 高台部1/2
224	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E3	土手状遺構2		(7.2)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　貼り付け高台 色調　5Y7/1灰白色	体部一部 高台部1/5
225	灰釉陶器 碗	O-53 併行	助宗	10C初	E	F3	土手状遺構1 掘削土中		(5.9)		胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　良好 調整　内面に灰釉がかかる 色調　2.5Y7/1灰白色	体部わずかに残存 高台部1/7
226	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	D3	灰色粘土層		(7.1)		胎土　1㎜以下～8㎜大の長石含む、黒斑有り 焼成　良 調整　底部糸切り後ナデ 色調　素地7.5Y6/1灰色　断面7.5Y7/1灰白色	体部一部 高台部1/6
227	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E3	SR8　掘削土中		(5.4)		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	体部一部 底部1/3
228	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E3	SR8　検出面		(4.6)		胎土　長石含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕 色調　10BG4/1暗青灰色	体部一部 底部1/4
229	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E3	SR8　検出面 風化礫混灰色粘土層	(15.2)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明 色調　5Y7/1灰白色	口縁部1/10 体部一部
230	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	D3	褐色粘土層		(6.0)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良 調整　底部糸切りか？ 色調　N5/　灰色	体部一部 底部1/6

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
231	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	E3	SR8		(4.8)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR6/4にぶい橙色	体部一部 底部1/5
232	糸切り碗	O-53併行	東遠系	10C初	E	E3	SR8　掘削土中		(4.8)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　2.5Y7/3浅黄色	体部一部 底部1/5弱
233	山茶碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	D4	SR8 灰色粘土層	(14.0)			胎土　2㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内面降灰釉付着、焼きぶくれあり 色調　素地7.5Y7/1灰白色 釉5Y4/2灰オリーブ色	口縁部1/11 体部一部
234	山茶碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	F3	SR8　掘削土中		(7.4)		胎土　微細～3㎜大の白色粒子、微細？2㎜大の黒色粒子含む 焼成　良 調整　底部糸切り後ナデ、貼り付け高台 色調　7.5Y6/1灰色	体部一部 高台部1/3
235	山茶碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	E3	SR8　掘削土中		(7.4)		胎土　微細の白色粒子含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　底部糸切り後ナデ、貼り付け高台 色調　10YR6/1灰色	体部一部 高台部1/8
236	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	E	E3	SR8		(3.4)		胎土　2.5㎜大の礫含む 焼成　良 調整　貼り付け高台、麦わら痕？スノコ痕？ 色調　5Y6/1灰色	体下部1/3 高台部完形
237	小碗	Ⅲ-2	東遠系	13C後	E	C3	SR8　掘削土中	(11.6)			胎土　4㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　N6/1灰色	体部一部 高台部1/8
238	山茶碗		渥美	13C後	E	D3	灰色粘土層		(18.0)		胎土　長石、4㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕を消す、高台部欠損、内面重ね焼き痕、内外面降灰釉付着 色調　5Y7/1灰白色	口縁部～底部1/5
239	かわらけ			15C	E	D3	SR8　掘削土中		(6.2)		胎土　3㎜大の礫、2㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明、外面底部付近に炭化物付着 色調　10YR7/3にぶい黄橙色	底部1/6 体部一部
240	かわらけ			15C	E	E3	SR8　掘削土中		(7.0)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、底部糸切り痕 色調　7.5YR7/6橙色	体下部一部 底部1/6強
241	かわらけ			15C	E	E3	SR8　掘削土中		(6.6)		胎土　1㎜大の細砂含む、わずかに黒斑有り 焼成　やや甘い 調整　摩耗の為不明、底部糸切り痕 色調　10YR8/3浅黄橙色	体下部1/8 底部1/4弱
242	かわらけ			15C	E	E3	掘削土中		(6.0)		胎土　1㎜大、2.5㎜大の細砂、わずかに黒斑含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR6/6橙色	体下部1/4 底部1/4
243	内耳鍋			15C後～16C前	E	E3	SR8　掘削土中	(29.0)			胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明、内面ハケで横調整している 色調　10YR6/4にぶい黄橙色	口縁部～体上半部1/12弱
244	土師器坏			10~11C	A	D8	掘削土中	(13.0)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	口縁部1/8 体部一部
245	丸瓦		東遠系	鎌倉	A	E5	掘削土中				胎土　砂っぽい 焼成　良好 調整　一部ヘラ削り 色調　7.5Y7/1灰白色	一部
246	小皿	上志戸呂	志戸呂	17C前	A	E6	掘削土中		(5.0)		胎土　微細～1.5㎜大の白色粒子含む 焼成　良好 調整　底部糸切り後ナデ、貼り付け高台、外面ヘラ削り？ 色調　2.5YR5/1赤灰色	体部一部 高台部1/4

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
247	鉄釉小壺	上志戸呂	志戸呂	17C前	A	D7	暗灰色粘土層		(7.4)		胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り？、外面ヘラ削り、鉄釉がかかる 色調　断面5YR5/3にぶい赤褐色 外面10YR5/2灰黄褐色　鉄釉10YR2/2黒褐色	体部一部
248	錆釉擂鉢	三ツ沢	志戸呂	15C後	A	D8	トレンチ内		(13.6)		胎土　7㎜大の礫、2㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、櫛目15本櫛か？ 色調　内外面7.5YR4/2灰褐色　断面5YR6/6橙色	底部1/8
249	徳利	上志戸呂	志戸呂	17C前	A	E5	掘削土中	('4.7)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる 色調　断面7.5YR6/2灰褐色 釉5Y6/4オリーブ黄色	口縁部1/4
250	青緑釉皿		肥前	17C前	A	E5	掘削土中	(11.6)			胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　内面5CY4/3暗オリーブ色 外面5Y6/3オリーブ黄色	口縁部～体部1/16
251	錆釉擂鉢		瀬戸	19C前	A	D7	掘削土中	(38.0)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　全体的に錆釉がかかる 色調　内外面2.5Y3/1黒褐色 断面2.5Y7/1灰白色	口縁部1/23 体部一部
252	染付　碗		伊万里	19C前	A	D7	掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付　胴部径(13.0cm) 色調　N8/　灰白色	体部1/13
253	染付　皿		伊万里	19C前	A	E5	掘削土中	(11.0)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　口縁部口紅、外面に染付 色調　外面N8/1灰白色　口縁部10YR4/4褐色	口縁部～体部1/12
254	鉄絵土瓶蓋			19C前	A	E5	掘削土中	(8.9)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　天井部に釉で絵を描いている 色調　外面5Y7/2灰白色　釉5Y2/1黒色	1/4弱
255	灰釉陶器碗	O-53併行	助宗	10C初	B	H4	水田面	(14.0)	6.65	4.5	胎土　1㎜以下の細砂含む、黒斑有り 焼成　良 調整　底部ヘラ削り、貼り付け高台(三角高台風)、外面墨書あり 色調　10YR7/1灰白色	口縁部1/3 体部1/4 高台部完形
256	山茶碗	Ⅰ-2	渥美	12C前	B		排土層		(7.0)		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良 調整　高台部ワラ状圧痕、底部モミ痕、内面重ね焼き痕 色調　5Y7/1灰白色	体下部～高台部1/2
257	折縁深皿	後期Ⅰ頃	瀬戸	14C後	B	I5	ベルト内				胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 胴部径(22.5cm)、頸部径(30.0cm) 色調　釉2.5Y5/4黄褐色　断面2.5Y8/1灰白色	頸部～胴部1/16
258	錆釉擂鉢	三ツ沢	志戸呂	15C後	B	H6	掘削土中	(30.4)			胎土　4㎜大の礫含む 焼成　良 調整　錆釉がかかる、片口 色調　2.5YR5/6明赤褐色	口縁部～体部1/16
259	鉄釉天目茶碗	大4前	瀬戸	16C末	B	G4	掘削土中 (畦の横)	(13.2)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる 色調　素地10YR7/2にぶい黄橙色 釉5YR4/3にぶい赤褐色	口縁部1/28 体部1/9
260	灰釉急須			19C前	B	不明	排土中		(10.4)		胎土　緻密、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、外面ヘラ削り、灰釉がかかる 色調　素地5Y7/2灰白色 釉7.5Y6/3オリーブ黄色	体部一部 底部1/11
261	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C前	C	I3	畦上 (杭列の少し上) 掘削土中	(9.4)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　2.5Y7/1灰白色	口縁部1/9 体部一部
262	錆釉擂鉢	後期Ⅳか大1	瀬戸	15C末	C	J4	検出面				胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　錆釉がかかる 色調　10YR4/1暗赤灰色　断面10YR8/1灰白色	体部一部

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
263	灰釉盤	登8から後	瀬戸	18C末	C	J4	調査区南SP内				胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面に釉がかかる、体部径(7.2cm) 色調　釉2.5Y7/2灰黄色　2.5Y8/1灰白色	体部一部
264	白磁花瓶		肥前	19C前	C	I3	検出面				胎土　緻密 焼成　良好 調整　口頸径(4.2cm) 色調　素地N8/　灰白色 青磁釉10GY7/1明緑灰色	頸部一部
265	土瓶蓋	登8か登9		18C後～19C前	C	I4	畦上　掘削土中	(7.8)			胎土　黒斑有り 焼成　良好 調整　外面に釉がかかる、内外面にナマコ釉がかかる、内面糸切り痕？、合わせ口部削り出し 色調　素地2.5Y8/2灰白色　灰釉5Y7/2灰白色 ナマコ釉5PB6/1青灰色	口縁部1/7強 体部一部
266	灰釉陶器碗	O-53併行	助宗	10C初	D	G2	掘削土中		(7.4)		胎土　1㎜以下の白色粒子含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台 色調　2.5Y7/1灰白色	体下部1/6 高台部1/2
267	小碗	Ⅰ-2	東遠系	12C中	D	G2	水田面		(5.0)		胎土　白色粒子わずかに含む 焼成　良好 調整　底部糸切り後ナデ 色調　7.5Y6/1灰色	体部一部 高台部1/5
268	山茶碗	Ⅱ	東遠系	12C後～13C初	D	G2	水田 礫混灰色粘土層		(7.8)		胎土　長石わずかに含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台 色調　N6/　灰色	体部一部 高台部1/5
269	白磁碗	Ⅳ類	中国	12C	D	G2	褐色粘土層				胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　素地5Y8/1灰白色　白磁釉7.5Y8/1灰白色	口縁部一部
270	山茶碗	Ⅲ-1	東遠系	13C初～13C中	D	G2	畦端 礫混灰色粘土層		(6.6)		胎土　2.8㎜大の礫、径1㎜以下の白色・黒色粒子含む 焼成　良 調整　底部糸切り痕、貼り付け高台、内面重ね焼き痕 色調　5Y6/1灰色	体下部一部 高台部1/2
271	小皿	Ⅲ	東遠系	13C代	C	I4	畦の少し上 掘削土中	(8.0)			胎土　長石、2㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面ナデ 色調　5Y7/1灰白色	口縁部1/8 体部一部
272	青磁 蓮弁紋碗	B1	中国	13C中～14C前	D	I2	礫混灰色粘土層				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面蓮弁文 色調　素地2.5Y7/1灰白色 青磁釉10GY8/1明緑灰色	体部一部
273	鉄錆 天目茶碗	後期Ⅲ	古瀬戸	15C前	D	G2	掘削土中	(11.6)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる 色調　素地7.5Y8/1灰白色　釉10YR2/2黒褐色	口縁部1/10 体部一部
274	白磁小皿	B群	中国	15C前	D	G2	掘削土中				胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、内外面つけがけ 色調　内面5Y3/1オリーブ黒色 外面2.5Y8/2灰白色　釉2.5Y7/2灰黄色	高台部欠損 腰部一部
275	甕	中野9	常滑	15C前	D	G2	畦端				胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良 調整　内面ナデ 色調　内面5Y7/1灰白色　外面2.5Y8/2灰白色	口縁部一部
276	黄天目茶碗	登1か登2に併行	美濃焼	17C初	D	I2	褐色粘土層	(11.6)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　不良 調整　焼成不良の為鉄釉の発色不良(本来は黒褐色) 色調　2.5Y7/4浅黄色	口縁部～体部一部
277	鉄釉擂鉢	大4	志戸呂	16C末～17C初	D	G1	褐色粘土の上の層 褐色粘土層		(10.4)		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、外面鉄釉がかかる、一部鉄釉をかき落とす 色調　外面10YR6/4にぶい黄橙色 内外面5YR2/1黒褐色	体部1/11 底部1/5

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
278	鉄釉 天目茶碗	登1か 登2	美濃	17C前	D	G1	褐色粘土層				胎土　長石、4㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる、外面ヘラ削り？ 色調　素地2.5Y7/2灰黄色 釉7.5Y3/2オリーブ黒色	体部一部 腰部1/6
279	錆釉擂鉢		志戸呂	17C前	D	I2	礫混灰色粘土層	(28.4)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面一部と外面全体に降灰釉付着、全体に錆釉がかかる 色調　内外面10YR3/2黒褐色 断面10YR6/3にぶい黄橙色	口縁部約1/15 体部一部
280	錆釉擂鉢		志戸呂	16C末	D E	G2　F2	掘削土中	(31.0)			胎土　緻密、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面一部降灰釉付着、錆釉がかかる 色調　素地7.5YR4/1褐灰色 断面10YR6/3にぶい黄橙色 錆釉7.5YR5/3にぶい褐色	口縁部約1/11 体上部1/19
281	かわらけ			16C	D	H2	掘削土中		(6.2)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　やや不良 調整　摩耗の為不明 色調　7.5YR7/4にぶい橙色	底部1/4強
282	かわらけ			16C	D	H1	掘削土中		(6.4)		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　甘い 調整　摩耗の為不明 色調　7.5Y8/6浅黄橙色	体部一部 底部1/7弱
283	かわらけ			16C	D	I2	褐色粘土上層				胎土　細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為不明　体部径(12.6cm) 色調　7.5YR7/6橙色	体部一部
284	鉄釉香炉		志戸呂	17C前	E	不明	褐色粘土層	(10.4)			胎土　1㎜大の細砂、長石含む 焼成　良好 調整　内面口縁部付近と外面に鉄釉がかかる 色調　素地5YR5/3にぶい赤褐色 釉10YR2/1黒色	口縁部1/9
285	染付　皿		伊万里	18C	D E	H1　E2	水田面 掘削土中	(10.4)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　素地7.5Y7/1灰白色　染付10BG6/1青灰色	口縁部1/10弱 体上部1/10
286	染付　皿		伊万里	18C	D	G1かG2	不明	(12.6)			胎土　緻密、長石含む 焼成　良好 調整　内外面に染付 色調　素地7.5Y8/1灰白色　釉10Y8/1灰白色 釉5B4/1明青灰色	口縁部1/25 体部1/12
287	染付 丸茶碗		伊万里	18C	D	I2	褐色粘土層上層				胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に染付 色調　素地10Y8/1灰白　釉5B4/1明青灰色	体部一部
288	黄釉 片口鉢	登4	瀬戸	18C 中葉	D	I2	褐色粘土層	(13.4)			胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1灰白色　釉2.5Y5/4黄褐色 2.5Y3/3暗オリーブ褐色	口縁部1/11 体上部一部
289	白磁盃			19C前	D	I2	褐色粘土の上層		(2.8)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　素地N8/　灰白色　釉5GY7/1明オリーブ色	体下部1/4 高台部1/4
290	原始灰釉 長頸瓶	O-10 併行	猿投	8C末	D E	F2　G4	水田面　畦の横 灰色粘土層				胎土　長石含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　外面灰釉？降灰釉？がかかる、外面ヘラ削り 色調　素地5Y6/1灰色　釉7.5Y5/2灰オリーブ色	胴部1/4
291	灰釉陶器 手付瓶	K-90 併行	猿投	9C後	E	G2　G3 F2	掘削土中 褐色粘土層		(11.4)		胎土　2㎜大の長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部糸切り後ナデ、一部糸切り後ヘラ削り　内外面自然釉付着 色調　7.5Y8/1灰白色	体部一部 高台部1/4
292	灰釉陶器 皿	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	水田面		(8.0)		胎土　3㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　貼り付け高台、内面一条の圏線あり 色調　2.5Y7/2灰黄色 灰釉2.5GY7/1明オリーブ灰色	体部一部 高台部1/4
293	灰釉陶器 長頸瓶	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2　F2	掘削土中　褐色粘土層		(8.4)		胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　外面ヘラ削り 色調　5Y7/1灰白色	底部1/16

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
294	灰釉陶器 碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	畦上		(6.2)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　貼り付け高台 色調　7.5Y7/1灰白色	高台部1/7
295	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	水田の一番下層		(5.2)		胎土　1㎜以下の長石含む 焼成　良好 調整　歪み著しい、外面摩耗の為不明 色調　内面5Y6/1灰色　外面5Y7/1灰白色	体下部～底部1/5
296	糸切り碗	O-53 併行	東遠系	10C初	E	E2	畦	(11.7)			胎土　長石、1㎜大の細砂、2㎜以下の白色粒子 焼成　良好 調整　内面ヘラ削り 色調　素地5Y7/1灰白色　口縁部N4/　灰色	口縁部1/15 体上部1/11
297	小碗	I	東遠系	12C中 ～ 12C後	E	F3　E2	掘削土中 水田面		(5.2)		胎土　長石、2㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り後ナデ、貼り付け高台 色調　N6/　灰色	体部一部 高台部1/2
298	片口鉢		瀬戸	13C後	E	G3	水田面				胎土　3？8㎜大の礫含む 焼成　良 調整　外面ヘラ削り 色調　10YR7/1灰白色	体下部1/8弱 底部わずかに残存
299	青磁茶碗	A-2類	中国	12C ～ 13C初	E	G2	検出面 掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　内面に櫛描文を有する 色調　素地7.5Y8/1灰白色 青磁釉10Y6/2オリーブ灰色	体部一部
300	青磁 蓮弁紋 折縁皿	A類	中国	14C末 ～ 15C初	E	E3	掘削土中(畦横)				胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に削って文様を入れている 色調　5GY6/1オリーブ灰色	口縁部～体上部 1/12
301	常滑　甕	中野 (6a)	常滑	13C後	E	F2	掘削土中	(26.0)			胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内面降灰釉付着 色調　10R4/1暗赤灰色 釉7.5Y6/3オリーブ黄色　断面5Y7/1灰白色	口縁部1/25
302	小皿	Ⅲ	東遠系	13C代	D E	E2　G2	掘削土中　畦上	(8.3)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面降灰釉付着 色調　N7/　灰白色	口縁部1/6 体部1/8
303	青磁茶碗		中国	14C元	E	F2	掘削土中 灰色粘土層	(14.0)			胎土　緻密、長石含む 焼成　良好 調整　カンニュウが入っている 色調　10Y5/2オリーブ灰色	口縁部～体部1/16
304	黒褐色釉 花瓶		東南 アジア タイ？	17C前	E	F2	検出面	(8.2)			胎土　長石、4㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　外面に釉がかかる 色調　素地5YR5/2灰褐色　釉N2/　黒色	口頸部1/4弱
305	青磁茶碗	A類	中国 同安？	12C後	E	F3	掘削土中		(5.2)		胎土　緻密、長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内面全体に灰釉？がかかる 色調　素地5Y7/1灰白色 青磁釉10Y5/2オリーブ灰色	1/3強
306	灰釉平碗	後期 Ⅳ古	瀬戸	15C 中葉	E	G3	掘削土中	(17.0)			胎土　長石含む 焼成　良 調整　外面に釉がかかる 色調　素地5Y8/2灰白色 灰釉2.5GY6/1オリーブ灰色	口縁部1/13 体部一部
307	青磁盤		中国	14C末	E	G3	検出面	(21.4)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　削って文様を入れている 色調　5GY7/1明オリーブ灰色	口縁部1/12
308	青磁 蓮弁紋 茶碗	B2類	中国	14C末 ～ 15C初	E	E3	掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　蓮弁紋茶碗 色調　素地N8/1灰白色 釉5GY6/1オリーブ灰色	口縁部一部 体部1/12
309	緑釉小皿	後期 Ⅲか Ⅳ古	瀬戸	15C前	E	C4	掘削土中		(5.4)		胎土　長石含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、外面長石釉？がかかる 色調　2.5Y8/2灰白色	体部一部 底部1/4
310	緑釉小皿		瀬戸	15C前	E	E2	掘削土中		(5.6)		胎土　1～2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、内外面に釉がかかる 色調　2.5Y8/2灰白色	体下部～底部5/16

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
311	灰釉平碗	後期Ⅲ	瀬戸	15C前	E	E3　F3	掘削土中	(20.1)			胎土　長石、2㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる、内面に火を受けた痕あり 色調　素地5Y7/1灰白色　釉5Y6/3オリーブ黄色	口縁部～体上部1/19 体下部1/9
312	染付小皿		中国	15C中	E	G1	掘削土中		(3.5)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に染付 色調　素地N8/　灰白色　染付群青色	体部わずかに残存 高台部1/11
313	瀬戸灰釉柄付片口	中期Ⅲか Ⅳ	古瀬戸	14C中葉	E	D3	掘削土中				胎土　緻密、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 色調　口縁部付近釉5Y4/4暗オリーブ色 内外面釉5Y6/3オリーブ黄色	口縁部付近～体部1/8
314	灰釉下し皿	後期Ⅱ	瀬戸	15C頃	E	E2	掘削土中	(14.5)			胎土　1㎜以下の白色・黒色粒子含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる、外面指頭痕残存 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉7.5Y6/2灰オリーブ色	口縁部1/36 体上部1/9
315	鉄釉壺か瓶	大か？登か？	瀬戸	不明	E	E2	掘削土中				胎土　1～1.5㎜の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる、外面ヘラ削り 色調　7.5YR4/3褐色	体部1/5
316	灰釉平碗	後期Ⅳ	瀬戸	15C中～15C後	E	C3	畦上		(6.0)		胎土　長石含む 焼成　良 調整　底部ヘラ削り、炭化物付着、削り出し高台、外面ヘラ削り、内面灰釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉7.5Y6/3オリーブ黄色	体部一部 高台部1/2強
317	卸目付き大皿	後期Ⅳ古	瀬戸	15C中葉	E	E3	掘削土中	(27.0)			胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　不良 調整　内外面に釉がかかる 色調　2.5Y8/2灰白色	口縁部～体部1/24
318	青磁茶碗		中国	15C	E	D4	水田中層	(13.0)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　素地7.5Y8/1灰白色 青磁釉7.5Y6/2灰オリーブ色	口縁部1/20
319	緑釉小皿	後期Ⅳ新	瀬戸	15C後	E	E2	掘削土中	(10.4)			胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面口縁部に灰釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉10Y5/2オリーブ灰色	口縁部～体部1/6
320	錆釉擂鉢	三ツ沢	志戸呂	15C後	E	C4	掘削土中	(20.9)			胎土　4㎜大の礫含む 焼成　良 調整　全体に錆釉がかかる、外面指頭痕残存 色調　2.5Y5/4にぶい赤褐色	口縁部1/14
321	錆釉擂鉢	三ツ沢	志戸呂	15C後	E	E2	掘削土中	(17.6)			胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 色調　内外面5YR5/4にぶい赤褐色 断面5YR7/2明褐灰色	口縁部1/11 体部一部
322	錆釉擂鉢	三ッ沢期	志戸呂	15C後	E	F3	検出面	(28.0)			胎土　5㎜大、2.5㎜以下の礫含む 焼成　良 調整　断面に炭化物付着 色調　7.5YR6/4にぶい橙色	口縁部1/12 体部一部
323	錆釉擂鉢	三ツ沢	志戸呂	15C後	E	E2　F2	SF3 礫混灰色粘土層 掘削土中	(29.2)			胎土　4㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　錆釉がかかる 色調　内面5YR4/1褐灰 外面(錆釉)7.5YR5/3にぶい褐色　断面5YR6/3にぶい橙色	口縁部約1/11 体上部約1/20
324	錆釉擂鉢	三ッ沢期	志戸呂	15C後	E	G2	検出面				胎土　2.5㎜大の礫、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　10YR6/4にぶい黄橙色　釉7.5YR4/3褐色	
325	鉄釉小皿	三ッ沢	志戸呂	15C後	E	G3	掘削土中	(10.2)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面口縁部に鉄釉がかかる 色調　5B5/1青灰色	口縁部～体部1/12
326	青磁碗	E類	中国	15C後～16C前	D E	G1　E2	畦上層 掘削土中		(5.0)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　素地n8/　灰白色 青磁釉7.5Y5/3灰オリーブ色	体部一部 高台1/4

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
327	白磁小皿		中国	15C後	E	G3	掘削土中		(4.0)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　5Y8/1灰白色	体部一部 高台部1/11
328	錆釉擂鉢	後期Ⅳ新	瀬戸	15C後	E	E1	掘削土中	(31.2)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　全体に錆釉がかかる 色調　素地10YR8/3浅黄橙色 錆釉5YR4/2灰褐色	口縁部1/20
329	灰釉 腰折皿	後期Ⅳ新	古瀬戸	15C後	E	E3	掘削土中		(4.8)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部、外面ヘラ削り、削り出し高台、内面目跡あり 色調　素地2.5Y8/2灰白色　釉7.5Y7/2灰白色	体部わずかに残存 高台部1/5
330	錆釉擂鉢	後期Ⅳ新	瀬戸	15C末	E	F2	掘削土中	(26.4)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に錆釉がかかる 色調　7.5YR4/1褐灰色　断面2.5Y8/2灰白色	口縁部1/30 体部わずかに残存
331	鉄釉 天目茶碗	大1	瀬戸	15C末～16C初	E	G3	直上層		4.2		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　高台全面に錆釉がかかる、削り出し高台、内面鉄釉がかかる 色調　断面10YR7/4にぶい黄橙色 鉄釉10YR3/1黒褐色　錆釉7.5YR3/1黒褐色	高台部3/4
332	鉄釉 天目茶碗	大1	瀬戸	15C末～16C初	E	E2	掘削土中				胎土　1㎜以下の白色粒子含む 焼成　良好 調整　全体に鉄釉がかかる、外面ヘラ削り？ 色調　素地2.5Y7/1灰白色 鉄釉2.5Y5/2暗灰黄色	体部1/5強
333	灰釉丸碗	大1	美濃	15C末～16C初	E	F3	検出面				胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　貼り付け高台、高台部欠損 色調　2.5Y8/2灰白色　釉7.5Y6/3オリーブ黄色	体部一部 底部1/4
334	端反 丸皿	大1か大2	美濃	16C初～16C中	E	E3	掘削土中		(6.4)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内外面に青磁釉がかかる 色調　素地5Y7/1灰白色　内面5GY7/1明オリーブ灰色　高台部7.5GY7/1明緑灰色	体部一部 高台部1/4
335	錆釉擂鉢	後期Ⅳ新	瀬戸	15C末	E	E3	掘削土中		(9.2)		胎土　緻密 焼成　良 調整　底部糸切り痕、炭化物付着、錆釉がかかる、二次焼成を受けている可能性あり 色調　錆釉5YR4/1褐灰色　地5Y8/1灰白色	体下部4/5 底部7/10
336	鉄釉 天目茶碗 加工円板	後期Ⅳ古	古瀬戸	15C中葉	E	E3	検出面		4.2		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内面に鉄釉がかかる、火を受けた可能性あり 色調　素地5Y7/1灰白色　釉5YR2/1黒色	体部一部 高台部ほぼ完形
337	白磁 輪花皿		中国	16C中	D E	G2	掘削土中 褐色粘土層 検出面	(10.2) ？			胎土　緻密 焼成　良好 調整　内面に竹の図柄、内面型打ち、外面にわずかに凹凸有り、口縁部波状にカットしている 色調　白色	口縁部1/8弱 体部一部
338	絵唐津鉢		唐津	16C後	E	F2	掘削土中				胎土　4㎜大の礫、わずかに細砂含む 焼成　良好 調整　外面回転ヘラ削り、内面釉がかかる 色調　釉5Y6/2灰オリーブ色 外面5YR6/1褐灰色	体下部1/8
339	鉄釉丸皿	大3	美濃	16C後	E	G3	畦上	(12.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 色調　10YR4/6褐色	口縁上半部1/8
340	灰釉丸皿 か端反皿	大1か大2	美濃	16C後	E	F2	撹乱		(6.0)		胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　不良 調整　内外面に釉がかかる、貼り付け高台、底部削り後ナデ 色調　釉(薄)2.5Y5/3黄褐色 釉(濃)2.5Y4/2暗灰色	高台部1/4
341	灰釉丸皿	大4	美濃	16C末～17C初	D E	I1　I2 F2	掘削土中 砂混じり 灰色粘土層 褐色粘土層	(10.0)	(5.4)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、施釉は高台部までか？、内面ロクロ水挽き 色調　断面2.5Y8/2灰白色 釉2.5Y6/4にぶい黄色	口縁部～体部約1/5 底部約1/9

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
342	灰釉丸皿か端反皿	大1か大2	美濃	16C後	E	E3　F3	掘削土中		(6.0)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部サヤに入れて焼いた痕、貼り付け高台　内外面釉がかかる 色調　内面10Y5/2オリーブ灰色 外面体部10Y7/2灰色　高台部10Y4/2オリーブ灰色	底部1/2弱 高台部2/5
343	灰釉丸皿か端反皿	大1か大2	美濃志野	16C後	E	E2	掘削土中		(6.2)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内外面釉がかかる 色調　断面5Y8/1灰白色　釉2.5Y7/1灰白色	高台部1/12
344	灰釉丸皿	大2か大3	美濃	16C中～16C後	E	F3	掘削土中		(6.8)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる、貼り付け高台、高台部欠損 色調　内面10Y6/2オリーブ灰色 外面5Y7/3浅黄色	底部1/8
345	灰釉丸皿	大2か大3	美濃	16C中～16C後	E	F2	掘削土中　畦上		(7.0)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　16弁菊花、削り出し高台、外面に青磁釉がかかる 色調　素地7.5Y7/1灰白色 内面釉7.5Y6/3オリーブ黄色　高台部釉7.5Y5/3灰オリーブ色	体部一部 高台部1/6
346	鉄釉天目茶碗		志戸呂	16C後	E	C4	掘削土中	(12.0)			胎土　長石、2㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面鉄釉がかかる、内面一部曜変 色調　素地5Y7/1灰白色　釉7.5YR2/1黒色	口縁部～体上部1/11
347	鉄釉天目茶碗		志戸呂	16C後	E	G1　F2	検出面 掘削土中				胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　全体に鉄釉がかかる 色調　素地10YR6/2灰黄褐色 鉄釉2.5Y3/2黒褐色	体部1/10強
348	鉄釉天目茶碗		志戸呂	16C後	E	E3	掘削土中	(12.5)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる 色調　素地5Y6/1灰色　釉10YR5/2灰黄褐色	口縁部1/12 体部1/9
349	鉄釉天目茶碗		志戸呂	16C後	E	F3	掘削土中		(5.4)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内面全体に鉄釉がかかる 色調　外面5YR6/4　鉄釉N2/　黒色	高台部1/5
350	鉄釉天目茶碗		志戸呂	16C後	E B	E2　I6	掘削土中 畦の横	(12.2)			胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる 色調　素地10YR6/1褐灰色　釉10YR2/1黒色	口縁部1/15 体部1/9
351	灰釉中皿		志戸呂	16C後	E	F2	掘削土中	(10.4)			胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面に灰釉がかかる 色調　10YR5/1褐灰色　釉5Y4/2灰オリーブ色	口縁部1/18 体部一部
352	鉄釉茶入		志戸呂	16C後	E	E2	掘削土中		(4.4)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、内外面鉄釉がかかる 色調　素地7.5YR6/2灰褐色 釉7.5YR2/3極暗褐色	底部1/3
353	鉄釉小壺(茶入)		志戸呂	16C後	E	E3	掘削土中		(4.0)		胎土　長石、6㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り？、内面鉄釉がかかる、外面ヘラ削り？ 色調　断面7.5Y5/1　鉄釉7.5Y2/　黒色	体部一部 底部1/2
354	鉄釉小杯		志戸呂	16C後	E	G2	掘削土中	(8.0)			胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる、内面指頭痕残存 色調　10YR2/3黒褐色	口縁部～体部1/12
355	鉄釉香炉		志戸呂	16C後	E	F2	土手の端	(12.6)			胎土　1㎜大の細砂、長石含む 焼成　良好 調整　口唇部に鉄釉をかけず内面口縁部と外面に鉄釉がかかる 色調　外面7.5YR4/3褐色　7.5YR6/4にぶい橙色　7.5YR2/1黒色	口縁部1/10
356	鉄釉香炉		志戸呂	16C後	E	F2	掘削土中 検出面	(13.4)			胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面、口唇部に鉄釉がかかる 色調　内面7.5YR5/4にぶい褐色 外面10YR3/3暗褐色　10YR2/3黒褐色	口縁部1/20

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
357	鉄釉香炉		志戸呂	16C後	E	F3	掘削土中	(11.8)			胎土　2㎜大の細砂、長石含む 焼成　良好 調整　口唇部に鉄釉をかけず内面かえり部と外面に鉄釉がかかる 色調　素地10YR7/1灰白色　釉10YR2/2黒褐色 10YR5/1褐灰色	口縁部1/14
358	鉄釉小皿		志戸呂	16C後	D E	I2　E2	褐色粘土の上層掘削土中	(9.6)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　全体に鉄釉がかかる 色調　10YR4/1褐灰色	口縁部1/8 体部一部
359	鉄釉徳利		志戸呂	16C後	E	E2	掘削土中	(6.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面鉄釉がかかる 色調　素地7.5YR6/2灰褐色 釉5Y5/3灰オリーブ色7.5Y2/3極暗褐色	口縁部1/4
360	灰釉小皿		志戸呂	16C後	E	E2	掘削土中	(8.4)			胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に灰釉がかかる 色調　素地7.5Y6/1灰色 釉7.5Y5/2灰オリーブ色	口縁部～体部1/6
361	灰釉中皿		志戸呂	16C後	E	F3	掘削土中		(6.0)		胎土　長石含む 焼成　良好 調整　底部に灰釉の指頭痕残存、削り出し高台？ 色調　7.5YR5/3にぶい褐色	高台部1/6
362	口禿皿		志戸呂	16C後	E	E2	掘削土中		5.4		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、削り出し高台、内面重ね焼き痕、釉は灰釉か？ 色調　素地2.5YR5/2灰赤色　釉5Y8/3淡黄色	高台部1/2
363	鉄釉 内禿皿		志戸呂	16C後	E	E3	掘削土中		(6.0)		胎土　長石含む 焼成　良好 調整　内面一部に鉄釉がかかる、削り出し高台？ 色調　外面10YR6/3にぶい黄橙色 内面7.5YR6/3にぶい褐色　鉄釉5Y2/1黒色	体部一部 高台部1/7
364	鉄釉小壺		志戸呂	16C後	E	F3	掘削土中	(9.8)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面鉄釉がかかる 色調　2.5Y6/3にぶい黄色	口縁部～体部1/8
365	鉄釉壺		志戸呂	16C後	E	F2	検出面		(9.1)		胎土　1mm大の細砂、白色粒子含む 焼成　良好 調整　外面鉄釉がかかる 色調　素地7.5Y5/1灰色　釉2.5Y3/1黒褐色	底部1/15
366	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	G2	検出面 風化礫混黒色粘土層				胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　錆釉がかかる 色調　7.5YR5/3にぶい褐色 断面10YR7/1灰白色	体部一部
367	擂鉢		志戸呂	16C後	E	C3	掘削土中	(20.0)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明 色調　10YR7/3にぶい黄橙色	口縁部1/12
368	鉄釉壺		志戸呂	16C後	E	G2	検出面 掘削土中		(10.6)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　外面と底部ヘラ削り、外面鉄釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1灰白色　釉10YR2/1黒色	体部わずかに残存 底部約1/6
369	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	D4	掘削土中				胎土　長石、1㎜大の細砂多く含む 焼成　良好 調整　外面に錆釉がかかる 色調　7.5YR7/6橙色　釉7.5YR4/2灰褐色	
370	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	E2　F2	掘削土中		(7.5)		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　外面ヘラ削り後ナデ？、一部に錆釉がかかる、櫛目8本か？ 色調　5YR5/3にぶい赤褐色	体部～底部1/3
371	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	F3	掘削土中	(22.4)			胎土　4㎜大の礫含む 焼成　良好 色調　内外面10YR4/2灰黄褐色 断面7.5YR6/3にぶい褐色	口縁部1/20 体部一部
372	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	D3	掘削土中	(30.0)			胎土　3？6㎜大の礫含む 焼成　不良 調整　摩耗の為不明、粗雑な作り 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	口縁部～体部1/12

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
373	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	F2	整地層	(27.0)			胎土　3㎜以下の礫、微細の白色粒子含む 焼成　良好 調整　全体に錆釉がかかる 色調　素地5YR7/6橙色　錆釉5YR1/3黒褐色	口縁部1/13
374	鉄釉鉢		志戸呂	16C後	E	E2	掘削土中	(22.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面鉄釉がかかる、口唇部に重ね焼き痕 色調　内面7.5Y5/2灰オリーブ色 外面2.5Y5/3黄褐色	口縁部1/8
375	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	E2	掘削土中		(10.0)		胎土　2㎜大の細砂、1㎜以下の長石含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、外面指頭痕残存、一部に錆釉がかかる 色調　2.5YR5/6明赤褐色	体部1/12 底部1/8
376	錆釉擂鉢		志戸呂	16C後	E	C3	検出面より上の層		(14.2)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　甘い 調整　底部糸切り痕、外面指頭痕残存、摩耗の為不明 色調　10YR7/4にぶい黄橙色	体部～底部1/8
377	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	F3	検出面	(10.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面ロクロ水挽き 色調　断面10YR8/1灰白色　釉10YR7/1灰白色	口縁部1/11 体部わずかに残存
378	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	F3	検出面		(5.4)		胎土　3㎜以上の礫含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内面ロクロ水挽き 色調　断面2.5Y7/1灰白色　釉2.5Y7/2灰黄色	高台部約1/8
379	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	F2	掘削土中		(6.6)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台　内面ロクロ水挽き 色調　断面2.5Y8/2灰白色　釉5Y8/2灰白色	体部一部 高台部1/14
380	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	E2	掘削土中		(7.2)		胎土　4㎜大の礫含む 焼成　良 調整　削り出し高台？ 色調　5Y8/1灰白色	体部一部 高台部1/8
381	灰釉志野丸皿	連房1	志野	17C前	E	E2	掘削土中	(11.5)	(6.3)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部内面墨書 色調　断面10YR8/2灰白色　釉5Y7/2灰白色	口縁部1/15 高台部1/4
382	志野鉄絵小皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	E2	掘削土中				胎土　長石含む 焼成　良好 調整　内面鉄絵、底部最大厚　0.6cm 色調　外面2.5Y8/2灰白　内面10YR8/2灰白	底部一部
383	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	F1	整地層	(12.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　2.5Y7/2灰黄色	口縁部1/16 体部一部
384	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	F2　G2	掘削土中	(10.2)			胎土　1㎜大の細砂、3㎜大の長石含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　2.5Y7/2灰黄色	口縁部1/17 体部一部
385	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	F3	掘削土中		(6.2)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、削り出し高台 色調　5Y8/1灰白色	体部一部 高台部1/10
386	志野鉄釉絵小皿	登1か登2	志野	17C前	E	F2　F3	検出面 掘削土中		(6.8)		胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内面墨書？ 色調　10YR7/2にぶい黄橙色	体部わずかに残存 高台部約1/12
387	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	不明	不明		(8.2)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　貼り付け高台？、内外面釉がかかる 色調　断面2.5Y8/2灰白色　釉2.5Y7/3浅黄色	高台部1/19
388	志野丸皿	登1か登2	美濃	17C前	E	E2　G3	検出面 掘削土中	(11.9)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる 色調　断面2.5Y8/1灰白色　釉5Y8/1灰白色	口縁部1/7
389	志野丸皿	登1か登2	美濃志野	17C前	E	E2	掘削土中		(5.8)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り？、削り出し高台、内外面釉がかかる、内面底部にピン跡あり 色調　断面2.5Y8/2灰白色　釉2.5Y7/2灰黄色	高台部1/14

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
390	志野丸皿	登1か 登2	美濃志野	17C前	E	F2	掘削土中	(11.5)			胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる 色調　断面10YR8/6黄橙色　釉7.5Y8/1灰白色	口縁部1/13
391	志野 丸茶碗	登8か 登9	？	18C末 ～ 19C初	E	G2	掘削土中		(4.4)		胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる 色調　断面2.5Y7/1灰白色　釉2.5Y7/2灰白色	体下部1/6
392	常滑　甕		常滑	16C	E	E2　F1 F2	掘削土中		(13.0)		胎土　長石、3㎜大の礫含む 調整　外面指頭痕あり 色調　2.5YR6/6橙色　2.5YR5/3にぶい赤褐色	体下部1/8 底部1/8弱
393	常滑　甕		常滑	16C？	E	E1　E2	検出面 掘削土中				胎土　長石含む 焼成　良好 調整　外面自然釉がかかる 色調　内面10YR6/2灰黄褐色　外面7.5YR4/2灰褐色　断面2.52Y8/1灰白色　釉10YR8/2灰白色	肩部残存
394	総織部 丸茶碗？	登6か 登7	美濃	18C 中葉	E	G2	掘削土中	(10.4)			胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　織部が還元したもの、内外面に釉がかかる 色調　2.5Y5/4黄褐色	口縁部～体部1/8
395	鉄釉 天目茶碗	登3	美濃	17C後	E	F1	検出面		(4.8)		胎土　長石、1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り？、貼り付け高台、内面全体に鉄釉がかかる 色調　外面5Y8/1灰白色　鉄釉10YR1.7/　黒色	体部一部 高台部1/2
396	志野小皿	登1か 登2	美濃志野	17C前	E	F2	検出面 灰色粘土層	(12.8)			胎土　2㎜大の細砂含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる、外面ヘラ削り後ナデ 色調　5Y8/1灰白色　断面5Y8/2灰白色	口縁部1/6 体部一部
397	志野丸皿	登1	美濃志野	17C前	E	E2	掘削土中	(12.2)	(12.2)	2.5	胎土　3㎜大の礫含む、黒斑有り 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる、外面ヘラ削り後ナデ 色調　5Y7/1灰白色	口縁部1/6 体部一部
398	鉄絵皿	登1	美濃志野	17C前	E	G2	掘削土中	(11.6)	(6.5)		胎土　1㎜大の細砂含む、もぐさ土？ 焼成　良好 調整　内面全体に絵付けしている、削り出し高台 色調　素地5Y8/2灰白色　釉2.5Y8/2灰白色 染付7.5YR3/2黒褐色	口縁部1/24 体部～底部1/11
399	志野丸皿	登2	美濃志野	17C前 の 遅い方	E	G3　F2	土坑内 検出面 掘削土中	(12.6)	(8.0)	2.35	胎土　長石、2㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、削り出し高台、内外面釉がかかる 色調　断面2.5Y8/2灰白色 外面底部2.5Y8/1灰白色　釉5Y8/2灰白色	口縁部～体部1/6 高台部1/4
400	鉄釉 天目茶碗	登3	瀬戸	17C中	E	F2	土坑内 掘削土中	(11.1)			胎土　9㎜大の礫含む 焼成　良 調整　内外面鉄釉がかかる 色調　素地10YR8/2 釉5YR4/3にぶい赤褐色N2/　黒色	口縁部1/15 体部1/7
401	錆釉擂鉢		志戸呂	17C初	E	G2　G3	畦上				胎土　3～9㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　錆釉がかかる、体部と底部接合点無し 色調　5YR5/2灰褐色　断面7.5YR8/4浅黄橙色	体部一部 底部一部
402	鉄釉香炉		志戸呂	17C前	E	E3	掘削土中		(11.0)		胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部糸切り痕、外面ヘラ削り、鉄釉がかかる 色調　素地2.5Y6/1黄灰色　釉N1.5/　黒色	体部一部 底部1/9
403	鉄釉香炉		志戸呂	17C前	E	F2	検出面　掘削土中	(9.4)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面口縁部一部と外面鉄釉がかかる 色調　素地5PB5/1青灰色 釉5Y2/2オリーブ黒色	口縁部1/8
404	鉄釉小皿		志戸呂	17C中	E	G2　F2	検出面 掘削土中 整地層	(12.3)	(5.2)	3.2	胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、内外面鉄釉がかかる、外面一部ヘラ削り 色調　素地2.5Y6/3にぶい黄色　釉10YR2/1黒色	口縁部～体部1/6 高台部1/4

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
405	緑釉 端反碗	登1	美濃	17C前	E	F2　G2	検出面 整地層 灰色粘土層黄色 砂混じり	(11.7)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面に灰釉がかかる、外面一部ヘラ削り 色調　釉7.5Y5/3灰オリーブ色	口縁部1/11 体部1/7
406	灰釉丸皿	登5か 登6	美濃	18C前	E	E2	掘削土中		(7.4)		胎土　長石、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削りか？、指頭痕残存 色調　素地2.5Y7/1灰白色 釉5Y6/3オリーブ黄色	体部～高台部1/7 底部1/8
407	灰釉丸皿	登5か 登6	美濃	18C前	E	G1	砂利層	(9.4)	(4.2)	2.4	胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、削り出し高台、内外面に釉がかかる(つけがけ)、内面重ね焼き痕あり、外面一部ヘラ削り 色調　素地2.5Y7/1灰白色　釉5Y7/2灰白色	体部1/9 高台部1/4
408	鉄釉 端反碗	連房4 か5	瀬戸	17C後 ～ 18C初	E	F3	水田面 掘削土中	(11.4)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる 色調　素地2.5Y8/2灰白色　釉7.5Y4/2灰褐色	口縁部1/20 体部1/10
409	鉄釉 天目茶碗	連房4	瀬戸	17C後 第4期	E	C3	掘削土中		5.15		胎土　3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、内外面鉄釉がかかる 色調　素地2.5Y7/2灰黄色　釉7.5YR1.7/1黒色	高台部ほぼ完形
410	錆釉擂鉢	登6 小期	瀬戸	18C 前葉	E	F3	掘削土中	(30.0)			胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　錆釉がかかる 色調　2.5YR3/1暗赤灰色　断面10YR8/2灰白色	口縁部約1/32
411	鉄釉丸碗		志戸呂	17C前	E	G3	掘削土中		(5.4)		胎土　1.5㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　貼り付け高台、内外面と底部一部に鉄釉がかかる 色調　素地2.5Y7/1　灰白色 鉄釉5YR3/3暗赤褐色	体部1/7 高台部1/4
412	鉄釉擂鉢	登2	瀬戸	17C 第2 小期	E	E2	掘削土中	(27.6)			胎土　緻密、1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　全体的に錆釉がかかる 色調　素地2.5Y8/2灰白色 錆釉7.5R4/1暗赤灰色	口縁部1/23
413	鉄釉 天目茶碗	登5	美濃	18C初	E	E2	掘削土中	(10.8)			胎土　長石、2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉がかかる 色調　素地2.5Y8/3淡黄色　釉N1.5/　黒色	口縁部1/21 体部1/4
414	錆釉擂鉢		志戸呂	17C後	E	E2	撹乱				胎土　長石、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　全体に錆釉がかかる 色調　10YR6/3にぶい黄橙色	
415	美濃焼 黄瀬戸 菊皿	登5	美濃 黄瀬戸	18C初	E	E2　F2	掘削土中		(6.2)		胎土　白色細砂、3㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　底部ヘラ削り、削り出し高台、内面釉がかかる、外面釉が垂れた痕あり、指頭痕残存 色調　素地7Y8/1灰白色　釉5Y6/6オリーブ色	体部1/5 高台部2/3
416	鉄釉 天目茶碗	登1か 登2	美濃	17C前	E	G2	掘削土中				胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内面全体と外面一部に鉄釉がかかる 色調　断面2.5Y7/1灰白色　鉄釉N2/　黒色	体部一部
417	櫛目文皿		肥前	17C後	E	F2	掘削土中	(12.0)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　内面に青磁釉がかかる、櫛描波状文あり、外面ヘラ削り？ 色調　素地5Y7/1灰白色 青磁釉5Y6/2灰オリーブ色	口縁部1/19 体部一部
418	かわらけ			17C	E	E2	畦上		(6.8)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良 調整　摩耗の為調整不明、回転ロクロ痕 色調　内面5YR7/6橙色　外面2.5YR7/6橙色	体下部1/5強 底部1/7
419	染付 茶碗		伊万里	18C	E	E2	掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　素地5Y8/1灰白色　釉10Y7/1灰白色	体部一部
420	染付 茶碗		伊万里	18C	E	E2　F2	掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　釉5GY7/1明オリーブ灰色　染付　濁青色	体上部1/11

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
421	染付 壺		伊万里	18C	E	E2	掘削土中				胎土 緻密 焼成 良好 調整 外面に染付 色調 外面7.5Y7/1灰白色 断面2.5Y7/1灰白色 染付10Y5/1灰色	体部1/10
422	染付 小盃		伊万里	18C後	E	F3 G2	掘削土中 灰色粘土層 検出面		(3.0)		胎土 緻密、長石、1㎜大の細砂含む 焼成 良好 調整 貼り付け高台、外面に染付 色調 素地2.5Y8/1灰白色 釉10Y8/1灰白色 染付10BG5/1青灰色	体下部1/3 高台部1/2
423	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F3	掘削土中	(7.0)			胎土 緻密 焼成 良好 調整 外面に染付 色調 素地5Y8/1灰白色 白磁釉7.5GY7/1暗緑灰色	口縁部1/16 体部一部
424	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F3	掘削土中	(6.6)			胎土 緻密 焼成 良好 調整 外面に染付 色調 5GY灰白色	口縁部～体部1/8
425	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F2 G3	掘削土中	(11.5)			胎土 緻密 焼成 良好 調整 外面に染付 色調 素地10Y8/1灰白色 染付薄青色 染付(濃)5BG3/1暗青灰色	口縁部1/23 体上部1/25 体下部4/23
426	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F2	掘削土中		(4.0)		胎土 緻密、長石含む 焼成 良好 調整 外面に染付 色調 素地6Y8/1灰白色 釉7.5GY8/1明緑灰色 染付10BG7/1明青灰色	体部一部 高台部1/3強
427	染付 茶碗		伊万里	18C	E	G3	掘削土中	(8.8)			胎土 緻密 焼成 良好 調整 内面に指頭痕残存 色調 5GY7/1明オリーブ灰色 断面N8/ 灰白色 染付5BG5/1青灰色	口縁部～体上部1/19
428	腰錆茶碗	登7か 登8	瀬戸	18C後	E	G3	掘削土中		(6.0)		胎土 1㎜大の細砂含む 焼成 良好 調整 底部糸切り痕、貼り付け高台 色調 内面5Y7/2灰白色 外面7.5YR4/3褐色	体下半部1/10 高台部1/8
429	腰錆茶碗	登8か 登9	瀬戸	18C後 ～ 19C前	E	E2	掘削土中				胎土 1㎜大の細砂、長石含む 焼成 良好 調整 内面と外面上部に御深井釉がかかる、外面下部に鉄釉がかかる 色調 鉄釉10YR2/2黒褐色 御深井釉5Y7/1灰白色 断面2.5Y8/1灰白色	体下部1/8強
430	腰錆茶碗	登8か 登9	瀬戸	18C後 ～ 19C前	E	F3	掘削土中				胎土 1㎜大の細砂、長石含む 焼成 良好 調整 内面御深井釉、外面鉄釉がかかる 色調 鉄釉7.5Y3/1黒褐色 御深釉5Y8/2灰白色 断面5Y7/1灰白色	体下部1/8弱
431	腰錆茶碗	登9か 登10	瀬戸	18C末 ～ 19C初	E	H2	掘削土中		(4.4)		胎土 4㎜大の礫、2㎜以下の細砂含む 焼成 良好 調整 貼り付け高台、外面鉄釉、内面御深井釉がかかる 色調 素地2.5Y7/1灰白色 鉄釉10YR1/2黒褐色？2.5Y5/4黄褐色	体下部1/9 高台部1/12
432	鉄釉徳利		志戸呂	18C後 ～ 19C前	E	E2	掘削土中	(3.8)			胎土 1㎜以下の細砂含む 焼成 良好 調整 内外面に鉄釉がかかる 色調 素地7.5YR3/3暗褐色 釉7.5YR2/2黒褐色	口縁部～体部1/6
433	染付 茶碗		伊万里	19C初	E	F2	土手上				胎土 緻密 焼成 良好 調整 外面に染付 色調 10Y8/1灰白色 釉(濃)藍色 釉(薄)青色	体上部1/9
434	呂宋釉 火入れ			19C初	E	G3	掘削土中				胎土 緻密 焼成 良好 調整 角形(六角) 色調 断面2.5Y8/1灰白色	口縁部一部
435	染付 盃		伊万里	19C前	E	F2	掘削土中		(4.8)		胎土 緻密 焼成 良好 調整 外面に染付 色調 白色 染付藍色	体部一部 底部1/10

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
436	染付 丸茶碗		伊万里	19C前	E	F2	整地層		(3.7) ?		胎土　緻密、長石含む 焼成　良好 調整　高台部欠損、外面に染付 色調　素地10Y7/1灰白色　釉10BG7/1明青灰色　染付5B3/1明青灰色	底部1/5
437	染付 茶碗 (小碗)		伊万里	19C前	E	G2	掘削土中		(3.6)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に染付 色調　素地10Y8/1灰白色　染付青色	体下部一部 高台部1/6強
438	錆釉擂鉢		瀬戸	19C前	E	F3	検出面	(27.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　全体に錆釉がかかる 色調　素地2.5Y8/2灰白色 錆釉2.5YR4/2灰赤色	口縁部1/21
439	錆釉擂鉢	登8	瀬戸	18C後	E	G2	直上層	(28.0)			胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　錆釉がかかる、火を受けた可能性あり 色調　内外面7.5YR4/3褐色 断面2.5Y7/3浅黄色	口縁部1/7
440	飴釉 片口鉢	登6	瀬戸	18C 前の 遅い方	E	G2　G3	掘削土中				胎土　2㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　全体に施釉されている、角縁がかなり摩滅している 色調　釉2.5Y5/4黄褐色　断面2.5Y8/1灰白色	注口部3/5
441	鉄絵鉢	登10 か 登11	瀬戸	19C前	E	F3	掘削土中	(16.6)			胎土　1㎜以下の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に鉄釉の文様あり 色調　素地2.5Y8/3淡黄色　釉2.5Y8/2灰白色　鉄釉2.5Y3/3暗オリーブ褐色	体部一部 口縁部1/11
442	色絵茶碗 (小碗？)			19C前	E	F2	掘削土中		(4.2)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　削り出し高台 色調　素地5Y8/1灰白色　釉5GY8/1灰白色	体部一部 高台部1/12
443	染付 茶碗		伊万里	19C前	E	F2	掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　外面2.5GY7/1明オリーブ灰色　釉(濃)5GY3/1暗緑灰色　釉(薄)5B6/1青灰色	口縁部～体部1/16
444	染付 茶碗		伊万里	19C前	E	E2	掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　白色　染付青色	体部一部
445	鉄絵土瓶			19C前	E	G2	撹乱	(18.0)			胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に鉄釉の文様あり 色調　素地5Y6/1灰色　釉2.5Y8/2灰白色　鉄釉7.5Y3/1オリーブ黒色	体部一部 口縁部1/8強
446	仏餉器	登8か 登9		18C後 ～ 19C前	E	F3	掘削土中		(5.6)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　脚部 色調　2.5Y8/2灰白色	体部一部 高台部1/5
447	染付 小盃		?	19C前	E	F3	掘削土中		(5.0) ?		胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　素地5Y8/1灰白色　染付青色	体下部一部 高台部1/5弱
448	染付 茶碗			19C前	E	F2	掘削土中		(4.0)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　削り出し高台 色調　素地5Y8/1灰白色　釉2.5Y7/3浅黄色	体部一部 高台部1/3強
449	白磁茶碗			19C前	E	F3	掘削土中		(3.8)		胎土　緻密、2㎜大の長石含む 焼成　良好 色調　素地2.5Y8/1灰白色 白磁釉10Y8/1灰白色	1/4強
450	染付 茶碗		伊万里	19C後	E	F2	掘削土中				胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　10BG7/1明青灰色	口縁部～体上部1/12
451	赤絵 仏餉器			19C後	E	G3	掘削土中		(4.6)		胎土　緻密、わずかに黒斑有り 焼成　良好 調整　外面に釉がかかる、赤絵線が2本入る 色調　内面5Y7/1灰白色　外面10Y8/1灰白色　赤絵2.5YR3/4暗赤褐色	脚部1/3

挿図番号	器種・器形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	胎土・焼成・調整・色調	残存率
452	清郷甕 深鉢			10C ～ 11C			表土中				胎土　長石を多量に含む、石英含む 焼成　良好 調整　ナデている 色調　2.5Y5/3黄褐色	
453	白磁小皿		中国	15C後			表土中		(6.8)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　5Y8/1灰白色	体部わずかに残存 高台部1/6強
454	志野菊皿	登1	美濃志野	16C末 ～ 17C初			表土中	(13.2)	(8.2)	2.8	胎土　長石、4㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　内外面釉がかかる、削り出し高台 色調　断面2.5Y8/2灰白色　釉2.5Y7/2灰黄色	口縁部1/14 体部1/7
455	鉄釉 天目茶碗 加工円板	大4 前半	美濃	16C末			表土中		4.2		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台、内面に鉄釉がかかる 色調　素地5Y8/2灰白色　釉10YR3/3暗褐色	体部一部 高台部ほぼ完形
456	鉄釉 天目茶碗	大4 後半	美濃	16C末			表土中		(5.6)		胎土　長石、5㎜大の礫含む 焼成　良好 調整　高台底部糸切り痕、削り出し高台、内面全体に鉄釉がかかる 色調　断面2.5Y7/3浅黄色　鉄釉N2/　黒色	体部一部 高台部1/4
457	鉄釉 天目茶碗	登2か 登3 小期	瀬戸	17C中			表土中				胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　高台部欠損、内外面に鉄釉がかかる 色調　素地2.5Y8/1灰白色　釉7.5YR2/1黒色	露胎部1/6
458	鉄釉 天目茶碗	登5	美濃	18C初			表土中		(4.3)		胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　削り出し高台？内面全体に鉄釉がかかる 色調　断面2.5Y7/2灰黄色　鉄釉2.5Y3/1黒褐色	体部一部 高台部1/5
459	長石釉 丸碗	登8か 登9	瀬戸	18C後 ～ 19C前			表土中	(12.0)			胎土　1㎜大の細砂含む 焼成　良好 調整　内外面に釉がかかる 色調　5Y7/2灰白色　断面5Y7/1灰白色	口縁部1/20 体部一部
460	染付　皿		伊万里	18C			表土中				胎土　緻密、4㎜大の黒色礫含む 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　素地2.5Y7/1灰白色　釉2.5GY8/1灰白色	底部一部
461	片口鉢		尾張	13C前	A		排土中		(16.0)		胎土　3㎜大の長石、3㎜大の礫を含む 焼成　良好 調整　内面と高台部ナデ、外面ヘラ削り 色調　2.5Y8/3	高台部1/3
462	小皿		東遠系	13C前	A		3層	8.1	4.6	1.85	胎土　3㎜大の細砂を含む 焼成 調整　内面に降灰釉、重ね焼き痕 色調　5Y6/1灰	口縁部1/2 底部2/3
463	長石釉 染付呉須		伊万里？	19C前	C		排土中		(4.0)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　外面に染付 色調　生地7.5GY8/1明緑灰　釉5B3/1暗青灰 断面10Y8/1灰	高台部1/2 体下部1/2
464	染付 茶碗			19C前	C		排土中層		(3.8)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　内面、外面に染付 色調　5Y8/1灰白色	高台部1/2弱 体部一部
465	灯明受皿			19C前	C		排土中　C3-4層？	(9.05)	(4.0)		胎土　緻密、空気が入って一部穴があいている 焼成　良好 調整　底部、外面回転ヘラ削り、内面釉がかかる 色調　外面7.5Y8/1灰白色　内面7.5Y6/1灰色	底部1/4 口縁部1/8
466	青磁 連弁紋碗		中国 龍泉窯系	15C明	C		表採層		(5.8)		胎土　緻密 焼成　良好 調整　底部回転糸切り後ヘラ削り、内面・外面に施釉、底部内面に印花文か？ 色調　釉2.5GY6/1オリーブ灰　断面5Y7/1灰白	高台部1/5 体部1/3強
467	土師器 坏			8～9C	不明				(5.0)		胎土　1㎜大の細砂、長石を含む 焼成　良好 調整　摩耗の為不明、体部内面にくぼみあり 色調　N4/灰	底部4/5 体部下半

第６表　木製品一覧表

挿図番号	器　種	時　期	樹　種	木取り	区	グリッド	遺構・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
1	付札状木製品	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6N	掘削土中	19.1	3.9	0.8	上部左右に抉りあり
2	付札状木製品	16C末～19C前	スギ	板目	B	H4S	SR2	28.4	5.4	0.5	上部に1.8×1.4cmの頭部を作り出す
3	付札状木製品	16C末～19C前	スギ	板目	B	I5N	水田面(畦横)	20.8	4.3	0.45	墨書の板材　上端2.2×2.3cmの頭部を作り出す
4	栓	16C末～19C前	スギ	板目	E	E2S	掘削土中	4.2	3.3	3.2	
5	箸	16C末～19C前	スギ	板目	B	H5S	掘削土中	7.4	0.7		
6	箸	16C末～19C前	スギ	板目	B	H5S	水田面(畦端)	8.9	0.6	0.5	
7	箸	16C末～19C前	スギ	斜め柾目	B	H4S	掘削土中	10.1	0.7	0.5	
8	箸	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6N	掘削土中	10.3	0.6	0.6	
9	箸	16C末～19C前	スギ	柾目	B	H5S	掘削土中	10.7	0.6	0.5	
10	箸	16C末～19C前	スギ	板目	B	H4S	SR2	11.9	0.85	0.5	
11	箸	16C末～19C前	スギ	柾目	B	H6N	掘削土中	12.3	0.7	0.5	
12	箸	16C末～19C前	スギ	板目	B	H4N	掘削土中	29.6	1.1	0.75	
13	箸	16C末～19C前	スギ	柾目	B	I5N	水田面(畦上)	21.1	0.6	0.65	
14	箸	16C末～19C前	スギ	柾目	B	G4S	水田面	19.7	0.7	0.4	
15	箸	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6N	掘削土中	20.8	0.95	0.5	
16	箸	16C末～19C前	スギ	板目	B	H5S	ベルト内	18.1	0.8	0.6	
17	箸	16C末～19C前	スギ	板目	D	I2N	褐色粘土	5.5 4.5	0.8 0.8	0.45 0.45	
18	漆椀	16C末～19C前	シオジ	柾目	E	C4S	水田面			1.9	高台形　6.5cm　内面朱漆
19	漆椀	16C末～19C前	シオジ	板目	E	D4N	SK16				内面朱漆　外面黒漆に朱漆の文様一部残存
20	漆椀	16C末～19C前	シオジ	板目	B	H5N	掘削土中	4.4	9.6		外面黒漆に朱漆の文様一部残存
21	漆椀	16C末～19C前	ケヤキ	板目	E	C3S	掘削土中	2.6	2.7	0.5	内面朱漆　外面黒漆に朱漆の文様一部残存
22	漆椀	16C末～19C前	クリ	板目	E	C4S	掘削土中	2.05	2.7	5.5	内面朱漆　外面黒漆
23	漆椀	16C末～19C前	クリ		E	D3N	掘削土中				内外面朱漆
24	曲物底板	16C末～19C前	ヒノキ	板目	E	G3S	掘削土中	6.6	2.35	0.4	
25	曲物底板	16C末～19C前	スギ	柾目	B	H4S	水田面(畦横)	9.2	5.0	0.85	裏面上部欠損部焼痕残存　下部段々に加工？
26	曲物底板	16C末～19C前	スギ	柾目	E	C3S	水田面(畦横)	20.2	3.5	1.2	4㎜～6㎜の円形孔3ヶ所　右側面木釘孔？一ヶ所
27	桶底板	16C末～19C前	スギ	芯持ち	C	J4S	水田面(畦上)	63.0	14.2	3.8	芯持ち材　風化著しい　復元最大径：93.6cm
28	板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H5S	掘削土中	14.8	3.0	0.6	
29	板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6N	掘削土中	17.1	3.1	0.6	右側面に抉りあり
30	板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H5N	掘削土中	21.5	4.4	1.3	
31	板材	16C末～19C前	スギ	板目	C	I3N	掘削土中	18.2	4.2	0.8	
32	板材	16C末～19C前	ヒノキ	柾目	C	I3S	水田面	12.7	3.3	0.5	風化著しい
33	板材	16C末～19C前	スギ	柾目	D	H2S	掘削土中	10.8	3.6	0.8	
34	板材	16C末～19C前	クリ	柾目	B	I5N	ベルト内	35.8	4.9	1.7	
35	板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6N	掘削土中	67.2	14.2	1.1	
36	棒状板材	16C末～19C前	ヒノキ	柾目	D	H2S	礫混灰色粘土	15.2	1.4	0.7	上下端焼痕　箸か？
37	棒状板材	16C末～19C前	スギ	板目	C	I4S	水田面	17.5	2.5	0.9	上端焼痕　裏面に一部調整痕
38	棒状板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H4N	掘削土中	26.2	2.1	0.5	上端から7cm程割れ目を入れる
39	棒状板材	16C末～19C前	クリ	板目	D	I1N	褐色粘土	30.2	1.7	1.1	表面調整痕残存
40	棒状板材	16C末～19C前	スギ	板目	C	J4N	水田面	25.0	1.0	0.85	
41	棒状板材	16C末～19C前	ヒノキ	板目	B	H6S	トレンチ内	24.5	1.6	0.9	風化している
42	棒状板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6N	掘削土中	23.0	1.8	0.8	棒状板材　下端イキ
43	棒状板材	16C末～19C前	ヒノキ	板目	B	G4S	水田面	16.7	1.2	0.9	下端傷痕残存
44	有孔板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H4S	SK11	11.5	3.8	0.8	9㎜程の円形孔あり
45	有孔板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6N	掘削土中	9.1	3.35	1.0	径5㎜程度の孔あり　表面調整痕残存
46	有孔板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	H6S	掘削土中	8.3	4.3	0.5	中央左寄りに5㎜程度の円形孔あり
47	有孔板材	16C末～19C前	スギ	柾目	B	H6S	掘削土中	8.1	5.2	0.7	径4㎜程度の孔あり　右側面イキ　上下左側面欠損　多数の刃痕あり
48	有孔板材	16C末～19C前	クスノキ	斜め柾目	E	E3S	掘削土中	6.2	6.3	0.9	風化著しい　中央に1.2×1.0の孔
49	有孔板材	16C末～19C前	スギ	板目	B	I5	ベルト内	8.1	6.1	0.6	4㎜程の円形孔あり　左側、下部焼痕あり
50	有孔板材	16C末～19C前	スギ	板目	C	K4N	水田面	24.2	6.4	1.2	中央に2.5cm程の円形孔　上に一ヶ所3㎜程の孔、下に2ヶ所4㎜程の孔残存　中央孔と下部の孔の周囲に圧痕
51	有孔板材	16C末～19C前	アカガシ亜属	柾目	B	H5N	水田面(畦端)	17.3	4.9	1.3	3cm程の方形孔あり　風化著しい　下部欠損
52	柱根	12C前	シャシャンボ	芯持ち	E	G2N	SP251	24.1	13.0		底部　縦：9.9cm　横：13.0cm

第７表　金属製品一覧表

挿図番号	器　種	素材	区	グリッド	層位遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
1	鉄鏃	鉄	E	F2	水田面	9.70	1.50	1.00	15.1	定角形
2	角釘	鉄	D	I2	褐色粘土	6.50	0.60	0.50	3.5	
3	釘	鉄	E	E3	水田面	5.10	0.50	0.40	1.5	合釘
4	角釘	鉄	E	D4	掘削土中	2.45	0.50	0.20	10.0	
5	釘	鉄	E	E2	掘削土中	2.85	0.60	0.60	1.0	近代か
6	角釘	鉄	E	G2	水田面	8.00	0.90	0.90	1.4	
7	角釘	鉄	E	G2	水田面	5.70	0.60	0.45	3.0	
8	角釘	鉄	E	G2	水田面	5.80	0.60	0.45	4.2	
9	不明鉄製品	鉄	E	E3	掘削土中(杭列横)	10.70	2.30	0.55	10.9	
10	鉄砲玉	鉛	A	D6	掘削土中	—	1.15	1.15	7.7	
11	鉄砲玉	鉛	A	E5	掘削土中	—	1.20	1.20	9.9	
12	鉄砲玉	鉛	A	E6	掘削土中	—	1.20	1.15	9.2	
13	鉄砲玉	鉛	A	E6	水田面(畦上)	—	1.20	1.10	8.8	
14	鉄砲玉	鉛	B	G4	掘削土中(畦横)	—	1.20	1.20	9.8	
15	鉄砲玉	鉛	C	K4	水田面(畦上)	—	1.20	1.20	9.0	
16	鉄砲玉	鉛	C	J4	掘削土中(畦端)	—	1.15	1.10	7.4	
17	鉄砲玉	鉛	D	H1	掘削土中	—	1.25	1.15	8.5	
18	鉄砲玉	鉛	D	I1	褐色粘土	—	1.15	1.10	7.9	
19	鉄砲玉	鉛	D	I2	褐色粘土	—	1.10	1.10	5.6	
20	鉄砲玉	鉛	E	E3	掘削土中	—	1.25	1.25	7.4	
21	鉄砲玉	鉛	E	E3	掘削土中	—	1.30	1.30	8.5	
22	鉄砲玉	鉛	E	E2	掘削土中	—	1.30	1.20	7.9	
23	鉄砲玉	鉛	E	F3	掘削土中	—	1.20	1.25	7.9	
24	鉄砲玉	鉛	E	F3	掘削土中	—	1.30	1.30	11.3	
25	鉄砲玉	鉛	E	F3	水田面	—	1.20	1.25	8.6	
26	鉄砲玉	鉛	E	F3	掘削土中	—	1.20	1.25	8.4	
27	鉄砲玉	鉛	E	F3	SR1	—	1.20	1.30	2.2	
28	鉄砲玉	鉛	E	G2	掘削土中	—	1.10	1.10	7.0	
29	鉄砲玉	鉛	E	G2	掘削土中	—	1.10	1.10	7.1	
30	鉄砲玉	鉛	E	G2	掘削土中	—	1.25	1.20	9.3	
31	鉄砲玉	鉛	E	G2	水田面	—	1.25	1.25	9.8	
32	鉄砲玉	鉛	E	G2	水田面	—	1.10	1.15	8.2	
33	鉄砲玉	鉛	E	G3	水田面	—	1.25	1.25	9.2	
34	火箸	鉄	C	J4	掘削土中(畦横)	20.20	0.70	0.70	39.1	
35	刀子	鉄	E	G2	掘削土中	15.35	1.40	0.50	17.9	
36	刀子	鉄	C	J4	掘削土中	12.40	1.40	0.45	12.5	
37	刀子	鉄	D	I2	褐色粘土	8.10	1.40	0.50	9.5	
38	不明鉄製品	鉄	E	G2	水田面	4.20	1.30	1.10	4.1	
39	火打金	鉄	A	E5	掘削土中	4.80	1.90	0.60	12.5	短冊形
40	火打金	鉄	E	G3	水田面	3.10	7.20	0.40	9.1	山形
41	火打金	鉄	E	F3	水田面(畦上)	8.15	2.10	0.45	14.0	山形か？
42	キセル雁首	真鍮	E	E2	掘削土中	3.20	0.70	—	4.5	雁首高さ3.20cm
43	キセル雁首	真鍮	E	E2	掘削土中	6.00	1.00	—	9.1	
44	キセル雁首	真鍮	E	G2	掘削土中	4.60	0.80	—	5.4	雁首高さ1.80cm
45	キセル雁首	真鍮	E	G2	掘削土中	5.20	1.10	—	6.8	雁首高さ2.00cm　象嵌　47と対
46	キセル雁首	真鍮	D	G2	掘削土中	7.50	1.40	—	9.2	雁首高さ2.15cm
47	キセル吸口	真鍮	B	G4	掘削土中(畦横)	7.30	0.95	—	6.4	象嵌　45とセット
48	キセル吸口	真鍮	E	F3	掘削土中	4.50	1.10	—	3.5	
49	キセル吸口	真鍮	E	G2	灰色粘土層(風化礫混)	6.10	1.00	—	5.7	
50	キセル吸口	真鍮	E	F2	集落面	4.50	1.10	—	3.8	
51	キセル吸口	真鍮	E	F2	掘削土中	7.20	1.10	—	9.9	
52	キセル吸口	真鍮	E	F2	掘削土中	5.80	0.90	—	3.8	
53	キセル吸口	真鍮	E	G3	掘削土中	4.40	0.80	—	3.9	
54	こうがい		E	F3	掘削土中	5.80 (11.30)	0.70	0.40	1.5	
55	こうがい		E	G2	掘削土中	7.70	0.30	0.30	3.7	
56	土瓶の弦？		E	F2	掘削土中	9.50	1.10	0.90	7.2	再考の余地あり

第８表　銭貨観察表

挿図番号	種別	銭　貨　名	書体	国名	初鋳年	区	グリッド	層位・遺構	直径(㎜)	重量(g)	特　　徴
1	銅銭	開元通寶	真書	唐	621年	E	C4	掘削土中	22.4	2.8	被熱。背の輪と郭が不明瞭、薄肉、字の彫りが浅い箇所があるため、模鋳銭と思われる。
2	銅銭	皇宋通寶	篆書	北宋	1037年	D	I2	礫混灰色粘土	24.7	3.1	背の輪と郭が不明瞭。穿が丸みを帯びている。
3	銅銭	熙寧元寶	真書	北宋	1068年	E	C4	掘削土中	23.6	3.2	被熱。背の郭が不明瞭。穿の角2箇所に鋳バリが残る。面の郭の一部が削れている郭抜けビタ。
4	銅銭	熙寧元寶	真書	北宋	1068年	E	E2	掘削土中	24.0	2.5	被熱。わずかに歪み。字の彫りが浅く不鮮明。郭は比較的明瞭だが穿は丸くなっている。模鋳銭？
5	銅銭	熙寧元寶	真書	北宋	1068年	E	C4	掘削土中	24.1	2.5	被熱。鋳上がりが悪く鬆が入っている。字の彫りが浅く不鮮明。
6	銅銭	元豊通寶	行書	北宋	1078年	E	G2	掘削土中	25.0	2.8	背の輪と郭が不明瞭。背の輪幅が不均一。
7	銅銭	元豊通寶	篆書	北宋	1078年	E	C4	掘削土中	25.0	3.1	被熱。
8	銅銭	元豊通寶	篆書	北宋	1078年	C	I3	検出面　畦上	23.7	2.2	被熱。背の輪と郭が不明瞭で、ほとんど平ら。薄肉。穿が丸みを帯びている。模鋳銭。
9	銅銭	元祐通寶	篆書	北宋	1086年	E	C4	掘削土中	24.0	3.2	
10	銅銭	紹聖元寶	行書	北宋	1094年	E	E2	掘削土中	23.4	2.6	被熱。表に白い付着物。背の輪と郭が不明瞭。背の輪幅が不均一。面の郭は比較的明瞭だが穿は丸みを帯びて、鋳バリが残る。模鋳銭？
11	銅銭	元符通寶	篆書	北宋	1098年	E	E3	掘削土中	24.1	2.3	背の輪と郭が不明瞭。穿が丸みを帯びている。模鋳銭？
12	銅銭	聖宋元寶	行書	北宋	1101年	E	G3	検出面	23.7	2.0	背の輪と郭が不明瞭でほとんど平ら。背の輪幅が不均一。面の郭の一部が削れ、穿が丸くなっている郭抜け銭。模鋳銭。
13	銅銭	政和通寶	分楷	北宋	1111年	E	C4	掘削土中	23.7	2.9	被熱。背の郭が不明瞭。面の郭は明瞭だが、穿は丸くなっている。背の輪幅が狭い。
14	銅銭	洪武通寶　背一銭	真書	明	1368年	E	E3	掘削土中	21.3	3.5	直径が小さいが、字が鮮明かつ郭もはっきりしており厚みもある。背の「一」の入所角も鮮明なので、小型の本銭とみるべきである。
15	銅銭	寛永通寶　四文銭		日本	1769年	E	G2	掘削土中(褐色粘土)	28.2	4.6	背十一波。
16	銅銭	寛永通寶　四文銭		日本	1769年	E	G3	掘削土中	27.7	4.6	背十一波。わずかに歪み。
17	銅銭	寛永通寶　古寛永		日本	1636年	E	G3	検出面	24.7	2.3	背にヤスリ痕
18	銅銭	寛永通寶　古寛永		日本	1636年	E	G2	畦上	24.3	2.1	被熱？
19	銅銭	寛永通寶　古寛永		日本	1636年	E	G3	検出面	24.4	3.1	
20	銅銭	寛永通寶　新寛永		日本	1697年	A	E5	掘削土中	24.0	2.2	被熱？背の輪が不明瞭
21	銅銭	寛永通寶　新寛永		日本	1697年	E	F2	検出面	23.0	2.2	被熱？
22	銅銭	寛永通寶　新寛永		日本	1697年	C	I3	掘削土中	22.7	2.1	被熱。鬆が入っている。背の輪と郭が不明瞭で、ほとんど平ら。
23	銅銭	寛永通寶　新寛永		日本	1697年	E	F3	掘削土中	23.0	1.9	背にヤスリ痕
24	銅銭	寛永通寶　古寛永		日本	1636年	E	F3	掘削土中	不明	1.2	歪み。右面4/7欠け。
25	銅銭	咸淳元寶	真書	南宋	1265年	E	E2	検出面	不明	0.8	1/4欠け。風化して二つに割れている。
—	銅銭	無文銭		日本	16世紀	E	E2	水田面	19.0	0.8	直径19ミリ。一辺8ミリの方孔。県内では出土例はほとんどない。

第９表　石器・石製品一覧表

挿図番号	器　　種	材　質	区	グリッド	層位遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
1	打製石斧	頁岩	D	G2	掘削土中	8.5	2.8	1.0	
2	スクレイパー	頁岩	E	E2	畦上	3.1	5.8	0.6	折れた打製石斧の先端部を転用
3	スクレイパー	頁岩	E	E1	掘削土中	4.6	3.0	1.0	折れた打製石斧の先端部を転用
4	砥石	凝灰岩	E	G3	検出面	6.5	3.2	1.6	
5	砥石	砂岩	C	J4	検出面	11.3	2.8	1.8	

第10表　掘立柱建物(SH)計測表

遺　構　名	グリッド	棟　方　向	桁　行×梁　行(m)		平均桁行柱間(m)
SH１	Ｇ２・Ｆ２	Ｎ－７°－Ｅ	6.50×4.40	４間×３間	1.3
SH２	Ｇ２・Ｆ２	Ｎ－57°－Ｅ	6.65×2.95	５間×３間	1.3
SH３	Ｇ２・Ｆ２	Ｎ－44°－Ｅ	3.20×3.30	３間×２間	1.1
SH４	Ｇ２	Ｎ－７°－Ｅ	6.80×5.80	４間×３間	1.7
SH５	Ｆ２	Ｎ－40°－Ｅ	4.30×4.15	４間×３間	1.1
SH６	Ｇ２	Ｎ－111°－Ｅ	3.55×1.20	４間×１間	0.9

第11表　溝(SD)計測表

遺構名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方向
SD1	A	D6	4.4	0.4～0.6	N－78°－W
SD2	A	E6・D6	8.4	0.4～0.7	N－90°－W→N－2°－W
SD3	A	E6	15.0	0.2～0.6	N－13°－E
SD4	A	E6	6.0	0.3～0.5	N－71°－W
SD5	B	H6	9.0	0.4～0.8	N－45°－W
SD6	B	H6	9.0	0.4～0.8	N－74°－W
SD7	B	I6・H5	16.0	0.4～1.0	N－43°－W→N－32°－W
SD8	D	I2	9.0	0.2～1.0	N－79°－W→N－32°－E
SD9	E	C3	3.6	0.4～0.8	N－77°－E
SD10	E	D3	6.2	0.3～0.4	N－63°－E
			4.1	0.9～1.3	N－73°－E
		D2・E2	12.0	0.5～0.6	N－54°－E
		E2	3.7	0.5～0.6	N－80°－E
SD11	E	E2	19.3	0.4～2.1	N－35°－W→N－2°－W
SD12	E	E2・F2	18.5	0.4～1.4	N－16°－W
SD13	E	F2	6.9	0.4～0.7	N－82°－W
SD14	E	F2・G2・G3	35.4	0.4～1.9	N－26°－W→N－35°－W→N－5°－W
SD15	E	F2	5.5	0.4～0.6	N－82°－W
SD16	E	G2	5.2	0.1～0.2	N－65°－W
SD17	E	G2	3.1	0.4～0.8	N－55°－W
SD18	E	G2	1.2	0.2～0.3	N－19°－W
SD19	E	G2	2.8	0.2～0.3	N－2°－E
			6.0	0.2～0.7	N－52°－E
			1.4	0.2～0.3	N－5°－E
SD20	E	G2	2.5	0.1～0.2	N－66°－E
SD21	E	G2	4.2	0.1～0.7	N－82°－E
			6.6	0.3～0.6	N－71°－E
SD22	E	G2	4.9	0.2～0.6	N－13°－W
			2.9	0.4～0.8	N－84°－W

第12表　流路(SR)計測表

遺構名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方向
SR1	B	G4・H4	18.0	0.4～4.2	N－55°－E→N－20°－E
SR2	B	H4	12.0	0.8～1.2	N－8°－E
SR3	B	H4・H5・I4	12.8	0.8～1.0	N－25°－E
SR4	B	G6・H6・I6	27.0	0.6～2.0	N－17°－W→N－20°－E
SR5	C	H3・I3	15.8		N－70°－E→N－5°－E
SR6	D	I1・I2	8.0	0.6～1.0	N－66°－W
SR7	E	E2・D3・D4	48.0	0.2～1.1	N－57°－E
SR8	E	D3・D4・E3・F3	55.0	20以上	N－7°－E→N－24°－W

第13表　土手状遺構計測表

遺構名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方向
土手状遺構1	E	D2・E2・F2・F3・G3	56.0	0.3～2.1	N－12°－W→N－40°－W→N－4°－W
		E2・D2・D3	15.0	0.7～1.5	N－35°－E
土手状遺構2	E	D3・E3・F3	44.0	0.8～1.5	N－27°－W→N－11°－E

第14表　道状遺構計測表

遺構名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方向
道状遺構1	E	E2・F2	12.2	0.6～1.2	N－17°－W→N－43°－W
		F2	5.5	0.7～1.3	N－22°－E→N－71°－E
道状遺構2	E	G2・H2	12.0	0.3～1.2	N－26°－E
道状遺構3	E	G2	18.5	0.4～0.9	N－76°－E→N－45°－E→N－7°－E
道状遺構4	E	G2	6.2	0.4～0.8	N－68°－E→N－32°－W
道状遺構5	E	G2	6.5		N－23°－E→N－2°－E
道状遺構6	E	G2	10.3	0.6～1.3	N－34°－E→N－43°－W

第15表　小穴（SP）計測表

番号	グリッド	長径×短径(cm)	深さ(cm)	形　状	備　　考
SP1	E2	59×47	27.0	楕円形	礫含む
SP2	E2	60×54	16.0	楕円形	礫含む
SP3	E2	61×48	35.0	楕円形	礫含む
SP4	E2	44×41	17.0	円形	SH1
SP5	E2	39×38	14.0	円形	SH1
SP6	E2	42×42	15.0	円形	SH1
SP7	E2	43×43	15.0	円形	SH1
SP8	G2	45×43	35.0	円形	SH1
SP9	G2	41×40	17.0	円形	SH1　須恵器瓶(4)
SP10	G2	37×37	18.0	円形	SH1
SP11	G2	42×38	12.0	円形	SH1　灰釉陶器広口瓶(14)
SP12	G2	49×42	22.0	円形	SH1
SP13	G2	48×48	21.0	円形	SH1
SP14	G2	58×53	22.0	楕円形	SH1
SP15	G2	53×44	17.0	円形	SH1　灰釉陶器碇(10)
SP16	G2	38×38	24.0	円形	SH1
SP17	G2	41×39	23.0	円形	SH1
SP18	G2	39×36	25.0	円形	SH1
SP19	G2	42×39	27.0	円形	SH1
SP20	G2	47×49	21.0	円形	SH1
SP21	G2	39×38	22.0	円形	SH1
SP22	G2	39×37	15.0	円形	SH1
SP23	G2	41×39	23.0	円形	SH1
SP24	G2	41×37	31.0	円形	SH2
SP25	G2	41×42	28.0	円形	SH2　礫含む
SP26	G2	39×38	25.0	円形	SH2
SP27	G2	35×32	19.0	円形	SH2
SP28	G2	39×35	35.0	不定形	SH2
SP29	G2	34×33	16.0	円形	SH2
SP30	G2	35×33	20.0	円形	SH2　土師器甕(21)
SP31	G2	60×51	30.0	不定形	SH2
SP32	G2	54×40	26.0	不定形	SH2
SP33	G2	31×19	25.0	不定形	SH2　土師器甕(22)
SP34	G2	38×36	30.0	円形	SH2
SP35	G2	47×39	29.0	楕円形	SH2
SP36	G2	45×41	28.0	円形	SH2
SP37	G2	36×35	17.0	円形	SH2　礫含む
SP38	F2	33×33	22.0	円形	SH3
SP39	F2	50×49	19.0	円形	SH3　灰釉広口瓶(14)、山茶碗(36)
SP40	F2	50×45	16.0	円形	SH3
SP41	G2	41×39	17.0	円形	SH3　灰釉陶器碗(35)
SP42	F2	38×38	11.0	円形	SH3
SP43	F2	36×31	21.0	円形	SH3
SP44	F2	36×33	17.0	円形	SH3
SP45	F2	63×60	17.0	円形	SH4
SP46	F2	59×33	8.0	不定形	SH4
SP47	F2	65×61	8.0	円形	SH4
SP48	F2	60×60	11.0	円形	SH4
SP49	F2	68×65	13.0	円形	SH4
SP50	F2	58×56	7.0	円形	SH4　土師器碗(37)
SP51	F2	68×44	4.0	不定形	SH4　鉄釉天目茶碗(40)
SP52	F2	65×65	5.0	円形	SH4
SP53	F2	60×60	10.0	円形	SH4
SP54	F2	64×60	13.0	円形	SH4
SP55	F2	62×58	19.0	円形	SH4
SP56	F2	57×35	10.0	不定形	SH4
SP57	F2	65×60	9.0	円形	SH4　礫含む
SP58	F2	60×58	11.0	円形	SH4
SP59	F2	66×64	10.0	円形	SH4
SP60	F2	72×68	15.0	円形	SH4
SP61	F2	61×61	7.0	円形	SH4
SP62	F2	64×59	11.0	楕円形	SH4
SP63	F2	61×58	5.0	円形	SH4　礫含む
SP64	F2	64×62	11.0	円形	SH4
SP65	F2	44×43	30.0	円形	SH5
SP66	F2	34×33	23.0	円形	SH5　礫含む
SP67	F2	45×43	22.0	円形	SH5
SP68	F2	43×40	16.0	円形	SH5
SP69	F2	42×36	16.0	円形	SH5
SP70	F2	50×46	27.0	円形	SH5
SP71	F2	43×38	32.0	円形	SH5
SP72	F2	外56×55 内30×28	39.0 26.0	円形	SH5
SP73	F2	54×50	30.0	円形	SH5
SP74	F2	36×34	25.0	円形	SH5
SP75	F2	34×34	23.0	円形	
SP76	F2	34×25	40.0	不定形	SH5
SP77	F2	42×41	33.0	円形	SH5
SP78	F2	36×33	24.0	円形	SH5
SP79	G2	41×34	18.0	楕円形	SH6　礫含む
SP80	G2	34×31	22.0	円形	SH6
SP81	G2	35×33	27.0	円形	SH6　礫含む
SP82	G2	32×30	14.0	円形	SH6
SP83	G2	38×32	28.0	楕円形	SH6
SP84	G2	32×27	26.0	不定形	SH6　礫含む
SP85	E2	36×29	47.0	不定形	
SP86	F2	56×36	51.0	楕円形	
SP87	F2	27×25	13.0	円形	
SP88	F1	28×26	14.0	円形	
SP89	F2	34×29	13.0	円形	
SP90	F1	43×20	19.0	不定形	
SP91	F1	48×25	19.0	不定形	
SP92	F1	27×21	15.0	不定形	
SP93	F2	38×32	19.0	不定形	
SP94	F2	26×15	6.0	不定形	
SP95	F2	51×38	12.0	不定形	
SP96	F2	38×34	5.0	円形	
SP97	F2	32×30	10.0	円形	
SP98	F2	29×26	8.0	円形	SP50の中
SP99	F2	38×35	10.0	円形	
SP100	F2	30×28	9.0	円形	
SP101	F2	34×32	20.0	円形	
SP102	F2	22×19	3.0	円形	
SP103	F2	47×46	23.0	円形	
SP104	F2	20×17	3.0	不定形	
SP105	F2	30×30	38.0	円形	
SP106	F2	38×35	22.0	円形	
SP107	F2	38×36	27.0	円形	SH5
SP108	F2	55×44	17.0	楕円形	
SP109	F2	36×34	15.0	円形	礫含む
SP110	F2	23×14	13.0	不定形	
SP111	F2	25×24	20.0	円形	
SP112	F2	40×40	7.0	円形	
SP113	F2	48×36	9.0	不定形	
SP114	F2	42×38	4.0	不定形	礫含む
SP115	F2	35×33	4.0	円形	礫含む
SP116	F2	33×31	4.0	円形	礫含む
SP117	F2	34×33	10.0	円形	
SP118	F2	42×38	6.0	円形	礫含む
SP119	F2	30×28	13.0	円形	礫含む
SP120	F2	18×19	17.0	不定形	SP68の中
SP121	F2	40×34	9.0	不定形	SP68の下
SP122	F2	28×25	14.0	円形	
SP123	F2	22×21	12.0	円形	
SP124	F2	外42×39 内15×13	7.0 3.0	外：円形 内：方形	
SP125	F2	45×42	14.0	円形	
SP126	F2	40×38	7.0	円形	
SP127	F2	34×34	17.0	円形	
SP128	F2	26×25	24.0	円形	
SP129	F2	26×22	22.0	円形	
SP130	F2	58×56	18.0	円形	
SP131	F2	25×22	8.0	円形	
SP132	F2	44×42	5.0	不定形	
SP133	F2	70×59	8.0	楕円形	SP70の下
SP134	F2	26×24	4.0	円形	
SP135	F2	38×38	2.0	円形	
SP136	F2	50×49	5.0	円形	

番号	グリッド	長径×短径(cm)	深さ(cm)	形状	備考
SP137	F2	28×25	7.0	円形	
SP138	F2	49×47	4.0	円形	
SP139	F2	24×23	9.0	円形	礫含む
SP140	F2	44×40	10.0	円形	
SP141	F2	26×25	4.0	円形	
SP142	F2	31×29	6.0	円形	
SP143	F2	25×25	5.0	円形	
SP144	F2	31×31	8.0	円形	礫含む
SP145	F2	45×38	9.0	円形	
SP146	F2	28×28	12.0	円形	
SP147	F2	45×43	15.0	円形	礫含む
SP148	F2	23×22	15.0	円形	
SP149	F2	20×18	13.0	方形	
SP150	F2	26×24	4.0	円形	
SP151	F2	28×25	7.0	円形	
SP152	F2	27×24	5.0	円形	
SP153	F2	24×24	12.0	不定形	
SP154	F2	23×23	5.0	円形	
SP155	F2	47×42	8.0	円形	
SP156	F2	31×30	6.0	円形	
SP157	F2	30×21	36.0	円形	
SP158	F2	30×30	5.0	円形	
SP159	F2	32×31	22.0	円形	
SP160	F1・2	52×47	44.0	円形	土師器甕(82)・礫含む
SP161	F2	28×27	27.0	円形	
SP162	F2	27×19	9.0	不定形	
SP163	F2	22×21	9.0	不定形	
SP164	F2	33×28	19.0	円形	
SP165	F2	22×21	12.0	円形	
SP166	F2	29×29	24.0	円形	灰釉長頸瓶(49)
SP167	F2	31×27	27.0	円形	
SP168	F2	31×29	21.0	円形	
SP169	F2	31×30	12.0	円形	
SP170	F2	23×21	20.0	円形	
SP171	F2	31×29	24.0	円形	
SP172	F2	36×30	18.0	円形	
SP173	F2	34×29	21.0	円形	
SP174	F2	39×25	24.0	不定形	
SP175	F2	34×32	25.0	円形	
SP176	F2	44×36	23.0	楕円形	糸切り碗(92)
SP177	F2	28×26	23.0	円形	清郷甕(34)
SP178	F2	33×31	24.0	円形	
SP179	F2	28×25	27.0	円形	
SP180	F2	35×33	25.0	円形	弥生土器？(33)
SP181	F2	31×25	13.0	円形	
SP182	F2	39×36	13.0	円形	
SP183	F2	42×36	10.0	円形	
SP184	F1・2	29×28	15.0	円形	
SP185	F1・2	32×32	25.0	円形	
SP186	F2	24×19	18.0	円形	
SP187	G1	30×28	21.0	円形	
SP188	G2	30×29	13.0	円形	
SP189	G2	36×34	18.0	円形	山茶碗(18)
SP190	G2	39×19	15.0	円形	
SP191	G2	43×40	20.0	円形	
SP192	G2	44×42	24.0	円形	土師器甕(5)
SP193	G2	32×30	16.0	円形	
SP194	G2	39×39	11.0	円形	土師器壷(3)
SP195	G2	27×25	13.0	円形	
SP196	G2	31×29	13.0	円形	
SP197	G2	40×40	10.0	円形	
SP198	G2	41×39	10.0	円形	
SP199	F2	39×36	15.0	円形	
SP200	F2	44×42	13.0	円形	
SP201	G2	30×29	21.0	円形	土師器甕(7)
SP202	G2	34×32	16.0	円形	
SP203	G2	32×31	21.0	円形	
SP204	G2	23×23	16.0	円形	
SP205	G2	25×25	15.0	円形	
SP206	G2	31×30	18.0	円形	
SP207	G2	26×25	14.0	円形	
SP208	G2	21×20	7.0	円形	
SP209	G2	45×45	36.0	円形	
SP210	G2	34×34	21.0	円形	
SP211	G1	27×25	30.0	円形	
SP212	G1	34×31	14.0	不定形	
SP213	G1	28×27	26.0	円形	土師器甕(46)
SP214	G1	31×29	13.0	円形	礫含む
SP215	G1	51×38	18.0	不定形	
SP216	G1	27×23	17.0	円形	
SP217	G1	24×24	17.0	円形	
SP218	G1	19×17	19.0	円形	
SP219	G1	27×25	14.0	不定形	
SP220	G1	28×27	13.0	円形	
SP221	G1	23×21	10.0	円形	
SP222	G2	23×21	12.0	円形	
SP223	G2	28×24	17.0	楕円形	
SP224	G2	19×18	15.0	円形	
SP225	G2	23×22	12.0	円形	
SP226	G2	27×26	22.0	円形	
SP227	G2	27×24	16.0	円形	
SP228	G2	41×37	25.0	円形	
SP229	G2	32×28	10.0	円形	
SP230	G2	31×27	6.0	円形	
SP231	G2	37×34	27.0	円形	礫含む
SP232	G2	38×32	13.0	円形	糸切り碗(30)
SP233	G2	35×31	14.0	不定形	
SP234	G2	35×31	9.0	円形	
SP235	G2	34×34	32.0	不定形	
SP236	G2	31×31	32.0	円形	灰釉陶器碗(24)
SP237	G2	31×31	34.0	円形	
SP238	G2	38×38	31.0	方形	糸切り碗(29)
SP239	G1	26×15	?	楕円形	
SP240	G1・2	31×28	15.0	楕円形	
SP241	G2	32×29	20.0	円形	
SP242	G2	25×26	23.0	円形	礫含む
SP243	G2	28×28	33.0	円形	
SP244	G2	34×28	?	不定形	
SP245	G2	20×18	22.0	不定形	
SP246	G2	34×32	25.0	不定形	
SP247	G2	21×19	8.0	円形	
SP248	G2	23×21	22.0	円形	
SP249	G2	32×31	15.0	円形	礫含む
SP250	G2	38×35	14.0	円形	
SP251	G2	83×58	63.0	不定形	柱根残存
SP252	G2	35×34	32.0	円形	
SP253	G2	37×34	29.0	円形	
SP254	G2	39×37	22.0	円形	
SP255	G2	35×33	21.0	円形	
SP256	G2	30×27	27.0	不定形	
SP257	G2	48×35	22.0	楕円形	
SP258	G2	27×25	31.0	円形	
SP259	G2	33×30	32.0	不定形	
SP260	G2	45×41	23.0	円形	
SP261	G2	39×32	27.0	方形	
SP262	G2	27×25	20.0	円形	
SP263	G2	26×26	24.0	不定形	
SP264	G2	27×23	23.0	不定形	
SP265	G2	27×21	22.0	方形	
SP266	G2	39×37	22.0	不定形	
SP267	G2	40×29	30.0	楕円形	
SP268	G2	31×31	22.0	円形	
SP269	G2	27×24	18.0	不定形	礫含む
SP270	G2	31×28	23.0	不定形	礫含む
SP271	G2	38×37	26.0	円形	礫含む
SP272	G2	47×47	16.0	円形	
SP273	G2	46×39	53.0	楕円形	
SP274	G2	48×48	59.0	方形	
SP275	G2	45×42	18.0	円形	礫含む
SP276	G2	37×32	27.0	円形	礫含む

番号	グリッド	長径×短径(cm)	深さ(cm)	形　状	備　　考	番号	グリッド	長径×短径(cm)	深さ(cm)	形　状	備　　考
SP277	G2	45×41	40.0	円形		SP317	G2	29×29	24.0	円形	
SP278	G2	39×29	16.0	楕円形		SP318	G2	32×28	21.0	円形	
SP279	G2	40×38	33.0	方形		SP319	G2	38×34	9.0	方形	
SP280	G2	44×40	27.0	方形	礫含む	SP320	G2	32×31	13.0	円形	
SP281	G2	38×38	31.0	不定形	灰釉陶器碗(24)、糸切り碗(26)	SP321	G2	24×20	23.0	方形	
SP282	G2	24×23	28.0	方形		SP322	G2	36×34	36.0	方形	
SP283	G2	36×26	18.0	不定形	糸切り碗(70)・礫含む	SP323	G・H2	40×39	29.0	円形	
SP284	G2	43×39	22.0	方形	礫含む	SP324	G2	39×37	19.0	不定形	
SP285	G2	51×36	47.0	不定形		SP325	G2	29×24	28.0	方形	
SP286	G2	40×38	25.0	不定形	礫含む	SP326	G2	27×23	26.0	方形	
SP287	G2	43×40	13.0	円形	礫含む	SP327	G2	40×34	31.0	楕円形	
SP288	G2	33×32	36.0	円形		SP328	G2	61×60	28.0	円形	礫含む
SP289	G2	46×42	27.0	方形	礫含む	SP329	G2	28×28	20.0	不定形	
SP290	G2	40×38	13.0	円形		SP330	G2	37×23	27.0	不定形	
SP291	G2	36×35	40.0	円形		SP331	G2	30×29	26.0	円形	
SP292	G2	35×32	16.0	円形		SP332	G2	35×32	28.0	円形	
SP293	G2	36×32	20.0	円形		SP333	G2	30×29	24.0	円形	礫含む
SP294	G2	34×32	13.0	円形		SP334	G2	37×35	25.0	不定形	
SP295	G2	38×33	27.0	不定形		SP335	G2	33×29	32.0	不定形	
SP296	G2	22×22	22.0	方形		SP336	G2	27×23	36.0	不定形	
SP297	G2	32×31	18.0	不定形		SP337	G2	28×26	20.0	円形	
SP298	G2	41×39	20.0	円形		SP338	G2	25×24	19.0	円形	
SP299	G2	72×65	42.0	方形	礎石	SP339	G2	29×26	17.0	円形	
SP300	G2	41×38	17.0	円形	礫含む	SP340	G2	25×24	14.0	方形	礫含む
SP301	G2	43×41	19.0	円形		SP341	G2	26×25	24.0	方形	
SP302	G2	37×35	21.0	円形		SP342	G2	39×36	32.0	不定形	
SP303	G2	34×30	18.0	円形		SP343	G2	35×34	20.0	方形	礫含む
SP304	G2	32×24	16.0	円形		SP344	G2	27×23	20.0	円形	
SP305	G1	46×34	25.0	不定形		SP345	G2	30×30	25.0	円形	
SP306	G1	26×25	23.0	不定形		SP346	—	—	—	—	欠番
SP307	G1	27×18	21.0	不定形		SP347	G2	53×50	16.0	円形	礫含む
SP308	G1・2	29×27	18.0	円形		SP348	G2	33×29	35.0	不定形	
SP309	—	—	—	—	欠番	SP349	G2	29×28	16.0	円形	
SP310	G1	35×32	17.0	円形		SP350	G2	40×32	21.0	楕円形	
SP311	—	—	—	—	欠番	SP351	G2	31×30	25.0	不定形	
SP312	G2	31×26	12.0	不定形		SP352	G2	28×25	34.0	円形	
SP313	G2	25×25	21.0	円形		SP353	G2	37×34	21.0	円形	
SP314	G2	30×27	12.0	不定形		SP354	G2	25×22	36.0	円形	
SP315	G・H2	28×25	13.0	不定形		SP355	G2	25×25	14.0	円形	
SP316	G2	39×38	21.0	円形	礫含む	SP356	G2	24×22	27.0	円形	

第16表　畦畔(SK)計測表

遺構名	区	グ　リ　ッ　ド	長さ(m)	幅(m)	方　向
SK１	A	Ｄ７・Ｄ８	26.4	0.3～0.5	Ｎ－80°－W
SK２	A	Ｄ６	13.0	0.8～1.2	Ｎ－76°－W
SK３	A	Ｄ６・Ｅ６	11.2	1.0～1.2	Ｎ－18°－E
SK４	A	Ｄ７・Ｅ７	10.6	0.2～0.5	Ｎ－60°－W→Ｎ－72°－W
SK５	A	Ｄ７・Ｄ８・Ｅ７	18.5	—	Ｎ－28°－E
SK６	A	Ｅ７	18.0	0.4～2.0	Ｎ－68°－W
SK７	A	Ｆ７	7.4	—	Ｎ－70°－W
SK８	A	Ｅ４・Ｅ５・Ｅ６・Ｆ５	30.0	0.2～1.2	Ｎ－38°－E→Ｎ－75°－W
SK９	A	Ｆ６	12.0	0.4前後	Ｎ－73°－W
SK10	B	Ｇ６・Ｈ６	10.4	0.7～1.0	Ｎ－26°－E
SK11	B	Ｈ４・Ｈ５・Ｈ６	37.0	0.5～1.2	Ｎ－80°－E
SK12	B	Ｈ５・Ｉ５	7.0	0.2～0.7	Ｎ－44°－W
SK13	B	Ｉ５・Ｊ５	8.4	0.5前後	Ｎ－35°－W
SK14	C	Ｉ３・Ｉ４	8.6	0.25～0.9	Ｎ－65°－E
SK15	C	Ｊ４・Ｋ３・Ｋ４	13.4	0.2～0.5	Ｎ－87°－E→Ｎ－70°－E
SK16	C	Ｉ３	15.8	0.3～0.6	Ｎ－82°－E
SK17	D	Ｉ１・Ｉ２	16.2	0.3～0.8	Ｎ－80°－W
SK18	E	Ｃ３・Ｄ３・Ｄ４	15.8	0.3～0.6	Ｎ－62°－W
SK19	E	Ｄ３・Ｄ４	13.0	0.25～0.6	
SK20	E	Ｅ２・Ｅ３	12.0	0.3～0.5	Ｎ－70°－W
SK21	E	Ｅ３・Ｆ３	24.2	0.3～0.5	Ｎ－75°－W
SK22	E	Ｆ３	15.0	0.3～1.3	Ｎ－61°－W
SK23	E	Ｆ３	10.4	0.2～0.8	Ｎ－77°－W
SK24	E	Ｇ３	7.0	0.4前後	Ｎ－83°－W
SK25	E	Ｅ２・Ｆ２・Ｄ３・Ｅ３・Ｆ３・Ｇ３	37.4	0.4～1.1	Ｎ－35°－W→Ｎ－８°－E
SK26	E	Ｇ２・Ｇ３	7.6	0.2～0.4	Ｎ－３°－E
			17.3	0.2～0.4	Ｎ－75°－E

第３章　栗ヶ沢遺跡(第二東名No.74－２地点)

第１節　位置と環境

１　位置と地理的環境

栗ヶ沢遺跡は、静岡県静岡市葵区小瀬戸・飯間の、標高131～169ｍの丘陵上に位置する。この丘陵は、標高301ｍの南東方向へ延びる山塊から北東へ派生する尾根であり、およそ2.3㎞で末端へ至る。この分岐点からおよそ１㎞の範囲にある尾根上には、幅60～70ｍのやや平坦な面が連続している。今回調査を行った栗ヶ沢遺跡Ｂ区の南側で尾根は二股に分かれ、北側に派生したものは小瀬戸遺跡の南端に至っている。北東側の尾根は深さ40～50ｍとなる大きな谷をいくつか挟みながら更に1.5㎞ほど北東へ延びる。北東側の尾根は、先端に至るまでに、ところどころを痩せ尾根に挟まれながらも比較的広い平坦面を尾根上に持ちつづける。尾根の末端にある小瀬戸城跡の本曲輪と、先の分岐点との比高差はおよそ150ｍとなる。

この丘陵上はスギの植林や茶畑、竹林に多くを利用されている。近世の史料には、この付近の集落の特産は筍であると記している。近世段階から地域の生活を支える役割を、大いに担ってきたことが窺える。

２　歴史的環境と調査歴

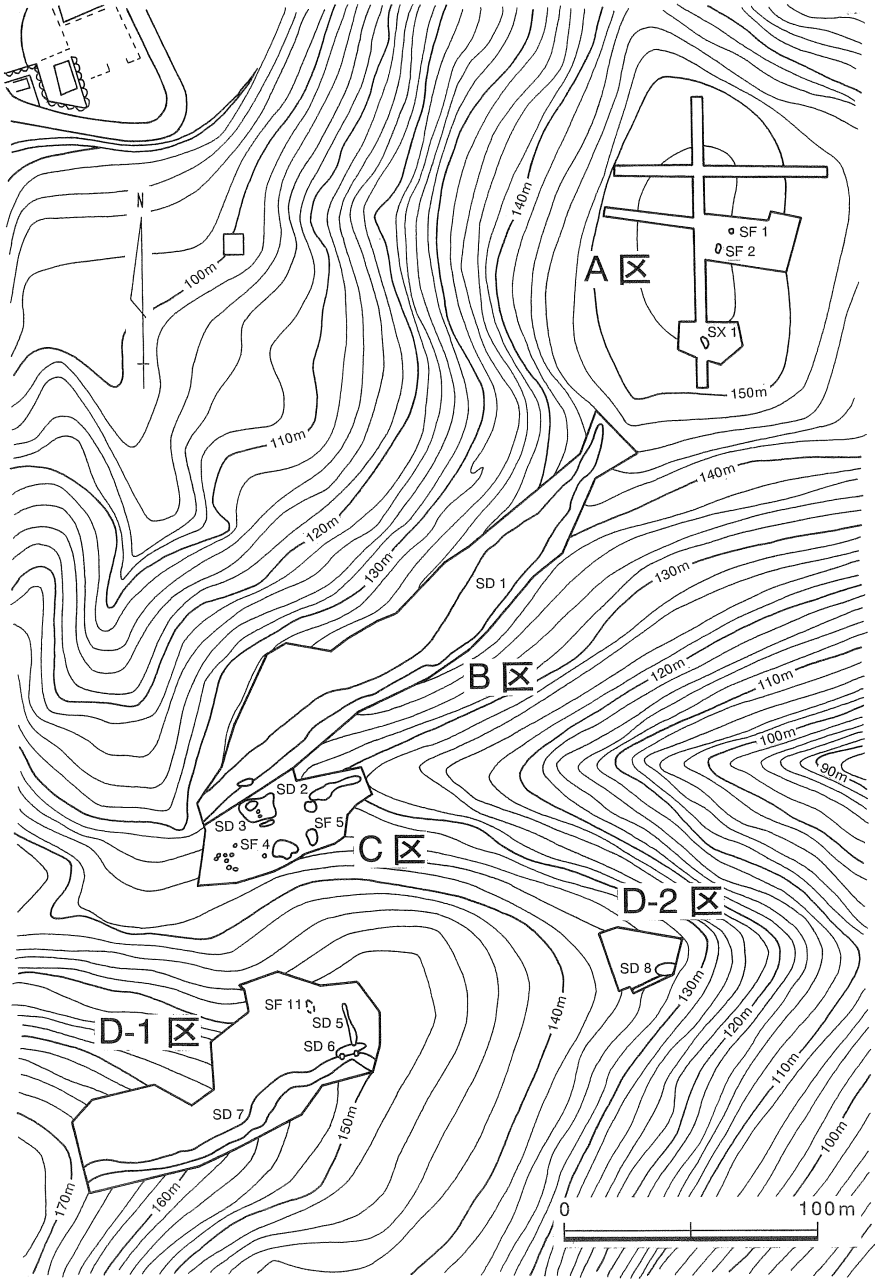
栗ヶ沢遺跡は、第二東名事業に伴って把握された新発見の遺跡である。したがって本事業に着手する以前の調査歴は皆無である。今回の事業に際して実施された確認調査により、栗ヶ沢遺跡とその周辺にも小規模な縄文時代遺跡が把握されたことは、小瀬戸谷の入り口近くにある養源山遺跡とともにこの地域の縄文時代像を再現するためには貴重な発見となった。今回調査対象となった範囲については、第81図を参照願いたい。

栗ヶ沢遺跡ののる丘陵末端には、小瀬戸城が築かれている。この城は、安倍城の一支城として位置付けられているが、築城年代等定かでない部分が多く管見の限りでは史料にも記されていないので、実態はよく分からない。ただし、本曲輪東側に二重の堀切が築かれるところをみると、恐らく今川氏の退去後にあたる元亀～天正年間に武田氏などの手によって改修されているのであろう。

第２節　調査の方法と経過

１　発掘調査の方法と経過

本調査に先立って、平成13年４月10日から９月６日までに、調査対象範囲の南側およそ４分の３に対して試掘・確認調査を実施した（確認調査その１）。この一部は、前年度に静岡市教育委員会が確認調査を実施しており、実質的にはその残部分を引き継ぐ形となった。確認調査は人力で行い、掘削作業と併行して実測と写真撮影をおこなった。実測は主にトータルステーションを使用し、トレンチ設定図、遺構検出状況図、土層断面図を図化した。写真撮影は35㎜判のカラーネガを使用した。この範囲の本調査は、確認調査と並行して６月11日から遺構の検出された部分を中心に調査範囲を拡張するかたちで実施した。この本調査は７月25日の飛び地部（以下Ｄ－２区として報告する。）から開始され、８月９日に南尾根部（同Ｄ－１区）、９月27日に堀部Ⅱ（同Ｂ区南西側ＳＤ１部分）、10月３日に堀部Ⅰ（同Ｂ区北東側



第81図　周辺地形と各調査区

SD１部分)、10月29日に谷部（同Ｃ区）へそれぞれ着手した。本調査においては、表土の除去をバックホーとクローラーダンプを用いて実施し、遺構の掘削は人力で実施した。遺構番号は調査の進展に合わせて、各調査区ごとに付けていった。ただし、追加して実施した精査によって検出されたものについては、発見時で最も若い番号を付けて整理した。遺構内の出土遺物については、元位置にあると思われるものは1/10～20の縮尺で出土状況を図化して取り上げ、混入したと思われるものについては、遺構ごとに取り上げた。また、遺構外出土遺物は、グリッドごとに取り上げた。本調査の終了はＤ－１区が10月29日、Ｂ区が11月29日、Ｄ－２区とＣ区が12月17日となり、撤収を含めて12月25日までにすべてを終了した。

調査範囲の北側４分の１にあたる範囲については、平成14年11月６日より試掘・確認調査を開始した（確認調査その２　以下この範囲をＡ区として報告する。）。確認調査は表土除去をバックホーとクローラーダンプを用い、清掃は人力で行った。記録の採取は掘削作業と併行して実測と写真撮影をおこなった。実測は主にトータルステーションを使用し、トレンチ設定図、遺構検出状況図、土層断面図を図化した。写真撮影は35㎜判のカラーネガを使用した。この範囲の本調査は、確認調査によって遺構が検出された範囲を拡張するかたちで実施した。記録の採取は、平成13年度調査の方法を踏襲している。

２　資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業（出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測、写真整理、図面整理・修正、各種台帳作成等）は、栗ヶ沢遺跡の現地調査終了後、

他の現地調査と並行して実施した。

平成15年度末の時点で静岡工区静岡地区の現地調査がほぼ終了したことから、平成16年度から静岡工区藤枝地区と一部の遺跡を除いた静岡工区の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要としていた複数の遺跡の中で、栗ヶ沢遺跡は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。遺構図、遺物実測図の修正・編集・トレース、遺物の写真撮影、報告の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は６×７判のモノクロ及びカラーポジを用いた。なお、整理作業の過程で調査区名称をアルファベットに変更した。また、各調査区ごとに付けられていた遺構番号をＡ区からの通し番号に整理した。

第３節　概　　要

１　地形と土層

栗ヶ沢遺跡が営まれる丘陵は、瀬戸川層群の中に縞状に入る砂岩を主体とした層を基盤とする。斜面は侵食が進み60％前後の急峻な地形をつくり出しているが、丘陵頂部から尾根上には、前述のようなやや平坦な場所を広く持つことが特徴的である。尾根上には部分的に大きな谷が入るものの、尾根上の末端までの傾斜は頂部の平均でおよそ９％と緩やかである。

遺跡はＡ区が尾根の頂部、Ｂ・Ｄ－１・Ｄ－２区が尾根上、Ｃ区が尾根の鞍部にあたる。いずれの区でも基盤層は黄褐色の岩盤である。この上層に風化礫を含む褐色から黄色のシルト～粘土層が堆積し、その上が表土となる。尾根や鞍部では、より上位にあるこれらの層位が風化・崩壊した堆積物が頻繁にみられるようになる。

２　遺構・遺物の概要

遺構は、縄文時代の土坑や小穴、近世の林業用の作業道と思われる大きな溝が検出されている。

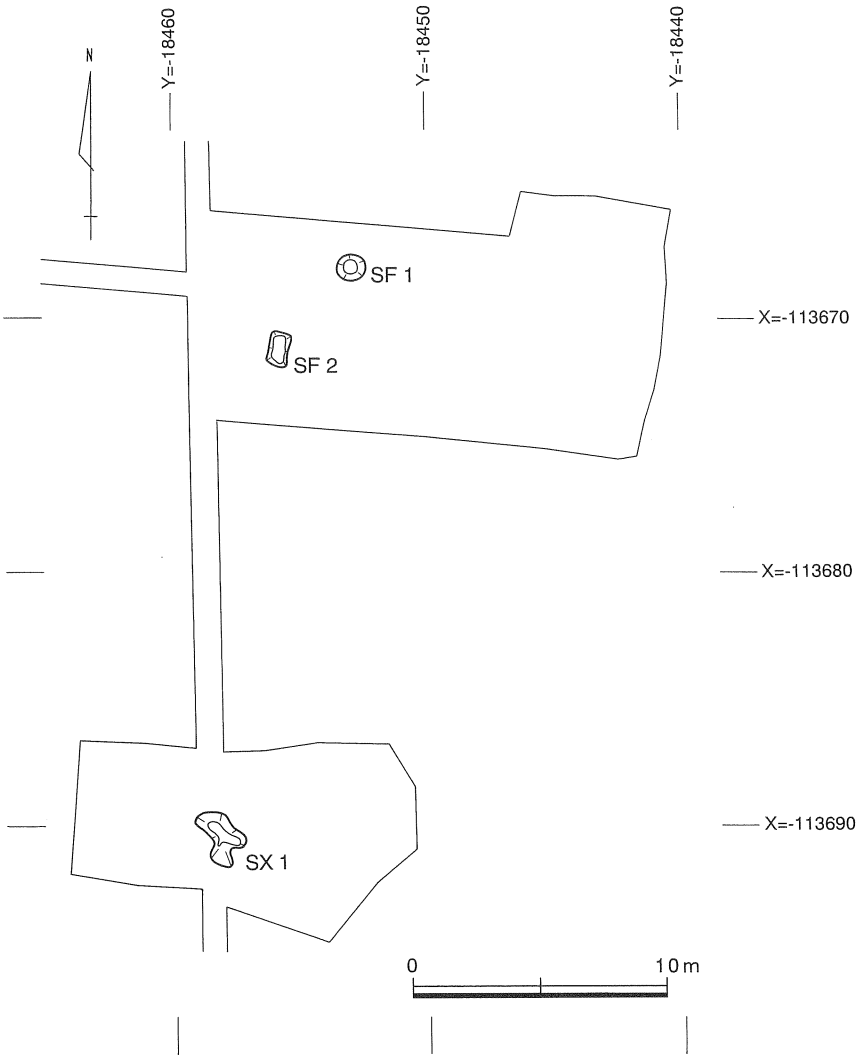
縄文時代の遺構・遺物は、Ａ・Ｃ・Ｄ－１区で検出されている。遺構は土坑や小穴であり、土坑は焼土を含むものが目立つ。小穴は、特に鞍部にあるＣ区でまとまって検出されている。竪穴住居としては特定できなかったが、簡易な居住施設があったことは想像に難しくない。遺物はＡ区とＤ－１区を主体に縄文時代早期の土器や石器が出土している。石器は石鏃がＤ－１区から複数出土している。居住施設の比較的近くで使用されたものだろうか。

近世の遺構は主にＢ・Ｄ－１区で検出されている。尾根上に掘りこまれた大きな溝が目を引く。近世の遺物としては銭貨やかんざしなどが出土している。

第４節　遺構と遺物

１　Ａ区の遺構と出土遺物

Ａ区は尾根の頂部にあり、南北130m、東西110m程と比較的平坦な面を広く持つ。ここからは３基の土坑が検出された。遺構内からの出土遺物がないため明確な時期は分からないが、周囲の包含層の出土遺物から、縄文時代早期頃のものである可能性がある。



第82図　Ａ区遺構分布図

SF 1　直径１ｍ程の円形の土坑である。深さは56cmを測る。炭を多く含む黒味を帯びる褐色土を覆土とする。遺構内からの出土遺物はない。

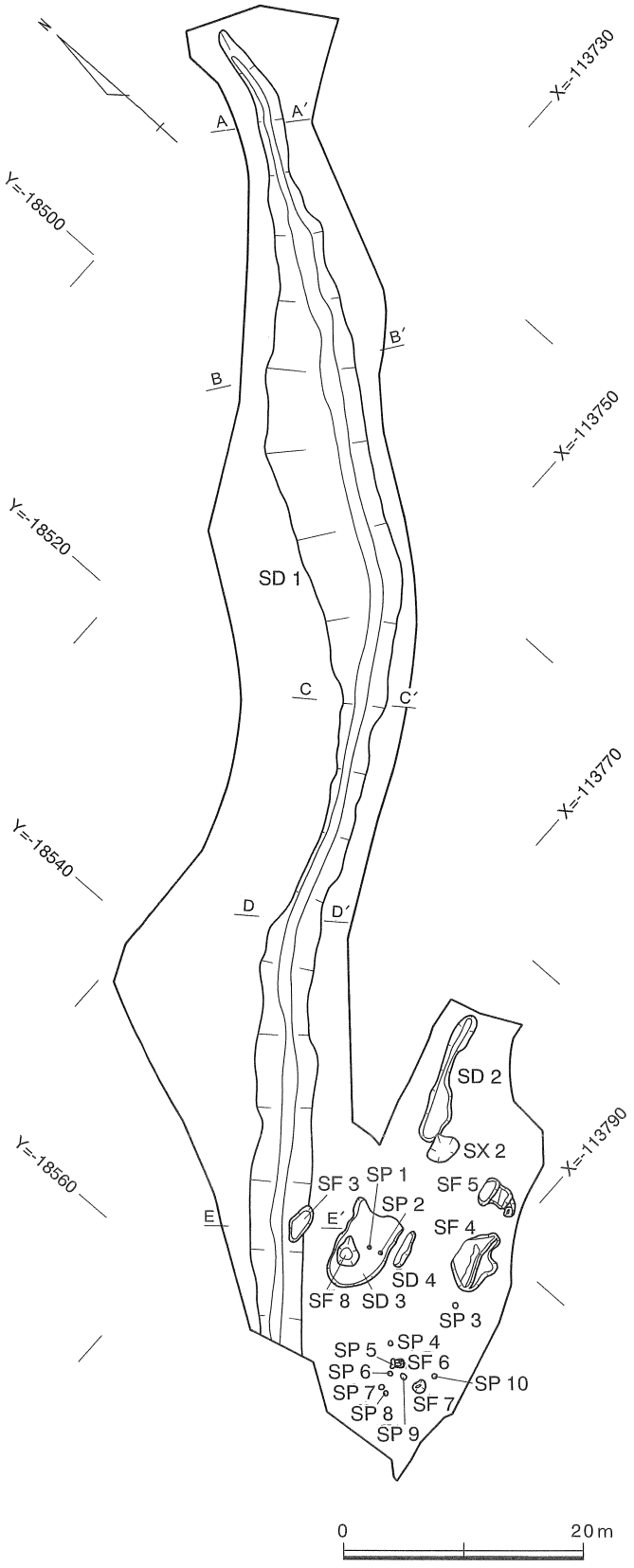
SF 2　南北幅1.3m、東西幅0.7ｍの長方形状を呈する土坑である。深さは28cmを測る。黒味を帯びる褐色土を覆土とする。遺構内からの出土遺物はない。

SX 1　最大幅2.3ｍを測る不定形の土坑である。深さは18cmを測る。内部は焼土で満たされていた。遺構内からの出土遺物はない。

Ａ区からは縄文時代早期のものと思われる土器４点、石器15点（製品４点）が出土している。いずれも表土直下に堆積する粘性のある褐色土からの出土である。

土器（第87図１～４）は深鉢の口縁～体部片である。胎土は緻密で、直径１～２㎜程の砂粒や雲母を少量含んでいる。特に１・４の内面は、器面の残りがよく横方向に細かな擦痕が認められる。表面はいずれも本来無文の部分であったと考えられるが、風化して器面の剥落が著しい。

石器（10～13）はいずれも風化の進む頁岩製である。(10）は、節理面を打面として得た矩形の剥片の末端に刃部を作り出している。(12）は、原礫面を打面として得た三角形状の剥片を利用したものである。背面に残ったバルブを三方向からの大きな調整で取り去った後、側縁に刃部を作り出している。背面左側の調整は右側に比べ荒く、調整中におよそ半分に折れているものと思われる。(13）は表面に原礫面を広



第83図　B・C区遺構分布図

く残す縦長剥片を利用し、両側縁に細かな調整を加え刃部を作り出す。表面右側の調整は細かく、刃潰し状に施されることから、左側側縁が刃部であると考えられる。同（11）は、石匙である。末広がりの剥片を利用しているものと思われ、裏面中央部に素材の面を残している。左右対象で側縁からの調整により薄く仕上げている。基部は特に付け根に両面から調整を加えることによって作り出されている。

2　B区の遺構と出土遺物

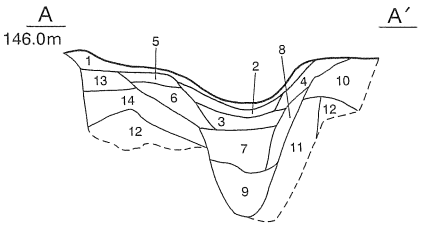
B区はA区から南西に下りる尾根上にあり、尾根に平行する大きな溝SD１が検出されている。この尾根は平均13%程度の勾配をもっているが、A区に接する上位のほうがおよそ18%ときつくなる。

SD１　A区からC区に至る尾根上に、110mにわたって検出された大きな溝である。幅はA区よりで最も狭く1.6m、ここより概ね34m下位まで徐々に幅を広げて最大で10.3mとなる。C－C′断面・D－D′断面間では2.4m前後を測り、これ以下では４～5.2mとなる。深さはB－B′断面付近で3.3m、C－C′断面以下で50～60cm程度となる。溝内部の傾斜は、大きく三つに分けられる。まず、A区に接する始点から下位に26mの範囲では、一気に11m下る（勾配42%）。ここから31m間は、後半の11mで70cmほど下る他はほぼ平坦である。これ以降、末端に至るまではおよそ６m下る斜面（勾配17%）を構成する。

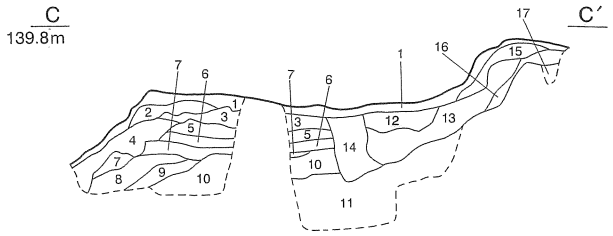
SD１の掘削残土は、現況地形でも把握されていたように、両側に掻き揚げられ土手状になっていた。C－C′断面までの幅が広く取られている部分が最も厚く、旧表土から１m前後の高さが残存していた。

遺物は出土していない。溝の位置や形状から、小瀬戸城に伴う堀とするよりは近世の林業に伴う木材搬出路と考えたい。

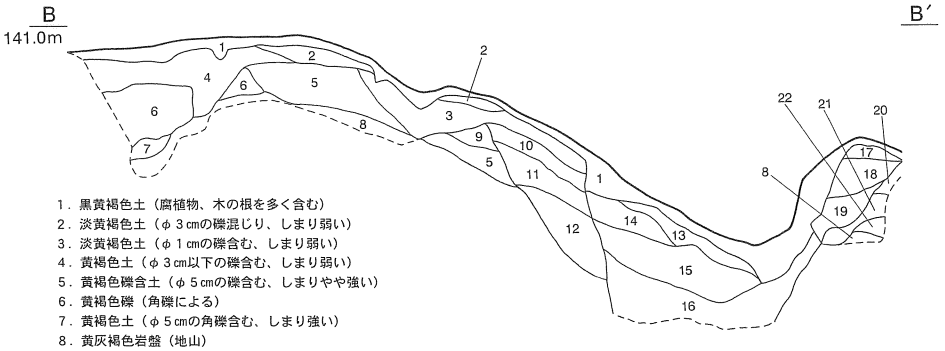
B区出土の遺物は極めて少ない。（第87図14）のかんざし１点が表土から出土したのみである。軸の部分は銅製で、二又を呈する。飾りのはまる軸末端は、直径1.4mmほどの棒状となる。飾りは赤褐色のガラス



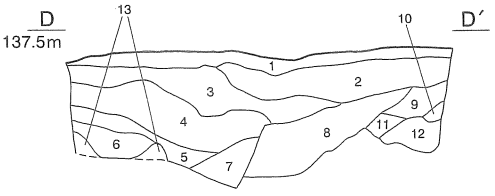
1．黒黄褐色土（腐植物、木の根を多く含む）
2．暗黄褐色土（しまり弱い）
3．暗黄褐色土（２層よりφ１cm以下の礫混入多い、しまり弱い）
4．暗黄褐色土（３層と類似、さらにしまり弱い）
5．淡黄褐色土（堆積が粗い）
6．黄褐色土（φ５cm以下の礫混じり、しまり弱い）
7．暗黄褐色土（φ２cm以下の礫含む、しまり弱い）
8．明黄褐色土（φ１cm以下の礫含む、しまり弱い）
9．暗黄褐色土（ブロック状にややしまりのある土質が混入、しまり弱い
φ３～５cmの礫含む）
10．黄褐色土（しまりやや強い）
11．淡黄褐色礫含土（φ５cm以下の礫含む、しまり強い）
12．淡黄褐色岩盤（軟質岩、地山）
13．暗黄褐色土（φ３cm以下の礫混じり）
14．暗黄褐色礫含土（φ５cm以下の礫多量に含む、しまりやや強い）



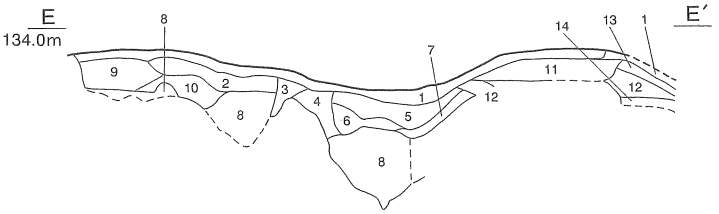
1．黒黄褐色土（腐植土、木の根を多く含む）
2．淡黄褐色土（φ１cm以下の礫混じり、しまりやや強い）
3．淡黄褐色土（２層よりしまる）
4．暗茶黄色土（φ３cmの礫混じり）
5．淡黄褐色土（φ２cm以下の礫含む、しまりやや強い）
6．黄褐色土（φ３cm以下の礫含む、しまりやや強い）
7．明黄色土（しまり強い、橙黄色のしまりの強い層あり）
8．暗黄色礫含土（φ３cm礫含む、しまり強い）
9．灰黄色土（しまり強い）
10．暗黄色礫（φ５cmの礫混じり）
11．暗褐色岩盤礫
12．淡黄褐色土（しまり弱い）
13．淡黄色礫（φ５cm以下の礫による）
14．暗黄色土（φ３cm以下の礫混じり）
15．淡黄色土
16．黄色土（しまりやや強い）
17．黄色土（しまりやや弱い）



1．黒黄褐色土（腐植物、木の根を多く含む）
2．淡黄褐色土（φ３cmの礫混じり、しまり弱い）
3．淡黄褐色土（φ１cmの礫含む、しまり弱い）
4．黄褐色土（φ３cm以下の礫含む、しまり弱い）
5．黄褐色礫含土（φ５cmの礫含む、しまりやや強い）
6．黄褐色礫（角礫による）
7．黄褐色土（φ５cmの角礫含む、しまり強い）
8．黄灰褐色岩盤（地山）
9．淡黄褐色土（φ１cmの礫含む、しまり弱い）
10．淡黄褐色土（φ１cm以下の礫含む、しまり弱い）
11．黄褐色礫含土（φ３cmの礫含む）
12．黄褐色礫含土（φ５cmの礫含む）
13．暗黄褐色土（礫混じり）
14．黄褐色土（φ５cm以下の礫混じり）
15．暗黄褐色土（φ３cmの礫やや含む）
16．暗黄褐色土礫混（φ５～10cm、１～３cmの礫含む）
17．淡黄褐色土（しまり強い）
18．淡黄褐色礫含土（φ１～３cmの礫含む、しまり強い）
19．淡黄色礫含土（φ10～15cmの礫混じり）
20．淡黄色土（φ５cmの礫混じり、しまり弱い）
21．黄色土（しまり強い）
22．黄色礫含土（しまり強い）



1．黒黄褐色土（腐植物、木の根を多く含む）
2．淡黄色土（しまりやや弱い）
3．黄褐色土（しまりやや弱い）
4．黄褐色土
5．黄褐色土（黄色味強い）
6．淡黄褐色土（しまり強い）
7．暗黄褐色土（φ１cm以下の礫含む）
8．暗灰黄褐色土（φ１cm以下の礫含む）
9．黄褐色土
10．黄褐色土（しまり強い）
11．暗黄褐色土（礫混じり）
12．暗灰黄褐色土（しまり強い）
13．黒茶黄色岩盤



1．黒黄褐色土
2．暗黄褐色土
3．黄褐色土
4．黄褐色礫含土
5．暗黄褐色土
6．黄褐色土
7．暗黄褐色土（小礫含む）
8．岩盤
9．黄褐色礫含土
10．暗黄礫含土
11．黒褐色土（焼土面あり）
12．黄褐色土（φ１cmの礫含む）
13．暗黄褐色粘土（φ３～10mmの礫含む）
14．黄褐色粘土（φ５cmの礫含む）

第84図　Ｂ区SD１土層断面図

製で、中央に穴の開く小さな梅花状の銅板とともに柿の実を表現している。軸にクッション材となる丈夫な紙を巻きつけた上、差し込まれる。端部の耳掻きは基部の軸が１㎜と細く、身となる軸末端に飾りをはめ込んだ上、しっかりと差し込まれている。このかんざしは、近世末～近代のものと思われる。

3　C区の遺構と出土遺物

C区は尾根の斜面に挟まれた鞍部にある。ここには東に開いた最大幅25m程度を測る三角形状の平坦面があり、土坑、小穴、溝などが検出されている。遺物は確認調査トレンチで出土した剥片以外はみられない。

⑴　土坑

土坑は不定形なものが多い。内面に焼土を含むSF８は溝SD３の下位に位置する。覆土は炭が多く入る黒色土で下位に焼土を伴っており、SD３の覆土と類似することから同一組成である可能性が高い。このような内部に炭や焼土を多く含む点では不定形な土坑SF４も同様であり、近世以降の所産である可能性が高い。不定形な土坑はSF３や５である。時期を示すものはないが、SF４や８に類するものであろう。

小土坑であるSF６や７は、前者と異なり平坦面の奥側（西側）の、小穴が集中する部分に含まれる。時期は判然としないが、小穴と同じ組成と考えたい。

SX２は一面を焼土で覆われる。確認調査でこの南側に掘られた17トレンチからは、縄文時代に遡る頁岩の剥片が出土している。縄文時代の住居等に伴っていた炉と考えたい。

⑵　溝

溝はSD２～４の３ヶ所が検出されている。SD２・３は同一延長状にあり、覆土の組成も類似することから、元来は一つの遺構であった可能性もある。SD４は小規模であるので説明は割愛する。

SD２　幅4.5m、長さ７m、深さ４～17㎝を測る。覆土である炭が混じる黒褐色土は表土から掘りこまれているため、近世以降の山仕事の際に掘られたものと考えられる。

SD３　幅0.7～２m、長さ11m、深さ６～10㎝を測る。検出面までの表土は５㎝前後で、覆土は上位が炭を多く含んだ黒色土、下位が炭の層となる。SD４の北側近くには、B区方面からの斜面が迫っているため、SD３の位置に比べて表土の堆積が促進されているものと考えらえる。

⑶　小穴

小穴はC区の西側に集中して検出されている。直径30～50㎝の円形～楕円形を呈するものが多く、深さは10～40㎝ほどとばらつきがある。中には、縄文時代の住居に伴う柱穴が含まれると思われるが、組み合わせの特定はできない。

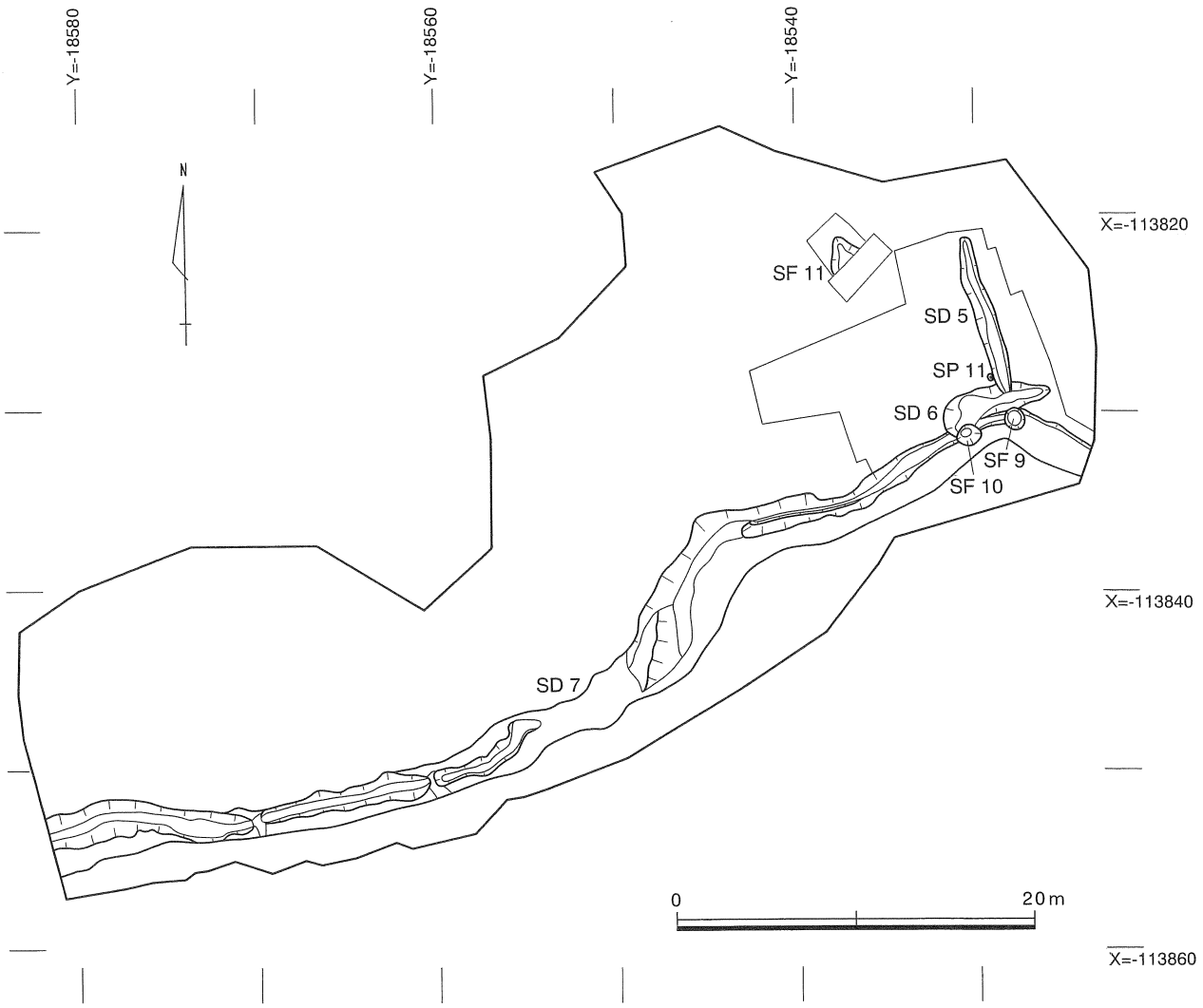
4　D－１区の遺構と出土遺物

D－１区は、今回の調査範囲で最も南側にある。C区を北側に望む北東方向へ下る尾根上にある。遺構は平坦面をつくる調査区東端付近に集中する傾向がある。土坑、小穴、溝が検出され、縄文時代遺物等を含む包含層の堆積が確認された。

⑴　土坑・小穴

土坑は円形のもの（SF９・10）、不定形なもの（SF11）の３基が検出されている。小穴は１基（SP11）のみである。

SF９・10　溝SD７の底面で検出された円形の土坑である。SD６やSD７と切り合うが、SD７より古く、SD６より新しいものと思われる。SF９が直径1.1m、深さ50㎝前後、SF10が直径１m、深さ30㎝前後と



第85図　Ｄ－１区遺構分布図

SF10のほうがやや小ぶりである。それぞれは1.6mの間隔をもつ。

SF11　調査区の北東側で検出された不定形の土坑である。最大幅２m、深さ15cm前後の規模がある。覆土の上位は炭の多く入る黒色土、下位は淡黄褐色土である。比較的遺存状態のよい牛か馬の脚部の骨片が出土しているため、近代の所産と考えられる。

小穴SP11はSD５とSD６の交点西側で検出された。直径35cmの円形である。

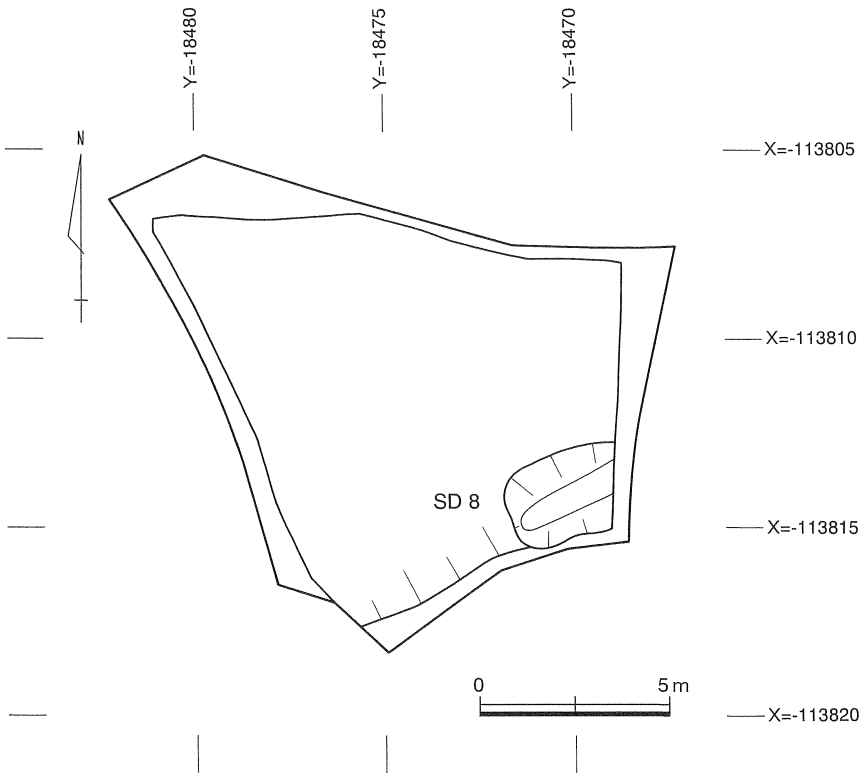
⑵　溝

溝は尾根に沿う大規模なSD７、調査区東側でこれに切り合うSD６、SD６に直交するSD５の３条が検出されている。

SD５　幅0.6～1.2m、長さ９m、深さ30cm前後を測る細長い南北方向の溝である。

SD６　幅２m、長さ6.4m、深さ65cm前後を測る太く短い東西方向の溝である。東にいくにしたがって徐々に細くなる。東端付近で縄文時代早期にあたる深鉢の体部片（第87図５）が出土している。胎土は緻密で、直径１～２㎜程の砂粒や雲母を少量含んでいる。内面は器面の残りがよく、横方向の擦痕が観察される。表面は本来無文であった部分と思われるが、風化により剥落が著しい。

SD７　Ｄ－２区に至る尾根上に、68mにわたって検出された大きな溝である。幅は半ばより下側で最も太く4.2m、調査区上端から９m付近で最も狭く1.6mとなる。溝内部の傾斜は、調査区東端の平坦面に至るまではほぼ同一で、西から47m間で16m下る（勾配34%）。調査区東端の平坦面では勾配12%程度と



第86図　D－２区遺構分布図

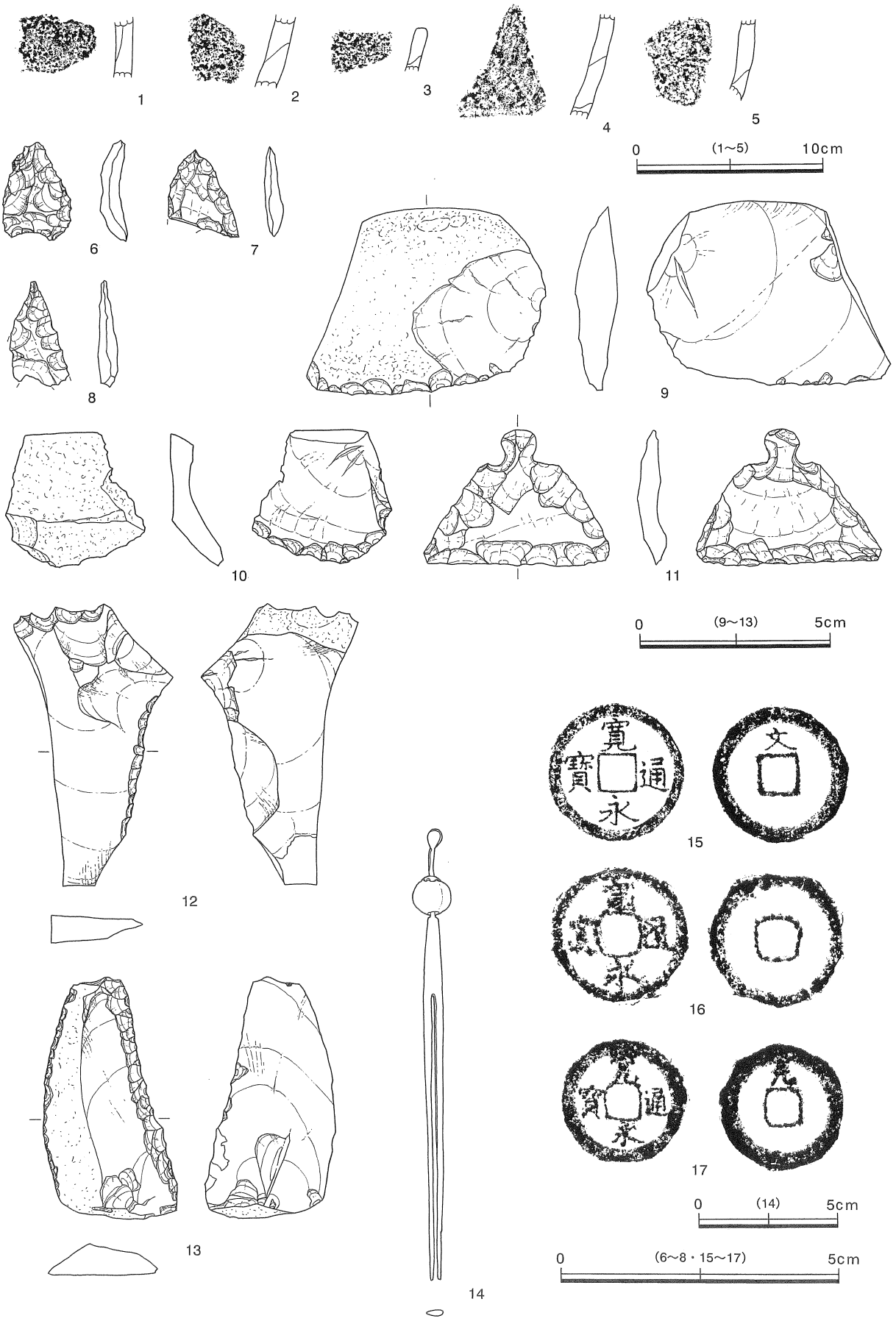
急に緩くなる。この溝は、B区SD１と同様な性格のものと思われる。

⑶　包含層

調査区東側の平坦面西よりで、現地表から20cm程度下に堆積する黄～赤褐色土が縄文時代早期頃の遺物包含層となっていた。この層位の上面では銭貨（寛永通寶）や金属製品（やっとこ）も出土しているが、後世の植林等により撹乱された過程で混入したものと理解した。寛永通寶は３点出土しているが、いずれも新寛永である。（第87図15）はいわゆる文銭であり、肉厚で遺存状態も良好である。17は背元、18は薄手のうえ腐食が進み、所々穴が空く。

包含層から出土しているのは石器３点である。頁岩製のスクレイパー（第87図９）は、表面の多くに原礫面を残す縦長の剥片の一側縁に、両面から細かな調整を加えて刃部を作り出すものである。４分の１ほどは折れて失われている。全体的に風化して白色味を帯びている。他の２点は頁岩の剥片である。

この区画からは、元来この包含層中にあったと思われる石器が、表土に混入して10点出土している。石質は頁岩が４点、黒曜石が３点、チャートが３点である。頁岩の中には、先のスクレイパーのように表面が風化するものが含まれないため、これらの間には時期差があるのかもしれない。製品は図化した小型の石鏃３点のみで、他は剥片や石核である。黒曜石製の石鏃（同６）は、側縁からの細かな調整ののち、基部を凹基に作り出している。背面に素材の面を多く残し、厚みがあるため荒削りな印象を受ける。チャート製の石鏃（同７）は、底辺の短い二等辺三角形状を呈する。細かな調整により、両側縁に緩やかなふくらみをもたせ、基部を凹基に作り出している。一方の逆刺が節理に沿って折れて失われる。チャート製の石鏃（同８）は、薄手であり、左右対象に整えられるため、他よりも洗練された印象を受ける。細かな調整により、両側縁に緩やかなふくらみをもたせ、基部を凹基に作り出している。一方の逆刺が折れによって失われる。



第87図　出土遺物実測図

5　D－2区の遺構

D－2区は、D－1区から下がった同じ尾根上にある。調査区の南東隅から遺構が検出されている。検出されたのは幅2.2m、長さ3.4m、深さ約60cmの規模である。B区SD 1やD－1区SD 7と同様な溝の始点であると解釈し、溝SD 8とした。なお、この調査区からの出土遺物はない。

第17表　土器観察表

挿図番号	種別・器種	部位	時代	区	層位・遺構	胎土・焼成・調整・色調
1	縄文土器 深鉢	体部細片	前期	A	2層	胎土　1㎜以下の白色砂粒を少量、石英を微量含む 焼成　良 調整　外面は磨耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調　5YR4/8赤褐色～7.5YR3/2黒褐色
2	縄文土器 深鉢	体部細片	前期	A	2層	胎土　1㎜以下の白色砂粒をやや多く、石英を微量含む 焼成　良 調整　外面は磨耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調　5YR4/6赤褐色
3	縄文土器 深鉢	口縁部細片	前期	A	3層	胎土　1㎜以下の白色砂粒をやや多く、石英を微量含む 焼成　良 調整　外面は磨耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調　7.5YR4/4褐色
4	縄文土器 深鉢	体部細片	前期	A	検出面	胎土　1㎜以下の白色砂粒をやや多く、繊維を多く、石英を微量含む 焼成　良 調整　外面は磨耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調　7.5YR3/1～3/2黒褐色
5	縄文土器 深鉢	体部細片	前期	D－1	SD 2	胎土　1㎜以下の白色砂粒を少量、石英を微量含む 焼成　良 調整　外面は磨耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調　5YR4/6赤褐色～5YR3/4にぶい赤褐色

第18表　石器・石製品一覧表

挿図番号	器　種	材　質	区	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
6	石鏃	黒曜石	D－1	表土	1.8	1.2	0.5	0.7	
7	石鏃	チャート	D－1	表土	1.6	1.2	0.3	0.4	
8	石鏃	チャート	D－1	旧表土直上	1.9	1.1	0.4	0.5	
9	スクレイパー	頁岩	D－1	黄褐色土直上	6.5	5.0	1.7	63.2	白色に風化する
10	スクレイパー	頁岩	A	排土	3.6	3.8	1.3	10.1	
11	石匙	頁岩	A	検出面層	3.7	5.0	0.7	9.9	白色に風化する
12	スクレイパー	頁岩	A	検出面層	7.6	4.3	1.2	27.4	白色に風化する
13	スクレイパー	頁岩	A	排土	6.5	3.2	1.3	25.6	白色に風化する

第19表　金属製品一覧表

挿図番号	器　種	素　材	区	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
14	かんざし	真鍮・ガラス	B	表土	16.2	0.7	0.2	10.9	玉幅1.4cm

第20表　銭貨観察表

挿図番号	種別	銭　貨　名	国名	初鋳年代	区	層位遺構	直径(㎜)	重量(g)	特　徴
15	銅銭	寛永通寶　新寛永	日本	1668年	D－1	掘削土中	25.0	3.3	背文
16	銅銭	寛永通寶　新寛永	日本	不明	D－1	表土	24.0	1.5	腐食が進む
17	銅銭	寛永通寶　新寛永	日本	1741年	D－1	黄褐色土直上	22.9	1.8	背元

第４章　まとめ

今回の報告では、小瀬戸遺跡と栗ヶ沢遺跡の地域的には近接した２遺跡を報告した。興味深い成果は、低湿地（小瀬戸遺跡）における平安時代を中心とした遺構群（下層遺構）、戦国時代の水田遺構（上層遺構）、丘陵部（栗ヶ沢遺跡）で検出された縄文時代の遺構に絞られる。

１　Ｅ区下層遺構の性格と年代

ここでは、検出遺構（第11・33図）について検討する。Ｅ区下層部で検出された建物跡を概略すると、９世紀後半から10世紀代の建物と、12世紀前半から12世紀後半の建物に大別される。こうした建物群と遺跡の立地などを考慮する必要があろう。

ａ．Ｅ区の南西から南東にかけての建物群と流路や溝を検討すると、９世紀後半から10世紀代には、建物群に対して南東部から北側の低地を流れていた大きな流路のSR８があったと思われる。その後12世紀前半から12世紀後半になると、南側の丘陵部や発掘区外西側から流れてくるSD10などの河川の氾濫があったと考えられる。この水害から建物群を守るような構造に整えられていたと思われる。

ｂ．SR８の氾濫からSH１・SH４などの建物群を守るために、９世紀後半から10世紀代に土手状遺構１・２を構築している。この遺構はSR８の堤防的な機能を持たせるように構築したと思われる。このような、建物群を洪水から守るシステムは12世紀前半から後半にかけてSH５の北側の部分にも作られる。12世紀代にはSD10・SD13の間が一時期窪地になっていたと考えられる。この部分は、建物群へ北側から流れ込む洪水などの水害を防ぐために作られた窪地で、調整池的な役割を果たしていた可能性がある。SD10から浸水した水はこの窪地に溜まり、もう一度SD10に戻り排水されるようなシステムになっていたと思われる。

ｃ．12世紀代にはＥ区の南の山側から湧き出る水を北側に流すための水路のSD14が作られた。これには窪地の部分の排水溝の働きもあり、こうした水はSD10に合流して排水されたと思われる。

ｄ．12世紀代に作られたと思われるＥ区下層の建物群の南側と北側の凹地は、輪中的な機能を持たせていると考えられる。SR８はＥ区の南東部山側から流れ出る大量の湧き水や、雨水を集めて下流部に流していると思われる。

ｅ．12世紀代には、建物群とその近くを東西方向に流れるSD13・SD15・SD21と、SH２を囲んで流れるSD17・SD19などの水路が作られている。

ｆ．静岡県埋蔵文化財調査研究所が今回調査したＥ区下層の西側区域は、静岡市文化財課で発掘調査を行っており、Ｅ区下層の西側からも建物群が検出（註１）されているようだ。こうした点を考慮すると、今回当研究所が調査したＥ区下層の遺構は、平安時代から鎌倉時代にかけての小瀬戸遺跡全体からすると、中心地域ではないと思われる。むしろ、小瀬戸遺跡全体のうち、この時代の建物群の東側先端部を調査した可能性が強い。

このように、台風や大雨が続いた時などにはSH１からSH３などの建物群の東側にある窪地（第11・33図）や、SH４・SH５の東側と北側の部分の窪地が大きく池状になったと思われる。また、SR８の氾濫による水害を防ぐために、土手状遺構１・土手状遺構２が９世紀後半から10世紀代にかけて構築されたと考えられる。この土手状遺構１・土手状遺構２は、その後、12世紀後半以降にもSR８の氾濫を防ぐための堤防的な役割を果たしていたと考えられる。さらに溝状遺構は川状遺構と関係するとも思われる。SD10はＥ区北部で検出され北へ向かって流れており、Ｅ区のすぐ西側にある静岡市文化財課の発掘区か

ら伸びてくる川と同一であると考えられる。溝状遺構を見るとSD13やSD21のようにE区の東西方向に伸びるものと、SD14のようにE区の南北方向に伸びるものとがある。

さて、前述したように、E区下層の遺構は掘立柱建物がSH１からSH６まで６棟検出されている。このうちSH１とSH４の２棟は総柱建物であり、SH６も総柱建物であった可能性がある。これら以外のSH２・SH３・SH５の３棟は掘立柱による側柱建物であった。この中で、SH１は道状遺構２・道状遺構３・道状遺構４に囲まれた状況で検出されており、SH１と道状遺構２・道状遺構３・道状遺構４はセット関係をなすものと考えられる。掘立柱建物跡SH１からSH６までの６棟について時期を検討すると、次のような第Ⅰ期から第Ⅲ期の３時期に分けられると考えられる。

第Ⅰ期に区分されるのはSH１・SH４の総柱建物跡である。SH１は方向がN－7°－Eであり、桁行４間、梁行３間である。建物の年代は９世紀後半から10世紀初頭と思われる。SH４は方向がN－7°－Eであり、桁行４間、梁行３間である。建物の年代は９世紀後半から10世紀初頭と思われる。したがって第Ⅰ期の建物はSH１・SH４の総柱建物跡で９世紀後半から10世紀初頭と考えたい。また、SH６は遺物が出土しなかったが総柱建物跡の可能性がある。SH６は方向がN－111°－Eであり、第Ⅰ期の建物群との関係から10世紀代の建物と考えておきたい。

第Ⅱ期に区分されるのは側柱建物SH２である。SH２は方向がN－57°－Eであり、桁行５間、梁行３間である。建物の年代は12世紀前半と考えられる。

第Ⅲ期に区分されるのは側柱建物SH３・SH５である。SH３の方向はN－44°－Eであり、12世紀後半の建物と思われる。SH５はN－40°－Eであり、桁行５間、梁行４間である。SH４の柱穴との切り合いや建物の方位から12世紀後半の建物と思われる。

建物群は以上３期に分けられ、第Ⅰ期が総柱建物跡SH１とSH４の２棟と総柱建物の可能性のあるSH６、第Ⅱ期が側柱建物SH２の１棟、第Ⅲ期が側柱建物SH３とSH５の２棟であった。

また、SH１を囲むように道状遺構２から道状遺構４が巡っており、建物を囲む道状の遺構と考えられる。今後、９世紀後半から10世紀初頭の建物跡と道状遺構との関係を想定できる事例についても検討する必要がある。

この時期の当遺跡の性格については不明である。小瀬戸地域の中心的な遺跡と考えられ志太平野と結ぶ間道が脇を通り、交通的にも重要な遺跡であったと思われる。

２　E区下層遺構出土遺物について

下層遺構出土の灰釉陶器　小瀬戸遺跡出土の灰釉陶器と生産地の関係を検討したい。この遺跡から出土した灰釉陶器とその関係資料を年代的に分けると次のようになろう。

第Ⅰ期は８世紀末から９世紀初頭の猿投窯生産品でO－10号窯式併行の原始灰釉陶器の長頸瓶（註２井上、110・290）が搬入品として出土している。

第Ⅱ期は９世紀前半の猿投窯生産品でK－14号窯式併行の灰釉陶器の長頸瓶（８・９・56・62）や、K－14号窯式の広口瓶（14）が出土しており、小瀬戸遺跡では９世紀前半に長頸瓶や広口瓶などの特別な器種を猿投窯から搬入したことになる。この時期の碗形の使用状況については不明な点があるが、K－14号窯式からK－90号窯式の東遠系の碗（84）が出土している。

第Ⅲ期は９世紀後半の猿投窯生産品でK－90号窯式併行の陶器の使用状況を検討すると、猿投窯生産の緑釉陶器の稜碗（111）、猿投窯生産の緑釉陶器の碗（149）、猿投窯生産の手付瓶（291）、猿投窯生産の長頸瓶（115）、猿投窯生産の碗（10・194・195）を搬入し使用している。他にこの時期には、東遠系で窯跡が不明な灰釉陶器の碗（11・48・114・141・142・144・145・191～193・196）、助宗窯生産の長頸

瓶（49・86・147）、東遠系の長頸瓶の把手（148）、助宗窯生産の皿（43）、助宗窯生産の碗（41・65・68・85・112・143）、助宗窯生産の輪花碗（102）、東遠系の長頸瓶（88・113・140・146）などがある。小瀬戸遺跡でのこの時期の出土状況をみると、特殊な器種として猿投窯生産の緑釉陶器の稜碗・緑釉陶器の碗・手付瓶・長頸瓶が搬入されている。この第Ⅲ期の９世紀後半には東遠での窯業生産が始まり、駿河国志太地域でも助宗窯で灰釉陶器の生産が始まる。今回の小瀬戸遺跡発掘調査で、助宗窯の生産品が検出できたことは重要である。この他に窯跡は特定できない東遠系の製品もある。

第Ⅳ期は10世紀初頭のＯ－53号窯式併行の陶器でこれを検討すると、猿投窯からの搬入品が極めて少なくなる。助宗窯や旗指古窯などの灰釉陶器生産品でその多くがまかなわれたことがわかる。まず、この時期の出土陶器を見ると猿投窯生産のＯ－53号窯式の碗（152）が出土している。助宗窯生産の碗（12・64・72・73・90・197・225・255・266）、旗指古窯生産の碗（13）、東遠系の碗（28・35・59・63・104・118・151・153・154・198～202・224・226・294）、助宗窯生産の皿（55）、東遠系の皿（150・155・292）、東遠系の長頸瓶（116・293）などの出土品もある。この段階になると小瀬戸遺跡では、長頸瓶、碗、皿などのほとんどを在地の生産品でまかなっていることがわかる。出土の灰釉陶器を検討すると、第Ⅳ期とした10世紀初頭のＯ－53号窯式併行の時期以降使用が一時途切れる傾向にある点が注目される。

さて、前述したように小瀬戸遺跡の発掘調査では藤枝市助宗窯で生産されたＫ－90号窯式の灰釉陶器の製品が出土している。消費遺跡において助宗窯で生産されたＫ－90号窯式の灰釉陶器（註３）を確認できたことは大きな成果と思われる。助宗窯でＫ－90号窯式併行の灰釉陶器を生産していることは、菅原雄一（註４）の報告と助宗窯出土資料を観察して明らかとなってきた。助宗窯で生産されたＫ－90号窯式併行の灰釉陶器を窯跡と消費遺跡の双方で確認できたことになる。また、島田市旗指古窯の灰釉陶器生産はＯ－53号窯式併行の末期（註５）からスタートし、その生産の中心が広久手窯期以降から山茶碗の初期段階と考えられる。その点からすると、助宗窯と旗指古窯との関係はさらに重要になる。須恵器生産の伝統のあった助宗窯に、その後、灰釉陶器の工人集団が移住したり技術を伝えて、Ｋ－90号窯式の段階から灰釉陶器の生産をスタートさせたことになる。そして、Ｏ－53号窯式の段階で工人集団の分散と移動があったと思われ、その移動した集団が旗指古窯で灰釉陶器の生産を始めたとも考えられる。この点は島田市船木の向山古窯（註６）２区２号窯でもＫ－90号窯式の末には灰釉陶器を生産しているので、合わせて今後検討しなければならない。

下層遺構出土の糸切り碗について　小瀬戸遺跡からは比較的多くの糸切り碗（註７）が出土している。糸切り碗の生産地としては島田市船木向山２区２号窯（註６）、向山３区１号窯や旗指古窯第14号窯跡や同第17号窯跡（註５）など旗指古窯跡群（註５）もあり、助宗窯での生産も考えられる。糸切り碗の用途は不明な点があるが、消費遺跡である島田市大津の居倉遺跡（註８）からは糸切り碗が多く出土しており、その中に「酒坏」と墨書された糸切り碗（註９）がある。糸切り碗のいくつかの用途の中に「酒坏」として使用したものがあったことは認めるべきであろう。この他に居倉遺跡出土の糸切り碗には「尺」などの人名（註９）と考えられる墨書資料もある。

小瀬戸遺跡出土の糸切り碗については器形、器高、口径、焼成などから検討すると大きく２時期に分けられると思われる。ＳＨ１の検出面から出土した９世紀後半のＫ－90号窯式併行と思われる東遠系の資料（16）がある。同じく９世紀後半のＫ－90号窯式併行の東遠系と思われる糸切り碗（204）が出土している。次のＯ－53号窯式併行にあたる10世紀初頭には、東遠系の糸切り碗の出土量が多くなってくる傾向にある。このＯ－53号窯式併行の糸切り碗は（17・25～27・29・30・38・50・66・70・74・75・92～95・119～121・157～162・164・203・205・206・227～232・295・296）などが出土している。圧倒的に10世紀初頭の糸切り碗の使用が多いことがわかる。

下層遺構出土の山茶碗・小碗・小皿について　山茶碗と小碗、小皿について検討すると、山茶碗のＩ

期では渥美窯の12世紀前半（256）と思われる搬入品が１点出土した。他の山茶碗は東遠系で12世紀前半と思われる資料（註10、52・122・233～235）がある。東遠系の小碗は、12世紀前半の資料（19・31・76・124・125・236・261・267）がある。また、東遠系の小碗で12世紀中葉から12世紀後半と思われる資料（297）も出土している。山茶碗のⅡ期では12世紀後半の資料（36・167）がある。他に山茶碗で12世紀代と考えられる資料（209）、同じく山茶碗でⅡ－２からⅢ－１期の12世紀末と思われる資料（54）、同じく山茶碗でⅢ－１期の13世紀前半と考えられる資料（18）、同じく山茶碗でⅢ－１期の13世紀中頃と思われる資料（97・165）同じく山茶碗でⅢ－２期の13世紀中頃と考えられる資料（207）、小碗・小皿でⅢ期の13世紀代の資料（168・271・302）、東遠系の小皿でⅢ－３期の13世紀後半の資料（126）、小碗・小皿で13世紀後半の資料（211・237）などが出土している。

3　戦国時代の水田遺構

戦国時代以降に開かれた水田遺構は、小瀬戸遺跡の全区画に渡って検出されている。水田面からは、戦国期～近世後半の遺物が出土していることから、16世紀後半の開田以来、およそ300年間にわたりほぼ同一な土を繰り返し耕作していたことが明らかになった。小瀬戸谷は、総じて南から北へ下がる地形である。等高線に平行する方向の大畦畔に普遍的にみられた杭や横木による保護施設は、田面を水平に整えて下位に流出しないように図るためのものである。したがって、大畦畔の上下では大きく段差を持つ個所がいたるところに観察されている。また、山際のＢ区を中心に、畦畔の方向が山に沿う方向に崩れてくる傾向がある。このことから、限られた空間を最大限利用して、生産効率を向上させようとする意図が色濃く窺える。

近世の小瀬戸村は天領である。寛永年間で約65石、元禄年間で約195石、天保年間で206石の村高が郷帳などに記載されており、小瀬戸谷の水田は、寛永年間以降およそ半世紀で３倍の収益を上げるにいたり、それ以降はほぼ横ばいであったことがわかる。これは、農業技術の進歩とともに耕地が谷の隅々まで急激に広げられたことを示唆しているのだろう。ところが、これらの水田遺構は、多くの部分が砂礫によって被覆されている。これは、河川の氾濫がもたらした堆積物によって、水田が一気に埋没したことを示している。この洪水堆積物の上面にしばしば見られるラミナは、洪水後しばらくの間水が引かず、湿地化したままであったことを示している。このことは、谷の入り口がせり出す尾根によって狭められているために、谷全体の排水効率があまり高くなかったことが原因のひとつであろう。

近世の洪水で記録に残るものとしては、文政11年（1827）の藁科川の氾濫がある。この際には、小瀬戸村の田畑は洪水堆積物によって広い範囲で川成（砂利によって耕作不能となる状態）となってしまったようである。今回調査を行った水田からは19世紀前半までの遺物が出土しているので、調査によって検出された水田はあるいは文政11年の水害によって埋没したものとも想定される。

しかし、水が引いた後は洪水堆積物の上面を利用して、再度水田を営んでいる。水害からさほど時を経ない天保年間には、すでに元禄年間以上の生産高までの復旧を果たしている。耕作域の復旧には生活と命がかかっているので、小瀬戸の人々は必死だったのであろう。このように、小瀬戸谷の人々は常に水と戦っており、洪水のたびに粘り強く耕地を復旧させていたことが窺える。

4　丘陵部の縄文時代遺構

丘陵部にある栗ヶ沢遺跡では、縄文時代早期にあたる遺構と遺物が検出されている。得られた資料はごく少量であるが、近在の縄文時代遺跡の内容が判然としない現状においてはきわめて意味深いものと

いえる。幾度も述べてきたように、安倍川・藁科川流域には縄文時代の遺跡が点在している。遺跡の多くは狭い範囲のもので、河川から一段上がった丘陵裾部に位置することが多い。遺跡が大規模化しなかった要因のひとつは大井川にみられるような河岸段丘が発達しなかったことが挙げられる。この地域の沖積地から急峻な丘陵がせりあがる地形が、縄文人の暮らしを規制していたのであろう。

今回調査が実施された栗ヶ沢遺跡は、従来知られていた遺跡の立地と異なる丘陵上に営まれた遺跡である。この地域の丘陵は、いずれも小河川による開析が激しいため、尾根も狭く細長い。調査範囲においても、もっとも広いＡ区、狭いながらも山の陰となるＣ区から遺構・遺物が検出されたことは、限られた条件の中で最も生活に適した地域を選び出していることを示している。

現状では、ごく限られた所見しか得られないが、当該期の遺跡が、丘陵上にも存在することを知るきっかけとなったことは確かである。資料の増加を捉えて、この地域の縄文時代像を地理的な特異性を見据えた上で構築していくことは今後の課題である。

文末となったが、報告をまとめるにあたって菊田　宗・鈴木悦之・大川敬夫・新井正樹（静岡市文化財課）、八木勝行・岩木智絵（藤枝市博物館）の各氏にはさまざまなご教示をいただきました。記名して感謝する次第です。

註

１：平成17年度静岡市文化財課の調査による。菊田宗氏（静岡市文化財課）のご厚意により、現地を実見させていただいた。

２：Ｏ－10号窯式併行の「原始灰釉陶器」については、井上喜久男氏からご教示いただいた。

３：平成17年２月に八木勝行・岩木智絵両氏（藤枝市博物館）のご厚意で、澁谷と河合が助宗窯産の灰釉陶器を実見した。この中にＫ－90号窯式期に併行すると考えらえる、体部に回転ヘラ削りを施す碗が存在することを確認した。

４：菅原2005による。

５：松澤1976、澁谷1982・83による。

６：嶋野1997による。ここでは旗指古窯跡生産の灰釉陶器より古い段階の陶器が生産されている。向山２号窯からは多くの「糸切り碗」が出土しているが嶋野雄康氏は報告していない。今後再整理する必要があると考えられる。

７：澁谷1983では、この器種を「底部を切り離している無高台碗」としたが、今回は井上喜久男氏のご教示により「糸切り碗」の用語を使用することとした。

８：澁谷1987による。

９：澁谷1987・94による。

10：河合2001・03による

参考・引用文献

静岡県　1930『静岡縣史』第１巻

静岡県　1988『静岡県史』資料編５中世１

静岡県　1990『静岡県史』資料編１考古１

静岡県　1990『静岡県史』資料編２考古２

静岡県　1992『静岡県史』資料編３考古３

静岡県　1992『静岡県史』資料編６中世２

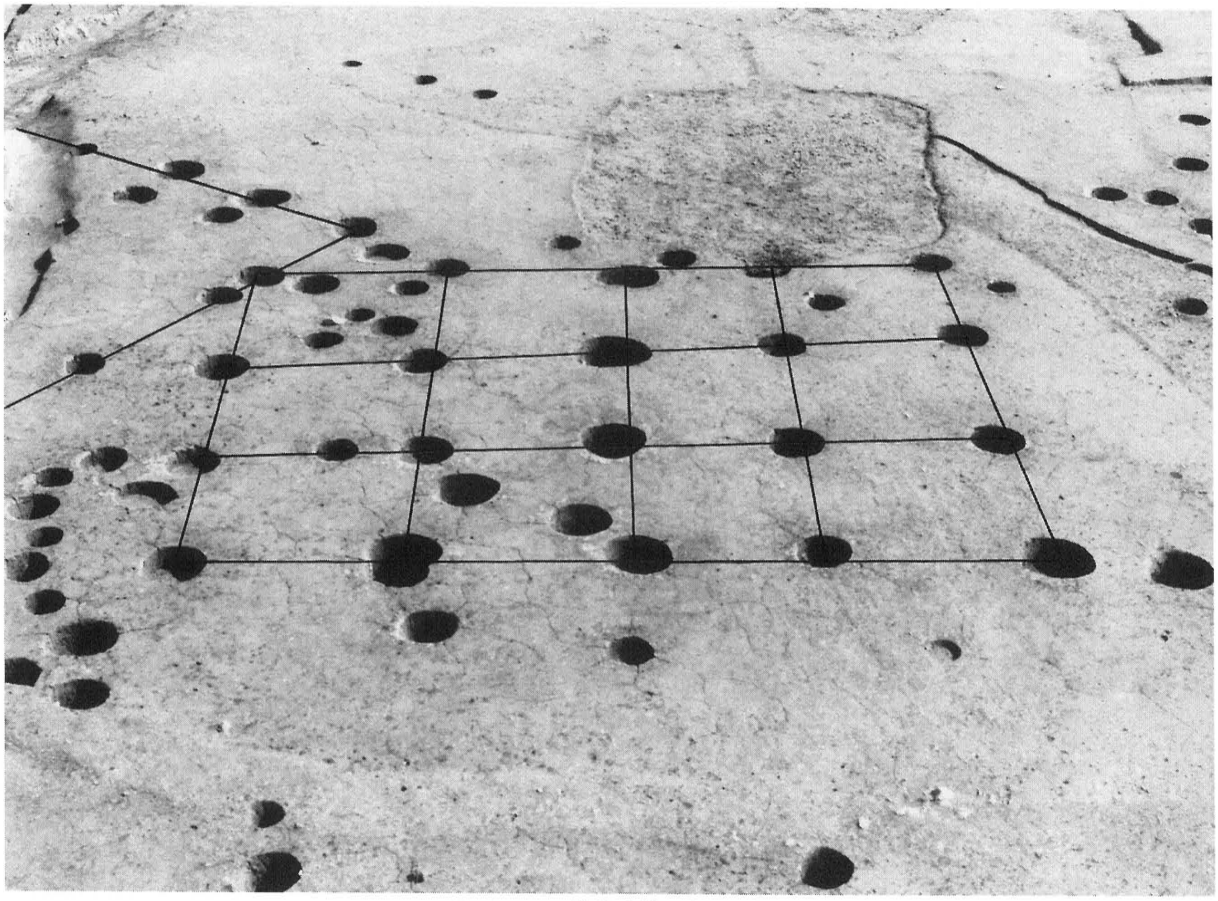
静岡県　1994『静岡県史』資料編７中世３
静岡県　1997『静岡県史』通史編２中世
静岡県教育委員会　1981『静岡県の中世城館跡』
静岡県教育委員会　2001『静岡県の前方後円墳ー個別報告編ー』
静岡県教育委員会　2001『静岡県の前方後円墳ー総括編ー』
静岡県土木部　2004『雨量・水位年表』平成15年
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1985『宮下遺跡』（遺構編）
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1986『神明原・元宮川遺跡　大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1986『内荒遺跡』（遺構編）
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988『内荒遺跡』（遺物編）
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989『大谷川Ⅳ』（遺物・考察編）
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991『宮下遺跡』（遺物編）
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1999『元島遺跡Ⅰ』
静岡市役所　1931『静岡市史』第１巻
静岡市　2003『静岡市統計書』平成14年度版
静岡市立登呂博物館　1990『特別展　静岡・清水平野の古墳時代ー新出土品にみるまつりとくらしー』
静岡市教育委員会　2001『ふちゅ～る』№９
静岡市教育委員会　2005『ふちゅ～る』№13
大澤和夫　1935「有渡山塊の考古学的調査」『静岡県郷土研究』第５輯　静岡県郷土研究協会
大塚淑夫　1994「いほはらの君ー静岡県中部地方の古墳時代・首長権の推移ー」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
小和田哲男　1981「Ｖ安倍城跡」『静岡県の中世城館跡』静岡県教育委員会
河合　修　2001「青灰色のうつわー榛原郡金谷町横岡字釜谷の灰釉系陶器についてー」『研究紀要』第８号　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
河合　修　2002「建物の規格と組み合わせ～静岡県内の事例から～」『第９回東海考古学フォーラム尾張大会資料集、東海の中世集落を考える、ー考古学から中世のムラをどう読み解くかー』
河合　修ほか　2003「東海」『シンポジウム中世土器研究の今日的課題』日本中世土器研究会
澁谷昌彦　1982「旗指古窯陶器生産の年代について」『静岡県考古学研究』13　静岡県考古学会
澁谷昌彦　1983「第Ⅳ章　旗指古窯跡焼成陶器の編年と様式について」『旗指古窯発掘調査報告書』島田市教育委員会
澁谷昌彦　1987「②出土した灰釉陶器の生産地について」『居倉遺跡』島田市教育委員会
澁谷昌彦　1994「旗指古窯跡群と居倉遺跡の関係についてー「尺」などの文字資料を中心としてー」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
嶋野雄康　1997「第２区２号窯焼成陶器」・「第３区１号窯焼成陶器」『向山遺跡』島田市教育委員会
菅原雄一　2005「助宗古窯跡群における灰釉陶器・山茶碗生産の様相」『藤枝市文化財年報ー平成15年度ー』
鈴木公雄　2002『銭の考古学』吉川弘文館
鈴木道之助　1991『図録　石器入門事典』縄文　柏書房
竹内理三編　1982『角川日本地名大辞典』22静岡県
沼館愛三　1933「安倍城の研究」『静岡県郷土研究』第１輯　静岡県郷土研究協会
松澤　修　1976「器種と変遷」『旗指古窯址群（本文編）』島田市教育委員会ほか

写　真　図　版

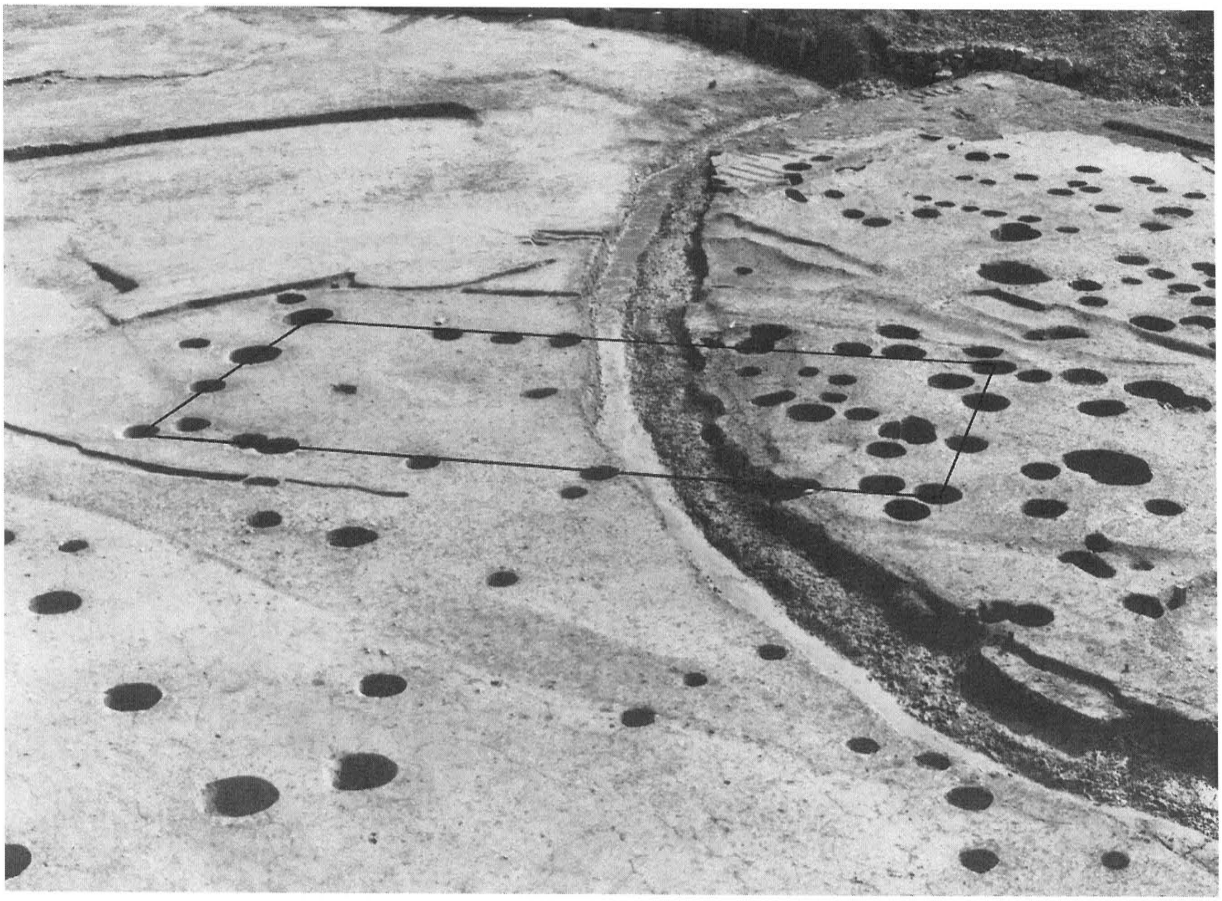
小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡遠景(南より)

下層遺構全景

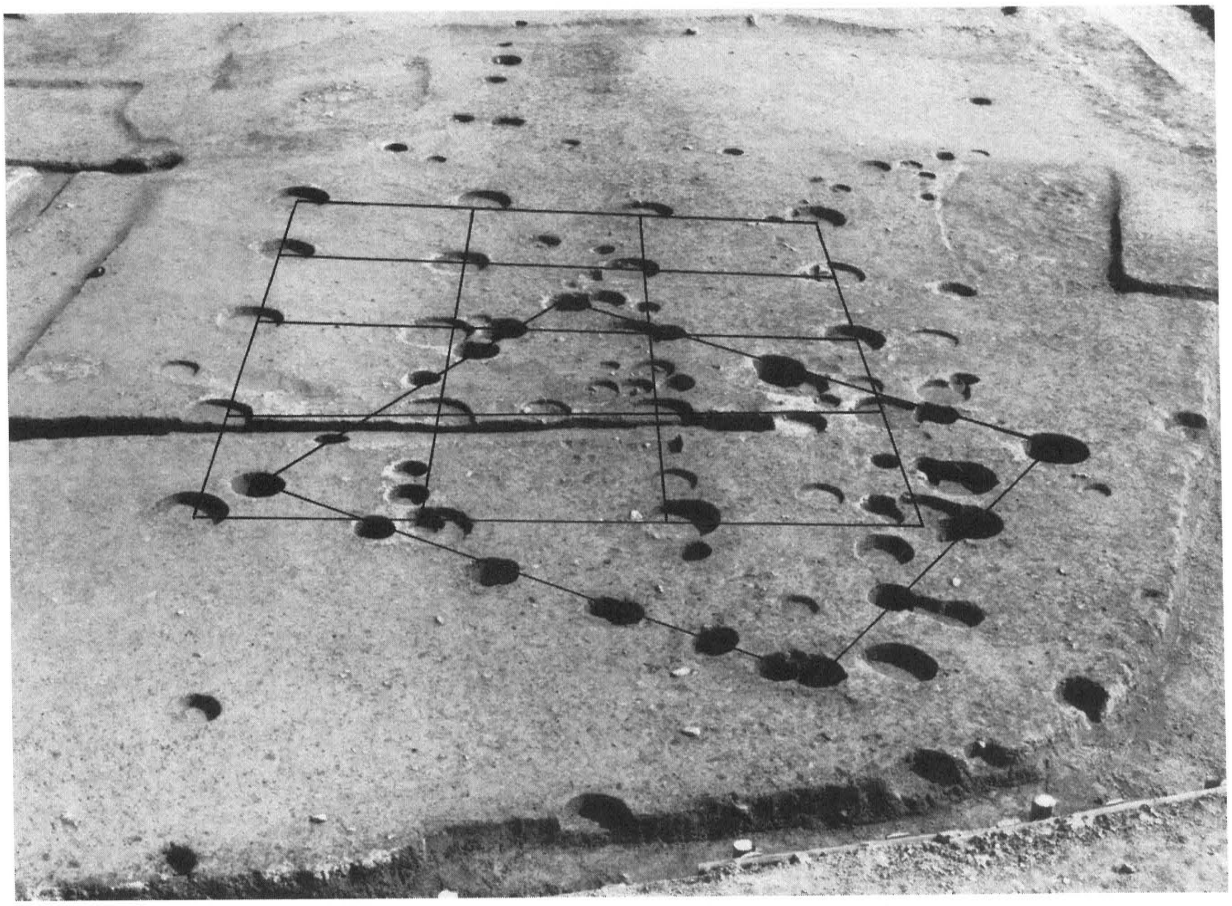
図版２　小瀬戸遺跡



SH１・３、道状遺構２（西より）



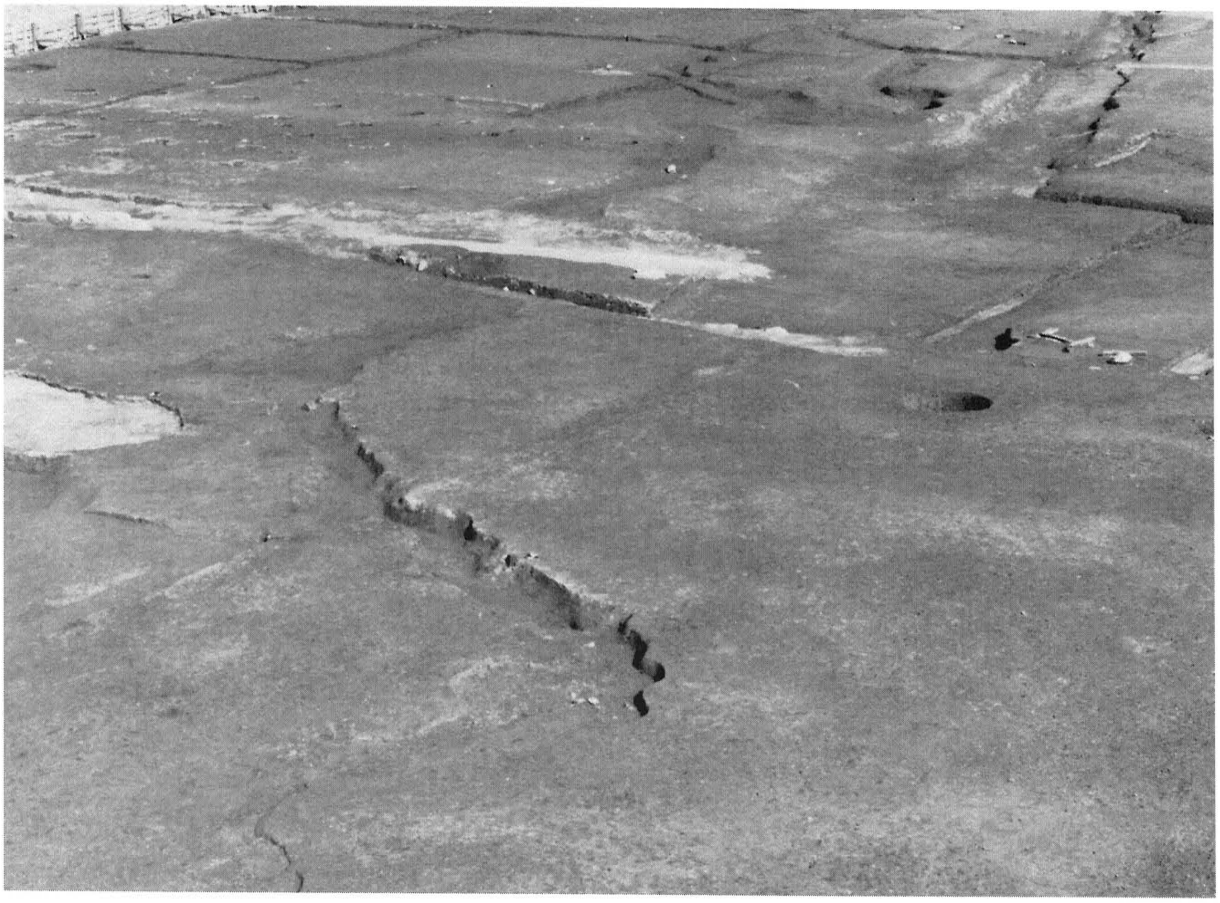
SH２、SD16～22、道状遺構３（北西より）



SH４・５（西より）

SH６、SD21、道状遺構６（西より）

図版４　小瀬戸遺跡

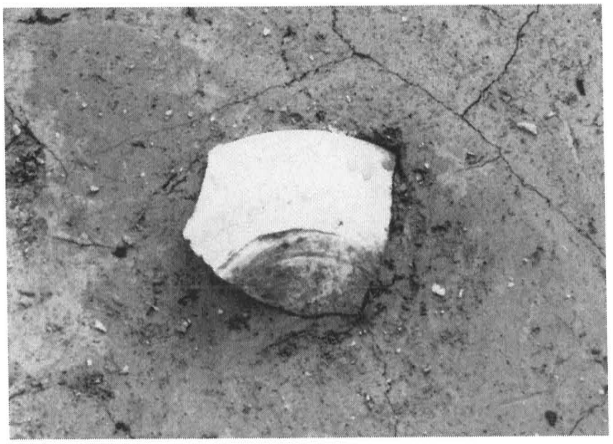


SD14（西より）

土手状遺構１・２、SR８（南東より）

SP251半截状況（南より）

SP299完掘状況

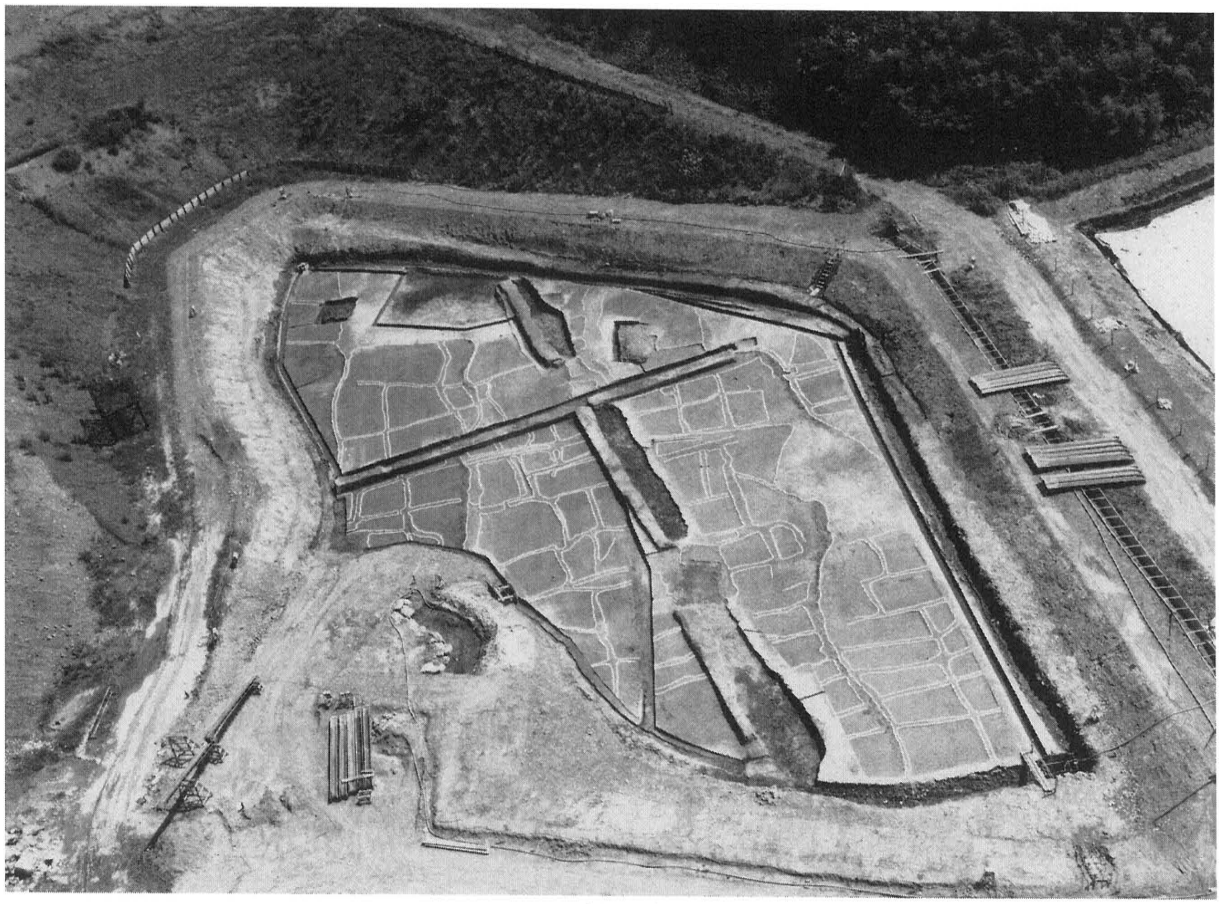


遺物出土状況（灰釉陶器）

遺物出土状況（灰釉陶器）

遺物出土状況（鉄鏃）

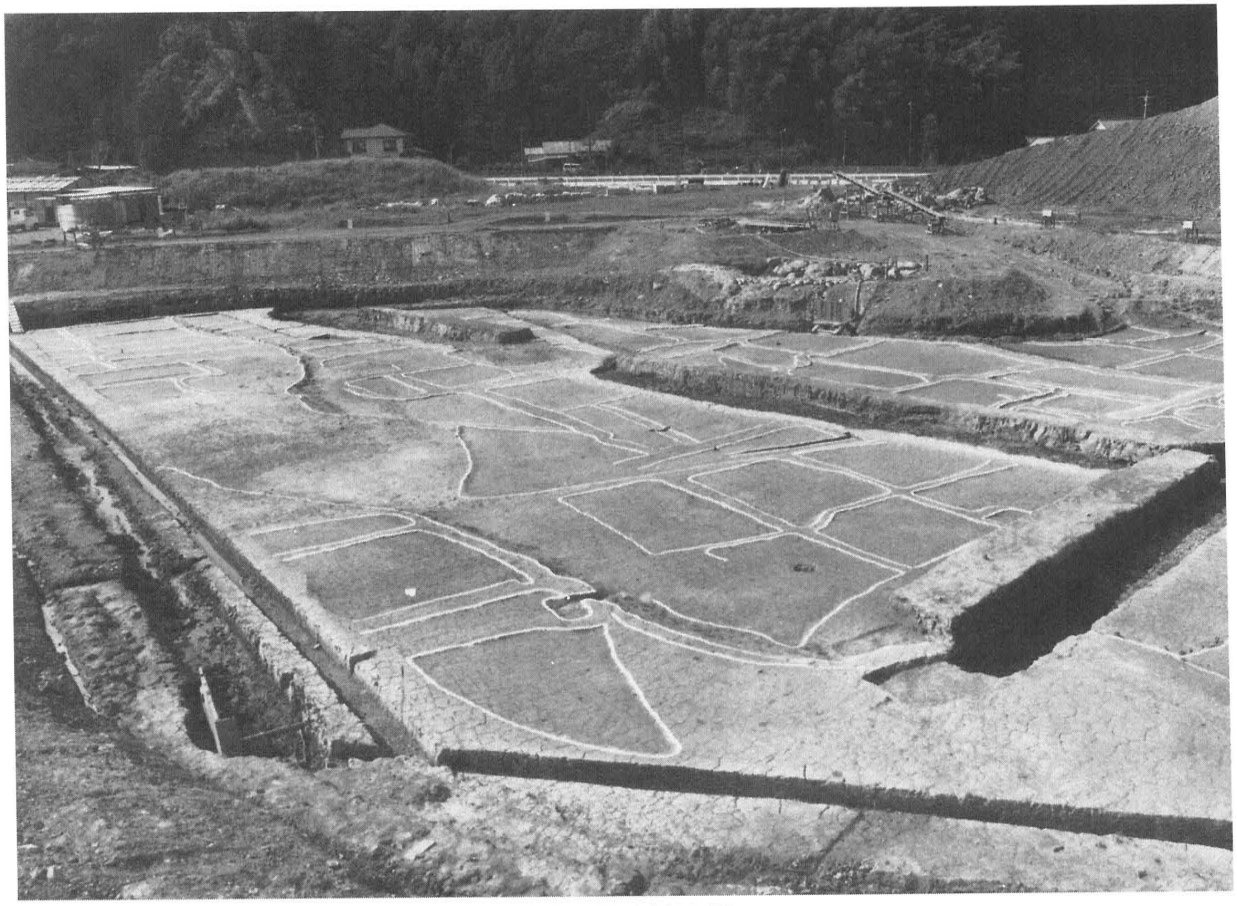
図版 6　小瀬戸遺跡



A区水田面全景

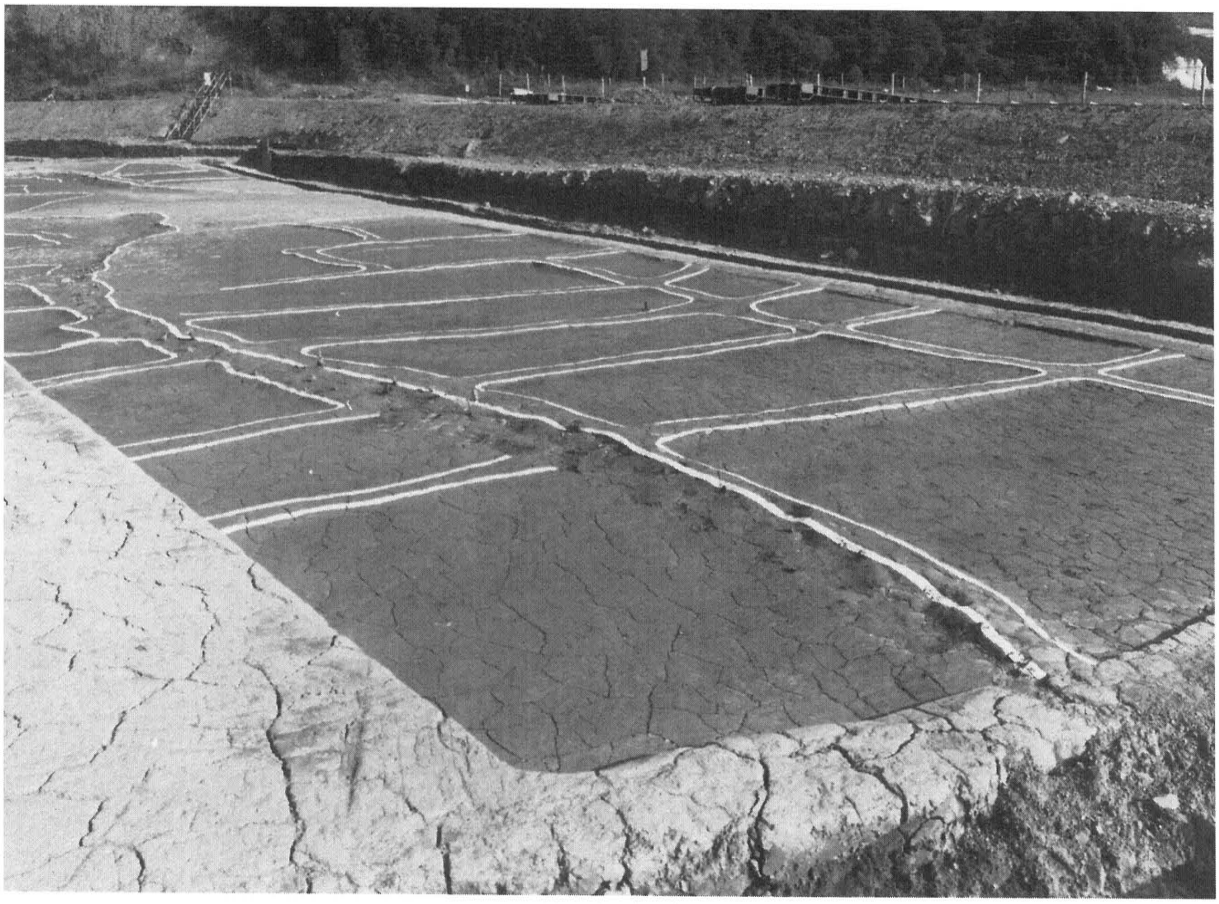
SK1・4・5

SK２・３、SD１～３（西より）

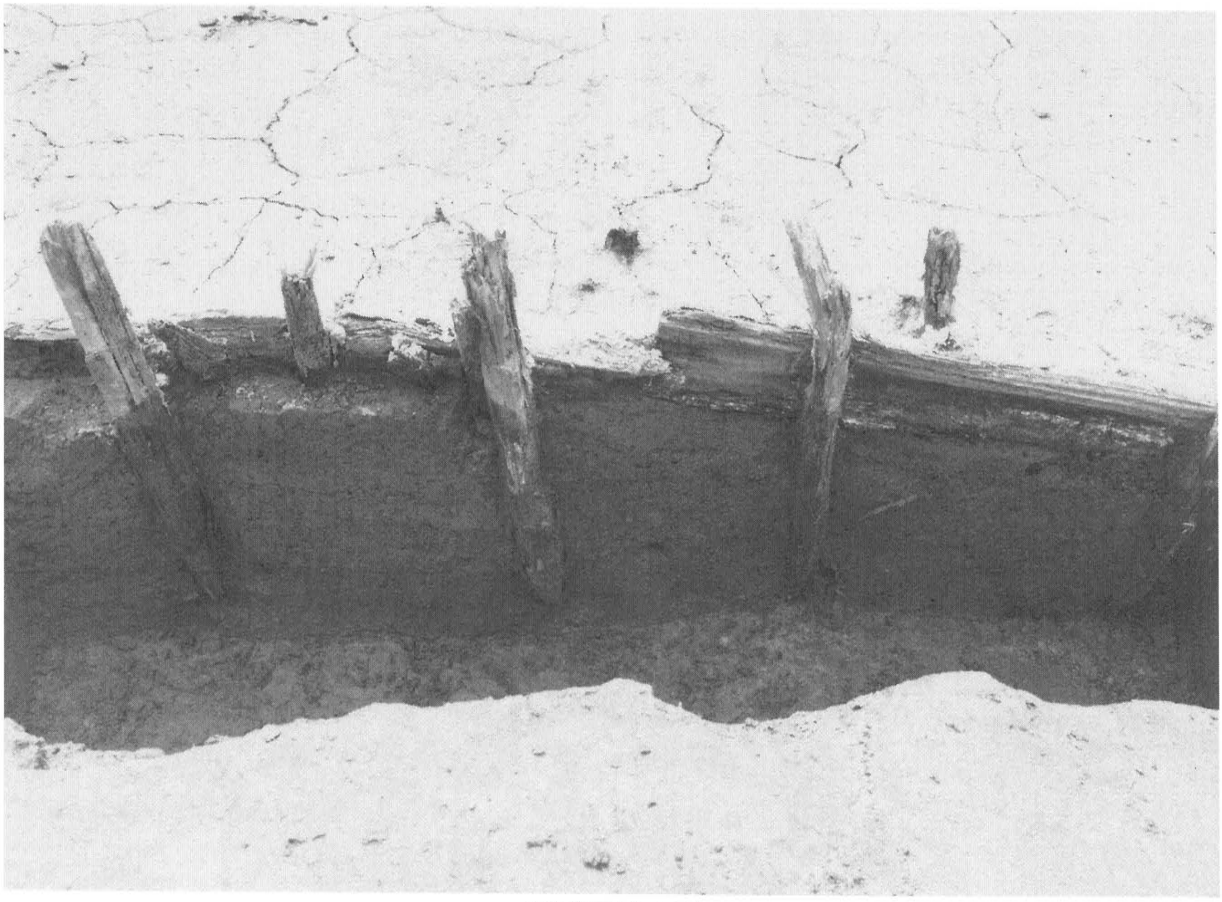


SR９、SD４（南より）

図版 8　小瀬戸遺跡

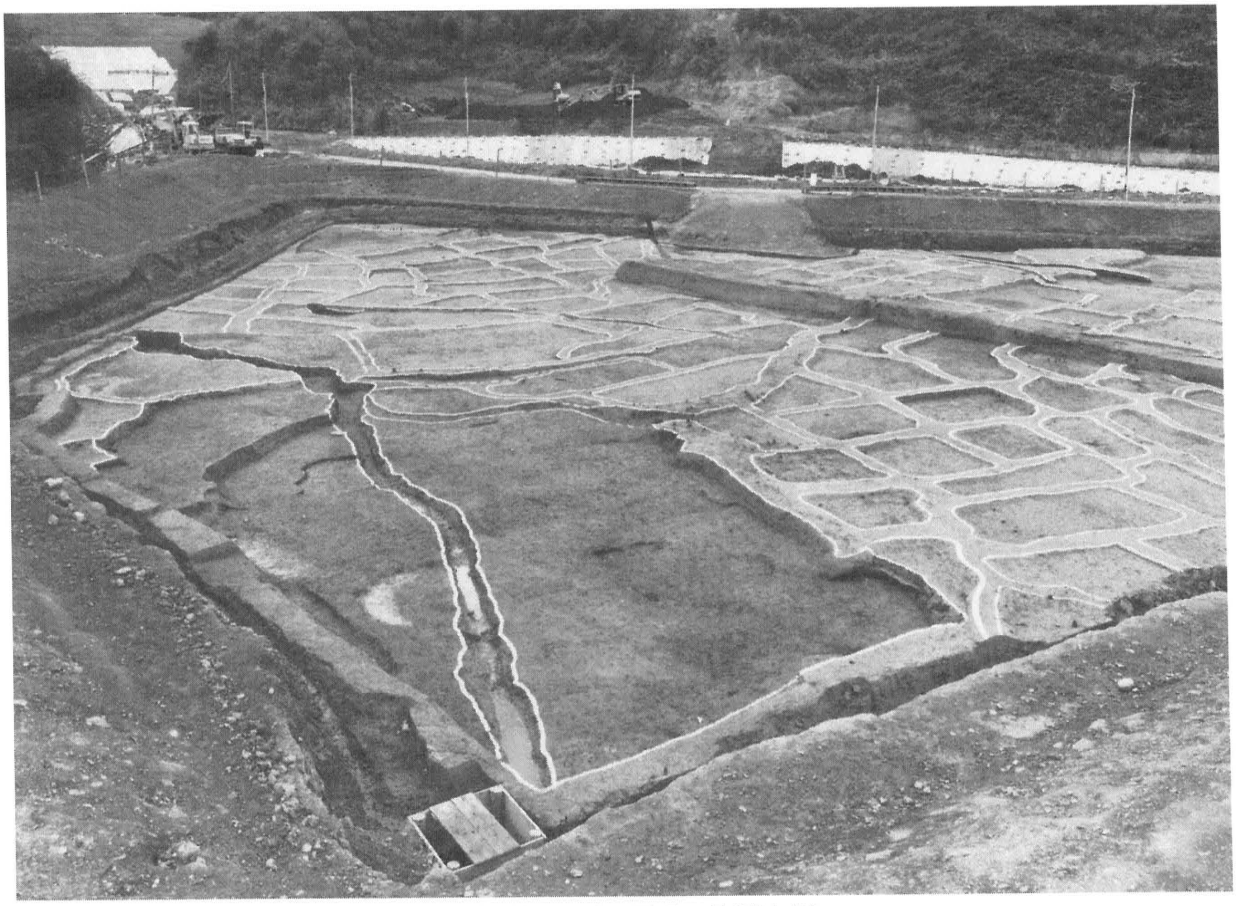


SK 8（西より）



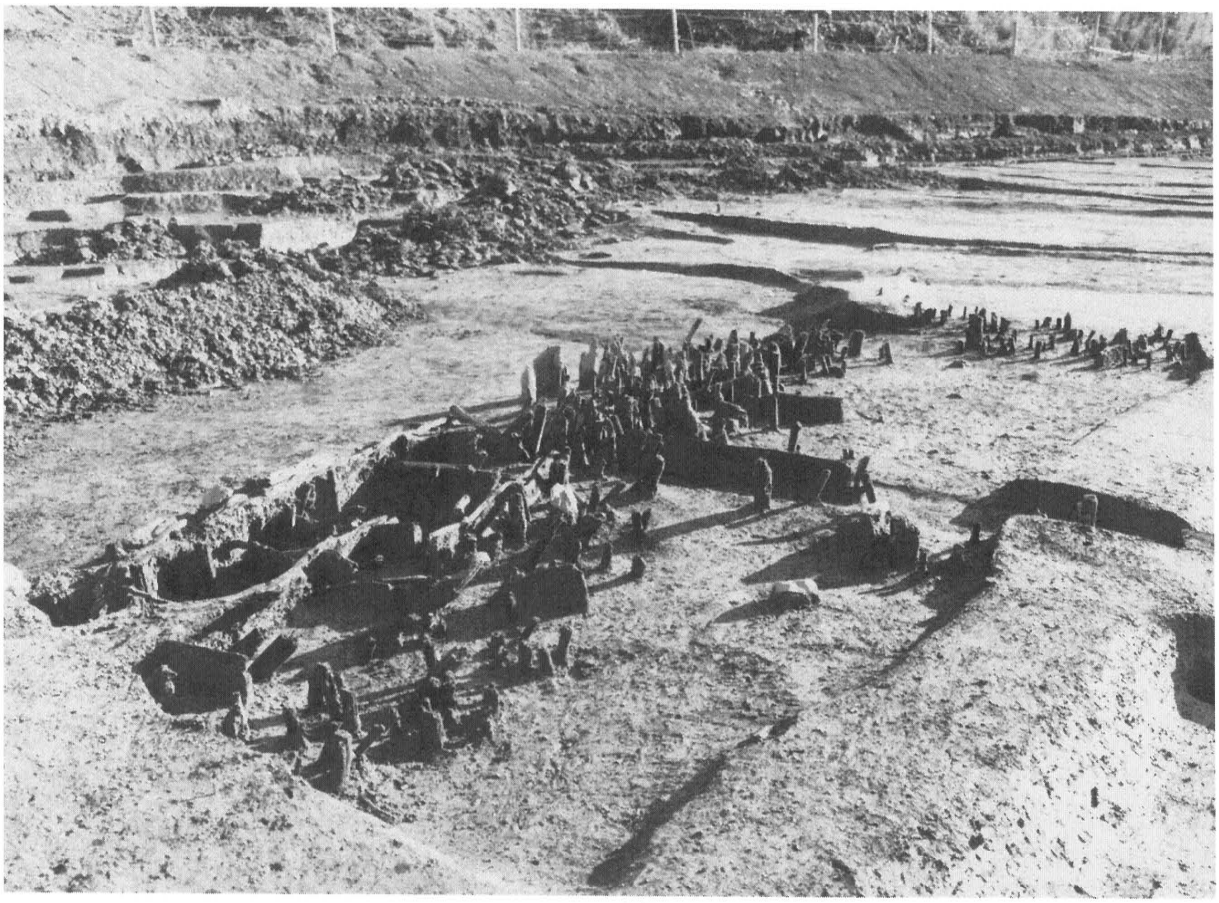
杭列断面（北より）

B区水田面全景

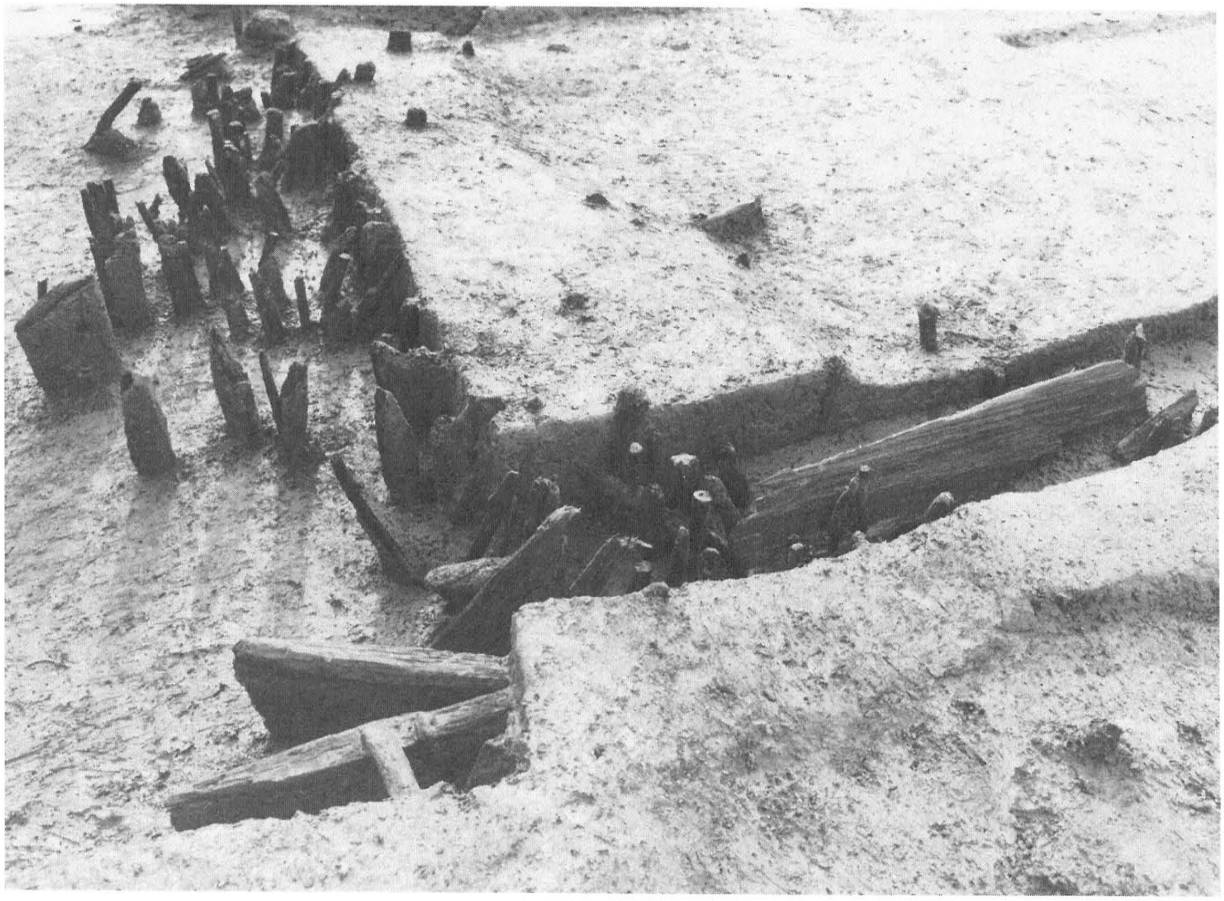


SK10・11、SR４、SD５～７（東より）

図版10　小瀬戸遺跡

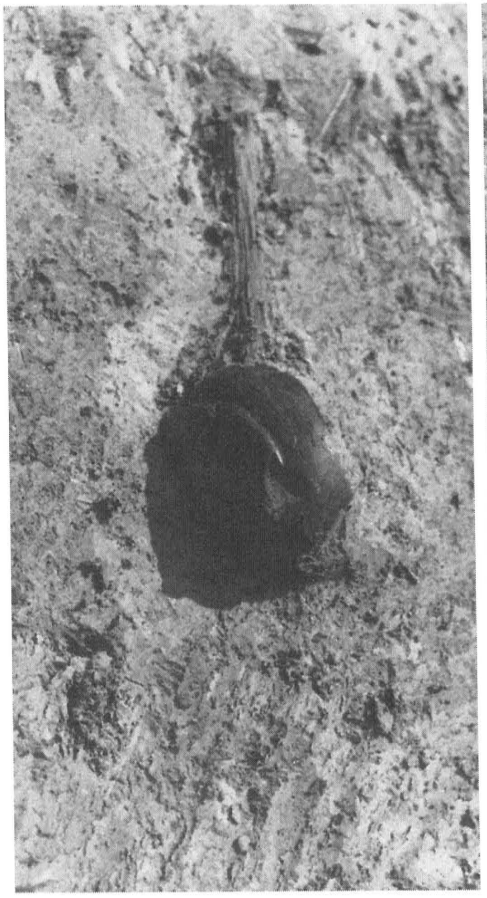


SK10全景

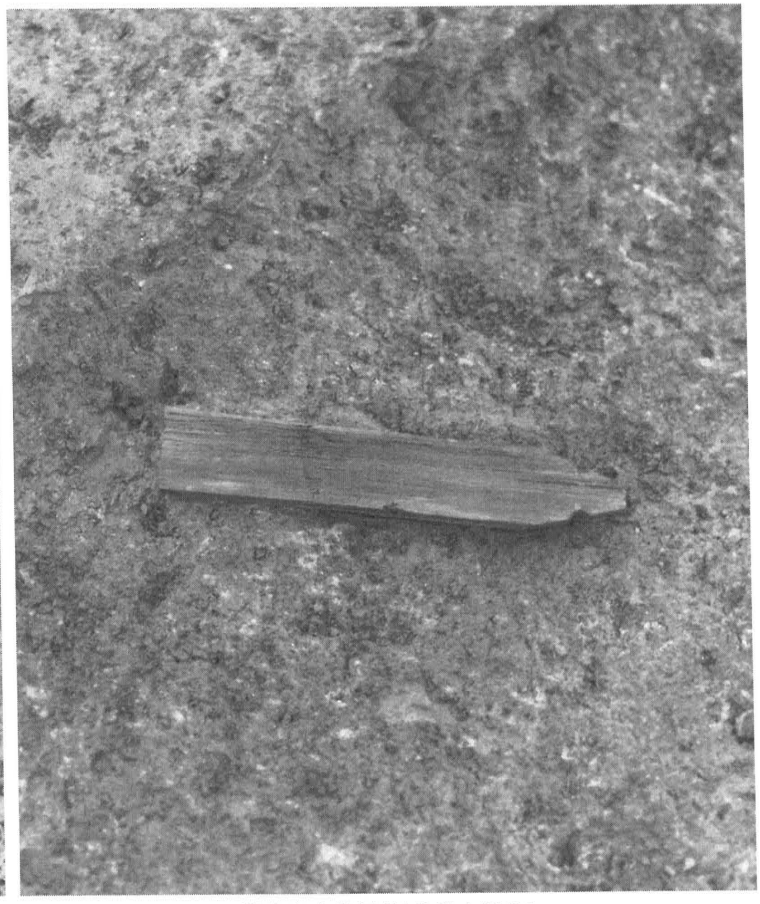


SK10近景

SK10　杭列断面



遺物出土状況(漆椀)



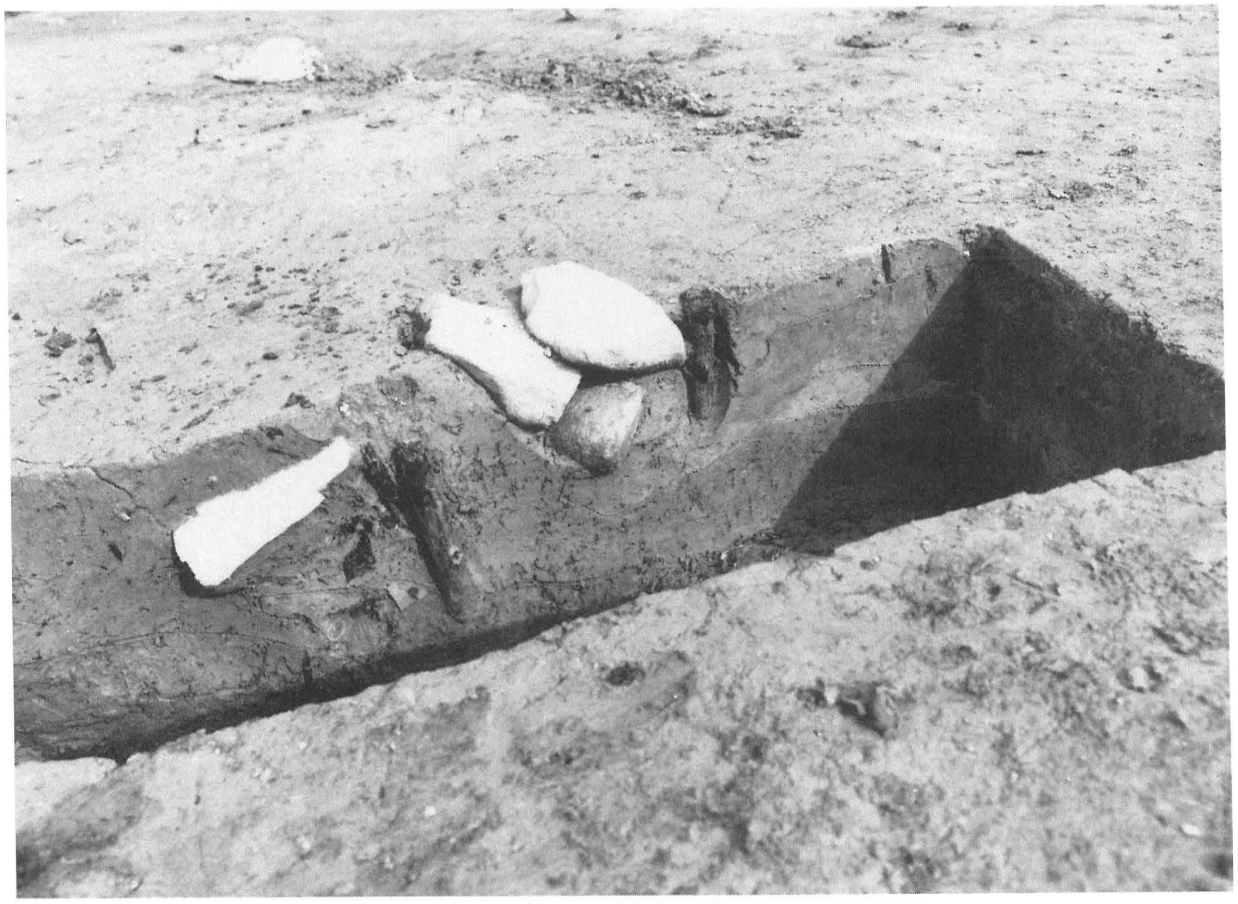
遺物出土状況(付札状木製品)

図版12　小瀬戸遺跡

C区水田面全景

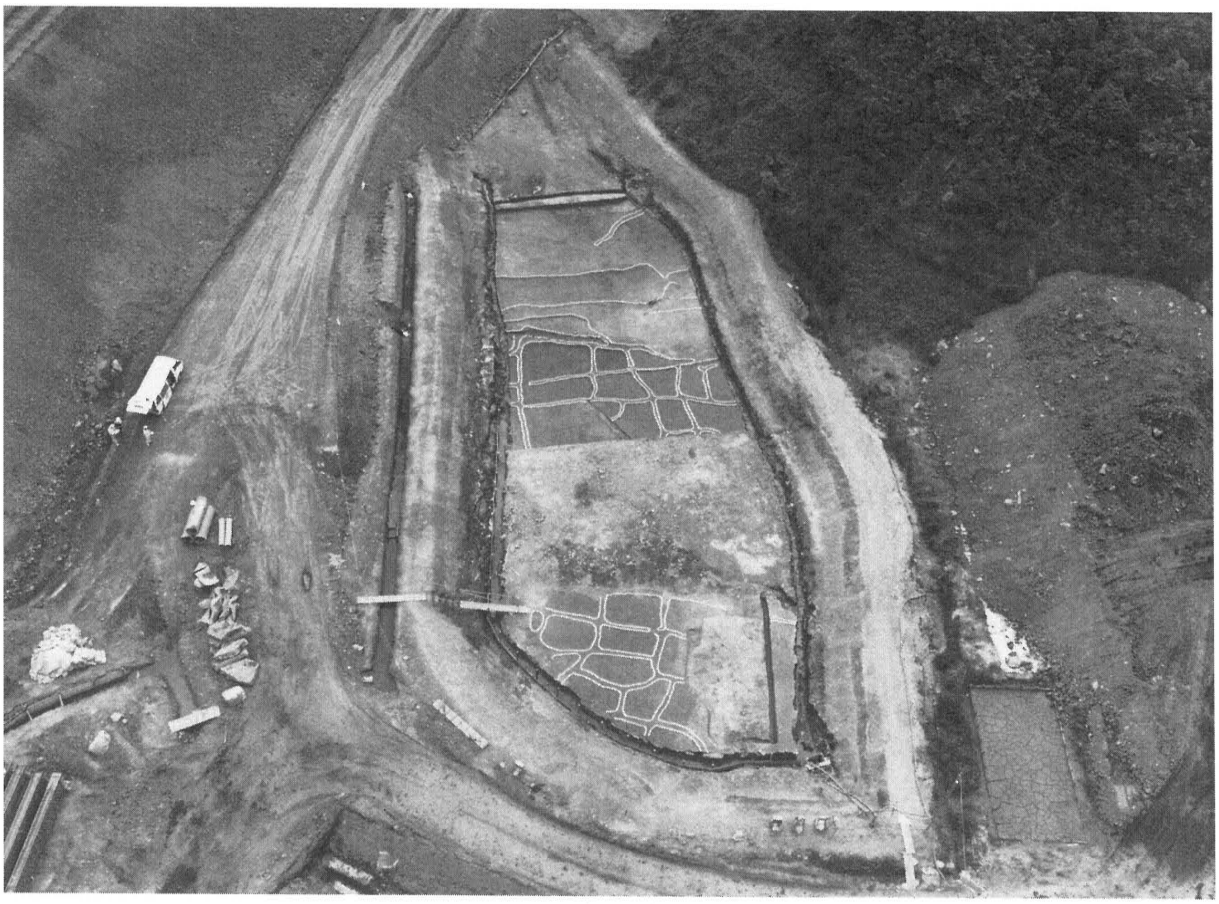
SK14・15(東より)

SK16、SR5

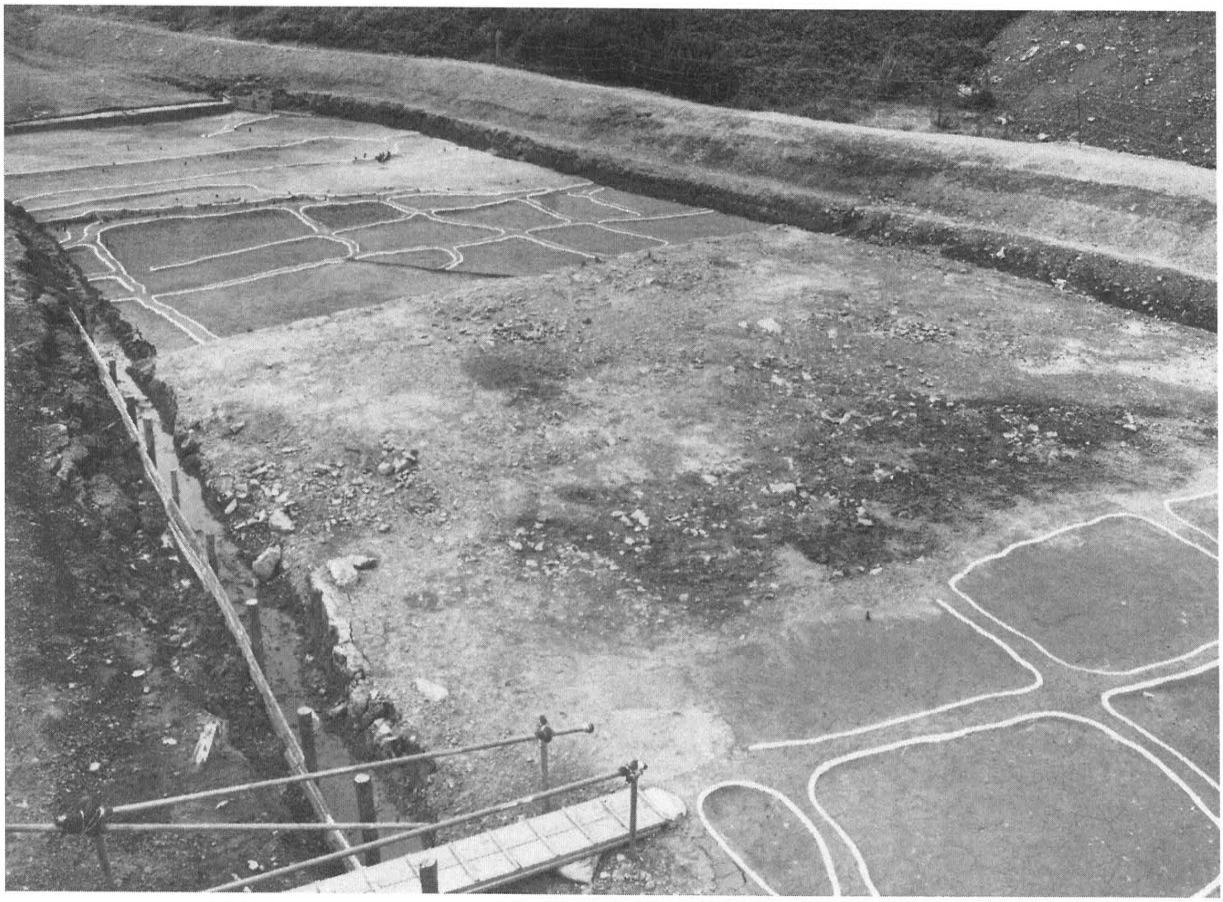


杭列断面（南東より）

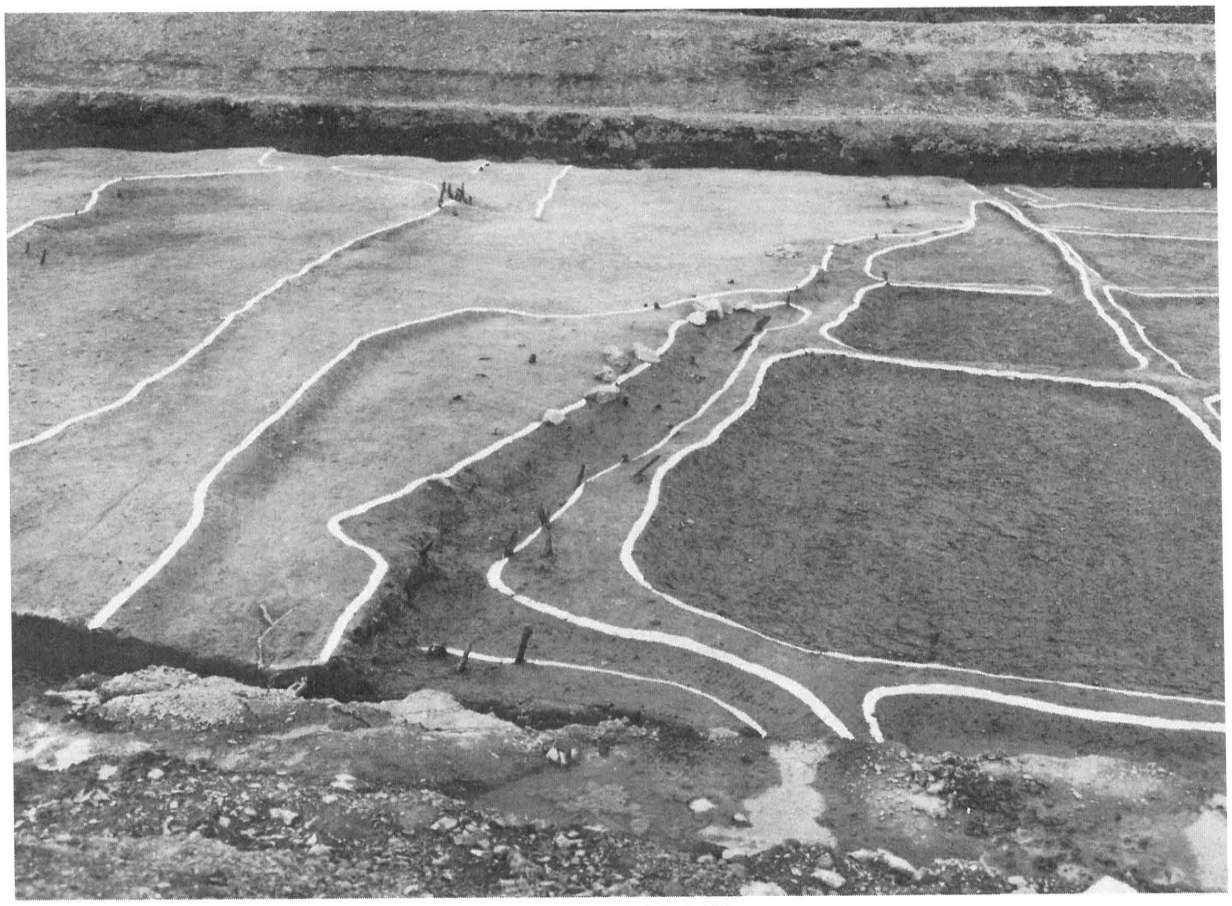
図版14　小瀬戸遺跡



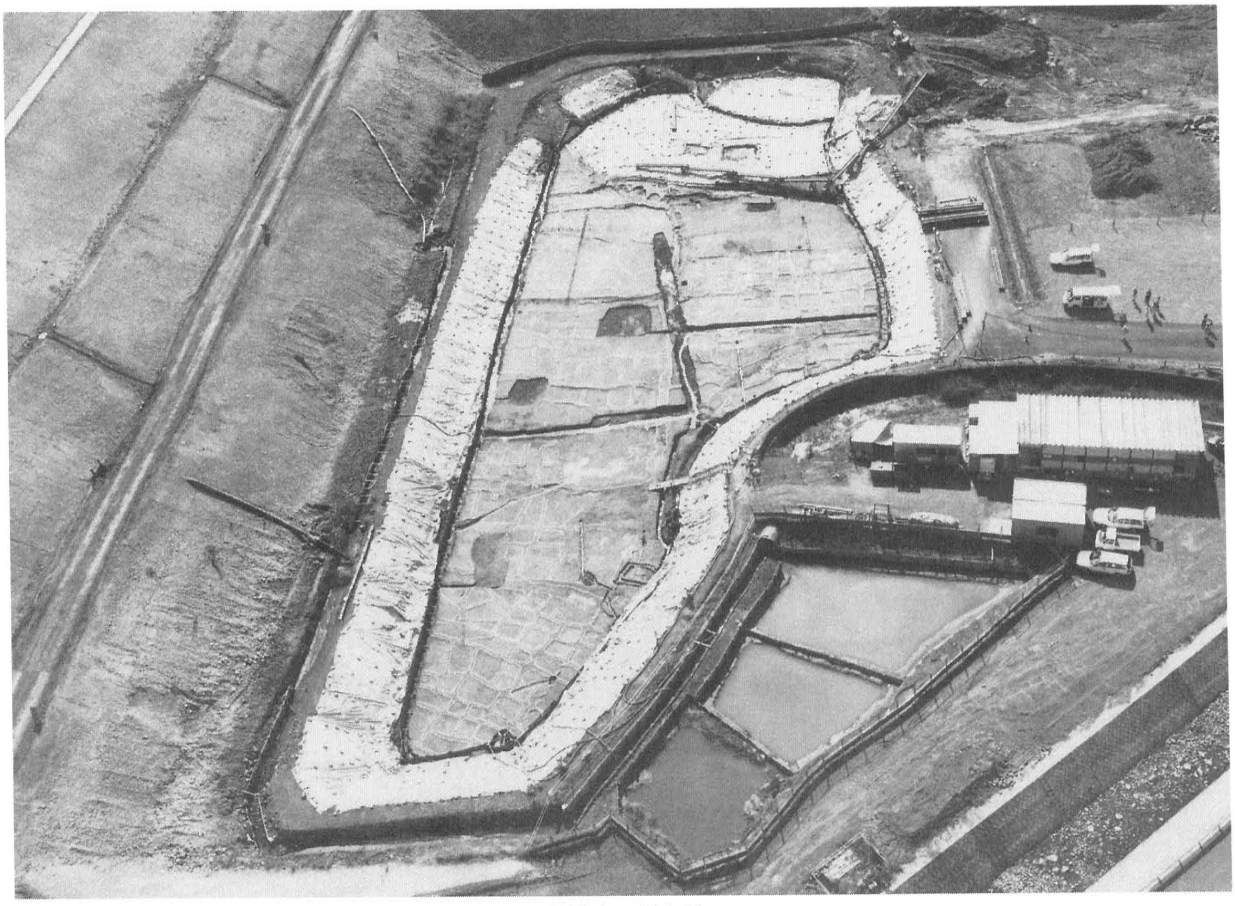
D区水田面全景



SR６、SK17(北より)



SK17、SD８（東より）

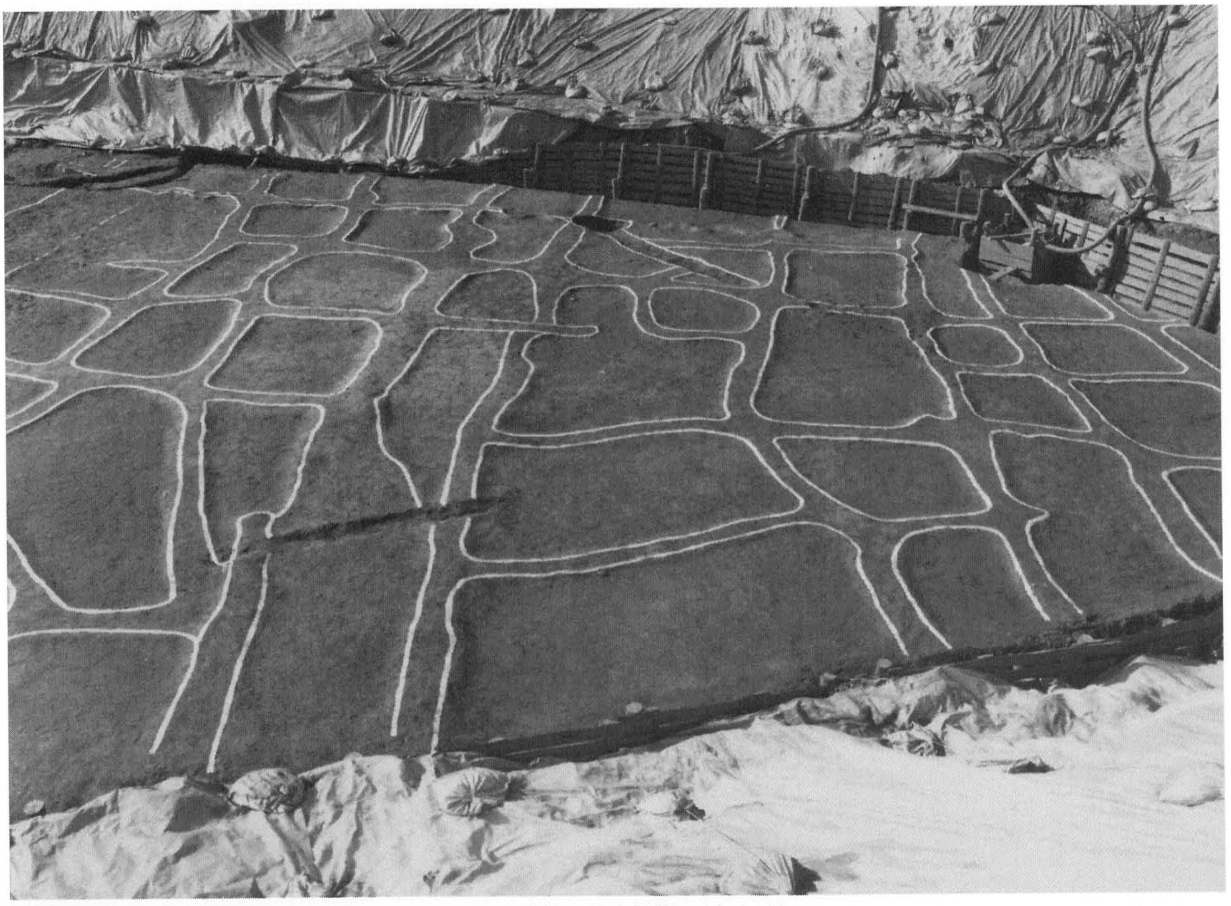


E区水田面全景

図版16　小瀬戸遺跡

E区南端部水田完掘状況（西より）

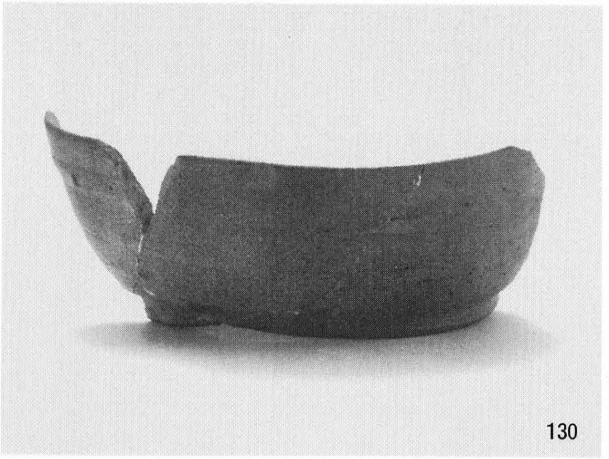
SR７（西より）

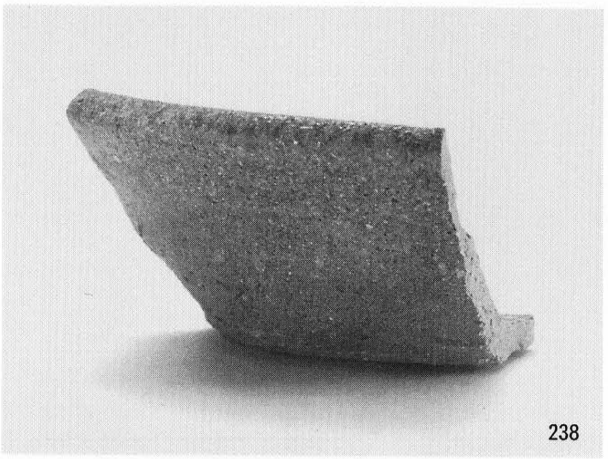


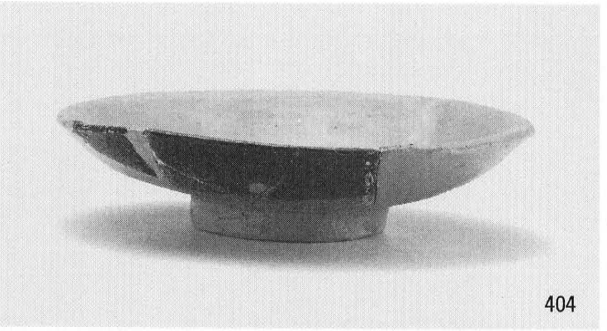
E区北端部水田完掘状況(東より)

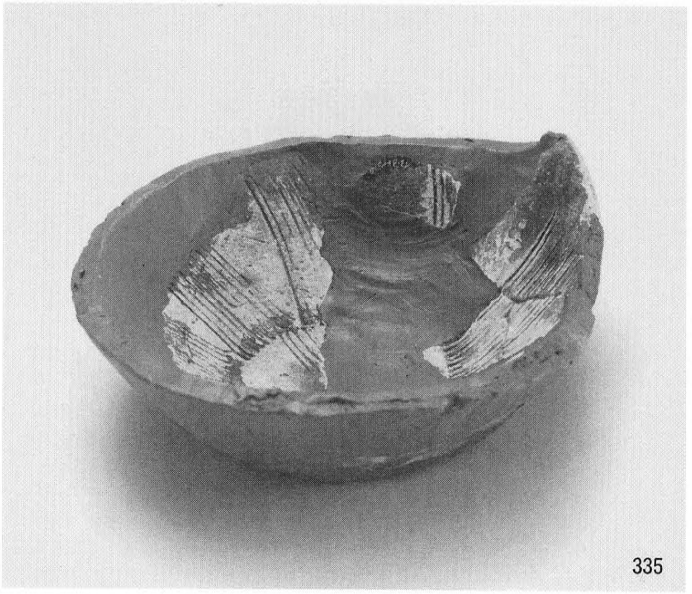
SF１貯水穴、SD９導水溝(南東より)

図版18　小瀬戸遺跡



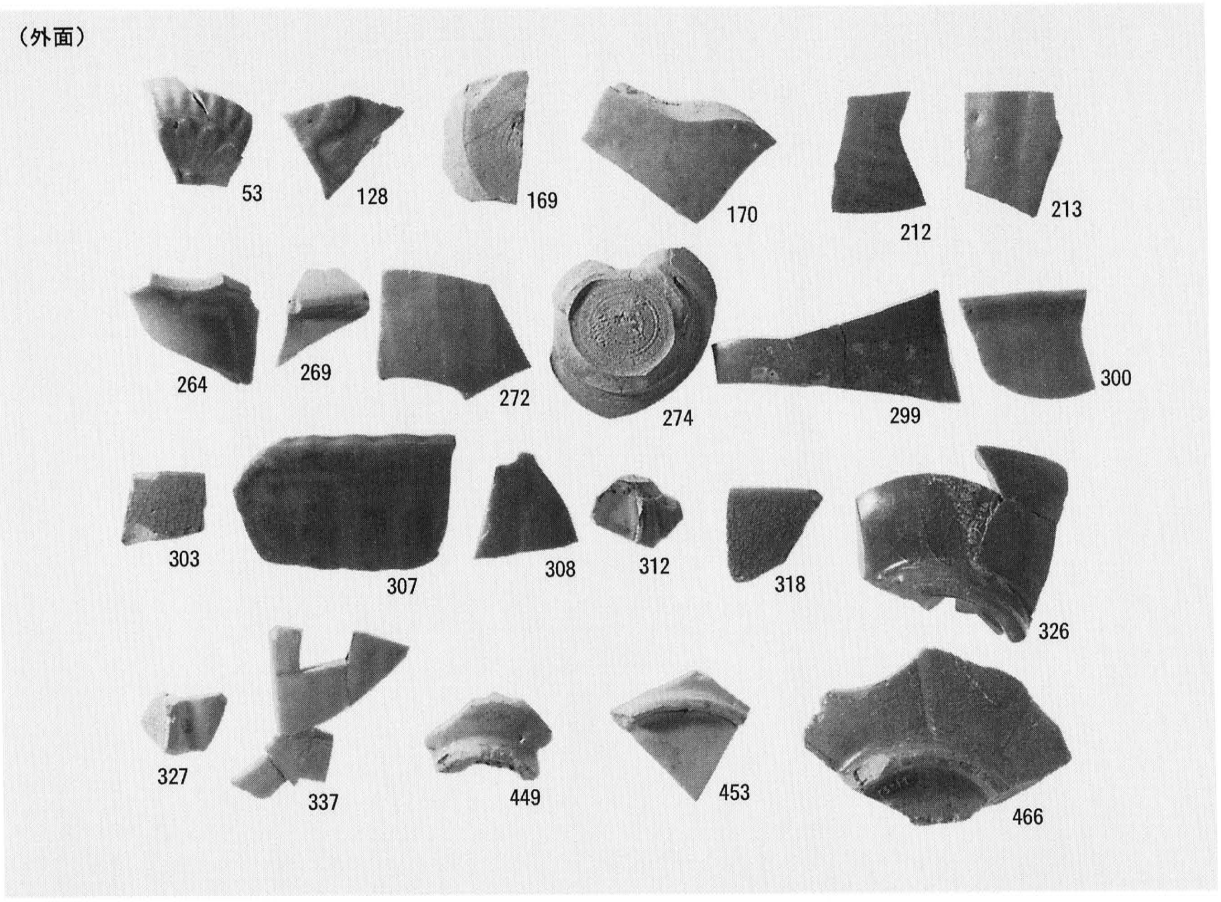




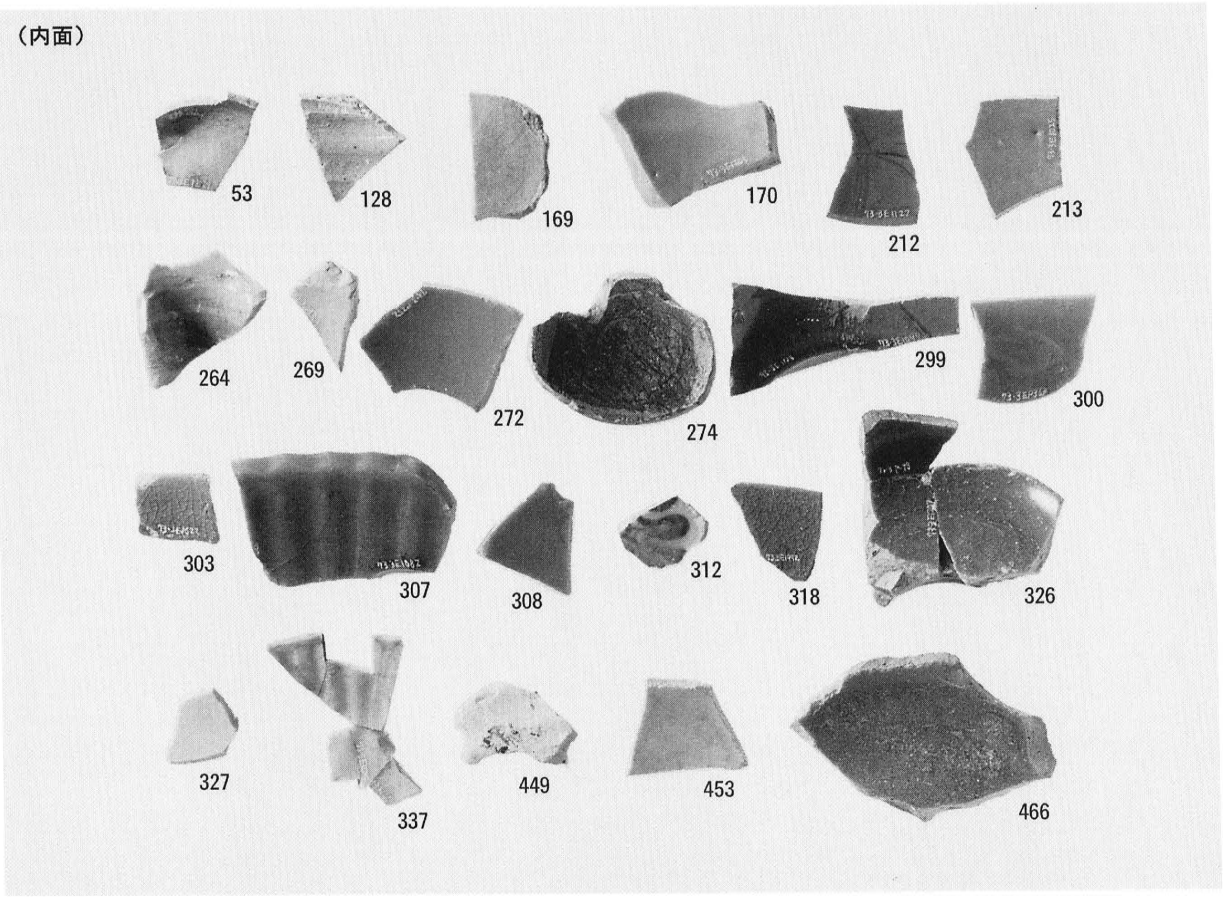


出土遺物１（土器１）

（外面）

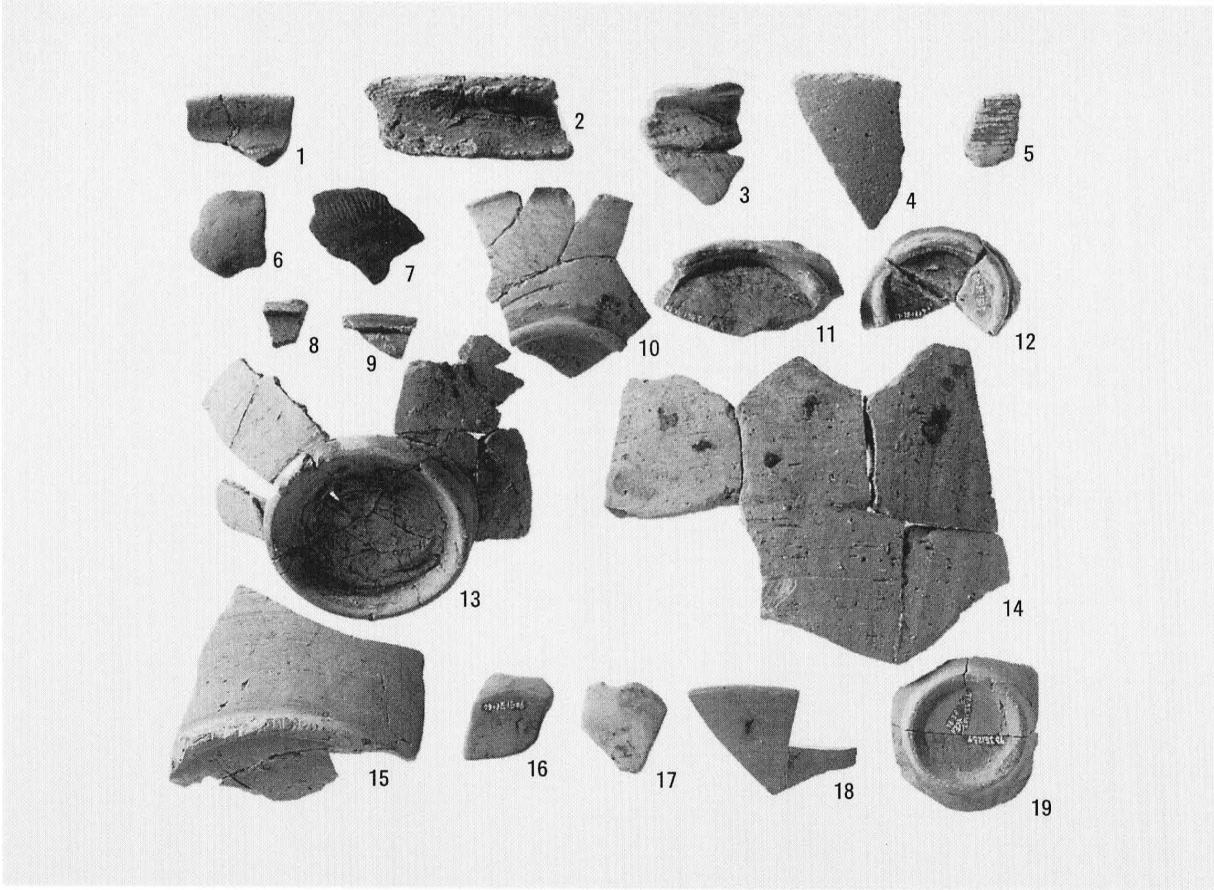


（内面）

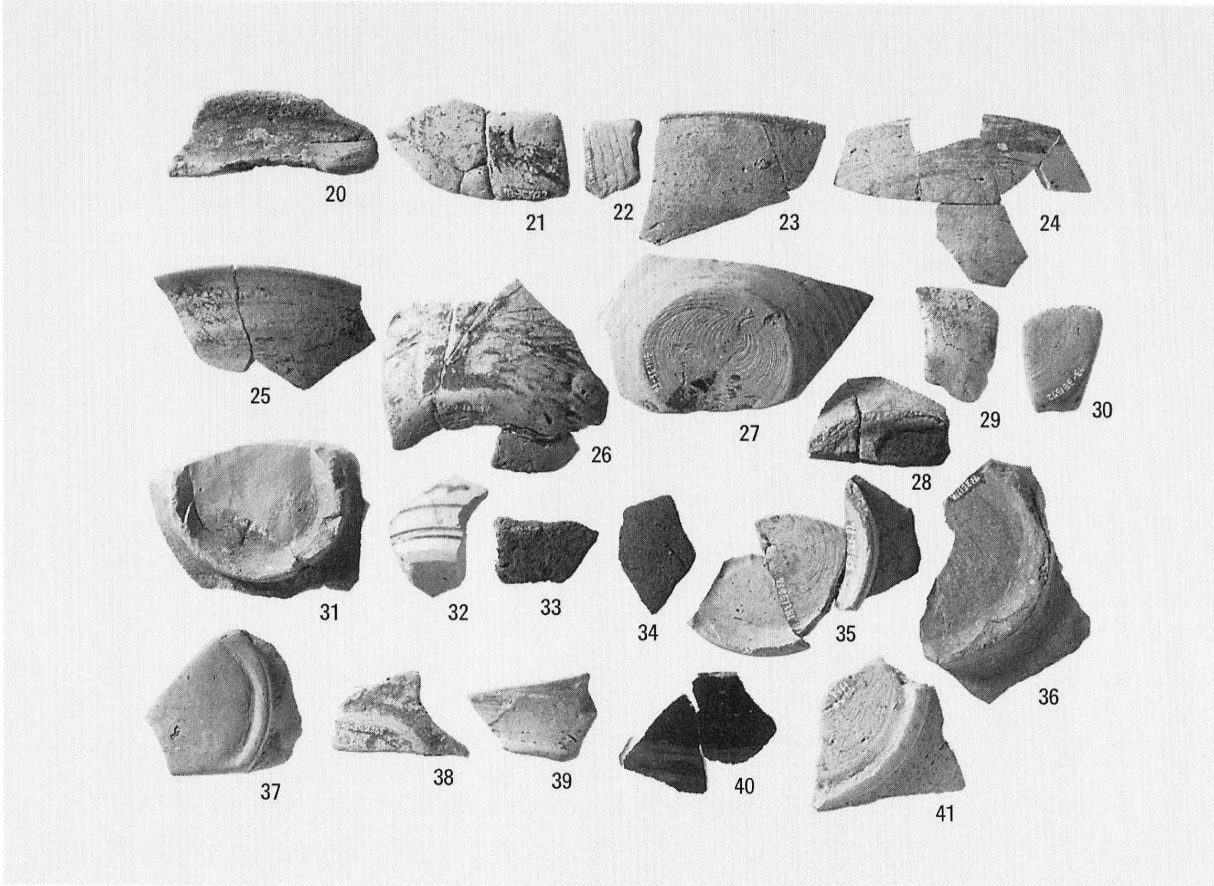


出土遺物２（貿易陶磁）

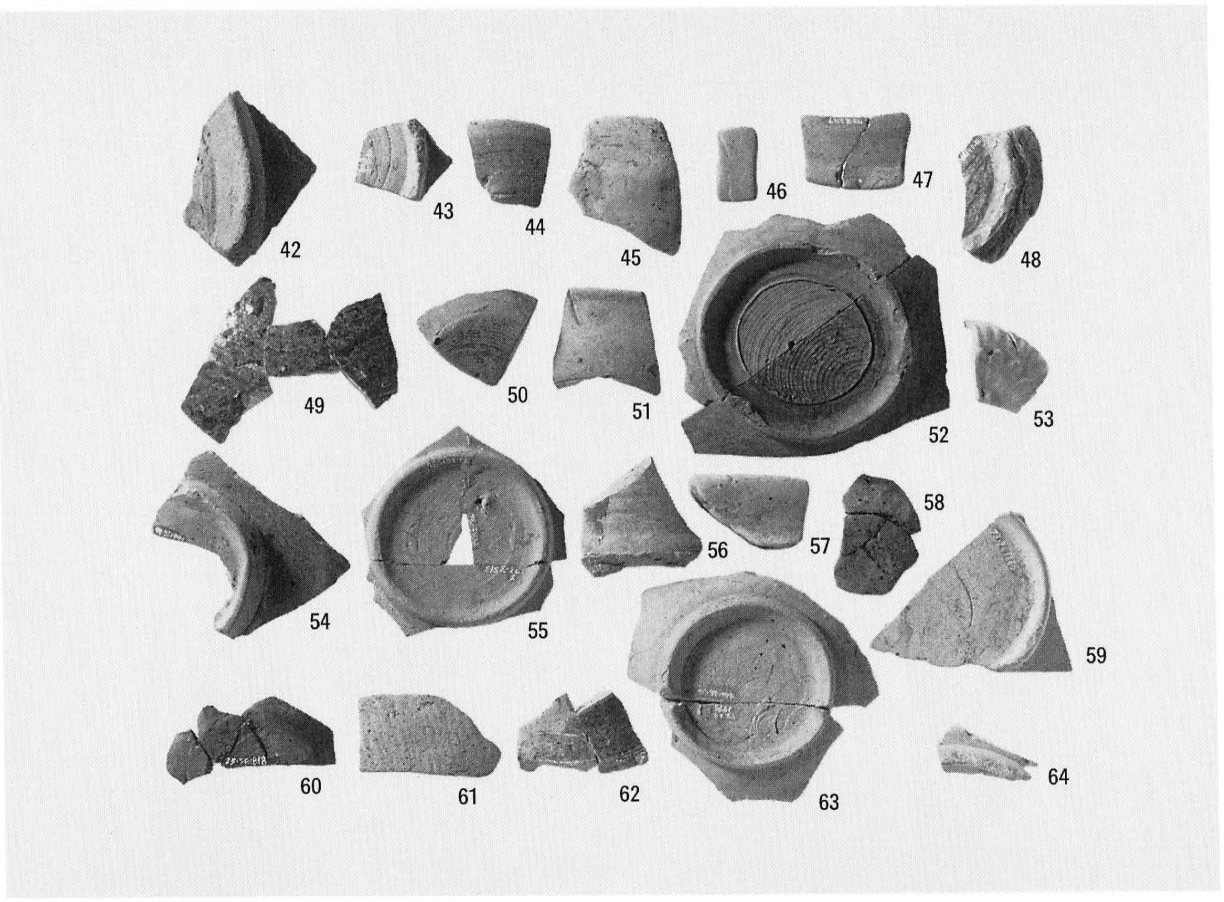
図版20　小瀬戸遺跡



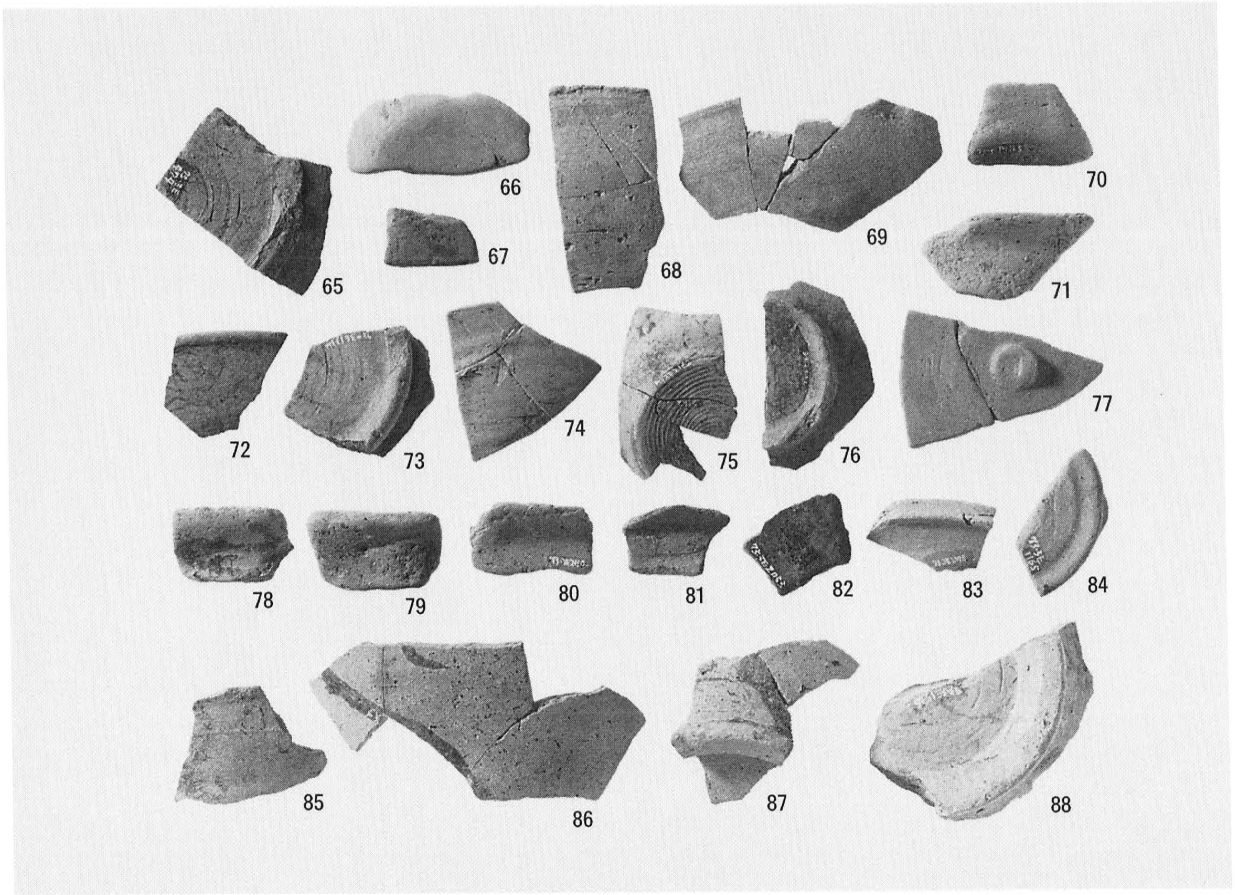
出土遺物３（土器２）



出土遺物４（土器３）

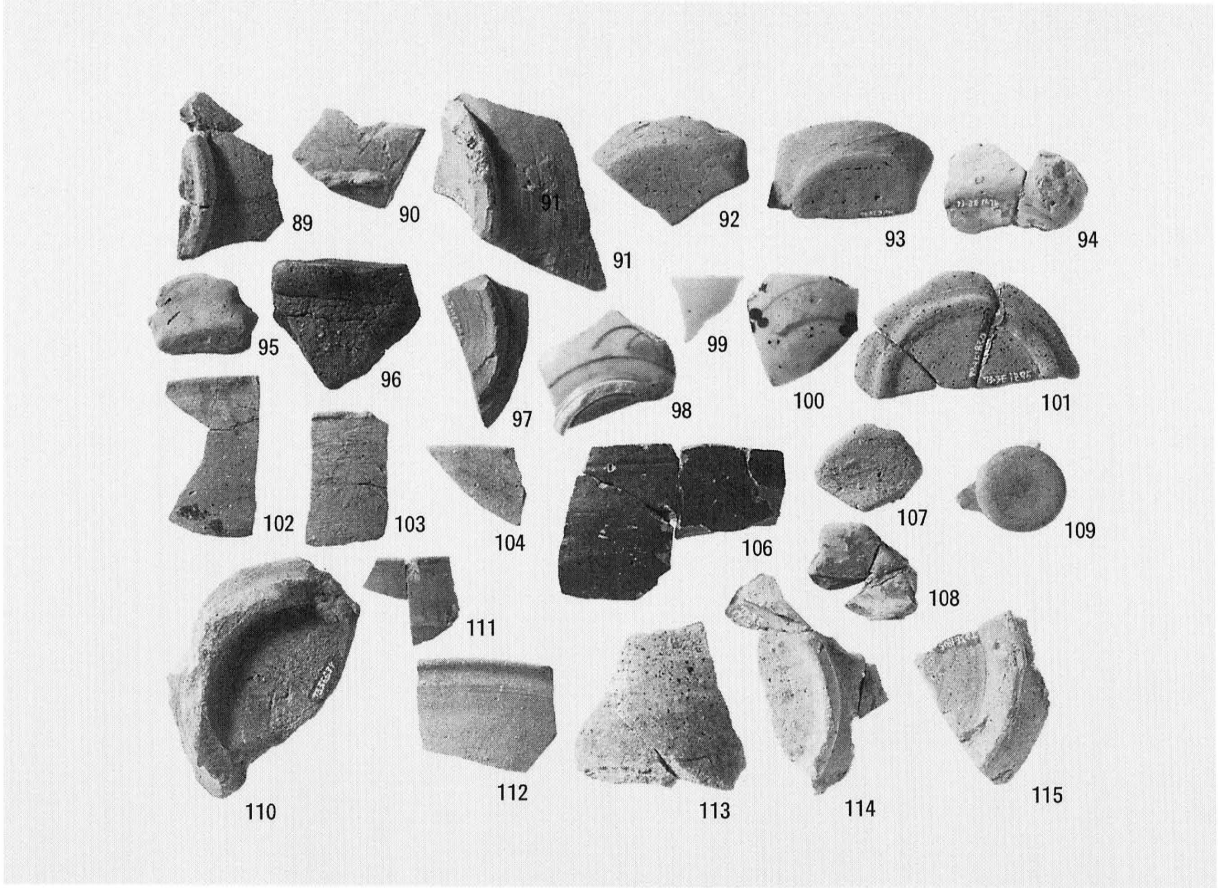


出土遺物５（土器４）

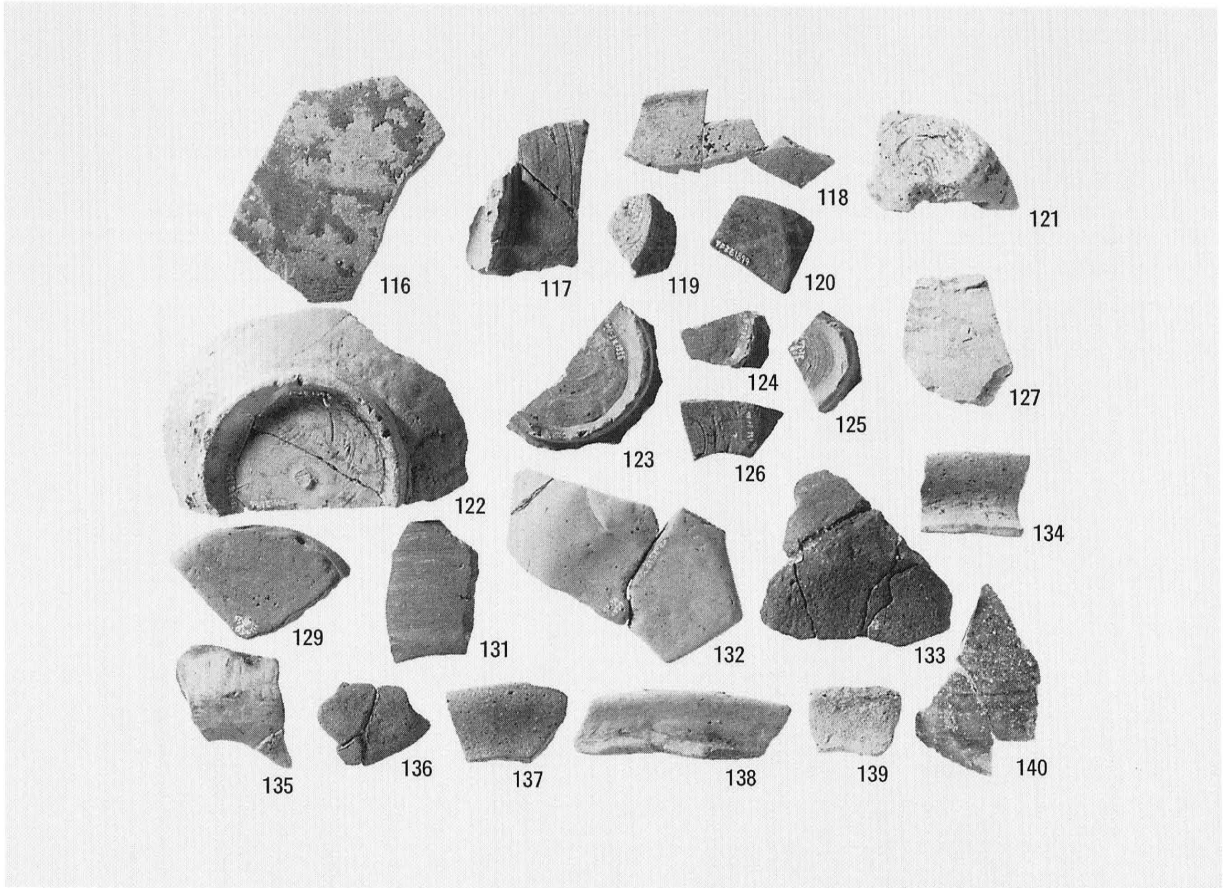


出土遺物６（土器５）

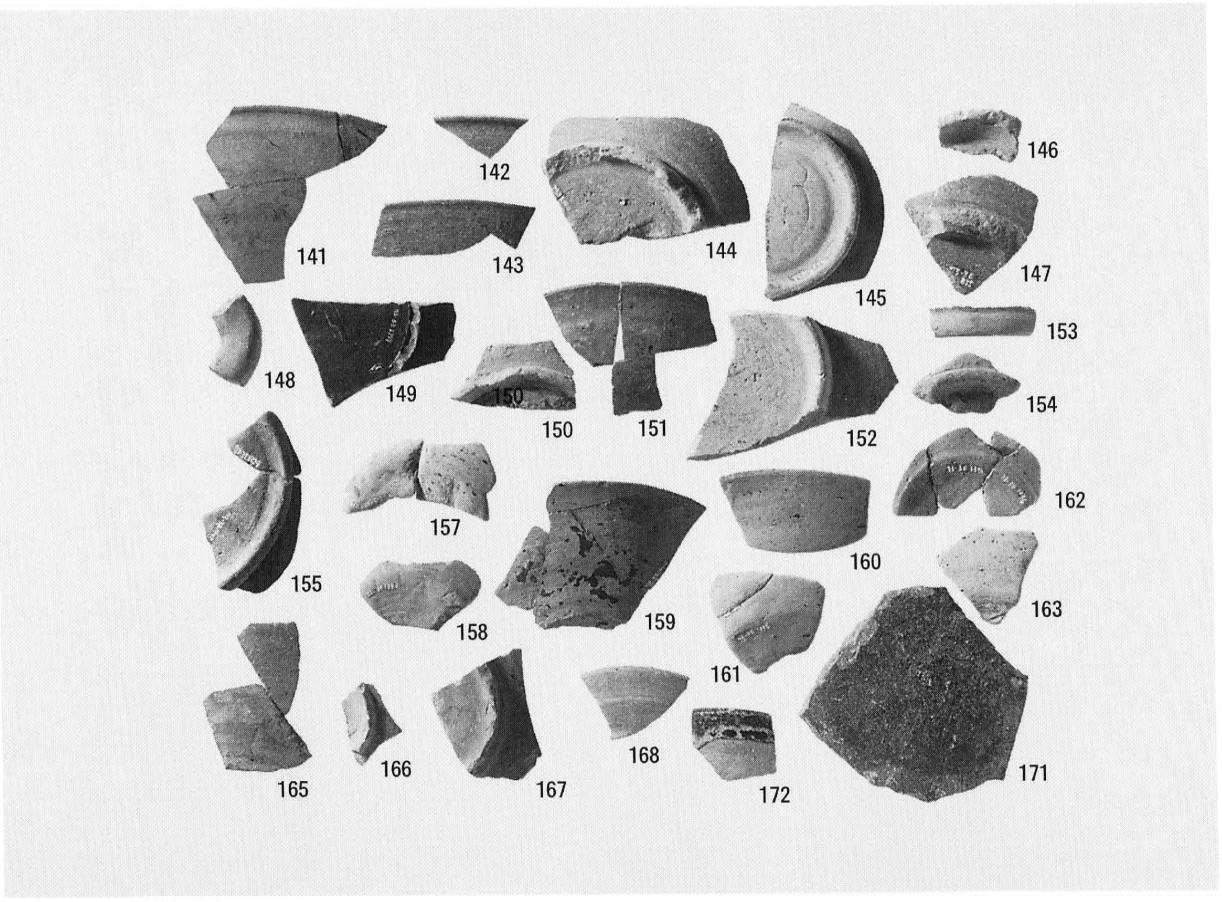
図版22　小瀬戸遺跡



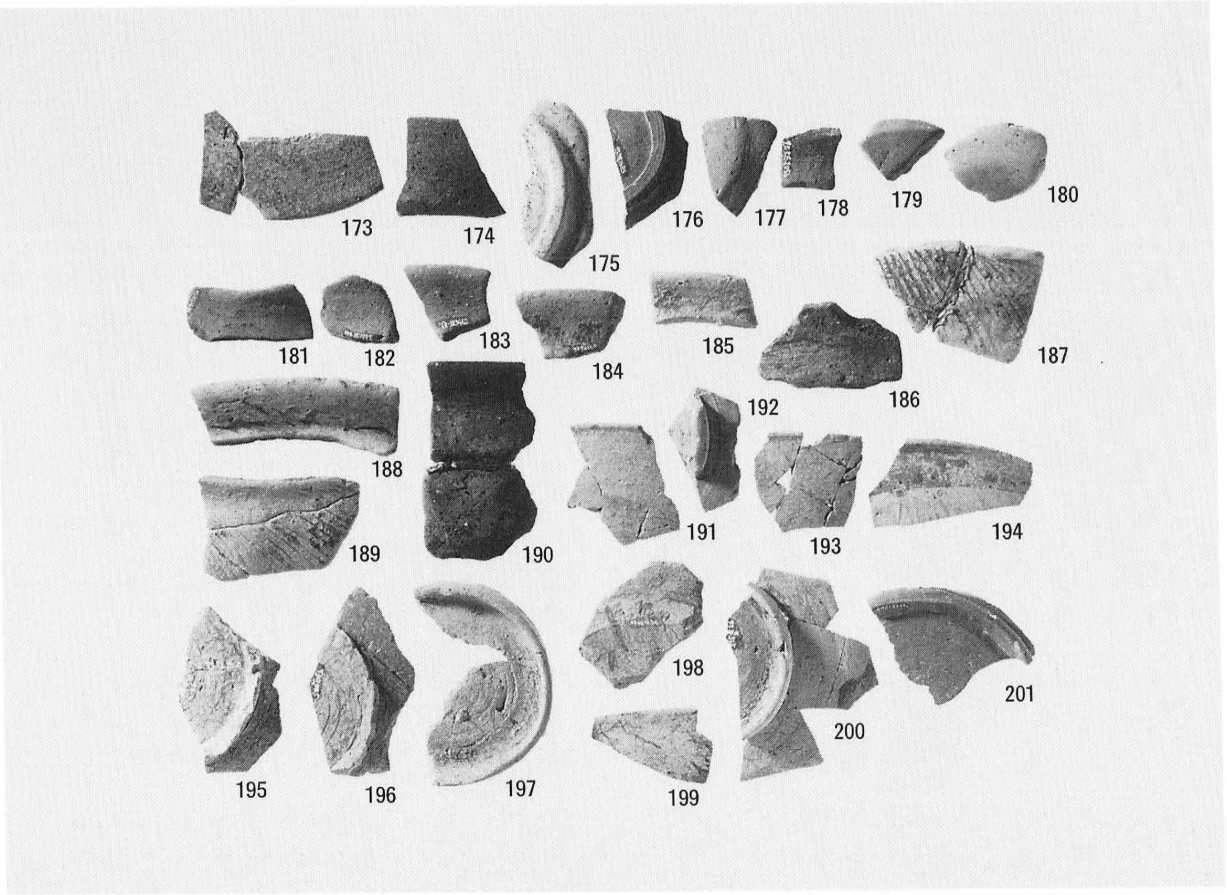
出土遺物７（土器６）



出土遺物８（土器７）

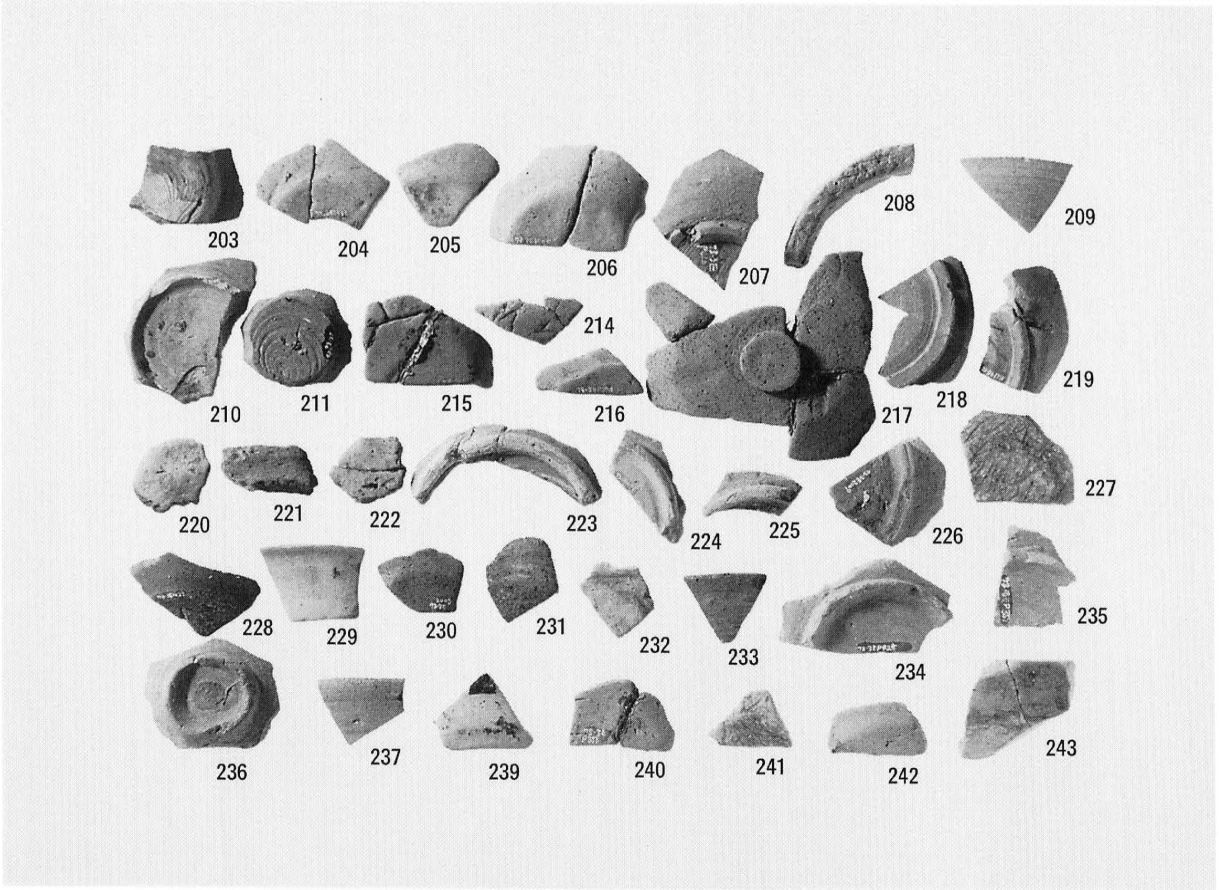


出土遺物９（土器８）

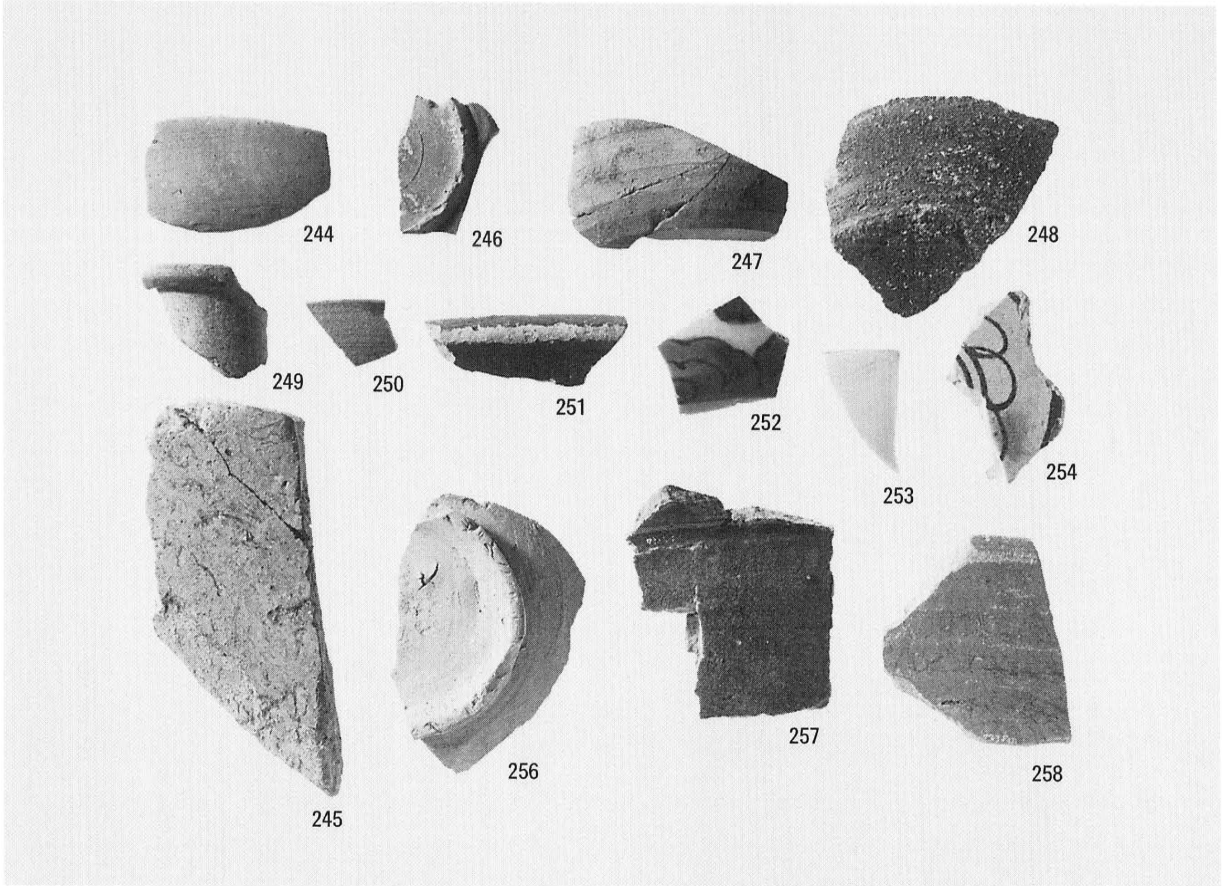


出土遺物10（土器９）

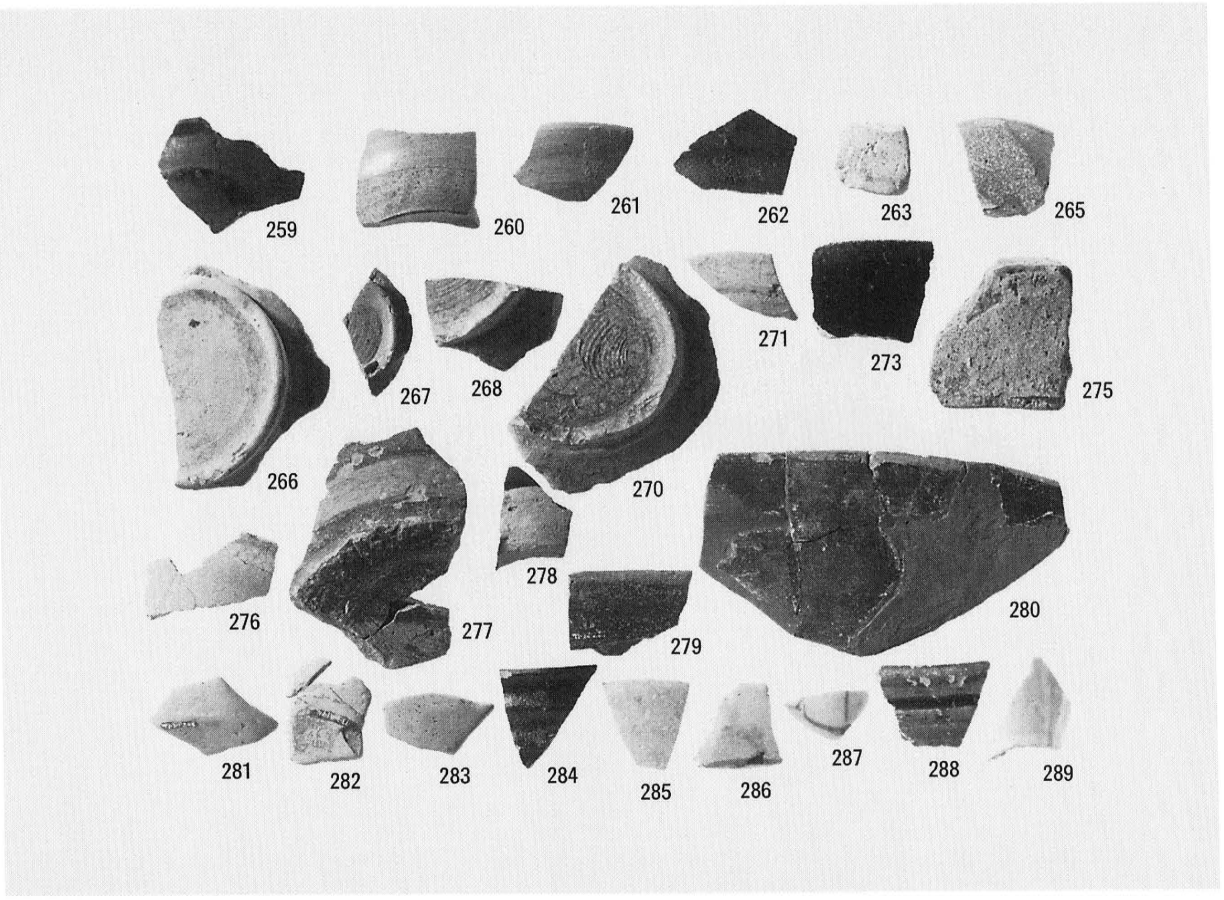
図版24　小瀬戸遺跡



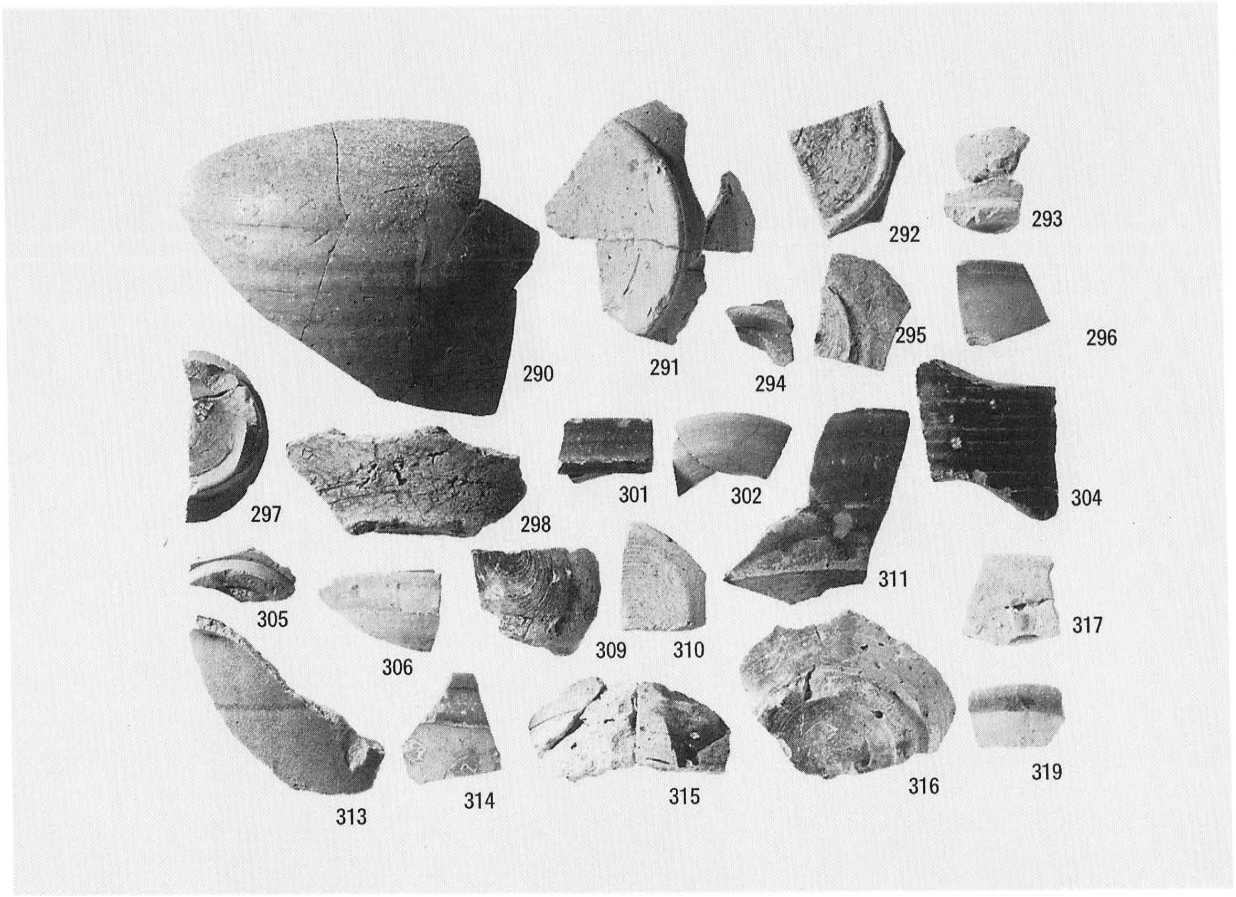
出土遺物11(土器10)



出土遺物12(土器11)

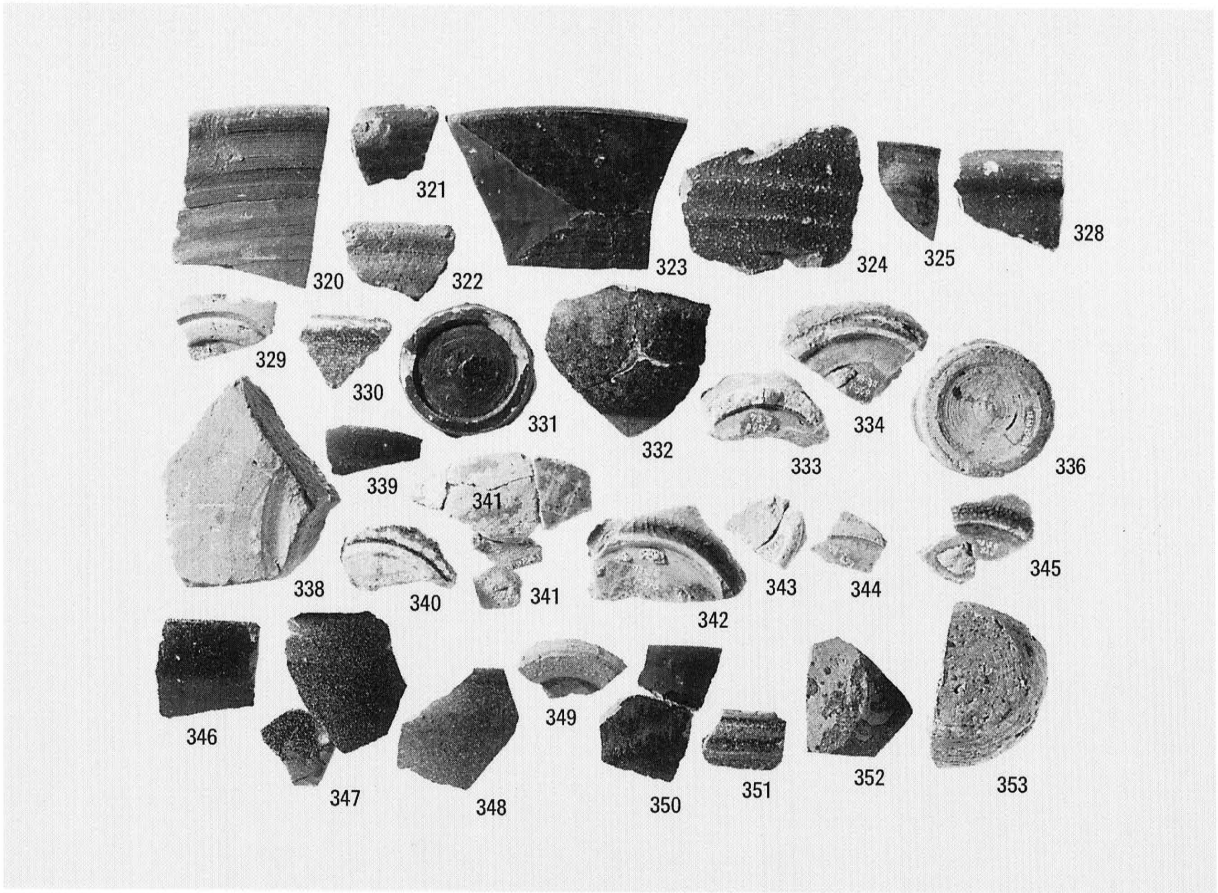


出土遺物13(土器12)

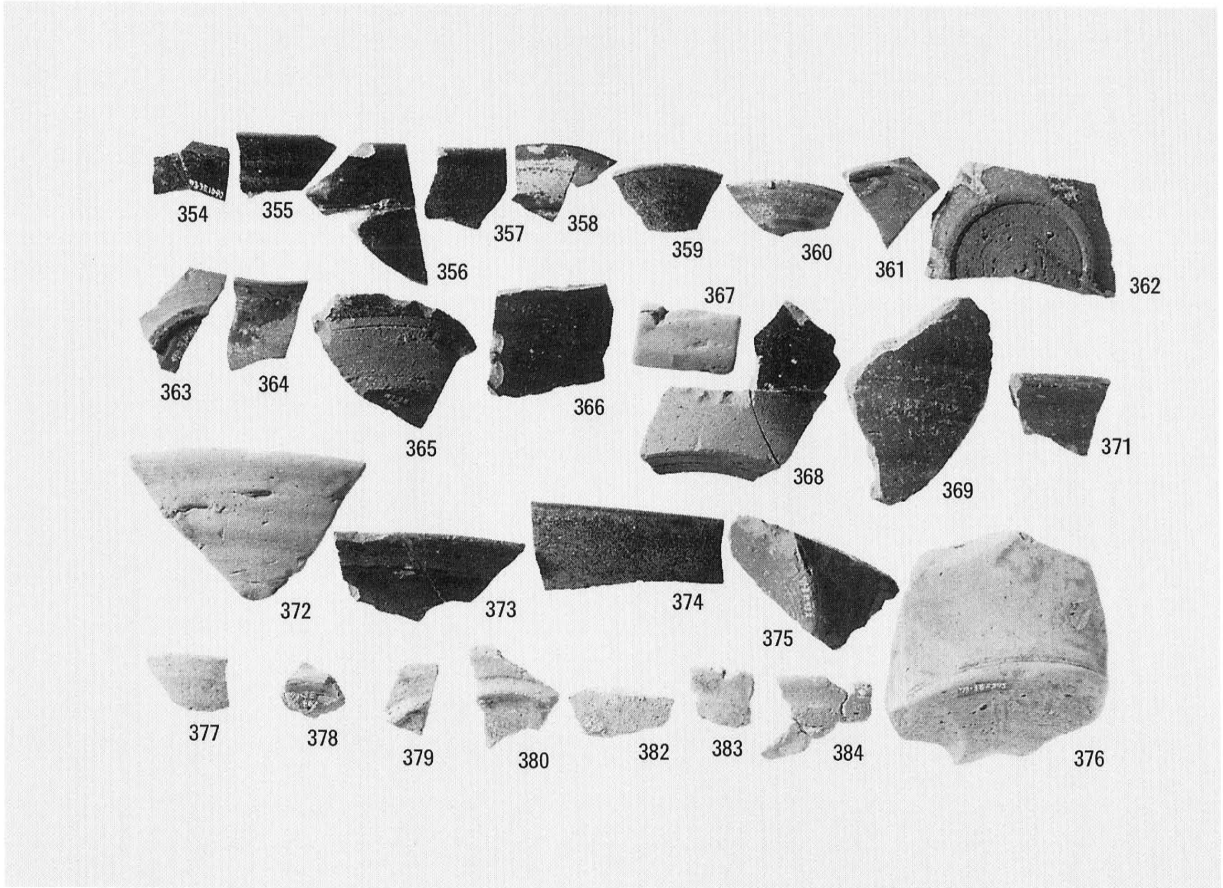


出土遺物14(土器13)

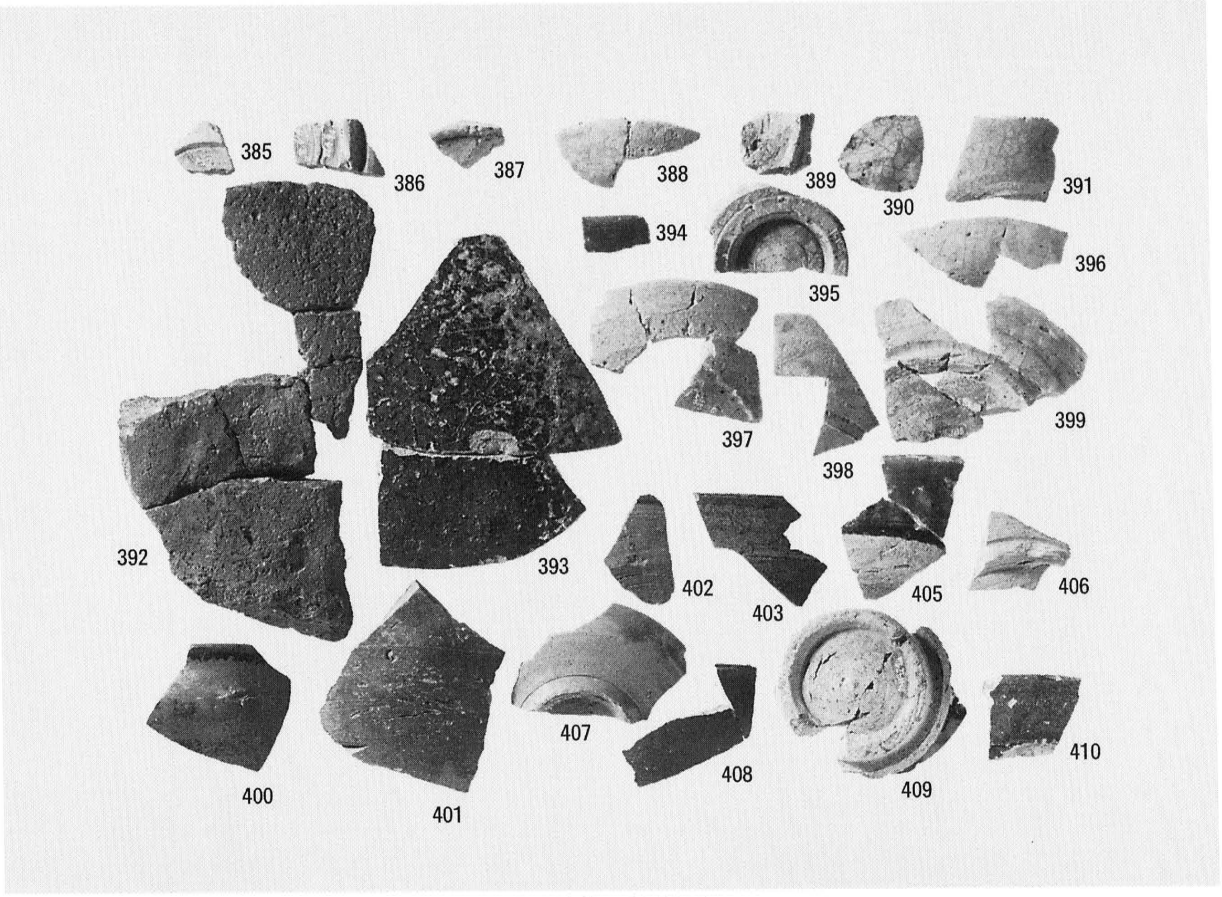
図版26　小瀬戸遺跡



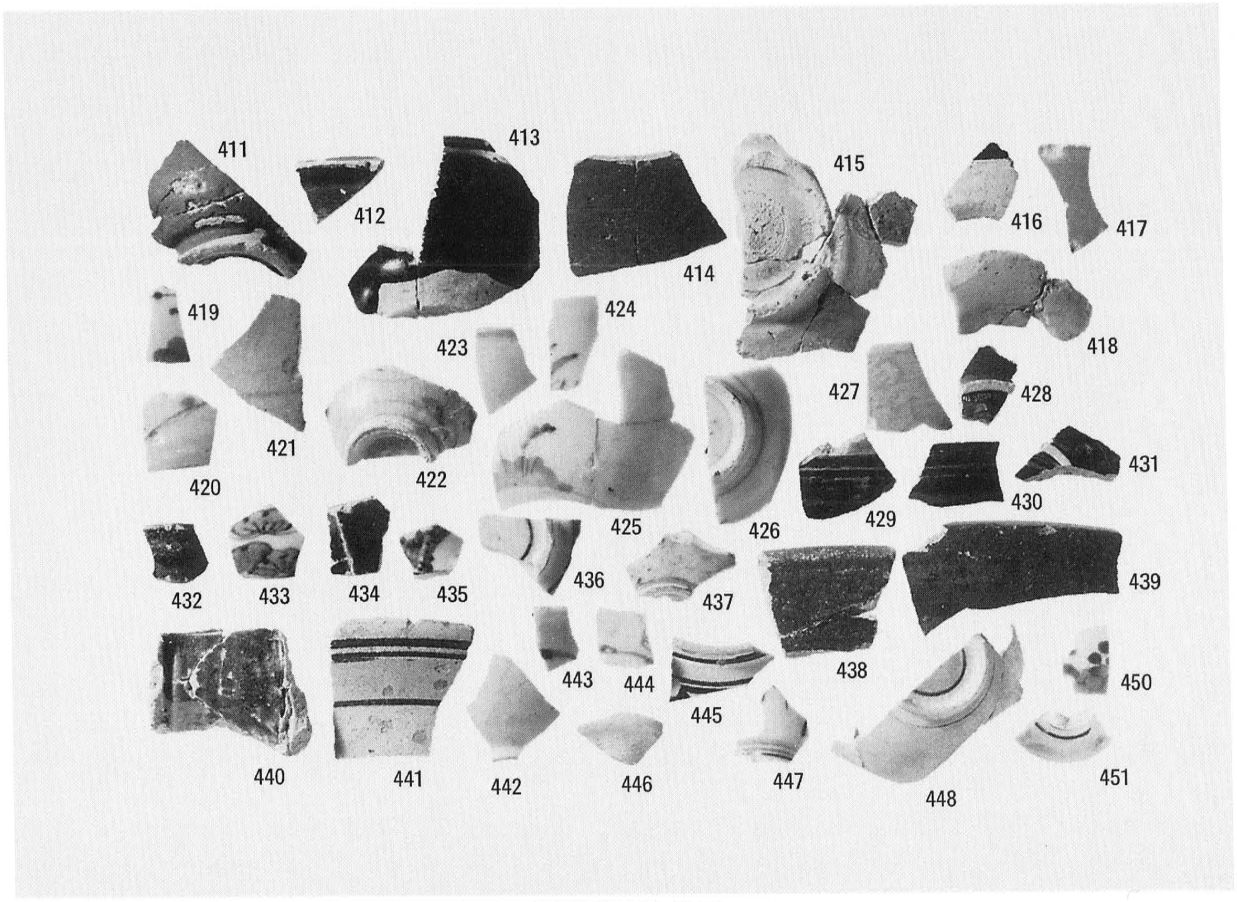
出土遺物15(土器14)



出土遺物16(土器15)

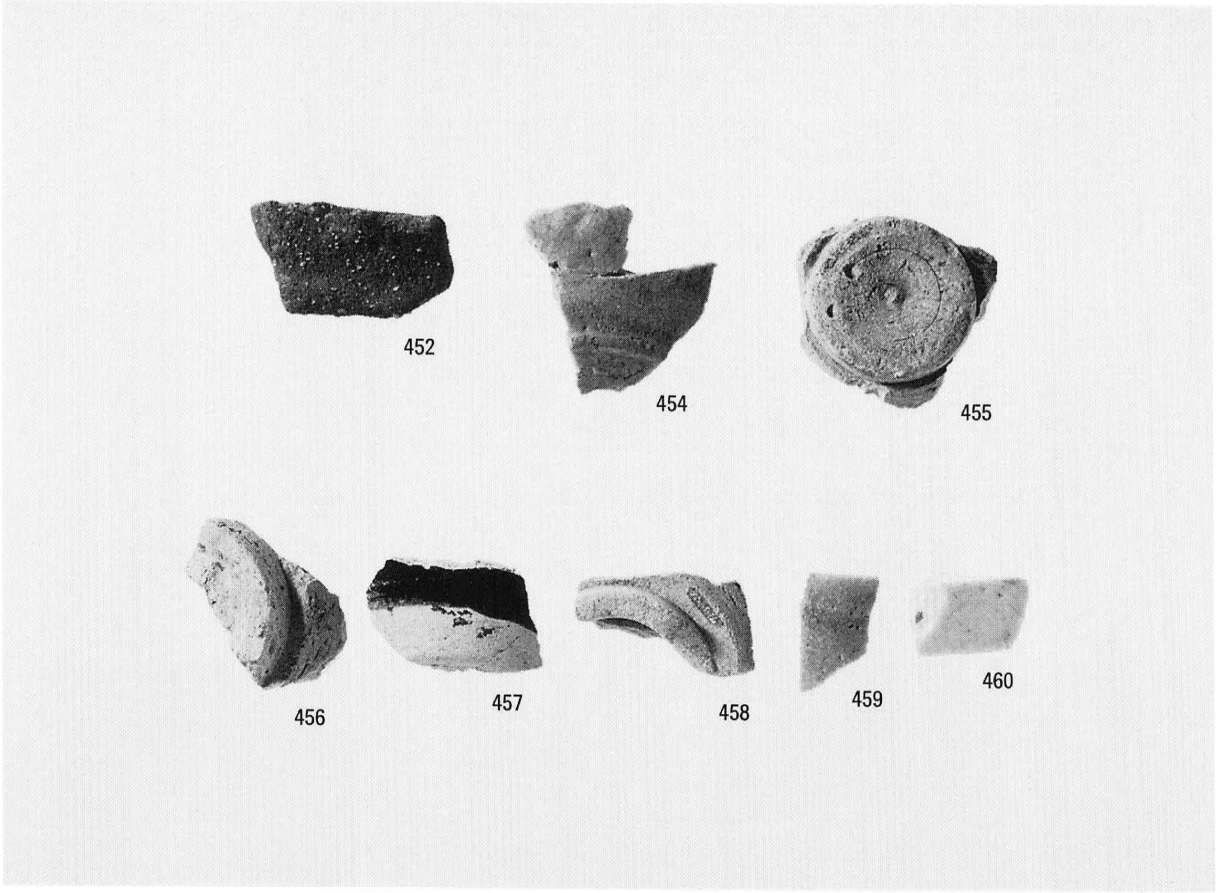


出土遺物17(土器16)

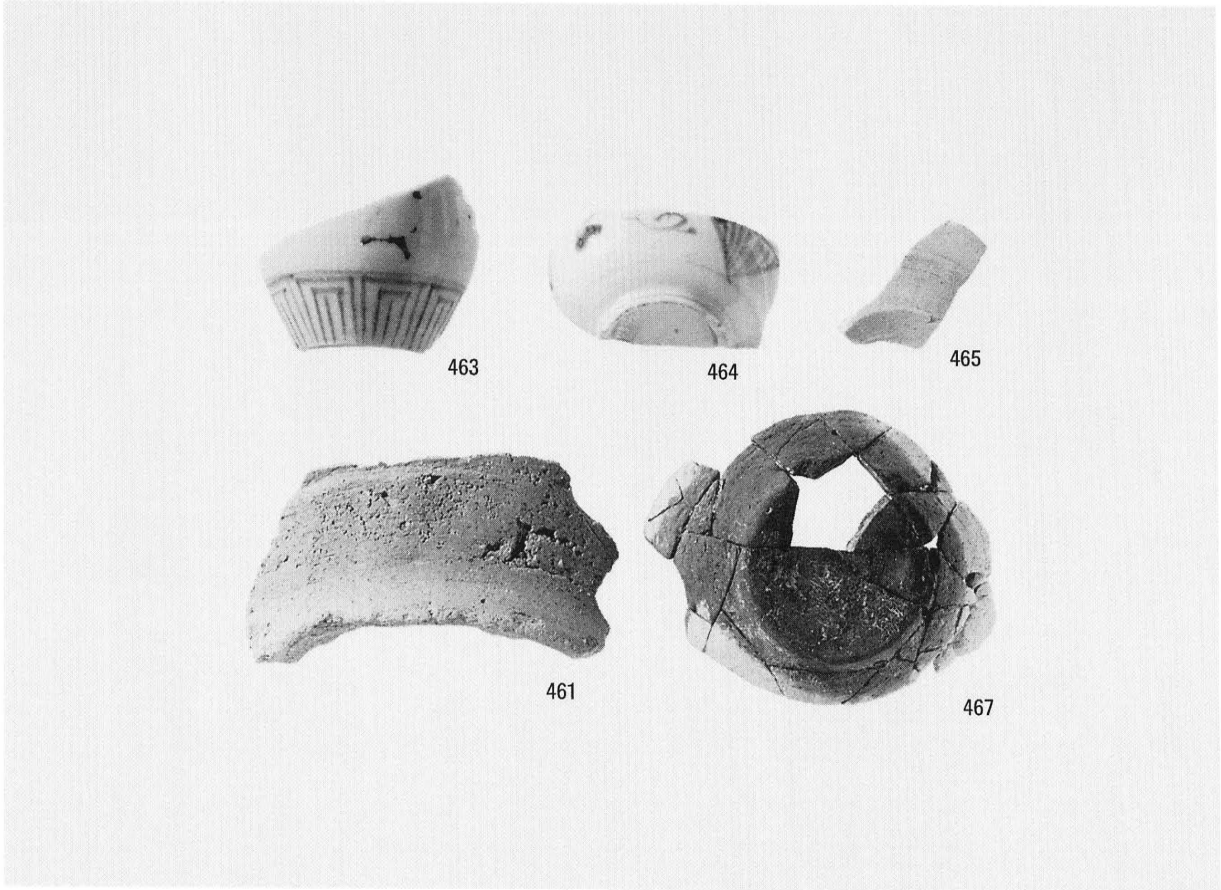


出土遺物18(土器17)

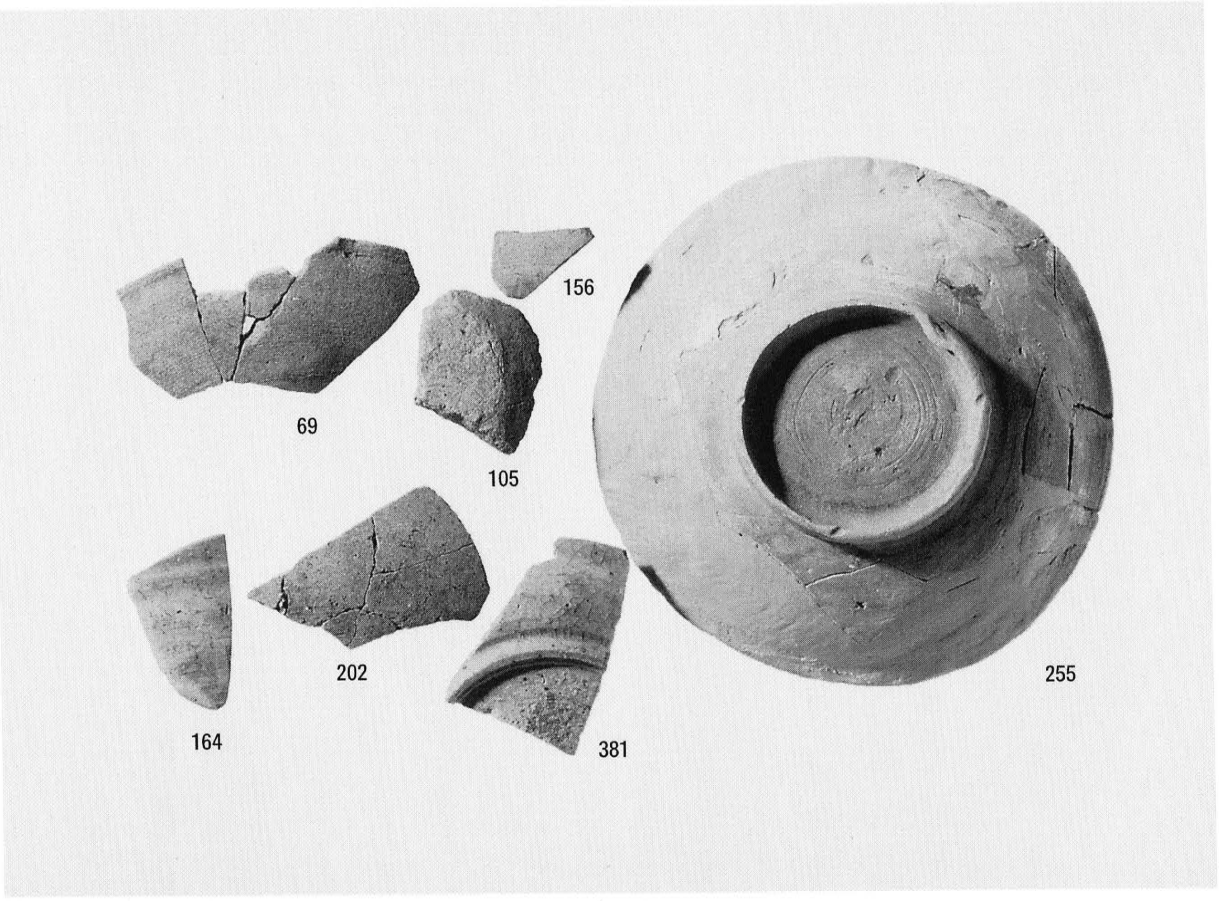
図版28　小瀬戸遺跡



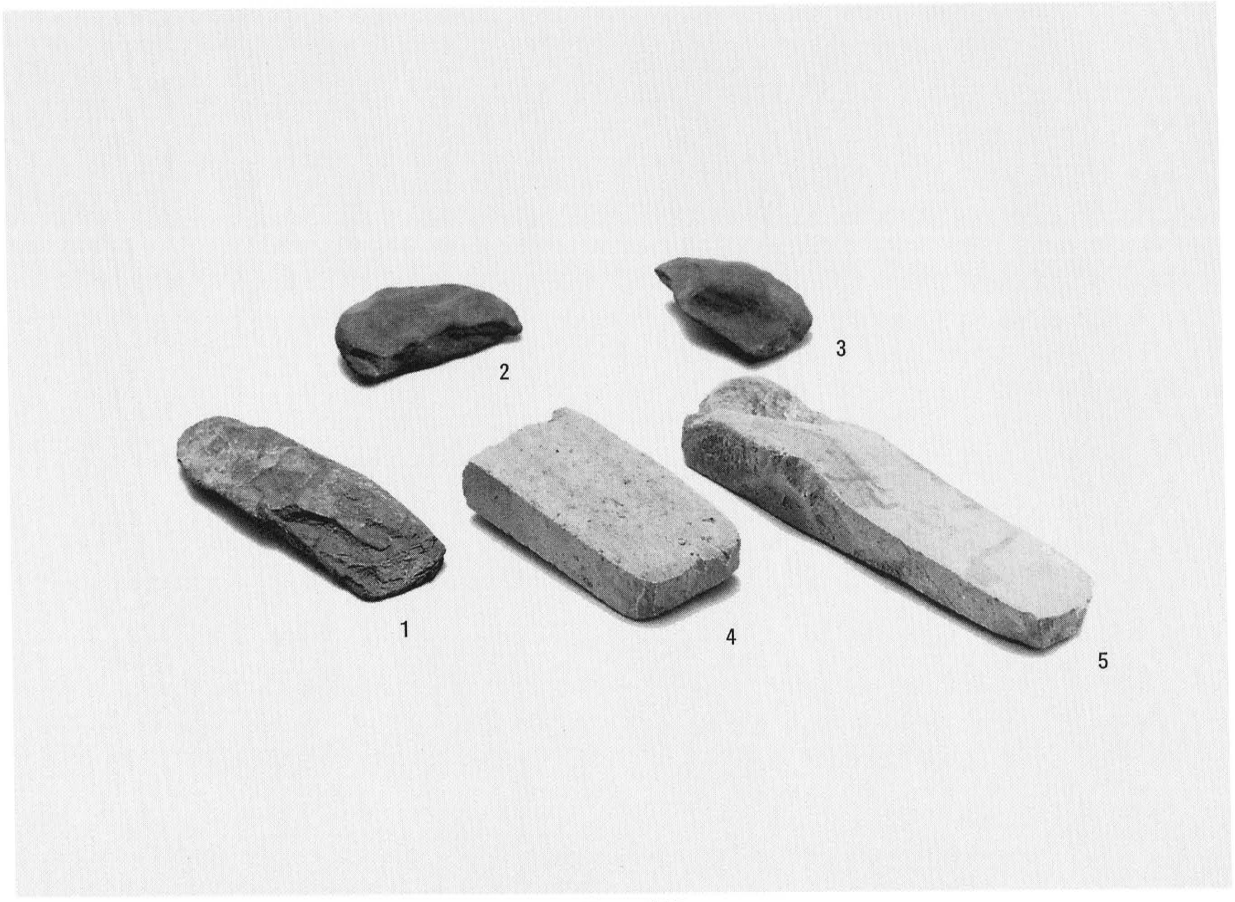
出土遺物19(土器18)



出土遺物20(土器19)

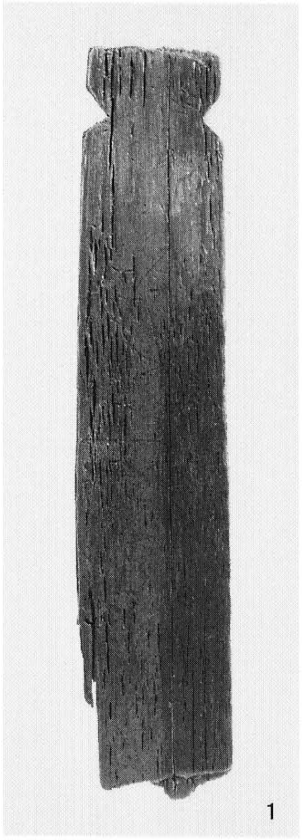


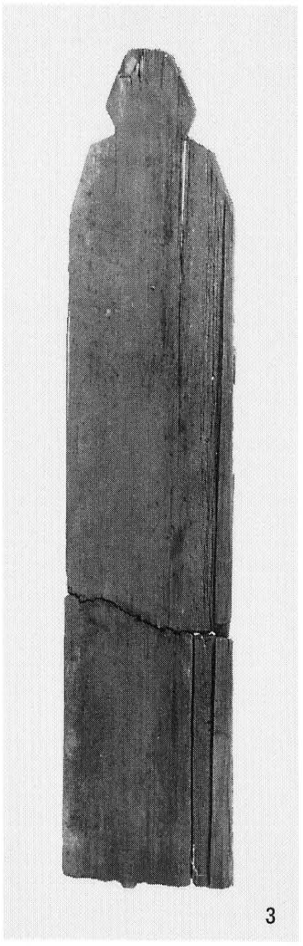
墨書土器

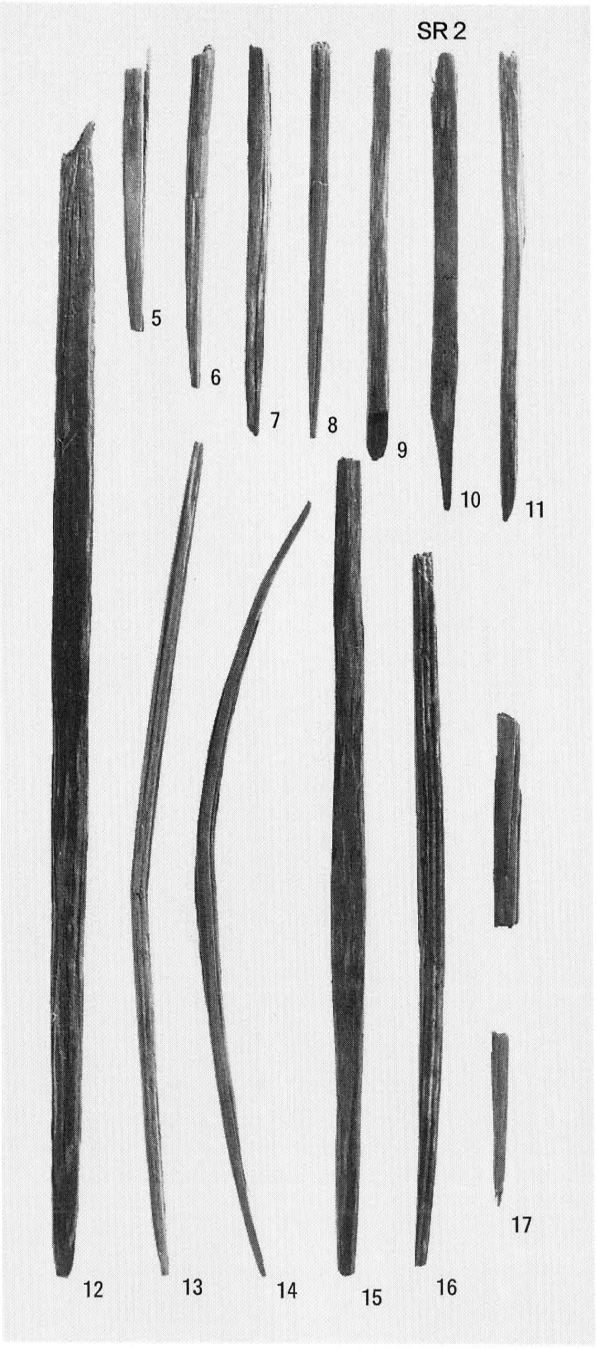


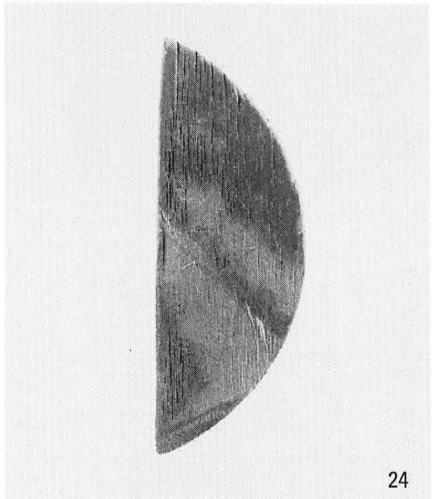
石器・石製品

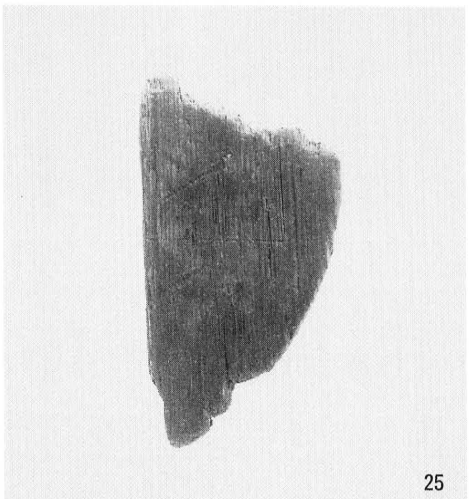
図版30　小瀬戸遺跡



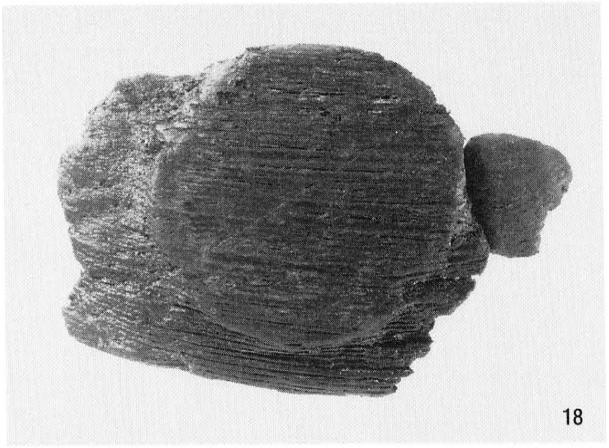


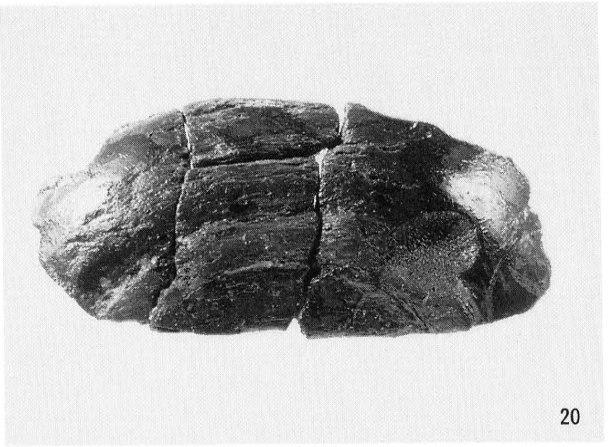






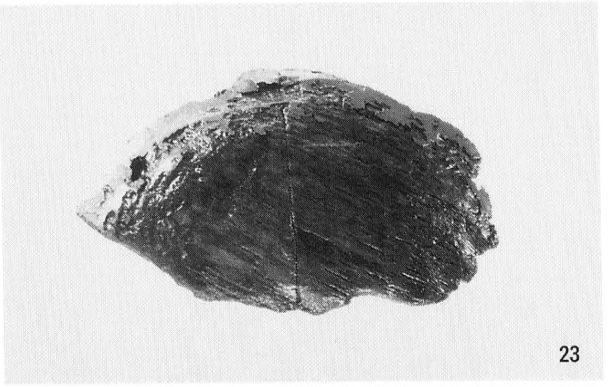
木製品（付札状木製品・栓・箸・曲物）

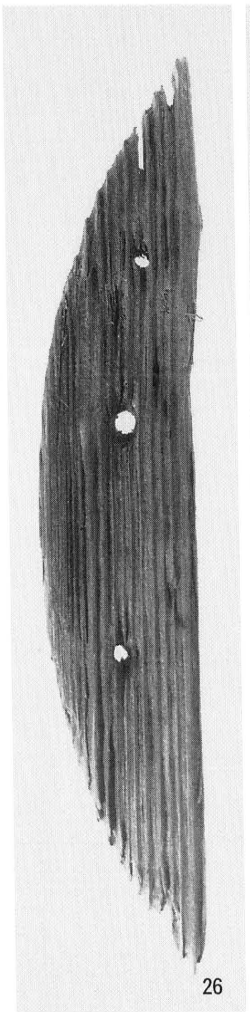

18

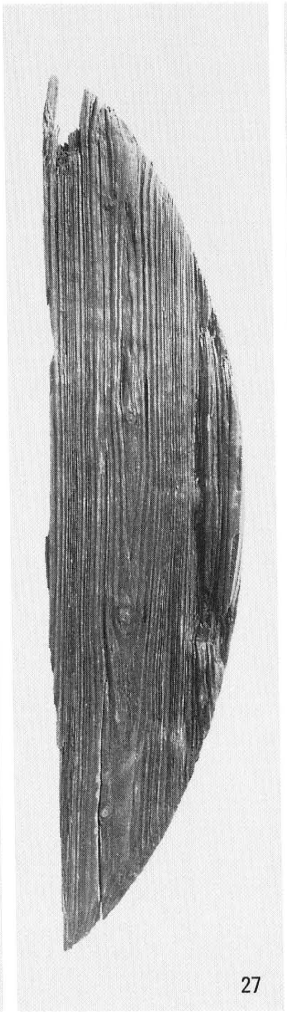

20

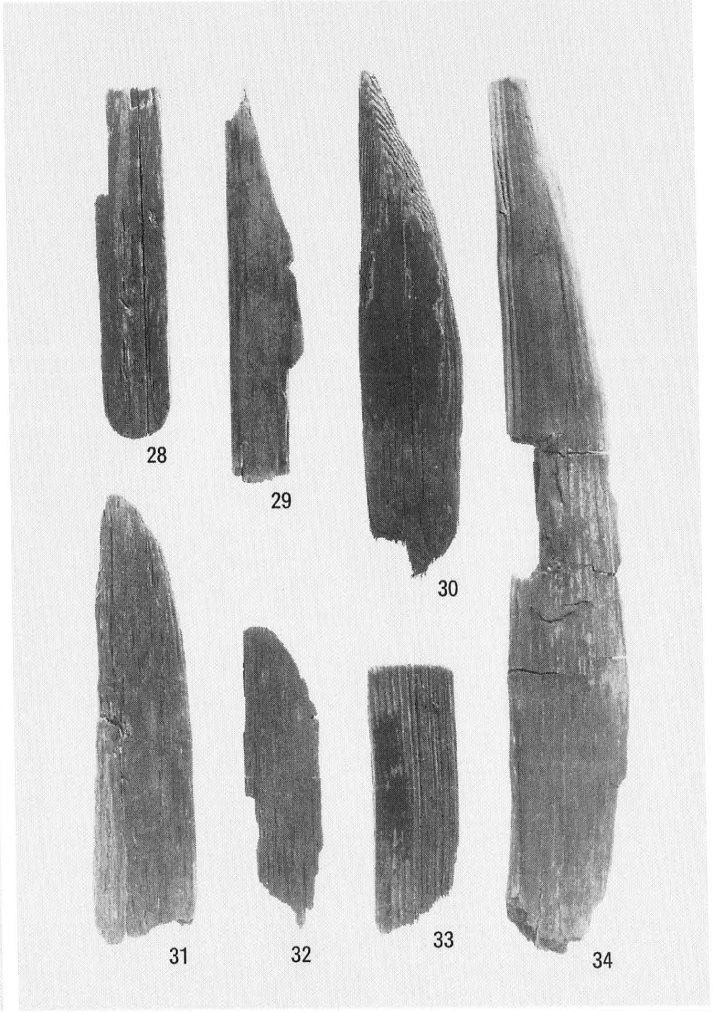
SK16

19


23

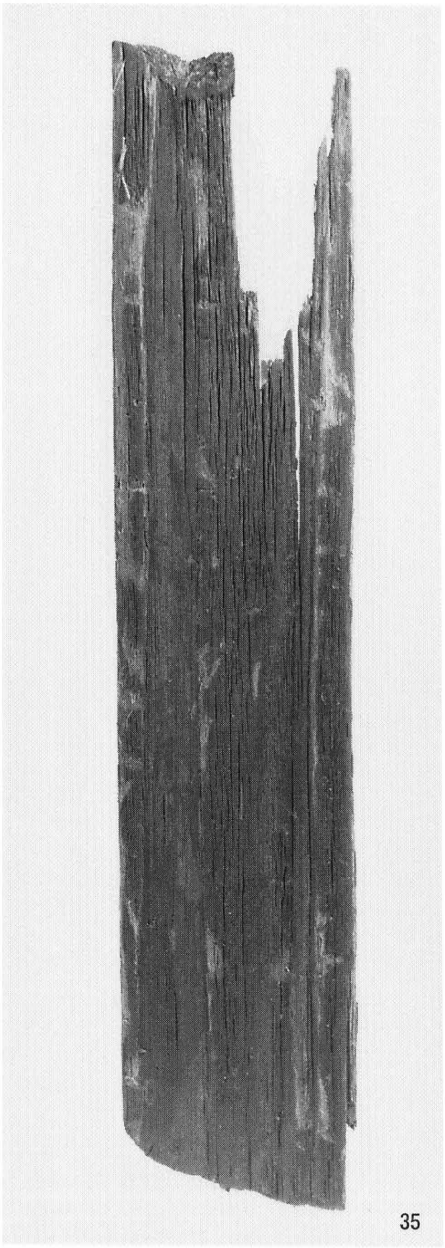

26


27

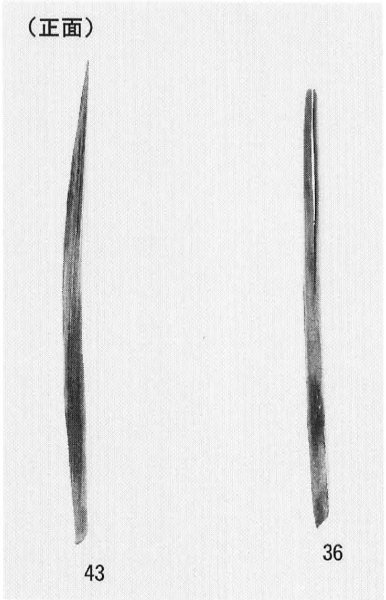

28
29
30
31
32
33
34

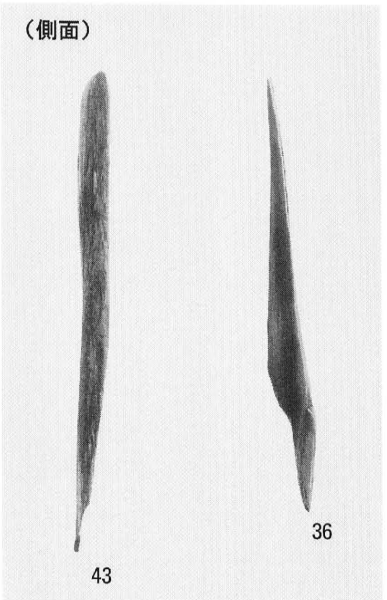
木製品（漆椀・桶・板材）

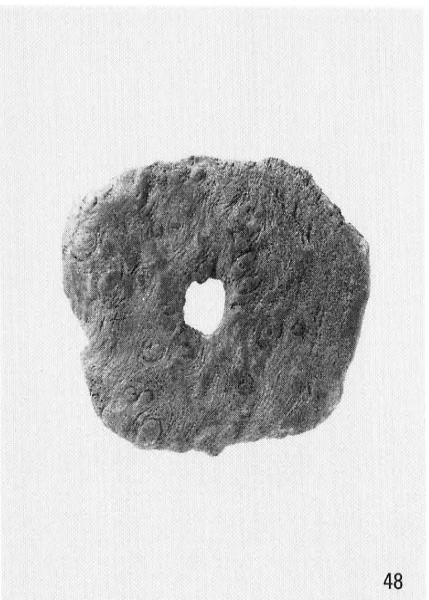
図版32　小瀬戸遺跡


35

37
38
39
42
40
41

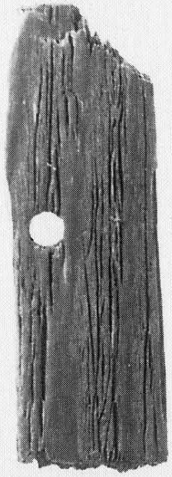

（正面）
43
36


（側面）
43
36

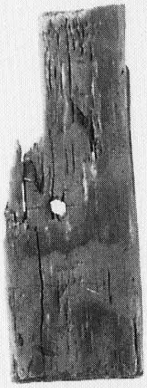

48

木製品（板材）

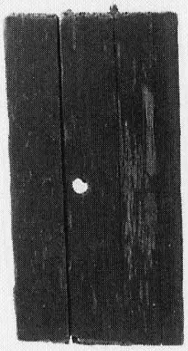
SK11



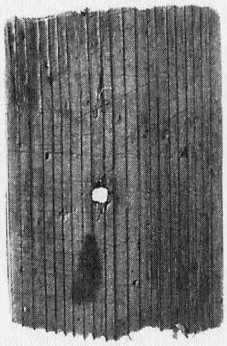
44



45

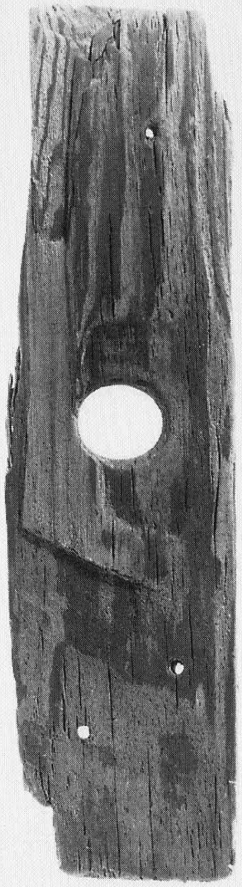


46

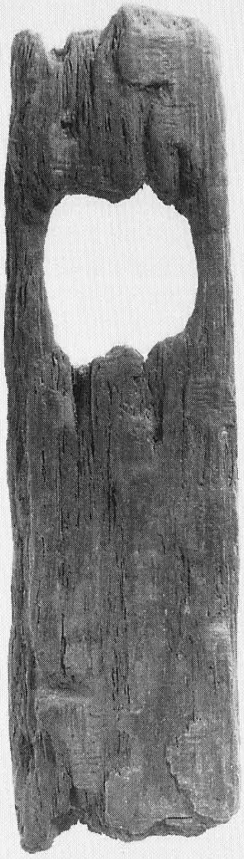


47

49



50



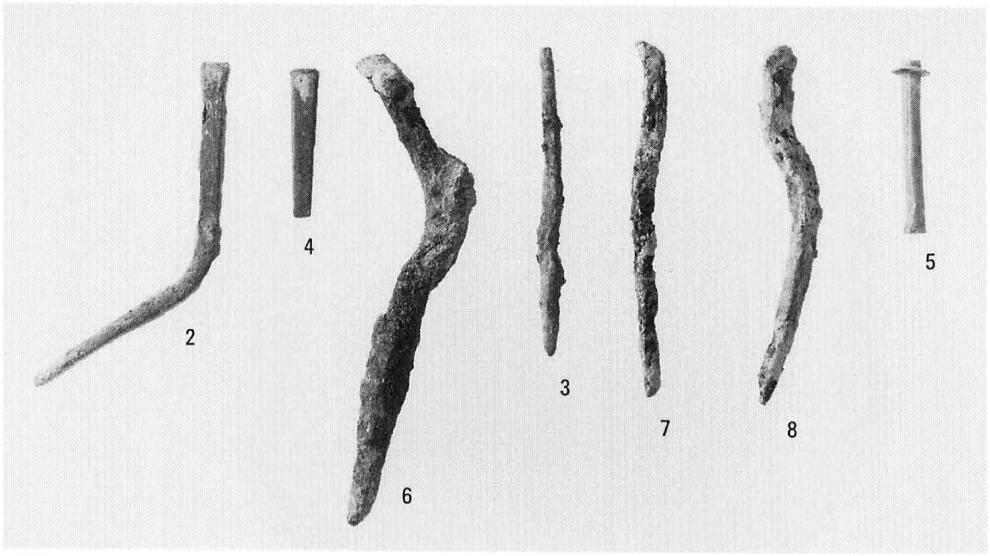
51

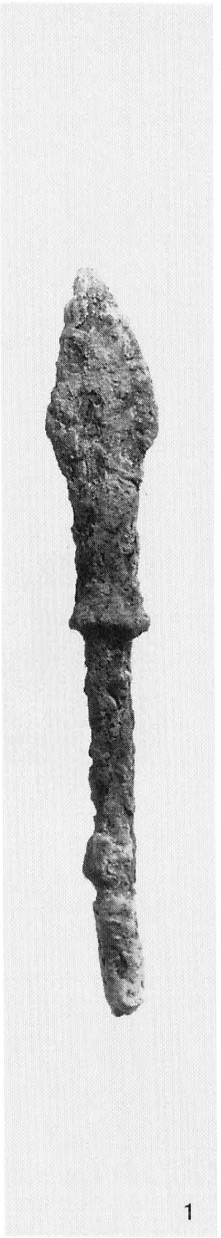
SP251

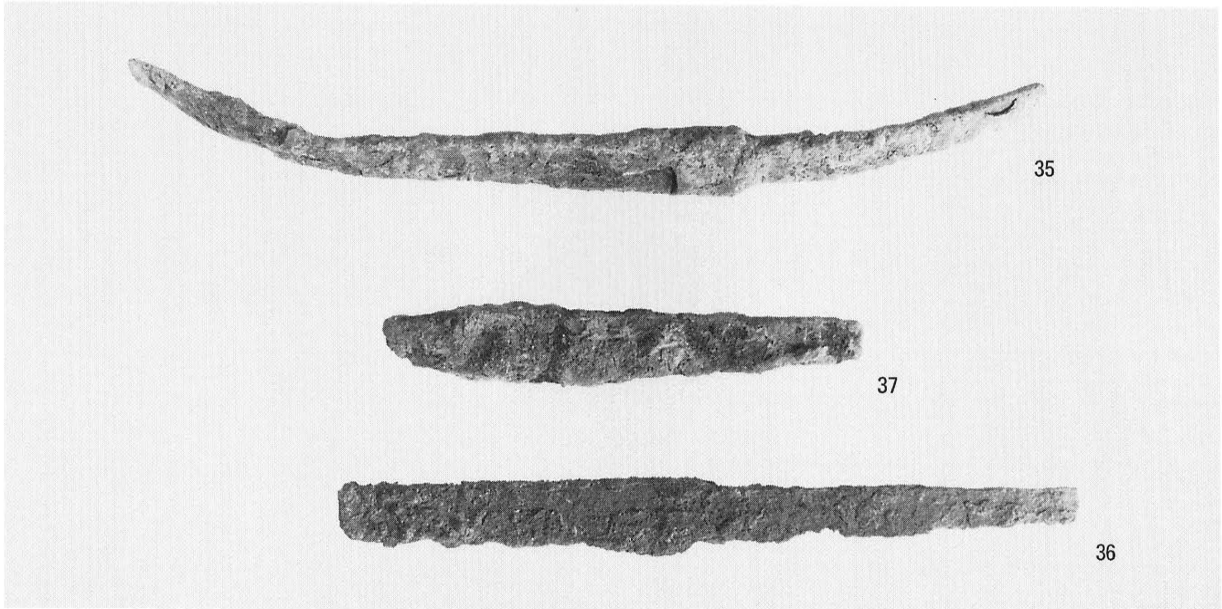
52

木製品（板材・柱根）

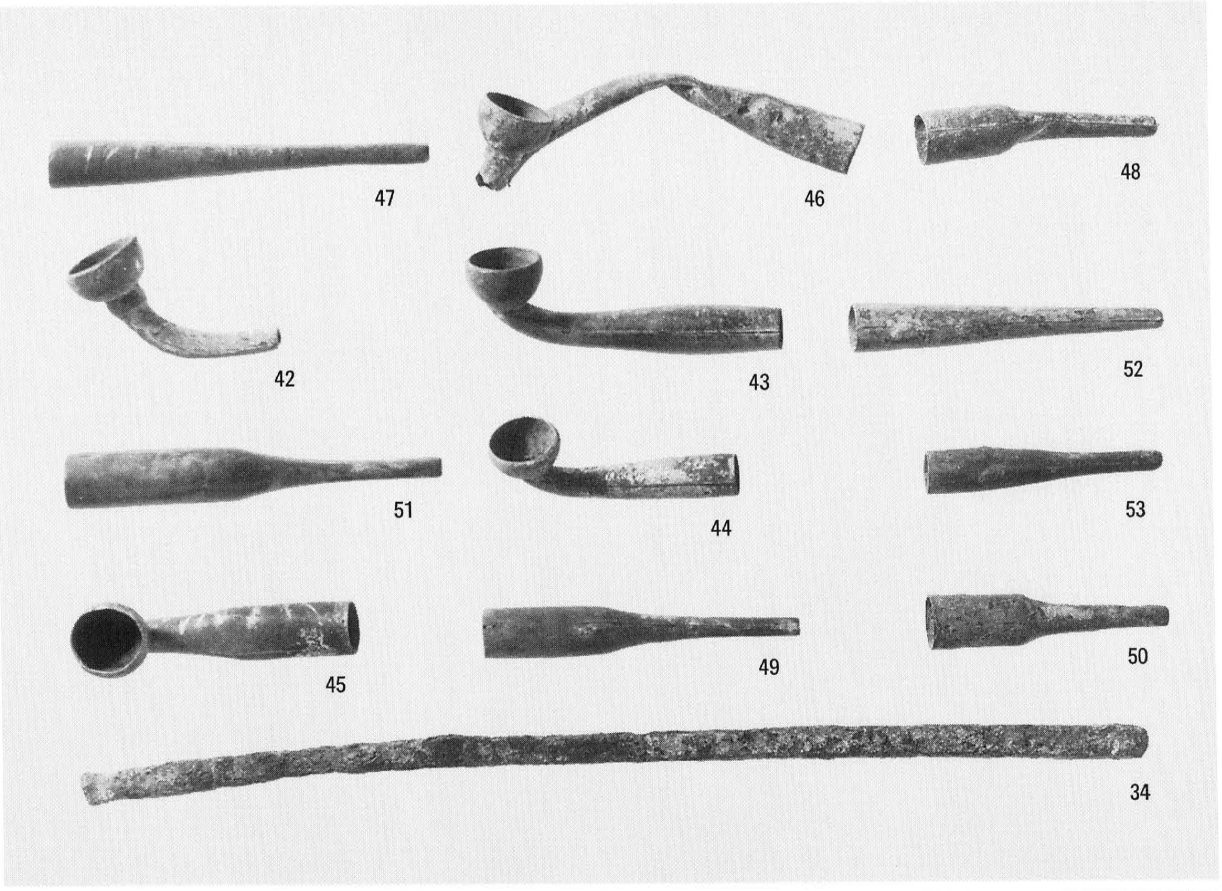
図版34　小瀬戸遺跡

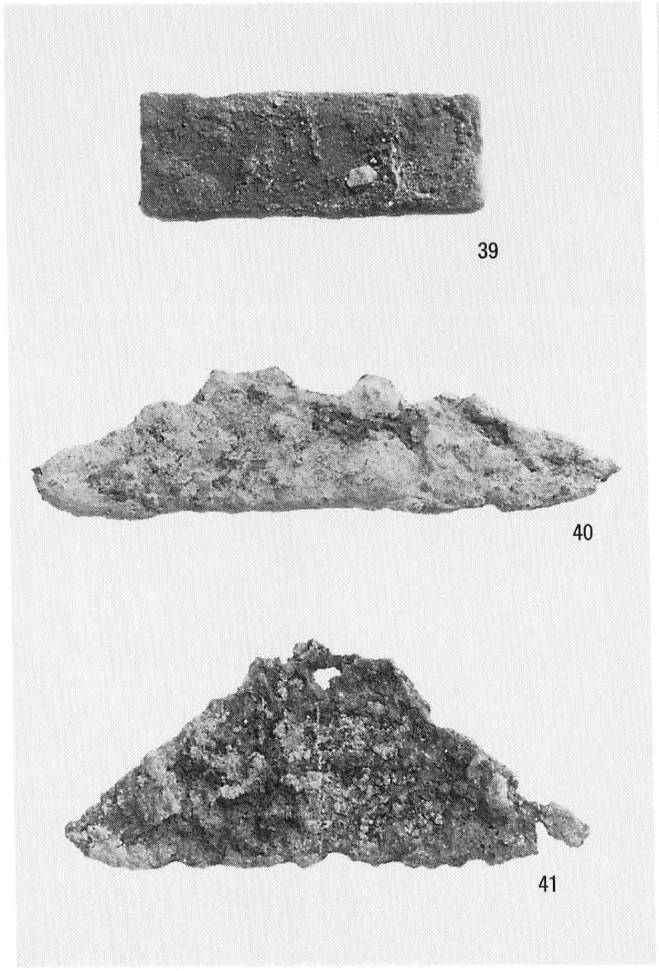


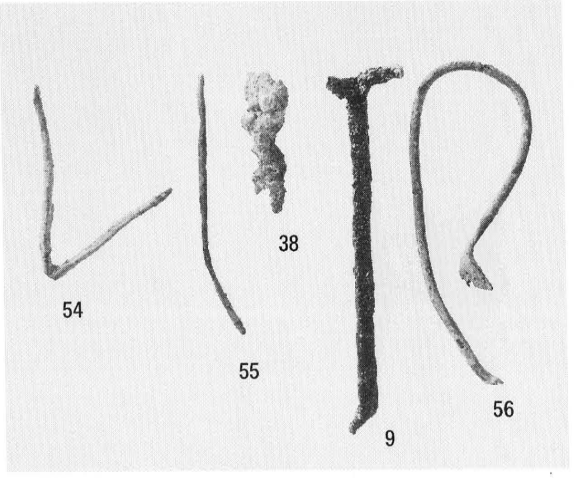


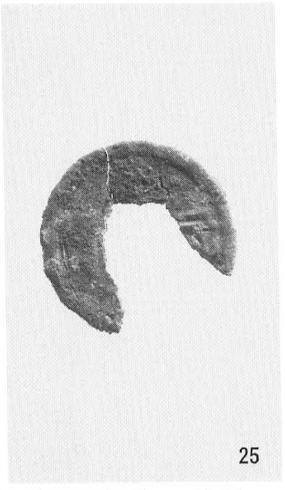


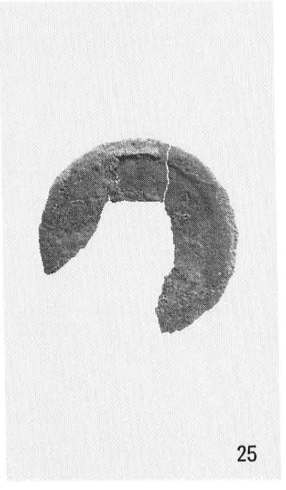
金属製品（鉄鏃・釘・鉄砲玉・刀子）





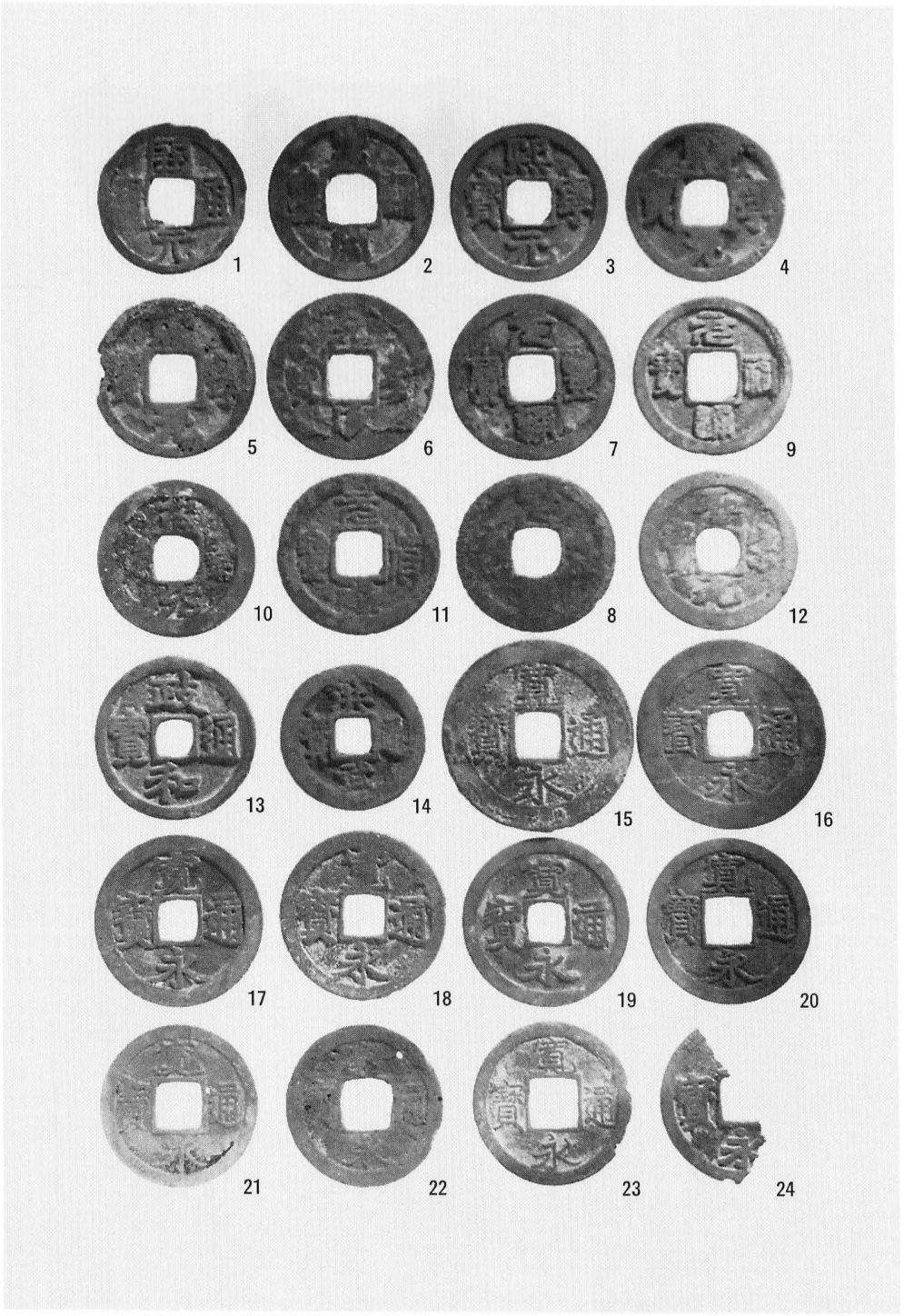




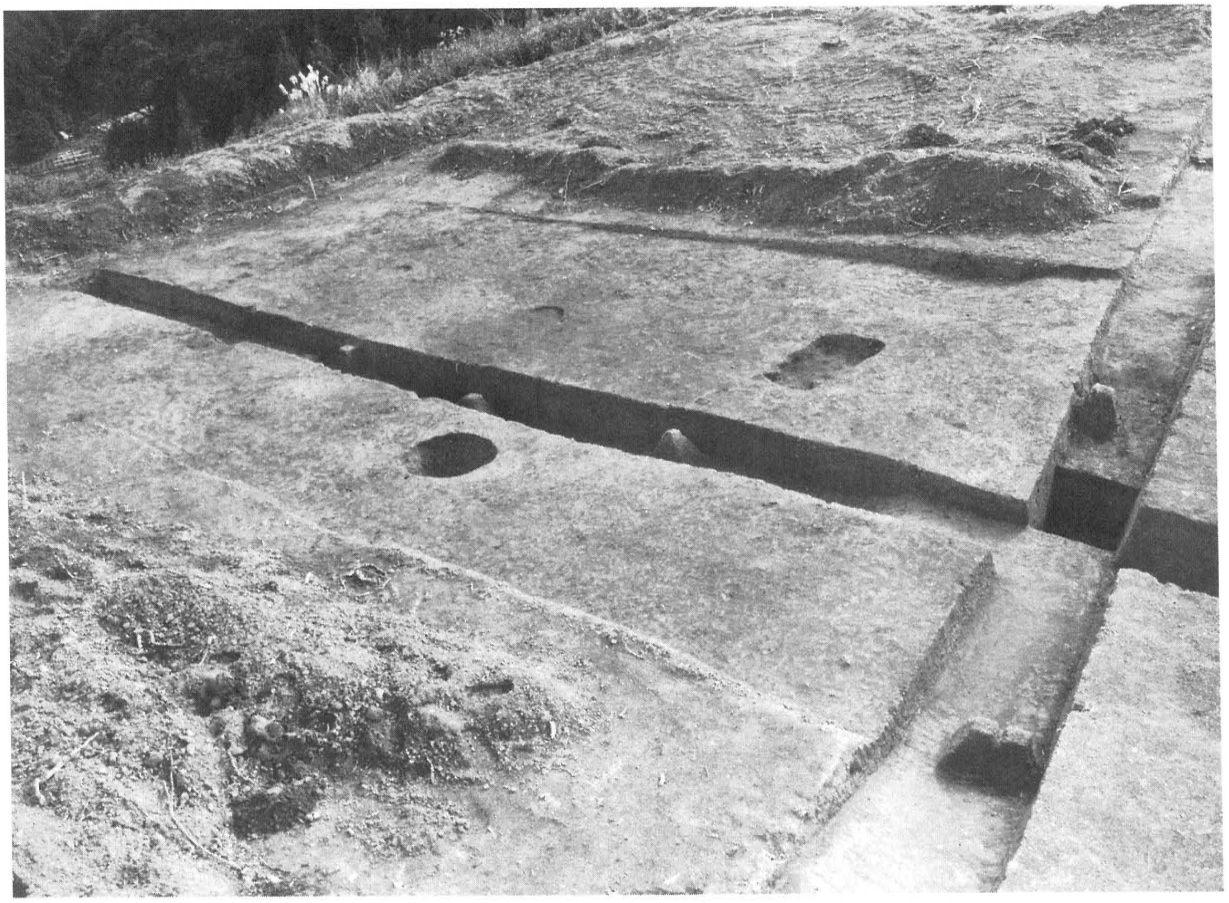


金属製品(キセル・火打金・火箸・釘・こうがい・銭貨)

図版36　小瀬戸遺跡



銭　貨



SF１・２（西より）

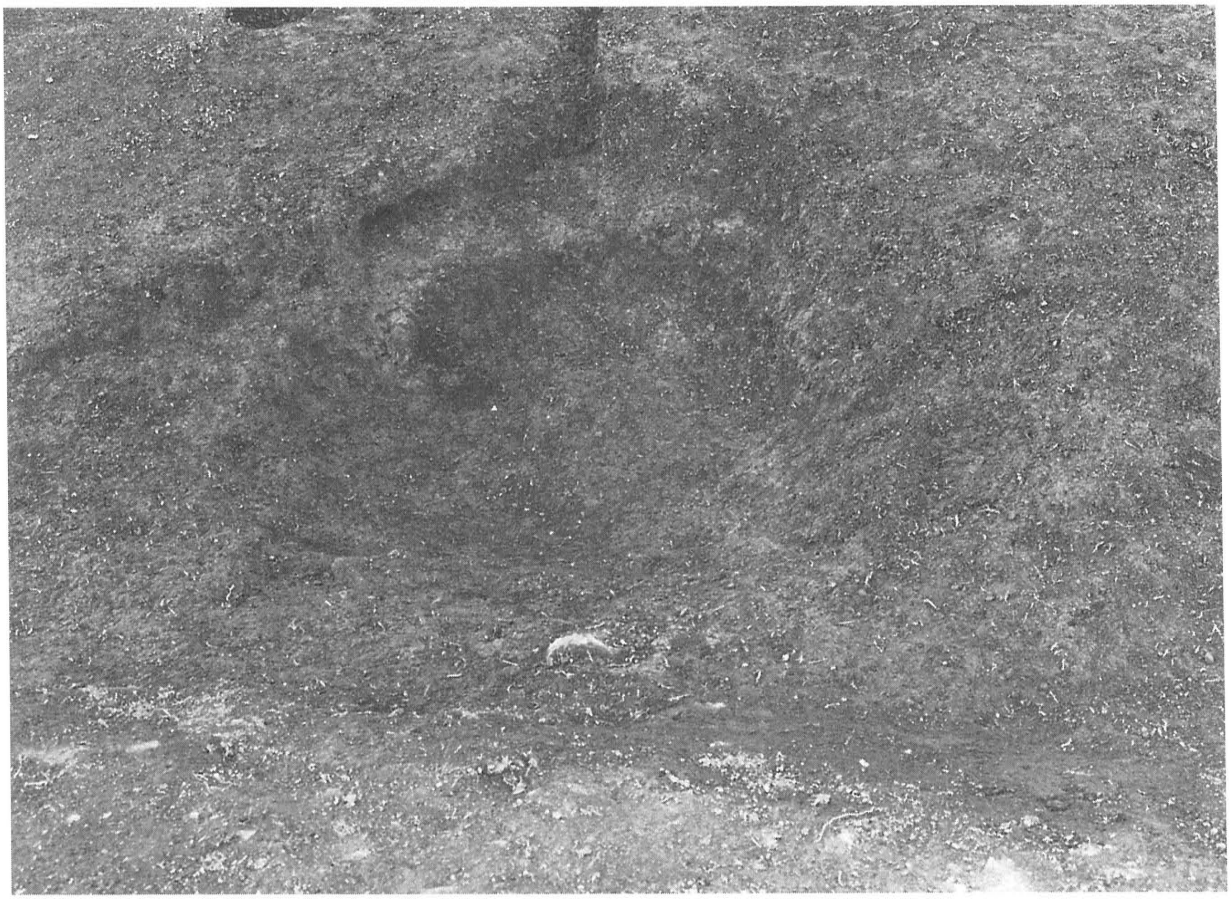
SX１（西より）

図版38　栗ヶ沢遺跡

SD１遠景（西より）

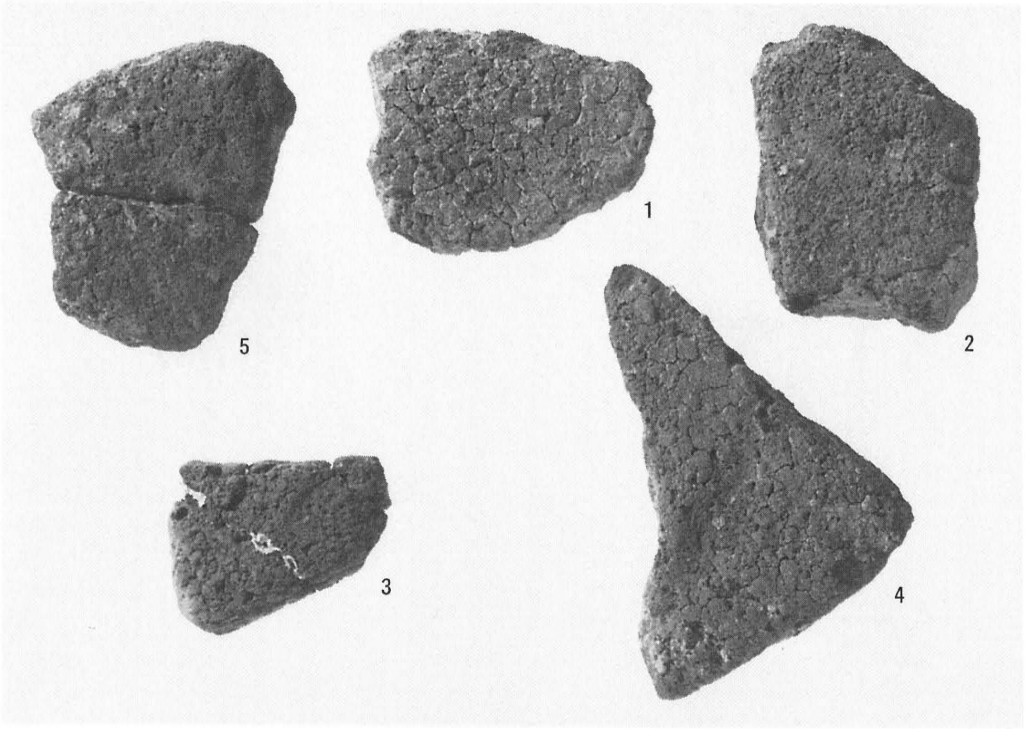
SD１近景（北より）

SD２（東より）

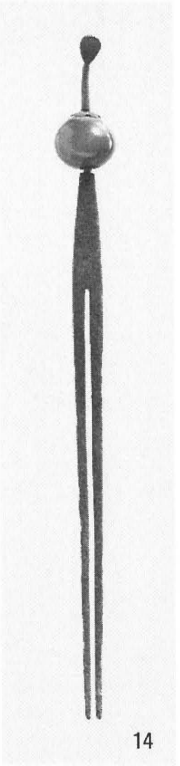


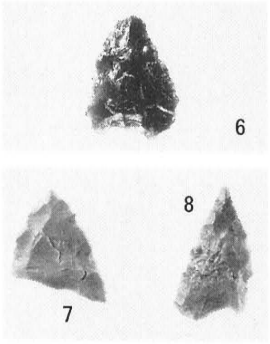
SF５（北西より）

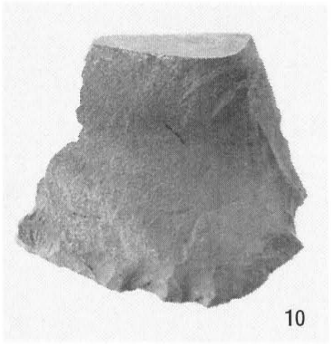
図版40　栗ヶ沢遺跡

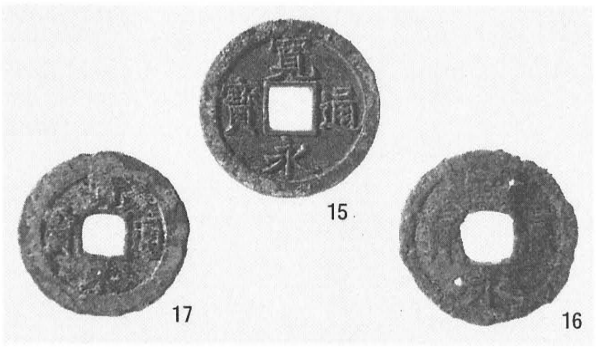


出土土器

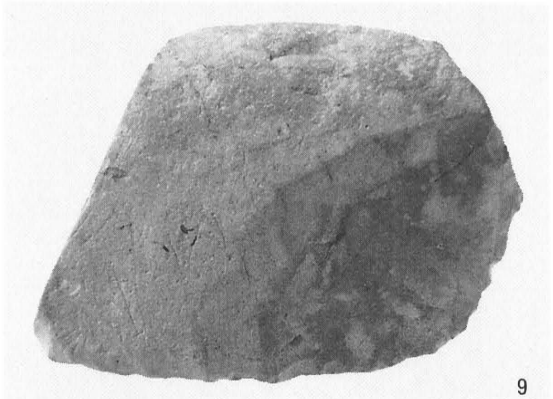


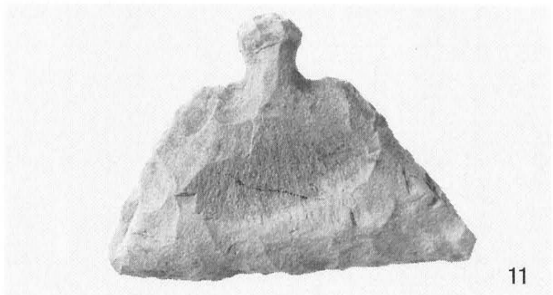


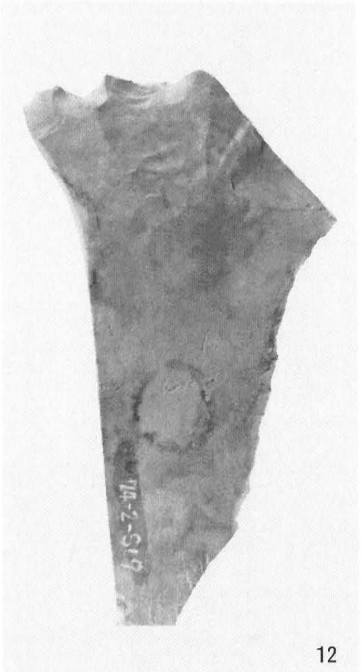


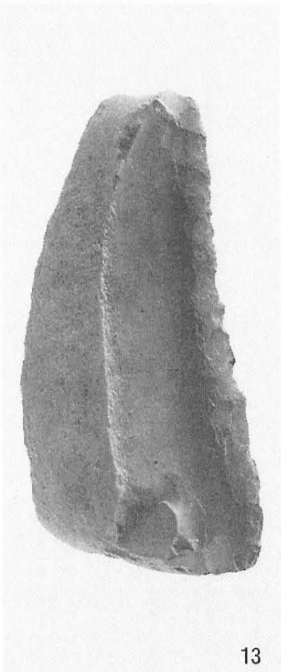


出土金属製品









出土石器

報告書抄録

ふりがな	こせといせき・くりがさわいせき
書名	小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	静岡市－1
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第176集
編著者名	及川　司／河合　修／鈴木淑子／澁谷昌彦
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20 TEL　054-262-4261(代表)　FAX　054-262-4266
発行年月日	2007年3月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町名	遺跡番号					
こせといせき 小瀬戸遺跡	しずおかしあおいく 静岡市葵区 こせと 小瀬戸	22201	A27	34° 58′ 52″	138° 17′ 33″	199805～ 199808 200202～ 200403	21,163㎡	開発等の事業に伴うもの(道路)
くりがさわいせき 栗ヶ沢遺跡	しずおかしあおいく 静岡市葵区 こせとはんま 小瀬戸・飯間	22201	A28	34° 58′ 38″	138° 17′ 40″	200104～ 200112 200211～ 200212	7,352㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小瀬戸遺跡	集落	奈良時代～鎌倉時代	掘立柱建物6 溝13	土師器　須恵器　緑釉陶器 灰釉陶器	
		戦国時代末～江戸時代	水田	陶磁器	
栗ヶ沢遺跡	集落	縄文前期	炉跡1　小穴	縄文土器　石鏃　石匙 スクレイパー	丘陵上の小規模集落

要約

小瀬戸遺跡は、奈良時代～鎌倉時代、戦国時代末～江戸時代にいたる複合遺跡である。奈良時代～鎌倉時代の集落は掘立柱建物6棟、溝13条、土手状遺構、流路等を検出した。集落は河川の影響を防ぐためとみられる土手状遺構内に営まれる。戦国時代末～江戸時代の水田は、近世段階に河川の影響によって一旦廃絶したものと考えられる。

栗ヶ沢遺跡は、縄文時代前期の小規模集落である。周辺の丘陵裾部には同様な小規模遺跡が点在している。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第176集

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市－1

平成19年３月26日発行

編集・発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054-262-4261㈹
FAX　054-262-4266

印刷所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　静岡県沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055-921-1839㈹